

朝酌川広域河川改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第11冊

西川津遺跡 VI

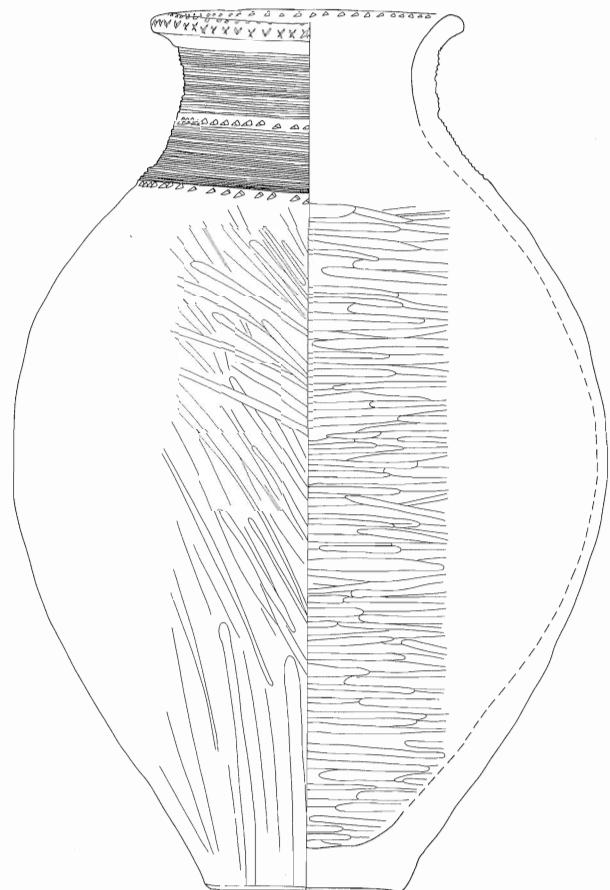


1999年3月

島根県土木部河川課
島根県教育委員会

朝酌川広域河川改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第11冊

西川津遺跡 VI



1999年3月

島根県土木部河川課
島根県教育委員会



西川津遺跡出土銅鐸（牛嶋 茂氏撮影）

序

この報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成8・9年度に実施した朝酌川広域河川改修事業区域内に所在する西川津遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

この二か年にわたる調査では、今から6000～1000年前ごろの朝酌川のうつりかわりや当時の生活を知る貴重な土器や木製の道具類が多数出土しました。

平成8年度の調査では、およそ4000～3000年前（縄文時代後期～晩期）の河口付近にあった多数の杭が見つかりました。また、2400年前（弥生時代前期）の川の跡が見つかり、完全な形の農具も見つかりました。平成9年度の調査では、6000年前（縄文時代前期）の土器や1500～1000年前（古墳時代前期～平安時代）の川の跡が見つかり、多数の土器や川岸にあった杭が見つかりました。また、1900年前（弥生時代後期）の川の中からは流水文の銅鐸が見つかりました。銅鐸が川の中から見つかることは、全国的に見ても例が少なく、なぜ川の中にあったのか、興味深いところです。

これら調査で見つかった多数の資料は、西川津遺跡の規模や変遷を考える上で貴重な資料ですが、考古学だけではなく、朝酌川の変遷や宍道湖との関係を考える上でも、重要な資料となるものです。

本書が、朝酌川流域の人々の暮らしやそれを取り巻く自然の営みに触れる契機となり、私たちの身の回りに残されている多くの文化財や貴重な自然景観への理解の手掛かりとして多少なりとも役立てば幸いです。

発掘調査及び本書の刊行にあたって、御協力頂きました地元の方々をはじめ、島根県土木部ならびに関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成11年3月

島根県教育委員会

教育長 江 口 博 晴

例　　言

1 本書は、島根県土木部河川課の委託を受けて、島根県教育委員会が1996（平成8）年度と1997（平成9）年度に実施した、朝酌川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2 発掘調査を行った遺跡と地番は次の通りである。

西川津遺跡Ⅱ区 島根県松江市西川津町1170-1ほか

Ⅲ区	〃	563-1ほか
V区	〃	595-2ほか

3 調査組織は次のとおりである。

[1996（平成8）年度]

[事務局] 勝部 昭（文化財課長）・宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）
古崎藏治（課長補佐）・森山洋光（課長補佐）・足立克己（調査第4係長）
瀧谷昌宏（企画調整係主事）

[調査員] 中川 寧（文化財課主事）・清水初美（同臨時職員）
横山純子（同臨時職員 4月1日～6月30日）・梅木政志（同臨時職員 7月1日～）

[1997（平成9）年度]

[事務局] 勝部 昭（文化財課長）・宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）
古崎藏治（課長補佐）・島地徳郎（課長補佐）・内田律雄（調査第3係長）
瀧谷昌弘（企画調整係主事）

[調査員] 中川 寧（文化財課主事）・岡本育子（同臨時職員）・影山厚司（同臨時職員）

[1998（平成10）年度]

[事務局] 勝部 昭（文化財課長）・宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）
秋山 実（課長補佐）・島地徳郎（課長補佐）・足立克己（調査第3係長）
川崎 崇（企画調整係主事）

[調査員] 中川 寧（文化財課主事）・清水初美（同臨時職員）

[調査指導者] 山本 清（島根大学名誉教授）・徳岡隆夫（同総合理工学部教授）・田中義昭（同法学部教授）林 正久（同教育学部教授）・竹広文明（同汽水域研究センター助手）

4 自然遺物及び自然科学分析は、次の方々の協力を頂き、その結果を収録した。（敬称略）

地球科学分析：中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員）

樹種同定：パリノ・サーヴェイ株式会社

放射性炭素同位体年代測定：学習院大学年代測定室（1996年度）

　　地球科学株式会社（1997年度）

石材产地分析：藁科哲男（京都大学原子炉研究所）

花粉分析：渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

5 本書に掲載した土層堆積図面のうち、Ⅱ区とⅢ区左岸については中村唯史氏が主に観察・分層し、調査担当者と記録を作成した。

また、土層堆積図面は基本的に土の種類をスクリーントーンで表現した。

- 6 挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ系座標X軸の方向を指す。従って磁北より $7^{\circ}12'$ （真北より $0^{\circ}32'$ ）東の方向を示す。
- 7 本報告書に掲載した「調査区配置図」は「松江圏都市計画図」を使用した。
- 8 調査にあたり協力及び従事して頂いた方々・機関は次の通りである。（敬称略）

【調査協力】

本間正明・石田弘至（土木部河川課） 錦織幸夫・青木元幸・布村 隆（松江土木建築事務所）
網谷克彦（敦賀女子短期大学教授） 井上智博（財団法人大阪府文化財調査研究センター）
会下和宏（島根大学埋蔵文化財調査研究センター助手）
田中清美・趙 哲済・大庭重信（財団法人大阪市文化財協会）
田畠直彦（山口大学埋蔵文化財調査センター助手） 難波洋三（京都国立博物館）
畠中清隆（福井県立若狭歴史民俗資料館） 濱田竜彦（鳥取県埋蔵文化財センター）
松田順一郎・別所秀高（財団法人東大阪市文化財協会） 家根祥多（立命館大学教授）
山内靖喜（島根大学教授） 吉田 広（愛媛大学講師） 渡辺貞幸（島根大学教授）
松江市川津公民館

【発掘調査作業】

足立明郎・足立利実・安達多津子・阿部香子・井上幸夫・井上節夫・井上三重・小川吉子
小草美代子・奥田安昭・片寄正雄・片寄禧福・金恵敦子・古藤幸子・佐々木一夫・坂本益広
角 亮太・仙田照子・曾田勇三・高木正雄・野津千俊・原 唯雄・藤井武美・平江 功
平江末忠・福田定男・福田美代江・藤原和子・細木澄子・本多正貴・松本明雄・松本澄枝
松本長子・三島真之・宮廻 恭・山蔭 猛・吉岡シミ子・和田隆徳

【遺物整理・報告書作成作業】

荒川あかね・大塚敬子・大畑真由美・影山光子・笠井文恵・金森千恵子・岸美佐子

坂本智恵美・佐竹啓子・吉田典子

- 9 本報告書の作成は以下の者が行った。

[遺物・遺構の実測・製図] 中川・清水・梅木・横山・岡本・影山厚・岩橋孝典・岩田和郷・
鹿野孝博・荒川・大畑・影山・笠井・金森・岸・坂本・佐竹・吉田

[遺物・遺構の写真撮影] 中川

なお、銅鐸の写真については牛嶋 茂氏（奈良国立文化財研究所）に撮影頂いた。

- 10 本報告書の執筆は序章～第7章、第13章を中川が行った。また、その際に中村唯史氏より多くの助言を頂いた。第9～12章の執筆はそれぞれの分析の担当者にお願いした。なお、第8章は分析結果を基に中川が編集した。編集は埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て中川が行った。
- 11 出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。
なお、本報告書ではさまざまな制約から、調査によって出土した遺物の内、代表的なものしか掲載することができなかったが、出土遺物を整理して保管している。広範な利用を期待する。

本文目次

序章 調査に至る経緯と経過	1
第1章 位置と周りの遺跡	5
第2章 II区の調査	9
第1節 調査の経過	9
第2節 土層の堆積	18
第3節 杭 列	21
第4節 出土遺物	21
⟨1⟩ 繩紋土器	21
⟨2⟩ 木製品	
(a) 杭	25
(b) 舟状木製品	37
第5節 小 結	40
第3章 III区左岸の調査	45
第1節 調査の経過	45
第2節 土層の堆積	46
第3節 遺物包含層と出土遺物	51
⟨1⟩ 遺物包含層と土器	51
⟨2⟩ 石 器	78
⟨3⟩ 木製品	78
⟨4⟩ 土製品	88
第4節 小 結	89
第4章 III区右岸の調査	99
第1節 調査の経過	99
第2節 土層の堆積	99
第3節 検出された遺構	111
第4節 遺物包含層と出土遺物	113
⟨1⟩ 遺物包含層と土器	113
⟨2⟩ 石 器	167
⟨3⟩ 木製品	172
⟨4⟩ 土製品	183
第5節 小 結	184

第5章 V区ーAの調査	197
第1節 調査の経過	197
第2節 土層の堆積	197
第3節 出土遺物	199
〈1〉 繩紋土器	199
〈2〉 石器	207
第4節 小結	209
第6章 V区ーBの調査	211
第1節 調査の経過	211
第2節 土層の堆積	211
第3節 検出された遺構	212
〈1〉 石組遺構	212
〈2〉 水辺の石	217
第4節 遺物包含層と出土遺物	226
〈1〉 遺物包含層と土器	226
〈2〉 石器	259
〈3〉 木製品	265
〈4〉 銅鐸	275
〈5〉 土製品	278
第5節 小結	278
第7章 西川津遺跡における人間の諸活動	287
第1節 西川津遺跡の杭について	289
第2節 西川津遺跡における畿内系土器について	291
第3節 西川津遺跡出土の円筒埴輪について	293
付編1 西川津遺跡V区範囲確認調査	300
付編2 島根県における弥生時代前期の遺跡	303
第8章 放射性炭素同位体による年代測定結果について	309
第9章 西川津遺跡の地質と地史（中村唯史）	311
第10章 西川津遺跡96、97年度調査における花粉分析（渡辺正巳）	321
第11章 西川津遺跡Ⅱ区・Ⅲ区・V区から出土した木材の樹種 (パリノ・サーヴェイ株式会社)	329

第12章 西川津遺跡出土石材の産地同定（藁科哲男） 343

第13章 さいごに 361

挿図目次

第1図 西川津遺跡位置図	2	第35図 Ⅲ区左岸西壁土層堆積図	47～48
第2図 西川津遺跡調査区配置図	3	第36図 Ⅲ区左岸西壁東西方向、東壁土層堆積図	49～50
第3図 西川津遺跡と周辺の遺跡	6	第37図 Ⅲ区左岸青灰色粗砂層—青灰色砂礫層出土土器実測図	51
第4図 大正時代の朝酌川	7	第38図 Ⅲ区左岸青灰色粗砂層—青灰色砂礫層と青灰色砂礫層1の間の層出土土器実測図	51
第5図 西川津遺跡Ⅱ区調査区位置図	9	第39図 Ⅲ区左岸青灰色砂層1、青灰色砂礫層測量図	52
第6図 Ⅱ区東西方向土層堆積図(1)	10	第40図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層1出土土器実測図	53
第7図 Ⅱ区東壁土層堆積図(1)	11～12	第41図 Ⅲ区左岸暗褐色泥層出土土器実測図	55
第8図 Ⅱ区東壁土層堆積図(2)	13～14	第42図 Ⅲ区左岸青灰色砂層2、青灰色砂礫層2、同3測量図	56
第9図 Ⅱ区東西方向土層堆積図(2)	15～16	第43図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層2出土土器実測図	57
第10図 Ⅱ区青灰色砂層（粗砂）分布図	17	第44図 Ⅲ区左岸青灰色砂層2及び青灰色砂礫層3出土土器実測図	58
第11図 Ⅱ区青灰色泥層測量図	18	第45図 Ⅲ区左岸青灰色砂層3測量図	59
第12図 Ⅱ区縄紋時代の杭実測図（立面図）	19～20	第46図 Ⅲ区左岸青灰色砂層3遺物出土状況図	60
第13図 Ⅱ区出土土器実測図	22	第47図 Ⅲ区左岸青灰色砂層3出土土器実測図	61
第14図 Ⅱ区杭分類図	22	第48図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層4測量図	62
第15図 Ⅱ区出土杭実測図(1)	23	第49図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層4出土土器実測図(1)	63
第16図 Ⅱ区出土杭実測図(2)	24	第50図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層4出土土器実測図(2)	64
第17図 Ⅱ区出土杭実測図(3)	25	第51図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層4出土土器実測図(3)	65
第18図 Ⅱ区出土杭実測図(4)	26	第52図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層5測量図	67
第19図 Ⅱ区出土杭実測図(5)	27	第53図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層5出土土器実測図(1)	68
第20図 Ⅱ区出土杭実測図(6)	28	第54図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層5出土土器実測図(2)	69
第21図 Ⅱ区出土杭実測図(7)	29	第55図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層5出土土器実測図(3)	70
第22図 Ⅱ区出土杭実測図(8)	30	第56図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層5出土土器実測図(4)	71
第23図 Ⅱ区出土杭実測図(9)	31		
第24図 Ⅱ区出土杭実測図(10)	32		
第25図 Ⅱ区出土杭実測図(11)	33		
第26図 Ⅱ区出土杭実測図(12)	34		
第27図 Ⅱ区舟状木製品及び加工木出土状況図	35		
第28図 Ⅱ区舟状木製品及び加工木実測図	36		
第29図 Ⅱ区縄紋時代の杭実測図（立面図）	37		
第30図 Ⅱ区杭種別平面図(1)	38		
第31図 Ⅱ区杭種別平面図(2)	39		
第32図 Ⅱ区杭種別平面図(3)	40		
第33図 西川津遺跡Ⅲ区左岸調査区位置図	45		
第34図 Ⅲ区左岸表土直下及び青灰色砂層1出土土器実測図	46		

第57図	Ⅲ区左岸青灰色砂礫層5出土土器実測図(5)	72
第58図	Ⅲ区左岸青灰色砂礫層6遺物分布図	73
第59図	Ⅲ区左岸青灰色砂礫層6出土土器実測図(1)	74
第60図	Ⅲ区左岸青灰色砂礫層6出土土器実測図(2)	75
第61図	Ⅲ区左岸青灰色砂礫層6出土土器実測図(3)	76
第62図	Ⅲ区左岸出土石器実測図(1)	77
第63図	Ⅲ区左岸出土石器実測図(2)	78
第64図	Ⅲ区左岸出土木製品実測図(1)	80
第65図	Ⅲ区左岸出土木製品実測図(2)	81
第66図	Ⅲ区左岸出土木製品実測図(3)	82
第67図	Ⅲ区左岸出土木製品実測図(4)	83
第68図	Ⅲ区左岸杭の位置図	84
第69図	Ⅲ区左岸杭検出状況図(1)	85
第70図	Ⅲ区左岸杭検出状況図(2)	86
第71図	Ⅲ区左岸出土杭実測図(1)	87
第72図	Ⅲ区左岸出土杭実測図(2)	88
第73図	Ⅲ区左岸出土土製品実測図	89
第74図	西川津遺跡Ⅲ区右岸調査区位置図	100
第75図	Ⅲ区右岸東西方向、東壁土層堆積図	101~102
第76図	Ⅲ区右岸東壁土層堆積図(1)	103~104
第77図	Ⅲ区右岸東壁土層堆積図(2)	105~106
第78図	Ⅲ区右岸西壁土層堆積図(1)	107~108
第79図	Ⅲ区右岸西壁土層堆積図(2)	109~110
第80図	Ⅲ区右岸杭群検出状況図	111
第81図	Ⅲ区右岸杭群変遷図	112
第82図	Ⅲ区右岸杭実測図(立面図)	113
第83図	Ⅲ区右岸杭の位置図	114
第84図	Ⅲ区右岸南端の青灰色砂礫層測量図	115
第85図	Ⅲ区右岸杭1~5実測図(立面図)	116
第86図	Ⅲ区右岸調査区南端の青灰色砂礫層出土 土器実測図(1)	117
第87図	Ⅲ区右岸調査区南端の青灰色砂礫層出土 土器実測図(2)	118
第88図	Ⅲ区右岸調査区南端の青灰色砂礫層出土 土器実測図(3)	119
第89図	Ⅲ区右岸青灰色砂層1測量図	119
第90図	Ⅲ区右岸青灰色砂層1出土土器実測図	119
第91図	Ⅲ区右岸青灰色砂層2測量図	120
第92図	Ⅲ区右岸青灰色砂層2出土土器実測図	121
第93図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層1、2、2-2、 2-3測量図	122
第94図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層1出土土器実測図(1)	124
第95図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層1出土土器実測図(2)	126
第96図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層1出土土器実測図(3)	127
第97図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2出土土器実測図	128
第98図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-2出土土器 実測図	129
第99図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-3出土土器 実測図	131
第100図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4測量図	132
第101図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器 実測図(1)	134
第102図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器 実測図(2)	135
第103図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器 実測図(3)	136
第104図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器 実測図(4)	137
第105図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器 実測図(5)	138
第106図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器 実測図(6)	140
第107図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器 実測図(7)	141
第108図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-5測量図	142
第109図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-5出土土器 実測図(1)	144
第110図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-5出土土器 実測図(2)	145
第111図	Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-5出土土器 実測図(3)	146
第112図	Ⅲ区右岸青灰色砂層3より上位の砂礫層 出土土器実測図	148
第113図	Ⅲ区右岸青灰色砂層3測量図	149
第114図	Ⅲ区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(1)	150
第115図	Ⅲ区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(2)	151

第116図	III区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(3)	152	第148図	V区-A南壁土層堆積図	199
第117図	III区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(4)	153	第149図	V区-A東西方向土層堆積図	199
第118図	III区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(5)	154	第150図	V区-A中央土層堆積図	200
第119図	III区右岸青灰色砂層3-青灰色砂礫層3 の間出土土器実測図	155	第151図	V区-A北壁土層堆積図	201~202
第120図	III区右岸青灰色砂礫層3測量図	156	第152図	V区-A西壁土層堆積図	203~204
第121図	III区右岸青灰色砂礫層3出土土器実測図(1)	157	第153図	V区-A青灰色砂礫層1、同2、青灰色 泥層測量図	205~206
第122図	III区右岸青灰色砂礫層3出土土器実測図(2)	158	第154図	V区-A出土土器実測図	207
第123図	III区右岸青灰色砂礫層3出土土器実測図(3)	160	第155図	V区-A出土石器実測図(1)	208
第124図	III区右岸青灰色砂礫層3出土土器実測図(4)	161	第156図	V区-A出土石器実測図(2)	209
第125図	III区右岸青灰色砂礫層3出土土器実測図(5)	162	第157図	西川津遺跡V区-B調査区位置図	211
第126図	III区右岸青灰色砂礫層4出土土器実測図	163	第158図	V区-B北壁、西壁土層堆積図	213~214
第127図	III区右岸青灰色砂礫層5、青灰色砂礫層 6測量図	164	第159図	V区-B南壁土層堆積図	215~216
第128図	III区右岸青灰色泥層測量図	165	第160図	V区-B東壁土層堆積図	217
第129図	III区右岸出土石器実測図(1)	166	第161図	V区-B石組遺構及び水辺の石検出状況図	
第130図	III区右岸出土石器実測図(2)	167			218
第131図	III区右岸出土石器実測図(3)	168	第162図	V区-B石組遺構土層堆積図	218
第132図	III区右岸出土石器実測図(4)	169	第163図	V区-B石組遺構平面図、立面図(1)	219
第133図	III区右岸出土石器実測図(5)	170	第164図	V区-B石組遺構平面図(2)・(3)	220
第134図	III区右岸出土木製品実測図(1)	171	第165図	V区-B石組遺構平面図(4)、立面図(2) 横断面図	221
第135図	III区右岸出土木製品実測図(2)	172	第166図	V区-B水辺の石検出状況図(1)	222
第136図	III区右岸出土木製品実測図(3)	173	第167図	V区-B水辺の石検出状況図(2)	223
第137図	III区右岸出土木製品実測図(4)	174	第168図	V区-B水辺の石検出状況図(3)	224
第138図	III区右岸出土杭実測図(1)	175	第169図	V区-B水辺の石検出状況図(4)	225
第139図	III区右岸出土杭実測図(2)	176	第170図	V区-B水辺の石と層位の対応図	225
第140図	III区右岸出土杭実測図(3)	177	第171図	V区-B青灰色砂層1出土土器実測図	226
第141図	III区右岸出土杭実測図(4)	178	第172図	V区-B青灰色砂層2遺物分布図	227
第142図	III区右岸出土杭実測図(5)	179	第173図	V区-B青灰色砂層2出土土器実測図	228
第143図	III区右岸出土杭実測図(6)	180	第174図	V区-B青灰色砂礫層1測量図	230
第144図	III区右岸出土杭実測図(7)	181	第175図	V区-B青灰色砂礫層1出土土器実測図(1)	
第145図	III区右岸出土杭実測図(8)	182			231
第146図	III区右岸出土土製品実測図	183	第176図	V区-B青灰色砂礫層1出土土器実測図(2)	
第147図	西川津遺跡V区-A調査区位置図				232
		198	第177図	V区-B青灰色砂礫層1出土土器実測図(3)	
					233
			第178図	V区-B青灰色砂礫層2測量図	234
			第179図	V区-B青灰色砂礫層2出土土器実測図	
					235
			第180図	V区-B青灰色砂礫層3測量図	236
			第181図	V区-B青灰色砂礫層3出土土器実測図(1)	
					237
			第182図	V区-B青灰色砂礫層3出土土器実測図(2)	
					238

第183図	V区-B青灰色砂礫層4出土土器実測図	239
第184図	V区-B青灰色砂礫層5上位遺物分布図	240
第185図	V区-B青灰色砂礫層5上位出土土器 実測図(1)	242
第186図	V区-B青灰色砂礫層5上位出土土器 実測図(2)	243
第187図	V区-B青灰色砂礫層5上位出土土器 実測図(3)	244
第188図	V区-B青灰色砂礫層5遺物分布図	246
第189図	V区-B青灰色砂礫層5出土土器実測図(1)	247
第190図	V区-B青灰色砂礫層5出土土器実測図(2)	248
第191図	V区-B青灰色砂礫層5出土土器実測図(3)	249
第192図	V区-B青灰色砂礫層6測量図	250
第193図	V区-B青灰色砂礫層7測量図	251
第194図	V区-B青灰色砂礫層6出土土器実測図	253
第195図	V区-B青灰色砂礫層7出土土器実測図	253
第196図	V区-B青灰色砂礫層8測量図	254
第197図	V区-B青灰色砂礫層8出土土器実測図	255
第198図	V区-B青灰色砂礫層9測量図	256
第199図	V区-B青灰色砂礫層9出土土器実測図	257
第200図	V区-B青灰色泥層測量図	258
第201図	V区-B出土石器実測図(1)	260
第202図	V区-B出土石器実測図(2)	261
第203図	V区-B出土石器実測図(3)	262
第204図	V区-B出土石器実測図(4)	263
第205図	V区-B出土石器実測図(5)	264
第206図	V区-B出土石器実測図(6)	265
第207図	V区-B出土木製品実測図(1)	266
第208図	V区-B出土木製品実測図(2)	267
第209図	V区-B出土木製品実測図(3)	268
第210図	V区-B出土木製品実測図(4)	269
第211図	V区-B出土木製品実測図(5)	270
第212図	V区-B出土木製品実測図(6)	271
第213図	V区-B出土木製品実測図(7)	272
第214図	V区-B出土木製品実測図(8)	273
第215図	V区-B出土木製品実測図(9)	274
第216図	V区-B出土木製品実測図(10)	275
第217図	V区-B出土銅鐸実測図	276
第218図	V区-B出土銅鐸拓本	277
第219図	V区-B出土土製品実測図	278
第220図	II区 杣の分類とその比率	289
第221図	II区 繩文時代の杣の最大径の頻度	289
第222図	西川津遺跡Ⅲ区右岸・V区-B出土畿内 系土器	291
第223図	朝酌川遺跡群出土畿内系土器	292
第224図	西川津遺跡Ⅲ区右岸・V区-B出土埴輪	294
第225図	朝酌川遺跡群出土埴輪	295
第226図	各調査区と土層堆積図の位置	298
第227図	西川津遺跡各堆積層の形成時期	299
第228図	西川津遺跡V区範囲確認調査調査区 位置図	300
第229図	西川津遺跡V区範囲確認調査調査区土層 堆積図	301
第230図	島根県における弥生時代前期の遺跡	307～308

第9章

第1図	調査地域周辺の地質	311
第2図	調査地域	312
第3図	調査地域周辺の古地理変遷	314
第4図	河川堆積層の断面とそのスケッチ	314
第5図	西川津遺跡堆積層の形成過程概念図	315
第6図	堆積物の有機炭素濃度、CN比、全イオウ 濃度	317
第7図	松江低地の古地理変遷	319

第10章

第1図	試料採取地点	322
第2図	Ⅲ区右岸の花粉ダイヤグラム	327
第3図	Ⅲ区左岸西壁の花粉ダイヤグラム	327
第4図	Ⅲ区左岸東壁の花粉ダイヤグラム	327
第5図	V区-Aの花粉ダイヤグラム	328

第12章

第1図	黒曜石原産地	344
第2図	花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル	352
第3図	碧玉および碧玉様綠色岩の原産地および弥生 (縄繩文)時代の碧玉製管玉の原材使用分布図	353

第4図 西川津遺跡出土大型碧玉玉材NH1（53396） の蛍光X線スペクトル	356
第5図 碧玉原石のESRスペクトル	357
第6図 碧玉原石の信号ⅢのESRスペクトル	358

付図-1 西川津遺跡Ⅱ区縄紋時代の杭検出状況図(1)
付図-2 西川津遺跡Ⅱ区縄紋時代の杭検出状況図(2)
付図-3 西川津遺跡Ⅱ区縄紋時代の杭検出状況図(3)

表 目 次

表1 西川津遺跡Ⅱ区出土土器観察表	42
表2 西川津遺跡Ⅱ区出土杭観察表	42、43
表3 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土土器観察表	91～96
表4 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土石器観察表	96
表5 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土木製品観察表	96
表6 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土杭観察表	97
表7 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土土製品観察表	97
表8 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土土器観察表	186～193
表9 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土石器観察表	194
表10 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土木製品観察表	195
表11 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土杭観察表	195、196
表12 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土土製品観察表	196
表13 西川津遺跡Ⅴ区-A出土土器観察表	210
表14 西川津遺跡Ⅴ区-A出土石器観察表	210
表15 西川津遺跡Ⅴ区-B出土土器観察表	280～283
表16 西川津遺跡Ⅴ区-B出土石器観察表	284
表17 西川津遺跡Ⅴ区-B出土木製品観察表	285
表18 西川津遺跡Ⅴ区-B出土杭観察表	285
表19 西川津遺跡Ⅴ区-B出土土製品観察表	285

第11章

表1 Ⅱ区の杭材の樹種	331
表2 Ⅲ区右岸の樹種同定結果	332
表3 Ⅴ区-Bの樹種同定結果	334
表4 西川津遺跡における地区別・時代別・用途別 の樹種構成	341～342

第12章

表1-1～4	
各黒曜石の原産地における原石群の元素比の 平均値と標準偏差値	345～346
表2 西川津遺跡V・Ⅲ区出土黒曜石製遺物の 元素比分析結果	348
表3-1	
西川津遺跡V区出土の黒曜石製遺物の原産地 推定結果	349
表3-2	
西川津遺跡Ⅲ区出土の黒曜石推定結果	349
表4 分析玉材の出土地区、時代、採取年月の一覧	351
表5 各碧玉の原産地における原石群の元素比の 平均値と標準偏差値	355
表6 西川津遺跡出土大型玉材の分析結果	356
表7 西川津遺跡出土大型碧玉玉材の原産地分析結果	359

写真図版目次

第11章

図版 1 木材(1)

図版 2 木材(2)

図版 3 木材(3)

図版 4 木材(4)

図版 5 木材(5)

図版 6 木材(6)

図版 7 木材(7)

図版 8 木材(8)

図版 9 木材(9)

図版10 木材(10)

図版 1

1 西川津遺跡Ⅲ区・V区遠景（1995年撮影）

2 西川津遺跡Ⅱ区遠景（同上）

図版 2

1 西川津遺跡Ⅱ区南壁堆積状況

2 東壁堆積状況

3 北壁堆積状況

図版 3

1 青灰色砂礫層検出状況（調査区南側）

2 青灰色砂礫層検出状況（調査区中央）

3 青灰色砂礫層検出状況（調査区北側）

図版 4

1 繩紋時代の杭検出状況（調査区南側）

2 繩紋時代の杭堆積状況(1)

3 繩紋時代の杭堆積状況(2)

図版 5

1 舟状木製品出土状況

2 加工木出土状況

3 ある日の朝酌川

図版 6 Ⅱ区出土土器

図版 7 Ⅱ区出土杭(1)

図版 8 Ⅱ区出土杭(2)

図版 9 Ⅱ区出土杭(3)

図版10 Ⅱ区出土杭(4)

図版11 Ⅱ区出土杭(5)

図版12 Ⅱ区出土杭(6)

図版13

1 西川津遺跡Ⅲ区左岸北壁堆積状況

2 西壁堆積状況

3 南壁堆積状況

図版14

1 青灰色砂層3流木堆積状況

2 直柄平鋤検出状況

3 1の完掘状況

図版15

1 青灰色砂層1検出状況

2 調査区南側青灰色砂層3検出状況

3 青灰色砂礫層5流木検出状況

図版16

1 暗褐色泥層中土器出土状況

2 青灰色砂礫層2土器出土状況

3 青灰色砂礫層4木製品出土状況

図版17

1 暗褐色泥層木製品出土状況

2 青灰色砂層2木製品出土状況

3 青灰色砂礫層1編物出土状況

図版18 Ⅲ区左岸出土土器(1)

図版19 Ⅲ区左岸出土土器(2)

図版20 Ⅲ区左岸出土土器(3)

図版21 Ⅲ区左岸出土土器(4)

図版22 Ⅲ区左岸出土土器(5)

図版23 Ⅲ区左岸出土土器(6)

図版24 Ⅲ区左岸出土土器(7)

図版25 Ⅲ区左岸出土土器(8)

図版26 Ⅲ区左岸出土土器(9)

図版27 Ⅲ区左岸出土土器(10)

図版28 Ⅲ区左岸出土土器(11)

Ⅲ区左岸出土石器

図版29 Ⅲ区左岸出土木製品(1)

図版30 Ⅲ区左岸出土木製品(2)

図版31 Ⅲ区左岸出土木製品(3)

図版32 Ⅲ区左岸出土杭

図版33

1 暫定掘削前の朝酌川Ⅲ区（1980年頃）

2 西壁堆積状況

3 西壁堆積状況

図版34

1 東壁堆積状況

2 東西方向堆積状況

3 北壁堆積状況

- 図版35
- 1 南端の青灰色砂礫層検出状況
 - 2 青灰色砂礫層1検出状況
 - 3 調査区北側青灰色砂層3検出状況
- 図版36
- 1 杭群検出状況
 - 2 杭群検出状況
 - 3 杭群検出状況
- 図版37
- 1 杭2検出状況
 - 2 杭2抜き取り状況
 - 3 杭21堆積状況
- 図版38
- 1 青灰色砂礫層3土器出土状況
 - 2 砂礫層3土器出土状況
 - 3 南端の砂礫層しゃもじ状木製品出土状況
- 図版39 Ⅲ区右岸出土土器(1)
- 図版40 Ⅲ区右岸出土土器(2)
- 図版41 Ⅲ区右岸出土土器(3)
- 図版42 Ⅲ区右岸出土土器(4)
- 図版43 Ⅲ区右岸出土土器(5)
- 図版44 Ⅲ区右岸出土土器(6)
- 図版45 Ⅲ区右岸出土土器(7)
- 図版46 Ⅲ区右岸出土土器(8)
- 図版47 Ⅲ区右岸出土土器(9)
- 図版48 Ⅲ区右岸出土土器(10)
- 図版49 Ⅲ区右岸出土土器(11)
- 図版50 Ⅲ区右岸出土土器(12)
- 図版51 Ⅲ区右岸出土土器(13)
- 図版52 Ⅲ区右岸出土土器(14)
- 図版53 Ⅲ区右岸出土土器(15)
- 図版54 Ⅲ区右岸出土土器(16)
- 図版55 Ⅲ区右岸出土土器(17)
- 図版56 Ⅲ区右岸出土土器(18)
- 図版57 Ⅲ区右岸出土土器(19)
- Ⅲ区右岸出土石器(1)
- 図版58 Ⅲ区右岸出土石器(2)
- 図版59 Ⅲ区右岸出土石器(3)
- Ⅲ区右岸出土石器（貝化石）
- Ⅲ区右岸出土土器（ネズミの爪痕？）
- 図版60 Ⅲ区右岸出土木製品(1)
- 図版61 Ⅲ区右岸出土木製品(2)
- 図版62 Ⅲ区右岸出土木製品(3)
- 図版63 Ⅲ区右岸出土木製品(4)
- 図版64 Ⅲ区右岸出土木製品(5)
- 図版65 Ⅲ区右岸出土木製品(6)
- 図版66
- 1 西川津遺跡V区-A調査前全景
 - 2 西壁堆積状況
 - 3 南壁堆積状況
- 図版67
- 1 青灰色砂礫層1検出状況
 - 2 青灰色砂礫層2検出状況
 - 3 朝酌川V区全景
- 図版68 V区-A出土土器
- 図版69 V区-A出土石器
- アカホヤ火山灰層
- 図版70
- 1 西川津遺跡V区-B調査前全景
 - 2 北壁堆積状況
 - 3 西壁堆積状況
- 図版71
- 1 青灰色砂礫層2検出状況
 - 2 青灰色砂礫層3検出状況
 - 3 青灰色砂礫層5検出状況
- 図版72
- 1 青灰色砂礫層5銅鐸出土地点
 - 2 青灰色砂礫層8検出状況
 - 3 青灰色砂礫層9検出状況
- 図版73
- 1 石組遺構検出状況
 - 2 水辺の石検出状況
 - 3 水辺の石検出状況（下位）
- 図版74
- 1 青灰色砂層2流木検出状況
 - 2 砂層2斧未製品出土状況
 - 3 青灰色砂礫層8横槌出土状況
- 図版75 V区-B出土土器(1)
- 図版76 V区-B出土土器(2)
- 図版77 V区-B出土土器(3)
- 図版78 V区-B出土土器(4)
- 図版79 V区-B出土土器(5)
- 図版80 V区-B出土土器(6)
- 図版81 V区-B出土土器(7)
- 図版82 V区-B出土土器(8)
- 図版83 V区-B出土土器(9)
- 図版84 V区-B出土土器(10)
- 図版85 V区-B出土土器(11)

- 図版86 V区-B出土土器(2)
- 図版87 V区-B出土石器(1)
- 図版88 V区-B出土石器(2)
- 図版89 V区-B出土石器(3)
- 図版90 V区-B出土木製品(1)
- 図版91 V区-B出土木製品(2)
- 図版92 V区-B出土木製品(3)
- 図版93 V区-B出土木製品(4)
- 図版94 V区-B出土木製品(5)
- 図版95 V区-B出土木製品(6)
- 図版96 V区-B銅鐸
- 図版97 V区-B銅鐸 (X線写真)
- 図版98 西川津遺跡出土土製品・同植物遺存体

序章 調査に至る経緯と経過

西川津遺跡は、島根県東部、宍道湖の東にある松江市の北東部を流れる朝酌川沿いに位置する。西川津遺跡の下流には、原の前遺跡、タテチョウ遺跡が存在し、西川津遺跡の南西に位置する島根大学構内遺跡と共に、「朝酌川遺跡群」と呼ぶことのできる一連の遺跡群を構成している。

朝酌川遺跡群の発見は、1934（昭和9）年に遡る。朝酌川に堰と水門を造る工事に際して弥生土器などが出土したことによって、タテチョウ遺跡の存在が確認された。1949（昭和24）年には山本清氏によってタテチョウ遺跡の試掘調査が行われ、同遺跡が弥生時代を中心に古墳時代に及ぶ遺跡であることが明らかになった。また、1939（昭和14）年には水田排水工事で土器片が出土したことから、西川津遺跡の存在も確認された。更に、戦後に行われた電柱埋設工事や1967（昭和42）年の県道松江一境線（現国道431号線）沿いの電話線埋設工事の際にも遺物が発見された。しかし発掘調査が行われていなかったことから、これらの遺跡の規模や性格などは不明のままであった。ところが、朝酌川は1960年代後半以降、急速な市街地化の進行によって朝酌川の氾濫が増加し川津地区の住民に損害を与えるに至った。そのため1972（昭和47）年から島根県土木部において河川改修計画が企画された。島根県教育委員会では1974（昭和49）年度に土木部の依頼を受け、工事予定地内の遺跡（タテチョウ遺跡）の範囲確認調査を実施した。この結果タテチョウ遺跡が南北300mにも及ぶ大規模な低湿地遺跡であることが判明した。また、同じ頃松江市教育委員会でも松江圏都市計画予定地内のタテチョウ遺跡の西側部分について発掘調査を実施している。

1977（昭和52）年に、県教育委員会は土木部と朝酌川の河川改修工事予定地内に存在する遺跡の取り扱いについて協議を重ねた。この協議に基づき、1977（昭和52）年以降、島根県教育委員会では本格的な発掘調査に着手した。

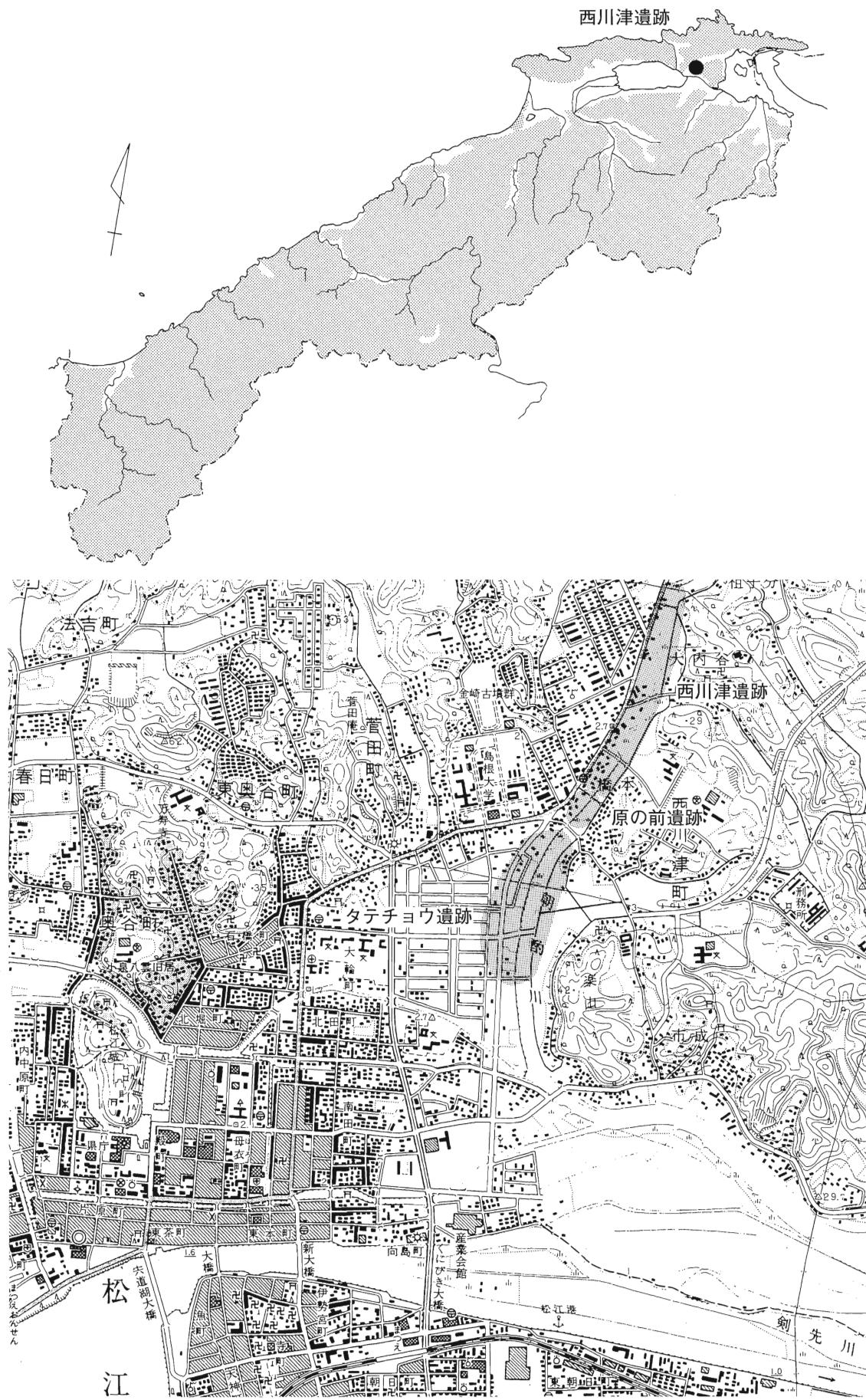
河川改修工事に伴う暫定掘削工事は下流側から進められ、1979（昭和54）年3月に掘削工事中のガラガラ橋から宮尾橋の間に遺物が発見されたことで遺跡の存在が明らかになった。ここは字名をとって「原の前遺跡」とした。さらに、1977（昭和52）年3月には、上流の宮尾坪内地区の学園橋付近で掘削工事中に弥生土器が発見され、西川津遺跡の範囲が拡大することが明らかになった。急遽この地区についても1979～81（昭和54～56）年に暫定掘削部分についてのみ発掘調査を実施した。工事予定地内の調査は下流側から進められ、1991（平成3）年にはタテチョウ遺跡（ガラガラ橋より下流部分）が、1993（平成5）年には原の前遺跡（宮尾橋～ガラガラ橋）の調査が終了し、1994（平成6）年からは西川津遺跡（宮尾橋より上流部分）の調査に入った。

なお、本報告書では便宜的に宮尾橋～学園橋の間の河川敷を「（西川津遺跡）Ⅱ区」、宮尾橋～嵩見橋の間を「Ⅲ区」、嵩見橋～海崎橋の間を「V区」と呼称することにした。

【1996（平成8）年度】

Ⅱ区右岸600m²とⅢ区左岸350m²について実施した。現地調査期間は、6月中旬から12月下旬までの約6カ月半であった。

Ⅱ区では朝酌川に平行するように杭が検出され、杭の総計は300本余りに及んだ。これらの杭は縄紋時代に属すると考えられる。Ⅲ区では、弥生時代の砂礫層が確認され、砂礫層中からは弥生土



第1図 西川津遺跡位置図 (S=1/25,000)



第2図 西川津遺跡調査区配置図 (S=1/4,000)

器や直柄平鉗などの木製品が出土した。

【1997（平成9）年度】

V区左岸計570m²と、III区右岸600m²について実施した。現地調査期間は、6月初旬から12月下旬までの約7ヵ月弱であった。

V区は下流側と上流側の2つに調査区を分けた。下流側から掘削を開始し、縄紋時代前期の砂礫層を確認した。また、上流側では弥生時代後期の石組遺構や杭が検出された。砂礫層からは大量の遺物が出土したほか、弥生時代後期の砂礫層から銅鐸が出土した。III区では、調査区の中程を中心に多数の杭が検出され、「橋脚」と考えられる杭も検出された。また、砂層や砂礫層が確認された。出土した土器の時期は縄紋時代前期から中世の青磁や白磁と長期間に及んでいた。

遺物の整理は調査終了後に埋蔵文化財調査センターで行い、その間に地元への普及啓発活動として、『よみがえるあさくみがわのながれ』『むかしむかしのあさくみがわ』の2冊のパンフレットを作成した。

【1998（平成10）年度】

実測や製図、写真撮影等を行い、本報告書の作成を行った。本報告書は、前述の2冊のパンフレットや1996年度、1997年度の埋蔵文化財調査センターの年報と一部異なる記述をした部分があるが、本報告書をもって最終的な記述となる。

なお、朝酌川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査では、島根県教育委員会からこれまでに以下の報告書が刊行されている。

前島己基・平野芳英・松本岩雄編 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 1979

村尾秀信 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅰ』 1980

村尾秀信 『西川津遺跡詳細分布調査報告書』 1981

石井 悠・村尾秀信 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 1982

柳浦俊一編 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 1987

内田律雄編 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ（海崎地区1）』 1987

内田律雄編 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）』 1988

内田律雄編 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ（海崎地区3）』 1989

三宅博士・柳浦俊一編 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 1990

佐伯徳哉・林 健亮・瀬古諒子編 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅳ』 1992

西尾克己・佐伯徳哉・間野大丞編 『朝酌川中小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡』

1995

また、朝酌川遺跡群の環境変遷を考える上で、次の報告を合わせて読まれることを希望する。

中村唯史・徳岡隆夫・大西郁夫・三瓶良和・高安克巳・竹広文明・会下和宏・西尾克己・渡辺正巳 1996

『島根県東部の完新世環境変遷と低湿地遺跡（口絵I～VII解説）』『LAGUNA（汽水域研究）』3 島根大学汽水域研究センター pp.9～11

第1章 西川津遺跡周辺の遺跡

【旧石器時代】

西川津遺跡の周辺では、現在のところ旧石器時代の遺跡は知られていないが、将来付近で旧石器時代の遺跡が確認される可能性も考えられる。朝酌川周辺で旧石器時代の遺跡が発見されるのは、海崎橋よりも上流になるのではないかと思われる。

【縄紋時代】

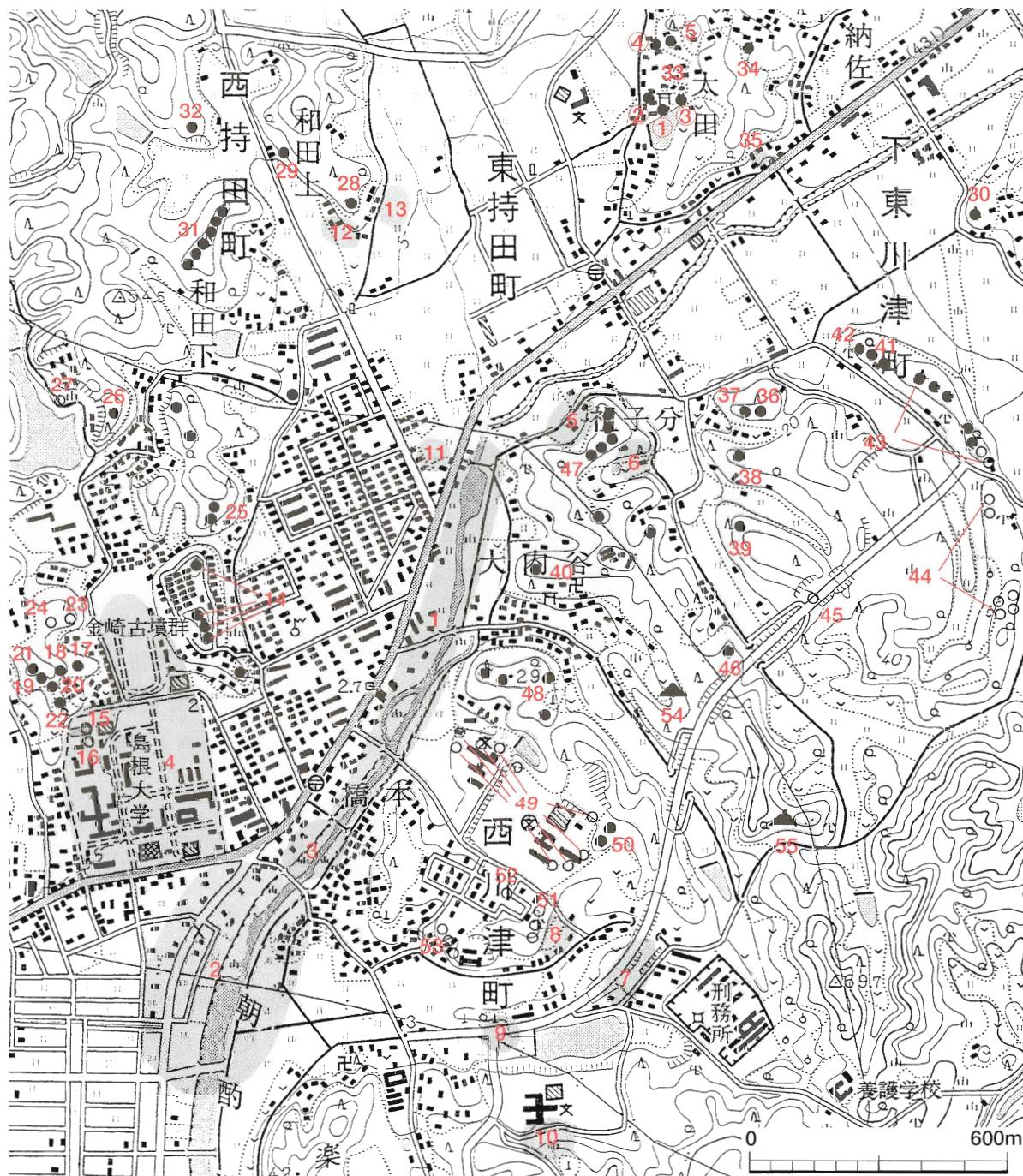
縄紋時代の遺跡には、西川津遺跡やタテチョウ遺跡の他に、島根大学構内遺跡が挙げられる。島根大学構内遺跡では、縄紋時代前期の丸木舟や櫂が出土しているほか、アカホヤ火山灰層の上下から層位的に検出された土器群などがある。また、古環境の復元も精力的に行われており、「縄紋海進」前後の様相も明らかになっている。他にも、金崎遺跡からは晩期の土器が採集されているほか、柴尾遺跡では縄紋時代に属すると考えられる石器の製作址が見つかっている。

【弥生時代】

弥生時代の遺跡には、前述の西川津遺跡、タテチョウ遺跡の他、貝崎遺跡や橋本遺跡からは弥生土器が採集されている。また、朝酌川の東側、南向きの低丘陵の緩斜面に位置する柴Ⅲ遺跡では、後期の竪穴住居址が3棟検出されており、その内の1棟は後期末の玉造工房跡と考えられる。西川津遺跡、タテチョウ遺跡の集落は川沿いにあったと推測されるが、遺物の粗密から、現在の川津小学校付近、海崎橋付近、朝酌川右岸の3箇所が考えられている⁽¹⁾。

【古墳時代】

朝酌川流域の低丘陵上には多くの中小規模の古墳が築かれているが、その多くは中期後葉以降である。前期の古墳には柴尾2号墳がある。柴尾2号墳は、1辺8mの方墳で、墳頂や周溝からは土師器が出土した。須恵器出現以降の古墳群には、柴古墳群、馬込山古墳群、金崎古墳群、上浜弓古墳群、住吉神社裏古墳などが挙げられる。これらの古墳群の中でも規模の大きいものが金崎古墳群で、金崎1号墳は全長35mの前方後方墳である。小型の竪穴式石室の中に、倣製内行花文鏡、子持勾玉などの玉類、剣や矛などの武器、各種の須恵器があった。この古墳は、朝酌川流域一帯を支配した首長の墓と考えられる。また、薬師山古墳からは倣製珠文鏡や古式の須恵器が出土している。山崎古墳は一辺15mの方墳で、排水溝を持ち、割竹形木棺を直葬していたと推定される。副葬品は棺の内外から鉄剣4、鉄刀1、鉄鎌約50、ヤリガンナ2であった。上浜弓1号墳は、19m×16mの地山を削り出した中期の方墳であるが、鉄刀と鉄剣が1振りづつ検出された。しかし後期になると、横穴式石室を持つ古墳は西川津遺跡周辺では存在せず、わずかに深町横穴墓が知られるのみである。この時期には、朝酌川上流の持田地区付近には石棺式石室を持つ太田古墳群や全長50mの前方後方墳で横穴式石室を2つ持つ薄井原古墳が築かれている。一方、集落遺跡は、柴II遺跡や堤廻遺跡がある。柴II遺跡は小さな谷あいの奥部に位置し、前期後葉の竪穴式住居2棟が検出された。堤廻遺跡は低丘陵の斜面に位置し、竪穴式住居21棟と掘立柱建物2棟が検出された。西川津遺跡やタテチョウ遺跡では河川堆積層から土師器や須恵器、木製品が出土しており、弥生時代と同様に川沿いに集落のあったことがうかがわれる。



第3図 西川津遺跡と周辺の遺跡 (S=1/15,000)

- | | | | | |
|----------------|-----------|-----------|------------|--------------|
| 1 西川津遺跡 | 12 和田上遺跡 | 23 上浜弓1号墳 | 34 道仙古墳群 | 45 祖子分長池古墳 |
| 2 タテチョウ遺跡 | 13 I41遺跡 | 24 上浜弓2号墳 | 35 納佐遺跡 | 46 一の谷古墳 |
| 3 原の前遺跡 | 14 金崎古墳群 | 25 福山古墳群 | 36 後田古墳 | 47 貝崎古墳群 |
| 4 島根大学構内遺跡 | 15 菅田丘古墳 | 26 深町古墳群 | 37 前田古墳 | 48 空山古墳群 |
| 5 貝崎A遺跡 | 16 薬師山古墳 | 27 深町横穴 | 38 家ノ上古墳 | 49 馬込山古墳群 |
| 6 貝崎B遺跡 | 17 宮田1号墳 | 28 太源古墳群 | 39 井上古墳 | 50 宮尾古墳群 |
| 7 柴遺跡 | 18 宮田2号墳 | 29 尾山古墳群 | 40 住吉神社裏古墳 | 51 柴古墳群 |
| 8 柴II遺跡 柴III遺跡 | 19 浜弓1号墳 | 30 中尾古墳 | 41 川津11号墳 | 52 山崎古墳 |
| 9 橋本遺跡 | 20 菅田19号墳 | 31 宮垣古墳群 | 42 川津12号墳 | 53 川津小学校裏古墳群 |
| 10 堤廻遺跡 | 21 菅田20号墳 | 32 国石古墳 | 43 八色谷古墳群 | 54 堂頭山城址 |
| 11 鶴場遺跡 | 22 小丸山古墳 | 33 太田古墳群 | 44 柴尾古墳群 | 55 川津城址 |



第4図 大正時代の朝酌川（1918年 陸地測量部、S=1/25,000）

【古代・中世】

朝酌川周辺ではこの時期に属する遺跡の発掘はほとんどなされておらず、不明な点が多いが、下流のタテチョウ遺跡からは、「驛」と墨で書かれた須恵器の壺が出土している。また、前述の柴Ⅲ遺跡からは、8世紀末～9世紀前葉の掘立柱建物が約10軒検出されている。馬込山古墓群では、室町時代の土壙墓が検出されており、1号墓から石櫃、2号墓からは火葬骨や数珠玉、銭貨が出土した。2号墓は火葬の場所をそのまま墓地にした例である。他には、柴尾古墓では室町時代後期から安土桃山時代の五輪塔が、上浜弓遺跡では、室町時代の火葬墓が5基検出された。城址として、川津城や堂頭山城が確認されているが、詳細は不明である。

《参考文献》(朝酌川改修工事に伴う報告書以外)

石橋逸郎・近藤 正 「松江・馬込山古墓群」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集 島根県教育委員会
1971

岡崎雄二郎編 『上浜弓2号墳 上浜弓遺跡』 松江市教育委員会 1982

岡崎雄二郎 『山崎古墳』 松江市教育委員会 1984

井上寛光編 『タテチョウ遺跡』 松江市教育委員会 1985

岡崎雄二郎ほか 『堤廻遺跡』 松江市土地開発公社・松江市教育委員会 1986

岡崎雄二郎ほか編 「タテチョウ遺跡発掘調査報告書」『松江市文化財調査報告書』第51集 松江市教育委員会 1992

飯塚康行・山尾絹江 「上浜弓1号墳他発掘調査報告書」『松江市文化財調査報告書』第53集 松江市教育委員会 1993

江川幸子編 「柴尾遺跡発掘調査報告書(I)」『(財)松江市教育文化振興財団文化財発掘調査報告書』第5集 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興財団 1994

石川 崇 「宮尾古墳群他発掘調査報告書」『松江市文化財調査報告書』第70集 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団 1996

昌子寛光 「柴Ⅲ遺跡発掘調査概要報告書」『松江市文化財調査報告書』第74集 松江市教育委員会・(財)松江市教育文化振興事業団 1997

会下和宏編 『島根大学構内遺跡発掘調査概報Ⅱ(諸田地区1)』 島根大学埋蔵文化財調査研究センター
1996

会下和宏編 「島根大学構内遺跡第1次調査(橋縄手地区1)」『島根大学埋蔵文化財調査報告』第1冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1997

会下和宏編 「島根大学構内遺跡第3次調査(深町地区1)」『島根大学埋蔵文化財調査報告』第2冊 島根大学埋蔵文化財調査研究センター 1998

註

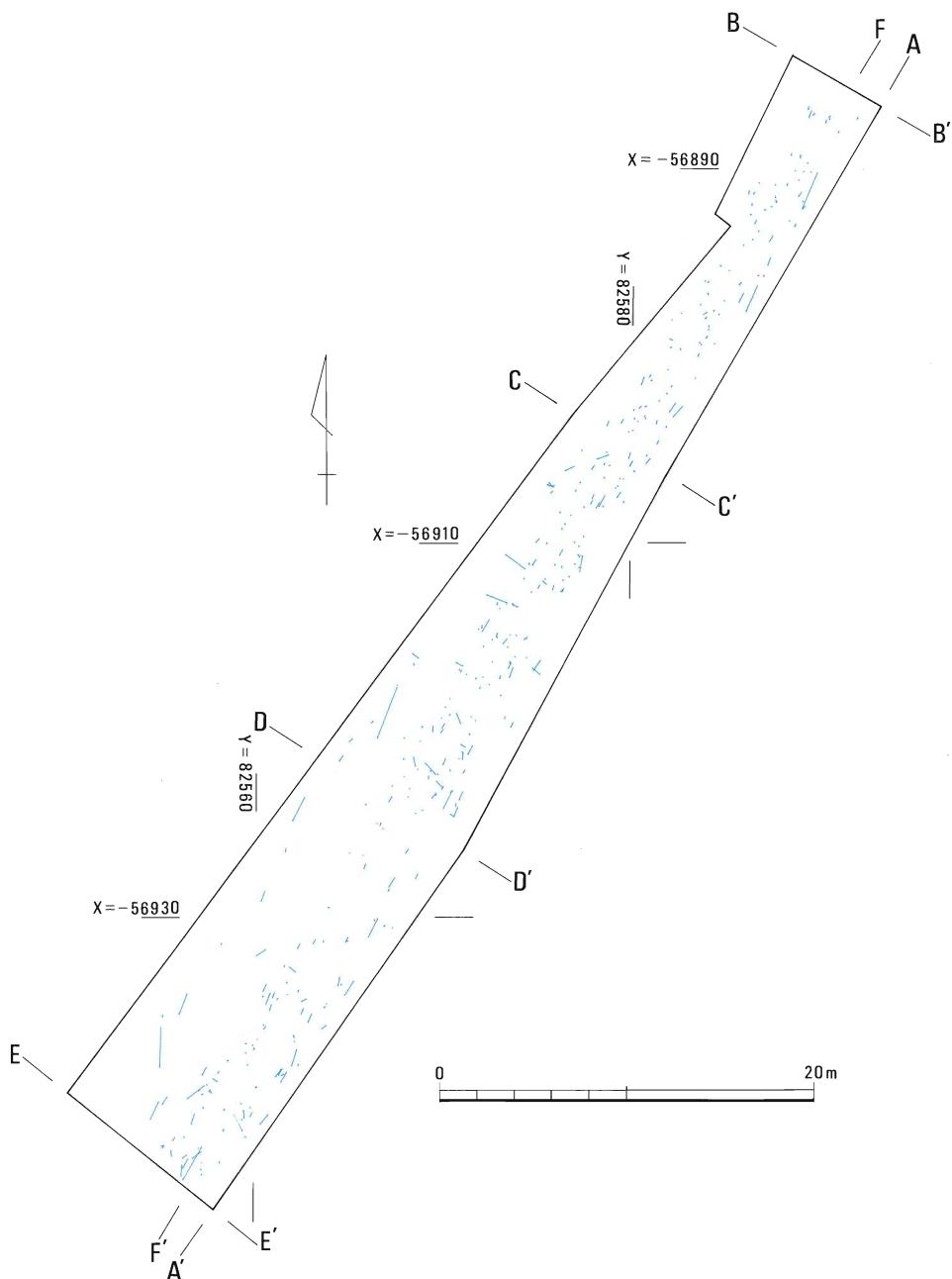
- (1) 田中義昭 1996 「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究(伝統文化)』第12号 島根大学汽水域研究センター pp.1~11

第2章 西川津遺跡Ⅱ区の調査

第1節 調査の経過

西川津Ⅱ区は、学園橋～宮尾橋の間の朝酌川右岸の内、学園橋南側の河川敷に南北約70m、最大幅10m、最小幅約4mの範囲約600m²を調査区として設定した。(第5図)

調査は、旧水田面の耕作土の除去から開始した。平成3年度の試掘調査の結果から、標高約0.8～1.0mの現地表面から耕作土を約0.4m機械によって除去して褐灰色泥層を確認した。次に、人力で

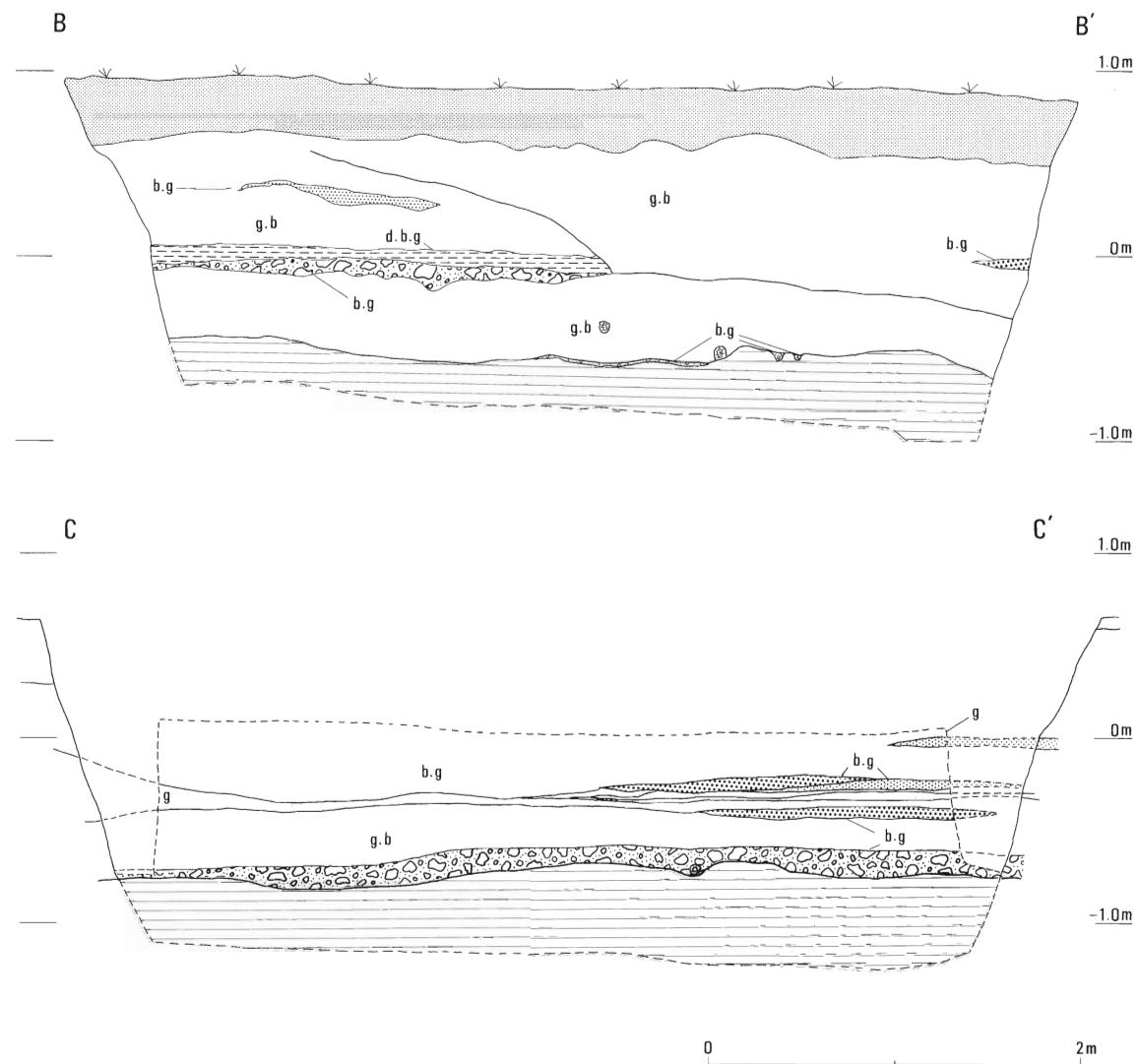


第5図 西川津遺跡Ⅱ区調査区位置図 (S=1/400)

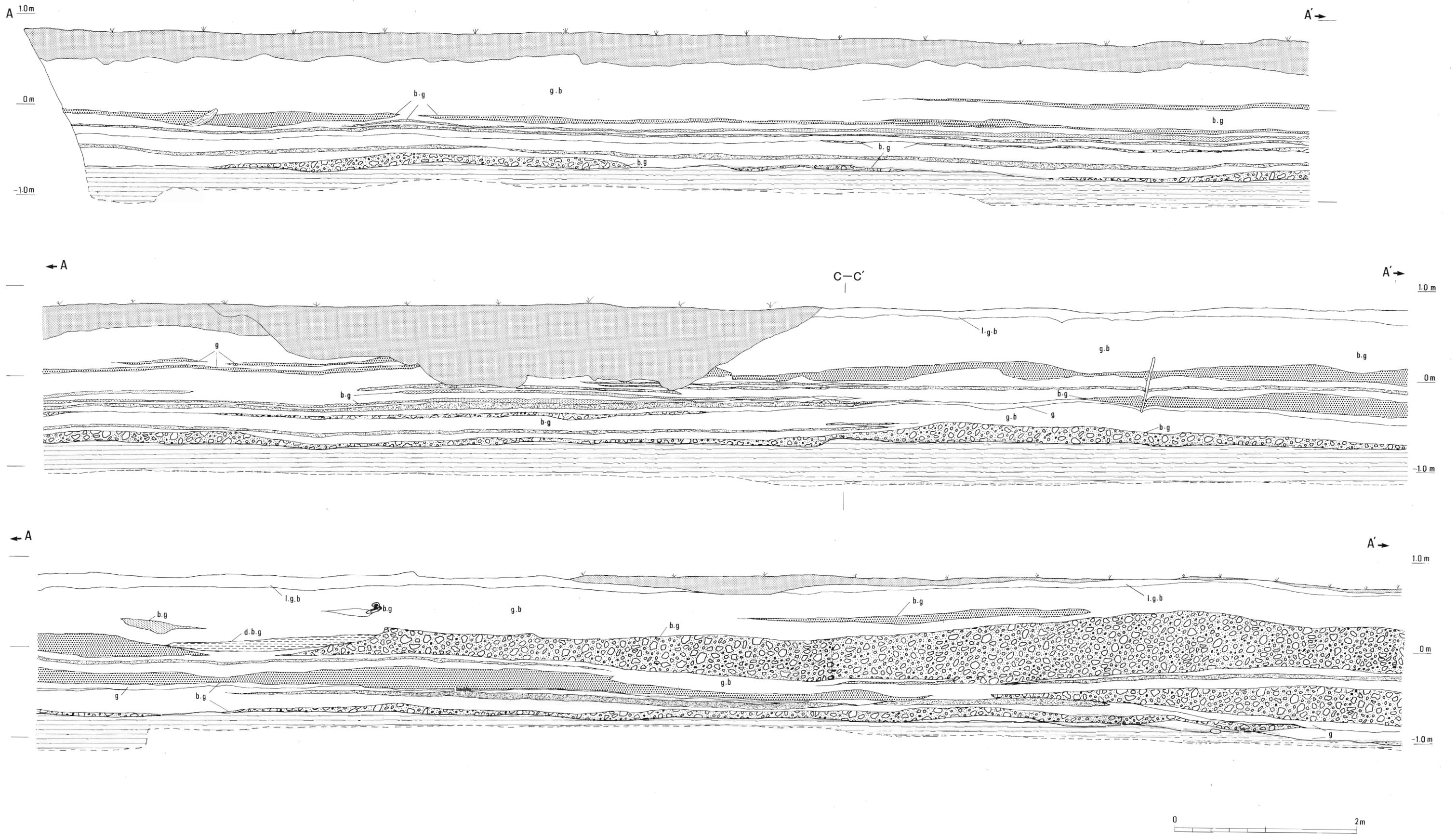
順次泥層を掘削し、薄い細砂層や粗砂層、砂礫層を確認した。砂礫層は調査区の全面に分布していくのではなく現在の川側である調査区の東側に厚く堆積していた。また、砂礫層は調査区の中程では厚く堆積していたが、北側や南側ではほとんど見られず、泥層が中心であったので、砂礫層の範囲の把握や杭の検出が困難であった。

砂礫層を確認する時点から杭が検出され始めたが、II区で検出された300本余りの杭の約3割は砂礫層を完掘した後に検出された。砂礫層の下層にはより泥性の強い青灰色泥層が堆積していた。この青灰色泥層は、古宍道湾の底に堆積した泥であり、アカホヤ火山灰層を挟むことがわかっているが、調査期間の制約及び悪条件によって今回は確認を見送った。

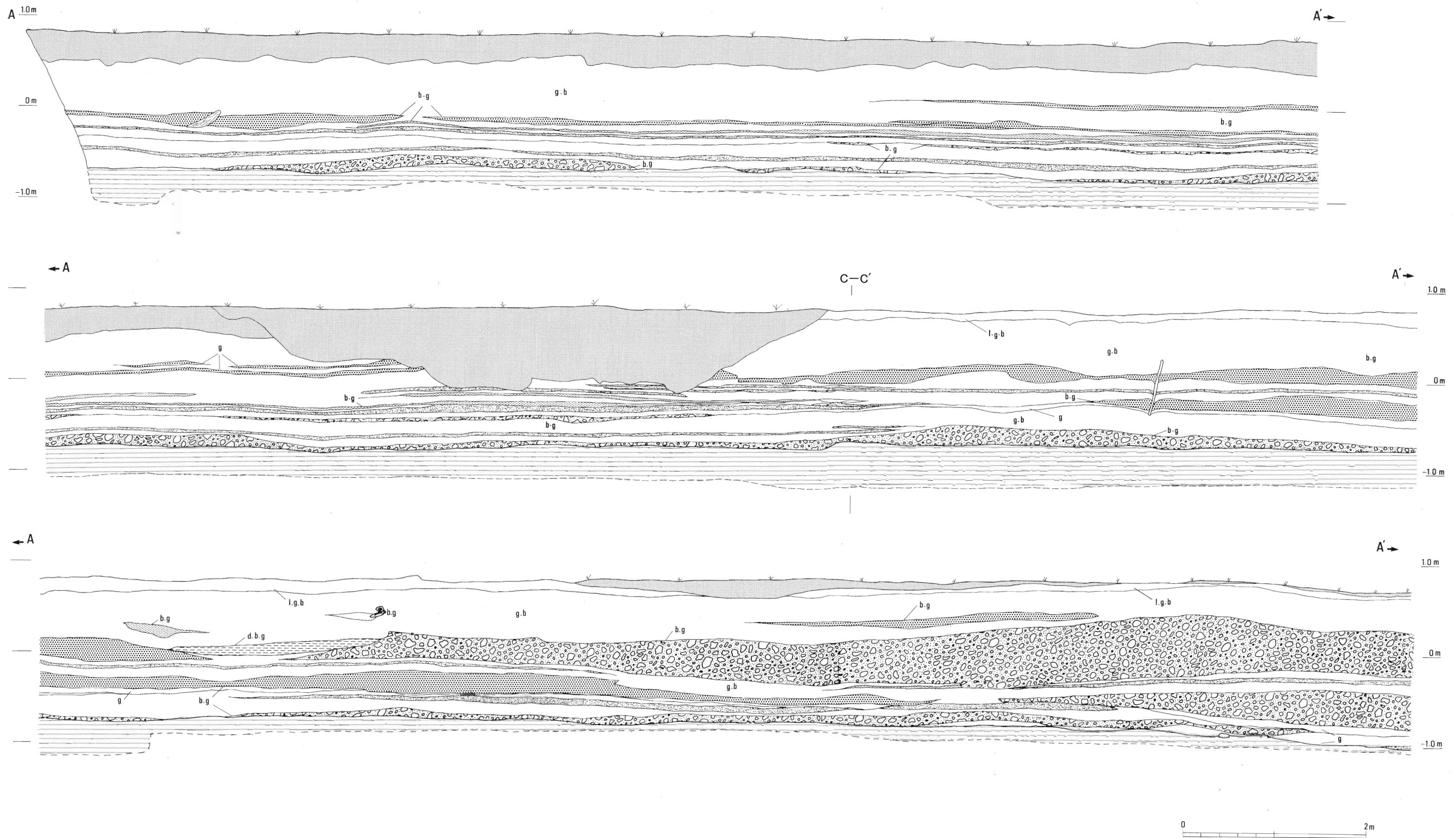
青灰色泥層中の標高約-1.0mからは、舟状木製品、及び加工木が検出された。また、青灰色泥層中からは人頭大の石が数点検出された。これは護岸などの遺構ではないと思われるが、その大きさから砂礫層によって流されてきたものではなく人が持ち込んだ可能性を有す。



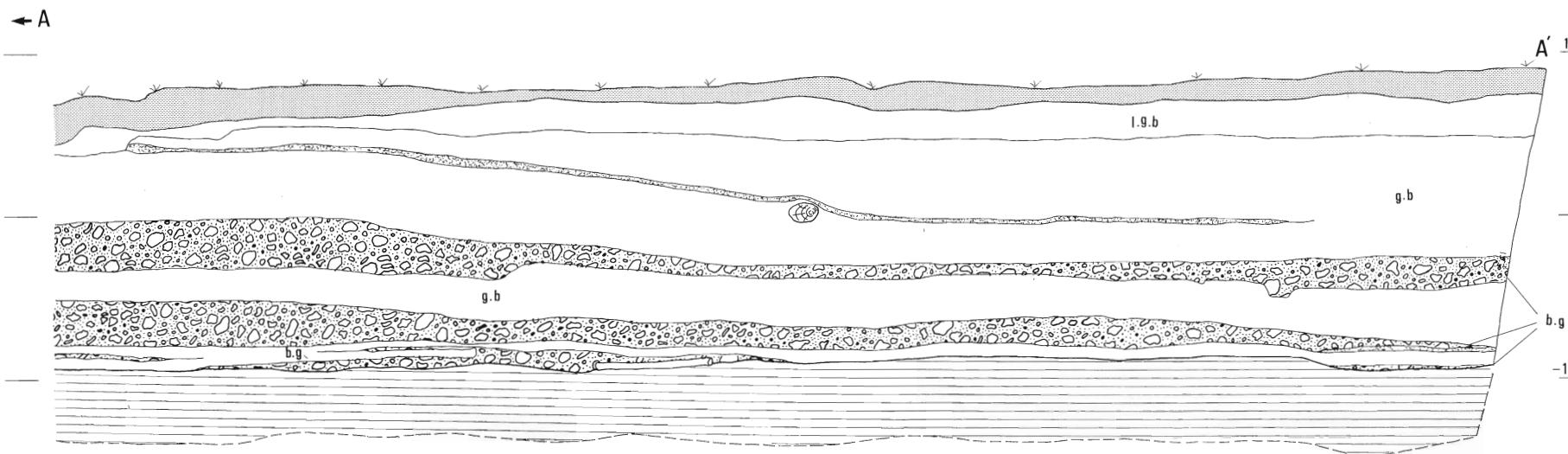
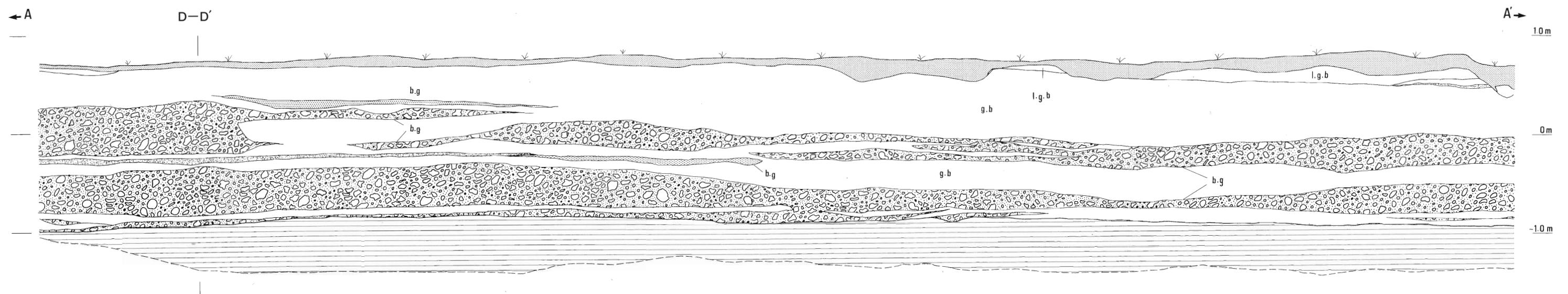
第6図 II区東西方向 (B-B'、C-C') 土層堆積図(1) (S=1/40)



第7図 II区東壁 (A-A') 土層堆積図(1) (S=1/40)



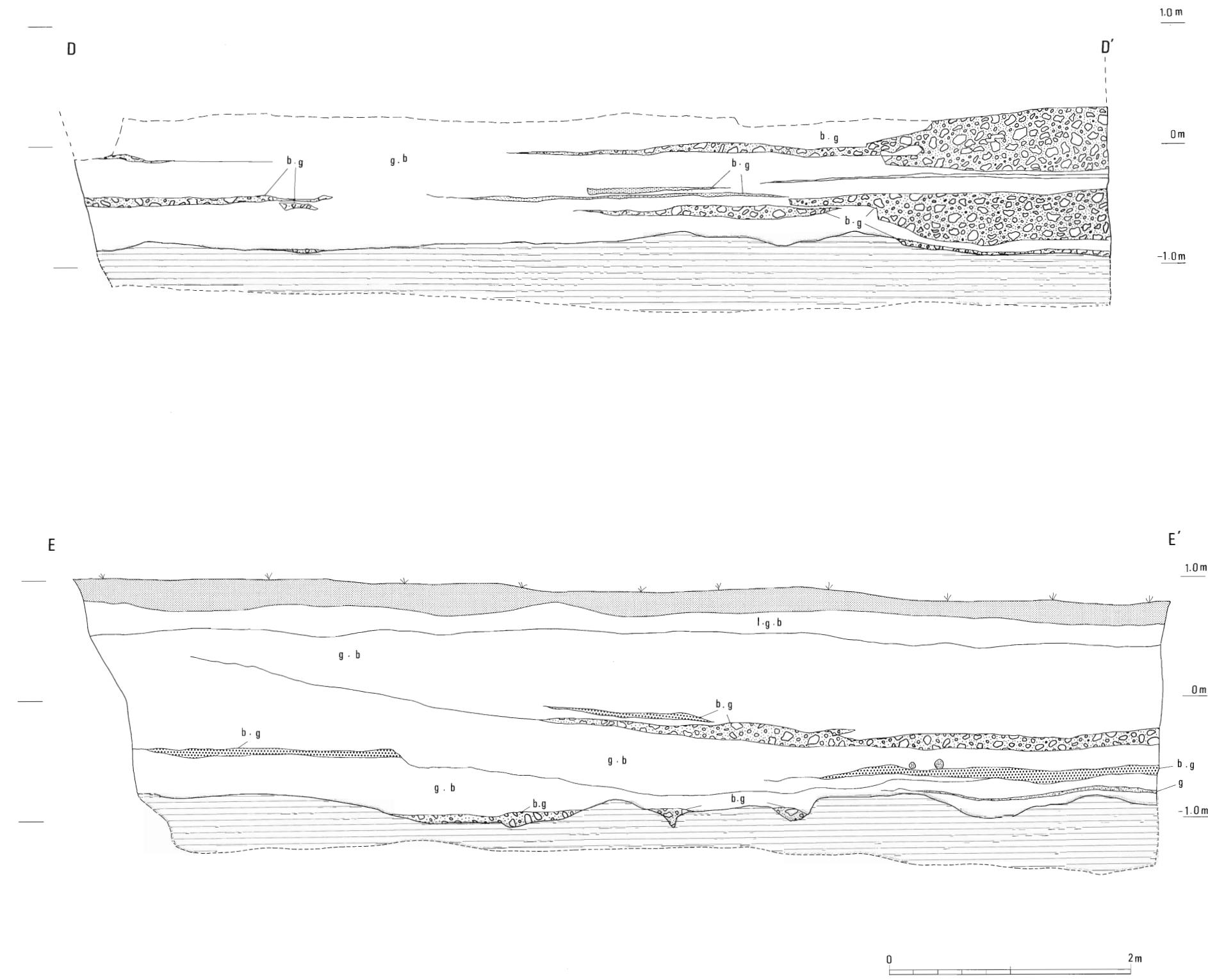
第7図 II区東壁 (A-A') 土層堆積図(1) (S=1/40)



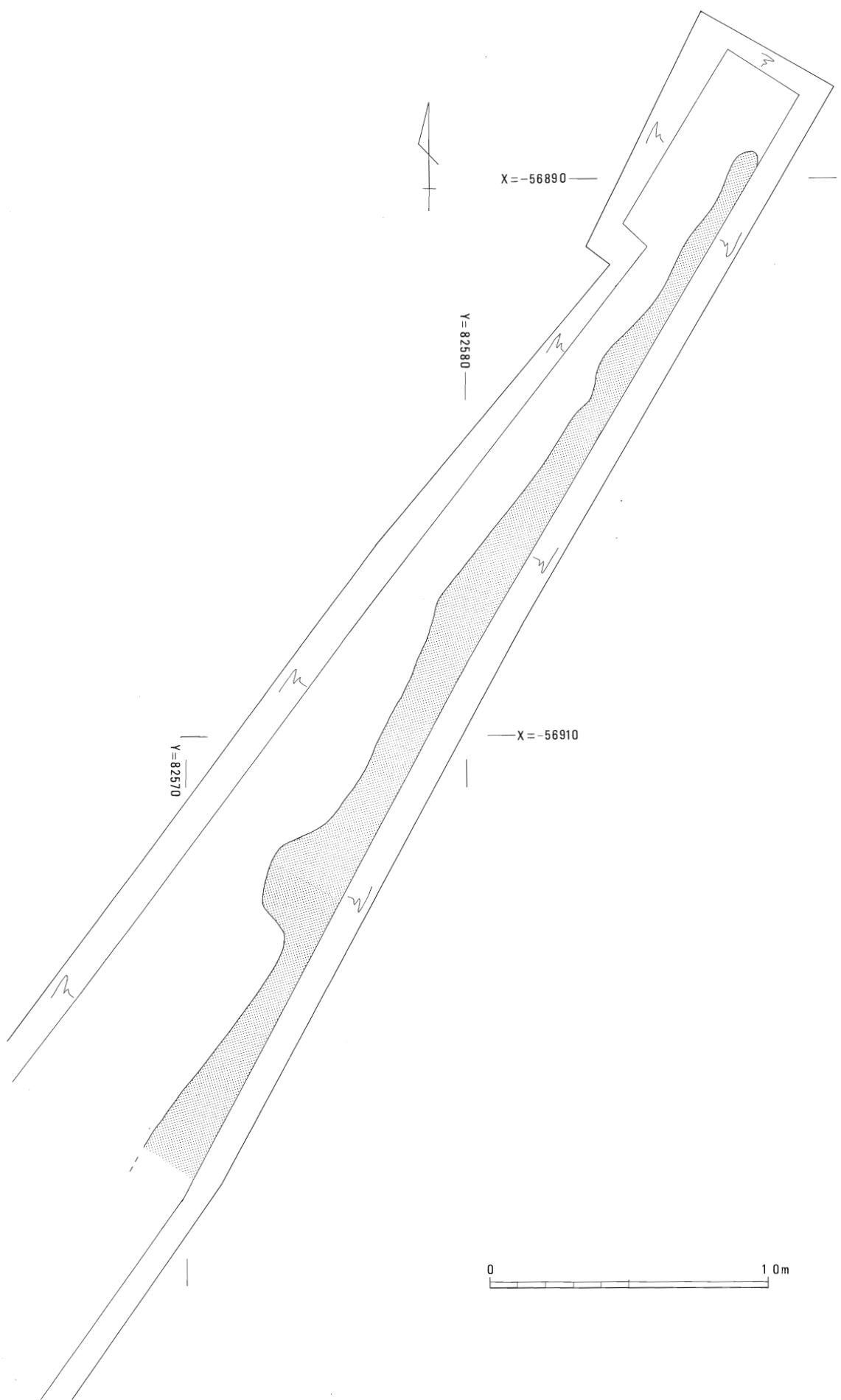
埋土・耕作土	砂質泥層	砂礫層	g.b 褐灰色
有機質層	細砂層	古宍道湾の泥層	b.g 青灰色
泥層	粗砂層		g 灰色
			l.g.b 明褐灰色
			d.b.g 暗褐灰色

第8図 II区東壁 (A-A') 土層堆積図(2) (S=1/40)

0 2m



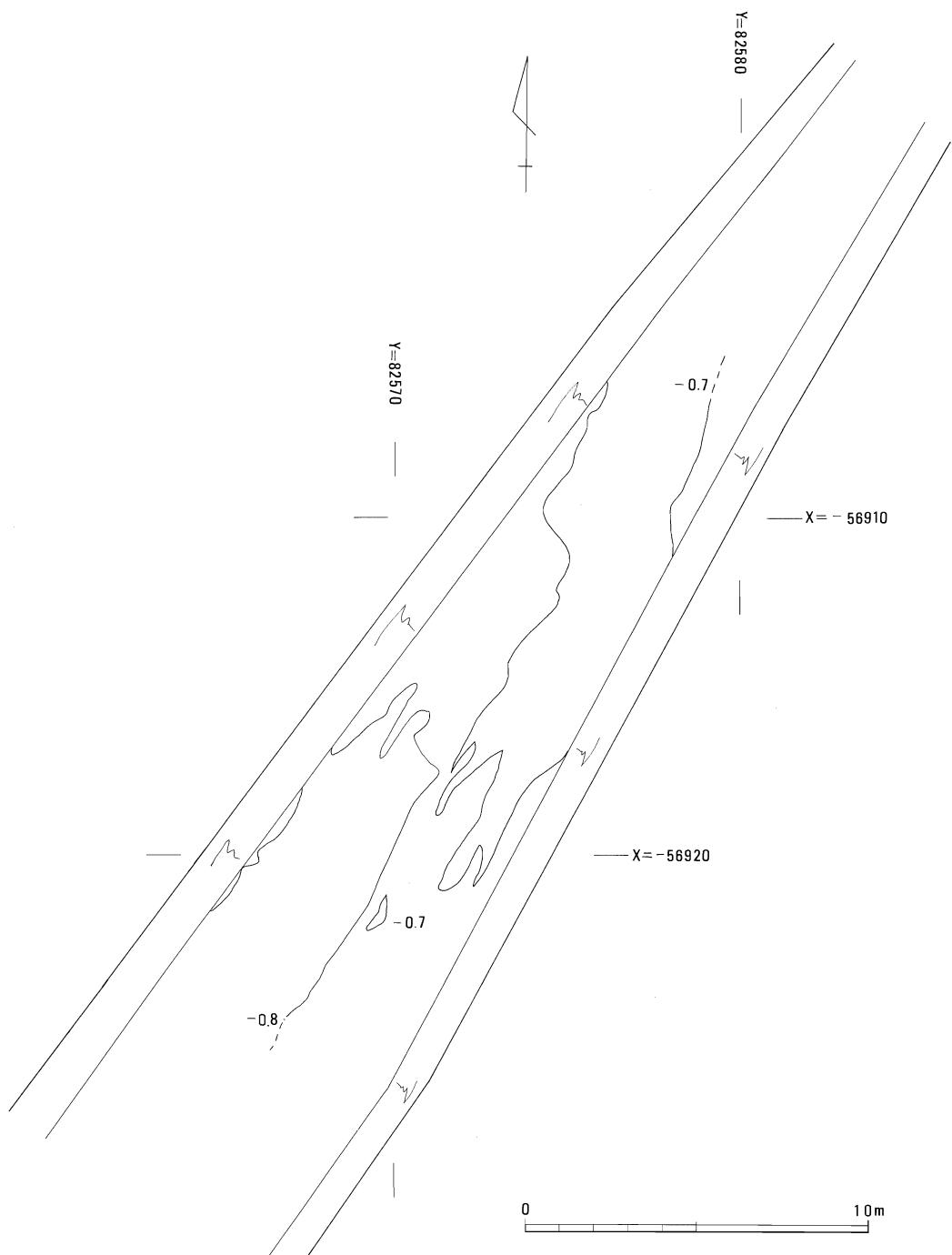
第9図 II区東西方向(D-D'、E-E') 土層堆積図(2) (S=1/40)



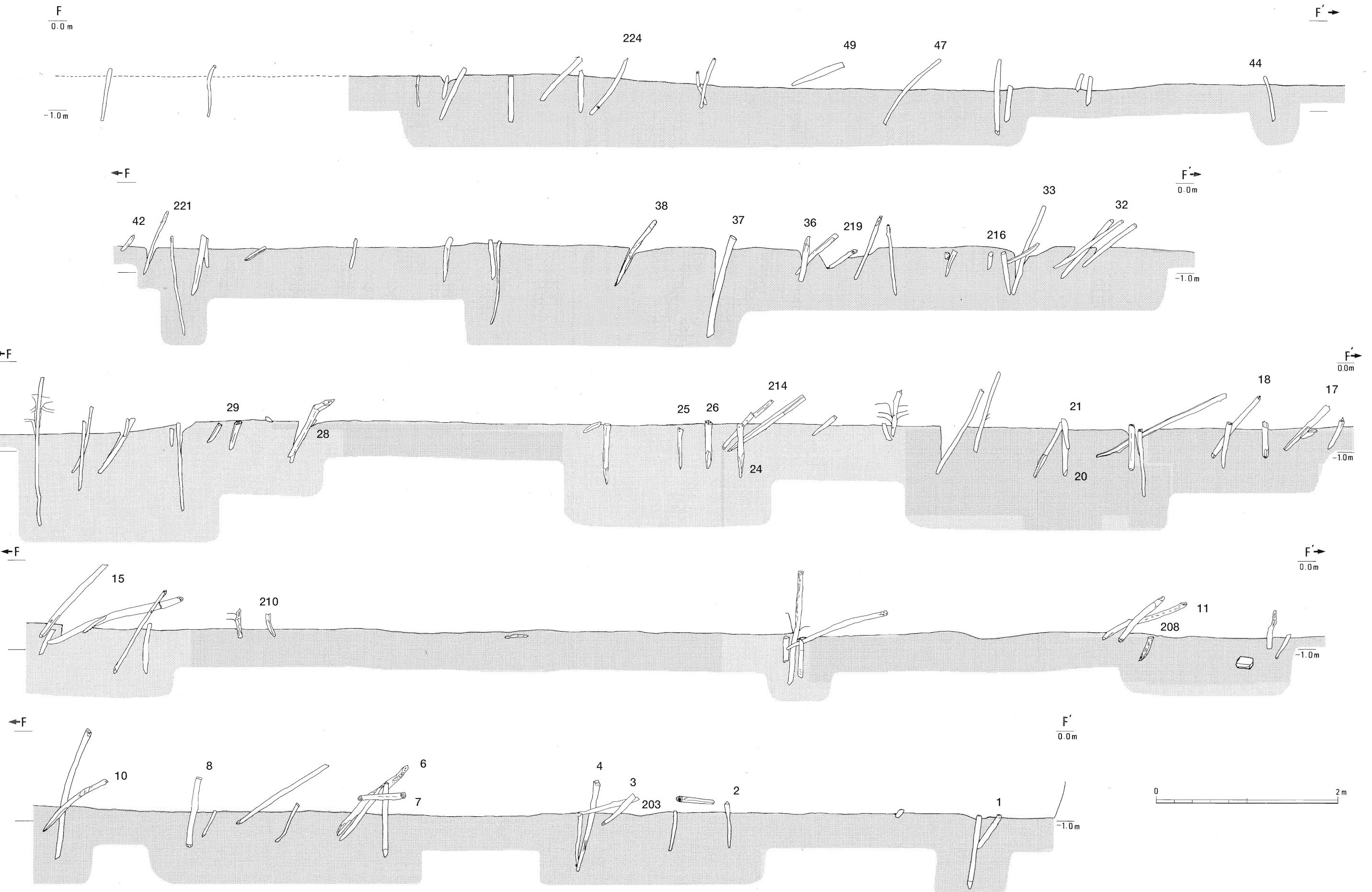
第10図 Ⅱ区青灰色砂層（粗砂）分布図 ($S=1/200$)

第2節 土層の堆積(第6~9図)

II区では、標高0m付近、標高-0.6m付近、そして標高-0.8m付近から砂礫層を確認した。これらの砂礫層は粗粒の中礫から細粒の中礫で構成されていた。砂礫層はいずれも調査区の全面ではなく東壁(現在の朝酌川)沿いに厚く堆積していた。また、調査区の北端や南端(第6、9図、B-B'、E-E')では、全体に砂礫層が薄く、特に青灰色泥層の上の砂礫層は調査区のごく一部にしか認められなかった。第10図は調査区の北側で確認された、標高-0.1~-0.2mの青灰色粗砂層の範囲である。第11図は調査区の中程の青灰色泥層上面の測量図である。泥層の測量には困難を極めた



第11図 II区青灰色泥層(古宍道湾の泥層)測量図(S=1/200)(10cmコンター 単位はm)



第12図 II区縄紋時代の杭実測図（立面図）(S=1/40) ※番号は実測図及び付図に一致

が、この図や東西方向の土層図（第6、9図）から、泥層の上面はあまり傾斜を持たず青灰色砂礫層に削られたことがうかがえる。

第3節 杭 列（付図-1～3、第12図、第30～32図）

調査区のほぼ全面から総数約300本の杭が検出された。場所により疎密を持ち、実際には列のように配列はされていないようであるが、第5図からは朝酌川に沿って北東一東西方向に長さ60m以上、幅10m以上にわたって杭が存在した可能性を持つ。杭には検出の時点から斜めに傾いているものや砂礫層を掘り切ってから検出される杭があった。傾いている杭は一様に現在の朝酌川の下流を向いて傾いており、その杭の傾いた部分には砂礫が詰まっていたことから、これらの杭は砂礫層の堆積する前に打たれ、砂礫層によって傾いたり頂部を欠損したと考えられる。なお土層の観察から、わずかではあるが砂礫層が堆積した後に打たれた杭が検出された（第12図中に下に凸の土層の表現をしているものと、第30～32図で表示しているもの）。これらの杭は、砂礫層の無い部分、あるいは砂礫層のごく薄い部分に打たれていた。

第4節 出 土 遺 物

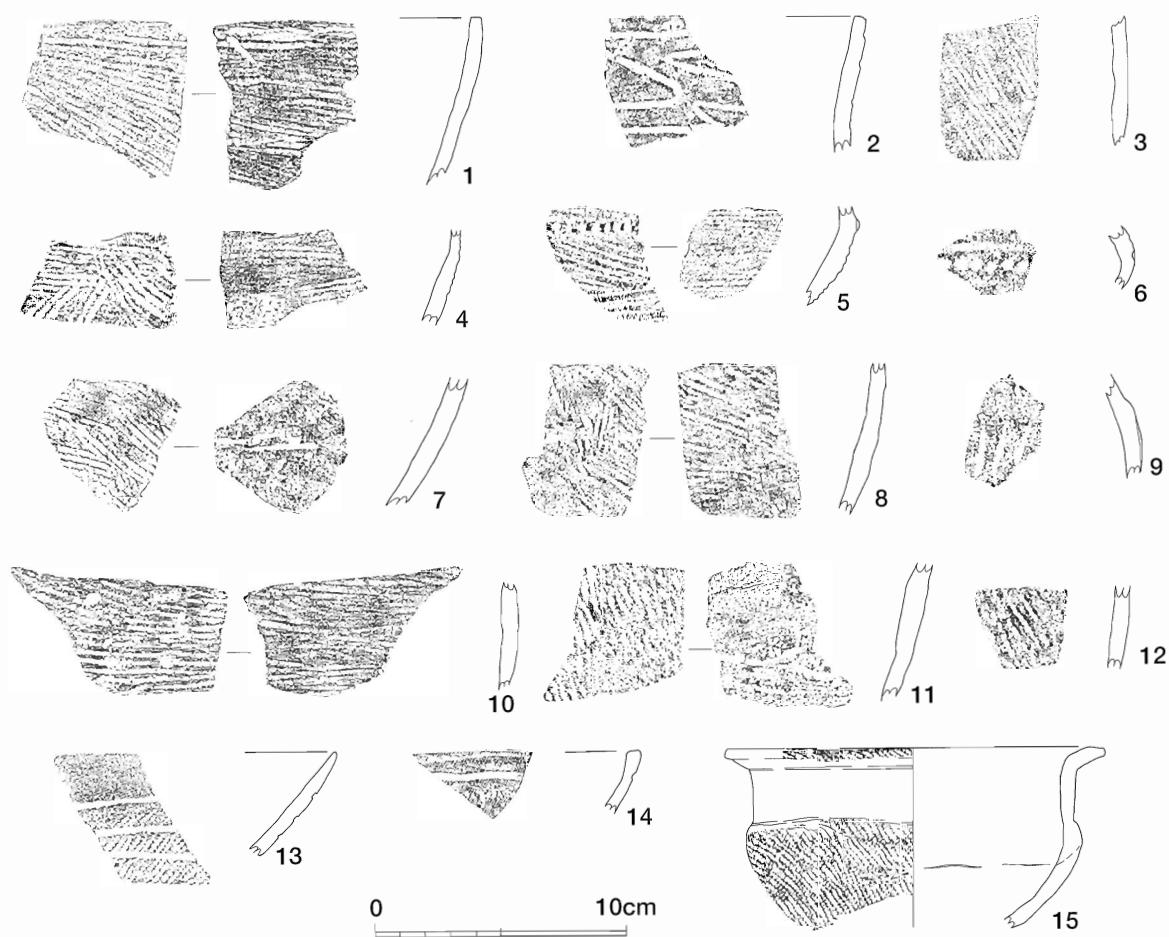
〈1〉 繩紋土器（第13図）

II区から出土した縩紋土器は、そのほとんどが青灰色砂礫層から出土した。大部分が小破片である。時期は、縩紋時代前期と後期に属するものがほとんどである。

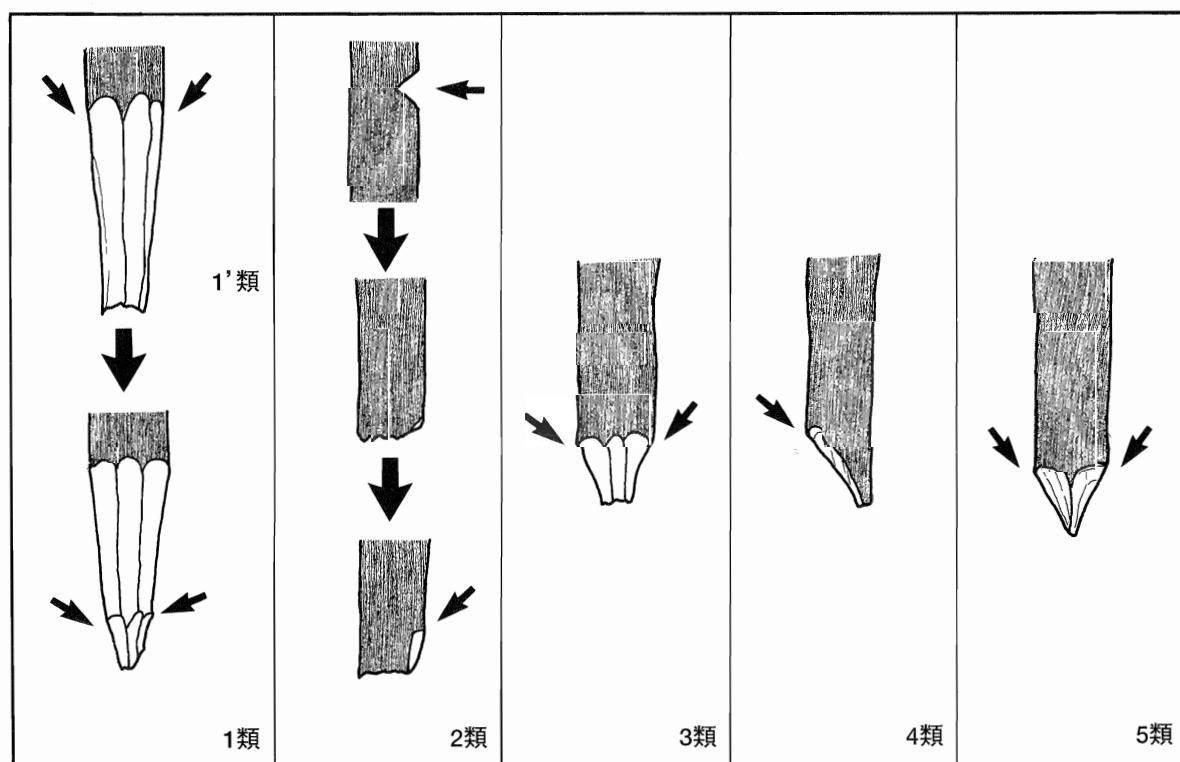
図示した縩紋土器には深鉢（1～12）と浅鉢（13～15）がある。深鉢は2以外は前期に属すると考えられるが、条痕調整（1、7、8、10）、縩紋（3、11、12）、押引文（4）、隆帶文（5）、刺突文（6）、爪形文（9）に分けることができる。

1は、内外面を条痕調整するが、外彎気味に大きく開く口縁部を持ち、口縁端部は面を持つ。4は外面に横方向の押引文を施し、その下には山形に押引文を施す。この工具は半截竹管状の工具を用いている。5は胴部最大径付近に小さな隆帶を持ち、その上を刺突する。隆帶の下には、山形に押引文を施す。6は同様に胴部最大径付近に竹管状工具による刺突を施し、その上下には沈線を施す。9も同様の器形であるが、突帶や刺突の代わりに、ヘラ状工具による爪形の文様を持つ。3は無節のRの縩紋を外面に施している。2は後期と考えられるが、わずかに外彎気味に口縁が開き、端部には若干の面を持つ。口縁端部のすぐ下には、1条の沈線を施し、その下には橢円形の文様が展開するようである。

浅鉢はいずれも後期と考えられる。13は、口縁部が大きく開く器形をしており、口縁端部は先細りで尖り気味になる。口縁の下には4本以上の沈線を施し、その間にはLRの縩紋を施す。施文の順番であるが、三つある帶の内、一段目と二段目では条の方向が異なっており、沈線を引いてから縩紋を施す「充填縩紋」であると考えられる。14は外彎気味に口縁部が開き、口縁部では若干肥厚する。口縁部の下には1条の沈線を施す。15は唯一全体の形がわかる土器で、口径を復元すると15cmを測る。胴部最大径付近に段を持ち、そこからほぼ垂直に頸部が伸び、口縁部は大きく開く。口縁端部と胴部には縩紋を施し、頸部にはミガキを施す。胴部内面には接合痕を残す。

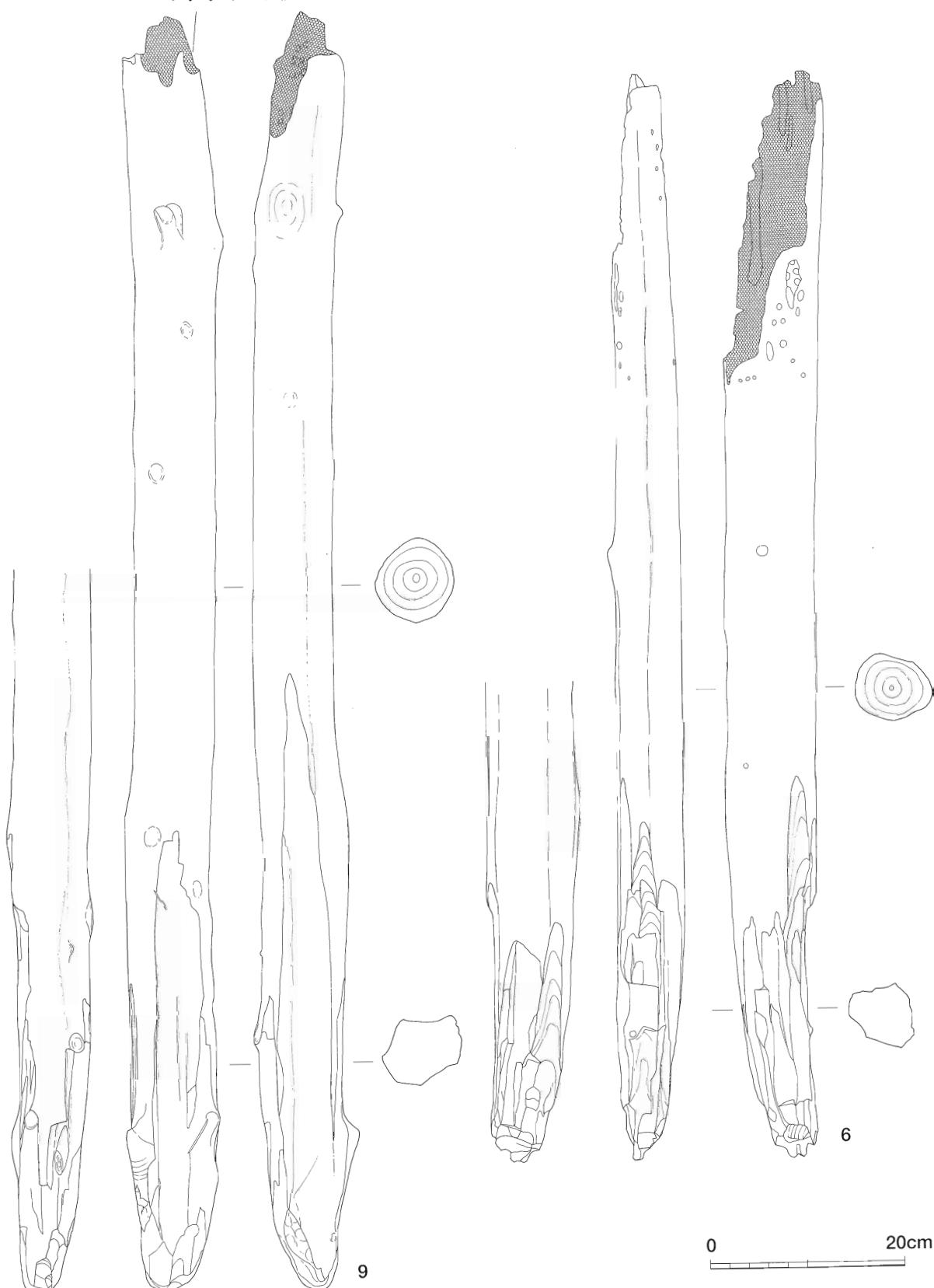


第13図 II区出土土器実測図 (S=1/3)



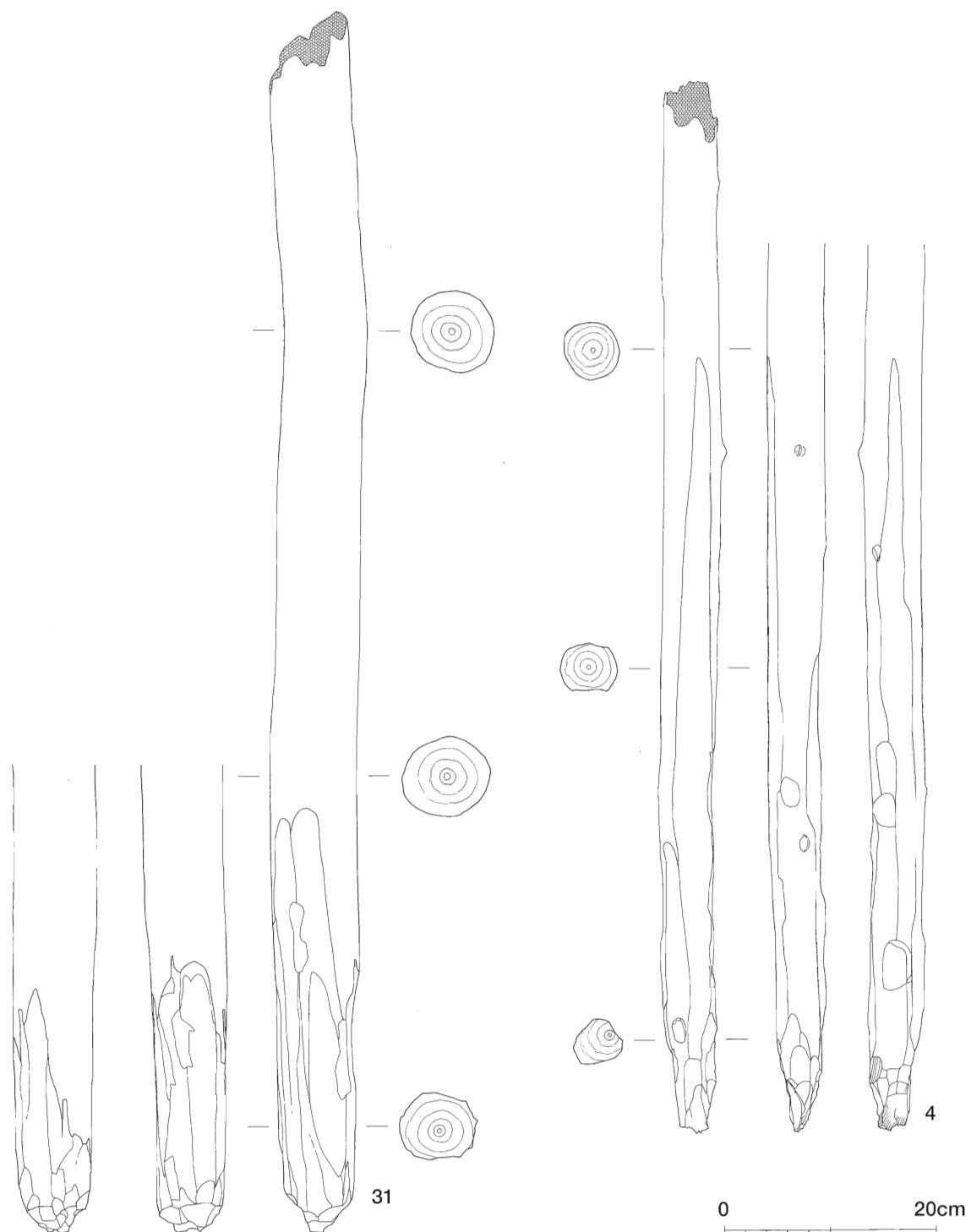
第14図 II区杭分類図

フナクイムシ痕



第15図 II区出土杭実測図(1) (S=1/6) ※番号は実測図及び付図に一致

II区で出土した縄紋土器のうち、前期に属するものは粗製土器が中心であり、明確な時期を断定できないものが多いが、多くは前期前半代に属すると考えられる。また、5は小さな隆帶から「西川津式B類」⁽¹⁾に属すると考えられる。一方後期の土器は縁帶文土器の段階と考えられ、13や15は「津雲A式」「崎ヶ鼻式」⁽²⁾の時期に属すると考えられる。

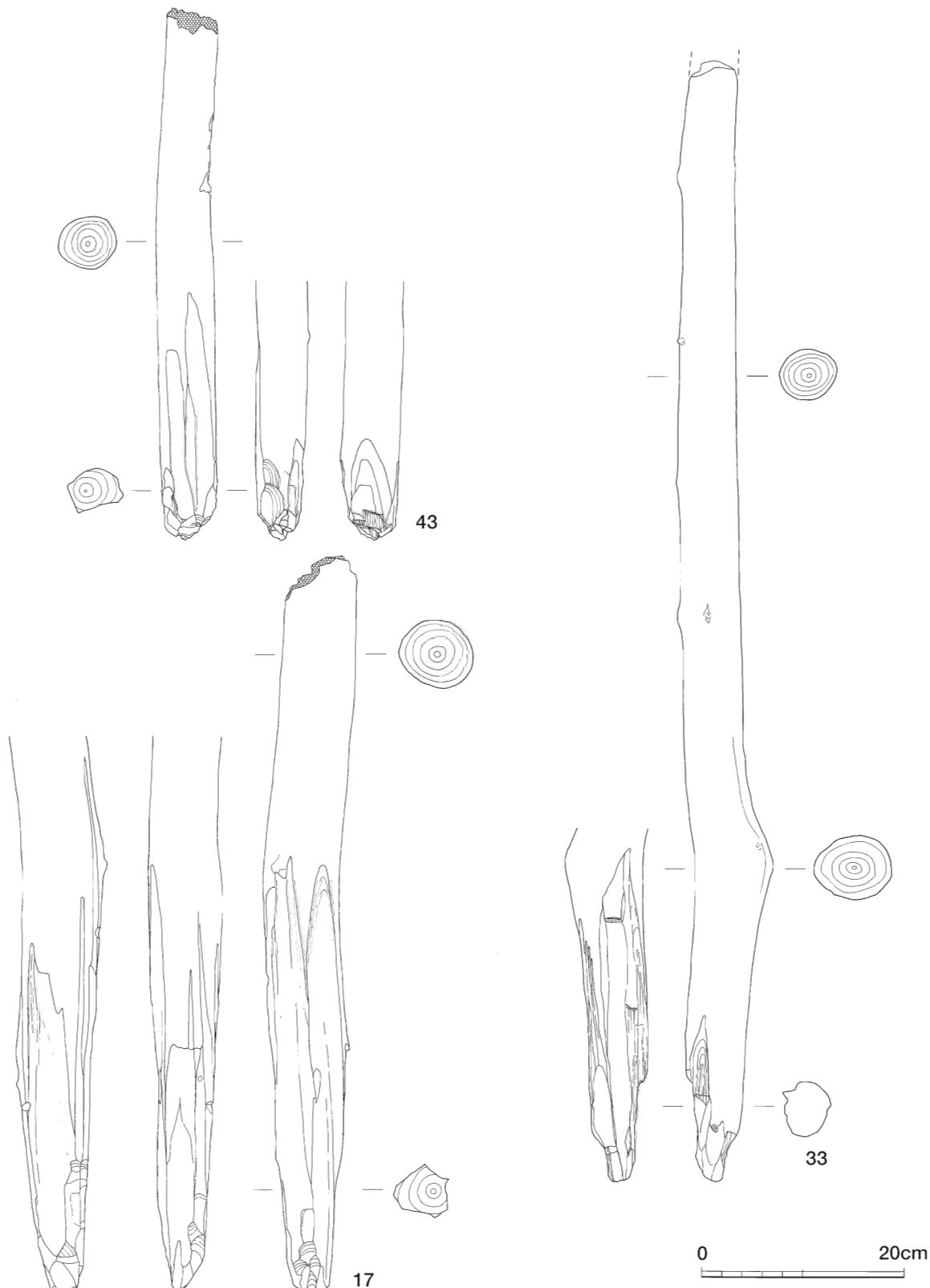


第16図 II区出土杭実測図(2) (S=1/6)

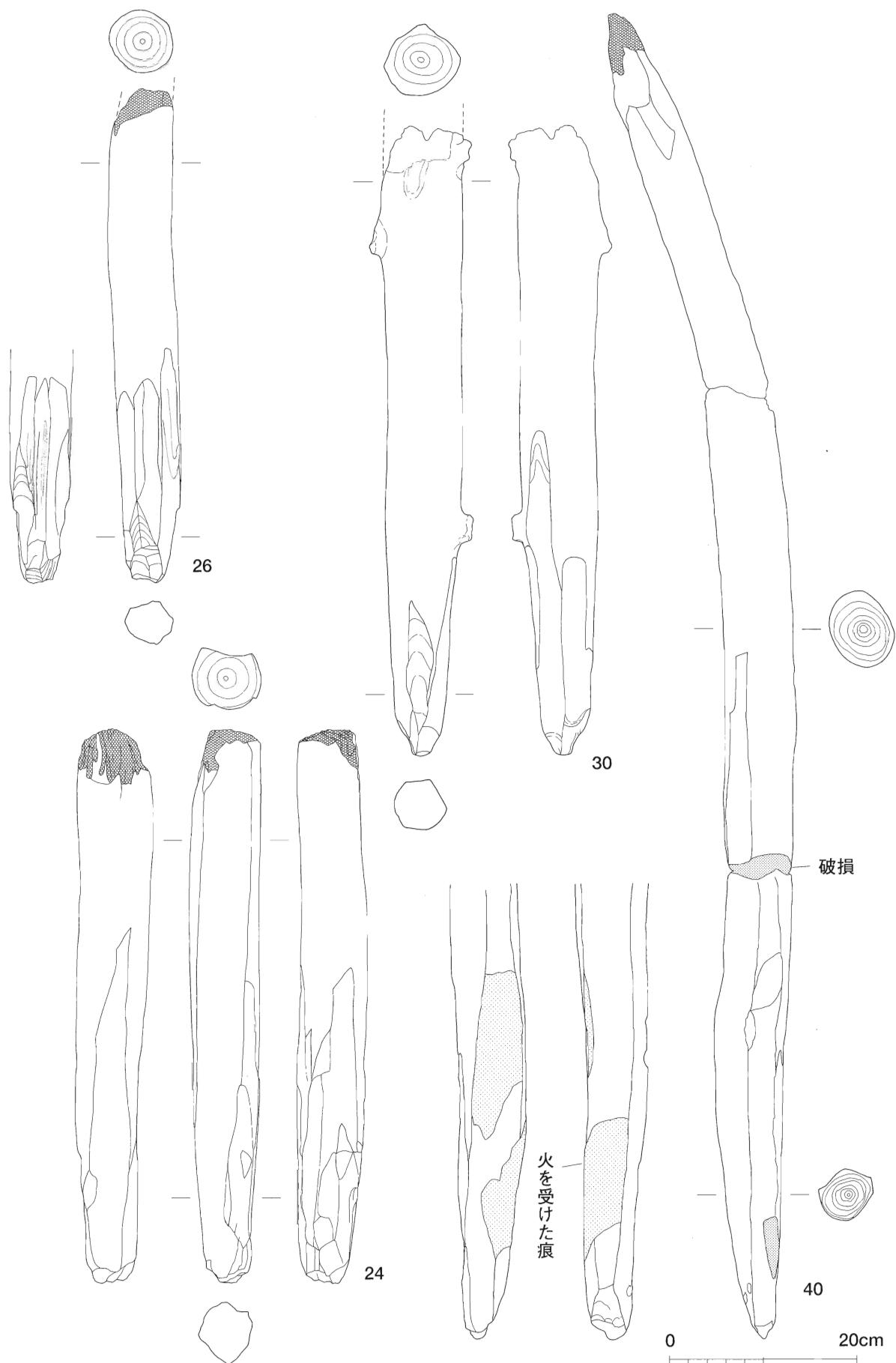
〈2〉 木 製 品

(a) 杭 (第15~26図)

杭は出土した杭全てを取り上げてカード化したが、時間の制約からその一部（約15%）を実測し検討するに留めた。



第17図 II区出土杭実測図(3) (S=1/6)



第18図 II区出土杭実測図(4) (S=1/6)

杭は全て芯を持ち、角材や転用材による杭は無かった。節や枝を持つものがあるので、基本的には幹や枝の部分を採取し、その際の加工を生かしつつ先端を若干加工して尖らせて杭として使用したと考えられる。また、杭の長さは検出した時点よりも長かったと推測されるが、砂礫層による破損のため本来の長さをうかがうことは不可能であるので、ここでの「長さ」とは「現存している長さ」という意味で用いる。杭の形態は、実際に幹や枝を折り取って採取した形態に左右されるので、杭の最終的な形態自体ではなく最終的な形に至るまでの加工の方法に着目して、六つに分類した(第14図)。

西川津1類(第15~19図)

杭の長さに対して比較的長く剥ぎ取るような加工を行い、その後に先端の部分に再度加工を行うもの。切断時の加工痕は、先端部への加工のためなくなっているものが多い。長い部分の加工痕と先端部の加工痕は形状が異なり、前者が1~2回の加工痕しか確認できないことが多いのに対して、後者の加工痕は前者より多く、連続して加工しているようである。なお、長く加工したのみで先端部へ加工を行わないものを「西川津1'類」とした(第20、21図)。

西川津2類(第21図47)

幹や枝を採取した時点から、小枝を払う程度の加工しか行わず、ほとんど杭としての加工を行わないもの。そのため先端の形状は不定型だが、加工痕の見られない部分が杭の半周以上を占めることがある。

西川津3類(第22~24図)

杭の長さに対して加工痕の長さは短いものが多いが、先端へ向けて赤鉛筆を削る時のように幾つかの方向から加工を行うもの。1~2度の加工しか行わないものや何度も連続して加工を行うものも見られる。埼玉県寿能遺跡の報告で「I類」⁽³⁾と分類されているものに形態が類似する。

西川津4類(第25図)

杭に対して一方向から加工を行い、側面から見ると先端へ向けて斜めになるもの。加工の反対側は加工痕が見られない。寿能遺跡の報告では「D類」と分類されているものに似る。

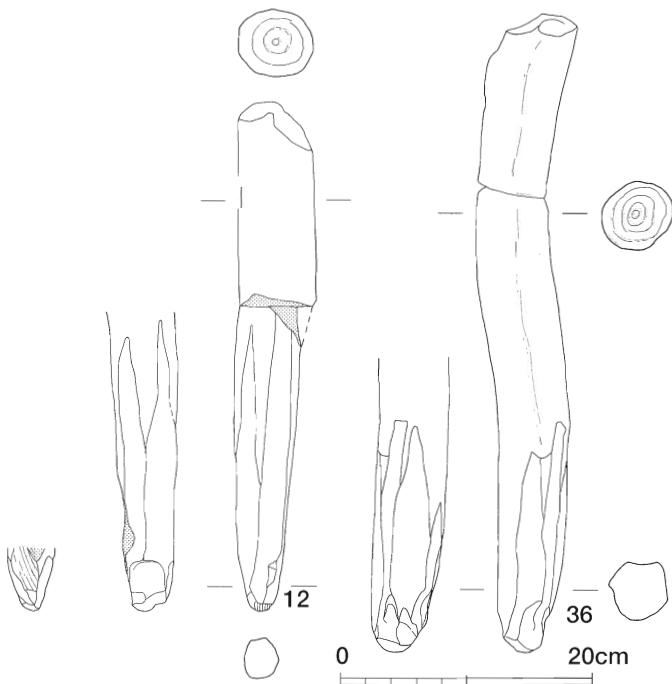
西川津5類(第24図)

相対する二方向から加工を行うもの。先端はやや尖り気味になることが多い。寿能遺跡の報告では「E類」に分類されているものに似る。

その他(第25、26図)

上述した1~5類の分類に属さないものを一括した。

なお、杭の番号は1から51が実測を行った杭、201から228が樹種同定を行った杭、C~Gが¹⁴C年代測定を行った

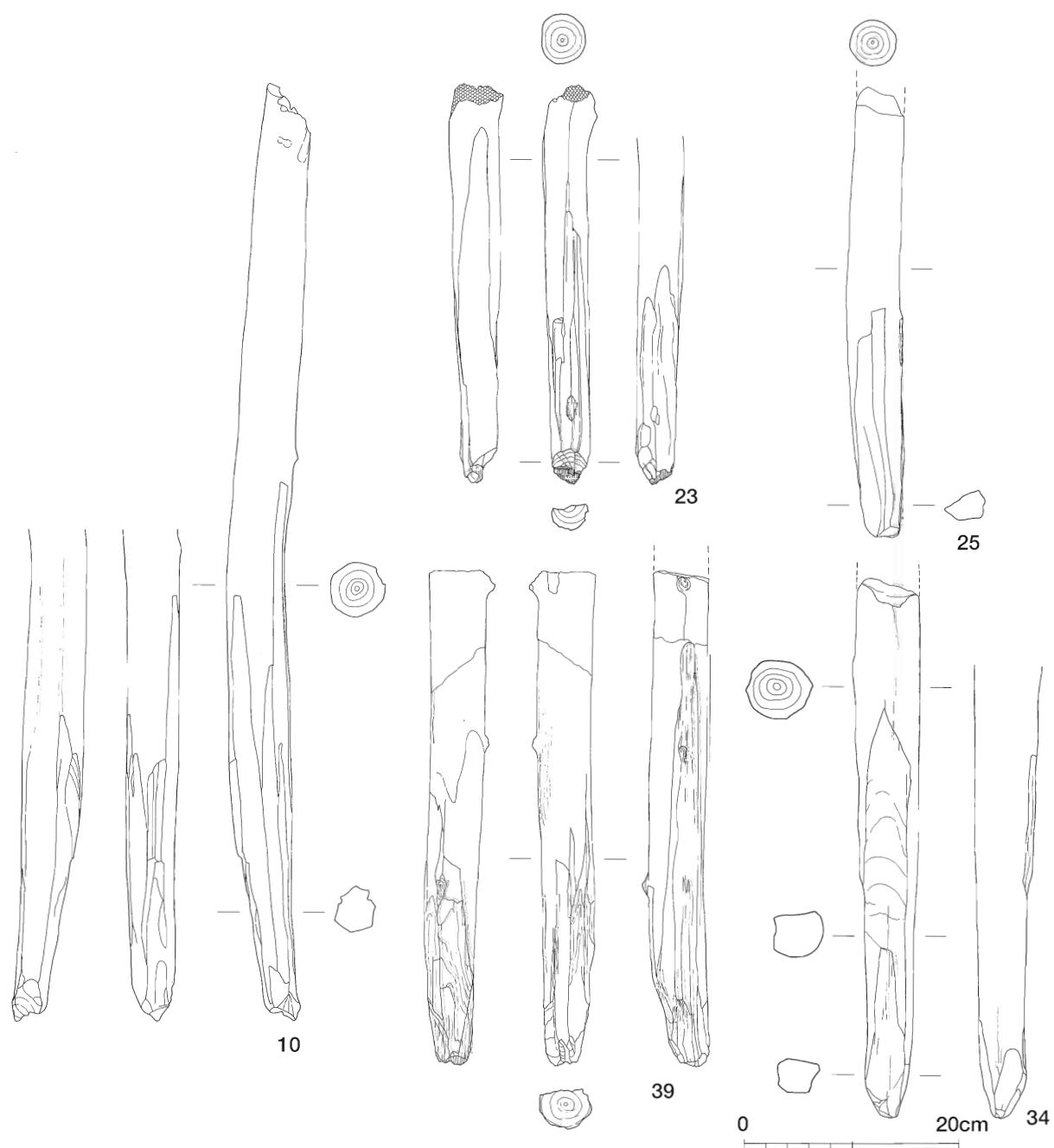


第19図 II区出土杭実測図(5) (S=1/6)

杭である。杭の番号は取り上げの際とは番号を変え、下流側から1とした。

第15～19図は1類の杭であり、その内第15～17図は硬質の杭、第18、19図は軟質の杭である。

第15図9は長く剥ぎ取るような加工を相対する二方向から行い、先端付近は三方向から先端へ向けて連続して加工を行う。連続した加工のため、加工痕はやや不明瞭になっている。頂部にはフナクイムシ痕を有し、その部分をスクリーントーンで示した。6は切断面を若干残し三方向から加工を行い、先端や加工部分の中程にも加工を行う。断面は楕円形である。先端から約45cmのところで変色する。第16図31は切断面を残し、七方向から加工を行う。頂部から三分の一程のところで変色する。4はやや細く、先端への加工は小さな加工痕が連続して見られる。第17図17の先端付近の加工は先端へ向けて連続して行う。先端から三分の一ほどのところで、加工部分の途中で変色する。33は三方から加工を行うが、一部加工部分の短い部分があり、1類の中ではやや雑な印象を受ける。

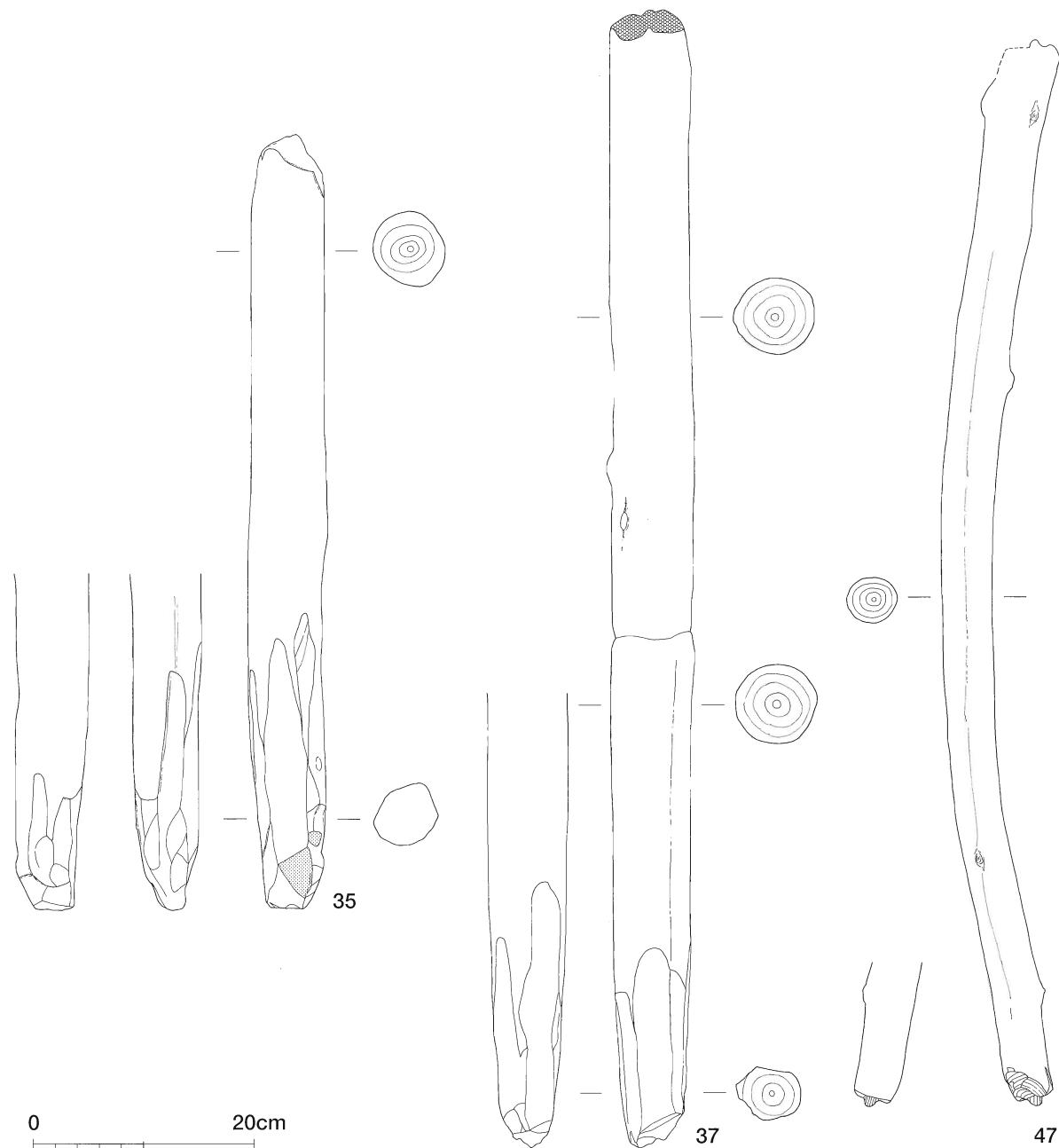


第20図 II区出土杭実測図(6) (S=1/6)

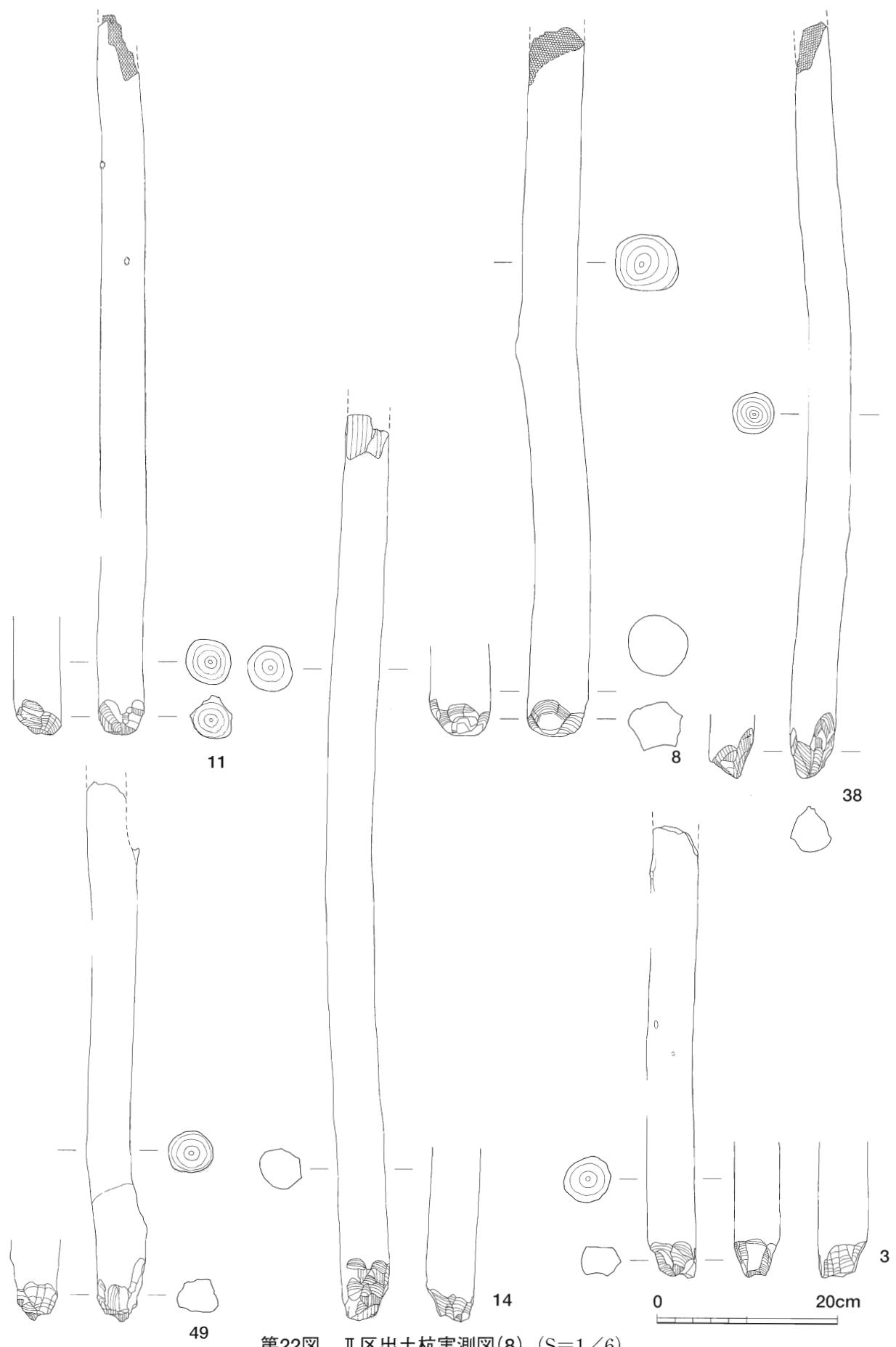
頂部から約25cmのところで変色する。43も二方向からしか長い加工を行わず、やや雑な印象を受ける。

第18図24は一方向のみ加工痕が頂部まで及ぶ。軟質のため加工痕は不明瞭である。26は五方向から加工を行う。30は三方向から加工を行うが、加工は全周しない。40は四方向のうち一方向は先端にのみ加工を行うので、1類の中ではやや雑な印象を受ける。先端部分の加工痕は楕円形で、切れ味が鈍かったのではないかと思われる。先端付近の二方向は火を受けて炭化している。樹種はクスノキ科である。第19図12の加工痕は不明瞭である。樹種はクスノキ科である。36はやや長めに四方向から加工を行い、先端にも加工を行うが、加工の回数は少ない。

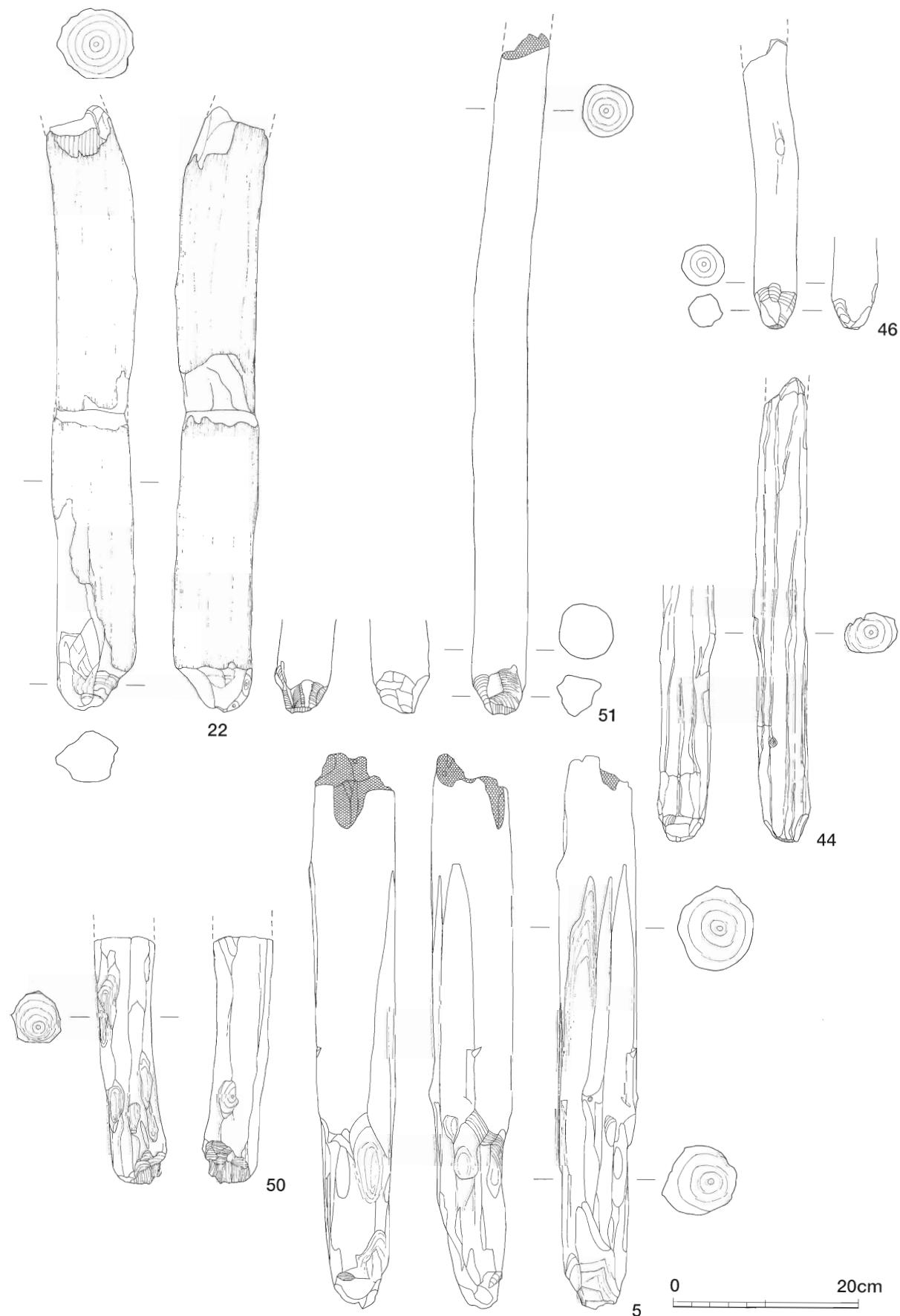
第20、21図は1'類である。第20図10は六方向から加工を行うが、加工の及ばない部分もあり、その部分は先端付近にのみ加工を行う。長く剥ぐような加工に続いて先端に加工を行わないので1'



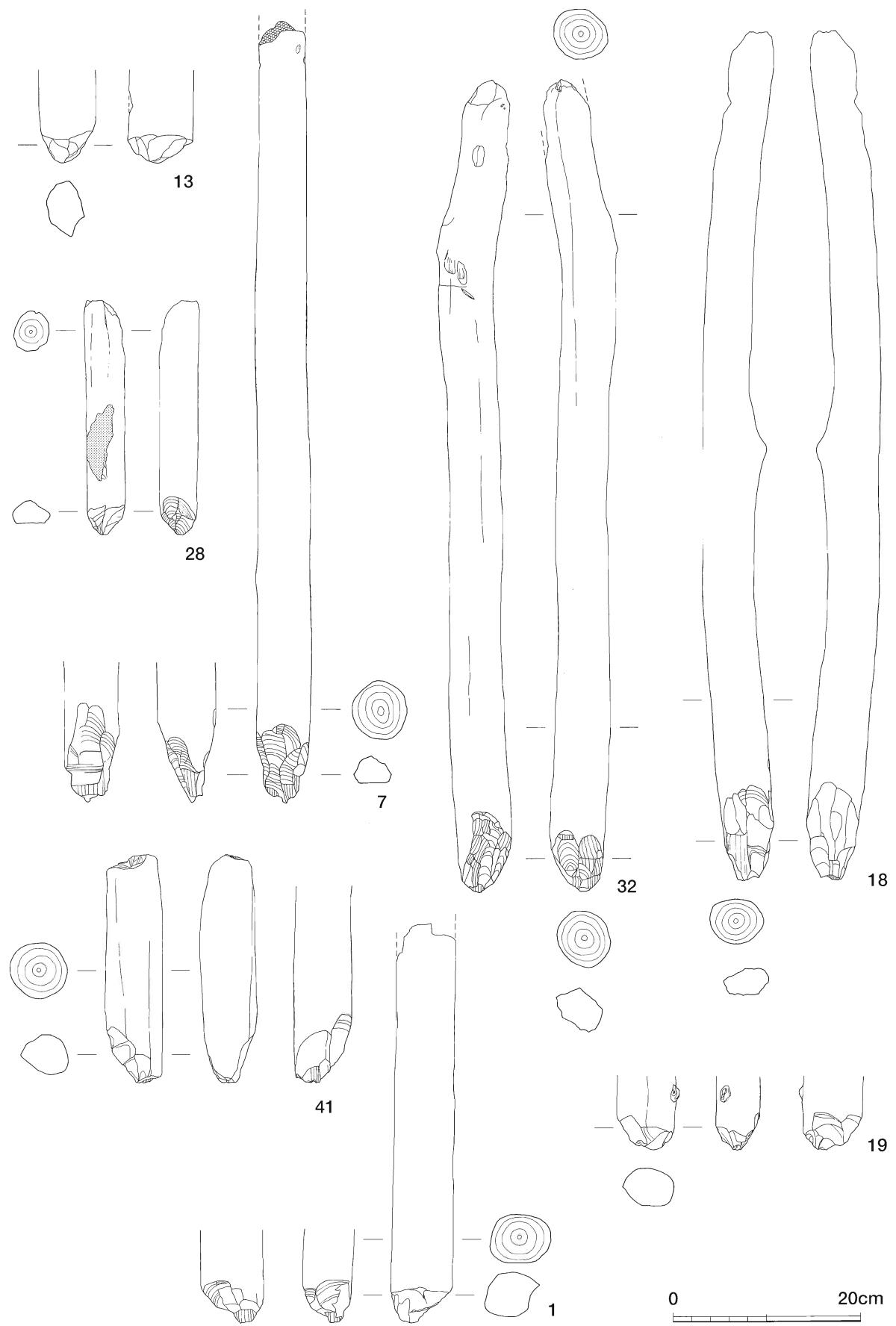
第21図 II区出土杭実測図(7) (S=1/6)



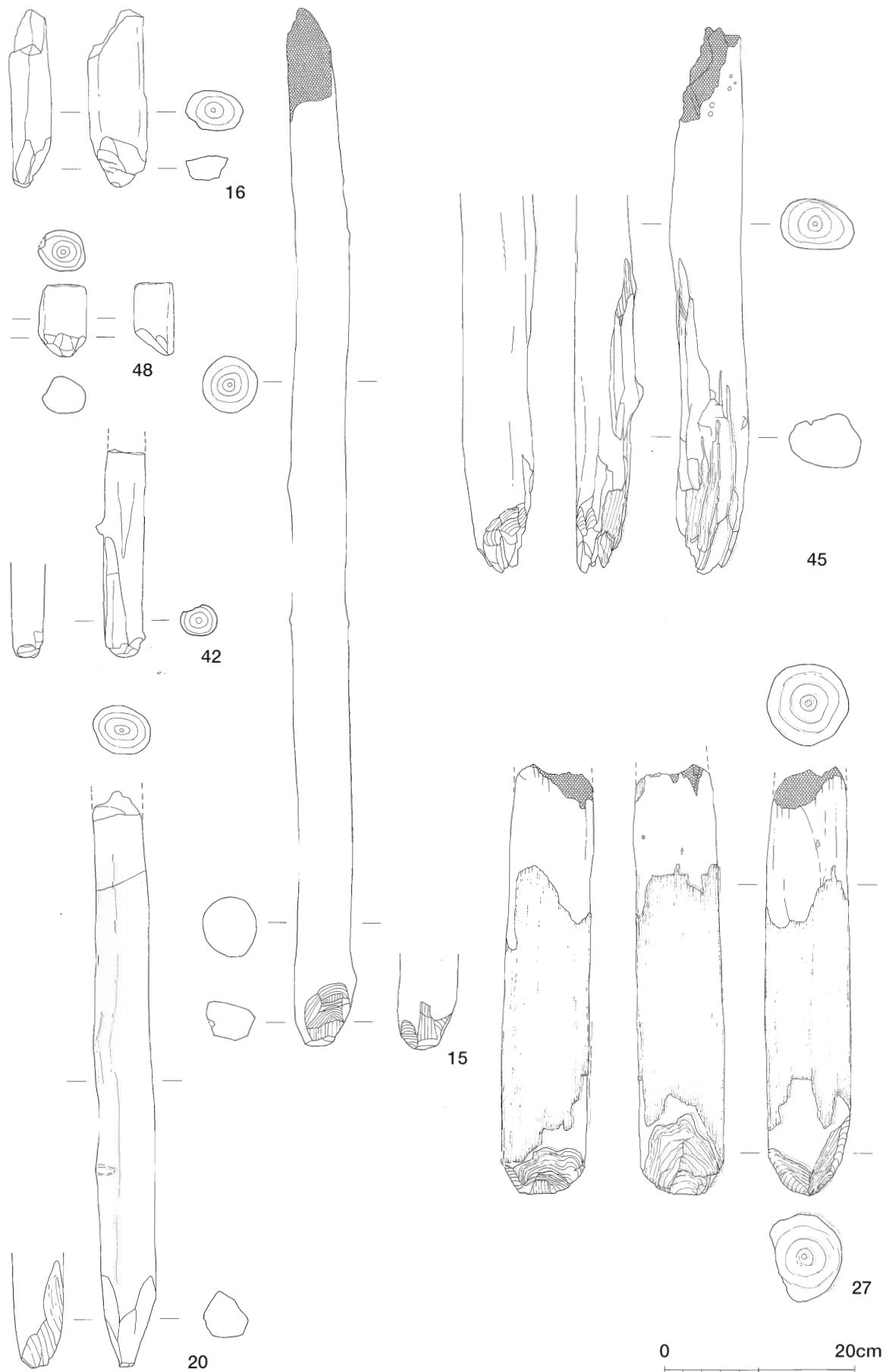
第22図 II区出土杭実測図(8) (S=1/6)



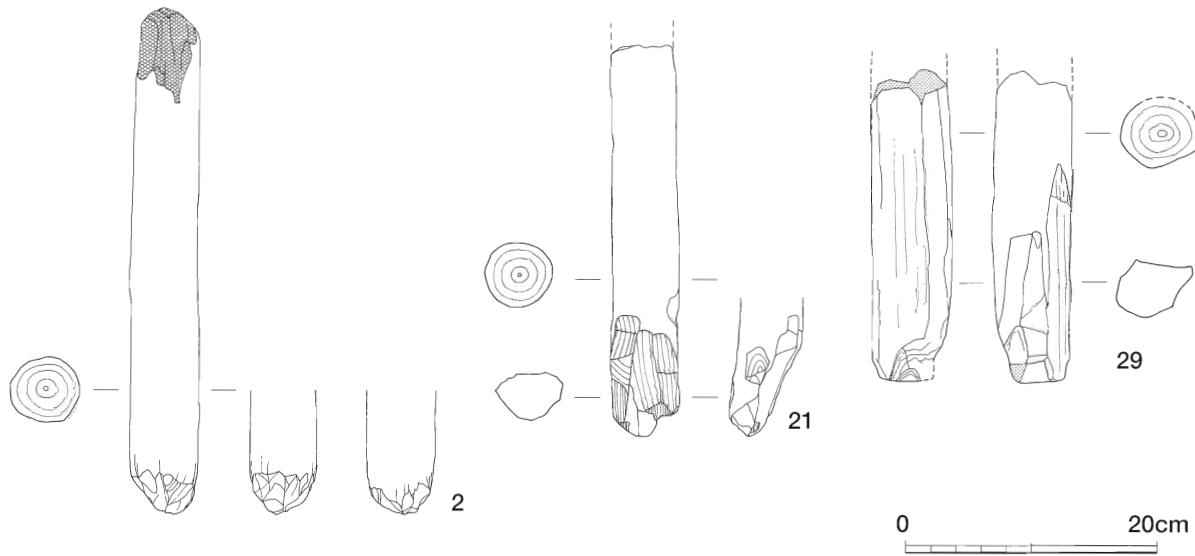
第23図 II区出土杭実測図(9) (S=1/6)



第24図 Ⅱ区出土杭実測図(10) (S=1/6)



第25図 II区出土杭実測図(11) (S=1/6)



第26図 II区出土杭実測図(12) (S=1/6)

類に含めた。頂部から三分の一ほどのところで変色する。樹種はヒノキである。1類の硬質の杭は質感が10に似るものがほとんどなので、1類の硬質の杭のほとんどがヒノキではないかと思われる。23は先端に半分ほど切断面を残し、三方向から長く加工を行った後、先端にわずかに加工を行うが、10同様1'類に含めた。39は四方向から加工を行う、典型的な1'類である。樹種はヒノキである。25、34、35、37は軟質である。25は二方向から加工を行うが、加工の及ばない部分もある。34は長い加工を隣り合う二面で行い、先端には加工を行うが加工の回数は少ない。第21図35は二方向から長い加工を行い、残りの部分には短い加工を先端にのみ行う。軟質のため加工痕は不明瞭である。37は五方向から長く加工を行うのみである。

第21図47は先端に半分ほど切断面を残し、一方からのみ二～三回の加工を行う。樹種はヒノキである。西川津2類に属するが、47以上に加工を行わない2類が存在する。

第22、23図は西川津3類である。第22図3は四方から加工を行うが、加工の及ばない部分が五分の一程ある。8は頂部から五分の一程のところで変色する。11は三方向から加工を行うが、加工の及ばない部分がある。14は一部に段をつけて加工を行う。38は三方向から加工を行う。杭のほぼ中程で変色する。49は四方向（考え方によっては五方向）から加工を行う。第23図51は三方向から加工を行う。これまで述べた3類の杭はいずれも硬質で、3、8、38、49、51の樹種はヒノキである。14も質感からヒノキであると思われる。第23図22は中程で折れているが、先端を鈍く尖らせており切断面はわずかに残る。樹種はクヌギである。44は腐食が進んでいるが、三方向から加工を行う。樹種はサカキである。46には加工の及ばない部分がある。樹種はヤブツバキである。

第23図5は四方向から長く剥ぐような加工を行い、先端よりはやや頂部寄りの部分から先端へ向けて切断面を残し赤鉛筆を削るような加工を行う。また、一部には長い加工が先端の加工の後に行われている。1類と3類の両者の要素が認められる。50も長い加工の後に切断面を残して加工を行うので、5同様1類と3類の両者の特徴を持つ。

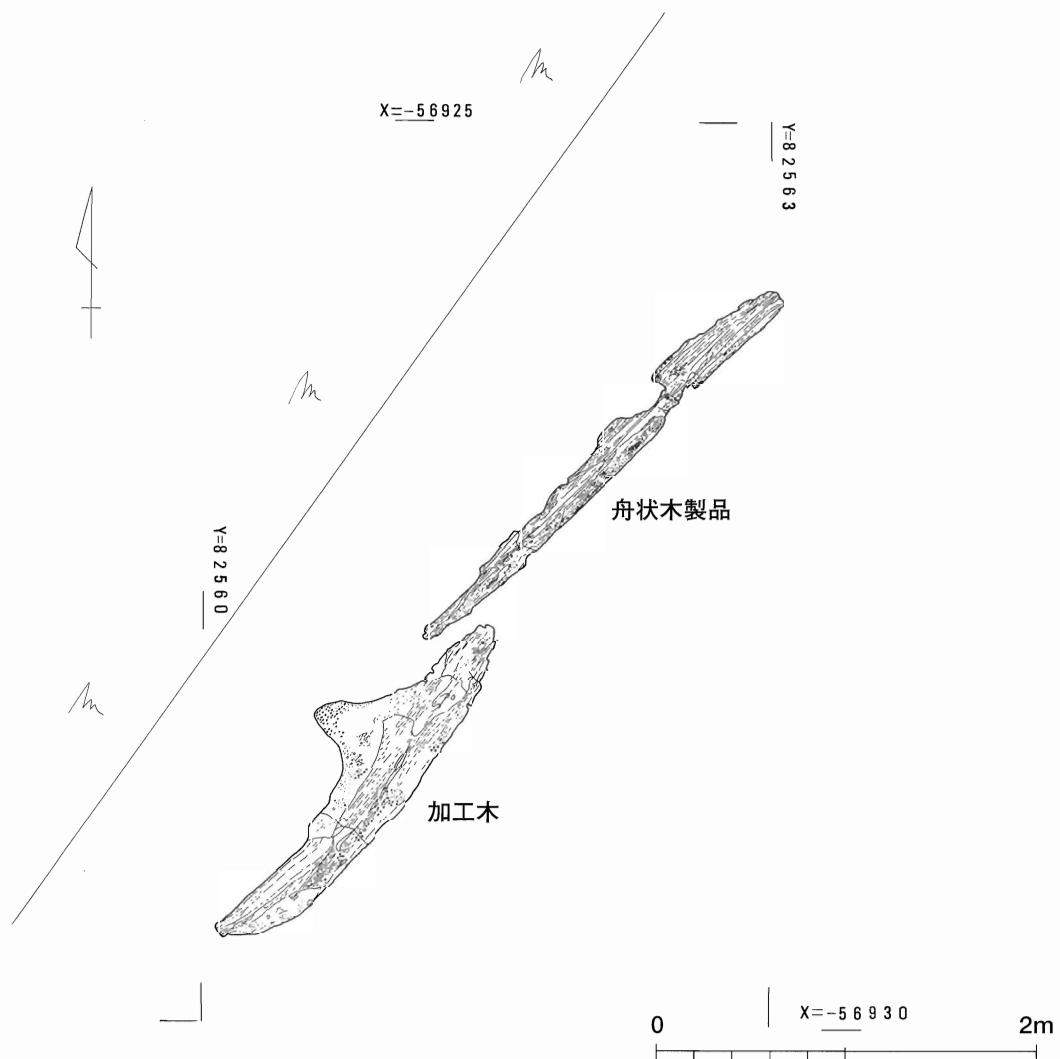
第24図は西川津5類である。第24図13は先端のみである。大まかにいって二方向から加工を行い、その中で連続して細かな加工を行う。18も大まかにいって二方向から加工を行い、その中で細かく

加工を行う。やや長めの加工は杭に対して浅い角度で加工し、先端付近の加工は角度をつけて尖らせるように加工を行う。28も二方向から加工を行う。32も二方向から加工し、それぞれ細かい加工を行う。樹種はヒノキである。

第24図1は先端に切断面を残し四方向から加工を行うが、やや先端が尖りその両側に加工部分が見られるという点で5類に属するのではないかと思われる。軟質のため加工痕は不明瞭である。樹種はクスノキ科である。7は先端に切断面をわずかに残して、三方向から加工を行う。加工は先端へ向けて、縦および横方向へ認められ、周囲から加工するものとは異なるので、先端の形状が似ている事から5類とした。樹種はヒノキである。41の加工の回数は数回で、加工の及ばない部分があるが、5類と考えた。19は切断面を残し、大まかにいって二方向から加工を行うが、短い加工も行うので、3類と5類の両者の要素を持つ。

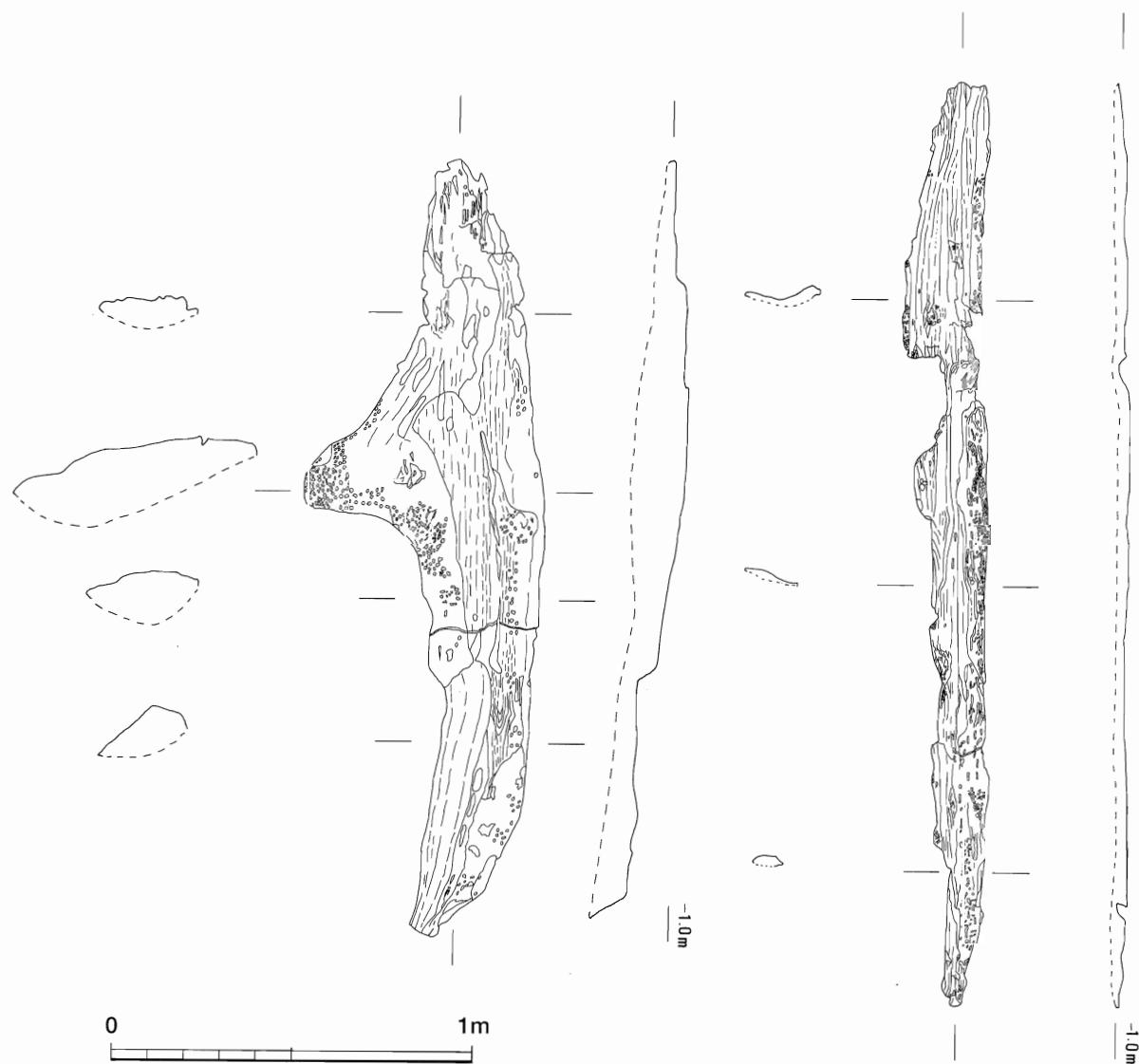
第25図16、48は4類である。16は切断したもの除いては、現存の長さが最も短い杭である。先端に切断面を残して、一方向からのみ加工を行う。樹種はサカキである。48は一方向からのみ一～二回の加工を行う。

第25図の16、48以外と第26図の杭は西川津1～5類の分類には属さない杭である。第25図15は二



第27図 II区舟状木製品及び加工木出土状況図 (S=1/40)

方向から加工を行うが、切断面を残す点が5類とは異なる。頂部から三分の一程のところで変色する。樹種はヒノキである。20は先端を若干尖らせ二方向から加工を行うが、ほぼ半周ほど加工の及ばない部分がある。頂部付近で変色する。27は先端を切断面を残さず鈍く尖らせ、三方向から加工を行う。切断面を残さない点が3類とは異なる。42は切断面をわずかに残し、剥ぐような加工を一方向から行い、先端付近のみ相対する二方向から加工を行う。樹種はクスノキ科である。45は断面は楕円形で、三分の一一周ほどは剥ぐような加工を行い、残りの部分は二方向から先端部分にのみ加工を行う。第26図2は加工痕が不明瞭であるが、切断面を残さず周囲から加工を行う。切断面を残さない点が3類とは異なる。21は切断面を残して二方向から加工を行うが、その内の一方向から主たる加工を行う。29は二方向から剥ぐような加工を行い、一方向からは先端付近のみ加工を行う。加工が相対する二方向にとどまらない点で、5類と異なる。樹種はクスノキ科である。



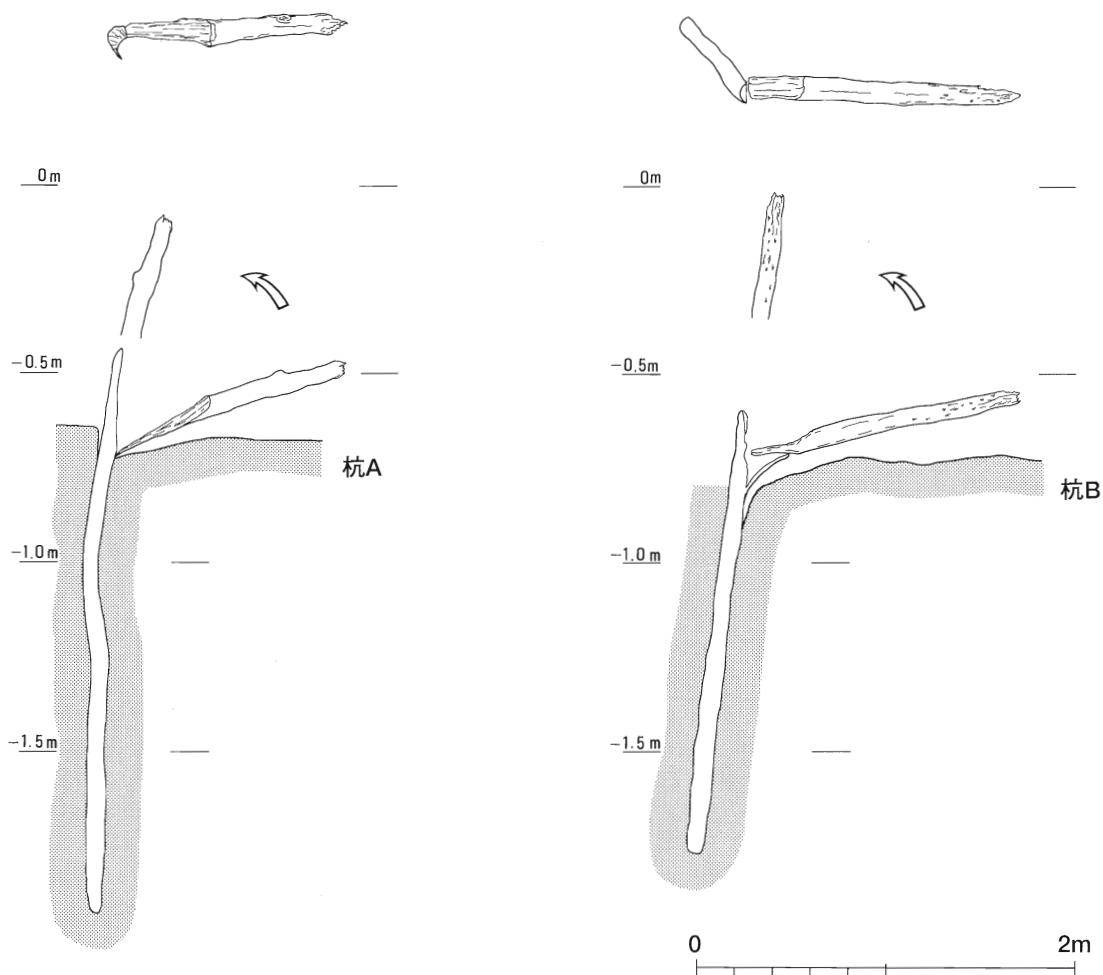
第28図 II区舟状木製品(右)及び加工木(左)実測図 ($S=1/20$)

(b) 舟状木製品（第27、28図）

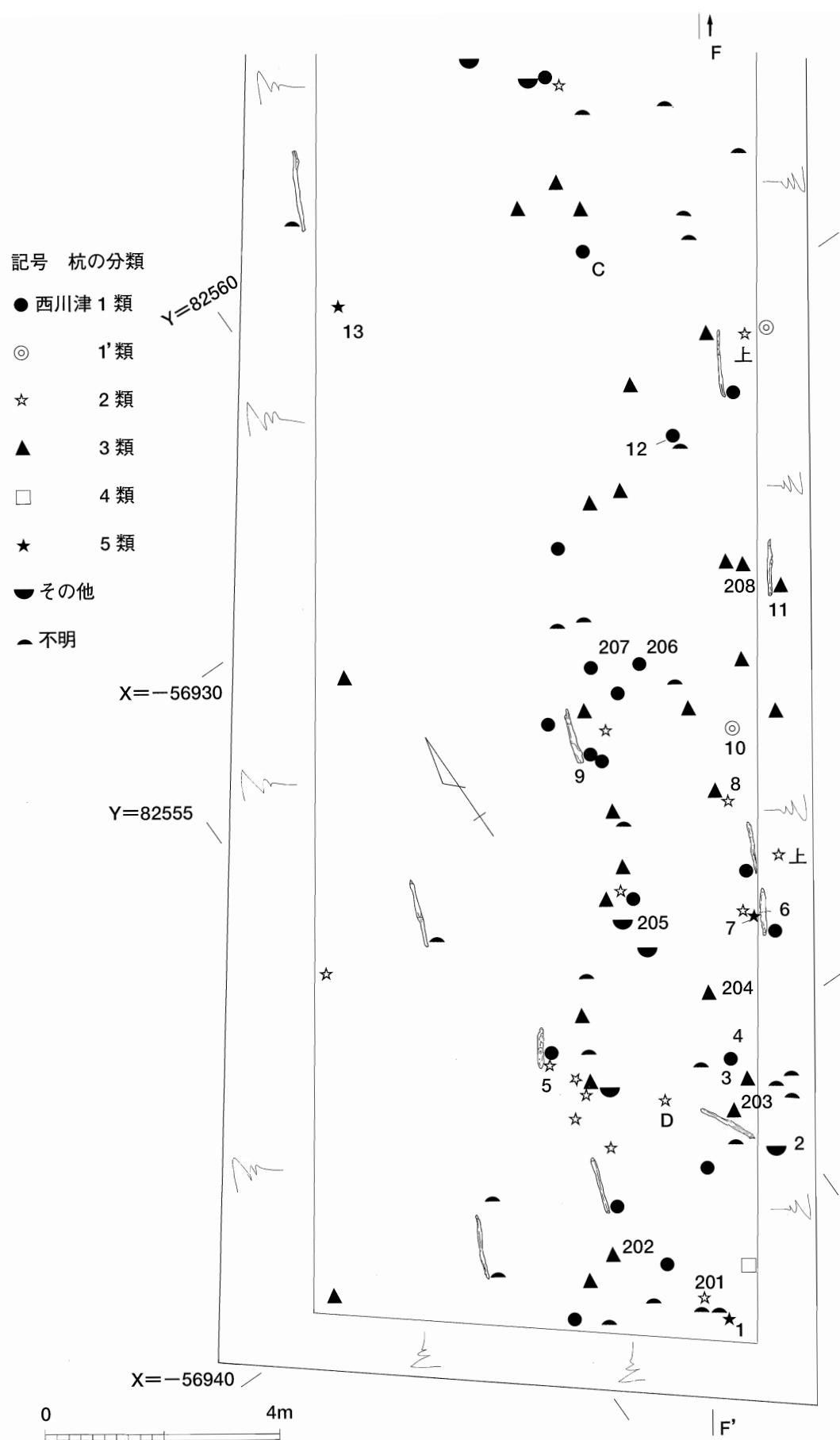
調査区の中央やや南寄りの西壁付近、青灰色泥層中の標高約-1.0mから検出された。全体に腐食が激しく、一部破損しているが、現存長258.0cm、現存最大幅21cm、厚さ5cmを測る。断面は「U」字形にゆるやかに湾曲している。流木の可能性が大きいが、断面形では丸木舟の一部であることも完全には否定できないことから「舟状木製品」と呼ぶことにした。全体にフナクイムシ痕がほぼ木目に平行して見られるので、廃棄されてから非常に長い間水面付近にあり、それが朽ちて泥中へ沈んだと推定される。青灰色泥層中にあることから、縄紋時代前期以前と考えられる。

また、この木製品に隣接する形で、同じ泥層中の標高-1.0mから加工木が検出された。木の枝分かれしている部分であり、現存長217cm、現存最大幅67cm、最大厚20cmを測る。これも全体に腐食が著しいが、一部に火を受けたような黒変した部分が見られたので、流木ではなく原材であると考えられる。時期は上の木製品同様、縄紋時代前期以前と考えられる。

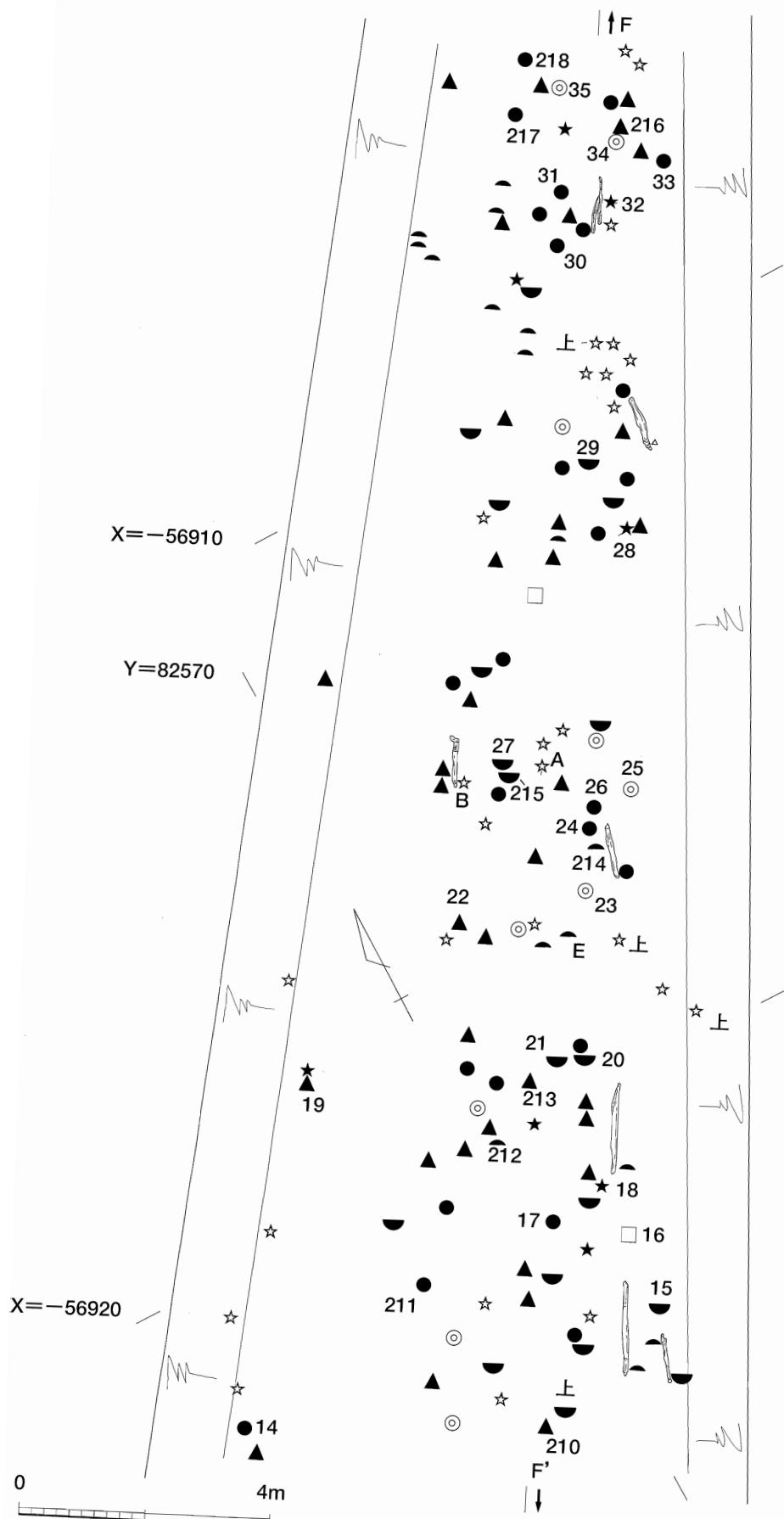
なお、舟状木製品の樹種は環孔材、加工木の樹種はケヤキである⁽⁴⁾。



第29図 II区縄紋時代の杭実測図（立面図）(S=1/40) ※番号は付図及び第31図に一致



第30図 II区杭種別平面図(1) ($S=1/100$) ※番号は実測図及び付図に一致



第31図 II区杭種別平面図(2) ($S=1/100$) ※番号は実測図及び付図に一致

第5節 小 結

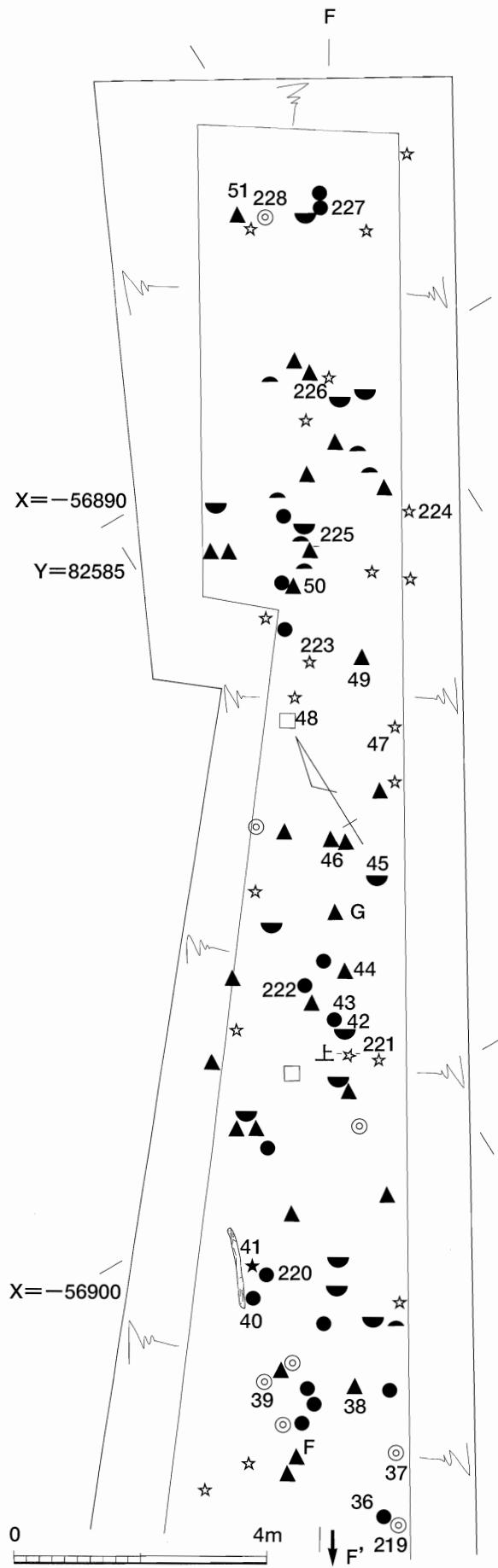
II区の調査では多数の杭などの木製品、少量の縄紋土器が出土した。

砂礫層から出土した土器は縄紋時代後期中葉（第13図15）を下限とする。また、¹⁴C年代測定結果では、最も古い値が5170±360BP (Gak-19545) であること（第8章）から、砂礫層が堆積する以前、つまり縄紋時代中期から砂礫層が堆積する後期まで長期間かけて形成されたと考えられる。また、試料採取時の汚染の可能性のあるものを除いた最も新しい値が2660±110BP (Gak-19548) であるが、杭の中には砂礫層の上から打たれたものが若干存在することから、この年代が杭の下限の時期を示すのではないかと考えられる。

II区の杭はほとんどが砂礫層によって折れていたが、第29図の杭A、杭Bでは折れた部分を復元することが出来た。杭Aでは杭の頂部が標高-0.1m付近に復元できる。また、杭Bでは、杭の頂部が標高0m付近に復元できるが、この杭にはフナクイムシ痕が標高-0.2mより上位で見られる。これらの事から考えて、この杭の大部分が打たれた時期には、当時の朝酌川の水面は標高-0.1m付近にあったことがうかがえる。これは、島根大学構内遺跡諸田地区の古地理の検討⁽⁵⁾と矛盾しない。

II区の杭の特徴として、

- ① 直径が4～8cmが中心で、10cmを越えるようなものが無い。
 - ② 杭の加工は先端のみである。
 - ③ 杭の位置には疎密があり、全体としてほぼ川に平行。
 - ④ フナクイムシの痕が見られることから、海水の入る場所、例えば河口付近の様な場所に杭があった。
- ①の特徴から、杭の上に施設があったことを積極的に肯定はできない。②の特徴も施設



第32図 II区杭種別平面図(3) (S=1/100)
※番号は実測図及び付図に一致

の存在には否定的な要素となる。平面図からは杭の配置に規則性が見られないので、魚を捕る施設、例えば鯵のような施設の存在ではないと考えられるが、③の特徴から、木道や川の流れを固定する施設ではなく、魚を捕るために、そして杭に付着した貝や海藻を採集するための簡単な施設という用途を想定したい。また、砂礫層の上から打たれた杭が数本検出されたが、それらの杭はいずれも西川津2類があるので、洪水によって破損した施設を簡単に復旧したのではないかと推測される。

註

(1) 縄紋前期の土器については、次の論文を参考にした。

宮本一夫 1987 「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」『京都大学構内遺跡調査研究年報昭和59年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター pp.67~90

井上智博 1991 「西日本における縄文時代前期初頭の土器様相－中国地方を中心として－」『考古学研究』第38巻第2号 考古学研究会 pp.80~111

井上智博 「山陰・西川津式土器の土器型式構造と恩原2遺跡土器群のしめる位置」 稲田孝司編 1996 『恩原2遺跡』 岡山大学考古学研究室 pp.168~175

網谷克彦 「北白川下層式土器様式」 小林達雄編 『縄紋土器大観』1 pp.322~325 小学館

(2) 縄紋後期の土器については、次の論文を参考にした。

泉 拓良 「縁帶文土器様式」 小林達雄編 1989 『縄紋土器大観』4 pp.273~276 小学館

千葉 豊 1989 「縁帶文系土器群の成立と展開－西日本縄文後期前半期の地域相－」『史林』第72巻6号 pp.103~146

(3) 埼玉県立博物館編 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書』 埼玉県教育委員会 p.786、図534を参考にした。

(4) 舟状木製品と加工木の樹種同定については、渡辺正巳氏に依頼した。

(5) 会下和宏編 1996 『島根大学構内遺跡発掘調査概報II（諸田地区1）』 島根大学埋蔵文化財調査研究センター p.13

中村唯史 1996 「島根県東部の完新世環境変化と低湿地遺跡」『島根県地学会会誌』11 pp.14~20

表1 西川津遺跡Ⅱ区出土土器観察表

挿図番号	器種	層位	形態・文様の特徴	調整	色調	備考
第13図1	深鉢	褐色泥層	口縁端部に面を持つ	条痕	淡灰色	
13-2	"	砂礫層	沈線の間にレンズ状の文様	ナデ	淡灰色	
13-3	"	"		無節の繩紋/ナデ	暗褐色	
13-4	"	"	山形の押引文	押引文/条痕	暗褐色	煤付着
13-5	"	"	隆帯の上に刺突、下は山形押引文	押引文/条痕	暗灰褐色	
13-6	"	"	円形の刺突	内面条痕?	暗褐色	
13-7	"	"		条痕?	淡濁灰褐色	
13-8	"	"		条痕	灰褐色	
13-9	"	"	ヘラ状工具による刺突	磨滅により不明	淡灰褐色	
13-10	"	"		条痕	暗灰色	
13-11	"	"		繩紋/条痕?	淡灰褐色	
13-12	"	"		繩紋/ナデ?	淡灰白色	
13-13	浅鉢	"	4条の沈線の間に繩紋	ナデ/ミガキ	暗茶褐色	
13-14	"	"	口縁端部で若干肥厚	ナデ	暗褐色	
13-15	"	"	口頸部と頸胴部の境に段 口唇部と胴部に繩紋	ナデ	暗灰褐色	

表2 西川津遺跡Ⅱ区出土杭観察表

杭番号	挿図番号	取上番号	長さ(cm)	最大径(cm)	形態の特徴	分類	刃部最大幅	備考
1	第24図	90	43.9	6.4	切断面残し、四方から加工	5類	1.6(cm)	クスノキ科
2	第26図	96	40.6	5.4	加工痕不明瞭	その他	1.3	軟質
3	第22図	80	49.9	5.1	切断面残し、四方から加工	3類	2.1	ヒノキ
4	第16図	79	99.0	5.4	切断面残し、二方から長く加工。 先端は三方から加工	1類	2.6	硬質
5	第22図	71	59.5	8.8	四方から長く剥ぐ加工。やや 先端より遠い所から再度加工	1類と 3類	3.0	硬質
6	第15図	62	111.6	7.7	若干切断面残し、三方から長 く加工を行い、更に先端にも 加工	1類	2.8	硬質
7	第24図	61	83.8	6.2	切断面をわずかに残す。先端 は縱・横方向に加工	5類	1.8	ヒノキ
8	第22図	54	77.9	6.5	大きく切断面を残し、六方か ら加工	3類	2.3	ヒノキ
9	第15図	52	130.7	8.7	相対する二方より長い加工を行 先端には三方から加工	1類	4.5? (不明瞭)	硬質 節が多い
10	第20図	43	86.0	5.1	切断面残し、六方から加工。	1'類	2.5	ヒノキ
11	第22図	39	79.2	5.0	大きく切断面を残し、三方か ら加工。未加工部分残す。	3類	2.2	硬質
12	第19図	114	41.0	6.0	わずかに切断面を残し、五方 から加工。更に先端にも加工	1類	2.6	クスノキ科
13	第24図	100	(10.0)	6.7	二方から加工。それぞれの中 で更に加工。	5類	2.0	軟質
14	第22図	115	99.8	4.8	切断面を残し、先端は段をなす。 三方からやや長く、二方から 短く加工。	3類	2.2	硬質
15	第25図	146	109.4	6.7	切断面を残し、二方から加工	その他	4.5	ヒノキ
16	第25図	257	18.8	6.0	先端に切断面を残して、一方 から加工	4類	2.7	サカキ
17	第17図	151	72.8	7.2	五方から長く剥ぐような加工 を行い、先端には異なる四方 から加工を行う。	1類	2.8	硬質
18	第24図	155	90.5	5.5	先端にわずかに切断面を残し、 大きく二方から加工を行い、 その中で連続して加工。	5類	2.7	硬質
19	第24図	137	(7.5)	6.2	先端を残して、二方から加工	3類と 5類	3.0	やや軟質
20	第25図	161	60.4	5.9	二方から加工を行うが、加工 の及ばない部分を残す。	その他	2.9	軟質

21	第26図	163	31.5	5.2	先端に切断面を残し、主に片面から加工	その他	2.4	軟質 樹皮残る
22	第23図	176	65.4	8.1	先端に切断面をわずかに残し、四方から加工	3類	3.1	クヌギ 樹皮残る
23	第20図	180	37.0	4.5	先端に切断面を残し、三方から加工	1'類	2.8	硬質
24	第18図	182	58.8	7.2	三方から剥ぐように加工し、更に先端も三方から加工。	1類	5.0	軟質
25	第20図	185	41.8	5.1	先端に切断面を残し、二方から加工。未加工部分残る。	1'類	不明	軟質
26	第18図	186	52.9	6.7	剥ぐような長い加工の後、先端にも加工。	1類	2.8	軟質
27	第25図	192	44.8	8.5	切断面を残さずに三方から加工。先端は鈍く尖る。	その他	4.3	樹皮残る
28	第24図	258	25.3	3.7	わずかに切断面を残し、二方から加工。	5類	1.7	軟質 樹皮残る
29	第26図	217	25.0	6.2	三方から加工。	その他	2.0～2.8	クスノキ科 樹皮残る
30	第18図	235	66.9	7.9	剥ぐような加工を三方から行い、先端は二方から加工。	1類	3.6	軟質
31	第16図	237	115.1	8.2	七方から剥ぐような加工の後、先端にも加工。	1類	2.9	硬質 樹皮残る
32	第24図	239	87.3	5.8	先端に切断面を残さず、二方から加工。その中で更に加工。	5類	1.8	ヒノキ
33	第17図	250	111.5	7.7	剥ぐような加工を三方から行い、更に先端に加工。	1類	2.8	ヒノキ フナクイムシ痕
34	第20図	246	49.9	6.0	長い加工を二方から行い、先端はわずかに加工。	1'類	4.2	軟質 樹皮残る
35	第21図	240	69.3	6.7	切断面残す。二方から長い加工。先端へわずかに加工。	1'類	2.5	軟質
36	第19図	502	51.0	5.8	切断面を残さず、四方から加工し、更に先端にも加工。	1類	2.8	軟質
37	第21図	503	102.8	7.2	切断面を残し、五方から長く剥ぐような加工。	1'類	2.2	軟質
38	第22図	504	83.2	4.8	先端に切断面を大きく残し、三方から加工。	3類	2.6	ヒノキ
39	第20図	525	45.6	3.3	四方から剥ぐような加工。	1'類	3.3	ヒノキ
40	第18図	528	140.7	8.1	四方の内三方から剥ぐような加工を行い、一方は先端のみ加工。一部火を受け炭化。	1類	4.0	クスノキ科
41	第24図	578	24.3	6.0	切断面を残し、二方から加工。加工の及ばない部分有り。	5類	3.0	軟質
42	第25図	515	27.1	4.1	わずかに切断面を残し、先端は二方から加工。	その他	2.2	クスノキ科
43	第17図	516	53.3	5.6	二方から加工	1類	3.4	ヒノキ
44	第23図	517	49.3	5.5	切断面を残し、三方から加工	3類	2.9	サカキ
45	第25図	598	57.8	8.4	三方の内一方に剥ぐような加工を行い、二方から先端のみ加工。	その他	2.5	硬質
46	第23図	544	31.4	4.6	切断面を残し、四方から加工。加工の及ばない部分残す。	3類	1.5	ヤブツバキ
47	第21図	550	96.3	4.5	切断面を残し、一方向のみから加工。	2類	2.0	ヒノキ フナクイムシ痕
48	第25図	551	(7.5)	4.2	一方向のみから加工	4類	1.7	軟質
49	第22図	552	59.2	4.8	先端に大きく切断面を残し、四（五？）方から加工。	3類	2.1	ヒノキ フナクイムシ痕
50	第23図	564	26.5	5.1	先端に大きく切断面を残し、長く剥ぐような加工の後先端にも加工。	1類と 3類	3.8	硬質
51	第23図	587	73.2	5.9	先端に切断面を残し、三方から加工。	3類	1.5	ヒノキ

※長さ、最大径は現状での数字である。

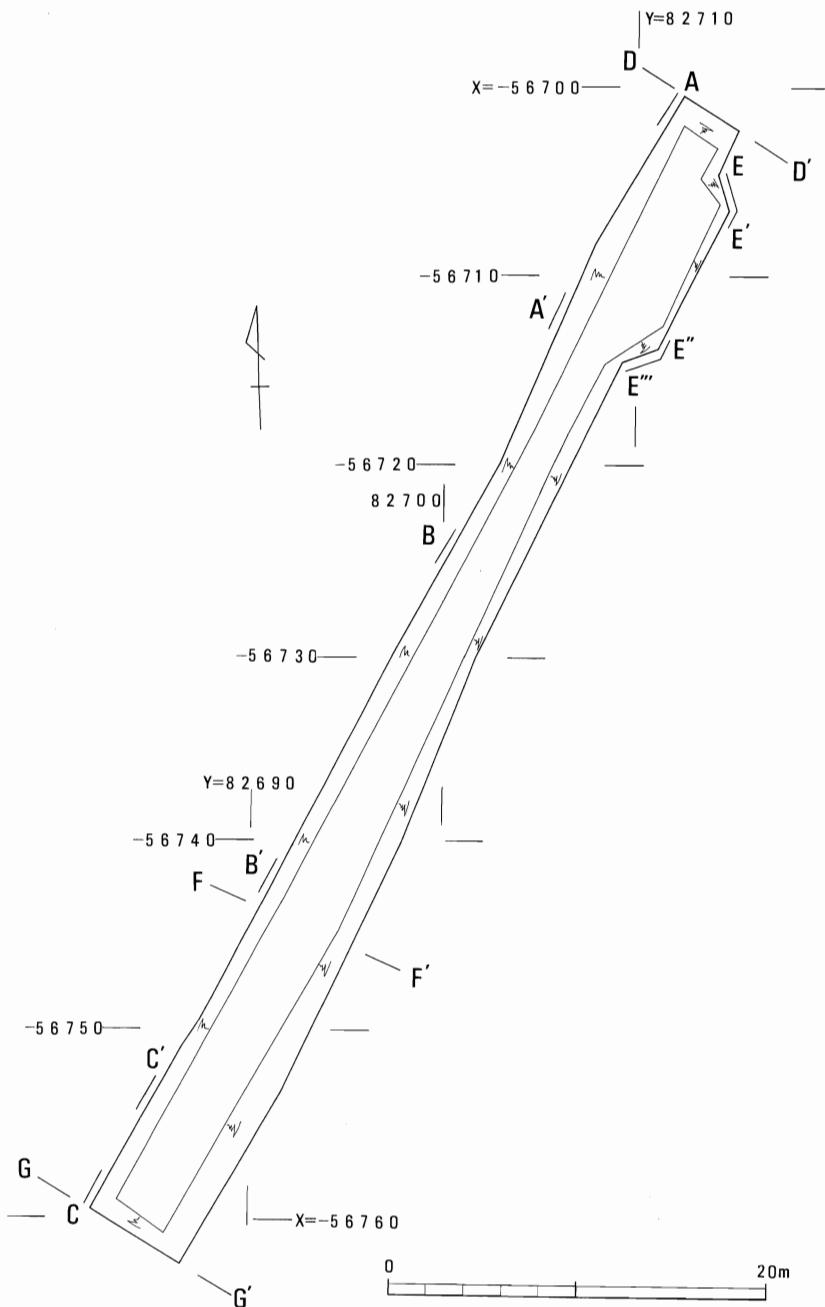


発掘調査前の西川津遺跡Ⅱ区（南東から：1991年撮影）

第3章 西川津遺跡Ⅲ区左岸の調査

第1節 調査の経過

Ⅲ区左岸は、「西川津遺跡Ⅲ区」として設定した学園橋～嵩見橋の間の河川敷のうち、左岸にあたる部分である。調査区は河川敷の上流部分に設定した。長さ約66m、幅4～6m、調査面積約350



第33図 西川津遺跡Ⅲ区左岸調査区位置図 (S=1/400)

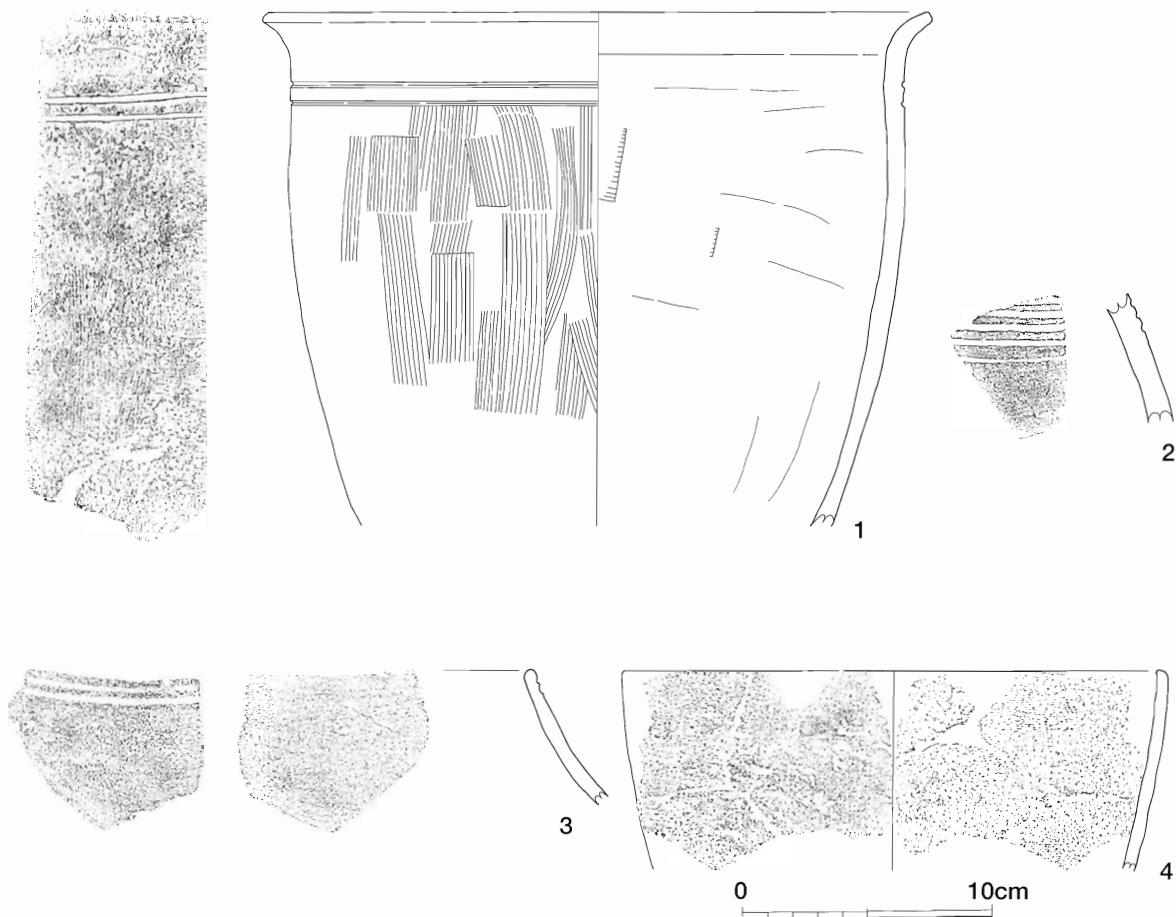
m^2 の細長い調査区である（第33図）。

調査は、1996年10月中旬から開始した。調査区の南側ほど遺物を含む河川堆積層である砂礫層の堆積が厚く、晚秋～初冬期の為もあり調査に困難を極めたが、12月中旬に調査を終了した。遺物は縄紋土器、弥生土器、石器、木製品が出土した。その中で縄紋前期と晩期、弥生前期の土器が多く出土した。堆積層の時期は、弥生時代中期前葉を下限と考えられる。

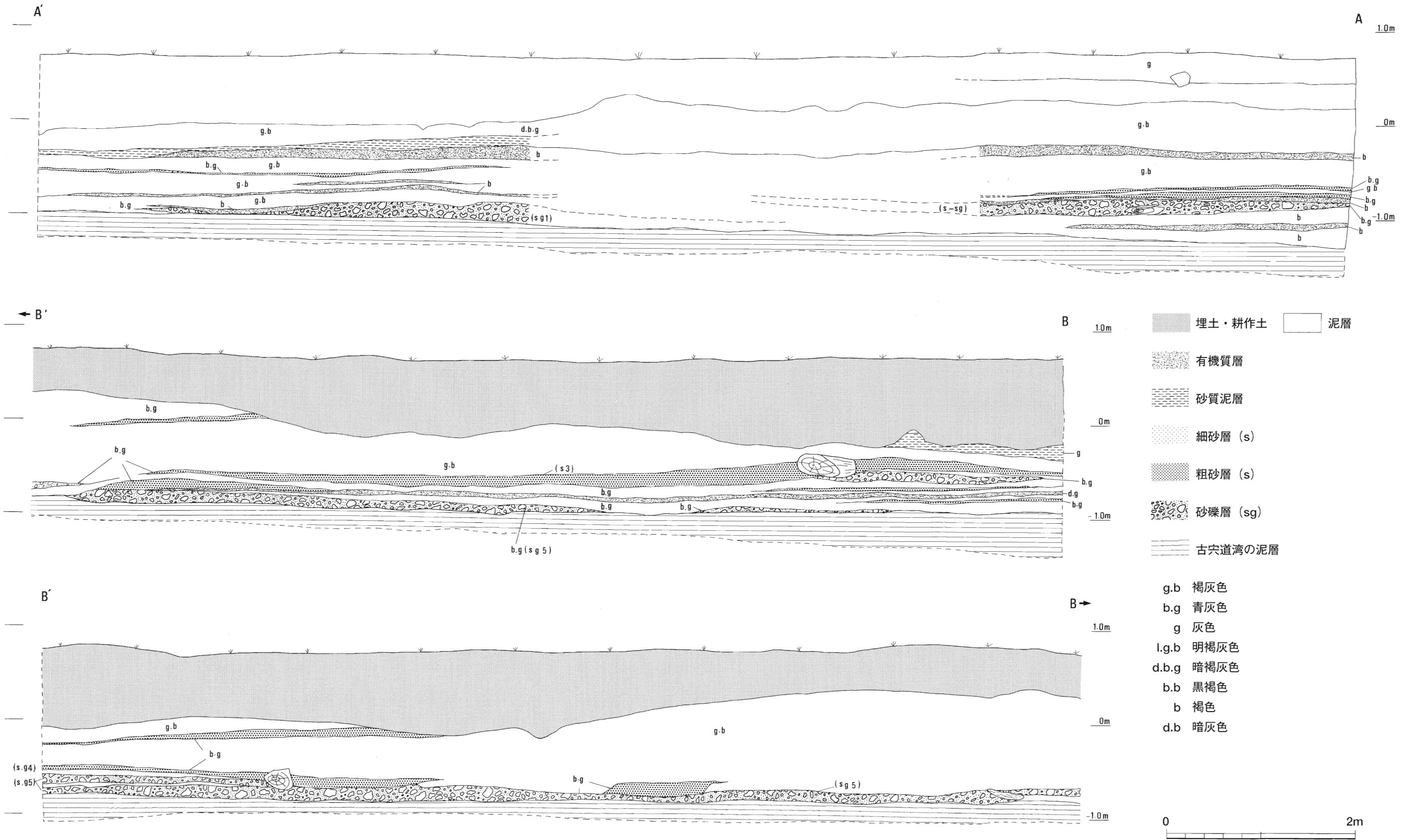
第2節 土層の堆積（第35、36図）

Ⅲ区左岸の調査前の標高は0.8～0.9mであった。耕作土や無遺物層を機械で掘削し、それ以下は人力で掘削を行った。標高0m付近まで、部分的には-0.5m付近まで攪乱されている部分があった。

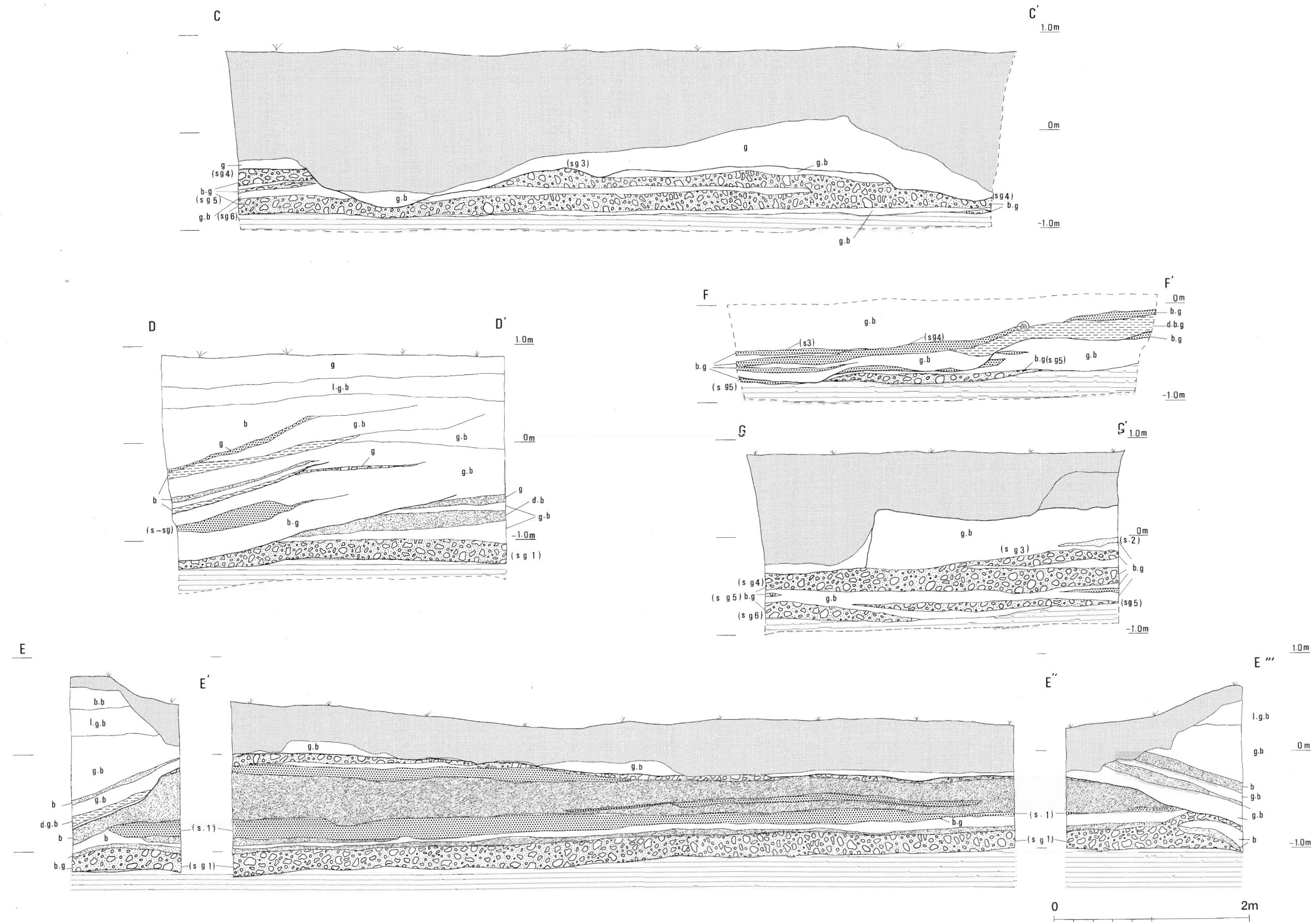
調査区の土層は、全体に西落ちの傾斜を示していた（第36図、D-D'、F-F'、G-G'）。調査区の北側では砂礫層の厚さは薄かったが、南側ほど砂礫層が厚くなり、調査区の南端では標高-0m以下に砂礫層が厚く堆積していた。調査区の北側では砂礫層1に削られた青灰色泥層の標高が低く、特に北西隅では標高-1.3mを測ったが、砂礫層5、6に削られた調査区の南西隅では-0.8m、東壁寄りでは-0.6mを測った。



第34図 Ⅲ区左岸表土直下（1・2）及び青灰色砂層1（3・4）出土土器実測図（S=1/3）



第35図 III区左岸西壁 (A-A'、B-B') 土層堆積図 (S=1/40)



第36図 Ⅲ区左岸西壁 (C-C')、東西方向 (D-D', F-F', G-G')、東壁 (E-E'') 土層堆積図 (S=1/40)

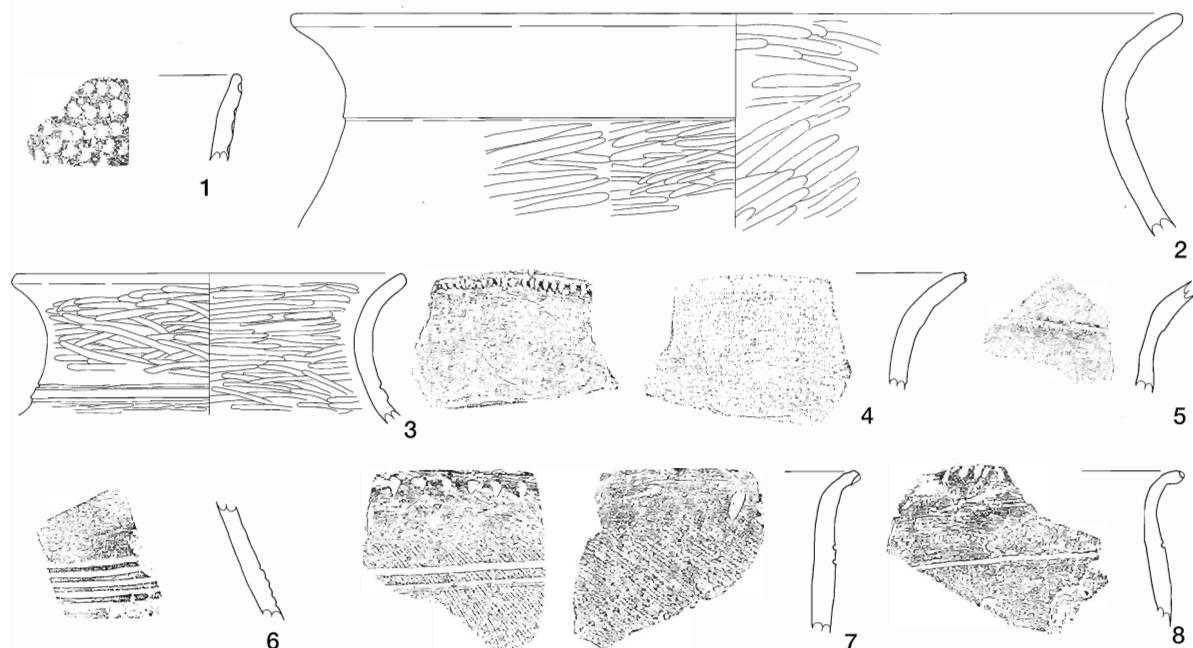
第3節 遺物包含層と出土遺物

Ⅲ区左岸からは、主に砂礫層から多くの遺物が出土した。その中で多くを占めるのが土器であるので、土器は層ごとに述べ、土器に比べて出土量が相対的に少なかった石器、木器、土製品は一括して述べることにする。なお、Ⅲ区左岸に限り、「砂層1」や「砂礫層1」などの数字の順番は、実際に想定された堆積順序とは無関係である。

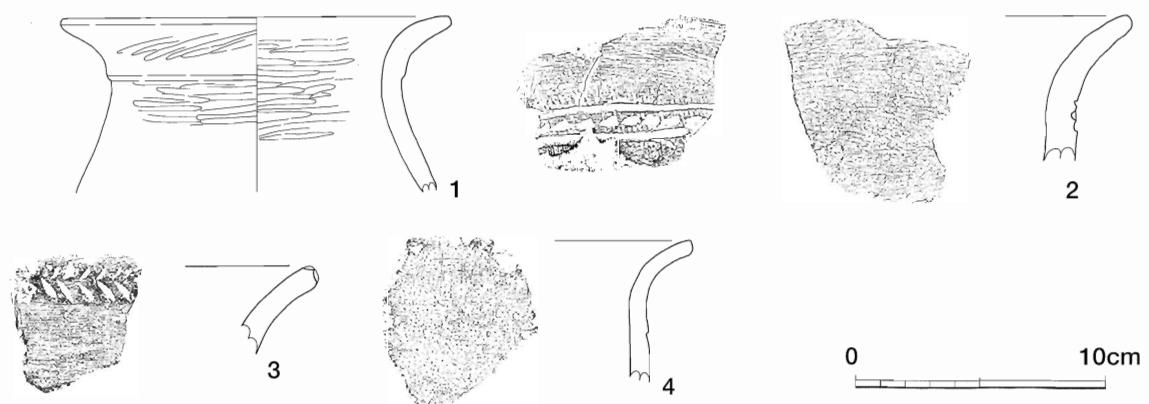
〈1〉 遺物包含層と土器

(1) 表土および青灰色砂層1、同出土土器（第34、39図）

調査区北側の拡張した箇所を中心に青灰色砂層1が堆積していた。標高-0.6~0.7mに分布し、主に粗砂で構成されていた。この拡張部分の表土直下から1、2、青灰色砂層1からは3、4が出土した。



第37図 Ⅲ区左岸青灰色粗砂層—青灰色砂礫層出土土器実測図 (S=1/3)



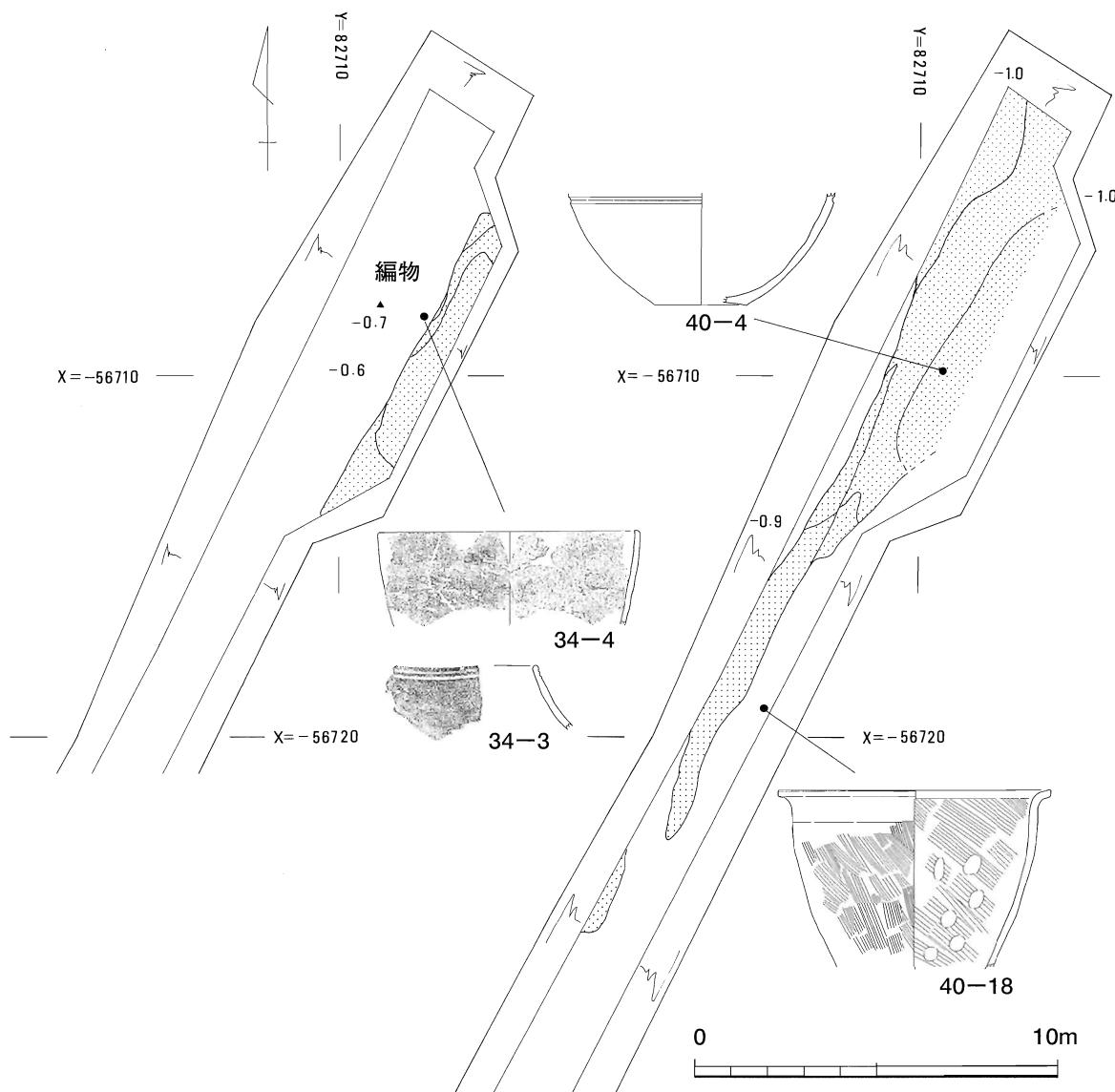
第38図 Ⅲ区左岸青灰色粗砂層—青灰色砂礫層1の間の層出土土器実測図 (S=1/3)

1、2は共に弥生前期の土器である。1は胴部に2条のヘラ描直線文を施す。胴部中程は煤が厚く付着しているが、下半は熱を受けて変質している。前期中葉（松本I-2様式⁽¹⁾）まで遡る可能性を持つ。2は前期後葉（I-3）と考えられる。

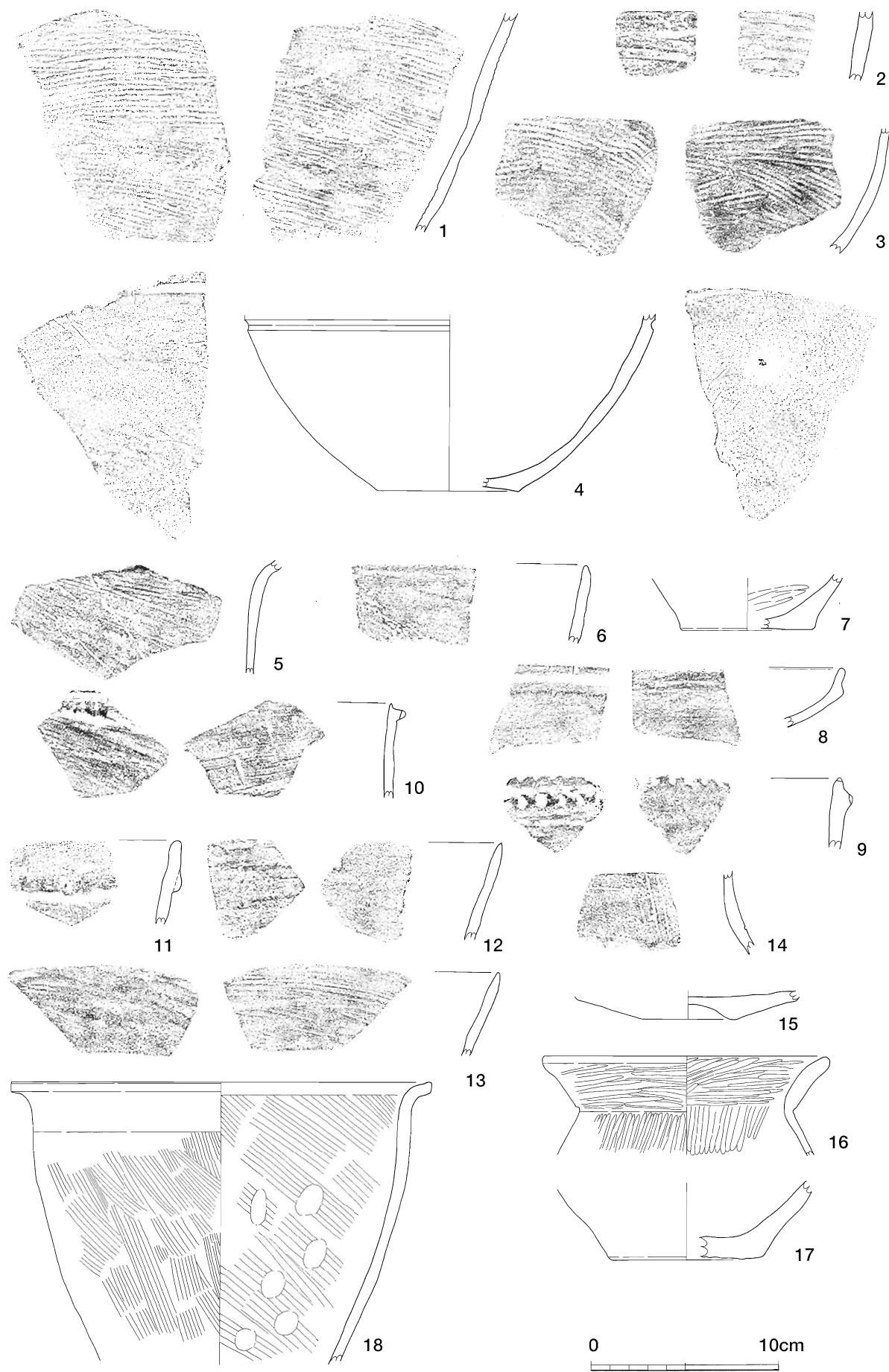
3、4は共に縄紋土器である。3は内彎して口縁部へ至り、口縁部の下には2条の沈線文が施される。後期の可能性を持つ。4はやや外彎気味に口縁部へ至り、端部は面を持つ。晩期前半の粗製深鉢と考えられる。

砂層1からは縄紋土器のみが出土したが、下に堆積している砂礫層1の時期から、砂層1が堆積した時期の下限は、弥生時代前期と考えられる。

なお、腐食が著しく取り上げることが出来なかったが、砂層1に相当する泥層から、編物が検出された。



第39図 III区左岸青灰色砂層1(左)、青灰色砂礫層1(右)測量図 (S=1/200)



第40図 Ⅲ区左岸青灰色砂砾層 1 出土土器実測図 (S=1/3)

(2) 青灰色粗砂層—青灰色砂礫層、同出土土器（第37図）

調査区の北端の標高—0.6～—0.9mに分布していたが、平面的に確認することはできなかった。粗砂層から漸移的に砂礫層へと移行している。遺物が少量出土し、縄紋土器（1）、弥生土器（2～8）を図示した。

1は口縁外面に4列以上の刺突文を施すが、摩滅が著しく原体の想定はできなかった。前期の羽島下層Ⅱ式と考えられる。

2～6は壺である。2は大型の壺で、頸部に1条のヘラ描直線文を施した後、胴部側にヨコヘラミガキを施す。3はヘラによる沈線を施した後、ヨコヘラミガキを施している。器形は口縁部へ大きく屈曲する。4、5は頸部にハケによる段を、6は削り出し突帯を有す。7、8は甕である。共に口縁部に刻み目を施すが、刻み目の原体は7ではヘラ、8ではハケ原体と考えられる。8の内面は板ナデ状に調整される。いずれも前期中葉を中心とした時期に属し、6、8は前期後葉まで下る可能性がある。

粗砂層—砂礫層の堆積した時期の下限は、6や砂礫層1から弥生時代前期と考えられる。

(3) 青灰色粗砂—砂礫層と青灰色砂礫層1の間出土土器（第38図）

前述した粗砂—砂礫層と後述する青灰色砂礫層の間から少量の土器が出土した。図示したのはいずれも弥生土器である。

1は口縁部で短く大きく屈曲する。頸部に沈線とヘラミガキによる段を有す。2は直線文の間に刺突列点文を施す。3は口縁端部に刺突による羽状文を施す。4は甕で、胴部に段を有す。1、4は中葉まで遡る可能性を持つ。2は頸部が直線的なので、前期後葉～末（I-3～4）と考えられる。

(4) 青灰色砂礫層1、同出土土器（第39、40図）

青灰色砂礫層1は、調査区の北側から拡張した部分にかけて、標高—0.9～—1.0mに分布していた。粗粒砂が主体で細礫を含む。砂礫層1には標高—0.9m付近で切り合いが見られたが、時期差を認めることができなかつたので一つの層として記述する。

砂礫層1からは縄紋土器と弥生土器が出土し、縄紋土器（1～15）、弥生土器（16～18）を図示した。

1～3は前期の土器である。いずれも内外面に条痕調整を行う。4、5は後期の土器と考えられる。4は平底から大きく広がる胴部を持つ。胴部には1条（以上）の沈線が施される。5は外面に条痕調整を行うが、巻き貝条痕ではないかと思われる。6～15は晩期の土器である。8は晩期後半代の浅鉢である。胴部で強く屈曲して口縁部へ至る。9は口縁端部と突帯の上に刻み目を施す。10は突帯が口縁部にほぼ接し、刻み目も「V」字に近くなる。9は山陰突帯文I期⁽²⁾、10は同III期と考えられる。12、13は口縁部が開き、端部は尖る。外面は条痕調整である。晩期前半代の粗製深鉢ではないかと思われる。14は外面にヘラ状工具による文様を有す。

16は頸部で強く屈曲し、口縁部へ直線的に伸びる。口縁部は厚く作られており、頸部には段を有す。内外面とも、口縁部はヨコヘラミガキ、頸部はタテヘラミガキである。18は口縁部で大きく外方へ屈曲し、端部は面を持つ。胴部に文様は施されない。内面のナナメハケは、上から見て時計周りに施されている。16は前期前葉（I-1）、18は中葉と考えられる。朝酌川遺跡群の調査では、

前期前葉の土器群は非常に少ない。

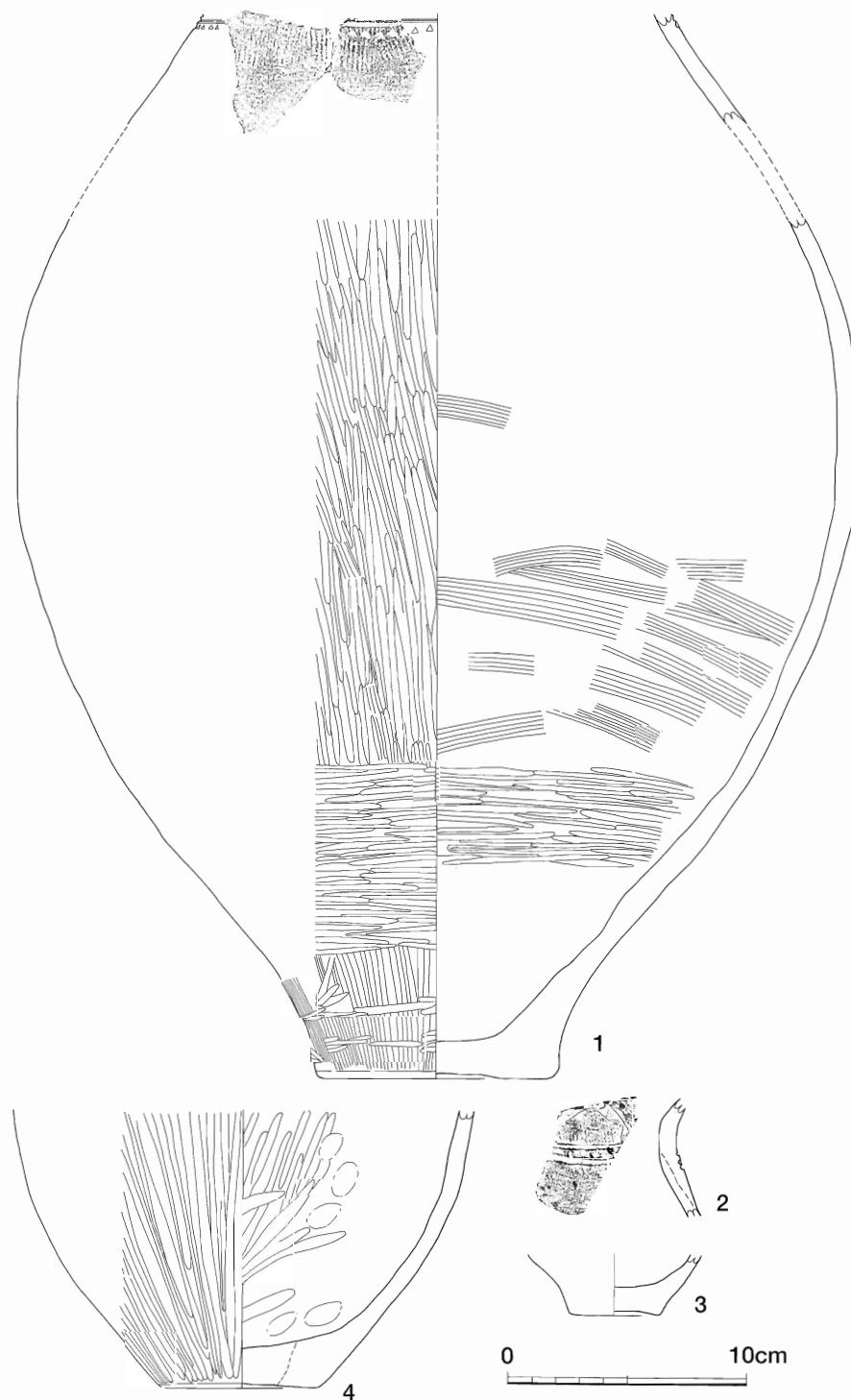
砂礫層 1 からは弥生土器よりも縄紋土器が多く出土したが、16、18から砂礫層 1 の堆積した時期の下限は、弥生時代前期と考えられる。

なお、砂礫層 1 から出土した炭化木の¹⁴C年代測定を行った。結果は2520±80BP (Gak-19551)、2490±90BP (Gak-19552) であった（第8章）。砂礫層 1 から出土した弥生土器の時期と調和的である。

(5) 暗褐色泥層出土

土器（第41図）

調査区の南側の標高 0 m付近の暗褐色泥層から弥生土器が少量出土した。1 はほぼ 2 つの大きな破片として出土したが、付近に遺構は存在しなかった。胴部が上下に大きく伸び、頸部にはヘラ描直線文と三角形の列点文が施されている。2 は直線文の間に刺突文が施されているが、纖維の先で刺突されている。共に前期末と考えられる。4 は中期の壺底部であるが、前期と異なり、底部の周囲を作つてから底部を埋める。文様を欠いているが、中期前葉（II）ではないかと思われる。



第41図 III区左岸暗褐色泥層出土土器実測図 (S=1/3)

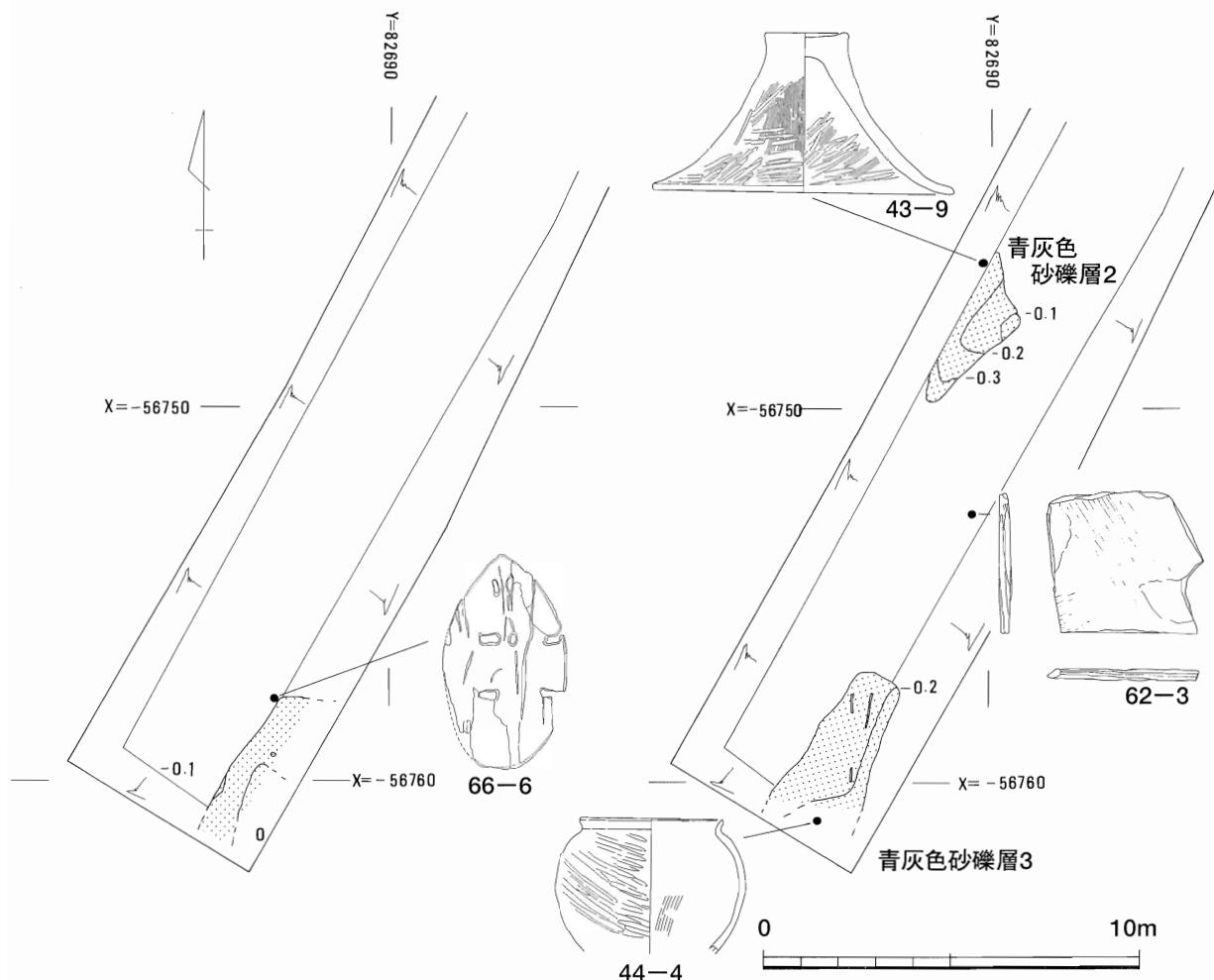
(6) 青灰色砂礫層 2、同出土土器（第42、43図）

青灰色砂礫層 2 は、調査区の南側の西壁寄りの部分、標高 -0.1 ～ -0.3m に分布していた。砂礫層 2 から縄紋土器と弥生土器が出土し、縄紋土器（1、2）、弥生土器（3～17）を図示した。

1、2 は共に晩期の突帯文土器で、1 は口縁部より下がった位置に突帯が付くが、2 は口縁部に接して突帯が付く。共に刻み目の形は「D」字である。1 はほぼ口縁部が直立する。2 は砲弾形を呈すると思われる。1 は突帯文Ⅱ期、2 は同Ⅲ期と考えられる。

3 は壺のミニチュア土器である。4～8 は壺である。4 は肩部に削り出し突帯を有し、その下に広く粘土を貼り付けるような形を作つて、その上に直線文を施している。5 は縦の区画を持つ羽状文を施すが、原体は不明である。肩部の 2 条の直線文の上に、太いヘラミガキを沈線状に施す。6 は貝殻による文様が施されるが、どのような文様であるかは不明である。7 は直線的な頸部を持ち、その部分に 8 条（以上）の直線文が施される。9 は甕用の蓋形土器である。緩やかに開く体部を持つ。内面には煤が付着する。10～13 は甕である。12、13 は直線文の間に刺突文を施す。12 の刺突は米粒状の形である。17 は大型の鉢である。これらの土器は前期後葉～末を中心とすると思われるが、5 は前期中葉まで遡る可能性を持つ。

14～16 は中期前葉（Ⅱ）の土器である。14 は壺の肩部と思われるが、櫛描直線文の間に鋭く深い刺突文を施す。15 は 1 単位 3 条の櫛描文を 2 単位施す。櫛描の 1 条の幅は約 3 mm と太く、器面に対



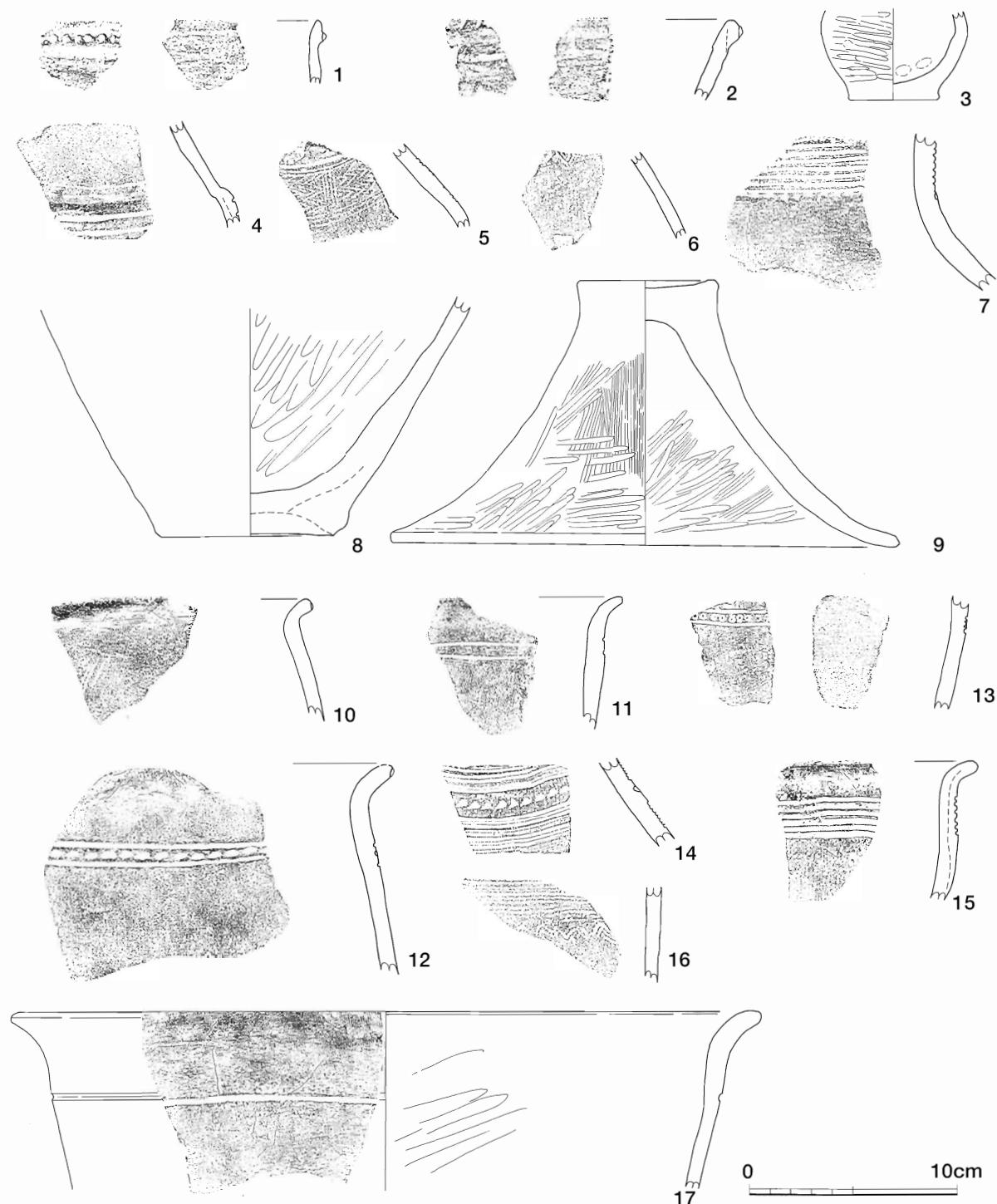
第42図 III区左岸青灰色砂層 2 (左)、青灰色砂礫層 2、同 3 (右) 測量図 (S=1/200)

して深く施されている。16は甕の胴部に施された櫛描直線文の下に、波状文を施す。いずれも直線文は複帶構成である。

砂礫層2の堆積した時期の下限は、14~16から弥生時代中期前葉と考えられる。

(7) 青灰色砂層2、青灰色砂礫層3、同出土土器（第42、44図）

青灰色砂層2は調査区の南側、南東隅の標高0~−0.1mに分布していた。細砂で構成されている。青灰色砂礫層3も同様に調査区の南東隅の標高−0.2m付近に分布していた。



第43図 III区左岸青灰色砂礫層2出土土器実測図 (S=1/3)

それぞれ出土した土器は少量であった。1～3は砂層2、4～7は砂礫層3出土土器である。

2は胴部に1条の直線文を施す。3は口縁部を上下から押さえて断面を三角形にして、逆「L」字状の口縁部を作り出している。胴部には複帯構成の櫛描文を施す。2は前期中葉、3は中期前葉(Ⅱ)である。

4は胴部が球形で、口縁部が短く付く短頸の無文の鉢である。5は外彎気味に口縁部へ至り、口縁端部は若干肥厚し面を持つ。鉢と思われる。5は前期中～後葉(I-2～3)、4は前期末の可能性を持つ。

なお、砂層2からは田下駄状木製品(第66図6)が出土した。

砂層2、砂礫層3の堆積した時期の下限は、3や上に堆積している砂礫層2の時期から、共に弥生時代中期前葉と考えられる。

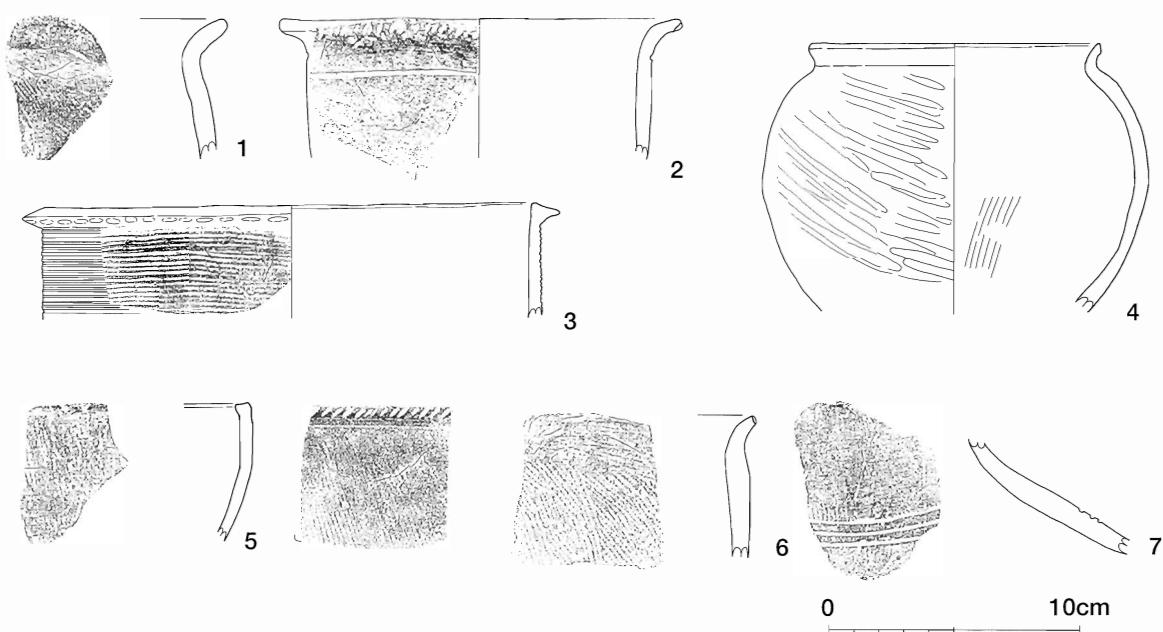
(8) 青灰色砂層3、同出土土器(第45～47図)

青灰色砂層3は、調査区の中央部分の標高-0.3～-0.5mに分布していた。主に粗砂で構成される。砂層の北側には流木が多数堆積していたが、流木の中からは少量の土器、直柄平鉗(第64図1)や機織り具片(第67図11)、棒状木製品(第67図13)が出土した(第46図)。また、小片であったので図示は出来なかったが、砂層3に相当する泥層から編物が検出された。

砂層3からは少量の土器が出土し、縄紋土器(1)、弥生土器(2～14)を図示した。

1は晩期の深鉢ではないかと思われる。

2～8は壺である。2は頸部で緩やかに屈曲し、頸部と肩部に削り出し突帯を施す。削り出し突帯にはそれぞれ3条と1条の直線文が施されている。3は口縁部がやや伸び、口縁端部に綾杉文を施す。4は頸部にハケによる段を有す。5は貝殻直線文の間に竹管文を施す。6は削り出し突帯の下に直線文を施す。7はヘラ描羽状文と縦や横の区画を有す。8は刻み目を持つ突帯を肩部に有す。9～14は甕である。9は頸部で短く屈曲し、文様を欠く。10は頸部で口縁部が大きく外方に開く。口縁端部のやや下側に刻み目が施される。11と13も10に似た口縁の形を呈す。12は頸部でやや強く

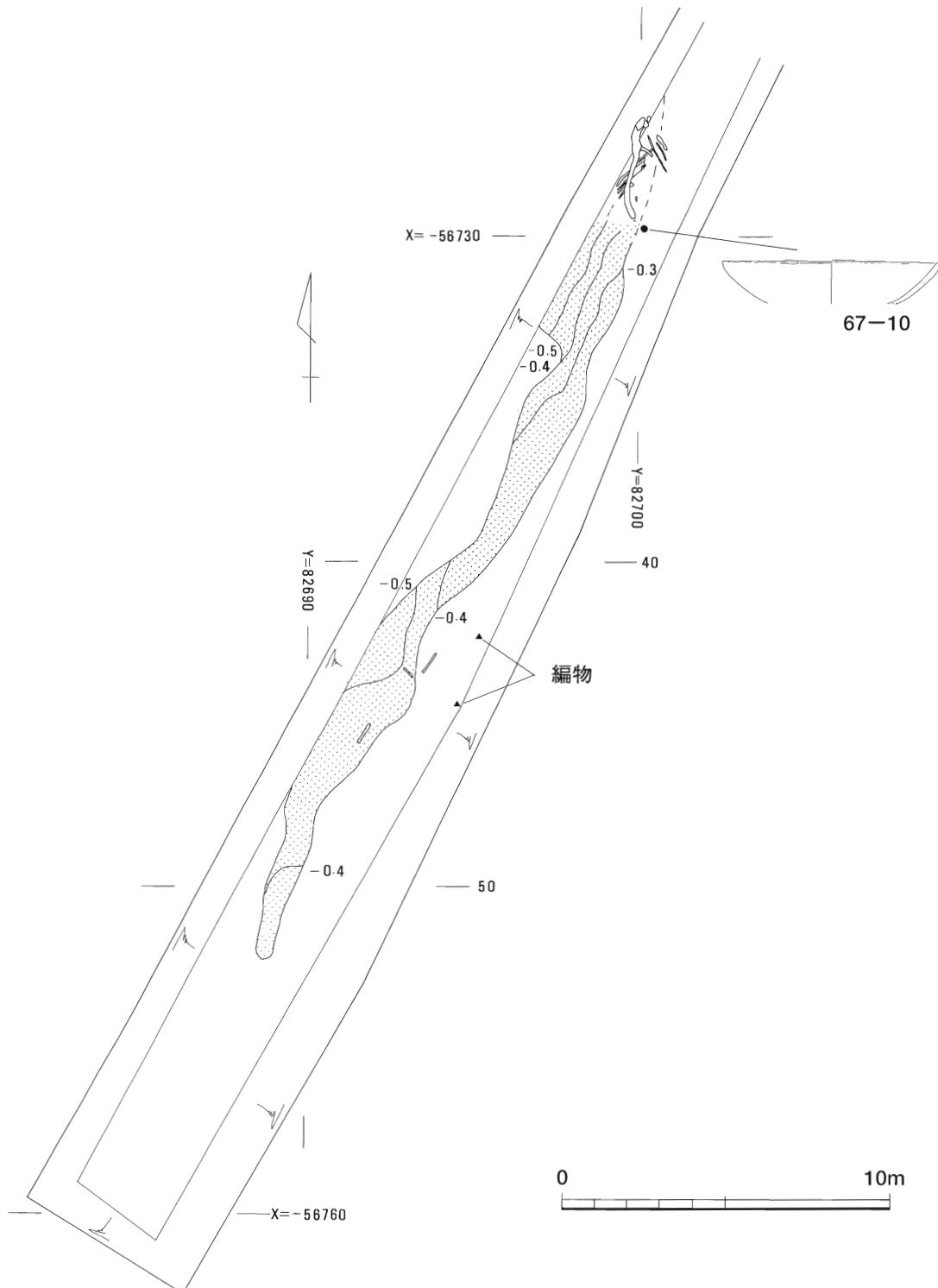


第44図 III区左岸青灰色砂層2(1～3) 及び青灰色砂礫層3(4～7) 出土土器実測図(S=1/3)

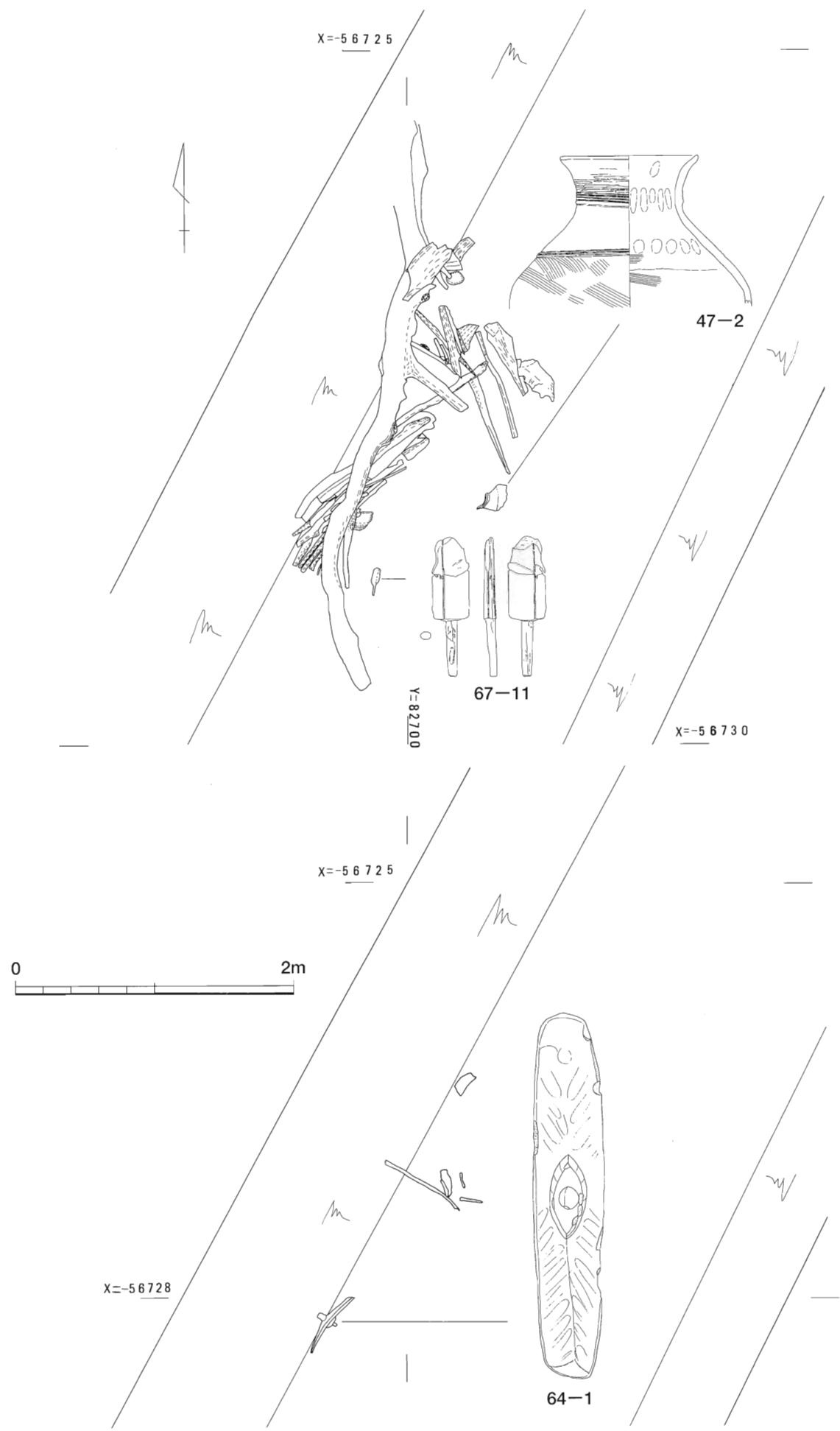
屈曲する。4、9は前期中葉に遡る可能性があるが、2、6、8、10～13と同様に前期後葉とも考えることができる。3は直線文が多条化することから、前期末と考えられる。

砂層3の堆積した時期の下限は、下に堆積している砂礫層4の時期から、弥生時代中期前葉と考えられる。

なお、砂層3中の流木の¹⁴C年代測定を行った。結果は3690±80BP (Gak-19550) であった（第8章）。土器の示した時期を大幅に遡るが、縄紋時代の流木の再堆積の可能性を有す。



第45図 III区左岸青灰色砂層3測量図 (S=1/200)



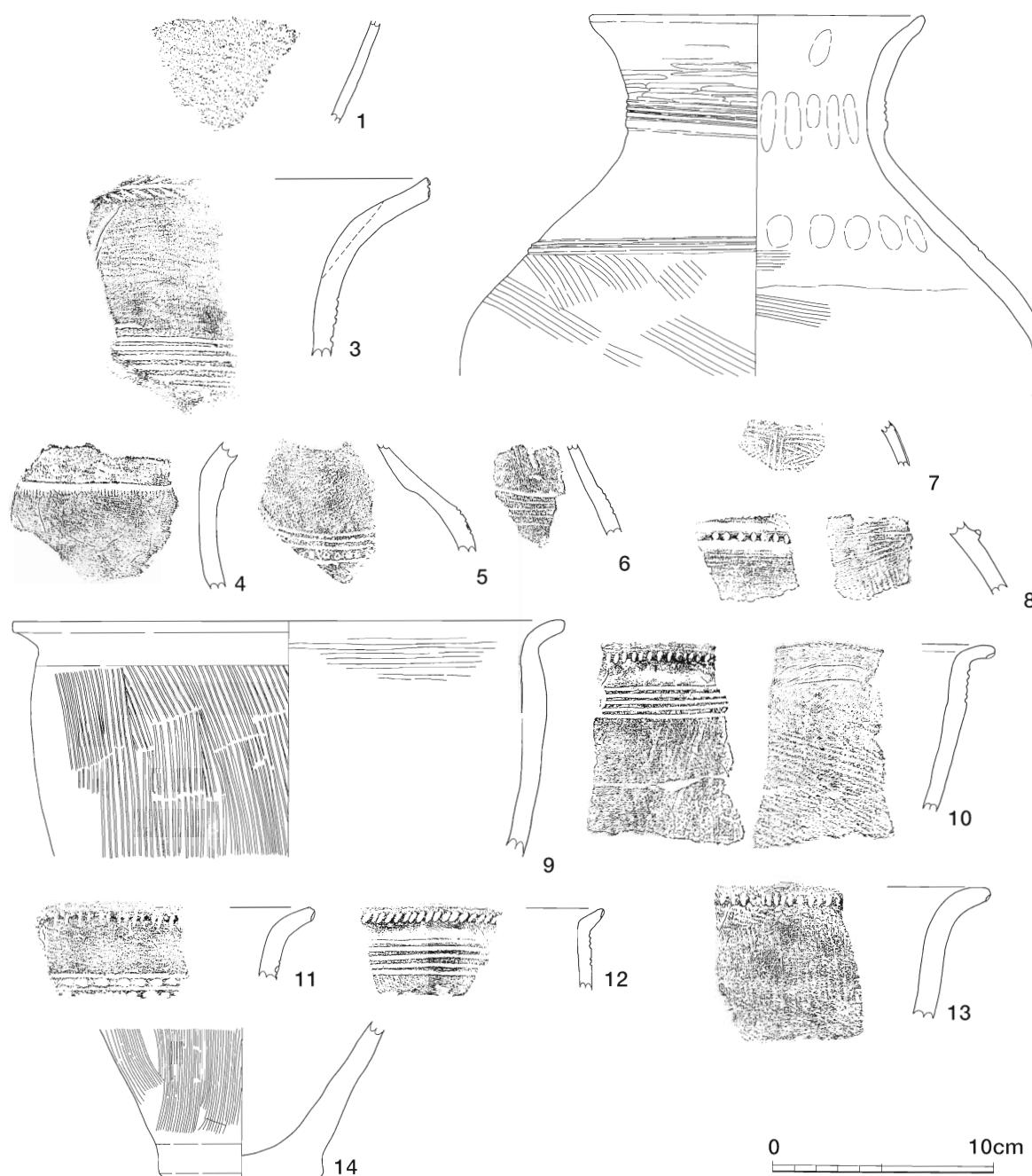
第46図 Ⅲ区左岸青灰色砂層3遺物出土状況図（上：上位、下：下位）(S=1/40)

(9) 青灰色砂礫層 4、同出土土器（第48～51図）

青灰色砂礫層 4 は、調査区の中央部分から南側にかけて標高-0.4～-0.6mに分布していた。土器の他、広鍬未製品（第64図2、第65図3）や泥除け状木製品（第65図5）が出土した。

青灰色砂礫層 4 から出土した土器の内、縄紋土器（1～8）、弥生土器（9～55）を図示した。

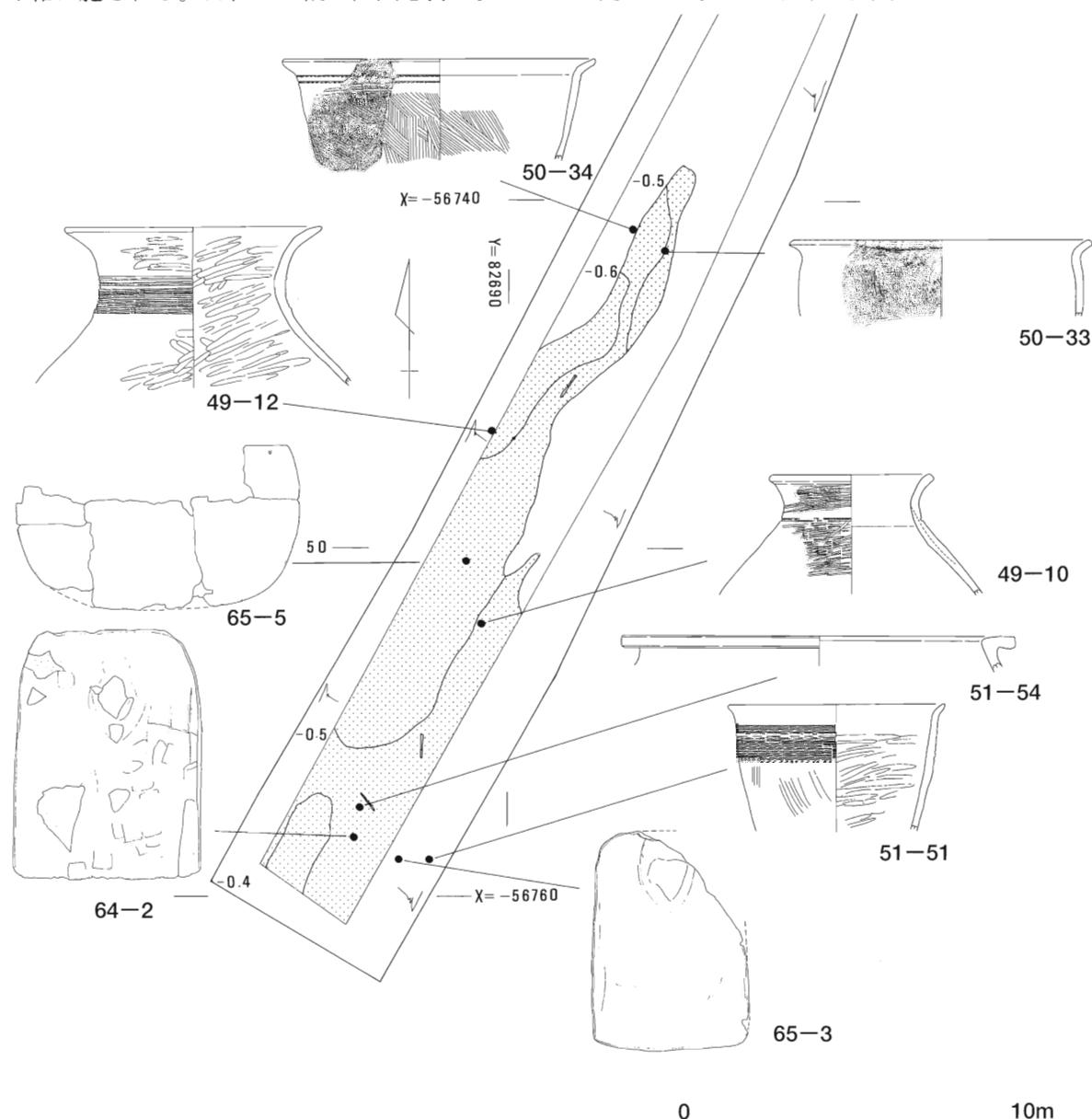
1～3は前期の土器である。1は緩やかに外反する体部を持ち、口縁端部には粘土を貼り付け、その上に竹管状工具による刺突文を施す。2も口縁部に粘土紐を貼り付けるが、粘土紐は1よりも大きく、刺突も一部斜行していると思われる。3は「D」字の爪形文を施す。1は西川津A1類、2は同A3類、3は羽島下層Ⅱ式と考えられる。4は晩期の粗製土器と考えられる。わずかに開く口縁部を持ち、端部には面を有す。5～7は晩期の突帯文土器である。5は口縁部が外反し、端部



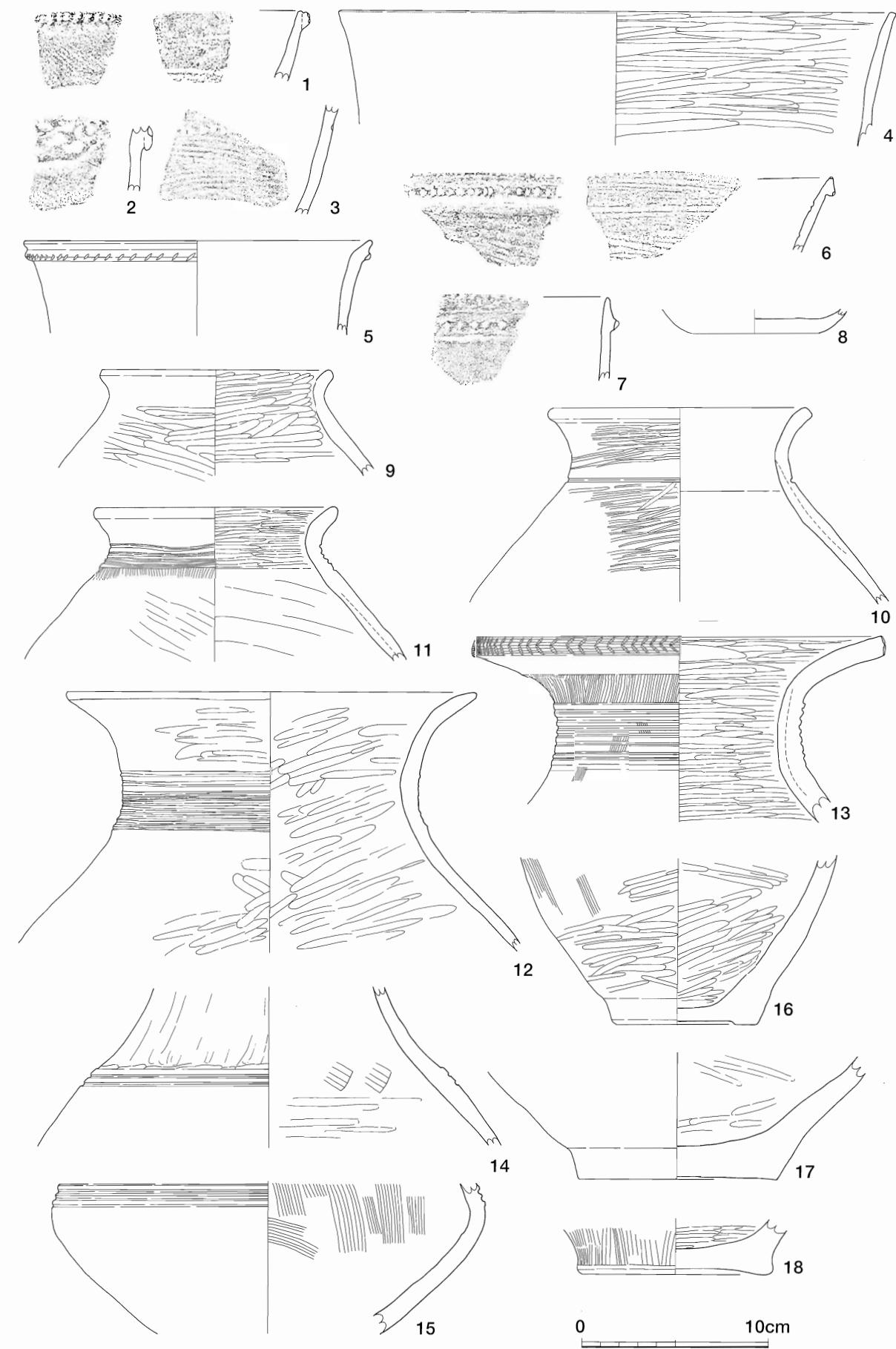
第47図 Ⅲ区左岸青灰色砂層 3 出土土器実測図 (S=1/3)

より下がった位置に突帯が付く。突帯は上下から押さえられている。6は口縁に接して突帯が付き、突帯は上から押さえられている。突帶上と口縁端部に刻み目を持つ。7はほぼ口縁が直立する。5、7は突帶文Ⅰ期、6は突帶文Ⅱ期と考えられる。

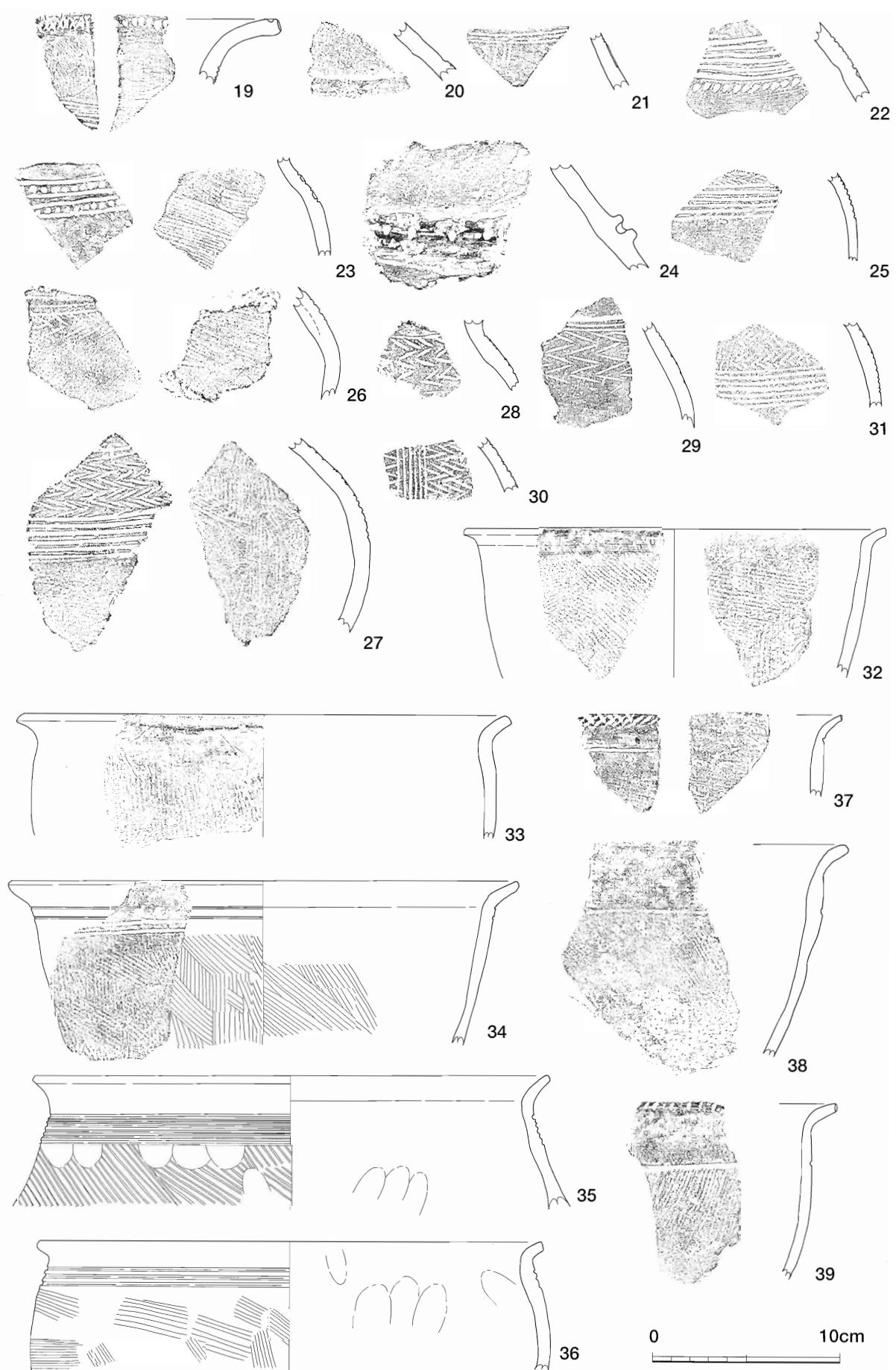
9～31は前期の壺である。9は頸部から短く屈曲して口縁部へ至る。頸部に文様は施されていない。10、11は9より若干口縁部が伸び、直線文が施される。12、13では頸部が直線的になり、直線文が多条化する。口縁部も伸びる。14、15は削り出し突帯を持つ。共に胴部が大きく張り出す。19は口縁内面にも刺突文を施す。20は削り出し突帯の上に列点文が施されている。21は直線文の間に線状の列点文が施されており、縦の区画も持つ。22は直線文の下に米粒状の列点文が施されている。23は直線文の間に円形の刺突文が施されている。24は2条の貼り付け突帯の間に、円形の刺突が施されている。25～31は羽状文が施されている。原体が貝殻なのは27、30で、それ以外はヘラと思われる。それぞれ直線文などの他の文様と組み合わせて施されている。26は直線文の下に羽状文がやや雑に施される。30、31は縦の区画を持つ。32～47は甕である。32は頸部で屈曲し、口縁部が開く。



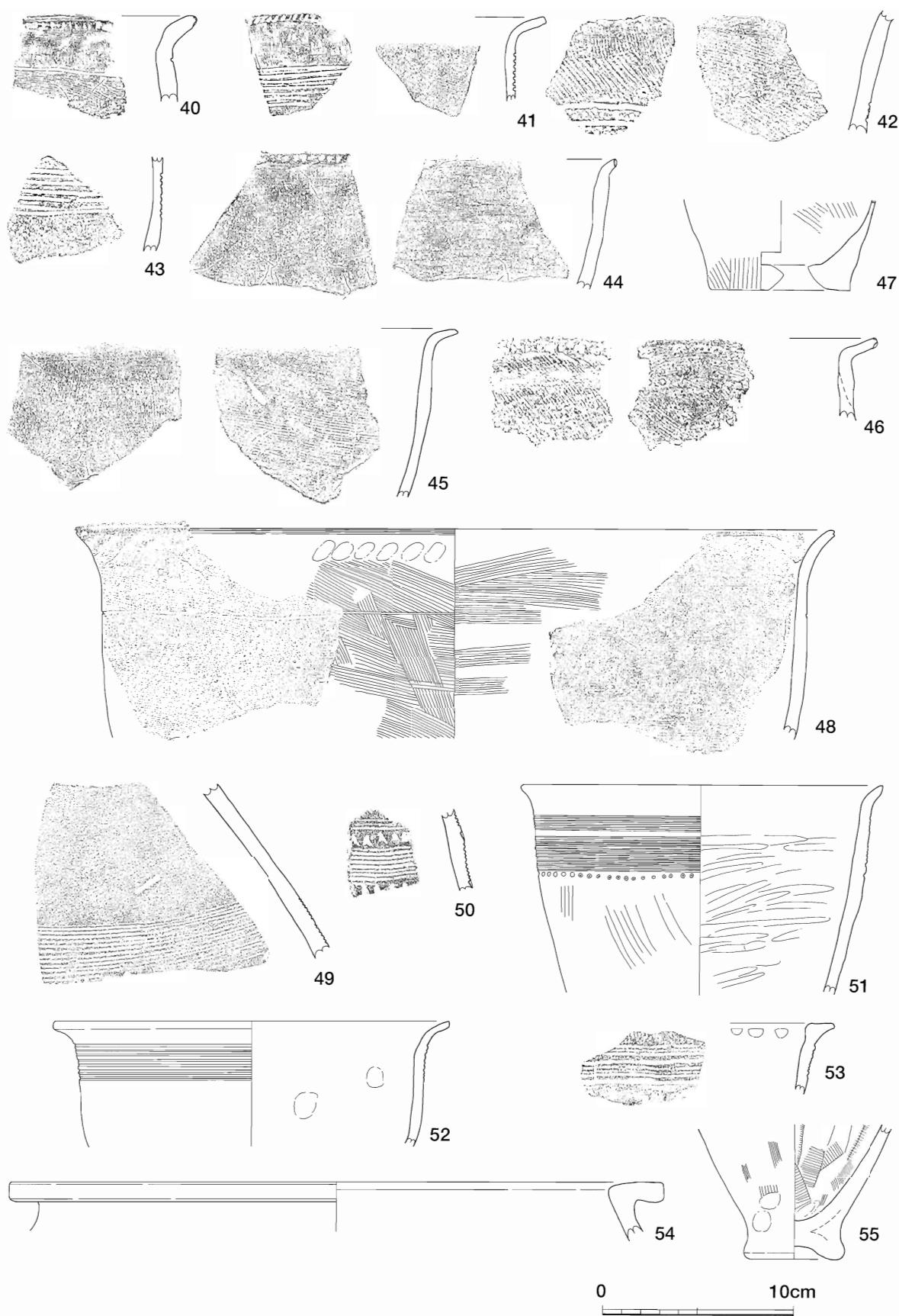
第48図 III区左岸青灰色砂礫層 4 測量図 (S=1/200)



第49図 Ⅲ区左岸青灰色砂砾層 4 出土土器実測図(1) (S=1/3)



第50図 III区左岸青灰色砂砾層 4 出土土器実測図(2) (S=1/3)



第51図 Ⅲ区左岸青灰色砂砾層 4 出土土器実測図(3) (S=1/3)

33は若干胴が張る。共に胴部に文様を欠く。34は頸部で強く屈曲し、頸部のすぐ下に直線文を施す。35、36は胴部が張る。38～40は口縁部が外反し、胴部の上位に1条の直線文を施し、その下から調整を行う。42は直線文の間に円形の刺突文を施す。44は口縁部がわずかに外反し、端部に刻み目を施す。45は44に比べて口縁部がやや伸びる。共に胴部は無文である。46は頸部で強く屈曲する。47は底部を外面から穿孔する。48は大型の鉢である。これら前期の土器群は、一部に中葉の資料を含むが、ほとんどは前期後葉から前期末の資料と考えられる。20、32～34、38～40が中葉、10、11、14、15、28、29、36が後葉に属すると思われる。

49～55は中期前葉の土器である。49は13条の直線文が施されているが、摩滅しており原体は不明である。50は複帯構成の櫛描文の間に、三角形の列点文を施す。51は原体の幅が約5mmで櫛描が6条の原体を用いて直線文を施し、文様の下には竹管文を施す。52も櫛描文を施すが、文様は器壁に対して深く施されている。53は口縁端部を逆「L」字に肥厚させる。54は大型の甕と思われるが、口縁部を折り曲げている。

砂礫層4の堆積した時期の下限は、49～55から弥生時代中期前葉と考えられる。

(10) 青灰色砂礫層5、同出土土器（第52～57図）

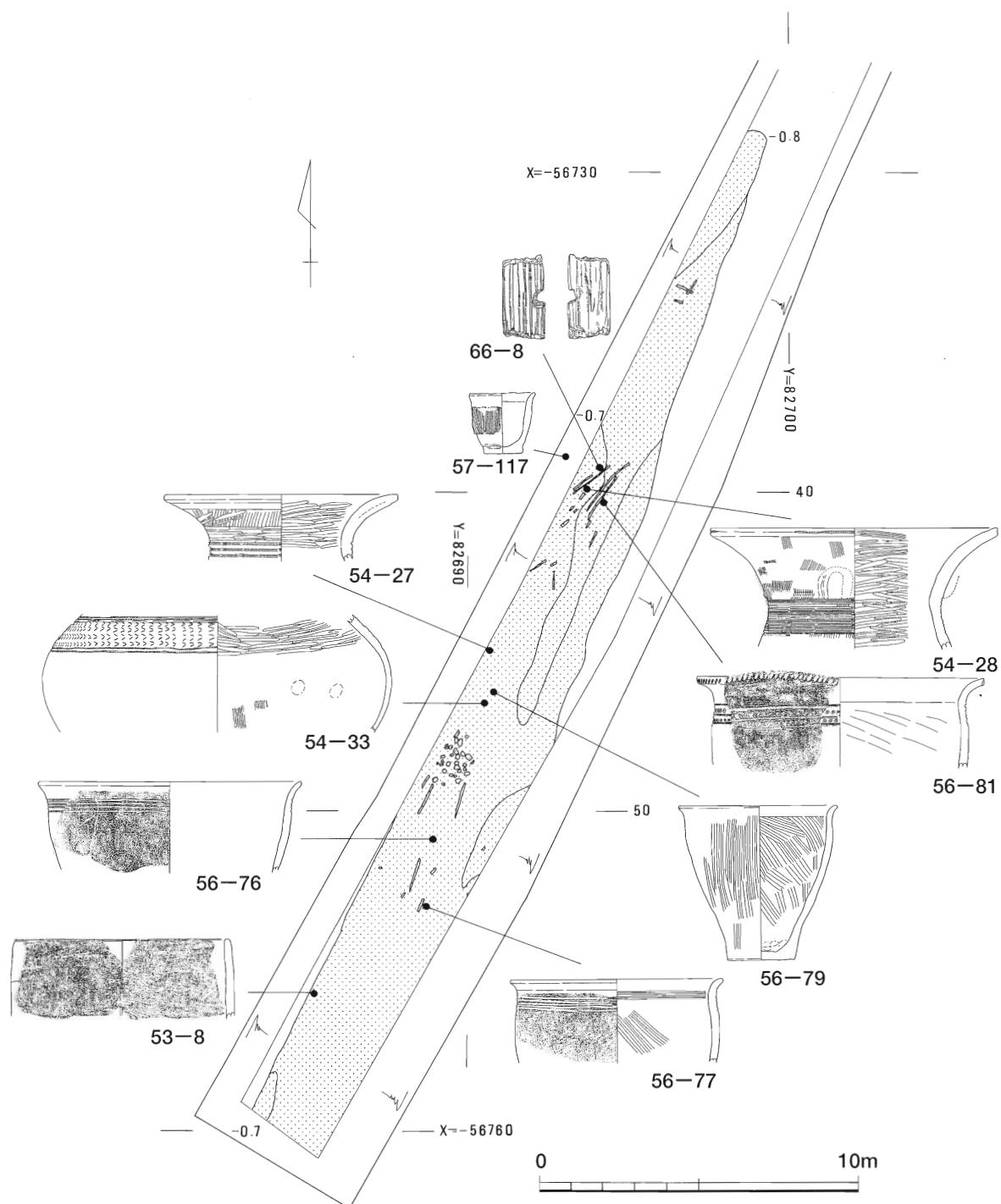
青灰色砂礫層5は、調査区の南側、標高-0.7～-0.8mに分布していた。砂礫層中からは流木が多く検出された。東西方向の土層堆積図（第36図、F-F'）では、砂礫層4と砂礫層5の間に堆積の不連続が見られるが、砂層3や砂礫層4と砂礫層5の下限の土器には時間差は見られない。

砂礫層5から出土した土器のうち、縄紋土器（1～24）、弥生土器（25～119）を図示した。

1～7は前期の土器である。1はほぼ直立する口縁部外面に右上がりに斜行すると思われる刺突文を施す。2は口縁部にほぼ平行する押引文を、3は同様に刺突文を施す。いずれも前期前半代と考えられる。4は口縁部外面に粘土を貼り付けて、その上に数列の平行する押引文を施す。5は大きく開く口縁部を持ち、わずかな稜を口縁部下側に持つ。その部分に逆「C」字と思われる原体による、右上がりの斜行する刺突文を施す。西川津A3類と考えられる。8は時期は不明であるが、粗製の深鉢である。全体に厚手で、口縁部がわずかにすぼまる。9は肩部で緩く屈曲する。10は内外共粗いケズリのような条痕調整を行う。共に晩期の粗製深鉢の可能性を持つ。12は肩部で緩やかに屈曲し、口縁部が開く。14は浅鉢と考えられる。口縁端部に1条の沈線と縄紋を施す。16～24は晩期の突帯文土器である。16は口縁部が内彎気味に大きく開き、内面には刺突を施す。17、18は口縁端部と、口縁端部から下がった位置に付く突帯の上に「D」字の比較的大きな刻み目を施す。突帯文Ⅰ期と考えられる。19、20は口縁端部の刻み目は無くなり、突帯の上にのみ刻み目を施す。突帯は上下から押さえられており、調整も条痕である。突帯文Ⅱ期と考えられる。21は口縁部が内彎気味に開き、突帯は口縁部に接して付けられる。刻み目は「D」字であり条痕調整を残すが、突帯文Ⅲ期に属すると思われる。23、24は刻み目の無い突帯を持つ。23はやや内彎気味にすぼまる口縁部、24は大きく開く口縁部を呈する。このような刻み目を持たない突帯文土器は、鳥取県倉吉市イキス遺跡や米子市目久美遺跡でも出土しており、それらの検討結果⁽³⁾からこれらの土器は弥生時代前期の縄紋系土器であると思われる。

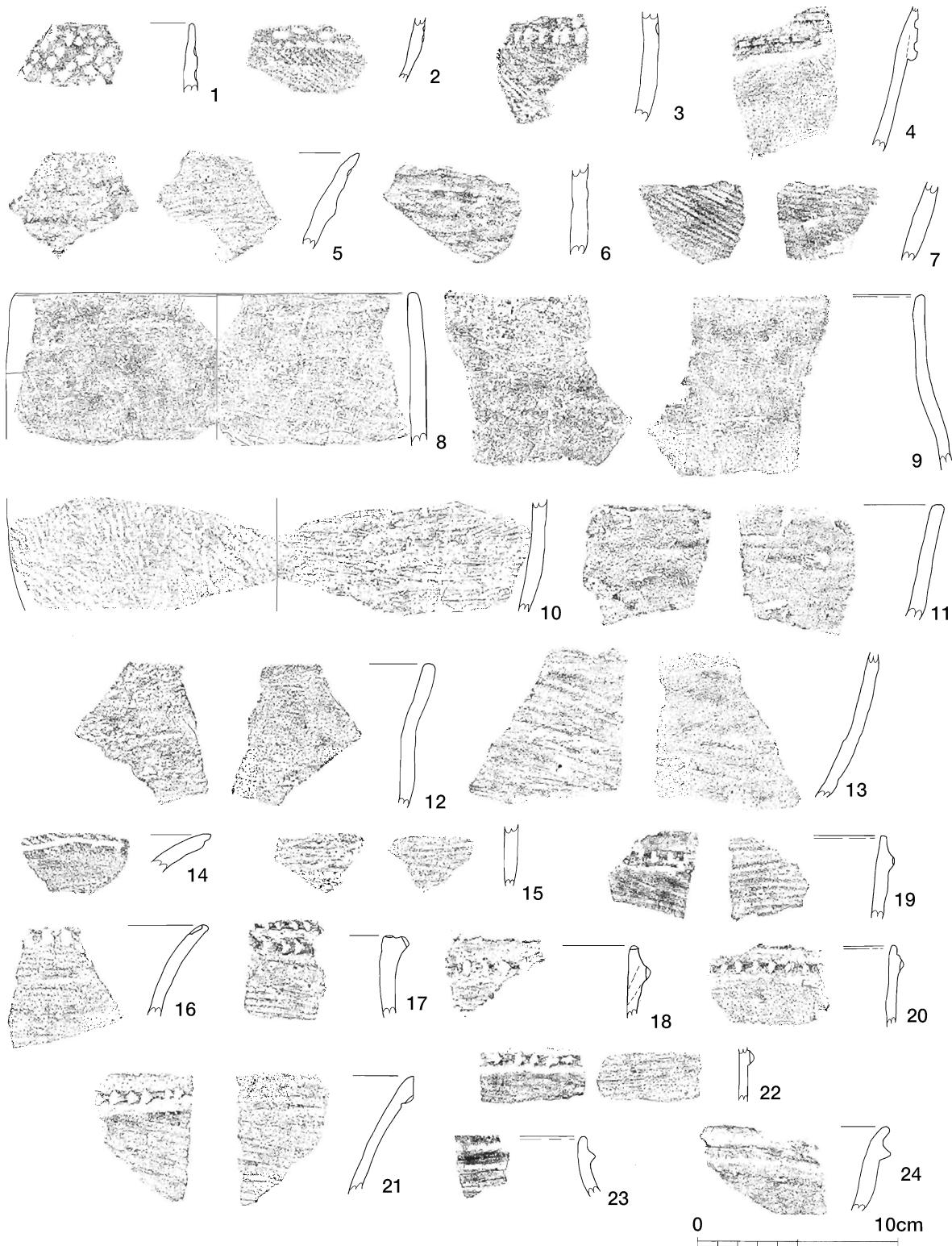
25～74は壺である。頸部で緩やかに屈曲し口縁部がやや短く外反するもの（26）、口縁部が伸びるもの（25、27、28）、頸部が直線的に立ち上がるもの（35）がある。25は頸部にハケ原体による

段を持つ。28は口縁端部にハケ原体による直線文を施し、一部はナデにより消されている。頸部には11条のヘラ描直線文を施すが、その上には剥離痕があり、逆「U」字形の突帯を貼り付けていたと考えられる。29は頸部にハケによる段を持ち、上下にヨコヘラミガキを行う。30、31は口縁端部に文様を施し、30は端部の上下に刻み目を、31はヘラによる斜格子を施す。32は肩部に多条の直線文を施し、頸部で屈曲して口縁部が短く外反する。33は胴部が大きく張り、計4条の貝殻直線文の間に4列の貝殻羽状文を施す。34は頸部と胴部に削り出し突帯を有す。35は頸胴部界と胴部に刻み目を持つ貼り付け突帯を有す。突帯の上にヘラによる沈線を施して突帯を2条にして、刻み目を一

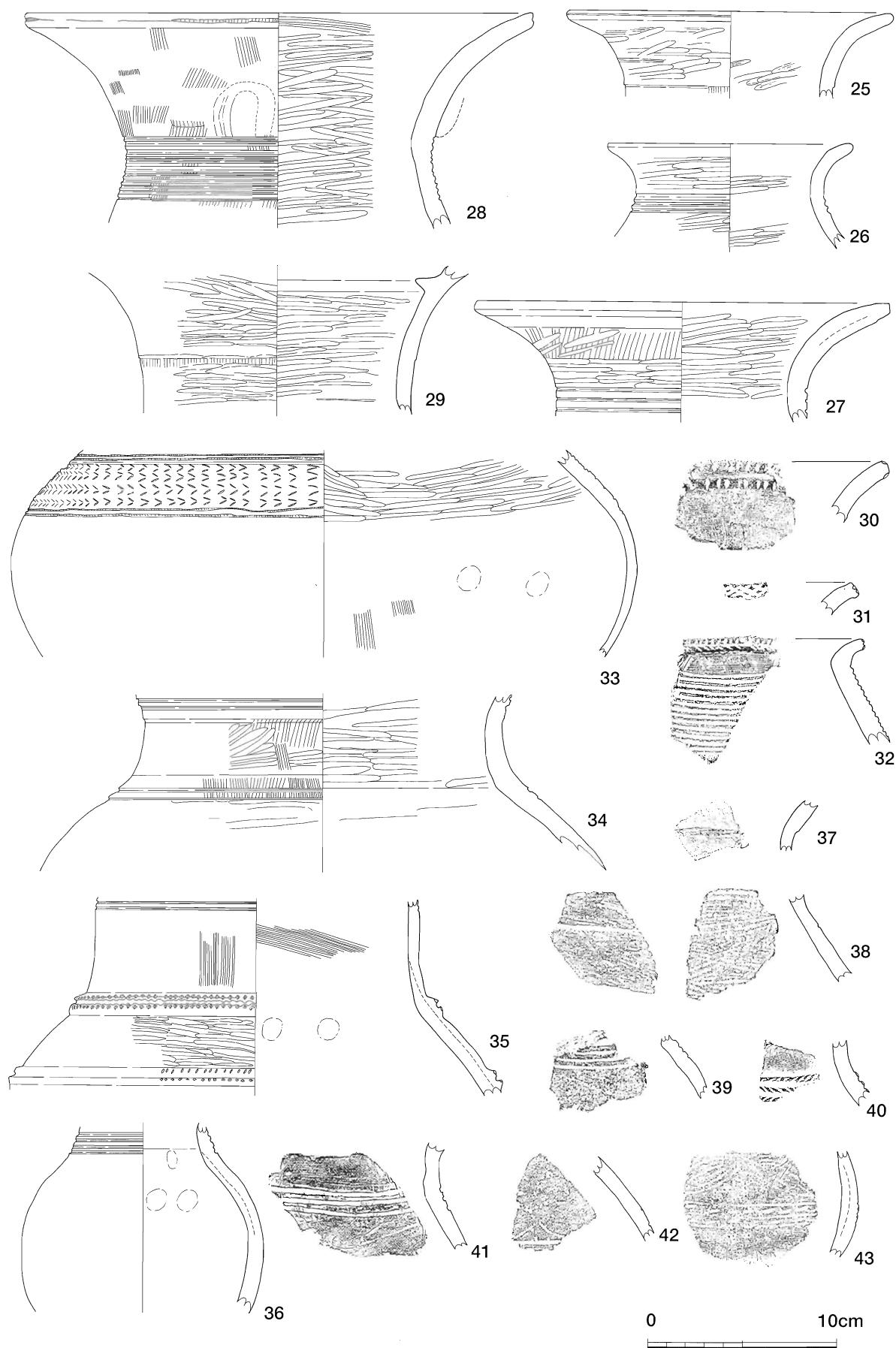


第52図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層5測量図 (S=1/200)

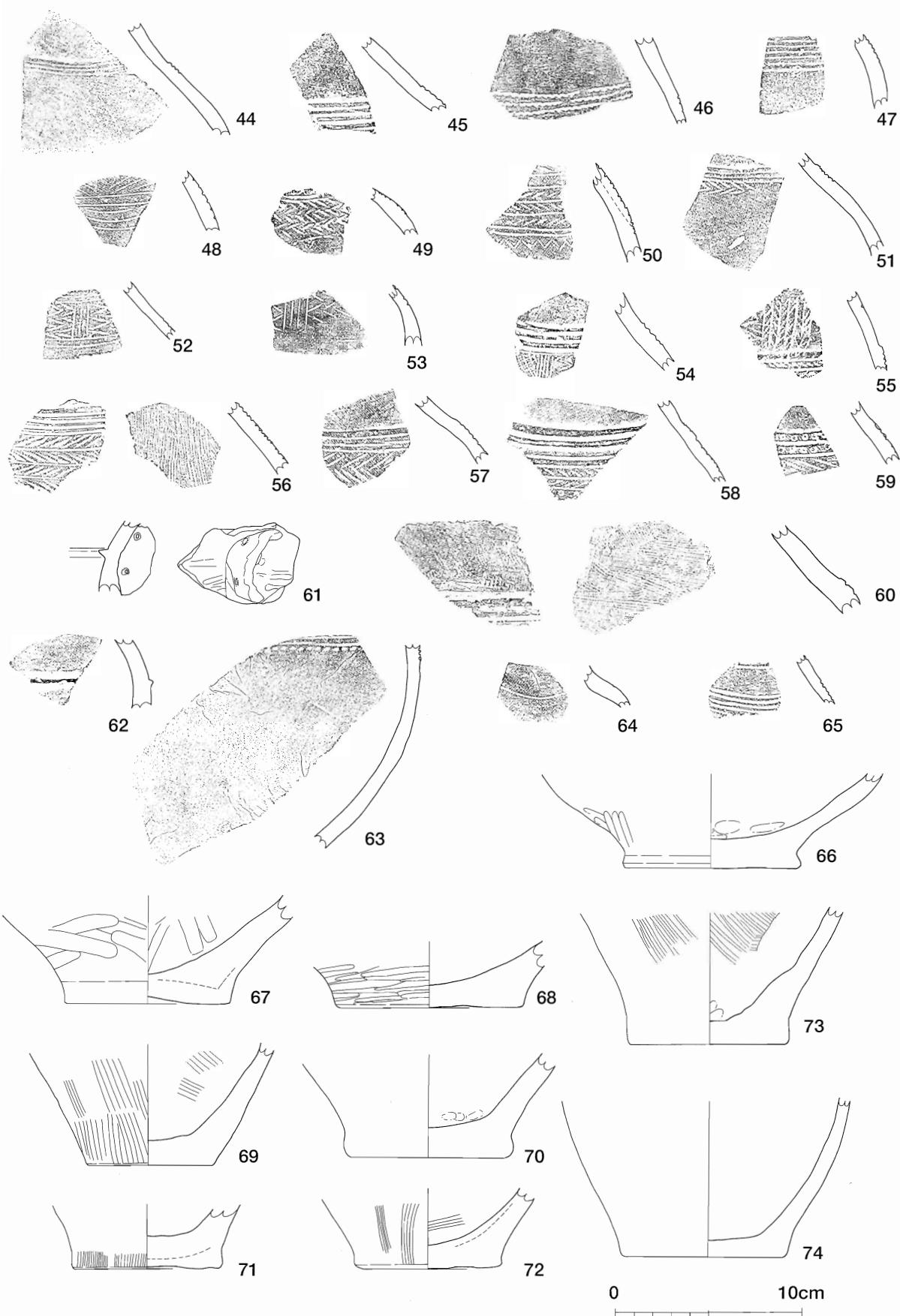
度に施す。36はやや小型の壺である。37～65は文様を持つ破片である。37はハケによる段を頸部に有す。39は小口による直線文を施す。40は削り出し突帯の上を貝殻で刺突する。42は直線文上に下に凸の貝殻による重弧文を施す。43は木葉文の下に3条の直線文を施し、直線文の間に刺突を施す。44、45は削り出し突帯を有す。46、47は貝殻直線文を施す。48は直線文の上下に重弧文を施す。49～59は羽状文や綾杉文を施す壺である。文様は貝殻（49～52、54、55）やヘラ（57～59）で描かれ



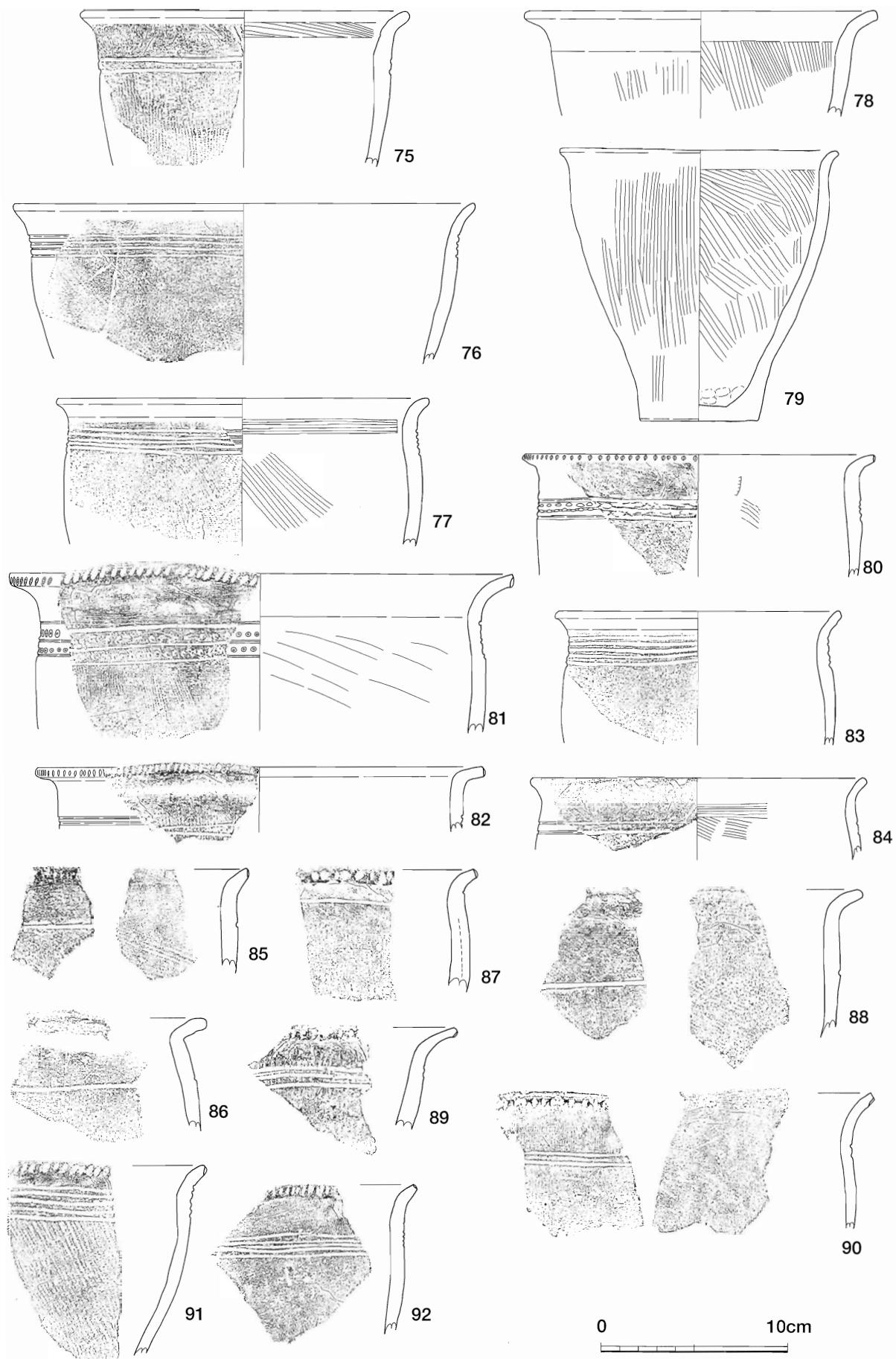
第53図 III区左岸青灰色砂礫層 5 出土土器実測図(1) (S=1/3)



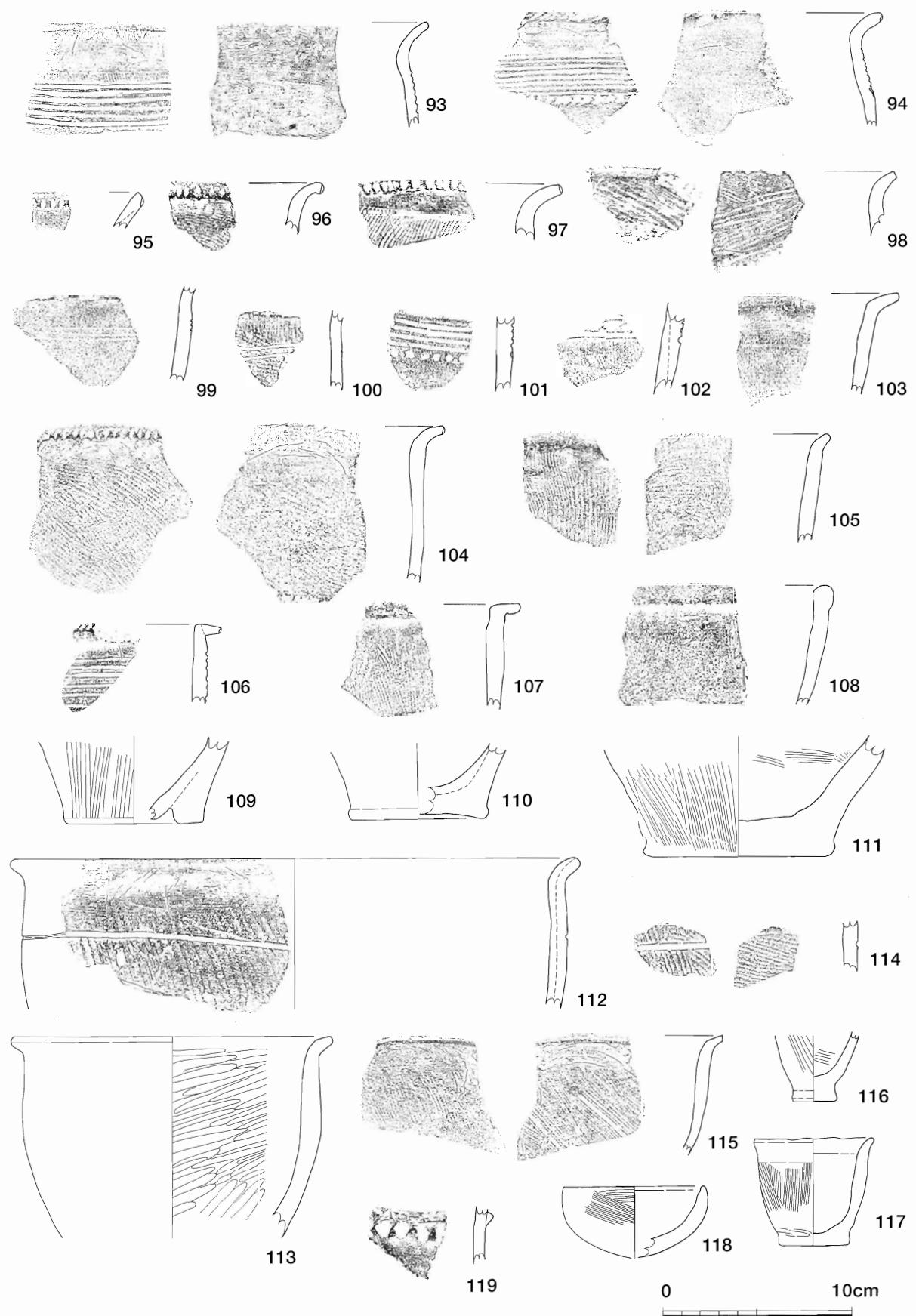
第54図 Ⅲ区左岸青灰色砂砾層 5 出土土器実測図(2) (S=1/3)



第55図 III区左岸青灰色砂砾層 5出土土器実測図(3) (S=1/3)



第56図 III区左岸青灰色砂礫層5出土土器実測図(4) (S=1/3)



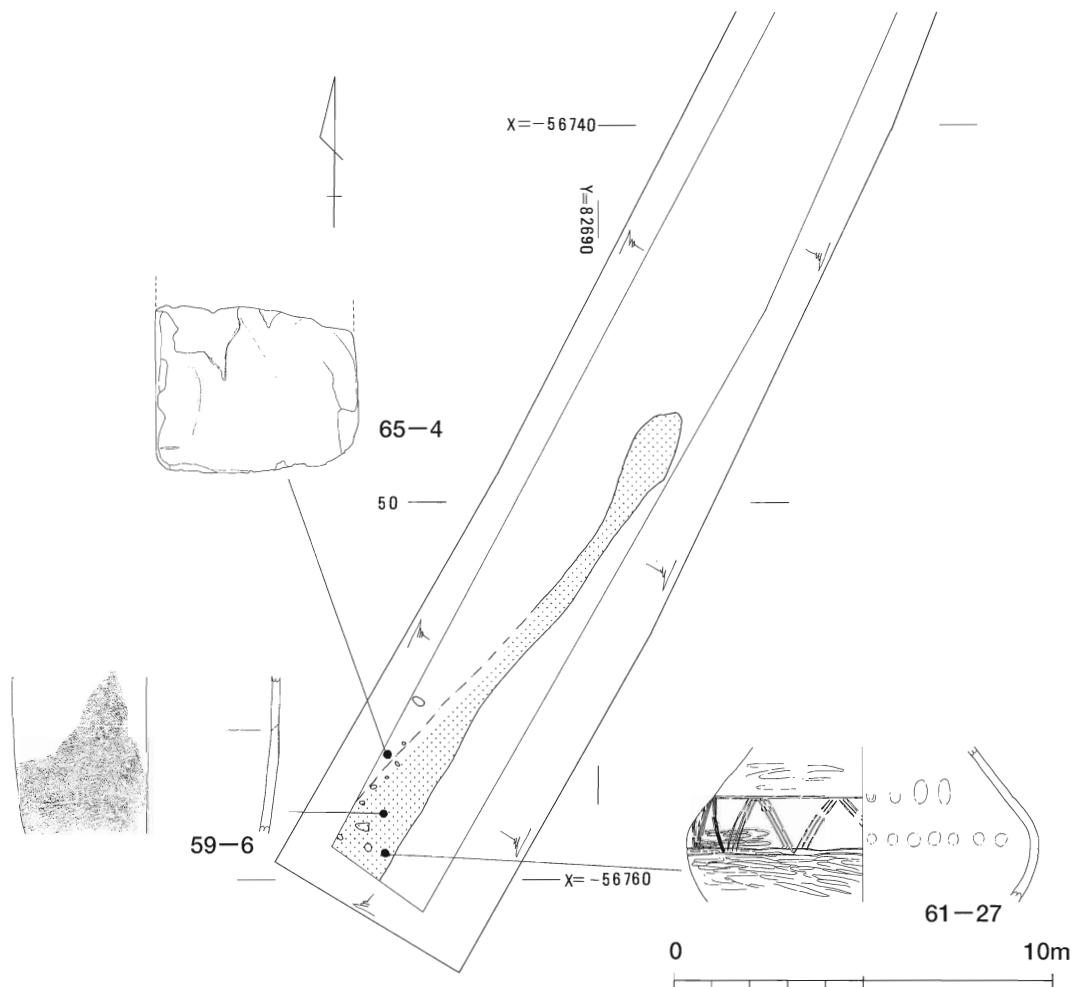
第57図 III区左岸青灰色砂礫層5出土土器実測図(5) (S=1/3)

ている。また、様々な文様と合わせて施されており、直線文（49～51、56）や縦の区画（52～54）、削り出し突帯（54、55、57～59）や竹管文（59）などが見られる。49～52の直線文は貝殻によって引かれている。50は綾杉文の下に貝殻による鋸歯文を施す。53の文様の原体は不明である。54は削り出し突帯の下に縦の区画を持ち、一方には羽状文、他方には斜格子文を貝殻で描いている。55は削り出し突帯の上に刺突を加え、その上には羽状文や縦の綾杉文を描く。56の綾杉文は小口で描かれている。58は削り出し突帯の上の直線文の下側をミガキにより低める。59は削り出し突帯の間に竹管文を施す。61は内面に突帯を有し、外面には「C」字状の突帯を直線文の上から貼り付ける。突帯には2つの孔が開いている。64はミニチュアの壺と考えられる。66～74は底部である。66はやや底部が突出する。67は幅の広いミガキを行う。底部の調整にはミガキとハケが見られる。

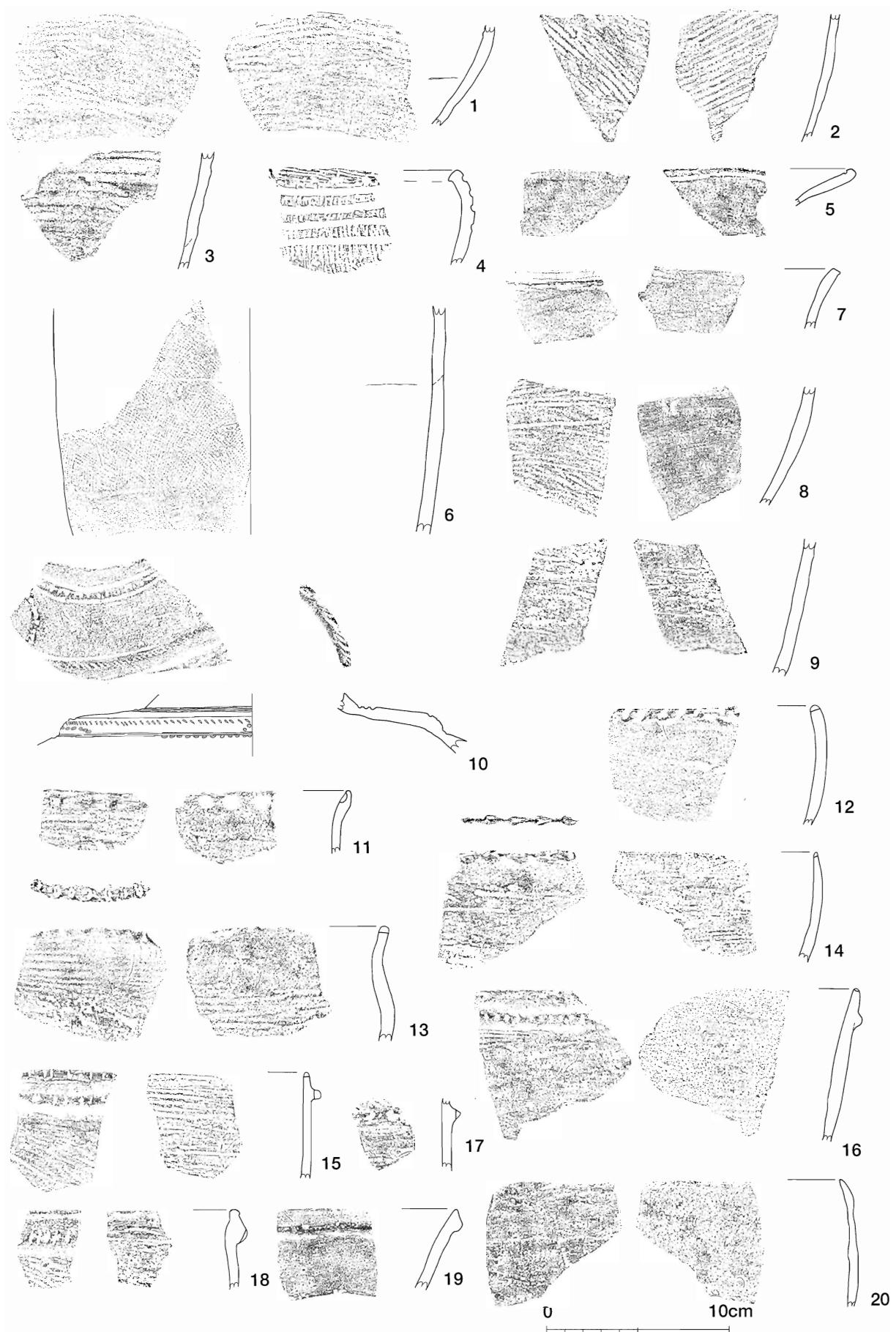
65は中期前葉の壺である。櫛描直線文を施す。

75～111は甕である。口縁部が短く屈曲するものと口縁部が直角近くまで屈曲する、屈曲の強いもの、そしてわずかではあるが逆「L」字状を呈するものに分けることができる。文様は1～数条のヘラ描直線文を施すものが多いが、78、79のように無文のものも少量見られる。

77の直線文には書き継ぎが見られ、上から見て反時計周りに施文されたことがうかがえる。91も同様である。78、79は共に口縁部は短く外反する。80、81は直線文の間に刺突を施している。80は直線文を切るようにその間に刺突文を施す。81は直線文の間に竹管文を施す。85～88は1条の直線



第58図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層6 遺物分布図 (S=1/200)



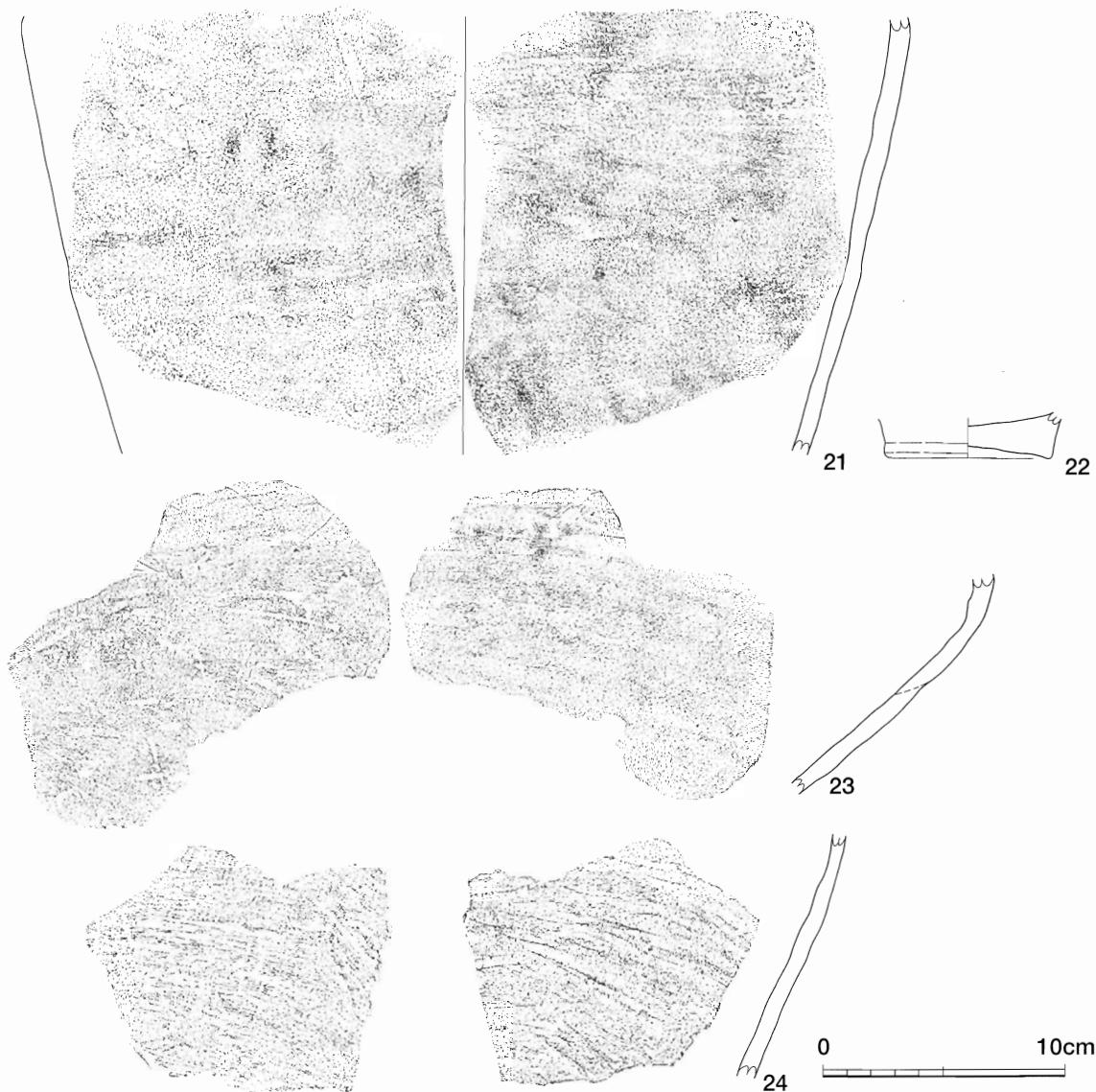
第59図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層6 出土土器実測図(1) (S=1/3)

文を施す。87の口縁端部の刻み目は大きい。89、90は口縁部の下端に刻み目を施す。91は直線文の上の稜が明瞭である。93、94は直線文がやや多条になる。96、97は直角近くまで頸部で屈曲し、ハケによる明瞭な段が付く。98はナナメハケによる調整の後に口縁部を折り曲げたので、頸部には指の痕が付いている。101は直線文の下に、102は直線文の間に刺突文を施す。102はヘラ状工具の先で刺突されたことがうかがえる。103～105は頸部や胴部上半に文様を欠く。106、107は口縁部が逆「L」字形を呈す。106には直線文が施されるが、107は無文のようである。108は砲弾形の体部を呈し、口縁端部が平たく肥厚する。胴部上半には文様を欠くようである。109～111は底部である。109は底部の外側を作つてから内側を作るので、高台状である。

112～115は鉢である。116、117はミニチュア土器である。118は小型の鉢の可能性を持つ。

25、26、33、37、66、78、79、113が前期中葉、32、34、35、47、63、101、102、106、107が前期末と考えられ、それ以外の土器のほとんどは前期後葉に属すると考えられる。

砂礫層5の堆積した時期の下限は、65から弥生時代中期前葉と考えられる。



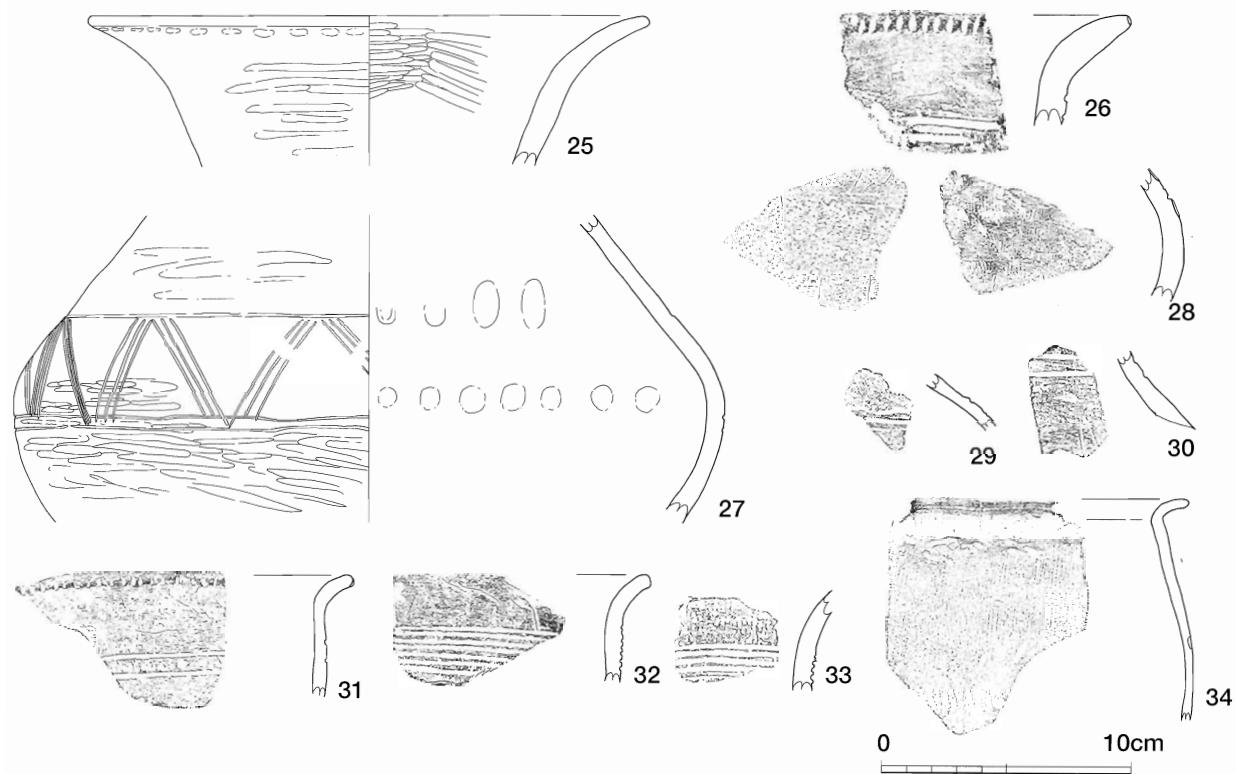
第60図 Ⅲ区左岸青灰色砂礫層6出土土器実測図(2) (S=1/3)

(11) 青灰色砂礫層 6、同出土土器（第58～61図）

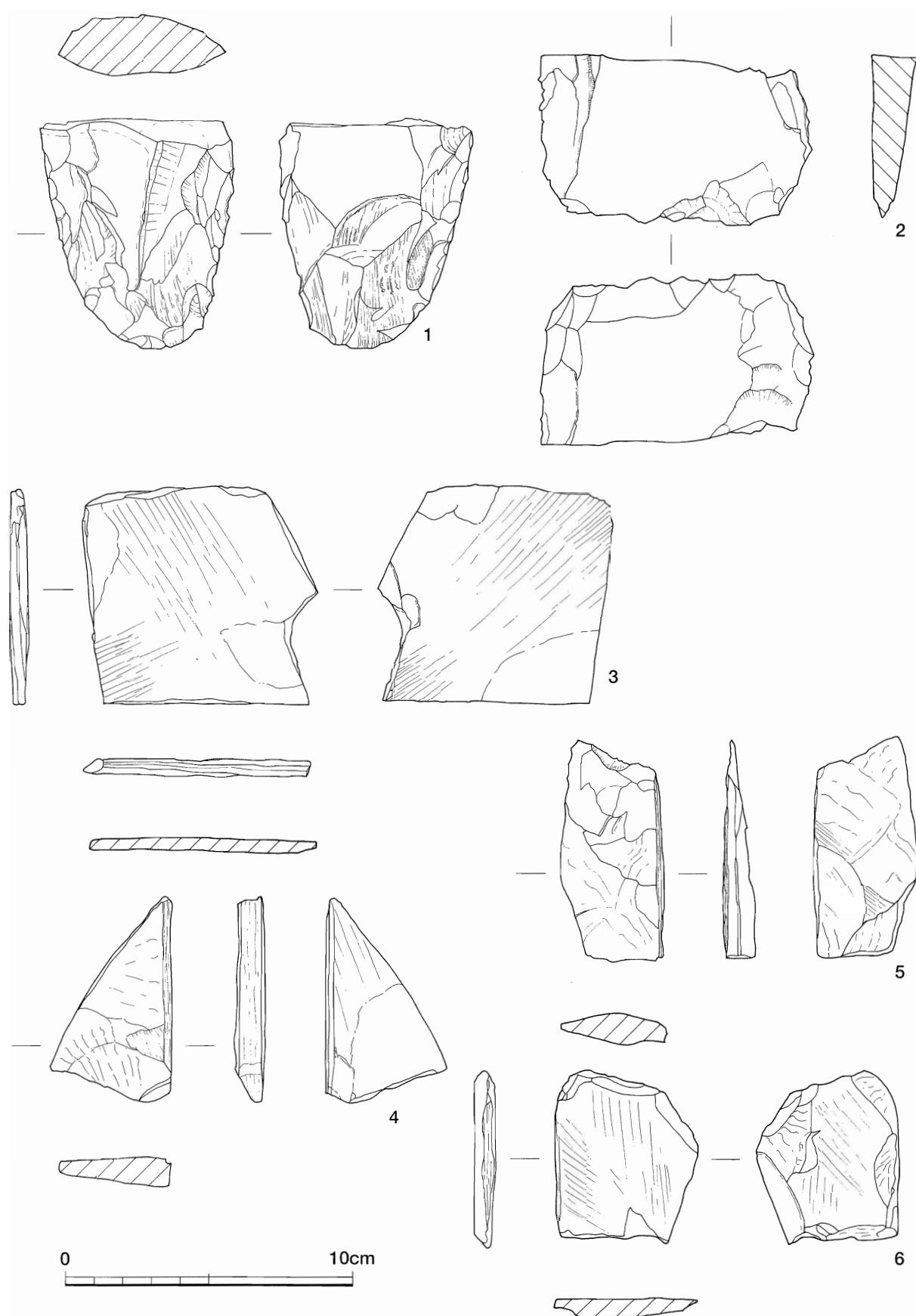
青灰色砂礫層 6 は、調査区の南端で確認された。上部は前述した砂礫層 5 により削平されていると思われる。調査区の中程の部分、標高-0.7～-0.8mに分布していた。土器の他、広鉗未製品（第65図4）が出土した。

砂礫層 6 から出土した土器の内、縄紋土器（1～24）、弥生土器（25～34）を図示した。量としては、縄紋土器の方が多く出土した。

1～3は前期の深鉢である。いずれも内外を条痕調整する。文様の部分は残っていなかった。4はやや胴部が張り、胴部が外彎して口縁部へ至る。地文に撚糸文を用い、口縁端部には胴部とは方向の異なる撚糸文を施す。口縁部の下には4条の沈線文を施す。中期の里木Ⅱ式と考えられる。5～10は後期の土器と考えられる。5は口縁部が大きく開く浅鉢で、口縁端部内面に1条の沈線を施す。6は深鉢の胴部であるが、胴部下位は地文をナデ消している。7は口縁部に面を持つ。10は注口土器と考えられる。胴が大きく張り、肩部と頸部で直線的に屈曲する。屈曲部には沈線を施し、地文は縄紋である。胴部上位には竹管による円弧文を施す。11～24は晩期の土器である。11は口縁部が開き、口縁部を内側から刺突する。12はやや口縁部がすぼまり、端部には刻みを施す。13は口縁部の下で屈曲し、端部は半截竹管状の工具で刺突を施す。14は半截竹管状工具を傾けて刺突を施す。15～19は刻目突帶文土器である。15はほぼ口縁が直立し、16はやや口縁が直線的に広がり、共に口縁端部と突帶上に刻み目を施す。突帶文Ⅰ期と考えられる。18は突帶が口縁に接し、小さな「V」字の刻み目を施す。19は口縁部が直線的に開き、突帶が口縁端部に接して面を持つ。突帶の上に刻み目は施されない。共に突帶文Ⅲ期と考えられる。20は口縁部がややすぼまり、端部は先細りである。突帶文土器に伴う粗製の深鉢と考えられる。21は大型の深鉢の胴部である。内外を条痕調整し、その後一部ナデを行う。23はやや尖底で肩部で強く屈曲すると思われる。内外を条痕調整し



第61図 III区左岸青灰色砂礫層 6 出土土器実測図(3) (S=1/3)



第62図 III区左岸出土石器実測図(1) (S=1/2)

た後、内面にはミガキを行う。24は外面はケズリ、内面は強いナデで調整する。いずれも突帯文土器に伴う、粗製の深鉢と考えられる。

25～30は壺である。25は口縁部の下に指の痕が付く。27は一部欠損しているが、胴部に三条一組の山形文を施し、口縁部側には段、胴部側には直線文を2条施す。直線文に約4～5cm毎に書き継ぎが見られ、山形文も直線ではなくわずかに丸みを帯びていることから、ヘラ状工具ではなく、腹縁にギザギザを持たない貝殻によって文様が施された可能性を持つ。28は羽状文と直線文の下に、「ハ」字状の刺突文を施す。原体は不明である。29は削り出しによって段を作り、その上下に羽状文を施す。30は直線文の下に、何かの文様がヘラ描で施されている。31～34は甕である。32、33はやや多条の直線文を施す。34は口縁部が屈曲し、胴部はタテハケの後下半にタテヘラミガキを行う。また、胴部には刺突文を施す。この土器は他の土器と比べ胎土が砂質で、器形も異なる。これのみ中期前葉で、27は前期中葉、29～31は前期後葉、その他の土器は前期後葉～末に属すると考えられる。

砂礫層6の堆積した時期の下限は、34から弥生時代中期前葉と考えられる。

〈2〉 石 器 (第62、63図)

III区左岸から出土した石器の内、9点を図示した。なお、石材は肉眼観察に依った。

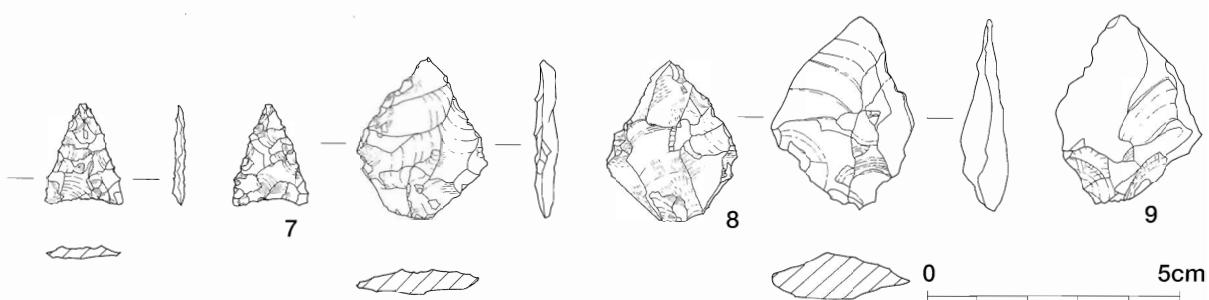
1は磨製石斧の未製品である。中程で破損している。全体に粗い調整を行った段階であると思われる。2は穂摘具の未製品である。表と裏に剥離面を残し、粗い調整を行った段階であると思われる。3～6は玉材の板状未製品である。原石に敲打を加えて4のように厚さ約1cmの板状の剥片を仕上げた後、擦り切りによる溝を掘る。この剥片の表裏に研磨を加えて、施溝分割により棒状の玉材を得る。3は調査区の南側、砂礫層3にほぼ対応する褐灰色泥層から出土した。厚さ約0.5cmまで研磨を加えており、二辺に施溝の痕が見られる。今回の調査で成品は出土しなかったが、太さ約0.5cmの棒状の材に更に研磨を加えたり切断することによって、成品を得ていたと考えられる。いずれも凝灰質泥岩である。

7は石鎌、8、9はその未製品である。7は平基式である。8、9は共に調整の途中であると考えられるが、現状の形態からは凸基式に分類される。石材は7、8が黒曜石、9が玉髓である。

他に図示はしなかったが、黒曜石の剥片が出土している。

〈3〉 木 製 品 (第64～67、71、72図)

木製品は13点(第64～67図)、杭は11点(第71、72図)を図示した。



第63図 III区左岸出土石器実測図(2) (S=2/3)

第64図1は完形で出土した直柄平鍬（狭鍬I式）⁽⁴⁾である。柄の部分が一部付いたままで出土した。全体に細長い形を呈し、舟形隆起を持つ。図の上の部分に見られる加工痕は方向が一定していないが、下の部分は中程に稜線を有し、斜め方向から加工を行っていたことがうかがえる。このため横断面は上下で形が若干異なる。先端付近の一辺には火を受けた痕が見られる。刃の部分は向かって左側がややすく減ったようになり、刃部は左右対称ではない。木取りは観察できなかつたが、柾目ではないかと考えられる。

2～4は広鍬の未製品である。いずれも舟形隆起を欠き、その部分は平坦である。2は柄の装着部分へ緩やかに移行する。反対側の面は加工痕が明瞭である。上と下の辺には切り放しの際の段が残り、上辺には中程まで連続した加工痕が見られる。泥除けを装着する部分はまだ作られておらず、厚みもあることから、大まかな成形を行っている段階と考えられる。第65図3の加工痕は不明瞭で、厚みは2の半分以下である。大まかな成形や調整を終了して、仕上げのための細かな調整の段階と思われる。4は半分ほどしか残っていないが、短辺には切り放しの際の段を残す。厚みを持つので、側面は平坦である。木取りは観察できなかつたが、柾目ではないかと考えられる。いずれも広鍬B式の未製品ではないかと思われる。

5は一辺が直線的、残りが曲線的である。直線的な一辺には小さな孔が開いており、鍬と紐で結びつけるための孔ではないかと思われる。全体に薄手である。形態から泥除けではないかと思われるが、断面は屈曲せず直線的なので、泥除けではない可能性もある。木取りは観察できなかつた。

第66図6は腐食が進んでいるが、木葉形を呈しており、やや長方形の孔を2つ一組で3対あけてある。中程の長方形の孔の間には更に孔が開けてある。形態から田下駄の可能性を持つ。

7は先端付近でやや曲がり、先端には加工が施してある。弓の一部ではないかと考えられる。8は板状の部分に丸く抉りがあり、火切り臼の可能性を持つ。9は厚みのある板状の部分の先端が断面三角形を呈しており、加工材の破片ではないかと考えられる。

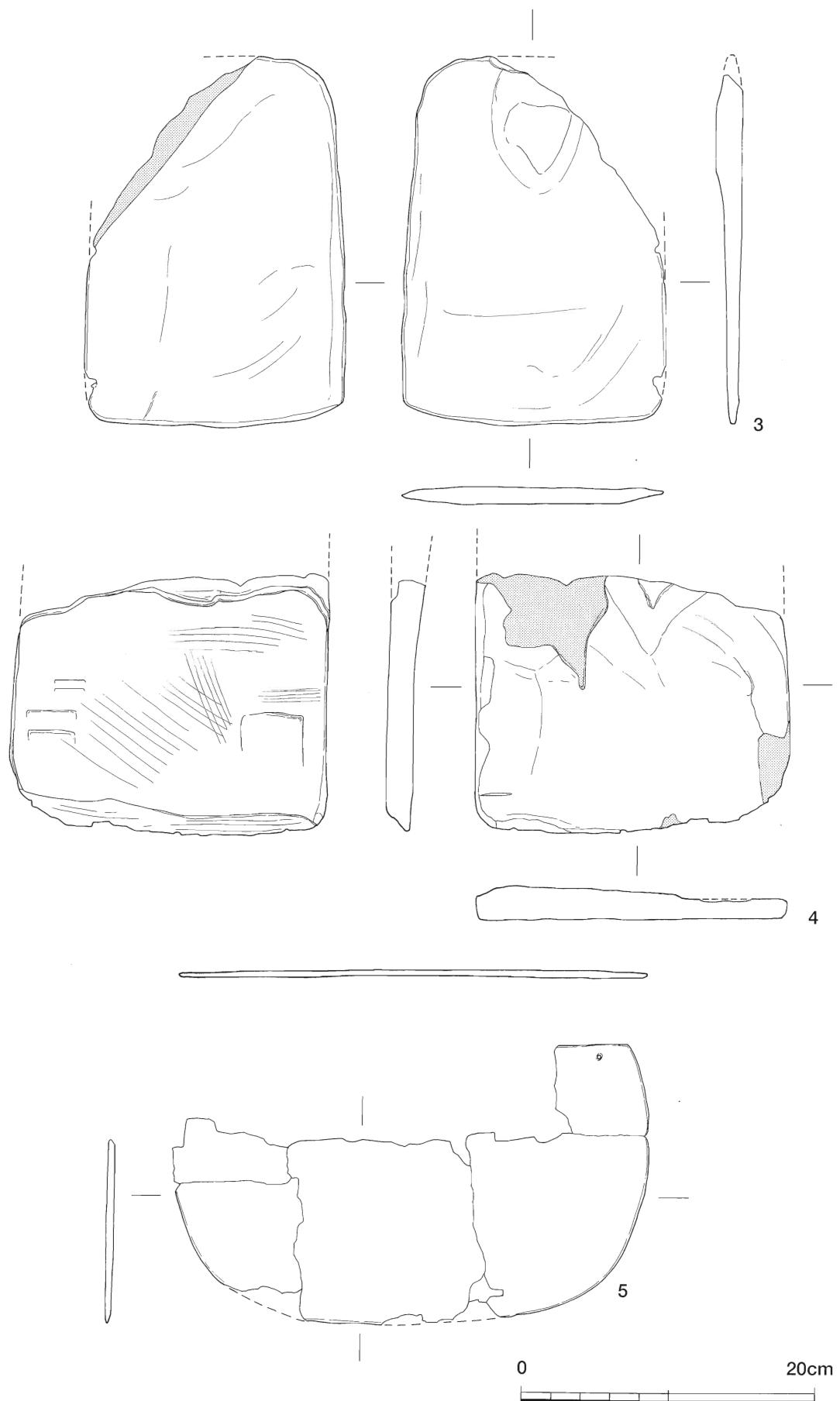
第67図10は木製高杯の一部である。口縁部には一部わずかに面を持つところがある。11は断面菱形の板状の材に断面が楕円形で径約1cmの把手状の部分が付く。破損しているが、その部分を中心にして炭化している。板状の部分には中心よりやや外側へ寄ったところに段が付き、方形の小さい孔が片面からあけられている。把手状の部分は面を持って仕上げられている。機織り具の一部であると考えられる。12は棒状の木製品の先端で、断面はやや楕円形である。先端は尖っている。先端の部分を中心に幅3～4mmの纖維を巻いている。この纖維は何箇所も巻いているのが確認されるが、基本的に単巻きで螺旋状には巻いていない。13は棒状の木製品であり、完形である。先端付近と頂部は丁寧に仕上げられている。頂部は面取りして仕上げられており、端面も丁寧に仕上げられている。先端付近も面を持って仕上げられており、先端はわずかに抉りを作つて丸く仕上げられている。ヤスのような用途を想定することができる。

Ⅲ区左岸の杭の検出位置を第68～70図に示した。密集するなどの規則性は見られないが、5～10mほどの間隔で杭を打つ可能性を考えることが出来る。杭の直径は5～7cmのものが中心であるので、杭の上に施設があったとは考えがたい。舟を繋ぎ止めるような簡単な施設ではないかと思われる。

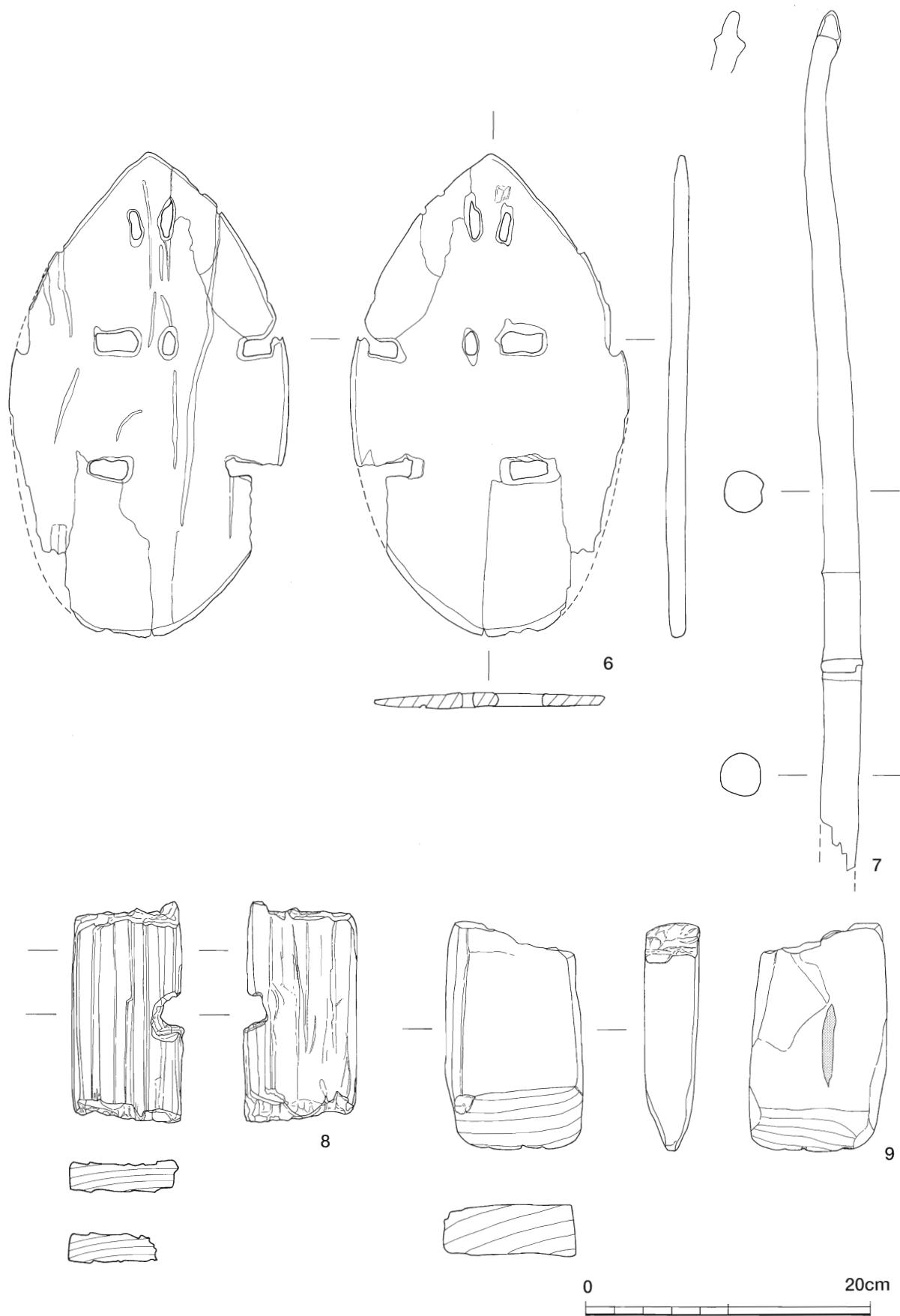
第70図の杭11付近では標高-0.7～-0.8mから拳大～人頭大の円礫が密集して見つかり、石を組んだ護岸のような施設があったことがうかがえる。しかし標高が低いことから、元々の形をとどめ



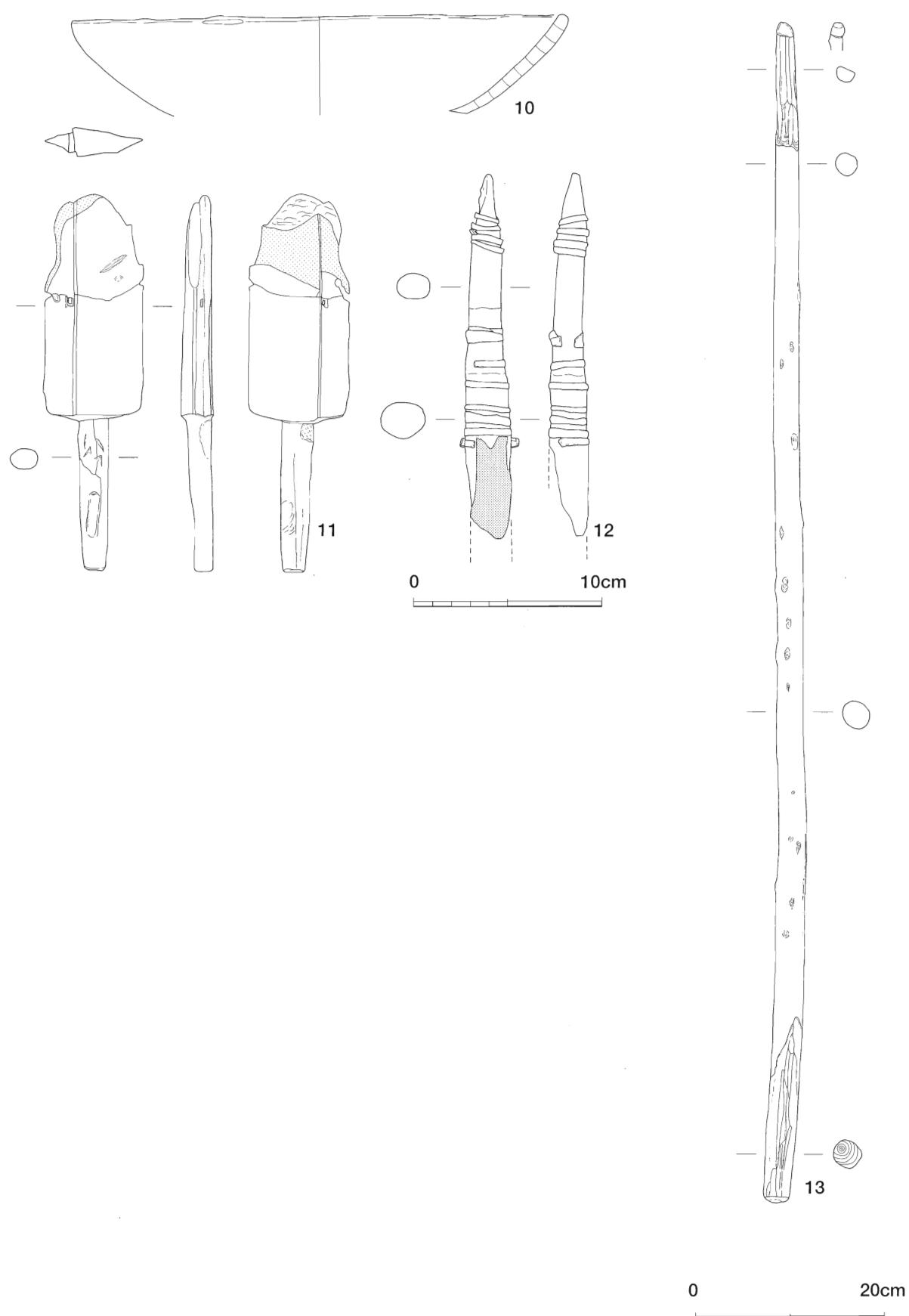
第64図 Ⅲ区左岸出土木製品実測図(1) (S=1/4)



第65図 Ⅲ区左岸出土木製品実測図(2) (S=1/4)



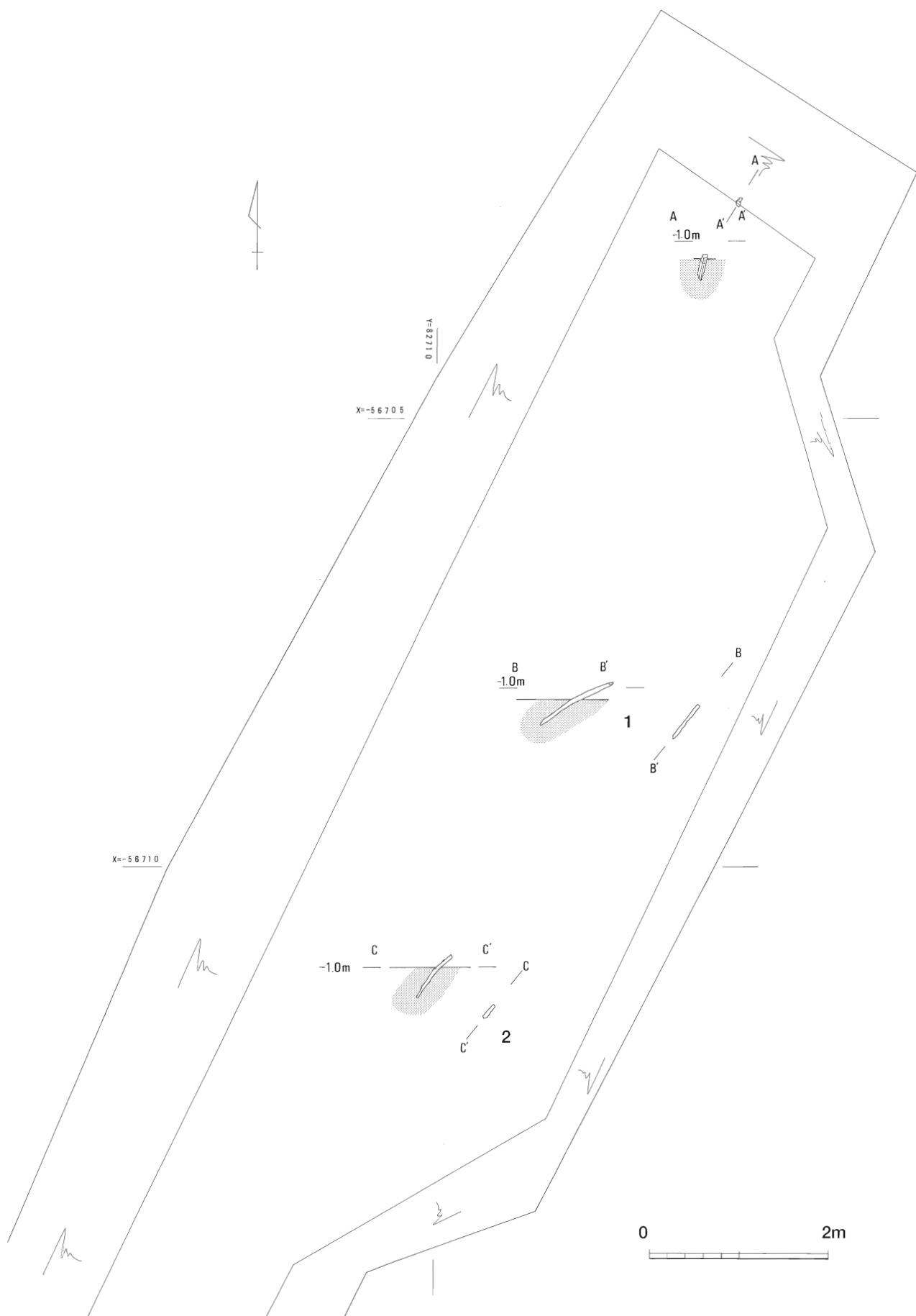
第66図 Ⅲ区左岸出土木製品実測図(3) (S=1/4)



第67図 Ⅲ区左岸出土木製品実測図(4) (S=1/3、13のみS=1/6)



第68図 Ⅲ区左岸杭の位置図 ($S=1/250$) ※番号は実測図に一致

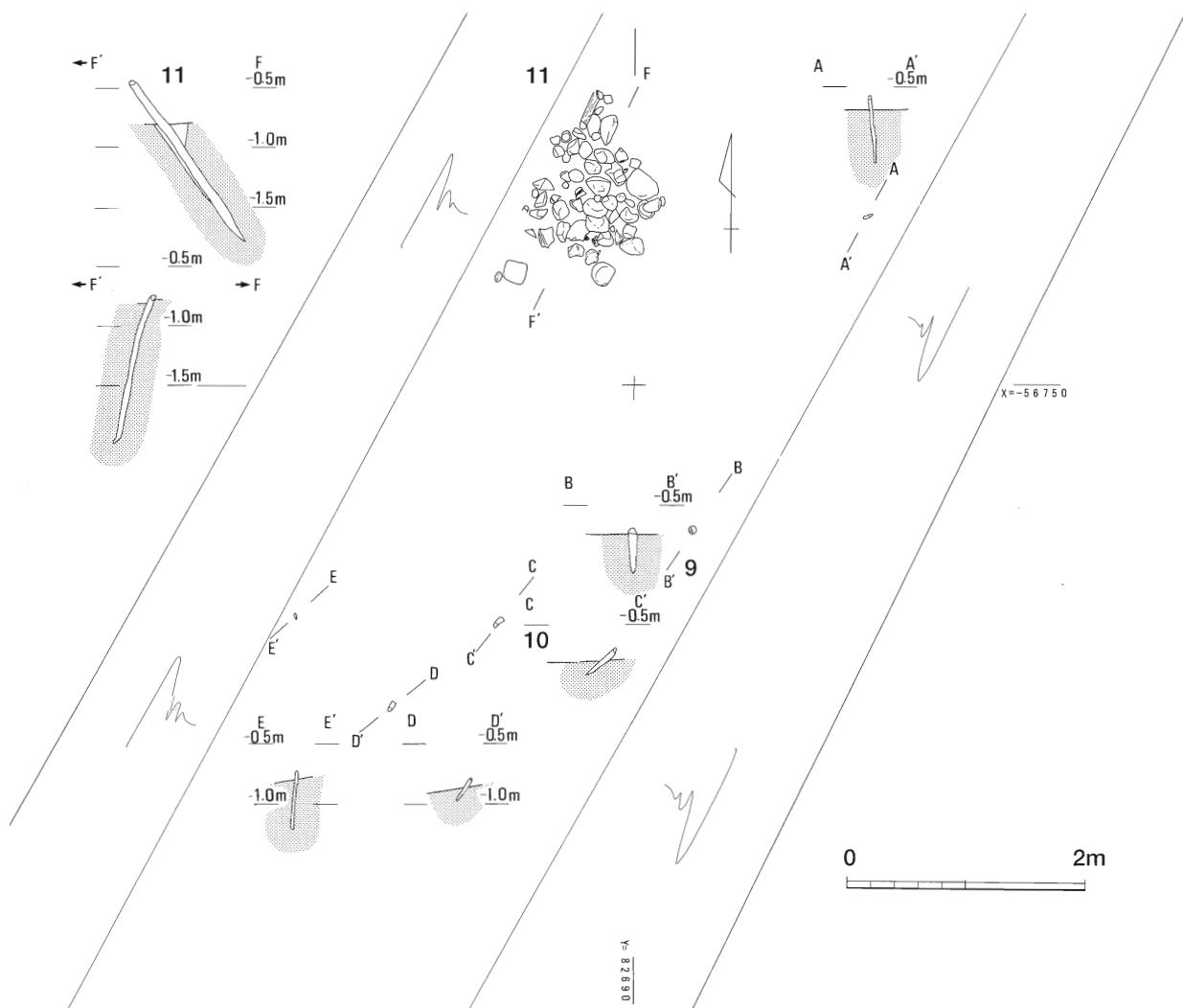


第69図 III区左岸杭検出状況図(1) (S=1/60) ※番号は実測図に一致

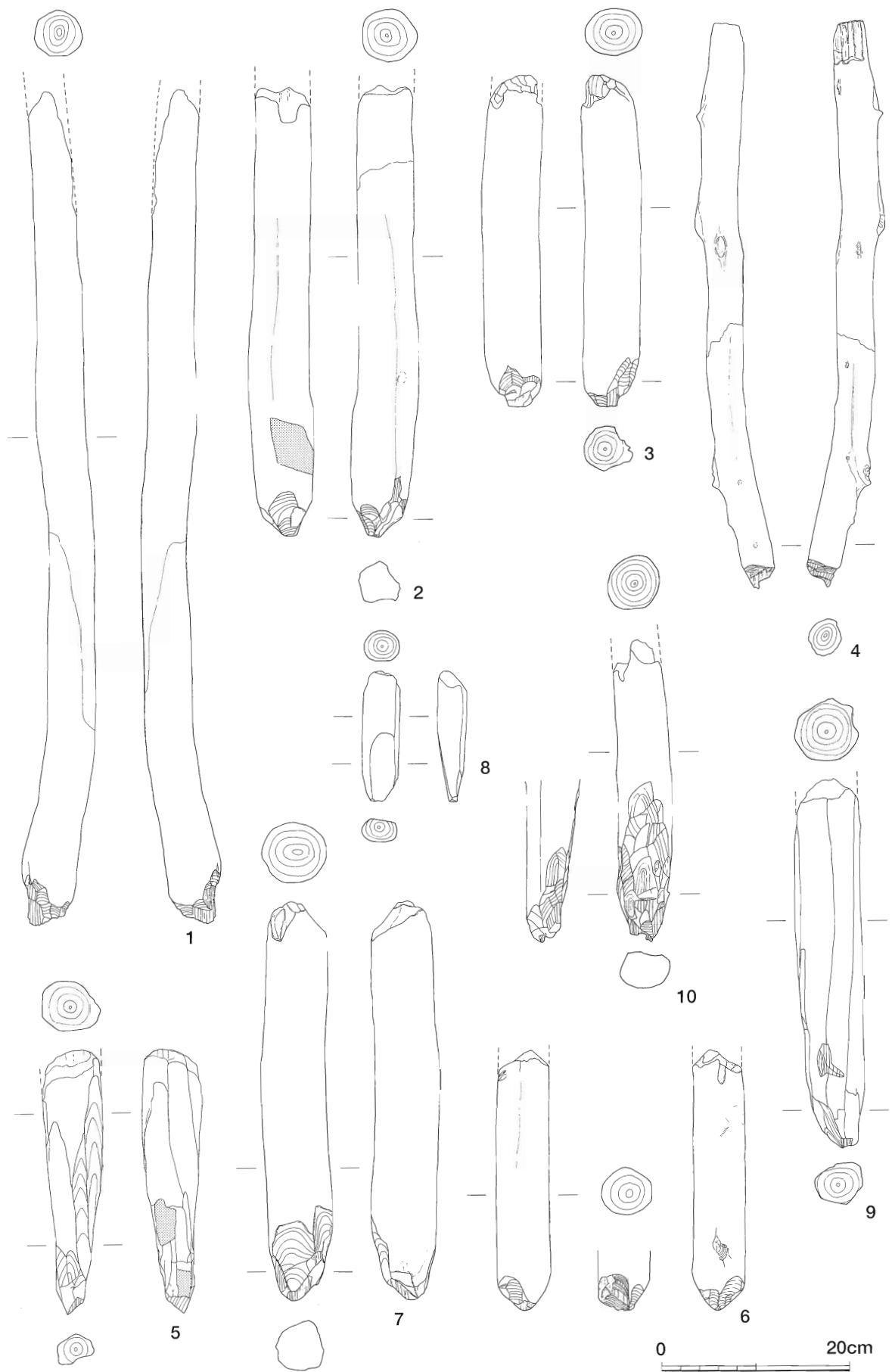
てはないと考えられる。

第71図1は先端に切断面を大きく残し、周囲から加工を行う。加工部分の長さは現存の長さに比べて短く、一定していない。2は切断面を残し、四方向から加工を行う。それぞれの加工部分には先端に向けてだけではなく横方向にも加工を行う。3はわずかに切断面を残し、三方向から加工を行うが、一方向のみ加工部分の長さが他に比べて長い。4は他の杭に比べやや細く、節がある。中程で変色しており、土中にあった部分を示す。切断面を大きく残し、三方向から加工を行う。5は切断面を残すが、長く剥ぐような加工を行い、先端には更に若干の加工を行う。6は切断面を残し、三方向より加工を行う。中程で変色する。7は切断面を残し、三方向より加工するが、3のように一方向は他に比べ加工部分の長さが短い。8はⅢ区左岸の杭の内最小のものである。先端に切断面を残さず、一方から加工を行い、先端付近にわずかに加工を行う。加工部分は平坦で加工が鉄器で行われた可能性を示唆する。9は切断面を残し、長く剥ぐような加工を行い、一方向から先端へ向けて加工を行う。10は切断面を残し、主に一方のみから加工を行うが、杭の先端へ向けて連続的に加工を行う。この加工部分の反対側にはほとんど加工が及ばない。

第72図11は最長の杭で、長さ169.6cmを測る。節を加工しているが、その付近で変色している。先端は切断面を残さずに、五方向から先端を尖らせ気味に加工を行う。加工痕は平坦で、鉄器で加



第70図 Ⅲ区左岸杭検出状況図(2) (S=1/60) ※番号は実測図に一致



第71図 Ⅲ区左岸杭実測図(1) (S=1/6) ※番号は第68~70図に一致

工した可能性を示唆する。杭はいずれも芯持ちである。

これらの杭の内、5、9はⅡ区の杭の西川津1類、1、2、4、6は西川津3類、8、10は西川津4類に類似する。一方11のように先端を尖らせた杭は、Ⅱ区では見られなかった。縄紋時代の杭で行った分類に類似するものが、Ⅲ区左岸の杭の多くにも見られることは、対象とする木（枝）の太さによって削り方を変えるという事は石器を使用している段階において普遍性を持つのではないかと考えられる。後述するⅢ区右岸では角材や転用材が見られるなど、杭の製作技法には多くの相違が見られる。これは用途の相違と考えることができると、それに加えて利器の変化という要素もあったのではないかと考えられる。

杭の時期であるが、ほとんどの杭は青灰色泥層の直上に堆積していた砂礫層1や砂礫層5、6によって傾いていたので、弥生時代中期前葉にはすでに杭が打たれていたことが想定される。なお、杭4は¹⁴C年代測定を行い、2920±150BP (Gak-19549) という結果を得た。この値はⅡ区で行った¹⁴C年代のうち、杭の下限を示す値に近いが、直線距離で200m以上離れており、一連のものとして考えることは難しい。Ⅲ区左岸の杭にはⅡ区の杭に形態が似るものがあることから、縄紋時代までさかのぼるものがあるかもしれないが、加工痕の断面が平坦なものがあることから、杭の多くは弥生時代に属するのではないかと考えられる。

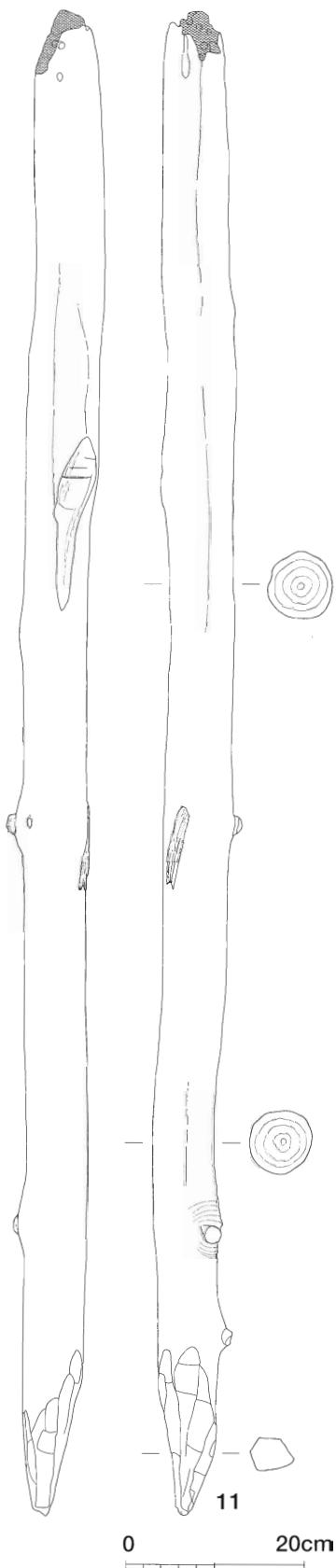
〈4〉 土 製 品 (第73図)

Ⅲ区左岸からは土錘3点、土製円板2点、土器片錘2点が出土し、図示した。

土錘は紡錘形を示すものと円形のものがある。このうち円形のものは「土玉」の可能性を持つ。1は紡錘形で大きく、直径も4.3cmと太い。2は径が約3.8cmの円形である。3は紡錘形で細長く、径は2.7cmである。

4、5は土製円板である。共に円形で、土器片を転用している。孔は見られない。4は径が4.0cmである。5は4より大きく、裏面に煤が付着しているので、甕の破片を転用したと考えられる。

6、7は不正円形なので土器片錘に含めた。6は上下に打ち欠いた痕がある。表にはハケが残る。7は6より大きい。摩滅していて調整は不明である。これらの土製品は、砂層や砂礫



第72図 Ⅲ区左岸杭実測図(2)
(S=1/8)

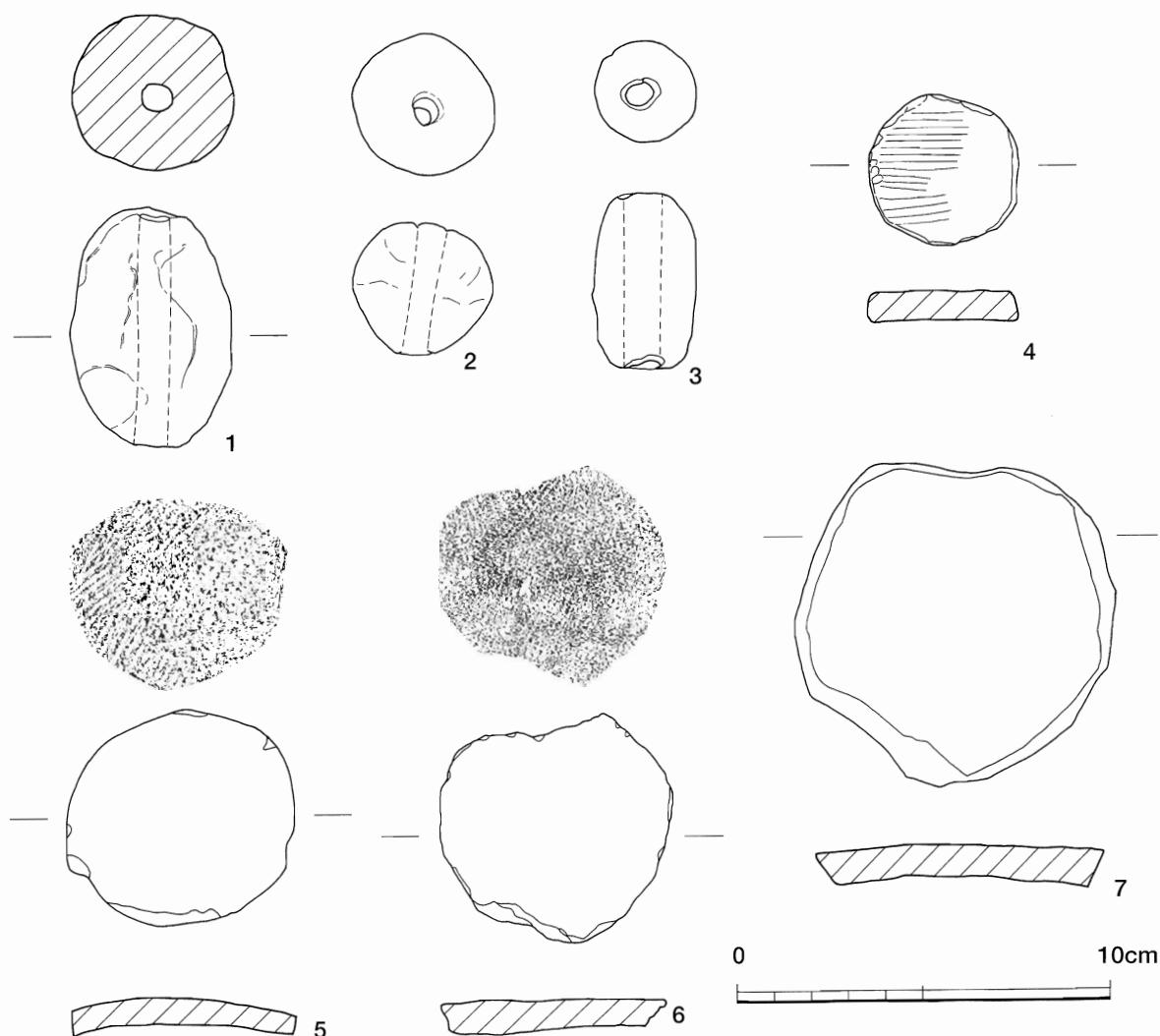
※番号は第68・70図に一致

層から出土したので、弥生時代前期～中期前葉に属すると考えられる。

第4節 小 結

Ⅲ区左岸では、弥生時代前期～中期前葉の河川堆積層から、縄紋土器や弥生土器、石器や木製品、杭が出土した。Ⅲ区左岸では中期前葉より後の時代の堆積層は見つからなかったので、朝酌川の流れは中期前葉以降は調査区の西側、後述するⅢ区右岸の方へ変化したことが想定される。

- ① 堆積層中より出土した流木の¹⁴C年代測定を行ったが、直接堆積層の時期を示す値よりもむしろ堆積した時期の上限を示す可能性を持つ値と考えられるものがあった。
- ② 土器は縄紋時代前期から弥生時代中期前葉の土器が出土した。特に量が多かったのは弥生時代前期中葉～末の土器であり、朝酌川遺跡群の調査で出土したこの段階の資料を更に豊富なものにした。特筆される土器として、刻み目の無い突帯文土器や弥生時代前期前葉までさかのぼる可能性のある土器がある。なお、土器は砂礫層中から底部を上に向けて出土したものが多く見られた。
- ③ 石器では板状未製品が出土したことから、西川津遺跡における玉作の資料が更に増加した。木



第73図 Ⅲ区左岸出土土製品実測図 (S=1/2)

製品では、広鍬未製品や杭があったが、砂層3出土の直柄平鍬（第64図1）が特筆される。朝酌川遺跡群では未製品を含めて、西川津遺跡第2次調査で2点⁽⁵⁾、タテチョウ遺跡の調査で計3点⁽⁶⁾が出土しており、本出土例を加えて合計6点を数える。

これらの遺物は調査区の南側ほど多く出土したが、集落をどこに想定することが出来るのか、海崎地区との比較検討が今後の課題である。

註

- (1) 弥生時代前期～中期前葉の編年については、松本岩雄「出雲・隱岐地域」、正岡睦夫・松本岩雄編 1992『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 pp.417～435に準じ、次章以降も用いる。なお、指標として次のように理解した。

I－1 様式：段が中心。紋様は重弧文や綾杉文が用いられる。「(前期) 前葉」と表現した。

I－2 様式：段が不明瞭となり、ハケ原体やヘラ先での押圧や削り取りで段を表現する。ヘラ描直線文や削り出し突帯が出現する。直線文は2条程度である。貝殻施文が始まる。文様では綾杉文の他に、重弧文、直線文、羽状文、木葉文が用いられる。「中葉」と表現した。

I－3 様式：削り出し突帯や貼り付け突帯が用いられる。2～4条のヘラ描直線文が施される。文様では木葉文や流水文が用いられる。壺では施文範囲が肩から胴部へ広がるもののが現れる。甕では胴部の張るものが現れる。「後葉」と表現した。

I－4 様式：多条のヘラ描直線文や貼り付け突帯が用いられる。口唇部に羽状文や斜格子文が施される。直線文の間や下に刺突文が施されるものが多くなる。逆「L」字状口縁の甕が出現する。壺には頸・肩・胴部の三つの施文部位を持つものが現れるほか、施文部位がさらに広がるもの、口縁内に刺突文や突帯を持つものが現れる。「末」と表現した。

II 様式：櫛描文を用いる。個々の土器の形態や文様構成にはI－4様式の要素を認めることができる。

- (2) 突帯文土器の編年については、濱田竜彦ほか編 1998 「日久美遺跡V・VI」『(財)米子市教育文化事業団発掘調査報告書』25 pp.153～162に準じ、次章以降も用いる。

- (3) 註(2)文献 pp.158～160

- (4) 木製品の名前については、上原真人編 1993 『木器集成図録 近畿原始編 奈良国立文化財研究所 史料第36冊』に準じ、次章以降も用いる。

- (5) 石井 悠・村尾秀信 1982 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 島根県教育委員会 第16図12、13 pp.24、27

- (6) 柳浦俊一編 1988 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 島根県教育委員会 第66図1、2 pp.147、162

- 三宅博士・柳浦俊一編 1990 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書Ⅲ』 島根県教育委員会 第125図W61 pp.232、233

表3 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土土器観察表

插図番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
34-1	甕	表土下	26.4	20.6	ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ	茶灰褐色	30	煤付着
34-2	壺?	"			ヘラ描直線文5条以上	ナデ ヘラミガキ	黒褐色		
34-3	浅鉢	砂層1			沈線文2条	ナデ? 条痕	淡灰色		全体に磨滅
34-4	深鉢	"	21.0	8.0		条痕 ナデ	淡黄灰色	10	"
37-1	深鉢	粗砂～砂礫			刺突文4列以上	不明	暗褐色		"
37-2	壺	"	35.6	8.6	ヘラ描直線文1条	ヘラミガキ ナデ	淡灰色	10	
37-3	"	"	19.0	5.7	削出突帯	ヘラミガキ	灰褐色	25	
37-4	"	"			口縁下端に刻目	ハケ ヘラミガキ	淡黄灰色		口頸部境に段
37-5	"	"			ハケによる段	ナデ ハケ	濁茶灰色		
37-6	"	"			削出突帯	ハケ ナデ	黒灰色		
37-7	甕	"			ヘラ描直線文4条				
37-8	"	"			口縁端部に刻目	ナデ ハケ	暗茶褐色		外面煤付着
37-9	"	"			ヘラ描直線文2条				
37-10	"	"			木口による刻目	ハケ 板ナデ?	淡茶褐色		"
38-1	壺	粗砂と砂礫1の間	15.4	7.0	ヘラ描直線文1条	口頸部境に段	ヘラミガキ	淡灰色	10 全体に磨滅
38-2	"	"			間に刺突文	ヘラミガキ	暗茶色		
38-3	"	"			木口による刺突文	ハケ ナデ	淡灰色		
38-4	甕	"			ハケによる段	ナデ ハケ	淡褐色		外面煤付着
40-1	深鉢	砂礫1				条痕 ナデ	暗茶褐色		内外面煤付着
40-2	"	"				条痕	暗茶褐色		外面煤付着
40-3	"	"				条痕	青灰色		全体に磨滅
40-4	"	"	(22.0)	9.5	沈線文1条 上げ底	条痕 ナデ	淡灰色	10	胴部最大径
40-5	"	"			卷貝条痕? ナデ		淡灰色		
40-6	"	"			条痕 ナデ	暗茶褐色			外面煤付着
40-7	深鉢底部	"	(7.0)	2.8	ナデ ヘラミガキ	淡灰褐色	30	底部径	
40-8	浅鉢	"			ミガキ?	淡灰色			
40-9	深鉢	"			口縁端面と突帯に刻目	条痕 ナデ	淡茶褐色		内外面煤付着
40-10	"	"			刻目突帯文	条痕	灰白色		
40-11	"	"			ナデ?	暗褐色			
40-12	"	"			条痕 ナデ?	淡灰色			
40-13	"	"			条痕	淡黄灰色			
40-14	"	"			ヘラ状工具で施文	ナデ?	暗茶褐色		全体に磨滅
40-15	底部	"	(5.2)	1.5	上げ底 全体に磨滅	不明	淡茶褐色	底部完存	底部径
40-16	壺	"	15.0	5.3	口頸部境に段	ヘラミガキ	褐色	10	
40-17	甕底部	"	(8.1)	4.2	ナデ 条痕	灰褐色	20	底部径 磨滅	
40-18	甕	"	22.4	15.2	ナデ ハケ	灰白色	15		
41-1	壺	暗褐泥	(35.0)	36.0	ヘラ描直線文2条以上	ハケ ヘラミガキ	暗褐色	40	胴部径 剥落 底部径9.4cm
41-2	"	"			三角形刺突文				
41-3	甕底部	"	(3.6)	2.5	ヘラ描直線文2条の間に刺突文	ナデ ハケ	黃灰色		刺突は纖維の先
41-4	壺底部	"	(6.3)	10.6					底部径 煤付着
43-1	深鉢	砂礫2			刻目突帯文	条痕	灰褐色		
43-2	"	"			刻目突帯文	条痕?	暗褐色		
43-3	小型の壺	"	4.2	4.3	煤付着 底部径	ヘラミガキ ナデ	淡灰褐色	50	ミニチュア?
43-4	壺	"			削出突帯	ナデ	淡灰色		
43-5	"	"			ヘラ描直線文2条				
43-6	"	"			直線文 羽状文	ハケ ナデ	淡黄灰色		
43-7	"	"			縦区画				
43-8	貝殻木葉文?								
43-9	ヘラ描直線文8条以上								
43-10	刺突文								
43-11	壺底部	"	(8.3)	11.0		ナデ ヘラミガキ	淡灰色	50	底部径
43-12	甕用蓋	"	24.0	13.0	内面煤付着	ハケ ヘラミガキ	淡灰褐色	85	頂部径6.5cm
43-13	甕	"			口縁端面刻目	ナデ?	淡灰色		
43-14	"	"			ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ	淡茶褐色		外面煤付着
43-15	甕	"			ヘラ描直線文	ナデ ハケ	茶褐色		
43-16	"	"			櫛描直線文	ナデ?	淡黃灰色		
43-17	鉢	"	35.6	8.6	櫛描波状文	ナデ?			
44-1	甕	砂層2			ヘラ描直線文1条	ナデ ヘラミガキ	淡灰色	10	
44-2	"	"	15.8	5.6	口縁端面に刻目	ナデ ハケ	暗茶褐色		
44-3	"	"	19.4	4.5	ヘラ描直線文1条	ハケ 丁寧なナデ	淡茶褐色	15	
44-4	短頸壺	砂礫3	11.4	10.8	口縁端面刻目	丁寧なナデ	暗茶褐色	15	外面煤付着 逆L字口縁
44-5	"	"			ヘラ描直線文	ヘラミガキ ハケ	暗褐色	25	胴部径15.4cm

捕団番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	残存率	備 考
44-5	鉢	砂礫3				ヘラミガキ	暗茶色		外面煤付着
44-6	壺	"			口縁端面刻目	ハケ ナデ	濁茶色		
44-7	甕	"			削出突帯 ヘラ描直線文2条	ハケ ヘラミガキ	淡灰褐色		
47-1	深鉢	砂層3				条痕	暗褐色		
47-2	壺	"	14.8	16.4	削出突帯 ヘラ描直線文3条と1条	ヘラミガキ ナデ ハケ	淡灰褐色	35	
47-3	"	"			直線文6条以上 口縁端面に綾杉文	ヘラミガキ	淡灰色		
47-4	"	"			ハケによる段	ナデ	淡灰色		
47-5	"	"			貝殻描直線文4条の間に竹管文	ナデ	淡乳褐色		
47-6	"	"			削出突帯 ヘラ描直線文4条	ナデ	黄灰色		
47-7	"	"			ヘラ描羽状文 縦と横区画	ナデ	淡黄色		
47-8	"	"			貼付突帯に刻目	ハケ ヘラミガキ	淡灰褐色		
47-9	甕	"	24.8	10.7		ハケ	淡灰褐色	10	
47-10	"	"			口縁下端に刻目 ヘラ描直線文5条	ナデ ハケ	暗褐色		外面煤付着
47-11	"	"			" ヘラ描直線文2条以上 円形刺突文	ハケ ナデ	淡灰色		
47-12	"	"			" ヘラ描直線文5条	ハケ ナデ	淡乳灰色		
47-13	"	"			"	ハケ ナデ	淡灰色		
47-14	甕底部	"	(7.0)	6.7	内面煤付着	ハケ ナデ	黄灰色	底部完存	底部径
49-1	深鉢	砂礫4			口縁部肥厚帯の上に竹管状工具による刺突文	条痕?	暗褐色		
49-2	"	"			"	ナデ	暗褐色		全体に磨滅
49-3	"	"			爪形文	条痕 ナデ	濁茶色	"	
49-4	"	"	29.4	7.3		ミガキ	淡灰色	20	
49-5	"	"	18.6	5.1	刻目突帯文	不明	淡灰色	10	
49-6	"	"			"	条痕 ナデ	淡灰色		
49-7	"	"			"	ナデ ヘラケズリ	茶褐色		
49-8	底部	"	(7.0)	1.3	平底	ナデ	淡灰色	底部完存	底部径
49-9	壺	"	12.4	6.7		ナデ ヘラミガキ	淡灰褐色	15	
49-10	"	"	13.3	10.6	ヘラ描直線文1条	ナデ ヘラミガキ	淡灰黄色	10	
49-11	"	"	12.8	8.3	ヘラ描直線文5条	ナデ ヘラミガキ	淡灰茶色	20	
49-12	"	"	22.5	14.0	ヘラ描直線文9条	ヘラミガキ	淡灰色	20	
49-13	"	"	21.8	10.1	口縁端面に羽状文 ヘラ描直線文7条	ハケ ナデ ヘラミガキ	淡灰黄色	10	
49-14	"	"		8.6	削出突帯 ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ ヘラミガキ	淡灰色	10	
49-15	"	"	(23.4)	8.2	削出突帯 ヘラ描直線文2条	ハケ	暗灰色	10	胴部径
49-16	壺底部	"	(7.9)	9.7		ヘラミガキ ハケ	淡灰色	底部完存	底部径
49-17	"	"	(10.6)	5.8		ナデ ヘラミガキ	淡灰褐色	70	"
49-18	"	"	(10.0)	3.0		ハケ ヘラミガキ ナデ	灰白色	50	内面黒色物塗布?
50-19	壺	"			斜格子文 ヘラ描直線文5条以上 口縁 内面に刺突文	ハケ ヘラミガキ	乳灰褐色		
50-20	"	"			削出突帯の上に木口による列点文	ヘラミガキ ナデ	淡灰色		
50-21	"	"			ヘラ描直線文2条 縦区画 列線文		淡黄灰色		
50-22	"	"			ヘラ描直線文6条 刺突文	ナデ	黒褐色		
50-23	"	"			ヘラ描直線文4条の間に円形刺突文	ナデ? ハケ	褐色		
50-24	"	"			貼付突帯の間に刺突文	ナデ ヘラミガキ	淡灰色		
50-25	"	"			ヘラ描直線文6条 同羽状文	ハケ	灰褐色		
50-26	"	"			ヘラ描直線文2条以上 同羽状文	ヘラミガキ ハケ ナデ	淡灰色		全体に磨滅
50-27	"	"			ヘラ描直線文6条 貝殻描羽状文	ヘラミガキ ハケ	乳灰色		
50-28	"	"			ヘラ描直線文1条 ヘラ? 描羽状文	ナデ	灰色		
50-29	"	"			ヘラ描直線文2条 ヘラ描羽状文	ヘラミガキ ハケ	灰色		削出突帯
50-30	"	"			貝殻描羽状文 縦区画	ナデ	淡黃灰色		
50-31	"	"			羽状文 縦区画 ヘラ描直線文7条	ナデ	淡灰褐色		
50-32	甕	"	22.6	8.0		ナデ ハケ	淡灰褐色	10	
50-33	"	"	25.8	6.6		ナデ ハケ	黒褐色	10	
50-34	"	"	27.1	8.8	ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ	黒褐色	10	外面煤付着
50-35	"	"	27.5	7.1	ヘラ描直線文6条	ハケ ナデ	茶褐色	30	煤付着
50-36	"	"	27.4	7.0	ヘラ描直線文3条	ナデ ハケ	灰褐色	10	

挿図番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
50-37	甕	砂礫4			口縁端面斜格子文 ヘラ描直線文1条	ナデ ハケ	淡灰褐色		
50-38	"	"			ヘラ描直線文1条		淡灰褐色		煤付着
50-39	"	"			口縁端部に刻目 ヘラ描直線文1条	ナデ ハケ	淡茶褐色		
51-40	"	"			ヘラ描直線文1条	ナデ ハケ	淡桃白色		
51-41	"	"			ヘラ描直線文7条	ナデ ハケ	淡灰褐色		
51-42	"	"			ヘラ描直線文2条の間に刺突文	ハケ	淡黄褐色		
51-43	"	"			ヘラ描直線文7条		黄灰褐色		
51-44	"	"			口縁端部に刻目		淡灰褐色		
51-45	"	"				ハケ	淡茶褐色		外面煤付着
51-46	"	"			口縁端部に刻目	ハケ ナデ	淡灰色		
51-47	甕底部	"	(7.3)	4.7	底部焼成後に穿孔	ハケ	淡灰色	10	底部径
51-48	大型鉢	"	39.6	11.0	ヘラ描直線文1条	ハケ ナデ	乳灰色	10	
51-49	壺	"			直線文13条以上	ナデ ヘラミガキ	乳灰褐色		原体は不明
51-50	"	"			櫛描直線文の間に三角形刺突文	ナデ	暗褐色		
51-51	甕	"	18.8	11.0	櫛描直線文 竹管文	ハケ ヘラミガキ	淡茶褐色	15	
51-52	"	"	20.6	6.6		ナデ ヘラナデ?	淡茶色	10	外面煤付着
51-53	"	"				ハケ	暗茶褐色		逆L字口縁
51-54	"	"	34.4	3.1		ナデ	白灰色	10	
51-55	甕底部	"	(4.6)	7.2	外面煤付着	ハケ ナデ	灰色	50	底部径 上げ底
53-1	深鉢	砂礫5			刺突文	ナデ?	暗褐色		
53-2	"	"			押引文 外面煤付着	条痕 ナデ	暗褐色		全体に磨滅
53-3	"	"			爪形の刺突文	条痕?	暗茶色		
53-4	"	"			口縁部肥厚帯に竹管状工具による押引文	条痕?	暗褐色		
53-5	"	"			逆C字竹管文?	不明	淡灰色		磨滅著しい
53-6	"	"				ナデ?	暗褐色		
53-7	"	"				条痕	暗褐色		全体に磨滅
53-8	"	"	19.8	7.3		条痕	灰褐色	15	
53-9	"	"			外面煤付着	条痕?	暗茶褐色		全体に磨滅
53-10	"	"	(27.0)	5.6		条痕	黄灰褐色	15	現径
53-11	"	"				条痕?	濁茶褐色		全体に磨滅
53-12	"	"				条痕	淡灰色		
53-13	"	"				条痕 ナデ	淡灰褐色		
53-14	浅鉢	"			口縁端面沈線1条	繩紋 ナデ?	暗茶色		
53-15	深鉢	"				条痕	淡灰色		
53-16	"	"			口縁内面に竹管状工具による刺突文	ナデ? 条痕	淡茶色		
53-17	"	"			刻目突帯文	条痕 ナデ?	暗褐色		
53-18	"	"				ナデ?	淡灰色		
53-19	"	"				条痕	淡灰色		全体に磨滅
53-20	"	"				ナデ ヘラケズリ	赤褐色		
53-21	"	"				条痕	淡灰色		
53-22	"	"				ナデ? 条痕	淡灰黄色		
53-23	"	"			無刻目突帯文	条痕 ナデ	淡灰色		
53-24	"	"			無刻目突帯文	ナデ?	暗褐色		
54-25	壺	"	17.0	4.6	口縁端面に直線文1条	ヘラミガキ ナデ	淡黄褐色	10	ハケ原体による段
54-26	"	"	12.8	5.8	ヘラ描直線文3条	ヘラミガキ ナデ	茶灰色	15	
54-27	"	"	21.9	6.4	ヘラ描直線文3条以上	ハケ ヘラミガキ	灰白色	20	
54-28	"	"	26.8	11.5	口縁端木口直線文 逆U字の突帯 ヘラ描直線文11条	ハケ ナデ ヘラミガキ	淡黄色	20	内面黒色物塗布?
54-29	"	"	(14.2)	8.0	口縁内側に蓋受け ハケによる段	ハケ ヘラミガキ	淡茶灰色	15	頸部径
54-30	"	"			口縁端部に刻目	ナデ ハケ	灰白色		
54-31	"	"			ヘラ描斜縫子文 ハケによる段	ナデ	灰白色		
54-32	壺?	"			ヘラ描直線文14条以上	ナデ	茶灰色		口縁端面に綾杉文
54-33	壺	"	(33.4)	10.0	貝殻描羽状文 同直線文計4条	ヘラミガキ ハケ ナデ	灰黄色	10	胴部径
54-34	"	"	(19.0)	9.4	削出突帯 ヘラ描直線文計3条	ハケ ヘラミガキ ナデ	淡灰色	10	"
54-35	"	"	(17.0)	10.5	ヘラ描直線文2条 貼付刻目突帯計4条	ハケ ナデ ヘラミガキ	灰黄色	10	"
54-36	"	"	13.0	10.1	ヘラ描直線文4条 ナデ		暗茶褐色	10	磨滅
54-37	"	"			ハケによる段	ヘラミガキ ハケ	淡黄色		
54-38	"	"			ヘラ描直線文1条	ハケ ヘラミガキ	乳灰色		
54-39	"	"			削出突帯 木口による直線文3条	ナデ	淡茶色		
54-40	"	"			削出突帯3条以上 貝殻刺突文	ヘラミガキ	淡灰色		
54-41	"	"			ヘラ描直線文3条	ナデ	褐色		
54-42	"	"			貝殻重弧文 ヘラ描直線文1条以上		灰白色		
54-43	"	"			木葉文 直線文3条 の間に刺突文	ナデ	淡黄褐色		磨滅著しい

挿図番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
55-44	壺	砂礫5			削出突帯 貝殻? 描直線文3条	ヘラミガキ ハケ ナデ	乳灰色		
55-45	"	"			削出突帯 ヘラ描直線文4条以上	ヘラミガキ ナデ	灰褐色		
55-46	"	"			貝殻描直線文3条以上	ナデ ハケ	黄褐色		
55-47	"	"			貝殻描直線文6条以上	ナデ	青灰色		
55-48	"	"			ヘラ描直線文2条 重弧文	ハケ ナデ	淡灰褐色		
55-49	"	"			貝殻描直線文2条以 上 同羽状文	ヘラミガキ ナデ	暗灰褐色		
55-50	"	"			貝殻描綾杉文 同直 線文2条 同鋸歯文	ナデ	淡黄褐色		
55-51	"	"			削出突帯 貝殻描直線文3条 同羽状文	ヘラミガキ ハケ ナデ	灰白色		
55-52	"	"			貝殻描羽状文 縦区画	ナデ	淡褐色		
55-53	"	"			羽状文 縦区画	不明	淡灰色		
55-54	"	"			削出突帯 ヘラ描直線文2条 貝殻描直線文1条 同斜格子文 同区画 同羽状文	ハケ ナデ	暗灰色		
55-55	"	"			削出突帯の上に刻目 ヘラ描直線文2条 貝殻描縦有軸羽状文 と羽状文	ナデ	黄灰色		
55-56	"	"			ヘラ描直線文4条以 上綾杉文	ハケ	暗灰色		
55-57	"	"			削出突帯 ヘラ描直線文3条 ヘラ? 描羽状文	ヘラミガキ ナデ	灰白色		
55-58	"	"			削出突帯 ヘラ描直線文2条 綾杉文 円形刺突文	ヘラミガキ ナデ	青灰色		
55-59	"	"			削出突帯 ヘラ描直線文2条の 間に竹管文 羽状文	ハケ ナデ	灰褐色		
55-60	"	"			ヘラ描直線文 刺突文	ハケ ヘラミガキ	淡灰褐色		
55-61	"	"			直線文2条 内面に突帯を持つ	ナデ	乳灰褐色		外面に「C」字 の突帯
55-62	"	"			貼付突帯1条	ナデ	淡褐色		
55-63	"	"			ヘラ描直線文2条以 上刺突文	ナデ ヘラミガキ	淡灰色		
55-64	"	"			ヘラ描直線文1条	ナデ	黒灰色		ミニチュア
55-65	壺	"			櫛描直線文	ナデ	淡黄灰色		
55-66	甕底部	"	(9.7)	5.2		ヘラミガキ ナデ	淡灰色	底部完存	底部径
55-67	"	"	(8.4)	4.7	上げ底	ヘラミガキ ナデ	淡灰色	25	"
55-68	壺底部	"	(9.8)	3.5		ヘラミガキ ナデ	灰白色	30	"
55-69	"	"	(6.6)	6.7		ハケ	淡灰色	底部完存	"
55-70	"	"	(8.2)	5.0		ヘラミガキ?	淡褐色	底部完存	" 磨滅
55-71	"	"	(7.8)	3.4		ナデ ハケ	淡灰褐色	30	"
55-72	"	"	(7.0)	4.3		ハケ ナデ	灰黄色	25	" 磨滅
55-73	"	"	(8.6)	7.0		ハケ	淡灰褐色	底部完存	"
55-74	"	"	(8.7)	9.1		不明	淡灰褐色	底部完存	"
56-75	甕	"	17.2	8.4	ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ	暗褐色	15	外面煤付着
56-76	"	"	24.8	8.7	ヘラ描直線文4条	ナデ ハケ	淡茶褐色	10	" 磨滅
56-77	"	"	17.8	7.9	ヘラ描直線文5条	ナデ ハケ	淡茶褐色	10	"
56-78	"	"	18.4	5.7		ナデ ハケ	淡茶灰色	15	"
56-79	"	"	15.0	14.6		ハケ ナデ	淡灰色	25	底部径6.3cm 煤付着
56-80	"	"	18.7	6.6	ヘラ描直線文3条の 間に刺突文	ナデ ハケ	茶褐色	10	口縁端面刻目
56-81	"	"	26.9	8.5	口縁端部に刻目 ヘラ描直線文3条の 間に竹管文	ハケ ナデ	灰褐色	10	内外煤付着
56-82	"	"	23.8	3.5	口縁端部に刻目 ヘラ描直線文2条以上	ナデ ハケ	淡灰褐色	10	内外煤付着
56-83	"	"	15.0	7.2	ヘラ描直線文5条	ナデ	暗茶褐色	20	外面煤付着
56-84	"	"	17.7	4.4	ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ	黄灰色	20	
56-85	"	"			口縁端部に刻目 ヘラ描直線文1条	ナデ ハケ	黄灰色		
56-86	"	"			ヘラ描直線文1条	ナデ	灰褐色		煤付着 磨滅
56-87	"	"			口縁端部に刻目 ヘラ描直線文1条	ナデ ハケ	淡灰色		
56-88	"	"			ヘラ描直線文1条	ナデ ハケ	茶褐色		外面煤付着
56-89	"	"			口縁下端に刻目 ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ	黑褐色		"
56-90	"	"			ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ	黄灰色		
56-91	"	"			ヘラ描直線文5条	ハケ ナデ ヘラミガキ?	淡灰色		外面煤付着
56-92	"	"			ヘラ描直線文5条	ナデ?	淡灰色		全体に磨滅

捕団番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	残存率	備 考
57-93	"	"			ヘラ描直線文6条	ナデ ハケ	淡黄灰色		
57-94	"	"			口縁端部に刻目 ヘラ描直線文8条 三角形刺突文	ナデ ヘラミガキ	淡灰色		
57-95	"	"			口縁端部に刻目	ハケ ナデ	淡黄褐色		
57-96	"	"			"	ハケ ナデ	暗褐色		
57-97	"	"			"	ナデ ハケ	淡灰色		
57-98	"	"			"	ハケ ナデ	乳灰褐色		
57-99	"	"			ヘラ? 描直線文3条	ナデ	橙褐色	貝殻の可能性	
57-100	"	"			ヘラ描直線文2条	ハケ ナデ	乳灰色		
57-101	"	"			ヘラ描直線文4条以 上 円形刺突文	ハケ ? ナデ	淡灰色		
57-102	"	"			ヘラ描直線文の間に ヘラ先による刺突文	ハケ ナデ	灰白色		
57-103	"	"			口縁内面に煤付着	ナデ ハケ	灰褐色	全体に磨滅	
57-104	"	"			口縁端部に刻目	ナデ ハケ	暗茶色	煤付着 磨滅	
57-105	"	"			外面煤付着	ナデ ハケ	暗茶褐色	磨滅	
57-106	"	"			口縁端部に刻目 ヘラ描直線文6条	ナデ	暗褐色	外面煤付着 逆L字口縁	
57-107	"	"			内外面煤付着	ナデ ハケ	暗褐色	逆L字口縁	
57-108	"	"			口縁が肥厚する	ハケ ナデ	濁茶褐色	内外面煤付着	
57-109	甕底部?	"	(7.2)	4.7	底部内側に凹む	ハケ ナデ	灰白色	15	底部径
57-110	"	"	(7.0)	4.1	磨滅著しい	ハケ ナデ	淡褐色	10	"
57-111	"	"	(9.2)	5.7	"	ハケ	暗茶褐色	底部完存	"
57-112	鉢	"	29.6	8.0	ヘラ描直線文1条	ハケ ヘラミガキ	暗灰色	10	磨滅
57-113	"	"	16.7	10.7	"	ヘラミガキ	灰白色	15	"
57-114	鉢?	"			直線文1条	ハケ	淡橙褐色		
57-115	鉢?	"			"	ナデ ハケ	灰白色		
57-116	ミニチュア 土器	"	(2.2)	3.5	"	ハケ ナデ	淡灰褐色	底部完存	底部径
57-117	手捏土器	"	6.0	5.7		ハケ ヘラミガキ	淡灰色	完形	底部径4.4cm
57-118	鉢?	"	7.4	3.9		ハケ ナデ	淡褐色	25	
57-119	?	"			刻目突帶1条	不明	赤褐色		内外磨滅
59-1	深鉢	砂礫6				条痕	暗茶褐色		外面磨滅
59-2	"	"				条痕	灰褐色		
59-3	"	"				条痕 ナデ	暗灰色		
59-4	浅鉢	"			沈線文4条	撚糸文 ミガキ	灰白色		
59-5	"	"			口縁内面沈線1条		淡灰色		
59-6	深鉢	"	(21.6)	12.6		撚糸文? ナデ	淡灰色	15	最大径
59-7	"	"				ナデ 条痕	淡灰色		
59-8	"	"				条痕 ミガキ	暗褐色		
59-9	"	"				条痕	暗茶褐色		
59-10	注口土器	"	23.6	2.7	刺突文 沈線文2条 竹管文 竹管による 円弧文	繩紋 ナデ	暗褐色	10	外面磨滅著し い
59-11	深鉢	"			口縁内面に刺突文	条痕?	暗灰色		
59-12	"	"			口縁端部に刻目	条痕 ナデ	灰褐色		
59-13	"	"			口縁端部半截竹管状 工具で刺突	条痕 ナデ	暗灰色		
59-14	"	"			"	条痕	淡灰褐色		
59-15	"	"			刻目突帶文	条痕	暗灰褐色		
59-16	"	"			"	条痕	黄褐色		
59-17	"	"			"	条痕	淡灰褐色		
59-18	"	"			"	条痕	暗褐色		
59-19	"	"			無刻目突帶文	ナデ	淡灰色		
59-20	"	"				条痕? ナデ	濁灰褐色		
60-21	"	"	(37.0)	18.3	内外面一部煤付着	条痕	暗灰色	15	最大径 磨滅
60-22	底部	"	(6.8)	1.6		不明	濁灰色	底部完存	底部径 磨滅
60-23	深鉢	"			尖底で肩で屈曲?	条痕 ミガキ	淡黃灰色		
60-24	"	"				強いナデ ケズリ	淡茶褐色		内面煤付着
61-25	壺	"	22.0	6.0		ナデ ヘラミガキ	暗灰色	15	
61-26	"	"			ヘラ描直線文2条以上 口縁端部に刻目	ナデ ヘラミガキ	淡灰色		
61-27	"	"	(28.4)	12.4	山形文3条一組 貝殻描直線文2条	ヘラミガキ ナデ	淡灰黄色	30	胴部径
61-28	"	"			ヘラ描直線文2条 刺突文 羽状文	ハケ ナデ	淡黃色		磨滅
61-29	"	"			削出突帶 羽状文 ヘラ描直線文2条	ナデ?	淡灰色		
61-30	"	"			ヘラ描直線文2条	ヘラミガキ	淡灰白色		
61-31	甕	"			直線文2条の間に円 形刺突文 口縁端部に刻目	ハケ	灰褐色		
61-32	"	"			ヘラ描直線文7条	ナデ	淡灰褐色		
61-33	"	"			ヘラ描直線文5条以上	ハケ ヘラミガキ	淡赤褐色		
61-34	"	"			ヘラ? による刺突文	ハケ ヘラミガキ	薄灰色		外面煤付着

*口径は復元、器高は現存高を含む。口径欄の()の数字は、備考欄等に記した「胴部径」「底部径」等を口径欄に記したことを示す。

表4 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土石器観察表

捕団番号	種別	層位	長さ(cm)	厚さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	備考
62-1	磨製石斧未製品	砂礫層1	8.1	2.1	6.8	167.1	珪質泥岩	
62-2	穂摘具未製品	砂礫層1	9.4	1.6	5.9	115.6	頁岩	
62-3	板状未製品	褐色灰色泥	7.6	0.5	8.2	61.8	凝灰質泥岩	二辺を研磨
62-4	"	砂礫層5	7.2	1.1	4.3	31.8	"	擦り切り溝
62-5	"	砂礫層6	7.7	1.1	3.6	30.9	"	擦り切り溝
62-6	"	砂礫層5	6.1	0.7	5.1	29.7	"	一辺を研磨
63-7	石 錐	砂礫層4	2.0	1.5	1.5	0.6	黒曜石	
63-8	石 錐 未製品	砂礫層4	3.2	0.5	2.5	3.2	"	
63-9	"	砂礫層4	4.3	1.0	2.9	7.5	玉髓	

表5 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土木製品観察表

捕団番号	種別	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ/太さ(cm)	形態・手法の特徴	木取	備考
64-1	直柄平鋤	砂層3	52.0	11.0	3.6	舟形隆起有り。 柄の残存長13.2cm	柾目?	
64-2	広鋤未製品	砂礫層4	28.5	17.5	4.1	舟形隆起無し。	柾目?	一部に研磨痕
64-3	"	砂礫層4	26.1	17.1	1.8	舟形隆起無し。 加工痕は不明瞭	柾目?	
65-4	"	砂礫層6	17.5	21.4	2.3	切り離しの際の段 が残る。	柾目?	
65-5	泥除けか?	砂礫層4	19.4	32.1	0.6	小さい円孔有り。	柾目?	
66-6	田下駄か?	砂層2	34.1	19.6	1.5		板目?	腐食著しい
66-7	弓状木製品	砂層3	60.7		2.8		不明	硬質
66-8	有孔木製品	砂礫層5	15.5	7.8	2.2		板目	火切り臼?
66-9	加工材破片	砂層3	16.1	9.6	3.7		板目	軟質
67-10	木製高杯	砂層3	径25.8		5.2		柾目	横木地
67-11	機織具片	砂層3	20.0	5.2	1.5	小孔有り。	不明	一部炭化
67-12	棒状木製品	褐色灰色泥層	19.3		2.5	纖維を巻いている (単巻き)	不明	
67-13	棒状木製品	褐色灰色泥層	125.1		3.1	先端付近は面を持 って加工され、先 端は丸い。	芯持	樹皮残る

※長さ・幅・厚さ／太さは全て現状での数字である。

表6 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土杭観察表

杭番号	長さ(cm)	最大径(cm)	形態の特徴	刃部最大幅(cm)	備考
71- 1	87.9	5.1	切断面を大きく残し、周囲から加工	2.6	西川津3類に似る。硬質 フナクイムシ痕?
71- 2	47.6	5.8	切断面を残し、四方から連続して加工	2.3	上同。硬質
71- 3	35.2	5.8	切断面をわずかに残し、三方から加工	2.4	軟質。樹皮残る
71- 4	60.0	3.4	切断面を大きく残し、三方から加工	1.7	3類に似る。硬質
71- 5	28.2	6.1	長く剥ぐような加工に加え、先端に若干の加工	2.9	1類に似る。軟質
71- 6	27.6	5.2	切断面を残し、三方から加工	2.1	3類に似る。硬質。 フナクイムシ痕?
71- 7	41.9	6.7	切断面を残し三方から加工するが、内一方は短い	2.4	軟質
71- 8	13.8	3.7	一方から加工した後若干の加工	2.8	加工痕は平坦。軟質
71- 9	34.1	6.6	切断面をわずかに残し四方から剥ぐような加工の後一方から先端へ加工	2.9	1類に似る。軟質
71-10	31.8	5.6	切断面を残し一方向から連続して加工	2.1	4類に似る。硬質。 フナクイムシ痕?
72-11	169.6	2.7	先端を尖らせ、五方から加工	2.7	加工痕は平坦。硬質。 樹皮残る。フナクイムシ痕?

※長さ・最大径は現状での数字である。

表7 西川津遺跡Ⅲ区左岸出土土製品観察表

挿図番号	種別	層位	長さ／径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
73-1	土錘	砂礫層1	6.5	4.3	118.1	ナデ
73-2	〃	砂礫層5	3.5~3.8		44.3	
73-3	〃	砂礫層5	4.7	2.7	33.3	ナデ
73-4	土製円板	砂礫層4	4.0	0.8	18.1	表にハケ
73-5	〃	砂—砂礫	5.7~6.2	0.7	29.6	裏にハケ 煤付着
73-6	土器片錘	砂礫層5	6.1~6.2	0.9	35.0	表にハケ
73-7	〃	砂礫層6	8.4~8.7	1.0	82.0	



朝酌川上流側から見た西川津遺跡Ⅲ区（1994年撮影）



西川津遺跡Ⅲ区左岸作業風景（1996年撮影）

第4章 西川津遺跡Ⅲ区右岸の調査

第1節 調査の経過

Ⅲ区右岸は、Ⅲ区左岸の更に西側の対岸にあたる。調査区の更に西には国道431号線が走り、住宅が密集している。Ⅲ区右岸は、西へ大きく屈曲して流れる改修工事以前の朝酌川（以下便宜上「旧河道」と呼ぶ）と河川改修された朝酌川（以下「現河道」と呼ぶ）の間の、半月形をした中洲状の部分のうち、現河道に面する部分を調査対象範囲とした。調査面積は約600m²で、調査区は長さ約110m、幅約6mの非常に細長い形をしている（第74図）。調査区の上流部は、西川津遺跡の第1次・2次調査の調査区と隣接している。

調査期間は、1997年7月から約4ヶ月に及んだ。調査は下流側から始め、順次上流側へと移動した。この調査区からは、土器・石器・木製品などの大量の遺物が出土し、中でも古墳時代（特に中期～後期）の遺物が最も多く出土した。また、杭が多数立った状態で検出されたが、多くが古墳時代に属すると考えられる。直径が20cmもある太い杭も検出された。場所によって標高約-1.6mまで掘削し、10月末に調査を終了した。

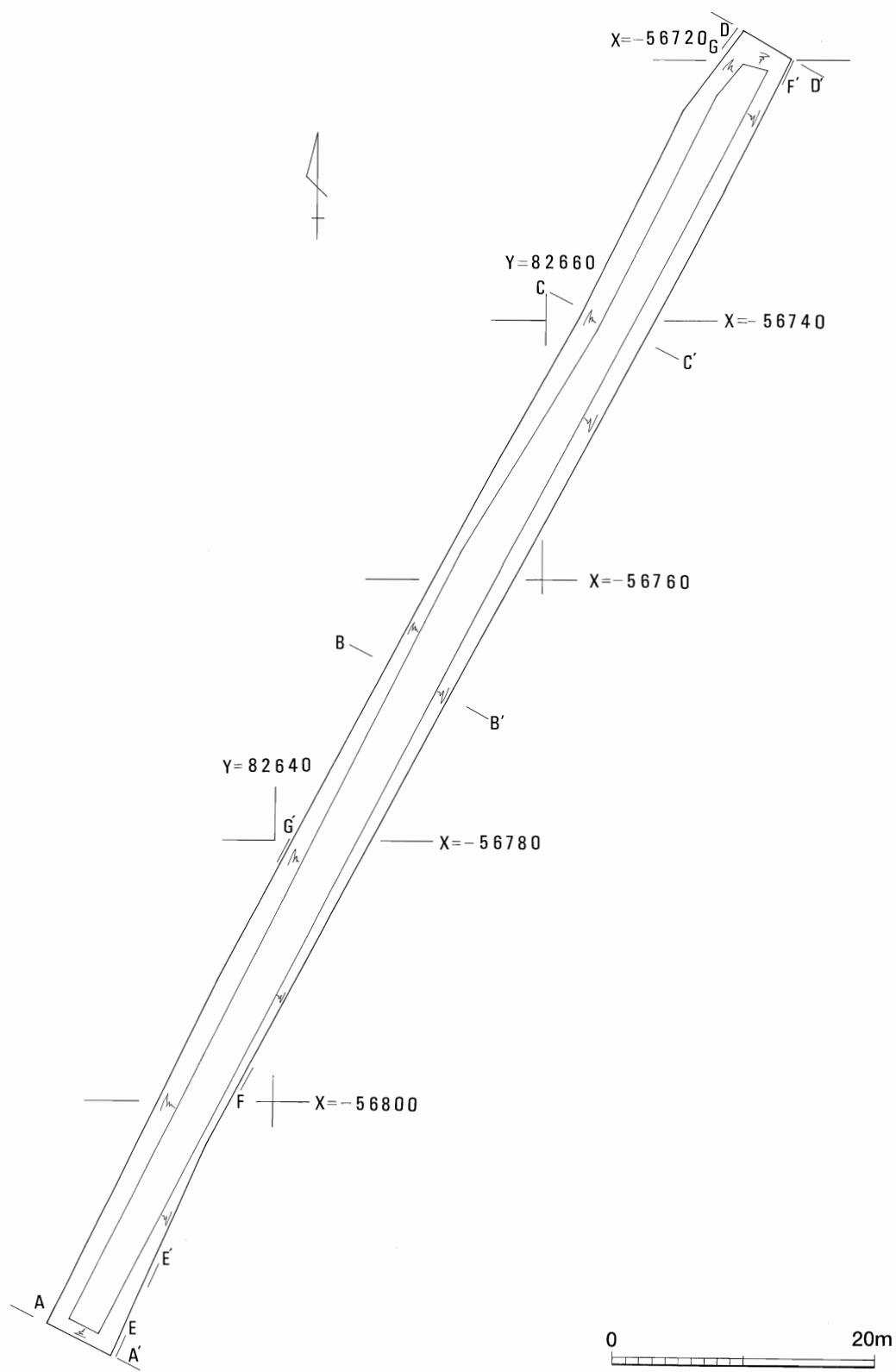
第2節 土層の堆積

Ⅲ区右岸の調査前の標高は0.9～1.0mであった。耕作土や無遺物層を機械で掘削し、遺物包含層は人力で掘削した。Ⅲ区右岸の遺物包含層は、次のようにまとめることができた。

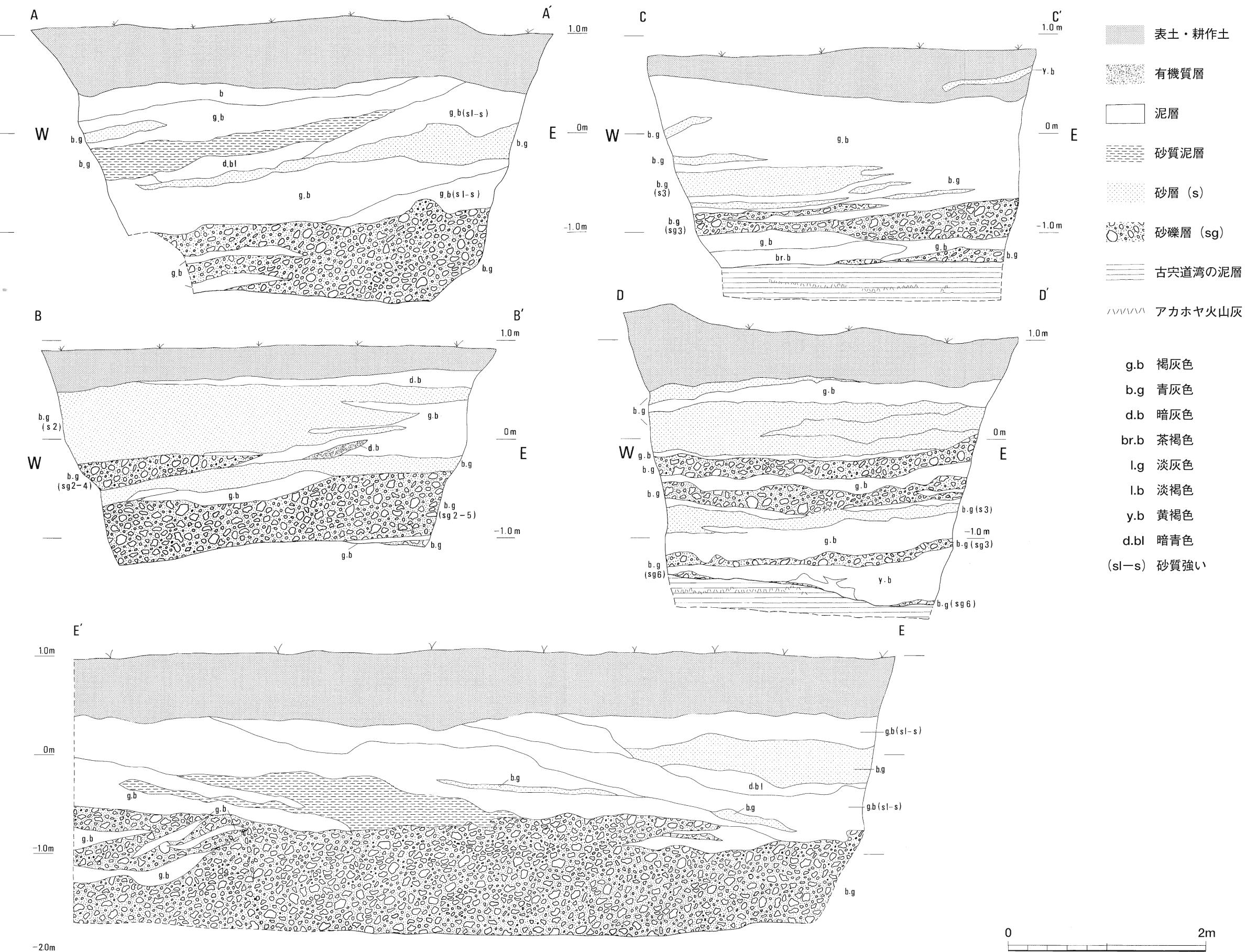
平安時代の堆積層	古墳時代後期末の堆積層	古墳時代前期の堆積層	縄紋時代？の堆積層
南端の青灰色砂礫層	青灰色砂礫層1	青灰色砂礫層3	青灰色砂礫層5
青灰色砂層1	砂礫層2	4	6
砂層2	2 — 2-2 — 2-3 — 2-4 — 2-5		
	青灰色砂層3		

調査区の南端の砂礫層は砂層1や砂層2とは直接切り合いを持たないが、南端の青灰色砂礫層が砂層1などを削り込んで堆積したと考えられる。また、調査区の西壁を見ると、青灰色砂礫層3や砂層3を削るように砂礫層2～5が堆積しているが、相互の時間幅は大きくはないと考えられる（第78図下段）。

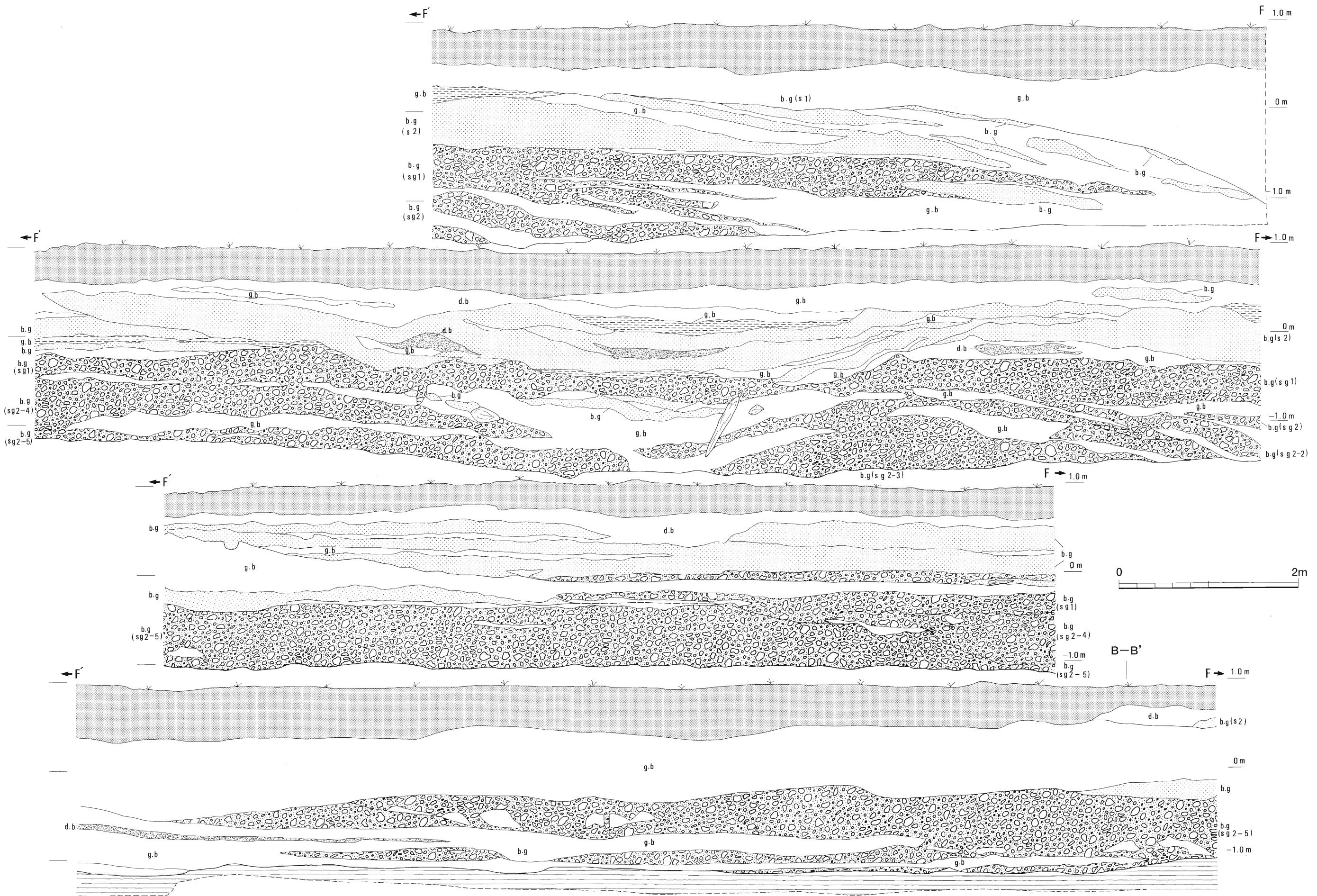
なお、西川津遺跡第2次調査では、堆積層は西落ちの傾斜を示していたことがうかがえる⁽¹⁾。



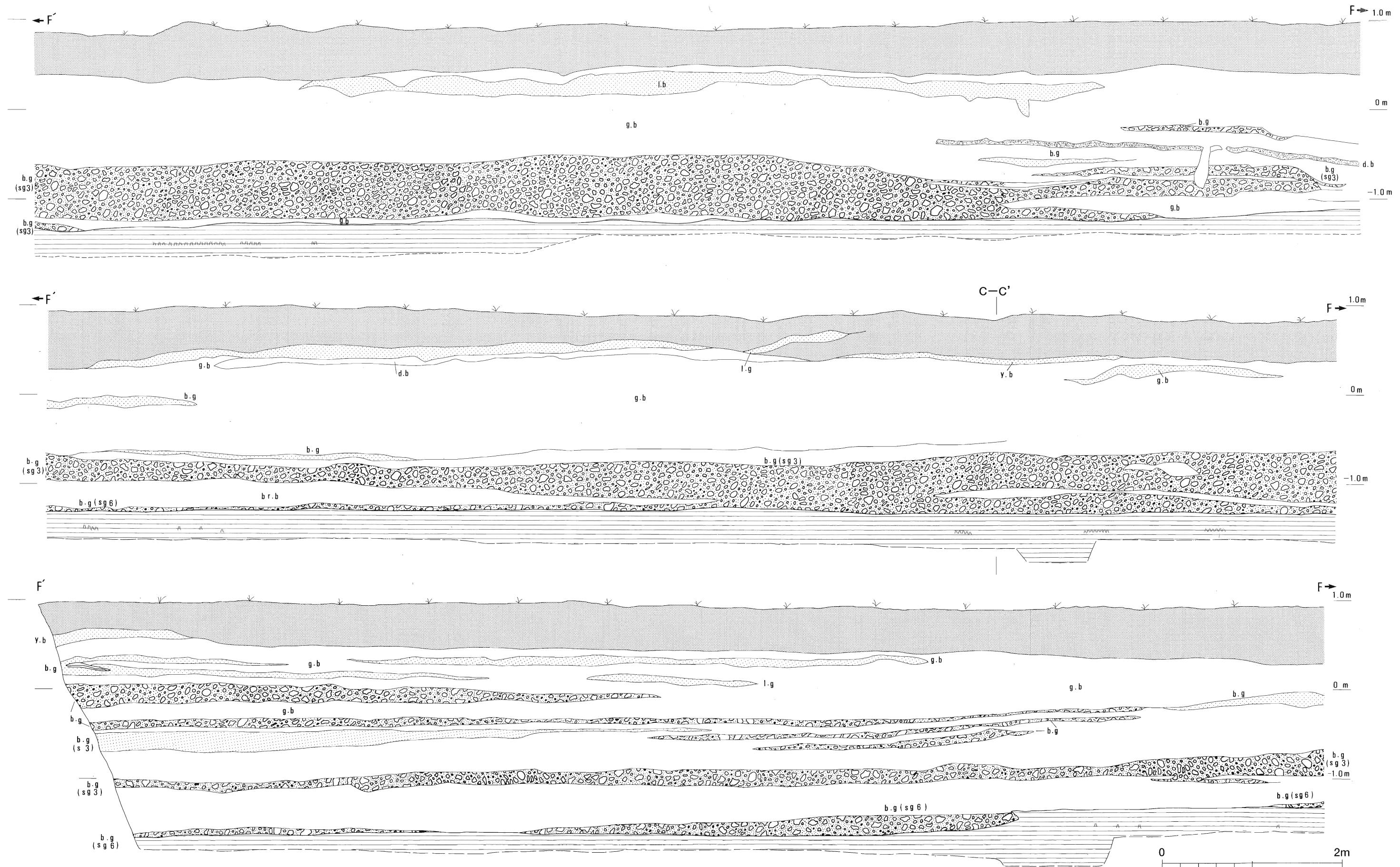
第74図 西川津遺跡Ⅲ区右岸調査区位置図 (S=1/500)



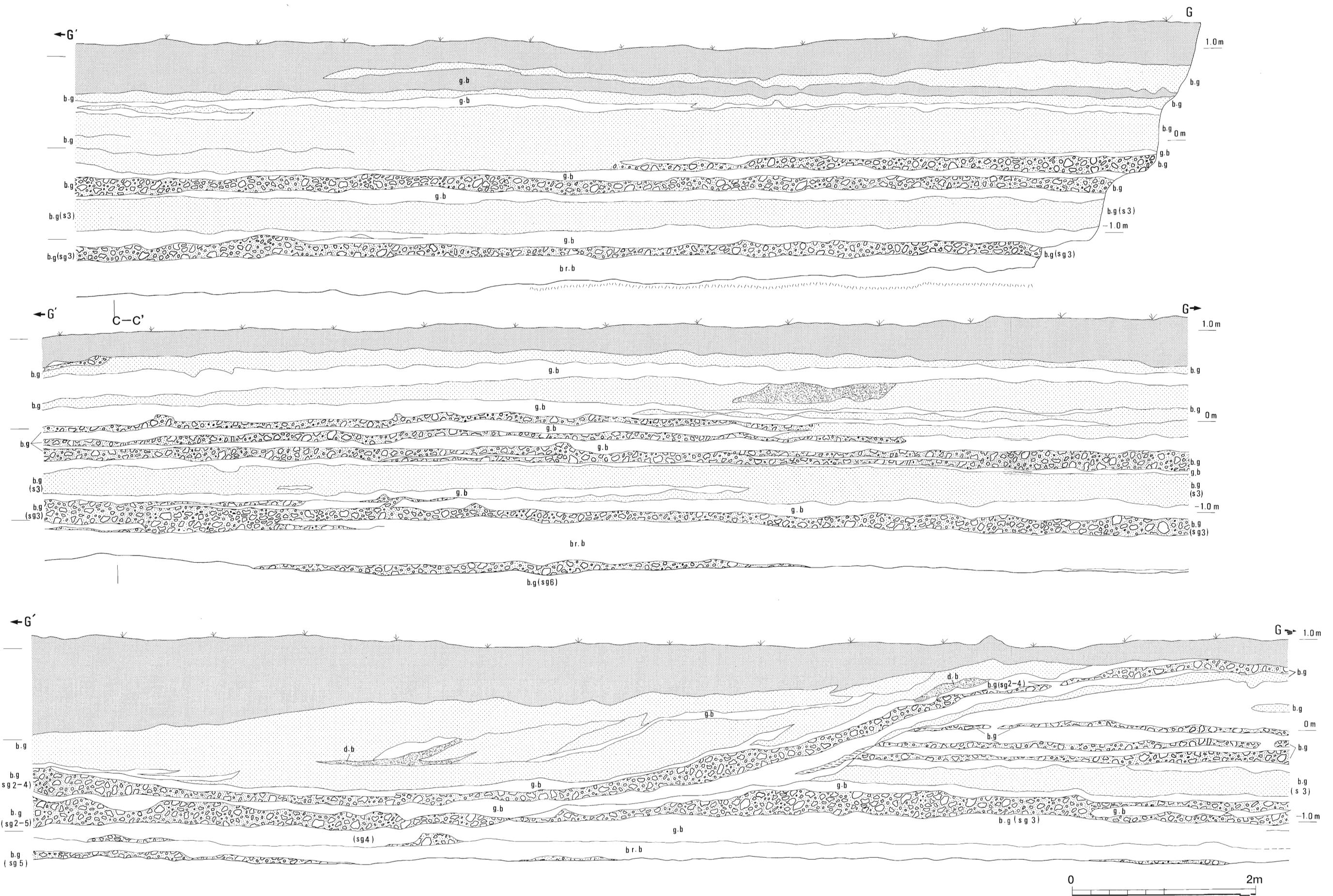
第75図 III区右岸東西方向 (A-A', B-B', C-C', D-D')、東壁 (E-E') 土層堆積図 ($S=1/40$)



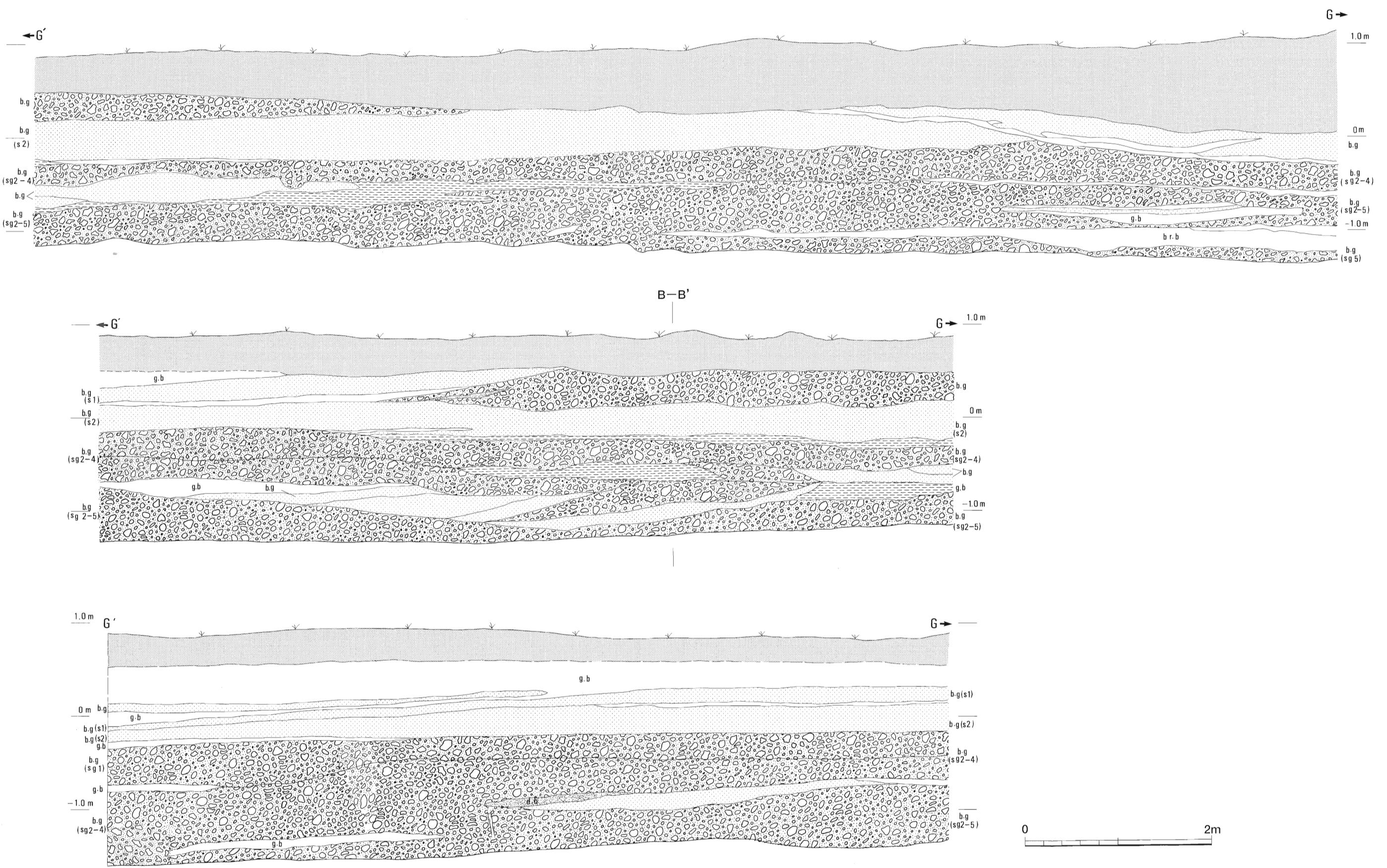
第76図 III区右岸東壁 (F-F') 土層堆積図(1) (S=1/40)



第77図 III区右岸東壁 (F-F') 土層堆積図(2) (S=1/40)



第78図 III区右岸西壁 (G-G') 土層堆積図(1) (S=1/40)



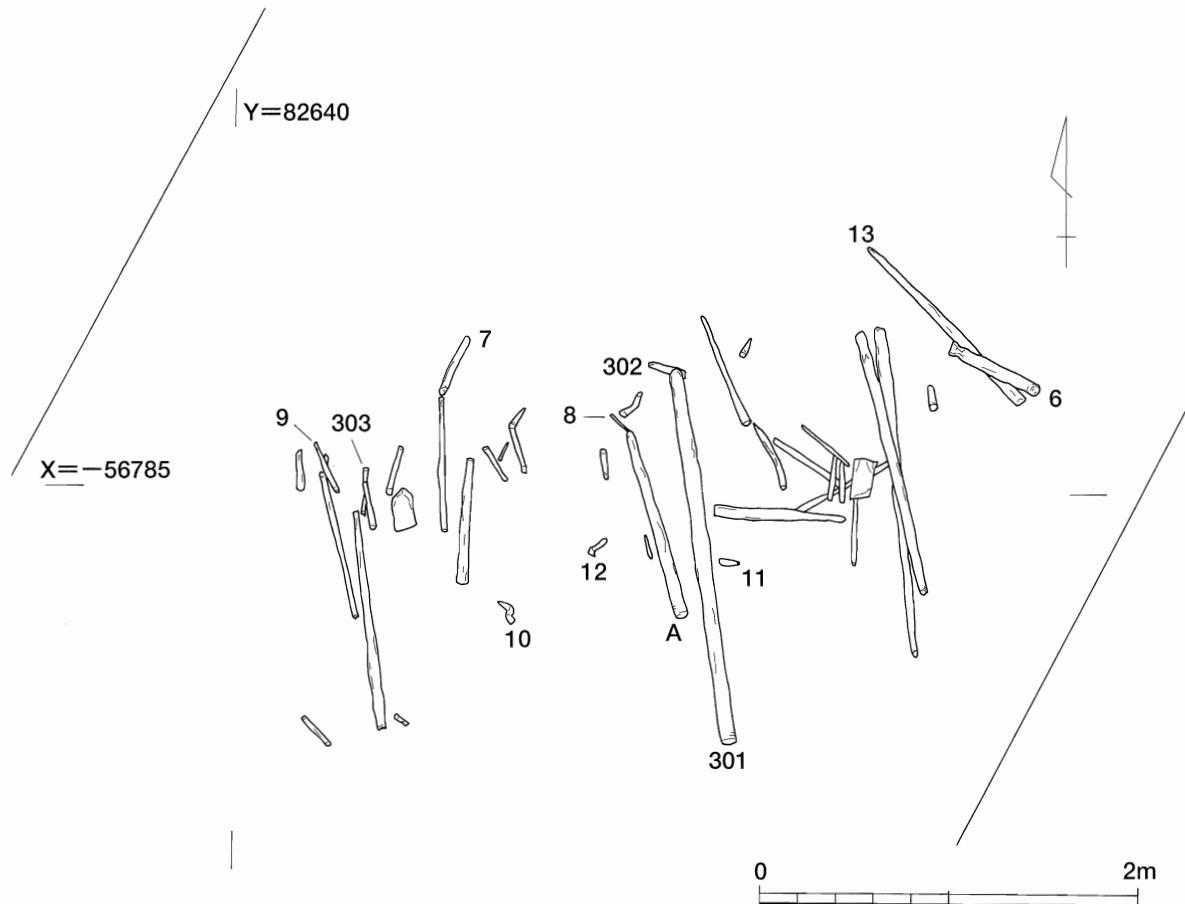
第79図 III区右岸西壁 (G-G') 土層堆積図(2) (S=1/40)

第3節 検出された遺構

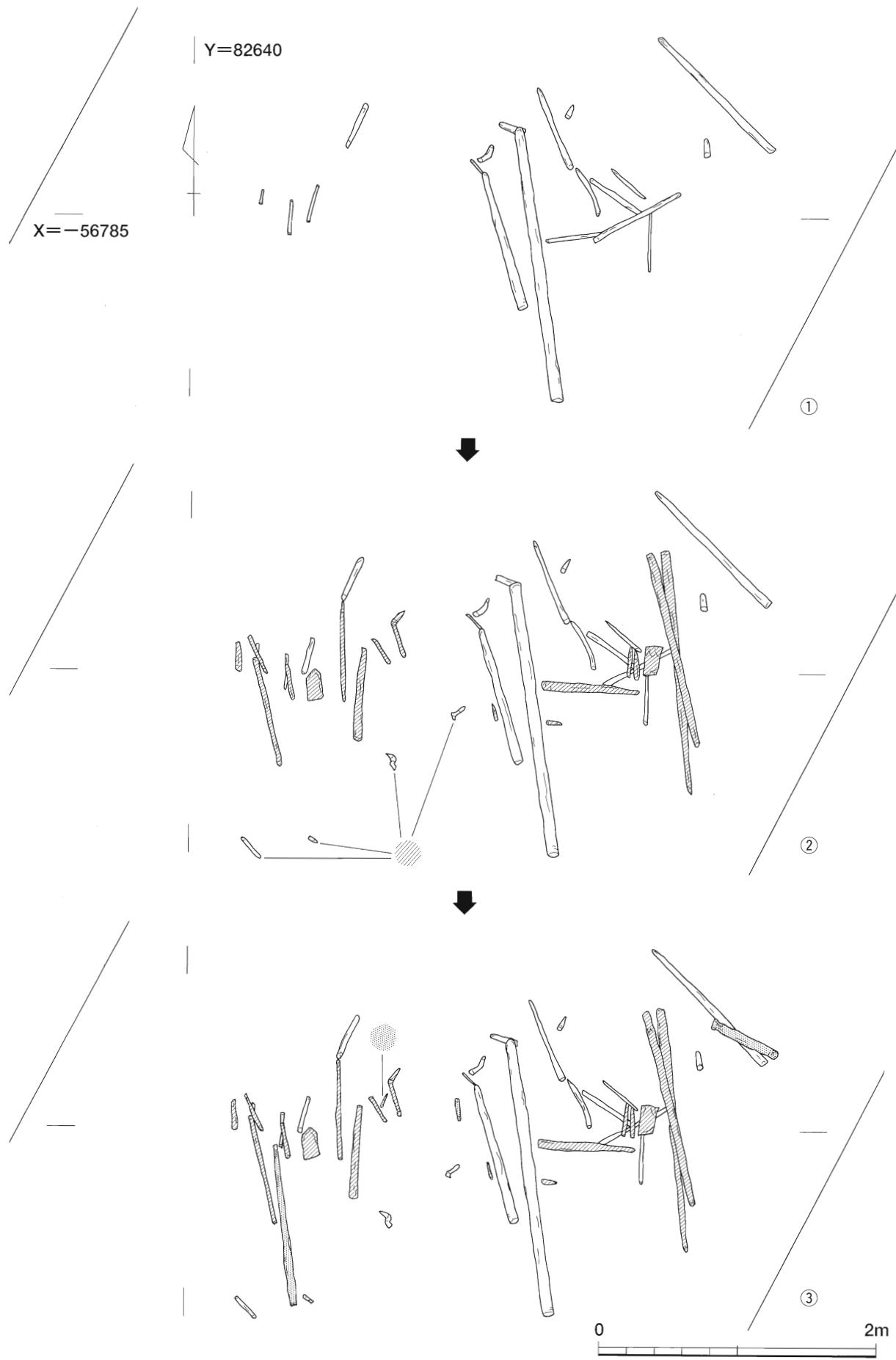
調査区の中ほどやや下流寄りの部分で、多数の杭が検出された（第80図）。これらは密集していることから「杭群」と呼ぶことにした。杭の最大径は4～5cmのものが中心である。検出状況からは、東西方向もしくは北東—南西方向に杭が列状に打たれていたことをうかがわせる。これらの杭は砂礫層により頂部が折れたり傾いているものが多い。

杭群は、砂礫層1、同2-2、同2-3の3つの砂礫層の堆積する前の3つの段階を確認することが出来た。砂礫層2-3の堆積する以前には、約20本の杭が打たれる（第81図①）。砂礫層2-2の堆積する以前にも約20本の杭が打たれるが、2-3の杭の間を埋めるように、西側にも多く打たれている（第81図②）。砂礫層1の堆積する以前には数本が打たれた（第81図③）。これらの砂礫層の下限とされる時期は、後述するように砂礫層2-3が古墳時代後期末（7世紀前葉）、砂礫層1が古墳時代後期末（7世紀中葉）であるので、杭群が形成されたのは7世紀前～中葉の比較的短い期間であったと考えられる。また、第82図の杭Aや杭301を復元すると、杭Aは標高0m付近、杭301は標高1m付近に頂部があったことがうかがえる。杭群のつくられた目的として、流れに直交して杭を打ち、水の流れを調節するような、簡単な施設が想定される。

この他にも、Ⅲ区右岸では第83図のように杭が多数検出された。これらは一時期に形成されたものではなく、古墳時代前期から後期末以降までの長い期間をかけて打たれたものであるが、調査区の中程に二箇所、北側に二箇所の杭の集中箇所があり、特に杭30の周辺には青灰色砂礫層3の堆積



第80図 Ⅲ区右岸検出状況図 ($S=1/40$) ※番号は実測図に一致



第81図 Ⅲ区右岸杭群変遷図 ($S=1/40$)

①青灰色砂礫層 2-3 に伴う杭 ②青灰色砂礫層 2-2 に伴う杭 (斜線トーン) ③青灰色砂礫層 1 に伴う杭 (点トーン)

後に打たれている杭が多い。杭の用途は不明であるが、第4節<3>で述べるようにこれらの杭には角材や転用材が存在し、砂礫層によって傾いたものが見られることから、当時の朝酌川に伴うものであるが、恒久的な施設ではないと考えられる。なお、杭の番号は取り上げ時の番号を変えて、位置図と実測図が一致するように変更した。実測をした杭は2から、樹種同定用の杭は301から番号を付けた。

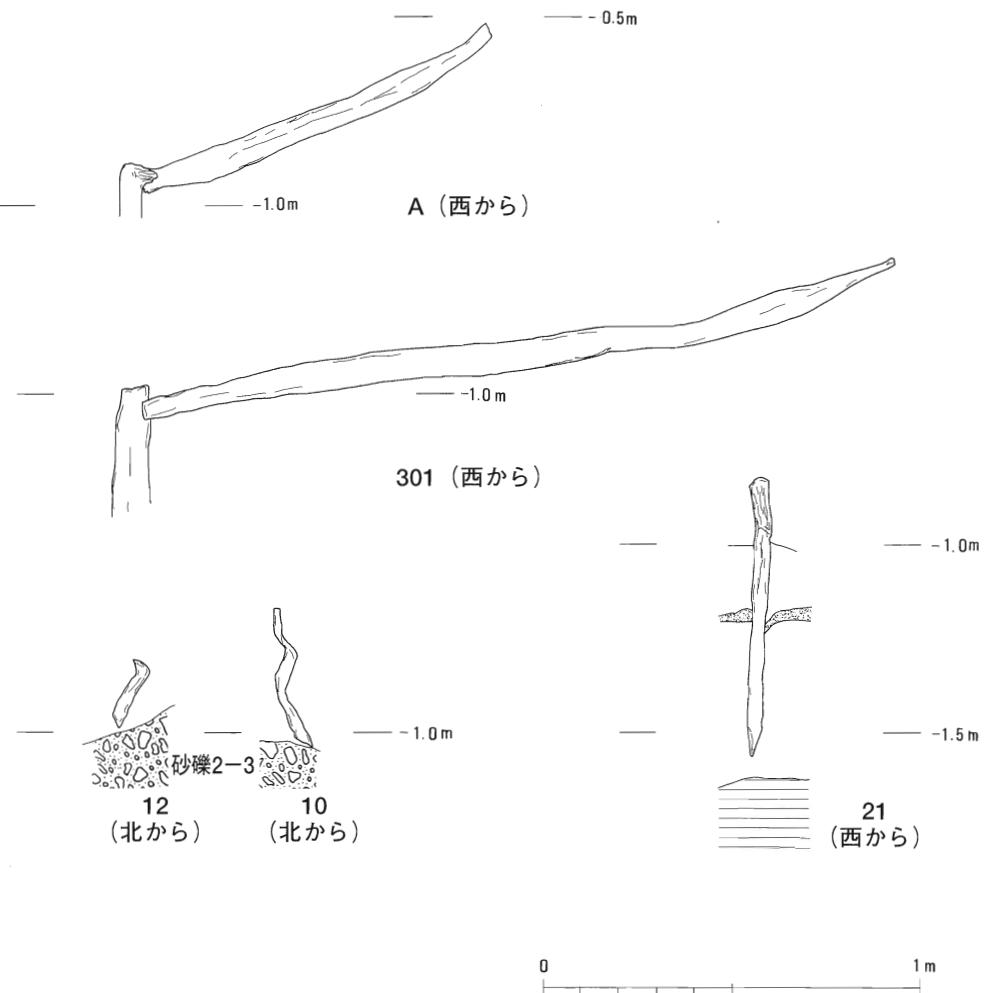
第4節 遺物包含層と出土遺物

Ⅲ区右岸では、砂礫層や砂層から大量の遺物が出土したが、その中の多くは土器であったので土器は出土した層毎に述べることとし、相対的に出土量の少なかった石器、木製品や杭、土製品は一括して述べることとした。

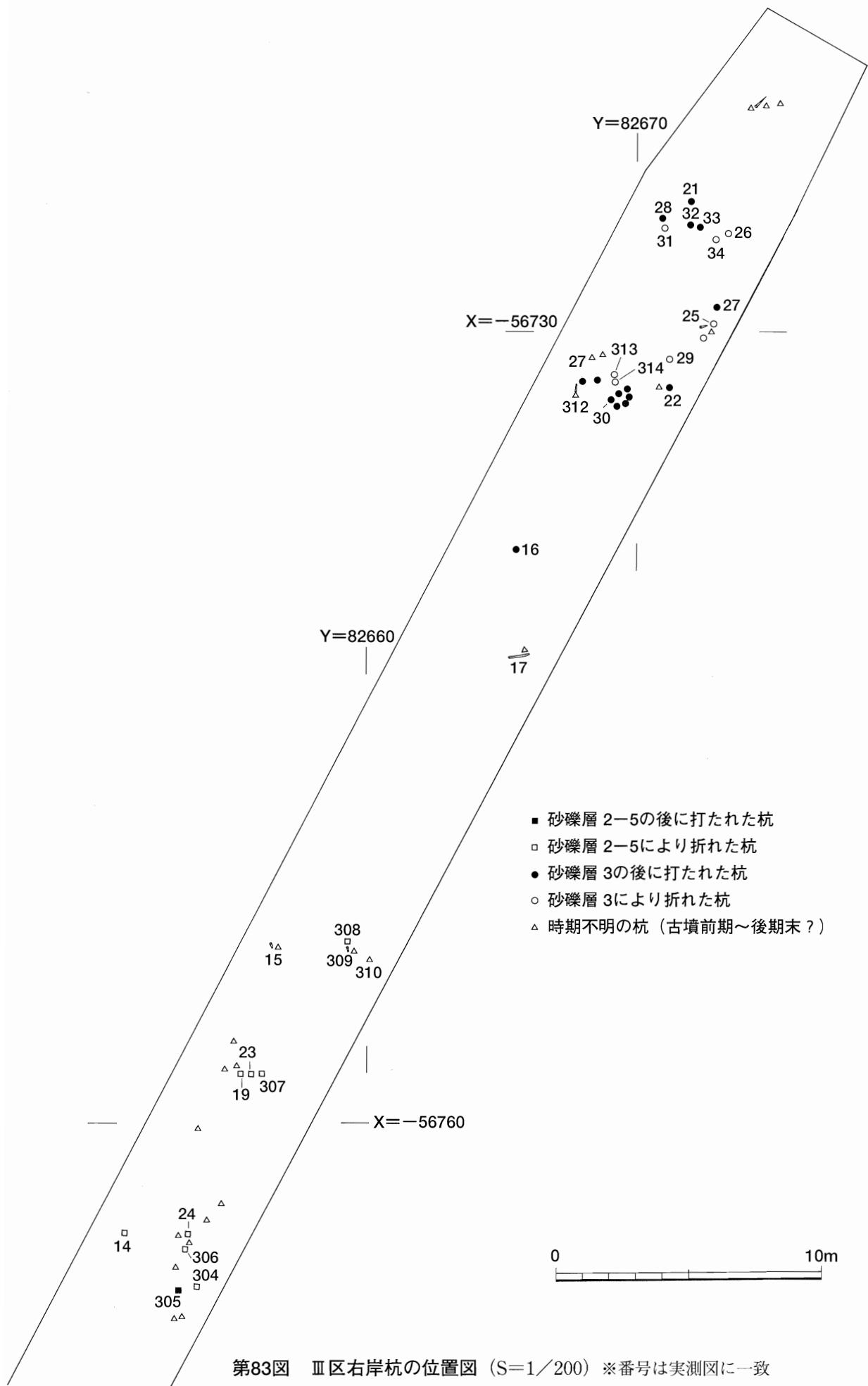
<1> 遺物包含層と土器

(1)-1 南端の青灰色砂礫層（第84、85図）

調査区の南端の標高-0.7～-0.9mから確認され、層の厚さは最大で1mにもなるが、途中に褐灰



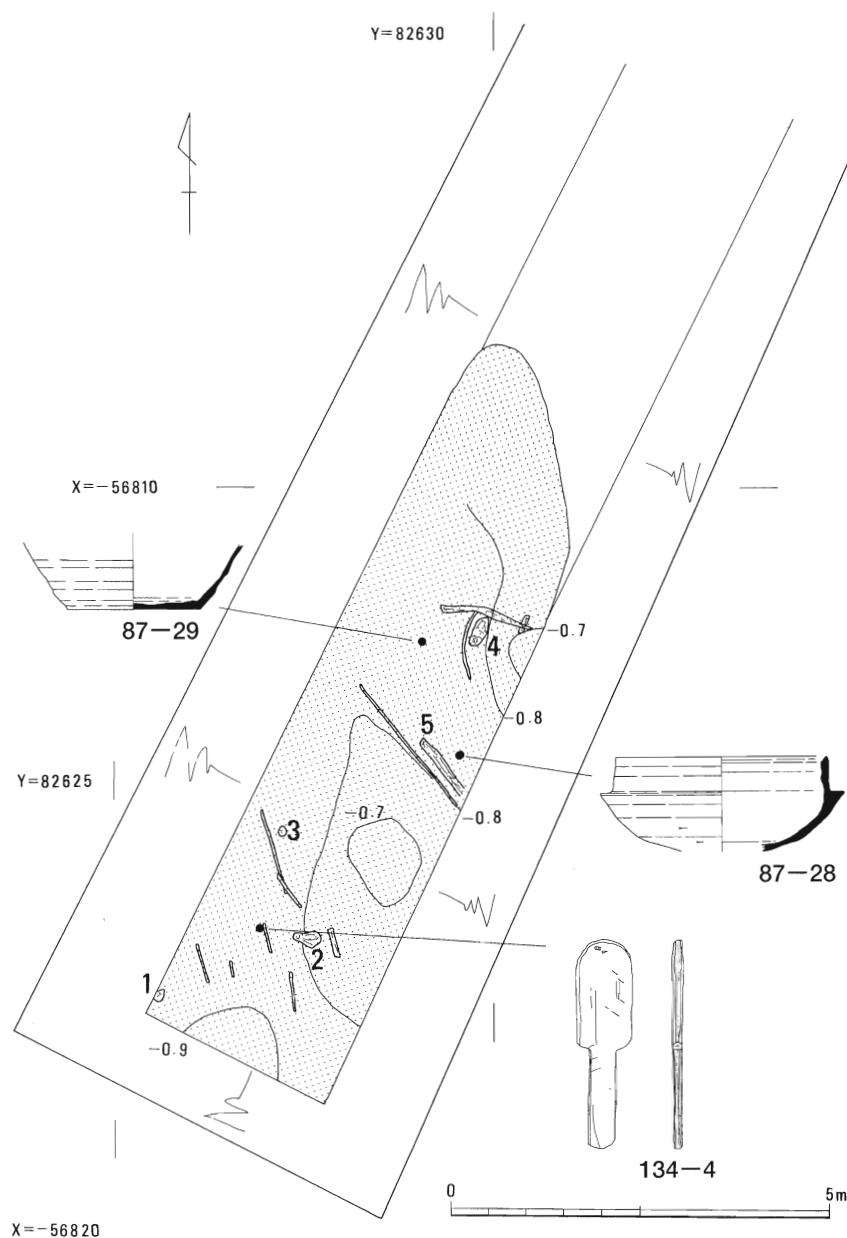
第82図 Ⅲ区右岸杭実測図（立面図）（S=1/20）※番号は第80、83図に一致



第83図 III区右岸杭の位置図 ($S=1/200$) ※番号は実測図に一致

色泥層を挟む部分があるので、上から下まで一度に堆積したものではないと考えられる。出土遺物は、縄紋土器から平安時代末（12～13世紀）の青磁、白磁に及び、他にしゃもじ状の木製品（第134図4）や黒曜石の剥片が出土したが、砂礫層内の上下による出土遺物の時期の差は見られなかった。

砂礫層からは、直徑が10～20cmの杭が5本検出された（第85図）。杭1は、頂部にV字型の切れ込みを持つ。杭2と杭4は、砂礫層の下の青灰色泥層中に1m以上打ち込まれていた。杭5は、砂礫層によって北東一南西方向に大きく傾いており、砂礫層堆積以前に打ち込まれたことがうかがえる。杭5も傾く前は杭4同様標高0mより上に杭の頂部が出ていたと考えられる。杭1～杭4も、このような太い杭を厚い砂礫層に打つことは不可能と思えるので、杭5同様砂礫層堆積以前に打ち込まれたと考えられる。



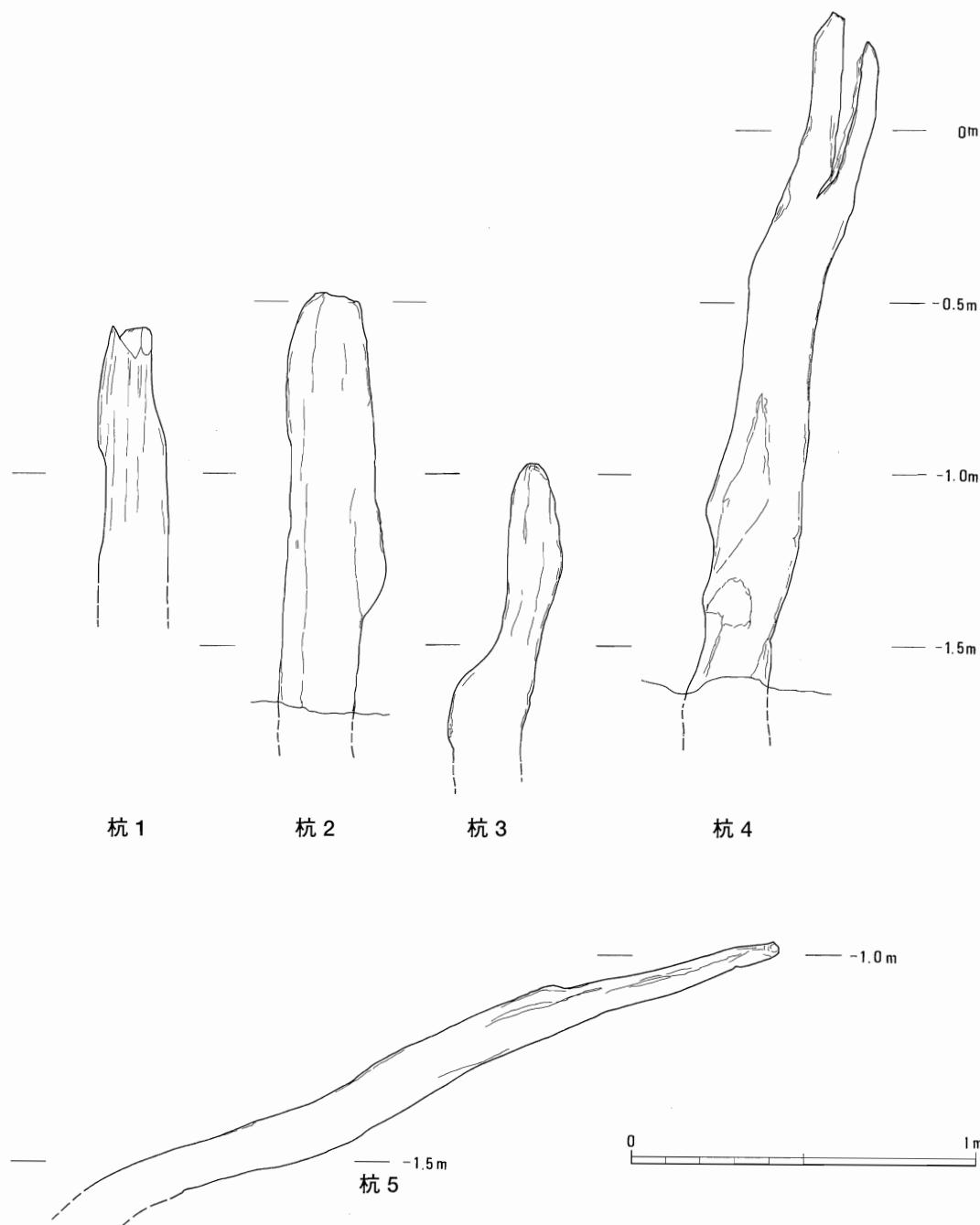
第84図 III区右岸南端の砂礫層測量図 ($S=1/100$) (10cmコンター、単位はm) ※番号は杭番号に一致

(1)-2 南端の青灰色砂礫層出土土器 (第86~88図)

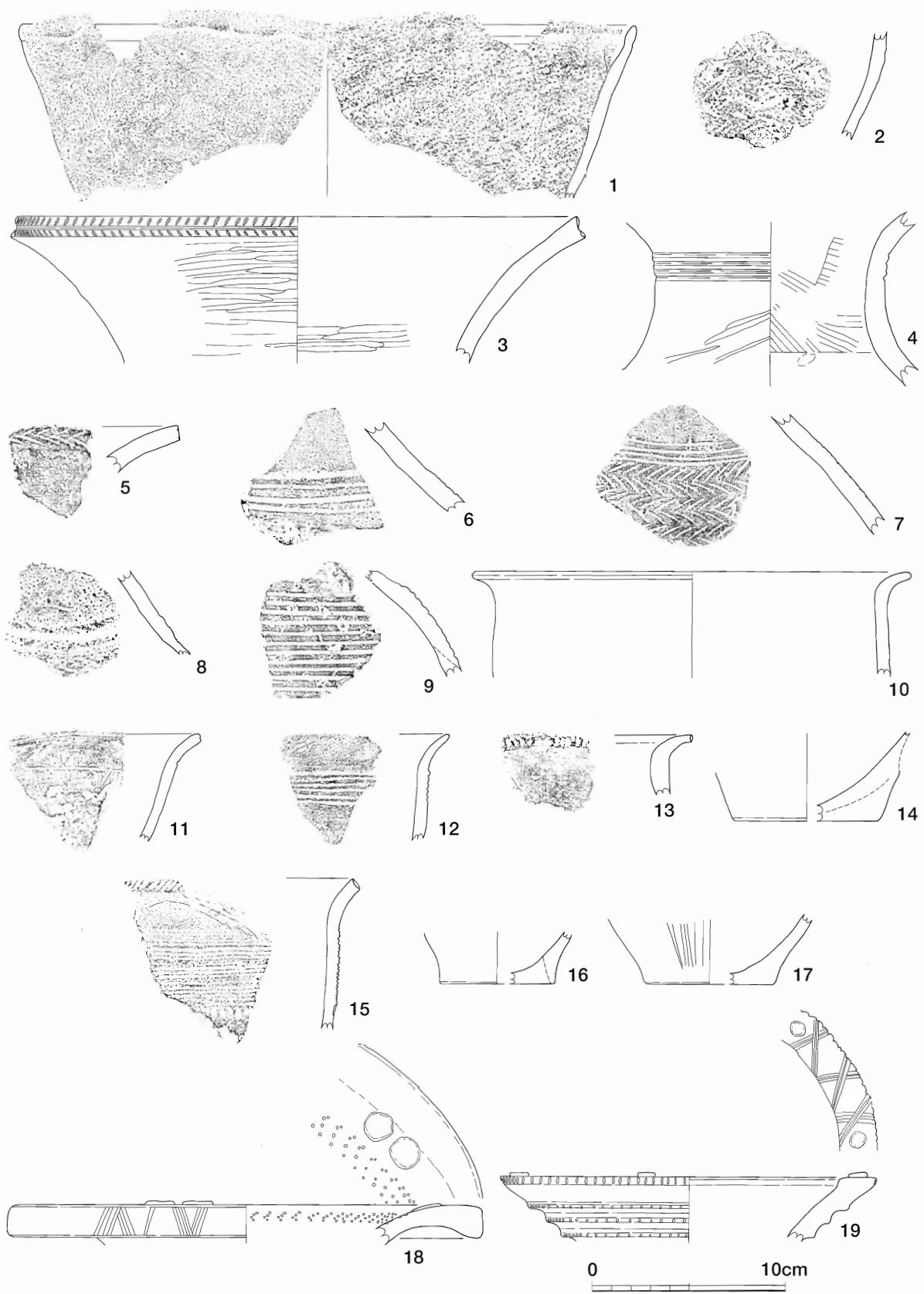
砂礫層中からは、縄紋土器から青磁・白磁までが出土した。縄紋土器（1、2）、弥生土器（3~20）、土師器（21~25、38~40）、須恵器（26~37）、青磁（41、43）、白磁（42）を図示した。

1は口縁部が大きく開き、口縁端部には突帯を貼り付け、その上をナデているので突帯は平たく潰れている。内外面の調整は縄紋である。前期後半代と考えられる。2は条痕調整を行うが、摩滅が著しく時期は不明である。

3~14は弥生前期の土器である。3や5は口縁端部に綾杉文や羽状文を施す。6は削り出し突帯と3条のヘラ描直線文を持つ。7、8は羽状文を直線文の下に施し、特に7は3単位（以上）の貝殻羽状文を施す。9は11条以上のヘラ描直線文を持つ。10~13の甕は、いずれも口縁部で屈曲する。

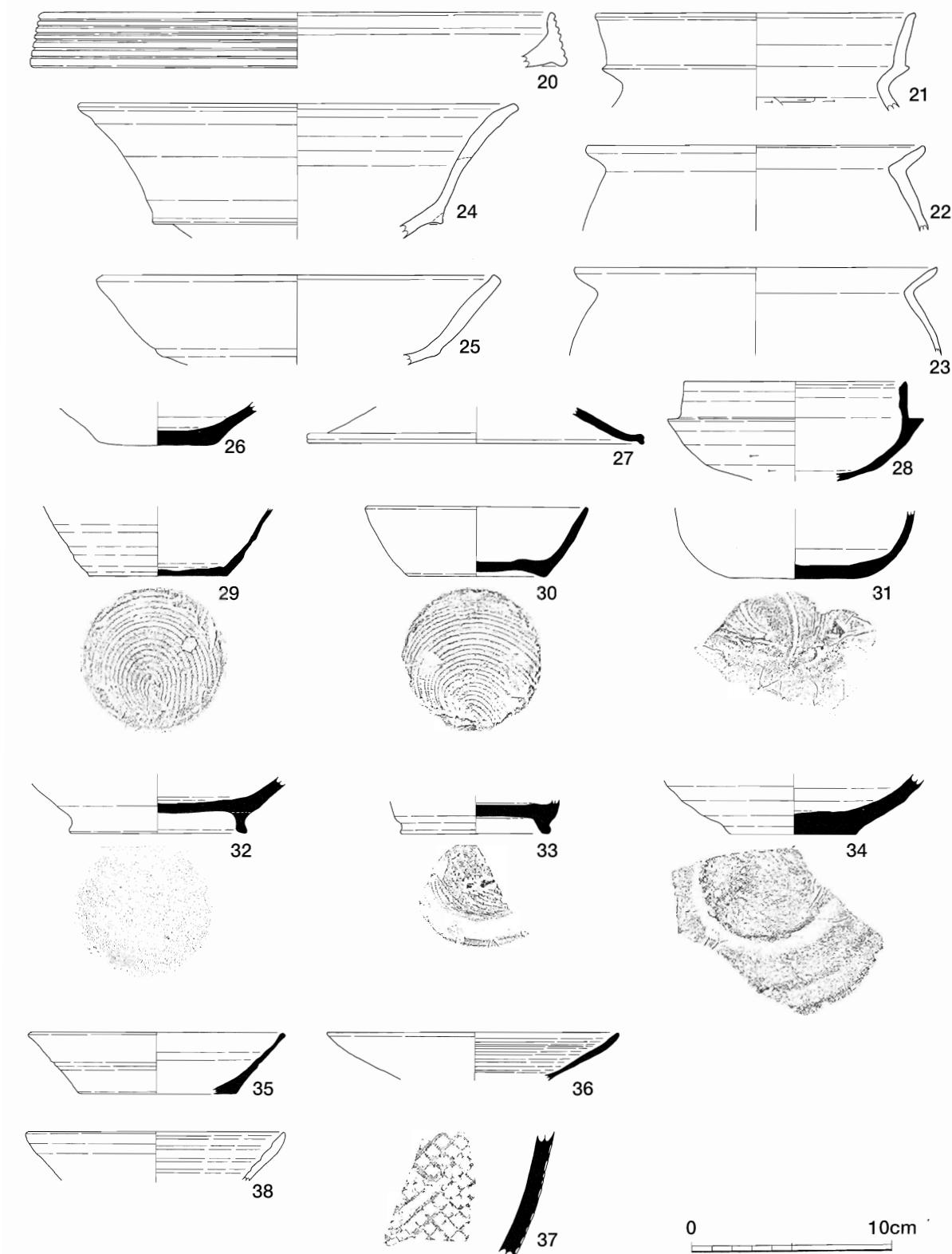


第85図 Ⅲ区右岸杭1~5実測図（立面図）（杭1~4は北西から、杭5は南から）（S=1/20）

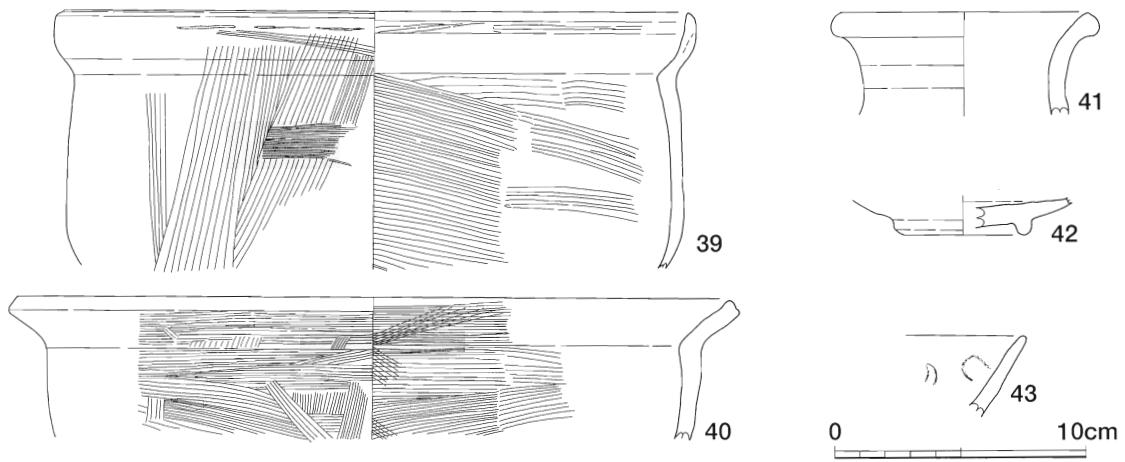


第86図 Ⅲ区右岸調査区南端の青灰色砂礫層出土土器実測図(1) (S=1/3)

6、7は前期中葉（I-2）まで遡る可能性を持つが、他の土器は前期後葉（I-3）と考えられ、9は前期末（I-4）まで下ると思われる。15～19は中期の土器である。15は器形は前期とほぼ同様で、口縁部で屈曲し端部に刻み目を持つが、胴部には合計19条の複帶構成の櫛描直線文と列点文を持つ。18、19は広口壺である。18は口縁部が若干垂下し、口縁内面にも2つ一組の円形浮文とハ



第87図 Ⅲ区右岸調査区南端の青灰色砂礫層出土土器実測図(2) (S=1/3)

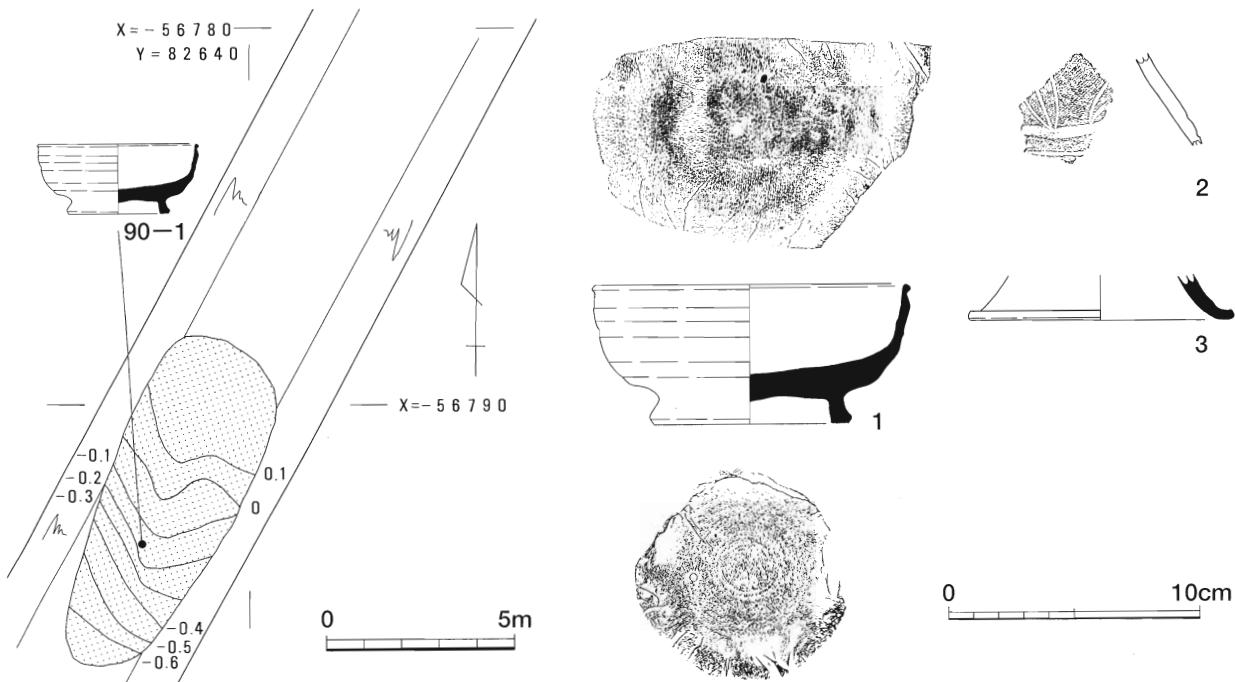


第88図 Ⅲ区右岸調査区南端の青灰色砂礫層出土土器実測図(3) (S=1/3)

ケ原体による列点文を持つ。19は口縁部と口縁部下にある3条の突帯に刻み目を持ち、口縁端面を平坦にして円形浮文と櫛描斜格子文を施す。15は中期前葉(Ⅱ)、18、19は中期中葉古相(Ⅲ-1様式)⁽²⁾と考えられる。20は器台の口縁部と考えられる。後期であると思われる。

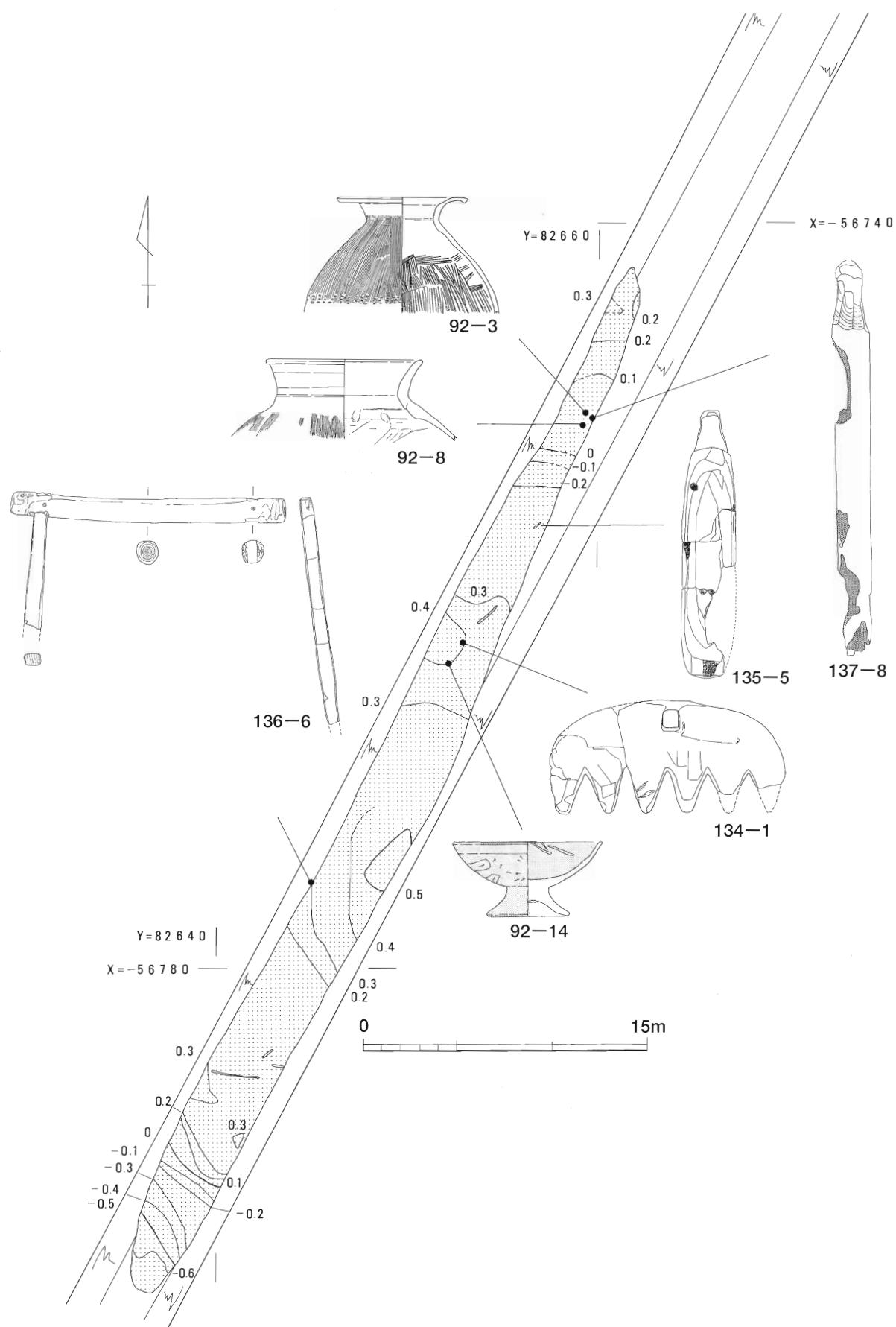
21~24は古式土師器である。21は口縁端部をわずかに外側に肥厚させる。口縁部がやや厚いが、後期VI期新相⁽³⁾と考えられる。22、23は摩滅が著しく調整は不明であるが、共に頸部で屈曲し短い口縁部が付き、端部をわずかに上方へつまみ上げるという特徴を持つので、畿内系土器と考えられる。25は坏部に若干の稜を持ち、直線的に口縁部へ至る高坏である。松山氏の編年のⅢ期⁽⁴⁾に属すると考えられる。

28は口縁端部の内側に段を持ち若干凹み、回転ヘラケズリの範囲が広いので、大谷氏の分類の坏身A1型⁽⁵⁾と考えられる。27は口縁端部がわずかに肥厚し、外側へ面を持つ。29~31は高台を持たない。いずれも回転糸切りを行う。32、33は高台を持つ。32は静止糸切り後、不定方向のナデを行

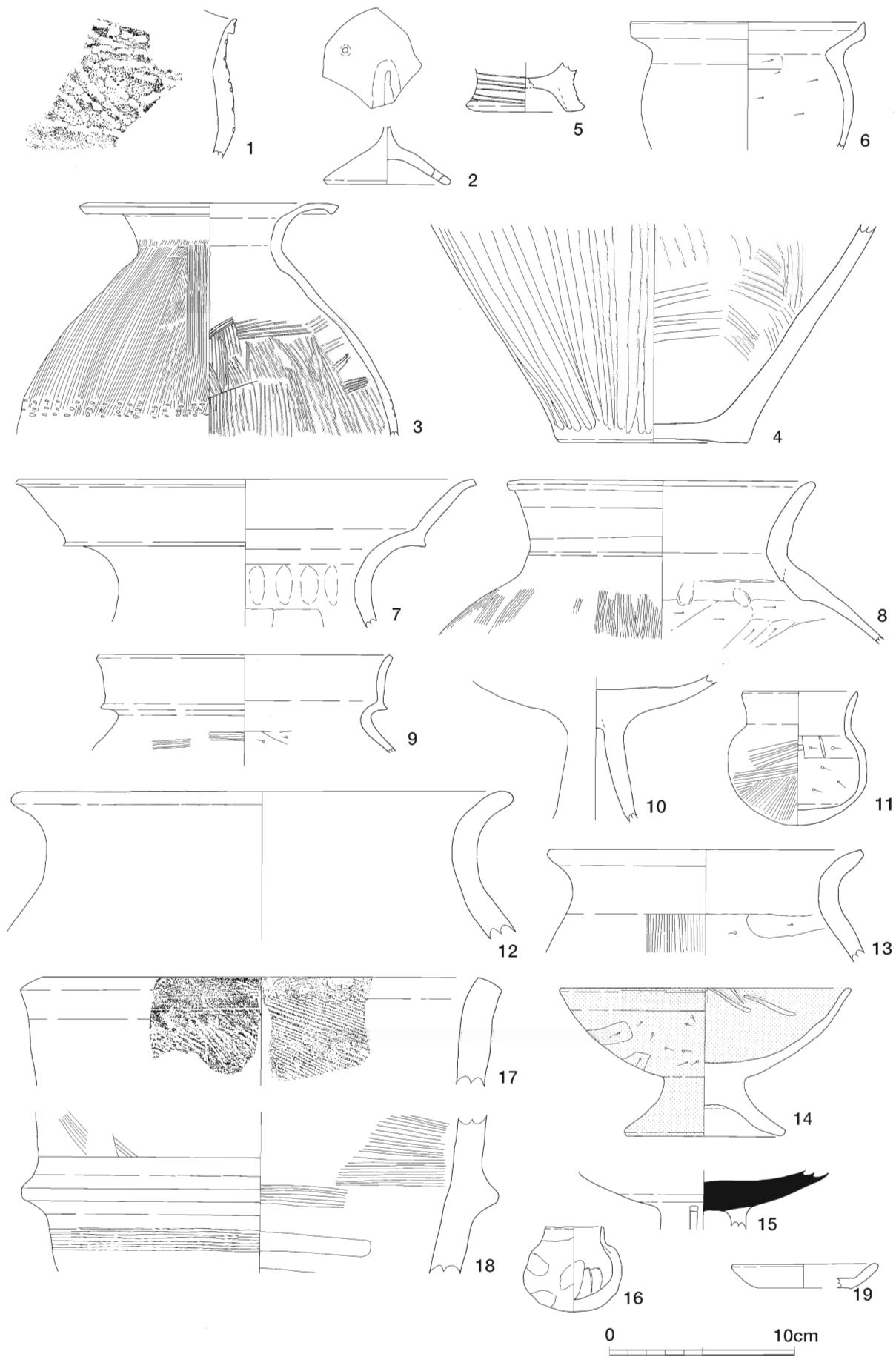


第89図 Ⅲ区右岸調査区青灰色砂層1
測量図 (S=1/200)

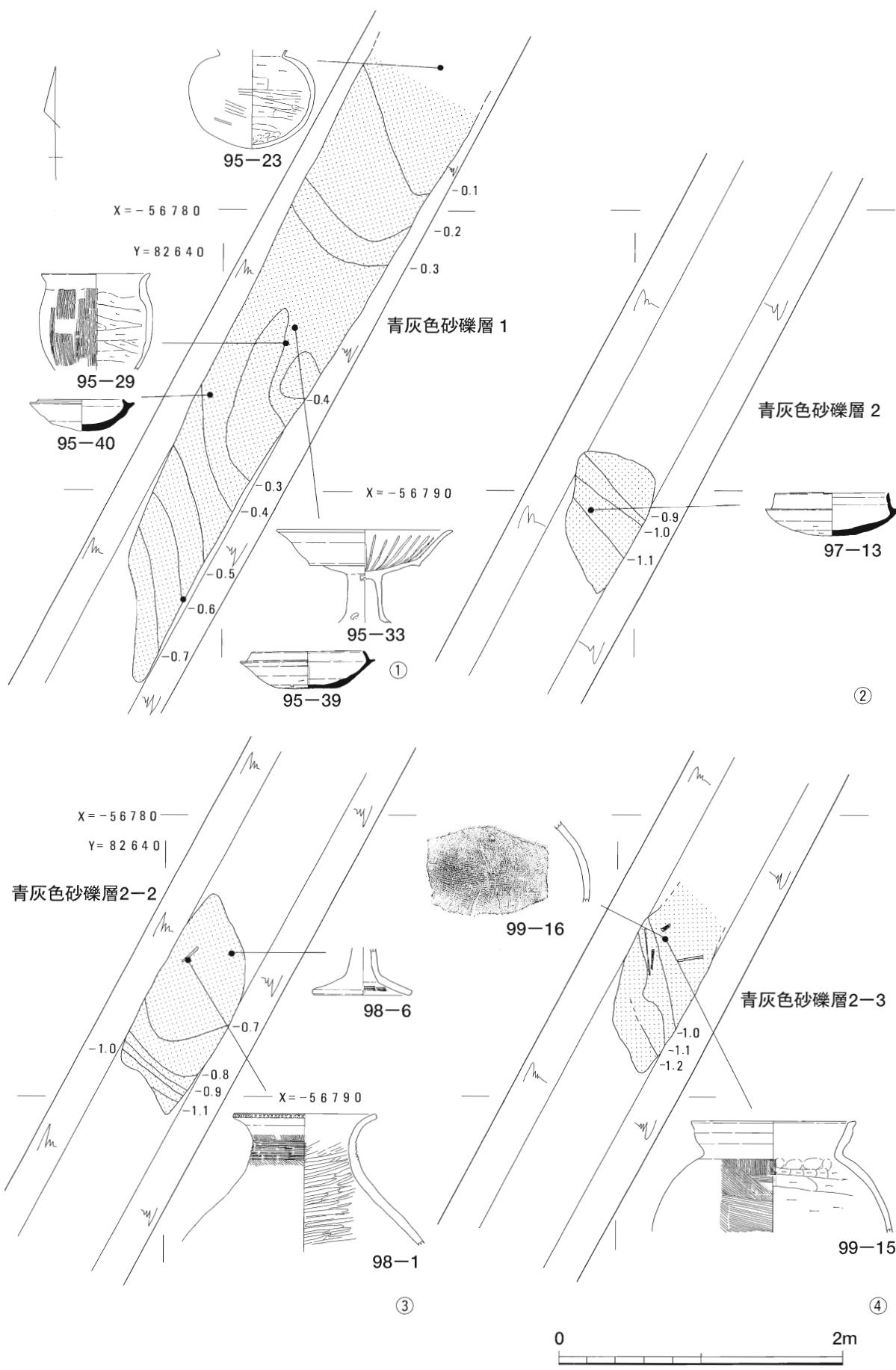
第90図 Ⅲ区右岸調査区青灰色砂層1
出土土器実測図 (S=1/3)



第91図 Ⅲ区右岸青灰色砂層 2 測量図 ($S=1/300$)



第92図 Ⅲ区右岸青灰色砂層2出土土器実測図 ($S=1/3$) (トーンは赤色物塗布を示す)



第93図 III区右岸青灰色砂礫層 1 (①)、2 (②)、2-2 (③)、2-3 (④) 測量図 ($S=1/200$)

う。33は回転糸切りを行う。34は底部が若干突出する。28は古墳時代後期初頭（5世紀末～6世紀初）、それ以外は8世紀後葉～9世紀前葉と考えられる。35は直線的に口縁部へ至る。36は若干外彎気味に口縁部へ至り、内面はナデの痕が残る。37は甕であるが、外面は格子目タタキを行う。38は調整や器形は36と同様であるが、土師器である。39、40は土師器の土鍋である。39は頸部で屈曲して、やや外彎気味に口縁部へ続く。口縁部外面には接合痕を有する。40は頸部で屈曲して直線的に短く口縁部へ続く。

41、43は青磁である。頸部がゆるく内彎して、口縁部が丸く肥厚する。43は内面に文様を持つが破片のため詳細は不明である。42は白磁で、高台を持つ。青磁、白磁は12～13世紀と考えられ、土鍋も同様である。また、この時期が砂礫層が最終的に堆積した時期の下限を示すと考えられる。

(2) 青灰色砂層1、同出土土器（第89、90図）

青灰色砂層1は、南端の砂礫層から泥層の部分を隔てた調査区の下流側、標高0.1～-0.6mに分布していた。

砂層1からは少量の遺物が出土し、弥生土器（2）、須恵器（1、3）を図示した。

1は砂層1のわずかに上の泥層の部分で出土し、ほぼ砂層1に対応すると考えられる。高台を持つ須恵器で、底部は回転糸切りを行う。坏部内面には、ヘラ状の工具で直線を交わらせ、「X」印のように印す。8世紀後葉から9世紀前葉と考えられる。2は弥生前期の土器で、有軸木葉文とその下に削り出し突帯を持つ。3は須恵器の高杯の脚部と思われる。端部付近で屈曲して端部は外方を向く。出雲5期以降と考えられる。

砂層1からは出土した土器が僅かで、直接概期の遺物は出土しなかったが、堆積した時期の下限は、南端の砂礫層と砂層2の間、10～12世紀と考えられる。

(3) 青灰色砂層2、同出土土器（第91、92図）

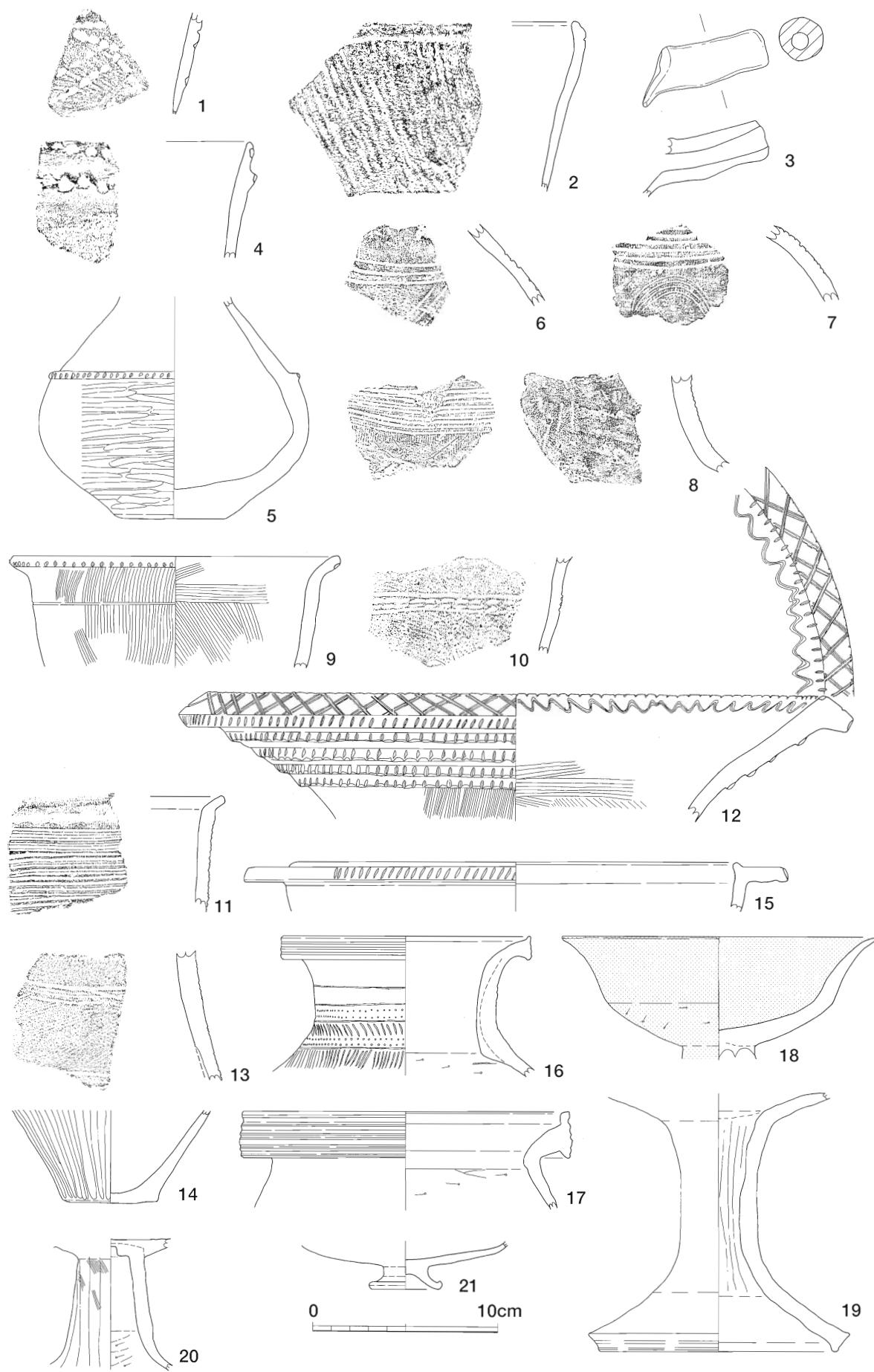
青灰色砂層2は、調査区の中央付近から下流側にかけて標高0.5～-0.6mに分布していた。土器の他に直柄横鍬（第135図1）や舟形木製品（第135図5）、馬鍬の把手（第136図6）や抉入り棒（第137図8）のような木製品も多く出土した。

砂層2からは繩紋土器から須恵器が出土し、繩紋土器（1）、弥生土器（2～6）、土師器（7～14、16）、須恵器（15）、円筒埴輪（17、18）、土師質土器（19）を図示した。

1は胴部上半が若干屈曲し、口縁部は外反する。口縁端部を肥厚させ、その上に刺突を施す。胴部外面にも互いに斜交する押引文を施す。波状口縁になるとされる。西川津式A2類と考えられる。

2は弥生前期の小型の壺用の蓋形土器と考えられる。直径約3mmの蓋受け用の小孔を持つ。3、4は中期の土器である。3は口縁部が垂下するが拡張や肥厚はしない。体部にはタテハケを施し、胴部にはハケ原体による刺突を行なうが、頸部や口縁部には施文を行わない。中期中葉古相と考えられる。5は台付きの土器の台部と考えられる。台部の外面には6条以上の細い直線を持つ。中期か後期か不明である。6はやや小型の甕で、口縁部が直立するが、摩滅が著しく端部の文様は不明である。後期I～II期と考えられる。

8は直口の壺である。口縁部は緩やかに湾曲する。10は脚部の細くなった高坏である。12、13は



第94図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 1 出土土器実測図(1) (S=1/3) (トーンは赤色物塗布を示す)

口縁部へ緩やかに屈曲し、端部は丸くおさめる。全体に厚手で、7～11よりも後出する。14は椀状の坏部を持ち、短い台状の脚部を持つ高坏である。坏部外面にはケズリの痕を残し、外面と坏部内面には赤色物の塗布を行う。8、11は松山Ⅲ期、12～14は同Ⅳ期以降と考えられる。

15は無蓋高坏で、脚部に二方向の長方形透かしを持つ。無蓋高坏のA5型かB5型に属すると考えられ、出雲5～6期に相当すると考えられる。16は手づくね土器の壺と考えられる。

17は内外面にナナメハケを行い、口縁端部はやや角張る。18はタガを持つが突出は弱い。直径25cm前後の円筒埴輪と考えられる。

19は土師質土器と考えられる。わずかに立ち上がる体部を持つ。

砂層2の堆積した時期の下限は、19から10世紀頃と考えられる。

(4) 青灰色砂礫層1（第93図①）、同出土土器（第94～96図）

青灰色砂礫層1は調査区の中央やや下流よりの部分、標高-0.1～-0.7mに分布していたが、-0.1mより上位は前述した砂層2に削られており不明である。

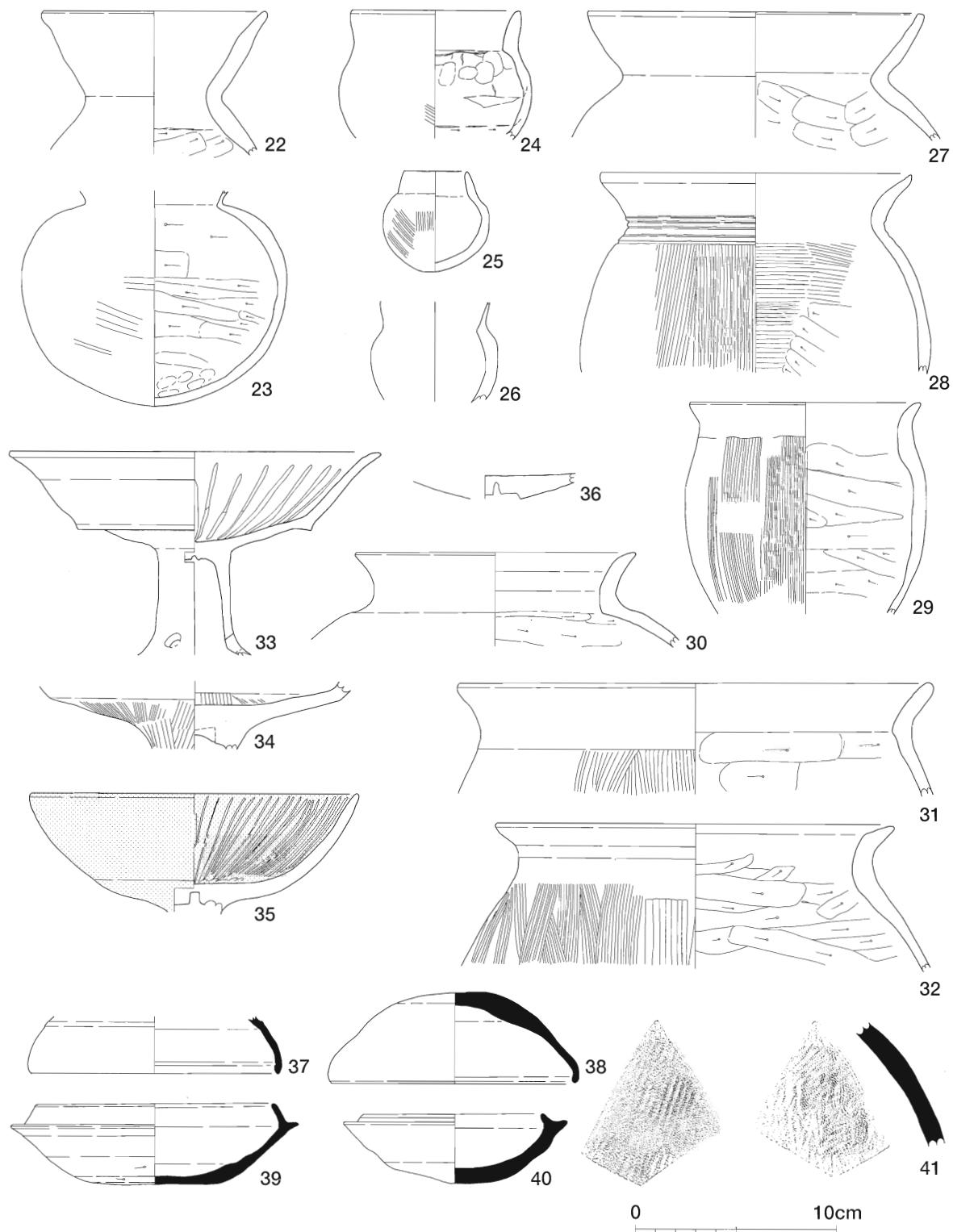
砂礫層1からは繩紋土器から須恵器までが出土し、繩紋土器（1～4）、弥生土器（5～19）、土師器（20～36）、須恵器（37～41）、円筒埴輪（42～45）を図示した。

1は斜交する列点文を施す。西川津式A2類またはA2'類と考えられる。2は口縁部で外彎する。外面に撚糸文を施してから、口縁部に1条の沈線を持つ。中期の可能性を持つ。3は注口土器の注口部で、後期と考えられる。4は口縁端部外面と口縁部下の突帯に「O」字の刻み目を持つ。体部は条痕調整を行う。突帯が端部よりも下がった位置に付き、口縁端部にも刻み目を施すことから山陰突帯文Ⅰ期と考えられる。

5～10は弥生前期の土器と考えられる。5は最大径が胴部下半にあり、胴部には1条の刻み目を有する貼り付け突帯を持つ。6は3条のヘラ描直線文の下に山形文を持つ。7は削り出し突帯の下にヘラ描直線文を有し、更に胴部には4条の貝殻重弧文を持つ。9は口縁付近で屈曲して口縁部は外方を向き、端部にハケ原体による刻み目を有する。胴部にはヘラ描直線文を1条、段状に施す。10は胴部の2条のヘラ描直線文の間に列点文を2列施すが、直線文の原体は半截竹管の可能性がある。6と9は前期中葉まで遡る可能性を持つ。5、7は前期後葉、8、10は前期末まで下ると思われる。11～15は中期の土器である。11は胴部に複帶構成の櫛描直線文を施す。櫛描文は器面に対して強く施されており、この時期の特徴を示す。原体の幅は約1.2cmと推定される。12は加飾広口壺である。大きく開く口縁部はやや下方に垂れ、その端面には櫛描斜格子文を施し、口縁部下には4条の刻み目を有する突帯を持つ。刻み目は2条を一度に施すようである。また、口縁端部の上と下にも刻み目を施す。口縁部内面には櫛描波状文が施される。櫛描文の原体の幅は約4mmと推定される。13も12とは型式が異なるが、出雲を主たる分布域に持つ大型広口壺の胴部片であり、櫛描綾杉文を施している。15は水平口縁の高坏で、口縁端部に刻み目を施す。11は中期前葉（Ⅱ）、12は中期中葉新相、13と15は中期後葉（15はⅣ-1、13はⅣ-2）と考えられる。16～19は後期の土器である。16は加飾された壺である。胴部や頸部には貝による直線文や刺突文を施す。胎土は他の土器と同様であり、精製ではないようである。外面には赤色物を塗布した痕跡がわずかに残っていた。18は内外に赤色物を塗布した高坏である。坏部に稜を持ち、外面にはヘラケズリの痕を残す。坏部と脚部の接合部は中実で、円盤充填ではない。19はなだらかに開く脚部を持ち、端部は下方に拡張

する。脚部の内面にはシボリ痕が顕著で、坏部と脚部の接合は円盤充填による。19は後期Ⅱ期、16～18は後期Ⅲ期と思われる。

20、21は古式土師器である。20はやや太めの脚部を有する高坏である。共に後期Ⅵ期中～新相と考えられる。22は直口壺である。23も直口壺になると考えられる。球形の胴部を持ち、底部はわずかに突出する。24は小型丸底壺である。口縁部内面は強くヨコナデが施されている。25は小型丸底壺の形をした、手づくね土器の可能性がある。27～32は単純口縁の甕である。27は口縁部が外彎氣



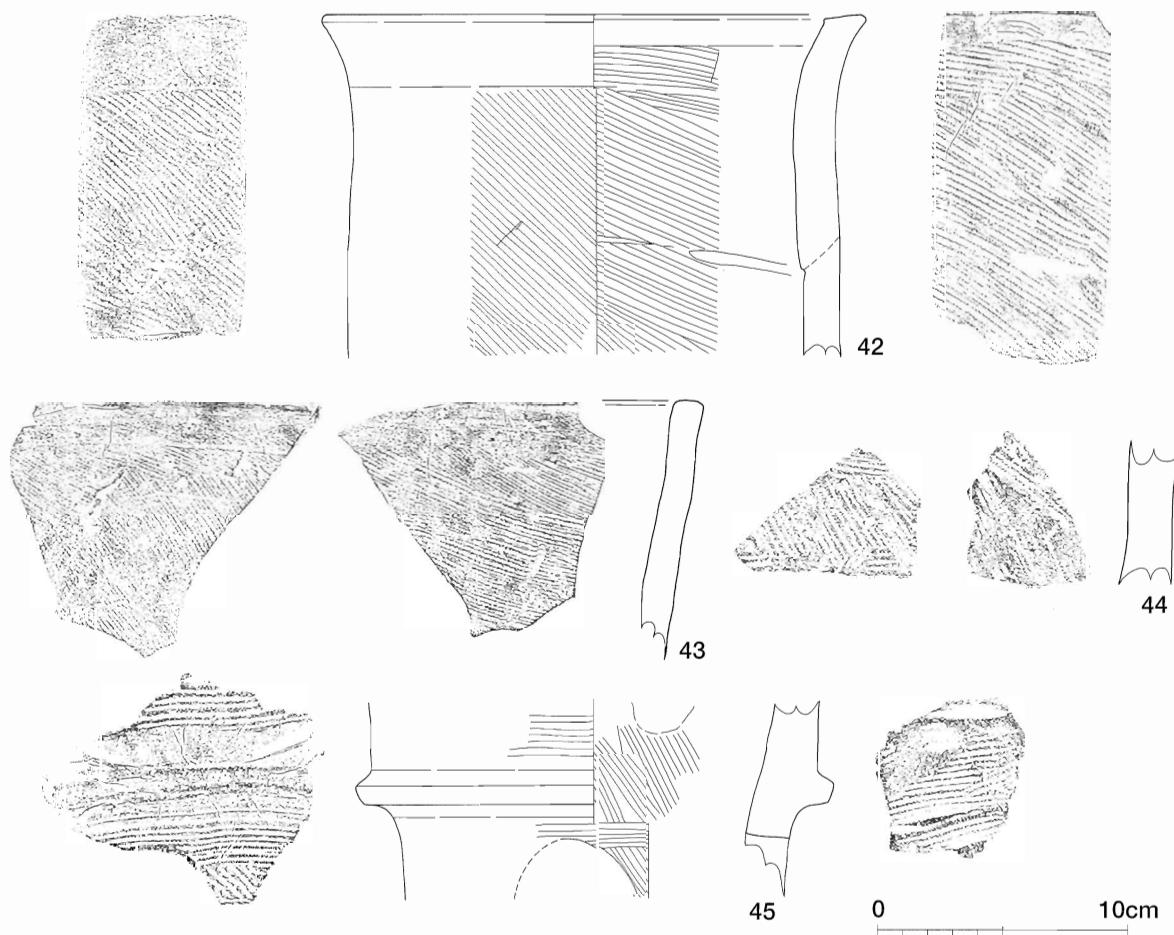
第95図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層1出土土器実測図(2) (S=1/3) (トーンは赤色物塗布を示す)

味であるが、28は逆に内彎氣味で、肩部に強くヨコハケが施されており、一見四線文状である。29～32は口縁部の形などが27、28より後出的な要素を示す。特に31、32は口縁部が短くて屈曲が緩く、作りも厚手である。29は器面の凸凹が明瞭であり、タタキを用いていた可能性を持つ。33～36は高坏である。33、34は坏部に稜を持つ。33は坏部が直線的に伸び、坏部の稜も横へ引き出したように明瞭である。35は椀状の坏部を持ち、内外面に赤色物塗布を行う。33、35は坏部内面のタテヘラミガキが暗文風である。24、27、28、33は松山Ⅱ期、29、35は同Ⅲ期、22、30～32は同Ⅳ期かそれ以後と考えられる。

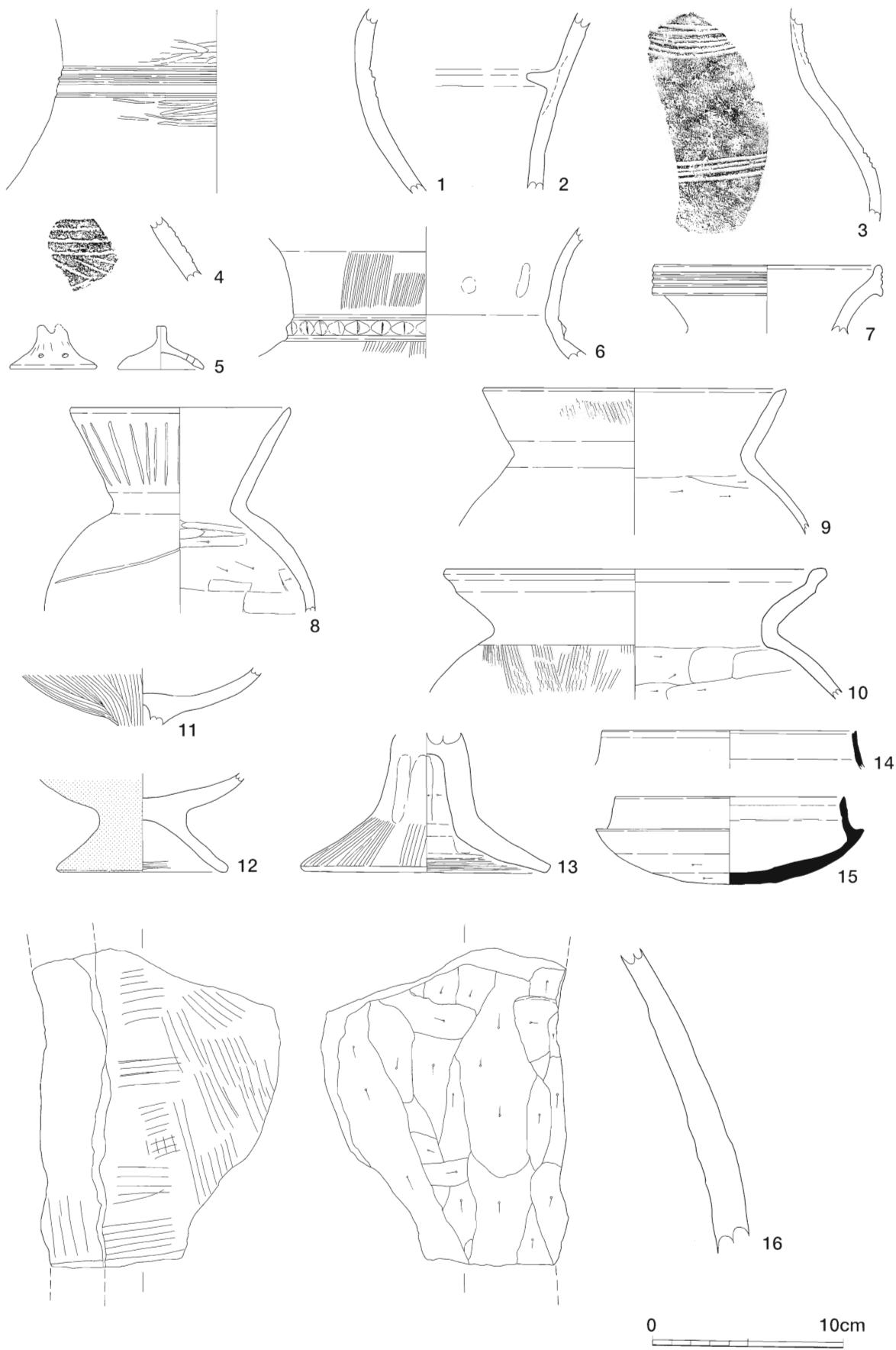
37～41は須恵器である。37は天井部の稜の断面は台形で、僅かではあるが突帯状に突出する。口縁部内面にはナデが沈線状に入る。蓋坏A4型と考えられる。38は天井部はヘラ切り後にナデを行い、口縁端部は丸くおさめる。蓋坏A7型と考えられる。39の口縁部は丸くおさめる。体部の回転ヘラケズリの範囲は、体部の中程辺りまで及ぶ。蓋坏のA4～A6型に対応する坏身と考えられる。40は口径が8.6cmと縮小し、口縁部の立ち上がりも短いので、蓋坏のA8型に対応すると考えられる。

42～45は円筒埴輪である。いずれも無黒斑である。42は口縁部付近で緩やかに屈曲して外反し、内面へ向けてわずかに肥厚する。43は須恵質であるが、42とは逆に、わずかに外彎氣味に口縁部へ至る。45はタガを持つ資料である。タガの断面は台形状である。B種ヨコハケを施す。44、45から、円形の透かしを持つことがわかる。

砂礫層1の堆積した時期の下限は、40から7世紀中葉と考えられる。



第96図 III区右岸青灰色砂礫層1出土土器実測図(3) (S=1/3)



第97図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2出土土器実測図 (S=1/3) (トーンは赤色物塗布を示す)

(5) 青灰色砂礫層 2 (第93図②)、同出土土器 (第97図)

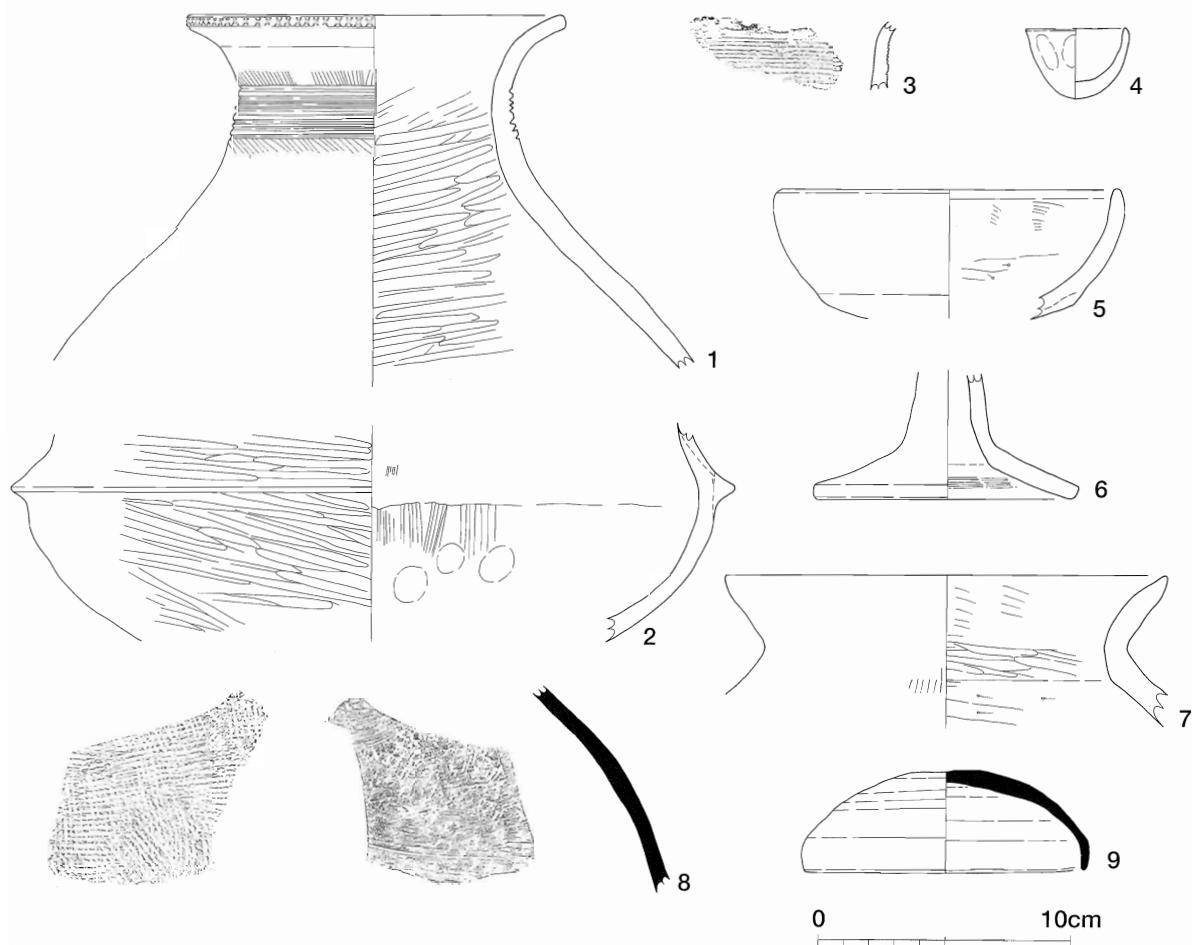
青灰色砂礫層 2 は、調査区の中央やや下流寄りの部分の狭い範囲、標高-0.9~-1.1mに分布していたが、砂礫層 1 に削られて現在のような範囲になったと考えられる。これらの層はいずれも最終的な堆積時期がほぼ同じであり、砂礫層 1 と合わせて一つの堆積単位と考えるのが適当であるが、砂礫層 2 は調査の際に便宜的に 2 から 2 - 5 までの 5 つに分けたので、5 つの層として記述する。

砂礫層 2 からは縄紋土器から須恵器までが出土し、弥生土器 (1~7)、土師器 (8~13、16)、須恵器 (14、15) を図示した。

1~4 は弥生前期の土器である。2 は頸部と考えられるが、内面に蓋受け用と思われる 1 条の突帶を持つ。3 は破片ではあるが、頸部に 6 条、胴部に 4 条のヘラ描直線文を持つ。4 は直線文の下に羽状文を施す。1 が前期後葉、2、3 は前期末と考えられる。5 は時期は不明であるが、二つの突起を持つ小型の蓋形土器と考えられる。6 は中期後葉の広口壺であるが、頸部には凹線文の間に指による刻み目を持つ突帶を有す。7 は後期Ⅲ期と考えられる壺である。

8 は口縁部が直線的に開き、外面には放射状のヘラミガキを行う。肩部にはヘラ状工具の痕がある。9、10 は甕であるが、9 の口縁部は直線的に開き、端部に面を持つのに対して、10 は口縁端部にわずかな稜を持ち、複合口縁を呈している。口縁部外面には強いヨコナデが施され、端部はやや肥厚して丸くおさめる。8~10 は松山Ⅲ期に属すると思われる。

14 は口縁部がやや内彎気味に長く立ち上がり、端部内面は段を持つので、蓋坏 A2a 型に伴う坏身



第98図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層 2-2 出土土器実測図 (S=1/3)

と考えられる。15は体部の回転ヘラケズリの範囲は中程までおよび、口縁部はやや尖り気味で、内側には僅かな稜線を持つので、蓋坏A3型に伴う坏身と考えられる。

16は外面には剥離痕を有し、外面には粗いハケ、内面はヘラケズリによる調整を行う。移動式壺の焚き口付近ではないかと考えられる。

砂礫層2の堆積した時期の下限は、前述した砂礫層1と後述する砂礫層2-2の間、7世紀前～中葉と考えられる。

(6) 青灰色砂礫層2-2(第93図③)、同出土土器(第98図)

青灰色砂礫層2-2は、調査区中央のやや下流寄りの部分の狭い範囲、標高-0.7～-1.1mに分布していた。

砂礫層2-2からは繩紋土器から須恵器までが出土し、弥生土器(1～3)、土師器(4～7)、須恵器(8、9)を図示した。

1、2は弥生前期の土器である。1は屈曲する口縁部から緩やかに体部へ移行する。2は胴部に貼り付け突帯を1条有する。突帯の断面は三角形である。共に前期末と考えられる。3は胴部に複帯構成の櫛描直線文を施す。中期前葉と考えられる。

5は椀状の坏部を持つ高坏だが、やや厚手である。6の脚端部は面を持つ。7は口縁端部がやや尖り、作りは厚手である。5、7は松山IV期に属すると思われる。

8の内面は當て具痕をナデ消す。9は天井部付近の回転ヘラ切り痕をナデ消し、回転ヨコナデで調整される。口縁端部も丸く、沈線は持たない。蓋坏A7型と考えられる。

砂礫層2-2の堆積した時期の下限は、9より7世紀前葉と考えられる。

(7) 青灰色砂礫層2-3(第93図④)、同出土土器(第99図)

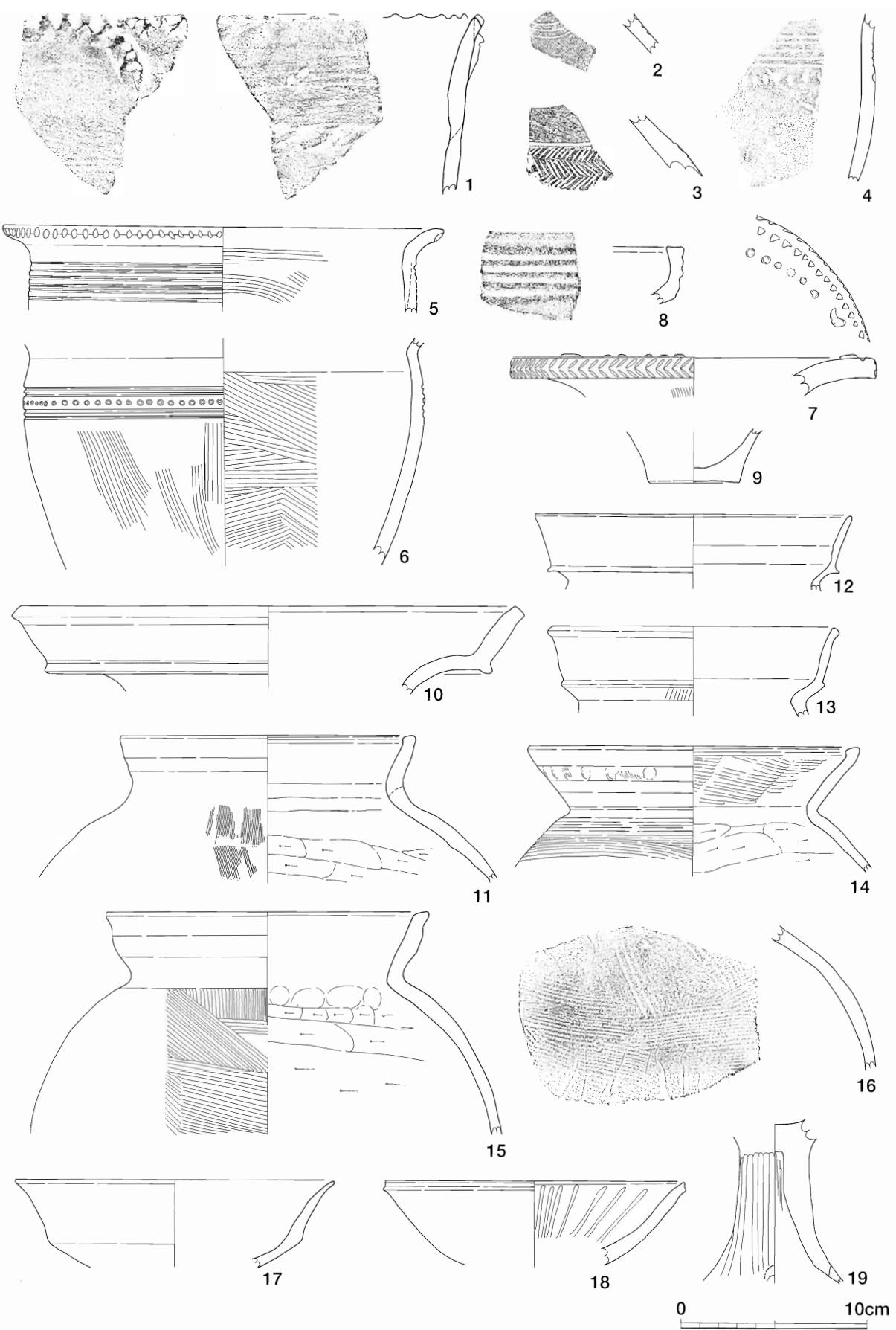
青灰色砂礫層2-3は、調査区中央のやや下流寄りの狭い範囲、標高-1.0～-1.2mに分布していたが、標高-1.0mより上位は、砂礫層2-2に削られたと考えられる。

砂礫層2-3からは繩紋土器から須恵器が出土し、繩紋土器(1)、弥生土器(2～9)、土師器(10～19)を図示した。

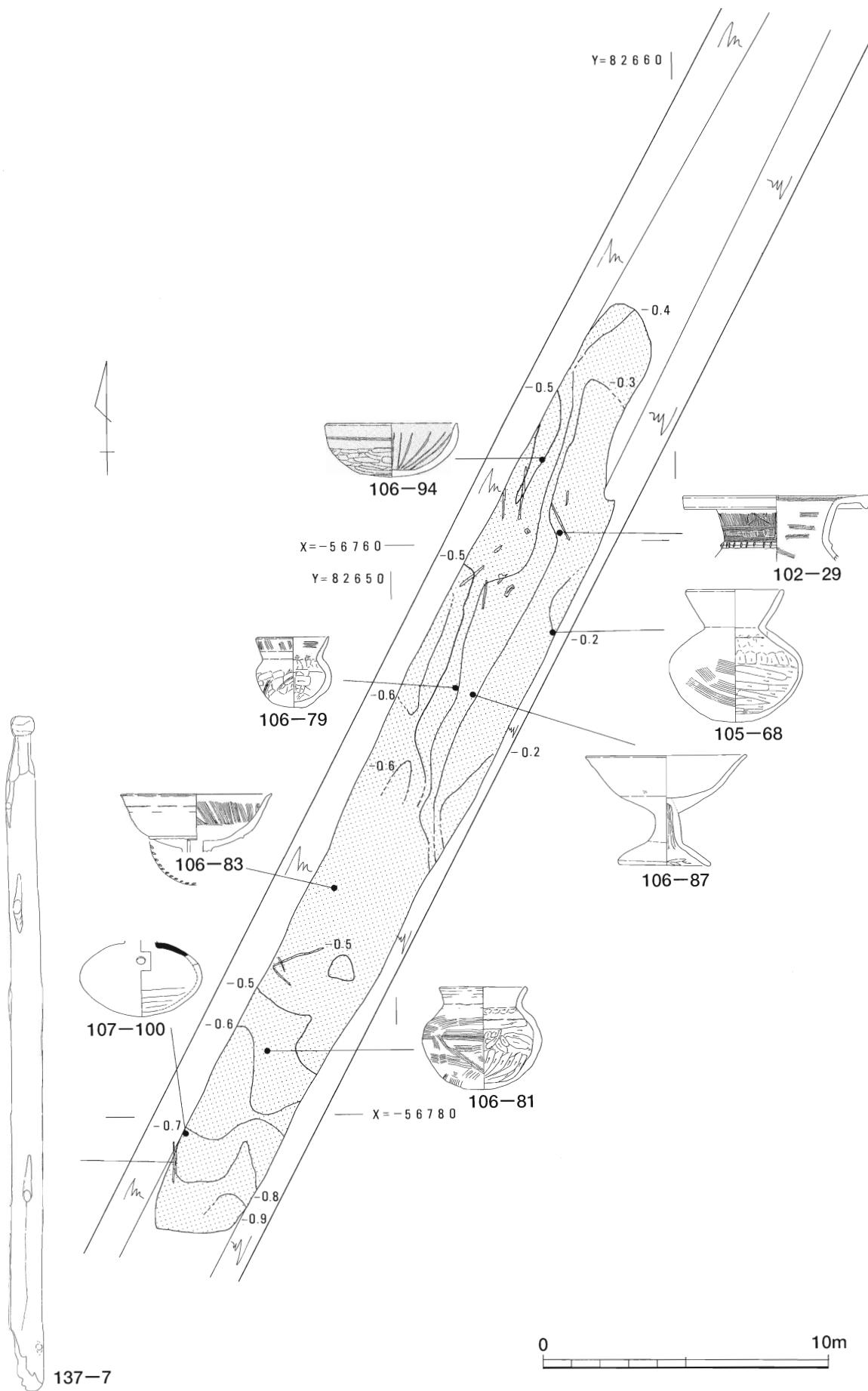
1は口縁端部外方に刻み目を施す突帯を持つが、突帯は部分的に口縁より下に垂れ下がるようである。工具は半截竹管状の工具と考えられる。胎土中に纖維を含む。長山式1類と考えられる。

2～6は弥生前期の土器である。3はヘラ描直線文の下にヘラによる羽状文を施す。5の刻み目は口縁部のやや下の方に施されるが、刻み目は「O」に近い。2、3は前期中葉まで遡る可能性を持つが、4は前期後葉、5、6は前期末と考えられる。7は口縁部内面に三角形の列点文と円形浮文を施し、口縁端面には刺突による羽状文を施す。凹線文を欠くことを積極的に評価して、中期中葉頃と考えたい。8は坏部に稜を持つ高坏の口縁部で、口縁部外面には4条のC種凹線文を施す。中期後葉新相と考えられる。

10、11は土師器の壺である。10は頸部が大きく屈曲する複合口縁の壺である。口縁部の作りは厚手である。11は口縁部が短く屈曲する短頸の壺である。12～14は甕である。12は口縁部が細く直線的に伸び、端部を丸くおさめるのに対して、13は口縁部の作りが12に比べてやや厚手で、端部に面を持ち外方へ肥厚する。12が後期VI期中相、13は松山I期と考えられる。14は単純口縁であるが、



第99図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層 2-3 出土土器実測図 (S=1/3)



第100図 III区右岸青灰色砂礫層 2-4 出土土器実測図 ($S=1/200$)

口縁部はやや厚手だが直線的に伸び、端部を内側に肥厚させてるので、13と同時期まで遡る可能性を持つ。15はそれよりやや下る時期の土師器の甕である。口縁部の下と頸部に強いヨコナデを行う。16は甕の胴部であるが、ハケ調整の後に、拓本ではやや不鮮明であるが鼠のような小動物の足跡がついているのが観察される。17は坏部に稜を持つ高坏、18は稜を持たない高坏で、18の口縁端部は面を持ち若干凹む。19の円形透かしは四方向である。17は松山Ⅱ期、15、18は同Ⅲ期に属すると思われる。

砂礫層2-3の堆積した時期の下限は、直接遺物を伴わないが、前述した砂礫層2-2の時期から7世紀前葉と考えられる。

(8) 青灰色砂礫層2-4、同出土土器（第100~107図）

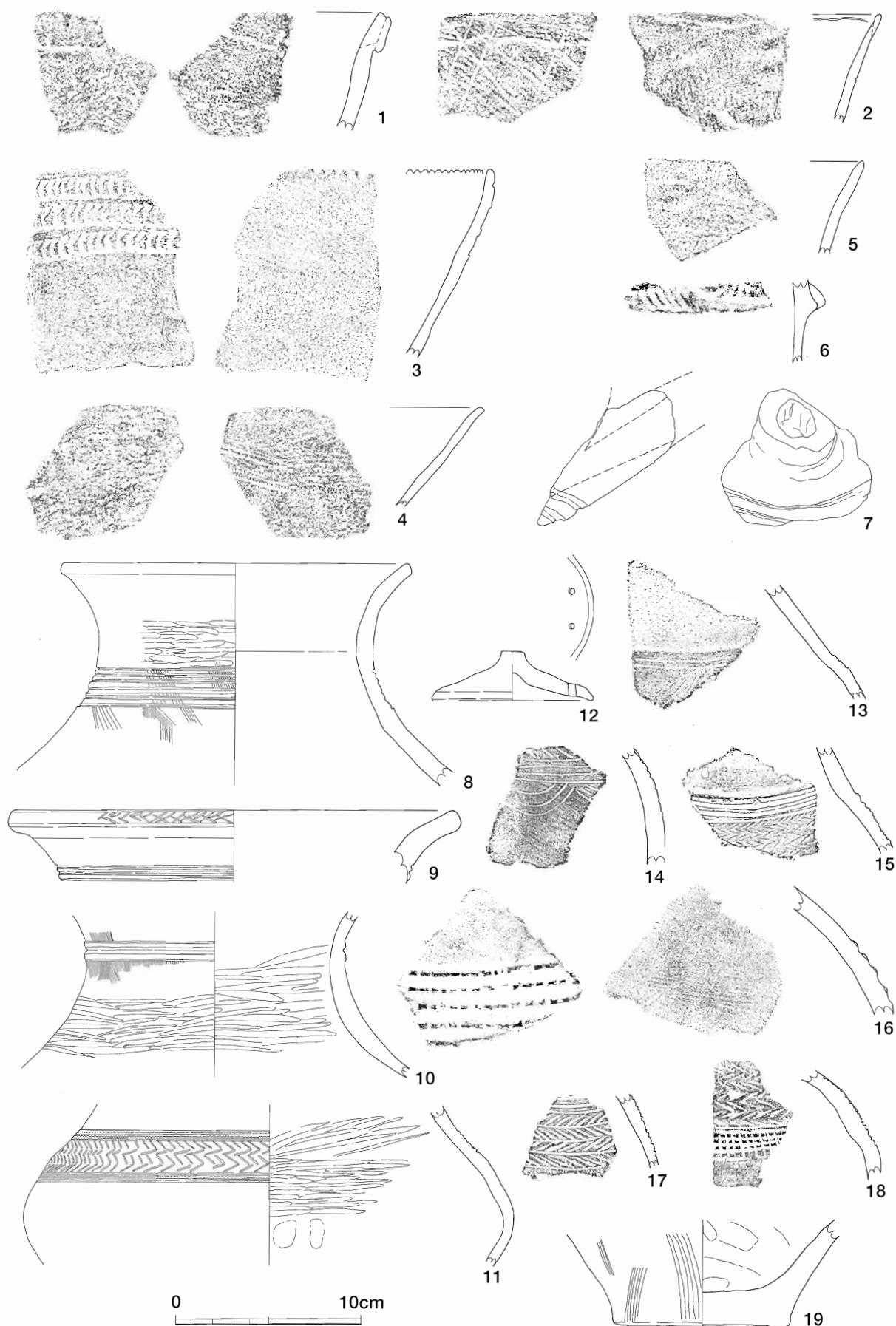
青灰色砂礫層2-4は、調査区の中央部を中心に広い範囲の標高-0.2~-0.9mに分布していた。土器の他に、抉入り棒（第137図7）が出土した。

砂礫層2-4からは、縄紋土器から須恵器や埴輪までが非常に大量に出土し、縄紋土器（1~7）、弥生土器（8~57）、土師器（58~96、104~107）、須恵器（97~103）、円筒埴輪（108、109）を図示した。

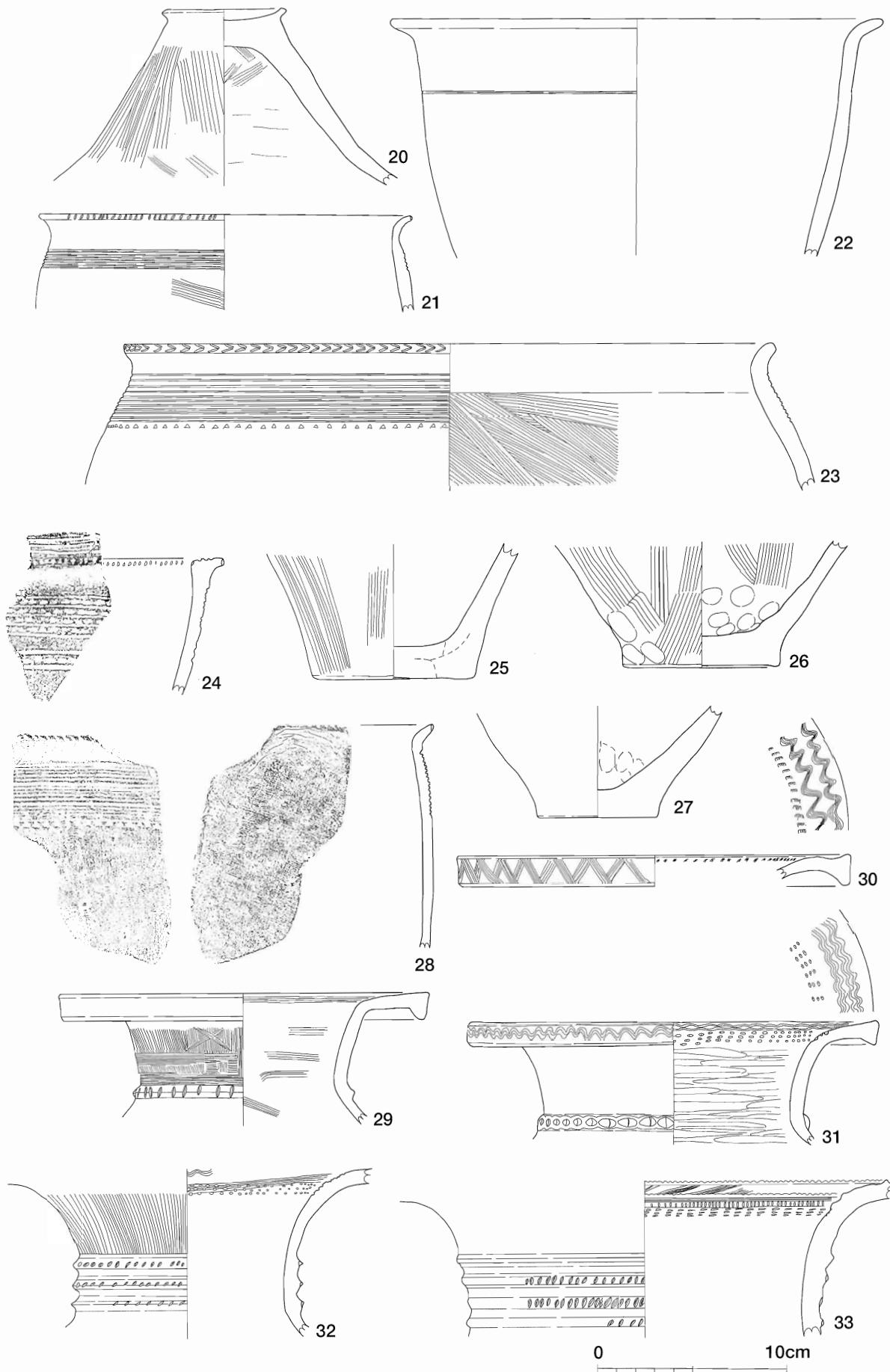
1は口縁端部に粘土紐を貼り付け、その上はナデを施す。2も口縁端部に粘土紐を貼り付け、外面には沈線による斜格子文を施す。共に条痕調整を施す。3は胴部から緩やかに開く口縁部へ続き、端部には刻み目を施す。外面には3列の「C」字の爪形文を施す。この爪形文は「C」の両端が強く凹む。1は長山式1類、2は西川津式A2類、3は北白川下層Ib式と考えられる。4、5は後期~晩期の粗製深鉢と考えられる。6は外面に沈線による文様を持つので、後期中葉の縁帶文土器の可能性を持つ。7は注口土器であるが、注口部の下には凹線文を2条有するので、後期後葉の凹線文土器の時期と考えられる。

8~27は弥生前期の土器である。この内8~19には壺を示した。10の頸部のヘラ描直線文の上下はタテハケで削るように調整が施され、突帶状を呈す。11は3条ずつの貝殻直線文の間に、2列の羽状文が施されている。これらは中~大形の壺であるが、小型の壺に伴うと考えられる12の蓋形土器も出土している。外面は暗褐色で、黒色物を塗布している可能性がある。13~18には壺の文様を示した。壺の文様には、ヘラ描や貝殻の直線文や羽状文の他に、13のように削り出し突帶を持つものや、有軸斜軸木葉文（13）、重弧文（14）、刻み目を持つ貼り付け突帶（16）、短線文（18）⁽⁶⁾などが見られる。20は甕用の蓋形土器で、頂部が若干凹む。21~27は甕である。22は口縁部で屈曲し、口径が最大径となるが、21、23は口縁部の屈曲はやや弱く、胴部に最大径を持つ。24は口縁部が肥厚する逆「L」字の口縁部を呈し、口縁端部上面にもヘラ描直線文を3条施す。胴部には直線文の間に刺突を施し、その文様を4単位施す。10や22は前期中葉まで遡る可能性を持つ。また、11、13、14、21が後葉と考えられる他は、いずれも前期末を中心とする時期と考えられる。

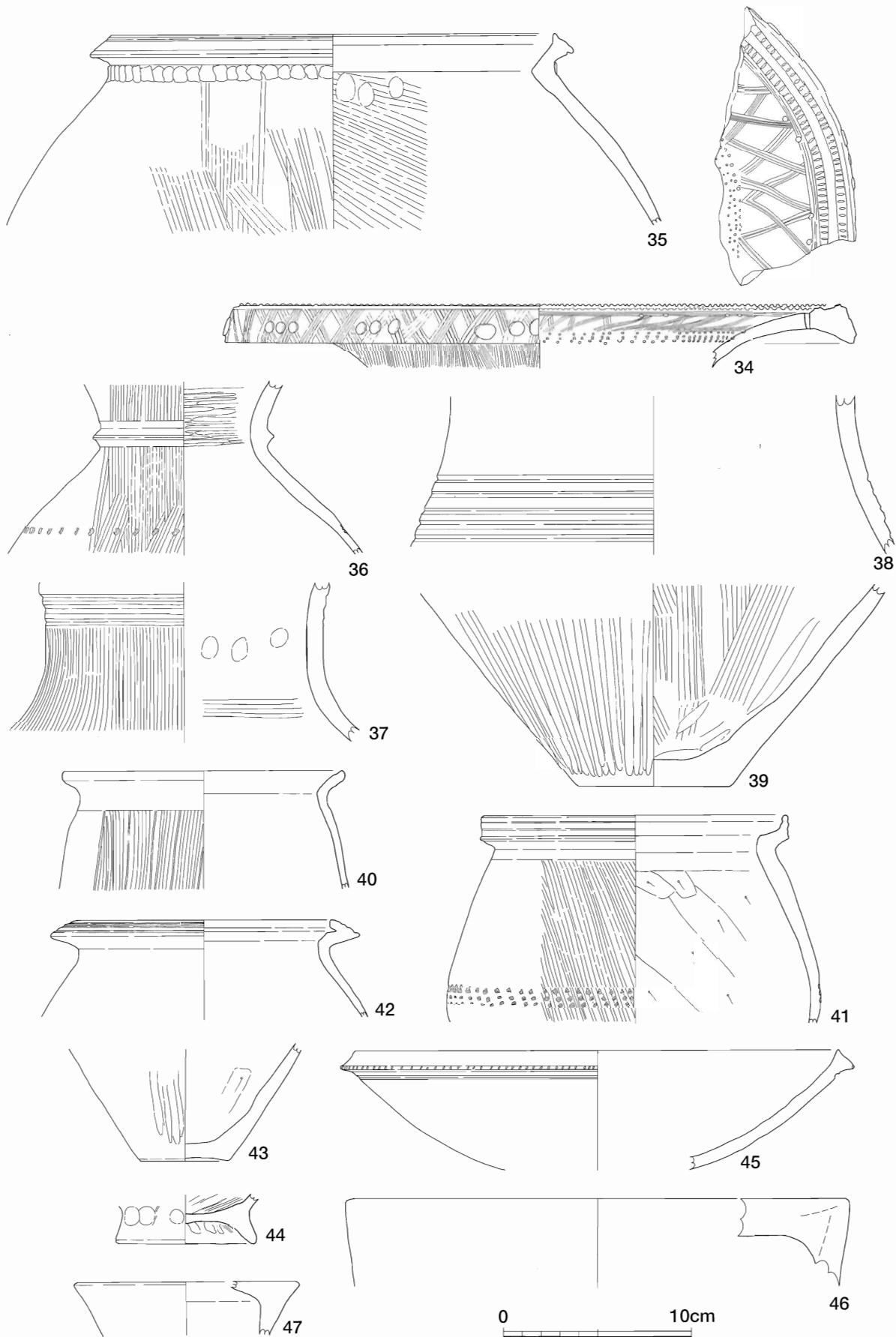
28~51は中期の土器である。28は複帯構成の櫛描直線文を持つが、原体は5条の櫛描を持ち幅は約1cmである。中期前葉と考えられる。30~39は中期中葉~後葉の広口壺である。中期中葉の広口壺は、いずれも口縁端部を垂下させ、多くが口縁内面にも文様を施す。文様には波状文（30~32）や直線文（33）、刻み目を持つ突帶と斜格子文（34）があり、櫛描原体による列点文を伴う。口縁端部にも斜格子文（30）や波状文（31）、円形浮文（34）を施す。頸部や頸胴部界には1~数条の



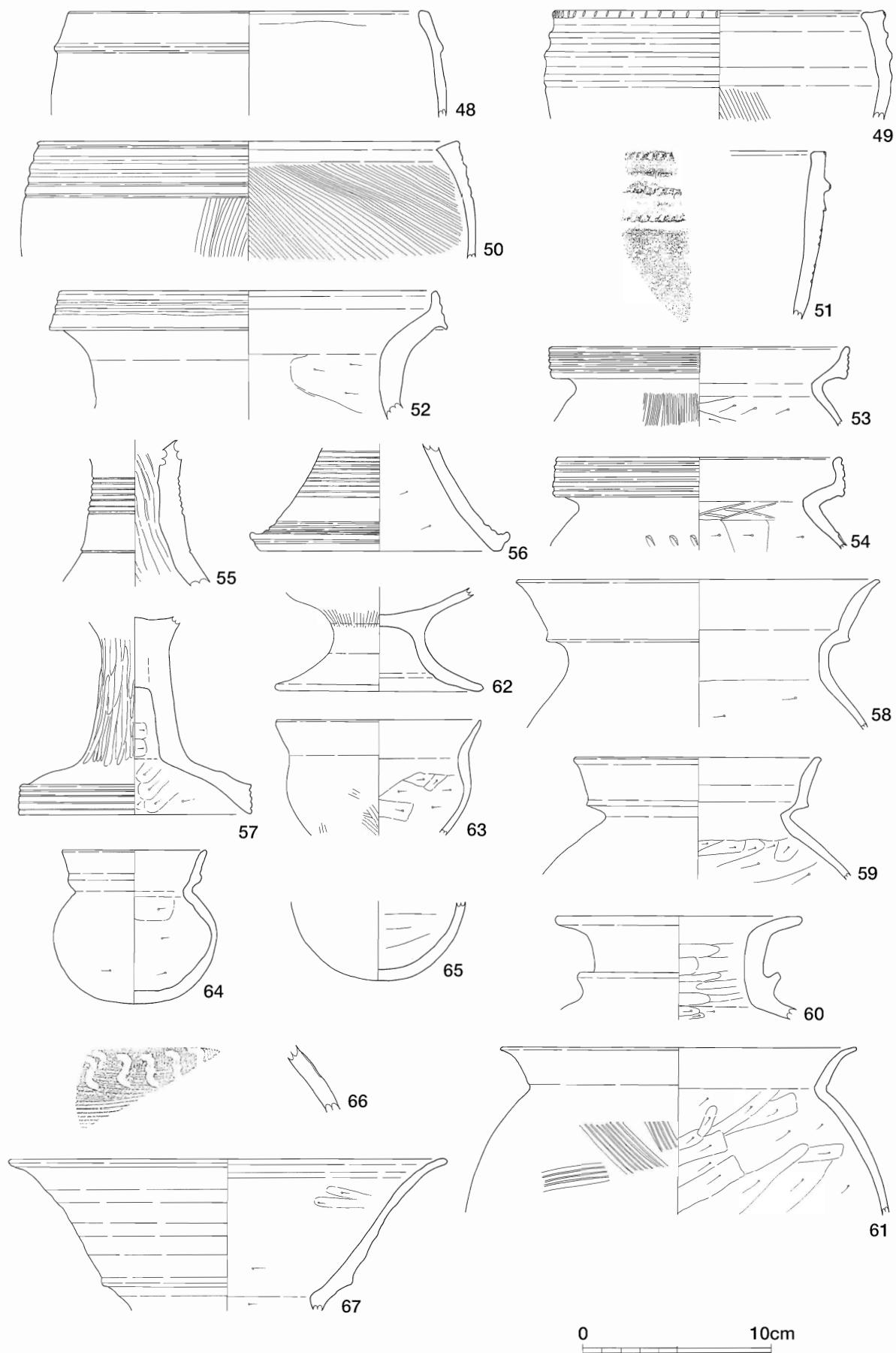
第101図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 2-4 出土土器実測図(1) (S=1/3)



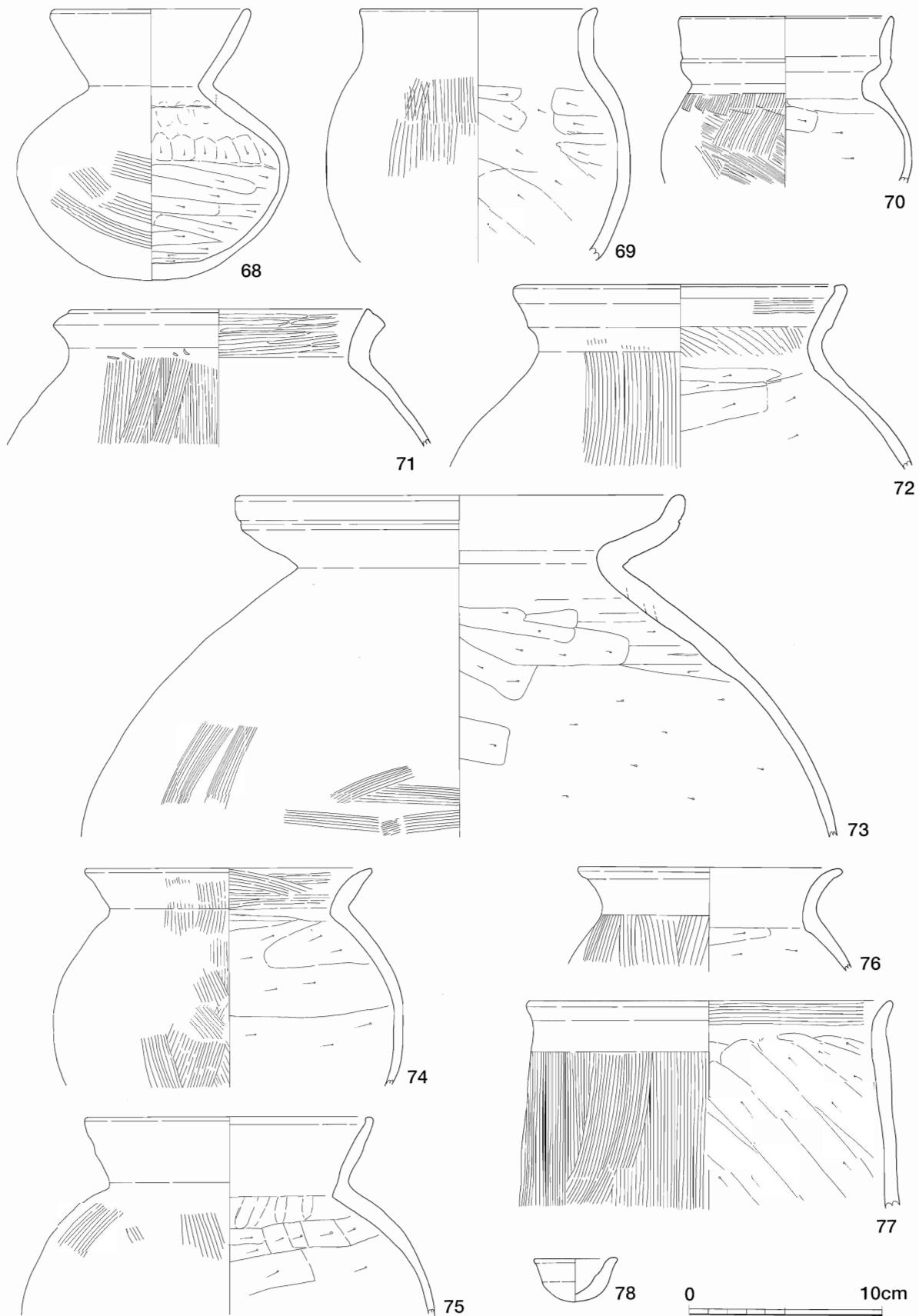
第102図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 2 - 4 出土土器実測図(2) (S=1/3)



第103図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 2-4 出土土器実測図(3) (S=1/3)



第104図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器実測図(4) (S=1/3)



第105図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層 2—4 出土土器実測図(5) (S=1/3)

刻み目を持つ突帯を施す。29の頸部外面には「X」字状の文様が施されている。31の櫛描原体は3条の纖維を束ねて1本にして、それを3つ合わせたものを原体として文様を施文している。32は突帯の間を強くヨコナデしており、B種凹線文の成立過程を示唆する。34は径約3mmの小孔が間隔を置いて一周する。35は頸部の指頭圧痕が痕跡的になり、施文後ナデで押しつぶしている。36は頸部が細く、頸胴部界の突帯は上下からつまんでいる為、突帯の上下はヨコナデにより凹んでいる。37、38は頸部の突帯が凹線化した広口壺である。これらの凹線文は幅が広く浅い。39は厚手で、ヘラケズリの跡は見えない。32～34は中期中葉新相、37、38は中期後葉古相、35は中期後葉新相、それ以外は中期中葉古相と考えられる。40～44は甕である。40の口縁端部は膨らみ気味で面は持たず、上方へつまみ上げる。胴部の調整はタテハケであるが、纖維を束ねたものを原体としている。41は頸部で屈曲し口縁部が上方へ立ち上がり、口縁部外面には擬凹線ではないかと思われる文様を有す。42は頸部で大きく屈曲し口縁端部は斜め上方へ内彎気味に立ち上がる。44は高台気味に底部が凹む。45は大きく開く坏部を持つ高坏である。口縁端部は断面三角形を呈し、その下には凹線文を1条有す。46は47に比べて頂部の突出が弱い。共に台形土器と考えられる。48～51は鉢形土器でいずれもやや膨らみ気味の胴部から外彎気味に口縁部に至り、口縁部下に突帯や凹線文を施す。48は口縁部下に1条の小さな突帯を有するが、49では3条の低い突帯の間をヨコナデし、50では口縁部下に5条のC種凹線文を施す。48→49→50という変遷が想定される。51は48と49の間にに入る可能性を持つ。40は中期中葉古相、41、42は後期ではなく⁽⁷⁾中期後葉より中期末に近い時期と考えられる。48、51は中期中葉、45や49、50は中期後葉と考えられる。

52～57は後期の土器である。52は壺であるが、口縁端部の中程にのみ2条の凹線文を有する。55～57は高坏である。55は脚柱部の中程に7条の櫛描直線文を施す。56は大きく開く脚部の外面に凹線ではなく細いヘラ描の沈線を施す。57は脚柱部から大きく屈曲して脚端部へ至る。53、54が後期Ⅲ期の他は、いずれも後期Ⅰ～Ⅱ期と考えられる。

58～67は古式土師器である。58は口縁部が外方へ屈曲し端部はやや先細りである。59は口縁部下の稜が水平に突出し、端部はわずかに外方へ肥厚する。58は後期Ⅵ期中相、59は後期Ⅶ期新相と考えられる。60は肩部に突帯を持つ短頸の壺である。口縁部で強く屈曲する。61は単純口縁で、内彎気味に屈曲する。外面は粗いハケ、内面はヘラケズリで、斜めにケズリ上げる。共に非在地系（61は畿内系）の土器である。62は低脚坏で、脚部が高く、裾部へ向けて大きく開く。63～65は小型丸底壺である。64は複合口縁を呈す小型丸底壺である。66は壺の肩部であるが、半截竹管を上下逆に施して逆「S」字状を呈す。

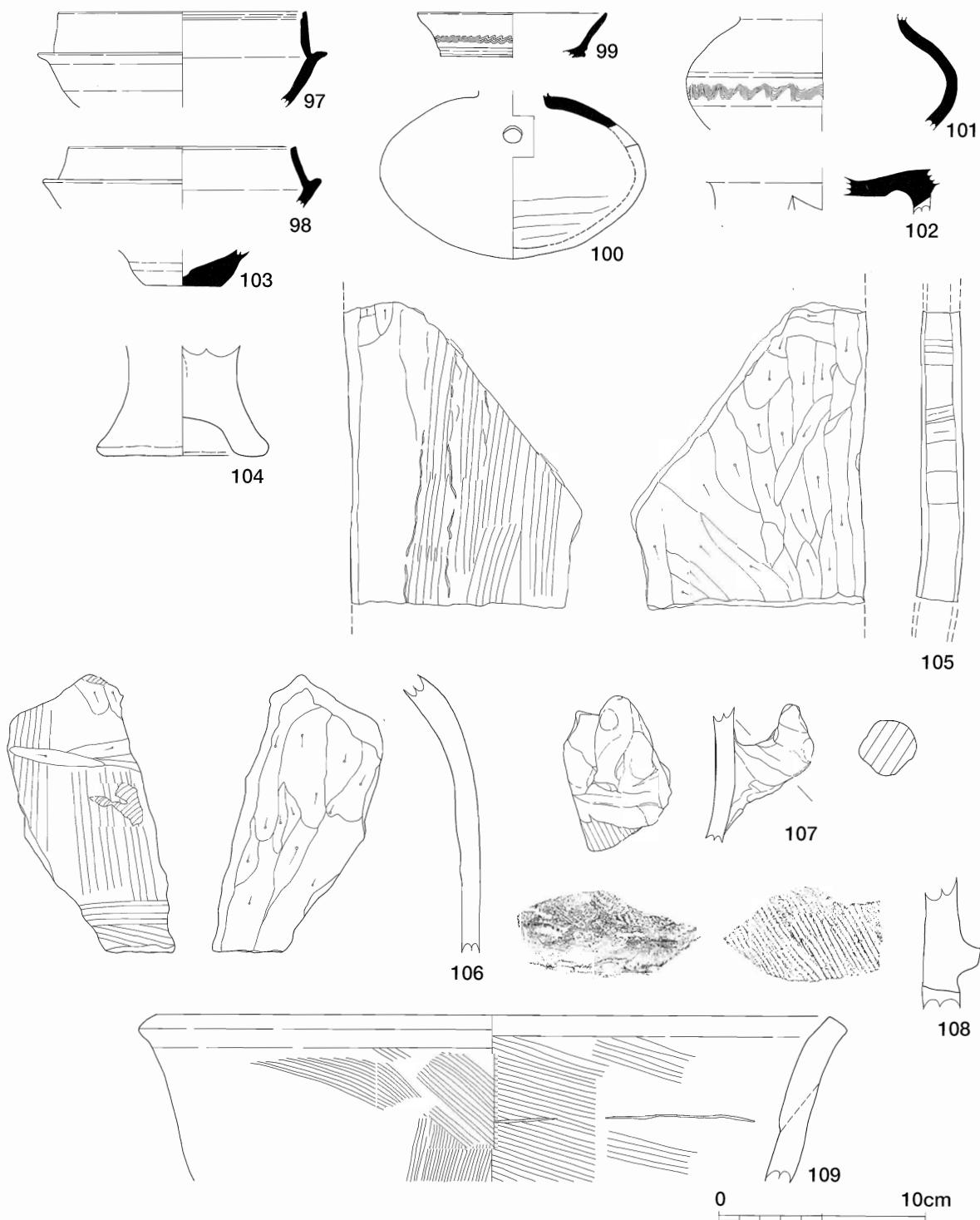
68は直口の壺である。丸底で、肩部には丁寧なヨコナデを施す。69は短頸の壺で、頸部の屈曲は弱い。共に煤が外面に付着する。70は複合口縁の鉢である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がる。71は短頸の壺である。72～77は甕である。この内72、73は複合口縁を痕跡的に残す。72は口縁端部がわずかに内面に肥厚する。73は大型の甕で、口縁部の作りは厚い。74～76は単純口縁の甕である。74は口縁がやや内彎気味に短くおさめるが、75は口縁部が直線的に伸び、端部は内側に肥厚する。76は口縁付近が熱を受けて変質している。77は胴部がほぼ直立し、口縁部がわずかに屈曲する。甕ではない可能性を持つ。79、80は小型丸底壺であるが63～65よりも後出する要素を持つ。79は胴部外面をヘラケズリした後にハケ調整を行っているので、ヘラケズリの痕が残っている。81の外面には、赤色物を塗布した痕がわずかに残っているが、どの範囲に塗布していたのか不明なのでトーンでは

図示しなかった。頸部に接合痕を明瞭に残す。82は台付きの鉢と考えられるが、内面には放射状のヘラミガキを有する。83～92は高坏である。坏部に稜を持つもの（83～88）と椀状の坏部のもの（89、90）に大別される。量は前者がやや多いようである。83は坏部の稜の下端を突帯状に引き出し、その下に刺突文を施す。坏部の底は孔を開けてから脚部と接合すると考えられる。84は坏部の稜の部分の接合面にもハケ調整を行う。円形の透かしが四方向に開く。86は坏部の稜がやや弱い。坏部と脚部を接合した後、脚部の下から粘土を押し込んで補強している。87は脚部の側面に坏部を

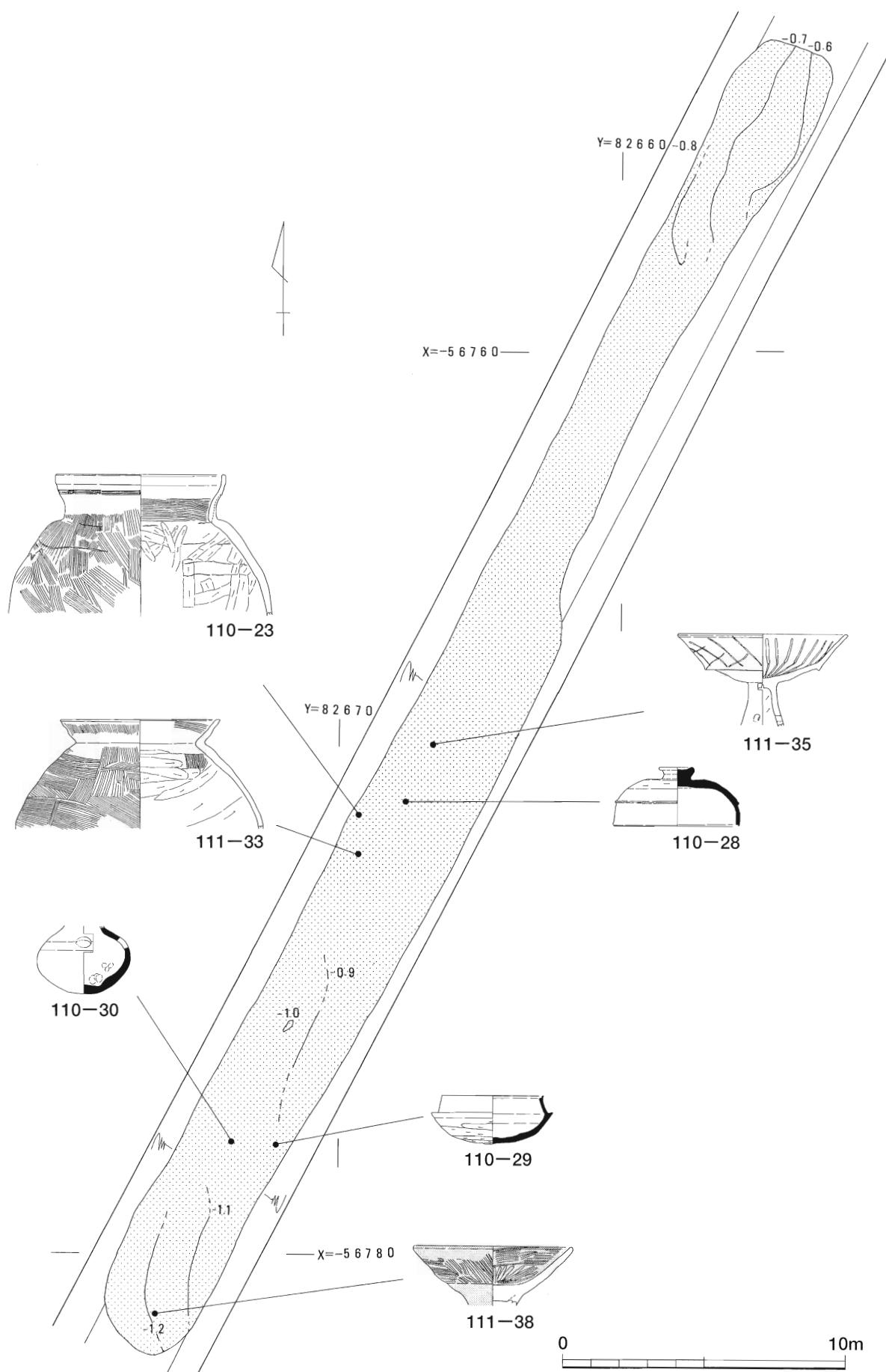


第106図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2-4出土土器実測図(6) (S=1/3) (トーンは赤色物塗布を示す)

付加する。90の脚部は火を受けたのか、一部変質している。91は脚部の周囲に坏部を付加している。92は接合方法はほぼ同一であるが、脚部中程で屈曲する。94～96は坏である。94は内外に赤色物を塗布する。外面は手持ちのヨコヘラケズリ、内面はヨコナデ後に放射状のヘラミガキを施す。95、96は94と似た器形をしているが、調整はハケやナデである。これらの土師器のうち、70は松山Ⅰ期、79、80、83、85、86は同Ⅱ期、68、72、73、89は同Ⅲ期、69、74～77、87、88、90、93～96は同Ⅳ期に属すると考えられる。



第107図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層 2-4 出土土器実測図(7) (S=1/3)



第108図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 2-5 測量図 (S=1/200)

97～103は須恵器である。97の口縁部は直線的に立ち上がり、端部は内側が凹線状に凹む。外面には丁寧なヨコナデを施しているので、蓋坏A1型に伴う坏身ではないかと考えられる。98の口縁端部は面を持つのみであり、蓋坏A2b型～A3a型に伴う可能性を持つ。99は口縁部には稜を持ち外面には波状文と凹線を施している。龜の口縁部と考えられる。100は龜の胴部であるが、胴部は扁平であり、定型化以前の龜と考えられる。101は胴部に波状文を施し、龜と考えられる。102は高坏の坏部と脚部の接合部である。

104は脚部が中実なので土製支脚の脚部と考えたが、高坏の脚部の可能性もある。105、106は移動式竈片である。105は端面をヘラケズリの後にナデを施しているが、ケズリの痕が段状に残る。106は105と同一個体である可能性があるが、具体的な部位は不明である。外面にも一部ケズリを行う。107は甌の把手である。把手の部分は中程で強く屈曲する。

108、109は円筒埴輪である。108は円形の透かしを持つ。109は口縁部で、調整はナナメハケである。共に無黒斑である。

砂礫層2～4の堆積した時期の下限は、前述した砂礫層2～2から7世紀前葉と考えられる。

(9) 青灰色砂礫層2～5、同出土土器（第108～第111図）

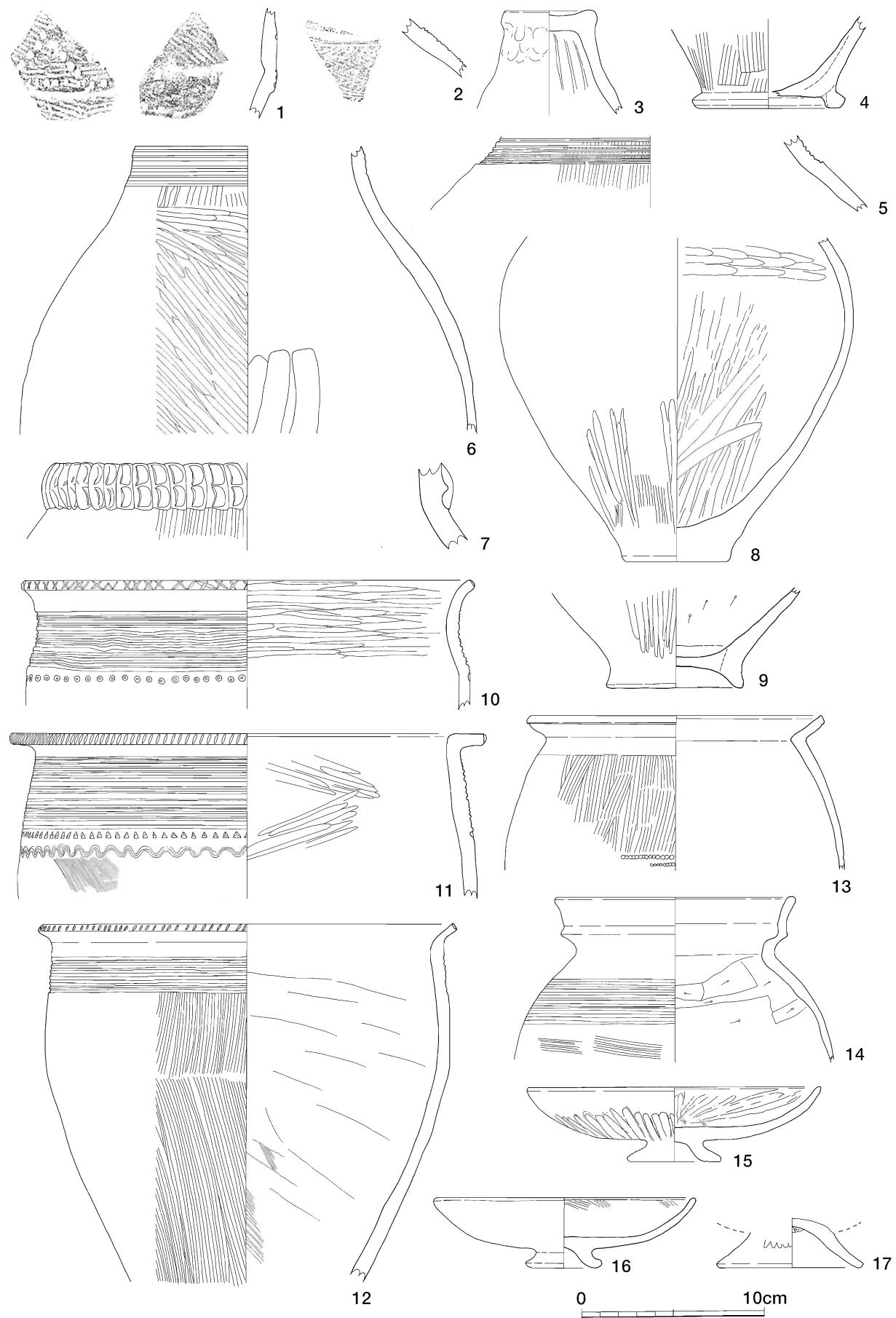
青灰色砂礫層2～5は、調査区の中央付近、標高-0.6～-1.2mに分布していた。この上位には砂礫層2～4が堆積しており、その際に一部削られたことに加え、砂礫層2～4と分けることができなかった部分があったため、等高線が欠けている部分が多い。

砂礫層2～5からは縄紋土器から須恵器が出土し、縄紋土器（1）、弥生土器（2～13、18）、土師器（14～17、19～27、32～44）、須恵器（28～31）を図示した。

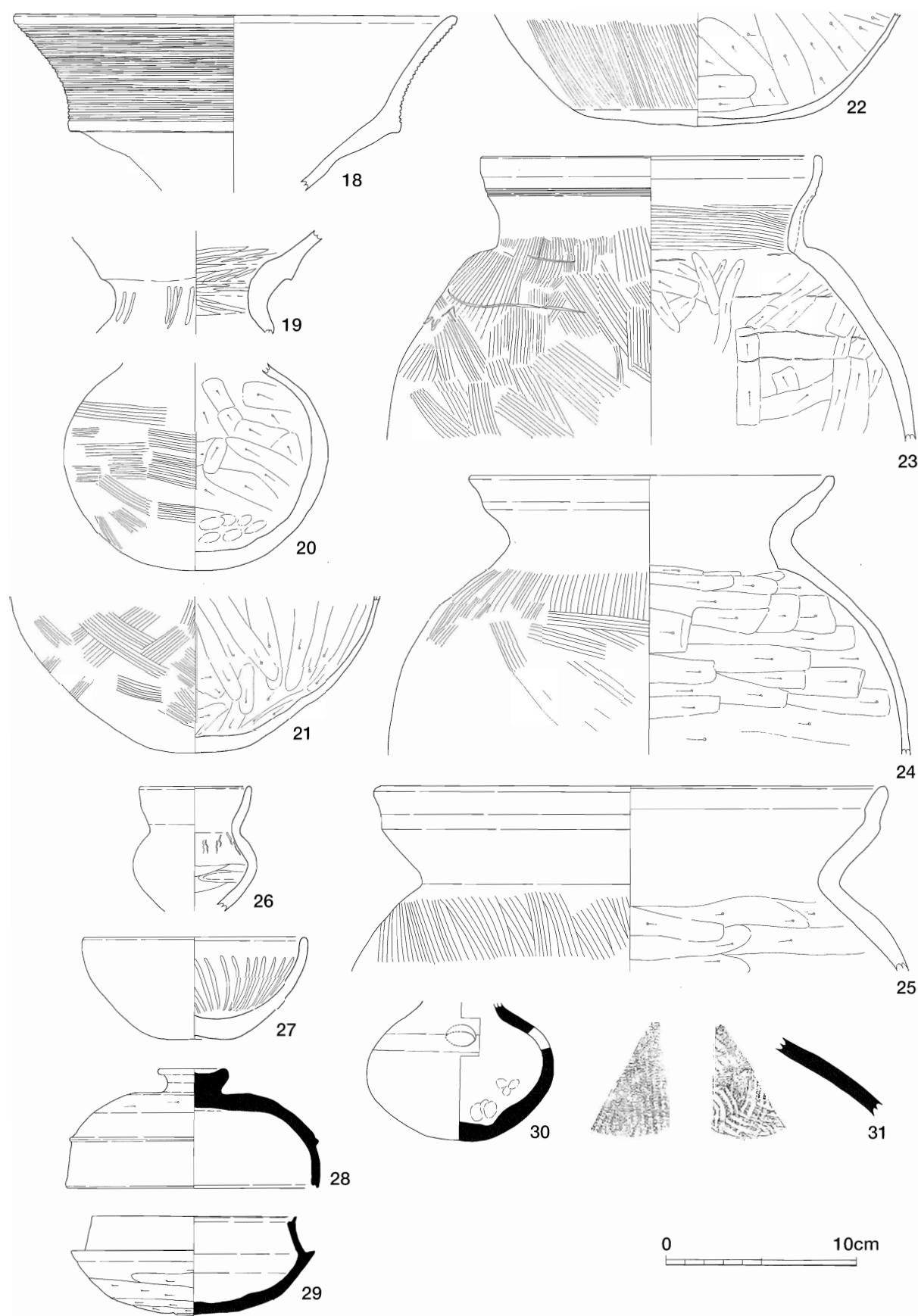
1は胴部外面に稜を持ち、斜格子状に刺突文を施す。西川津式A2類と考えられる。

2～5は弥生前期の土器である。2は2条のヘラ描直線文の間に羽状文を施すが、上位の2条の直線文の内、上の1条の内側は直線の内面にヘラミガキを行う。3は甌用の蓋と考えられるが、内面には工具痕が見られる。4は底部の外側が高台状に突出している。いずれも前期後葉～末と考えられる。6～13は中期の土器である。6は頸部に複帯構成の櫛描直線文を施す。櫛描文は器面に対して深く施されている。胴部内面下半は粘土を指でかき取って薄くしたと考えられる。7は2列の指頭圧痕文を持つ。下側は左手親指で、上からみて反時計周りに施されたと考えられるが、上側は施した方向は同様であるが、指を特定することはできなかった。10～12はほぼ同時期の甌である。いずれも口縁部には刻み目や斜格子文を持ち、櫛描直線文を施し、複帯構成のものもある。10は4条×3帶の直線文の下に竹管文を施す。11は口縁部が逆「L」字形を呈し、14条の直線文と原体による刺突文に加えて、3条の櫛描波状文を施す。13は頸部で「く」字に屈曲し、口縁端部には強くヨコナデを施しているので、粘土が上下にはみ出した格好になっており、面は持たない。胴部には円形の刺突文が施されている。6、10～12は中期前葉、7、13は中期中葉古相と考えられる。18は後期の土器である。鼓型器台の受部で、外面には24条の擬凹線文が施されているが、原体は不明である。後期Ⅲ期と考えられる。

14～17は古式土師器である。14は口縁部下の稜は鋭さや突出を欠き、端部を丸くおさめていることからVI期古相まで遡る可能性を持つ。17は低脚坏の脚部であるが、脚部の両側に坏部を付加して成形することがうかがわれる。

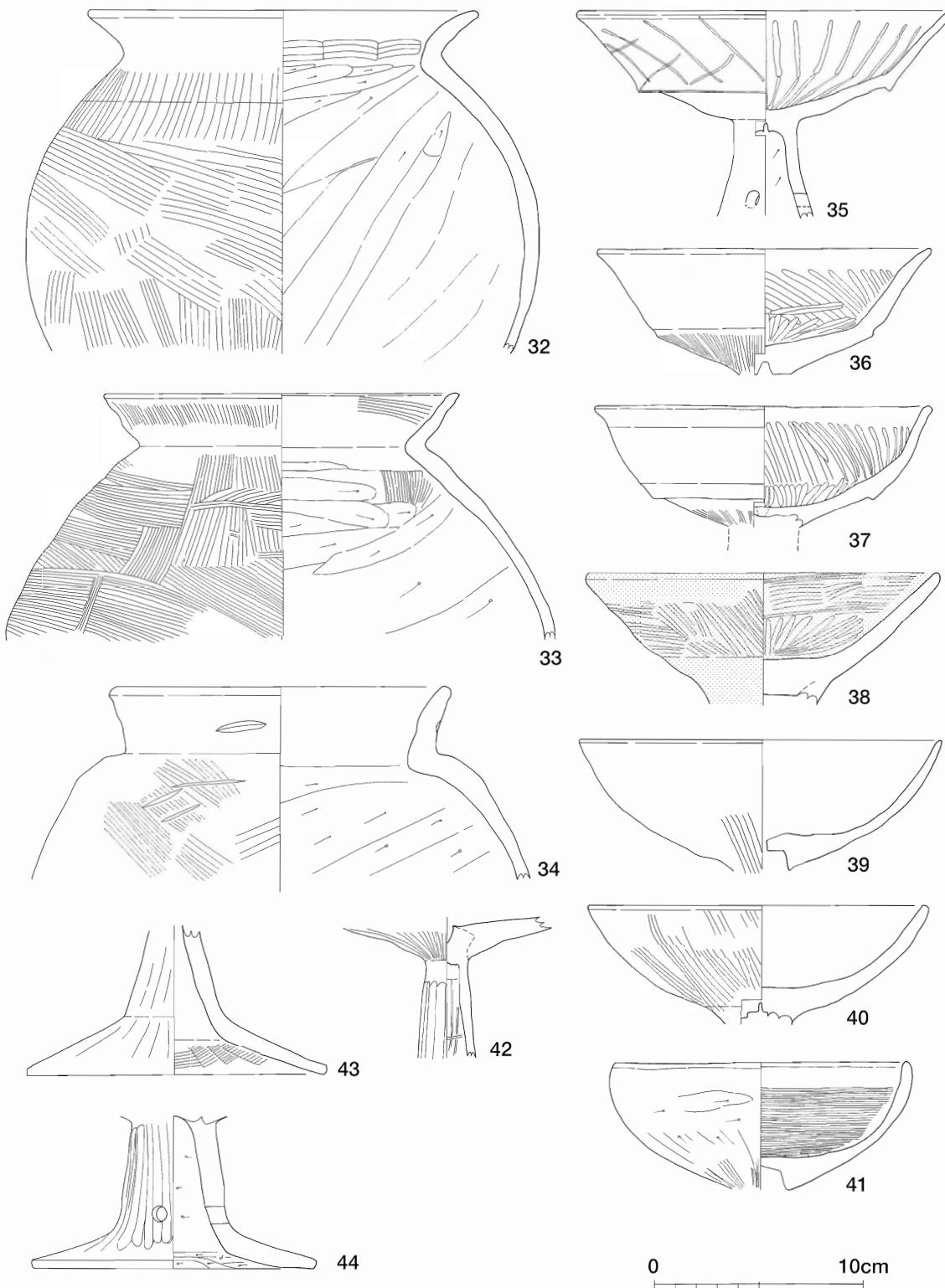


第109図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 2-5 出土土器実測図(1) (S=1/3)



第110図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 2-5 出土土器実測図(2) (S=1/3)

19は二重口縁の壺と思われる。内外にヘラミガキを施す。20は直口壺の胴部と考えられる。胴部はほぼ球形を呈し、丸底である。21は丸底で、底部は熱を受けて剥落している。22は底部に稜を持ち、底が突出気味である。23～25は退化した複合口縁の甕である。23は口縁部の下に2条の擬凹線風の文様を持つ。肩部にはヘラ状工具による痕が見られる。内面は基本的にタテヘラケズリで、一部更にヨコヘラケズリを行い、ナデ消す部分もある。24は23よりも口縁部が外反し、稜も緩い。25



第111図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層2—5出土土器実測図(3) (S=1/3) (トーンは赤色物塗布を示す)

も24と同様の口縁部の形態を呈す。32～34は単純口縁の甕で、いずれも外面に厚く煤が付着する。口縁部の形態は、内彎気味のもの（32）と直線的に伸びるもの（33、34）がある。32は粗いナナメハケを施した後に肩部に粗いタテハケを施す。33の口縁端部は面を持たない。34は口縁部が直立気味で、外面にはヘラ状工具による圧痕を有す。胴部外面にも、浅いヘラ状工具の痕が見られる。35～44は高坏である。坏部には稜を持つもの（35～37）と持たないもの（39～41）がある。35～37はいずれも坏部内面に放射状のヘラミガキを暗文風に施す。35の坏部外面の稜は明瞭であるが、37の稜は突帶風に貼り付けている。36の坏部下側に見られる刺突は、下側から棒状工具を回転させている。38は坏部がやや浅く、脚部との接合の仕方も他の高坏とは異なる。42は坏部の底に凹みを有す。脚柱部先端付近が若干突出するが、その部分を界にして上下から坏部との接合を行うためと推測される。44は脚部内面の端部付近をヨコヘラケズリする。円形透かしを四方向に有す。35～37、42は松山Ⅱ期、23～26、39、40は同Ⅲ期、32～34、38、41は同Ⅳ期に属すると思われる。

28～31は須恵器である。28是有蓋高坏の蓋坏であるが、外面の稜はやや鋭く、口縁端部内面は段状に凹むので、蓋坏A2型に併行する時期ではないかと考えられる。29は体部のヘラケズリの範囲が半分を越えており、端部はやや凹んで面を持つ特徴から、蓋坏A2a型に伴う坏身ではないかと考えられる。30は外面に文様を持たず、わずかに平底を残していることから、鼈のA7型と考えられる。

砂礫層2～5の堆積した時期の下限は、30から7世紀前葉と考えられる。

(10) 青灰色砂層3より上位の砂礫層出土土器（第112図）

青灰色砂層3より上位には砂層や砂礫層が堆積していたが、いずれも平面的に堆積を把握することができなかった。ここではそれらの層から出土した土器を一括して記述する。縄紋土器から須恵器が出土し、縄紋土器（1、2）、弥生土器（3、4）、土師器（5～9）、須恵器（10、11）、円筒埴輪（12～14）を図示した。

1は胴部でわずかに屈曲し、口縁端部は面を持ち、「V」字型の刻み目を施す。胴部の屈曲部の内側にはヘラ状工具の痕が見られる。西川津式A1類に属すると思われる。2はわずかに底部が凹み、大きく胴の張る器形になると推測される。

3、4は弥生前期の土器である。3は大きく屈曲した口縁部の下端に小さな「V」字の刻み目を施す。4は底部から直線的に口縁部へ至る。

5は退化した複合口縁を呈し、口縁端部には平坦面を持つ。6は口縁部に接合痕を有す。7は口縁部が内彎気味に屈曲する。9の脚柱部は中実である。5は松山Ⅲ期、6～8は同Ⅳ期に属すると思われる。

10は肩部に沈線を施して稜を表現し、口縁部の内側には、端部より少し上がったところに沈線を施すので、やや口径は大きいものの蓋坏A4型に比定することができると思われる。11は鼈であるが、型式は不明である。

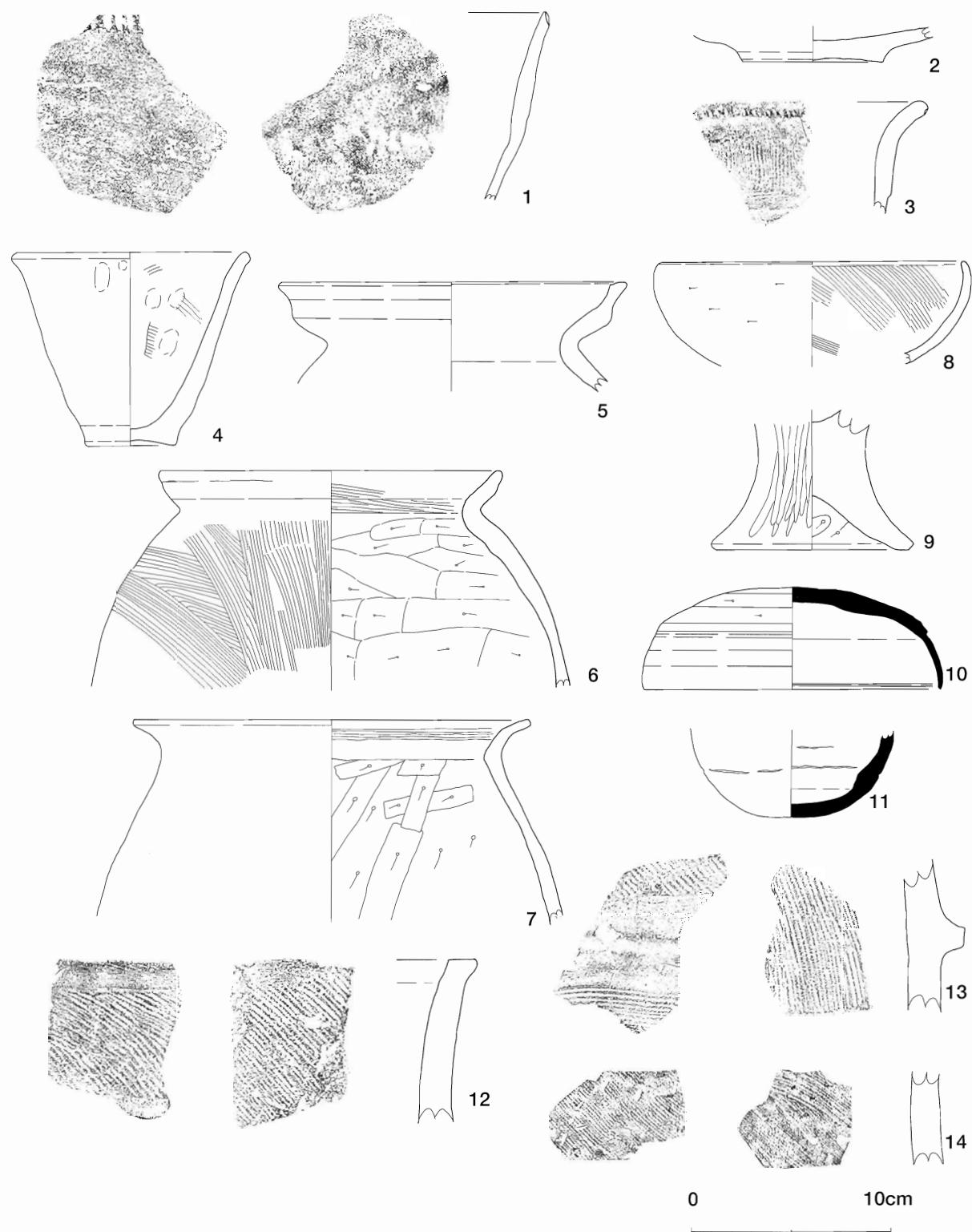
12、13は淡橙灰色や黄褐色であるが、14は青灰色を呈し、焼きも優れている。タガは1～1.2cm突出する。13は外面にB種ヨコハケを施す。

砂層3より上位の層の堆積した時期の下限は、砂礫層2～5と砂層3の間、6世紀末～7世紀前葉と考えられる。

(11) 青灰色砂層 3、同出土土器（第113～118図）

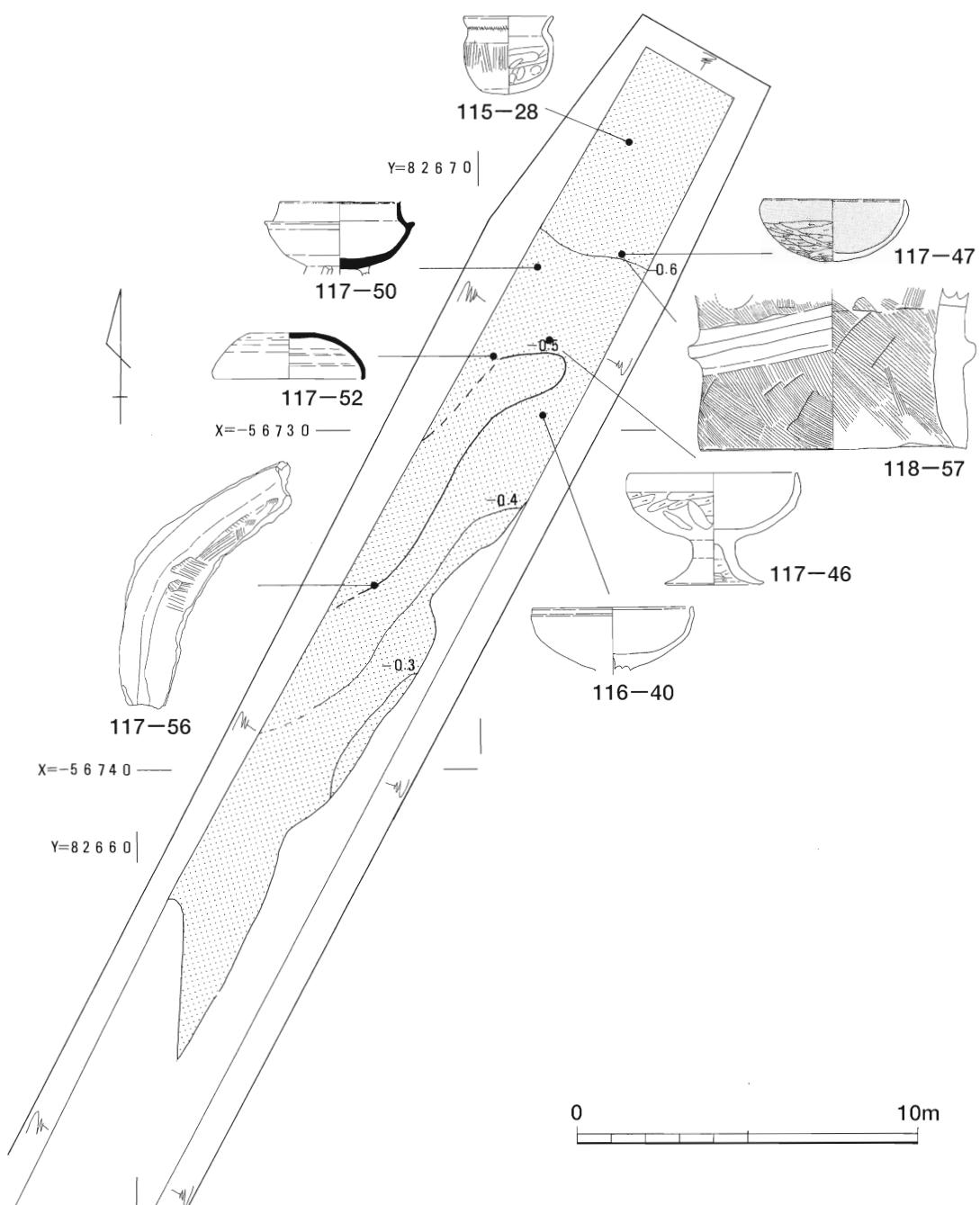
青灰色砂層 3 は、調査区の北側、標高-0.3～-0.6mに分布していた。砂層 3 からは、縄紋土器から須恵器が出土し、縄紋土器（1～6）、弥生土器（7～22）、土師器（23～47、56）、須恵器（48～55）、円筒埴輪（57～60）を図示した。

1～4 は縄紋前期の土器である。1 は胴部の下部に刻み目を持つ突帯を有す。西川津式B 2 類と

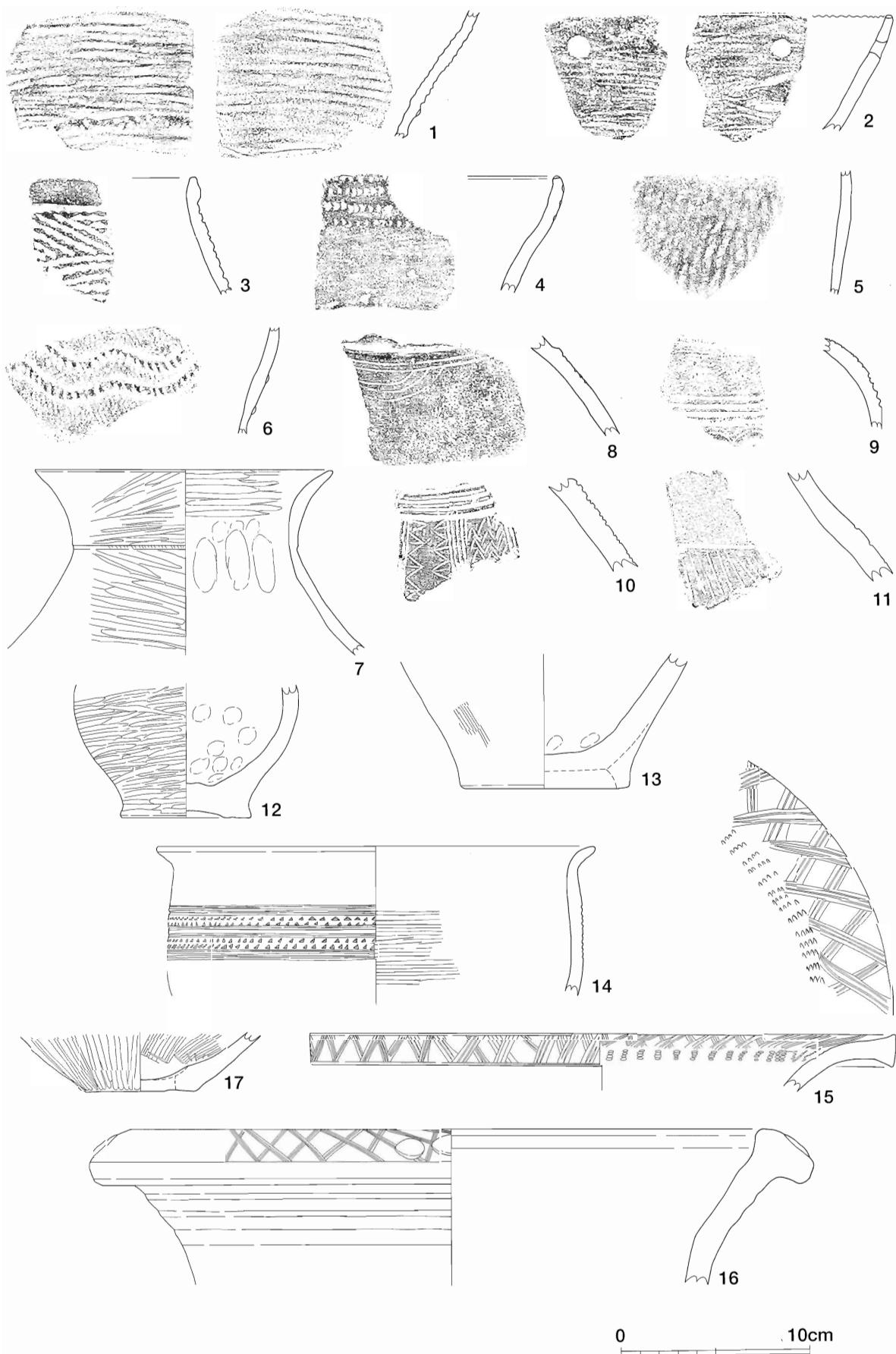


第112図 Ⅲ区右岸青灰色砂層 3 より上位の砂礫層出土土器実測図 (S=1/3)

考えられる。2は緩やかに外彎する口縁部を持ち、端部には刻み目を有す。3は胴部がやや張り、口縁端部を若干肥厚させて、その下には横方向や斜め方向の押引文を施す。西川津式A2類と考えられる。4は口縁部が外彎したあと端部付近で直立し、その部分と端部に「D」字の爪形文を施文する。羽島下層II式と考えられる。5は胴部外面に繩紋ないしは撚糸文を施文するが、摩滅が著しく時期は不明である。6は2条の刻み目を持つ突帯が波状に施される。船元I～II式と考えられる。7～14は弥生前期の土器である。7は頸部にハケ原体による段を持ち、口縁部は大きく外反する。8～11は壺の肩部の文様で、数条のヘラ描直線文がヘラ描による重弧文（8）や斜行文（11）、貝殻による羽状文（9、10）や重弧文（9）と共に施される。10は縦方向の貝殻による区画の中に貝殻羽状文や向かい合わせの山形文を施す。14は2条のヘラ描直線文の間に2列の刺突文を施すが、



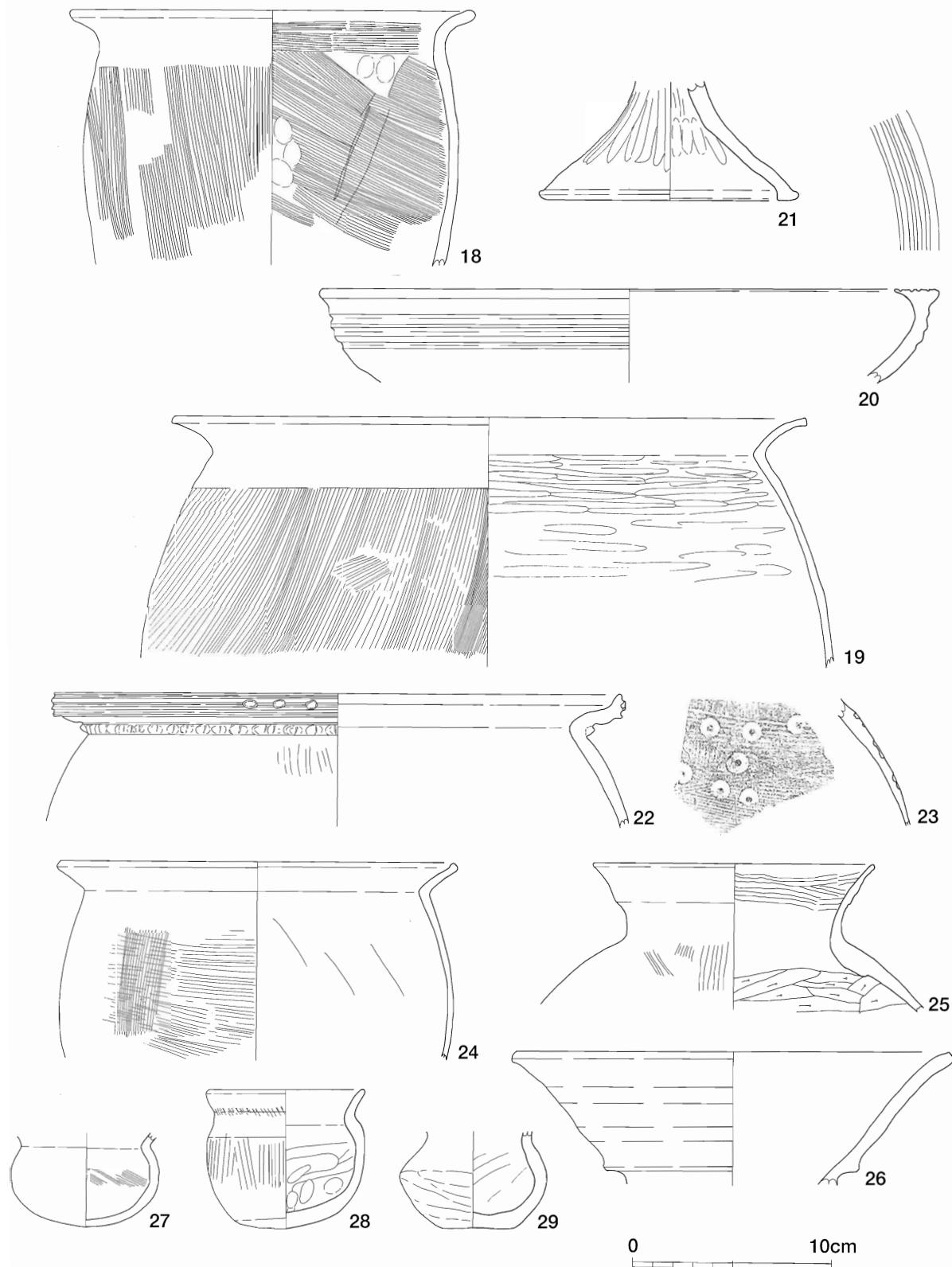
第113図 III区右岸青灰色砂層3測量図 (S=1/200)



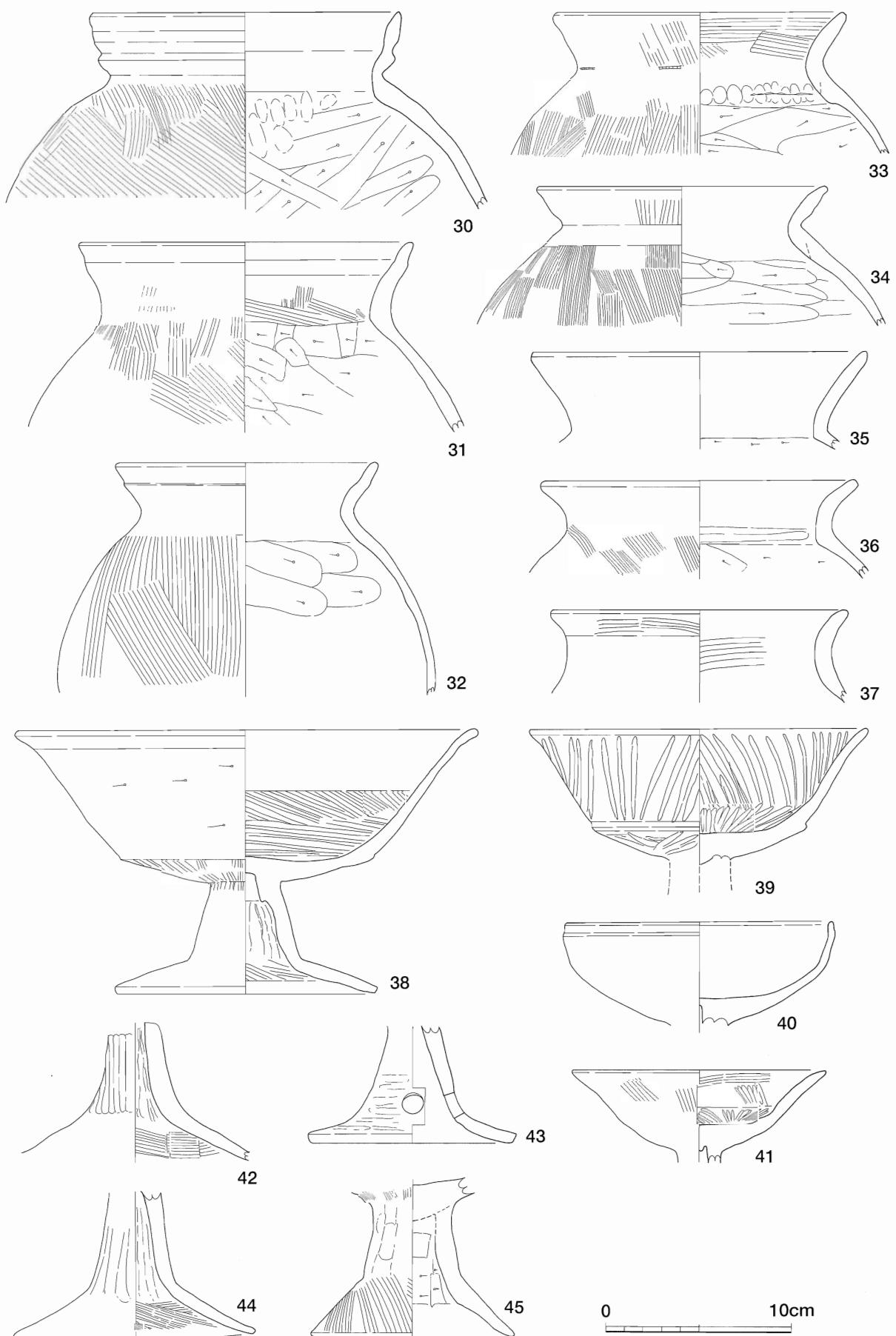
第114図 Ⅲ区右岸青灰色砂層 3 出土土器実測図(1) (S=1/3)

共に原体は半截竹管の可能性を持つ。7は前期中葉まで遡る可能性を持つが、その他は前期後葉を中心とする時期と考えられる。

15~22は中期の土器である。16は口縁端部を上下に拡張する。口縁部下には退化した凹線文の痕がヨコナデとして見られる。17は壺の底部であるが、円盤充填法風に周囲を作つてから底部に粘土



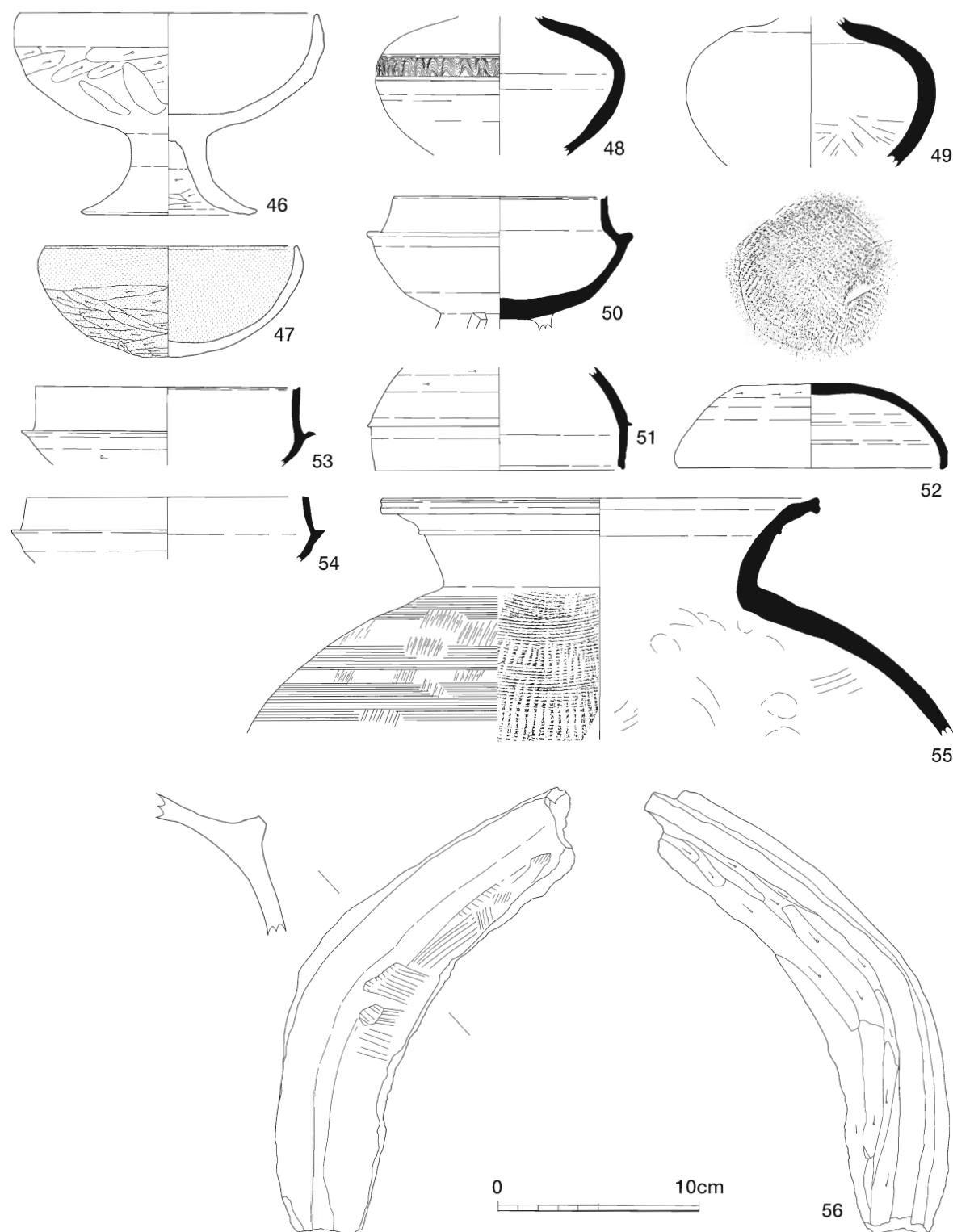
第115図 Ⅲ区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(2) (S=1/3)



第116図 Ⅲ区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(3) (S=1/3)

を入れ、ハケで厚い部分を削るように調整を行う。ハケは上から見て時計周りに施す。18は内外ハケ調整で、文様は施されない。20は口縁端部を拡張して4条のA種凹線文を、胴部外面には3条のB種凹線文を施す。22は頸部に突帯を貼りつけて指頭圧痕を施す。18は中期前葉、15、19、21は中期中葉古相、16、20、22は中期後葉新相と考えられる。

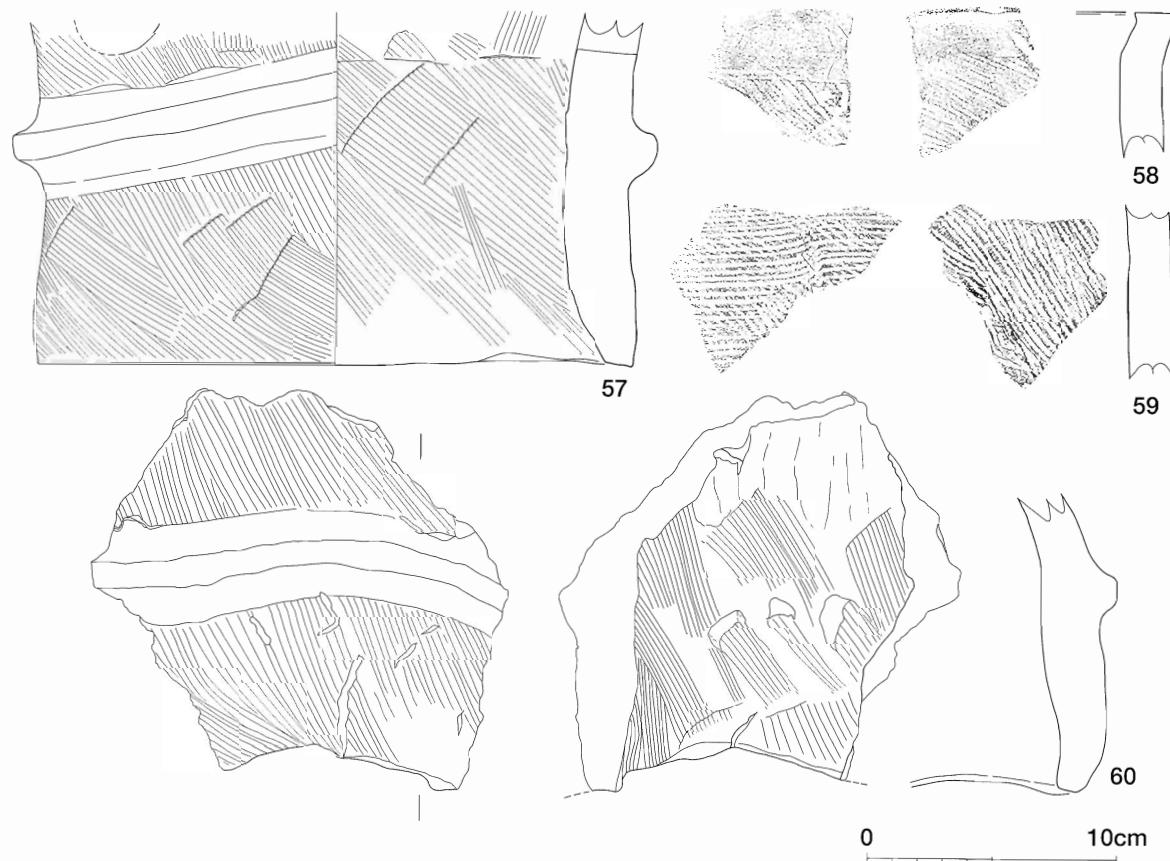
23は壺の肩部に直径約1cmの竹管文を施している。24は単純口縁の甕で、口縁部は直線的に伸びて端部は面を持ち、わずかに上方へ立ち上げる。胴部外面に右下がりのタタキを施した後にタテハ



第117図 Ⅲ区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(4) (S=1/3) (トーンは赤色物塗布を示す)

ケを施してタタキを消している。畿内系の甕であると考えられるが、胎土に他の土器と異なるような特徴は見られない。25はわずかに複合口縁を残す。27~29は小型丸底壺である。27はやや扁平な胴部を呈し、底部はわずかに突出する。28は底部付近に稜を持ち、29は平底である。30~32は複合口縁の甕、33~37は単純口縁の甕で、単純口縁の甕はいずれも内彎気味の口縁を呈す。30は口縁部下端が、31は口縁部の中程がヨコナデによって若干凹む。33は口縁部外面のタテハケを丁寧なヨコナデで消す。38~46は高坏である。坏部に稜を持つもの（38、39）と椀状の坏部のもの（40、41）に大別される。38は大型の高坏で、口縁部も脚端部も直線的に伸びる。口縁部外面はヨコヘラケズリを行う。脚柱部の内側には棒状工具の刺突痕を有す。39は内外面に暗文風のヘラミガキを有す。40はやや浅い坏部を持つ。口縁端部を若干つまみだし、稜を持つ。41は坏部外面に稜を持たず、口縁部は外反気味におさめる。45は脚柱部が太く、ナデにより凹凸を有す。脚部内面は黒色である。46は椀状の坏部に短く屈曲する脚部を有す。46の脚部を取ったような形態が47である。外面のヨコヘラケズリの単位は不明瞭である。内外面に赤色物を塗布する。56は竈片と考えられる。内面には炭化物が厚く付着する。これらの土師器のうち、27は松山Ⅰ期、30、38は同Ⅱ期、28、31~34、39は同Ⅲ期、29、35~37、41、45~47は同Ⅳ期に属すると思われる。

48、49は甕である。48は胴部はやや偏球形を呈し、外面には波状文を施した後文様の上下をヨコナデする。49はやや胴の張りが強く、文様は施さない。共に甕のA1型以前の型式と考えられる。50は有蓋高坏の坏部である。口縁端部にはっきりとした面を持って若干凹み、やや坏部が深いので有蓋高坏A1型と考えられる。51~54は蓋坏である。51は回転ヘラケズリの範囲が広く、口縁端部内側に段を有するので、蓋坏A1型と考えられる。52は天井部にタタキを施している。口縁端部内



第118図 III区右岸青灰色砂層3出土土器実測図(5) (S=1/3)

側の段は無く、肩部もナデのみであり、A5型と考えられる。53は口縁端部に段を持ち、口縁部がほぼ直立する。54は口縁端部に面を持つのみで段を欠き、口縁部はやや内傾気味である。53がA1～A2a型、54がA2b型と考えられる。55はカキメの上からもタタキを行い、内面は当て具痕をナデ消す。

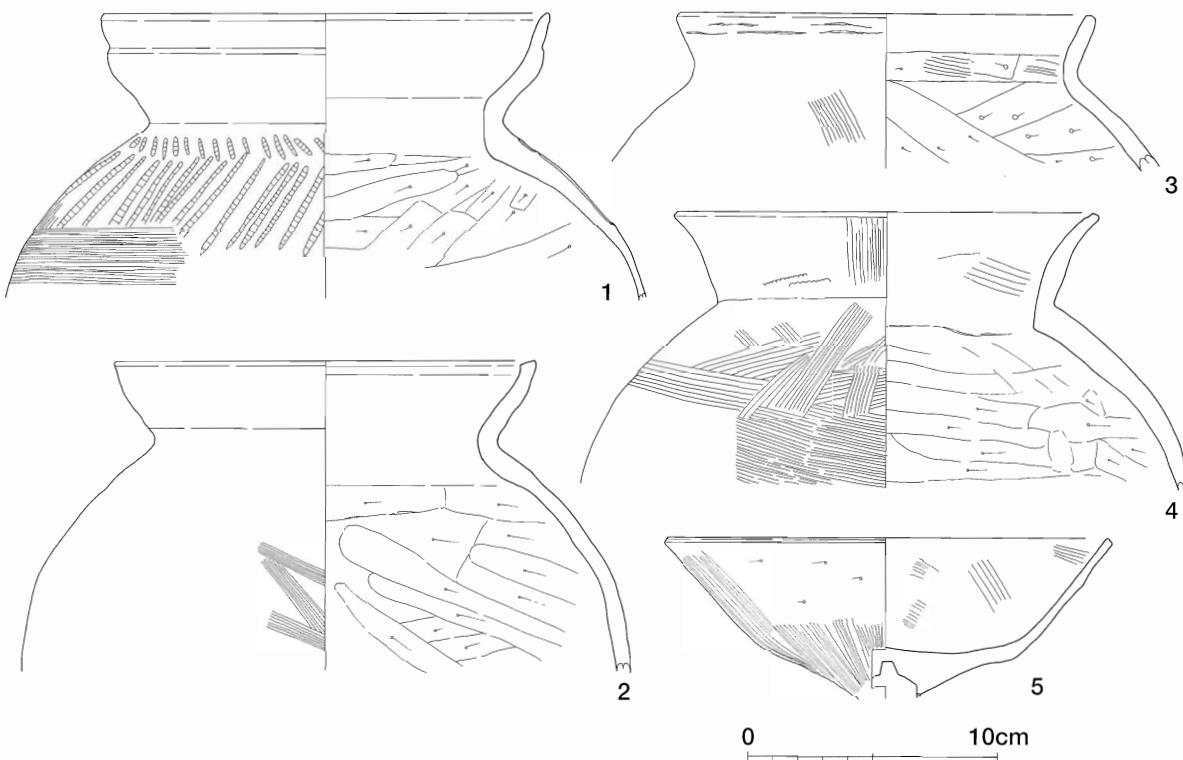
57は円筒埴輪の底部で、二段目には円形の透かしを有す。タガは約1cm突出する。ハケ原体は幅約3cmである。58は口縁部に面を持ち、強くヨコナデする。60は大きく屈曲している。タガは約8mm突出する。ハケの原体の幅は約2～2.5cmである。いずれの円筒埴輪も無黒斑である。57と60は共に底部調整を行い、端部には明瞭な面を持つ。また、共に焼成の質感が類似する。

砂層3の堆積した時期の下限は、52から6世紀末と考えられる。

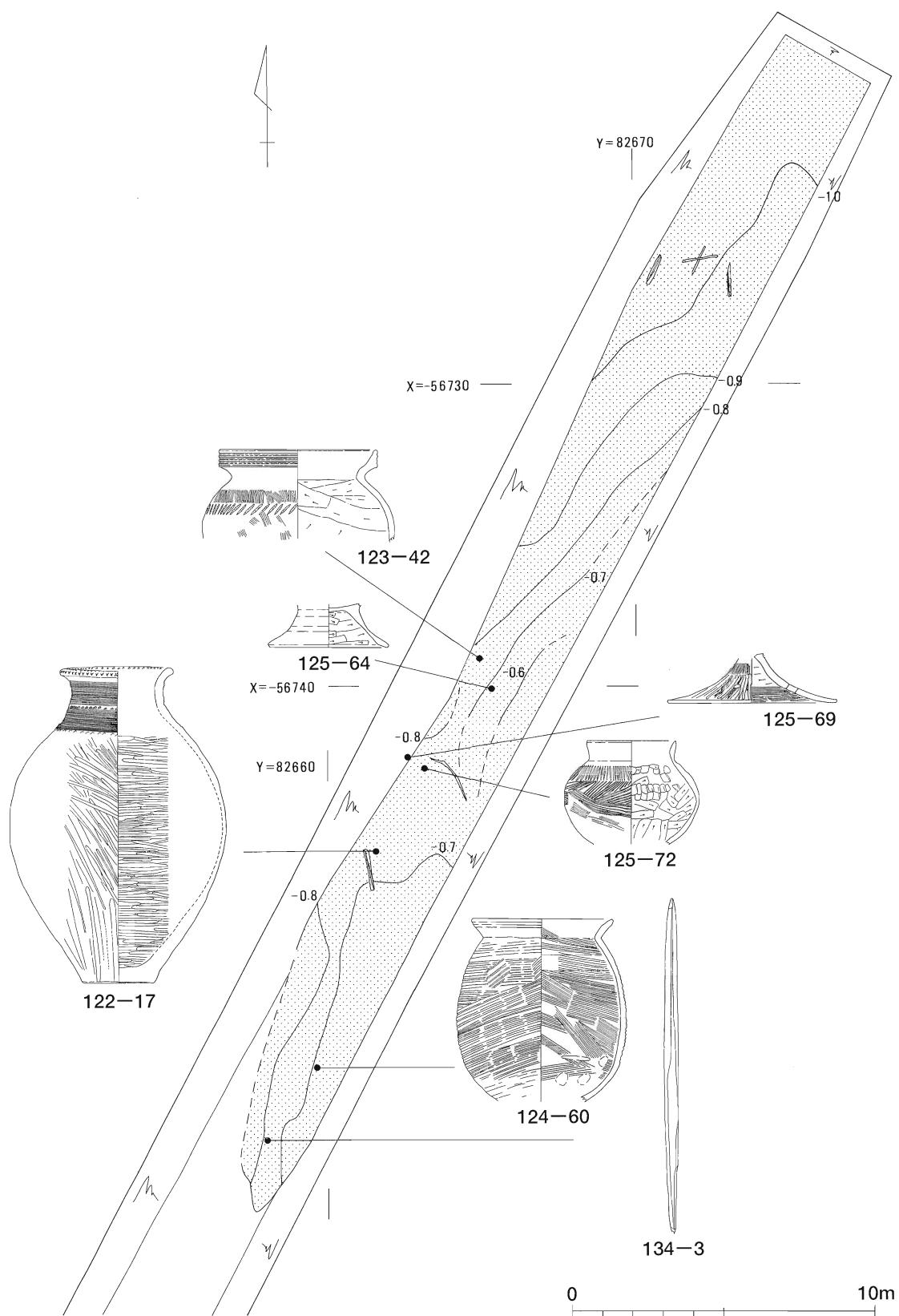
(12) 青灰色砂層3と青灰色砂礫層3の間出土土器（第119図）

砂層3と青灰色砂礫層3の間には、部分的に薄い砂層や砂礫層が堆積していたが、そこから出土した土器を一括して記述する。遺物の量は少ないが、縄紋土器から土師器が出土した。図示するのはいずれも土師器である。

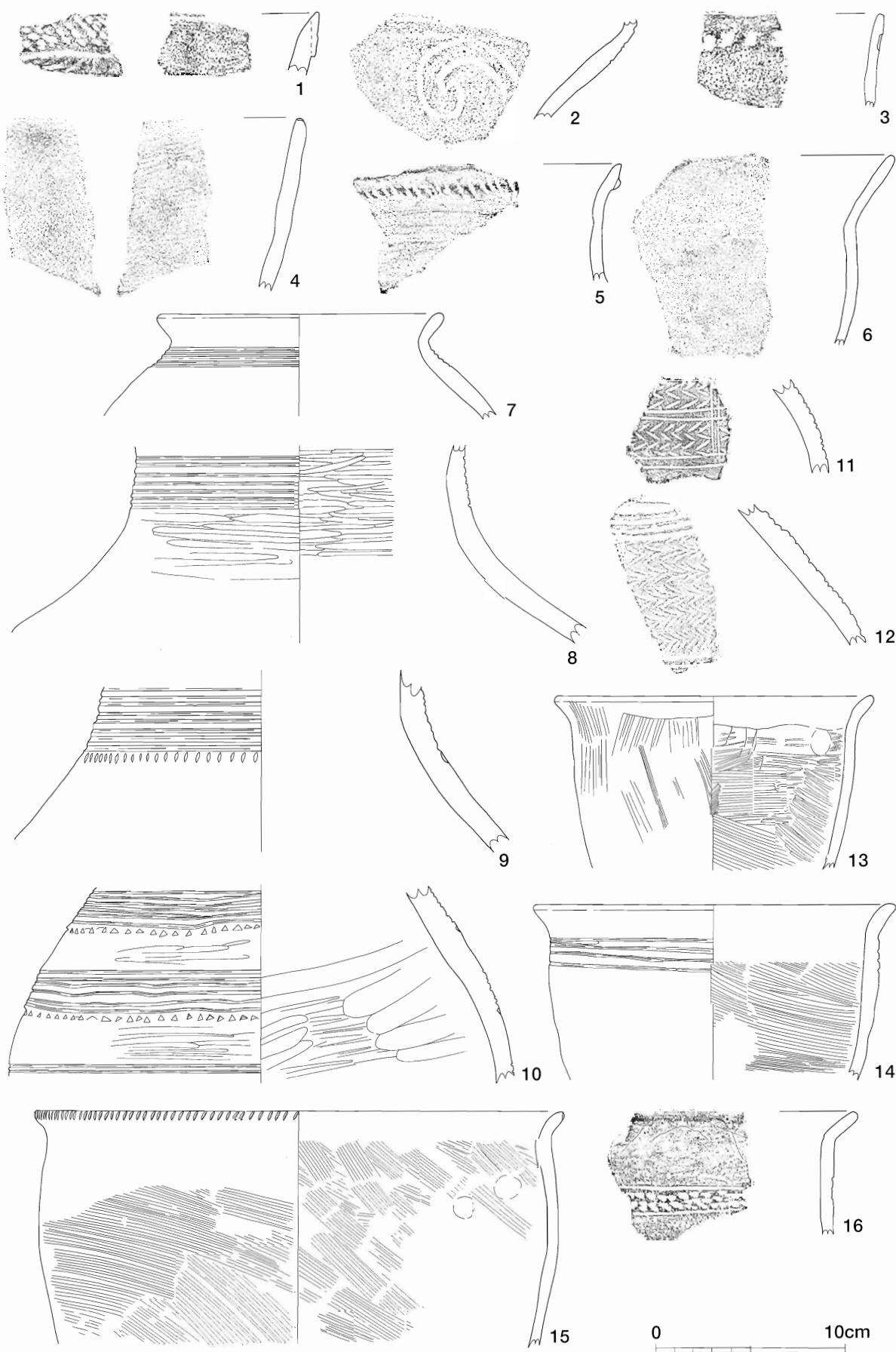
1は退化した複合口縁を呈し、肩部にはハケ原体による羽状文を施す。この羽状文は下側が長い。2～4は単純口縁の甕である。2は口縁部が外彎して端部は面を持ち、内側に肥厚する。3は口縁部が短く立ち上がる。頸部内面は図上で左から右にヘラケズリをした後一部ヨコハケを施す。口縁部外面には接合痕を明瞭に残す。4は口縁部が内彎気味に屈曲する。5は坏部が屈曲する高坏である。外面には成形の段階の乾燥によるひび割れが見られる。これらの土師器は松山Ⅲ期に属するとと思われる。



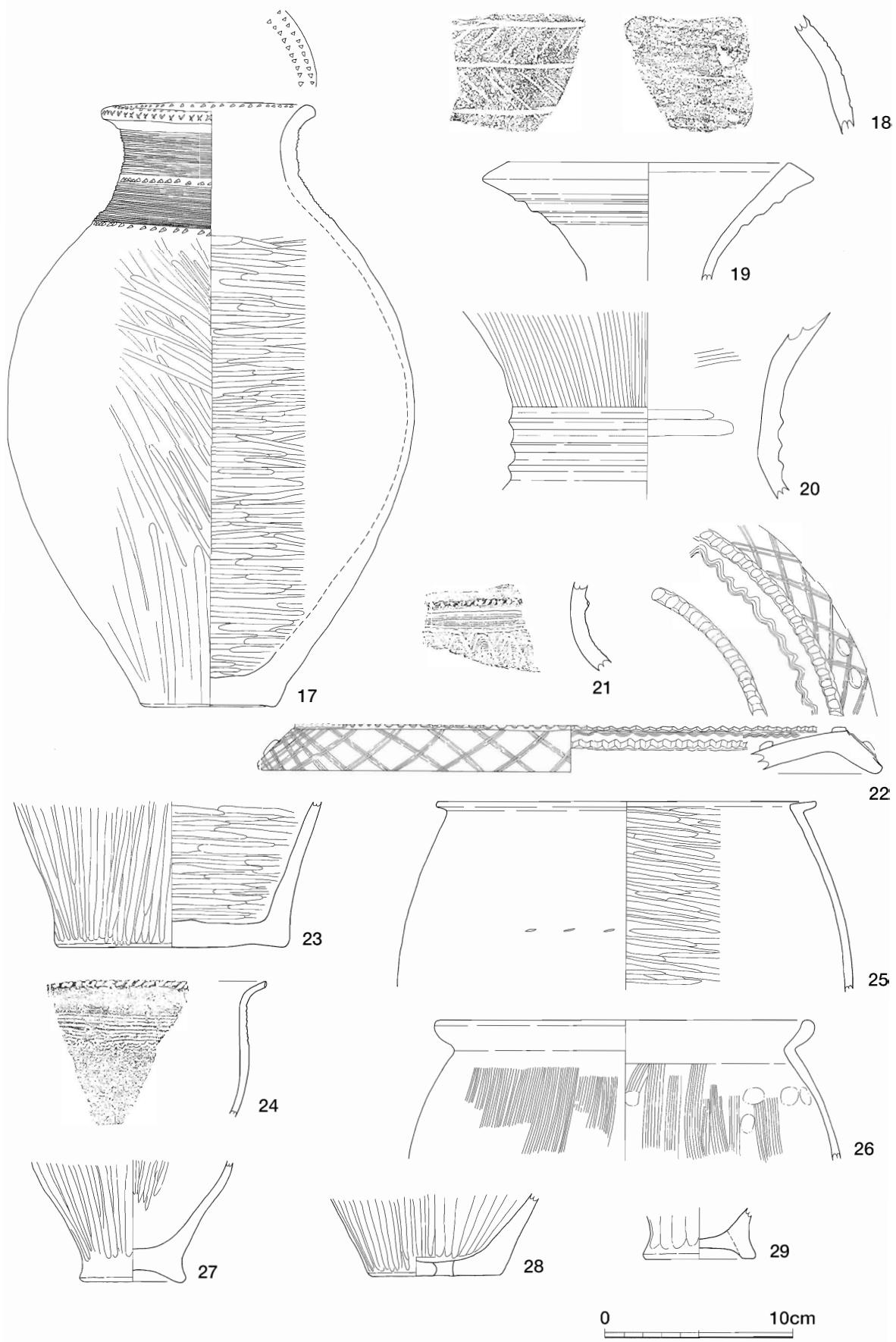
第119図 III区右岸青灰色砂層3—青灰色砂礫層3の間出土土器実測図 (S=1/3)



第120図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層 3 測量図 ($S=1/200$)



第121図 III区右岸青灰色砂砾層 3 出土土器実測図(1) (S=1/3)



第122図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 3出土土器実測図(2) (S=1/3)

(13) 青灰色砂礫層 3、同出土土器（第120～第125図）

青灰色砂礫層 3 は調査区の中央付近から北側にかけての標高−0.6～−1.0mに分布していた。南側は、砂層 3 により削られていた。砂礫層 3 からは完形の弥生土器（第122図17）も出土した。

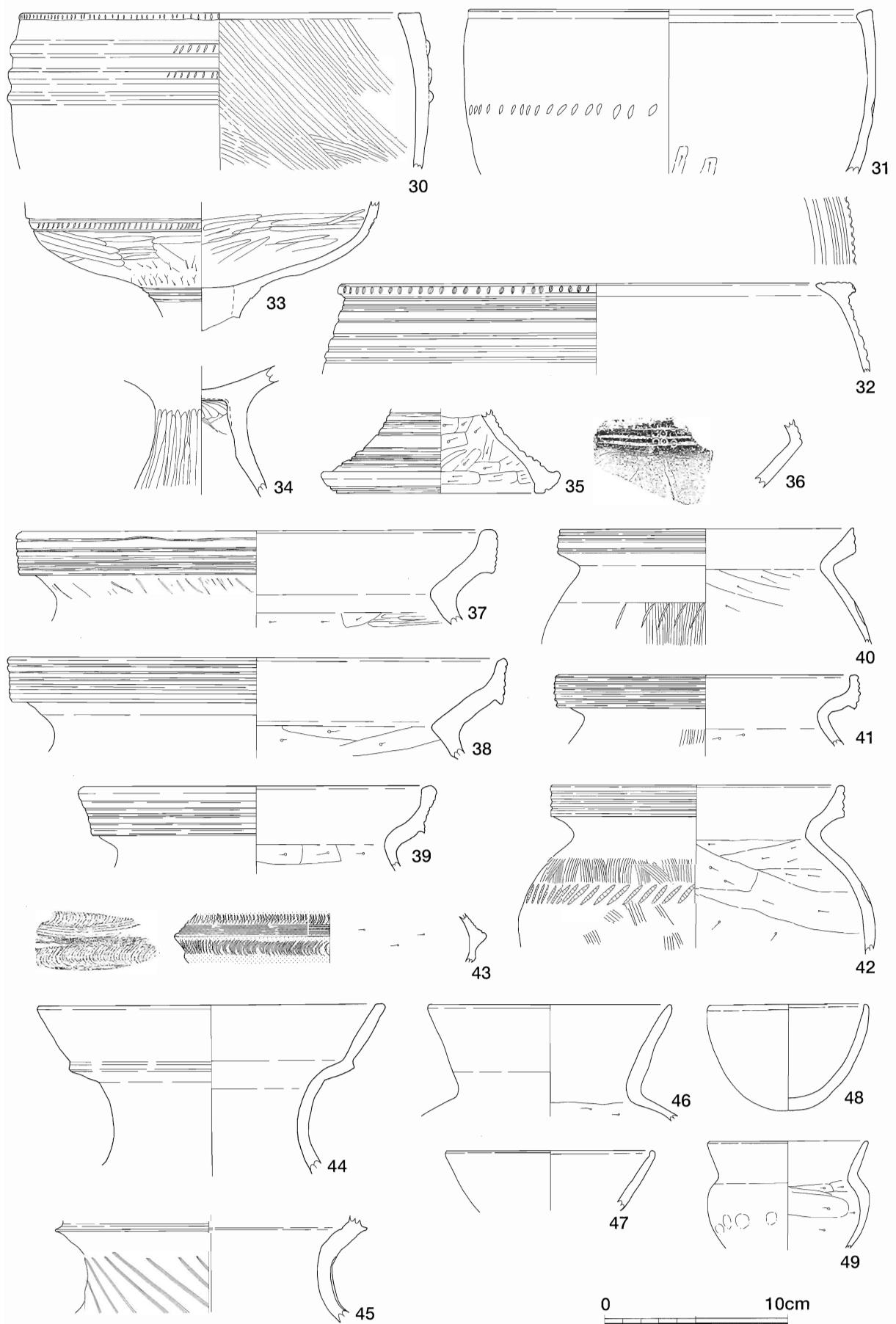
砂礫層 3 からは縄紋土器から土師器が出土し、縄紋土器（1～6）、弥生土器（7～43）、土師器（44～74）を図示した。

1 は口縁部に粘土紐を貼り付けて、その上に斜行する列点文を施す。西川津式 A3 類と考えられる。2 は2条の沈線文の下に渦文を施す。後期後半ではないかと思われるが、摩滅が著しい。3 はほぼ直立する口縁部のやや下に竹管状工具による刺突文を施す。4 は口縁端部に刻み目を持つ。5 は若干内彎して口縁部に至り、口縁端部よりやや下に刻み目を持つ突帶を有す。刻み目は「V」字形である。山陰突帶文Ⅰ期と考えられる。6 は頸部で屈曲して口縁部に至る。晩期の粗製深鉢と考えられる。

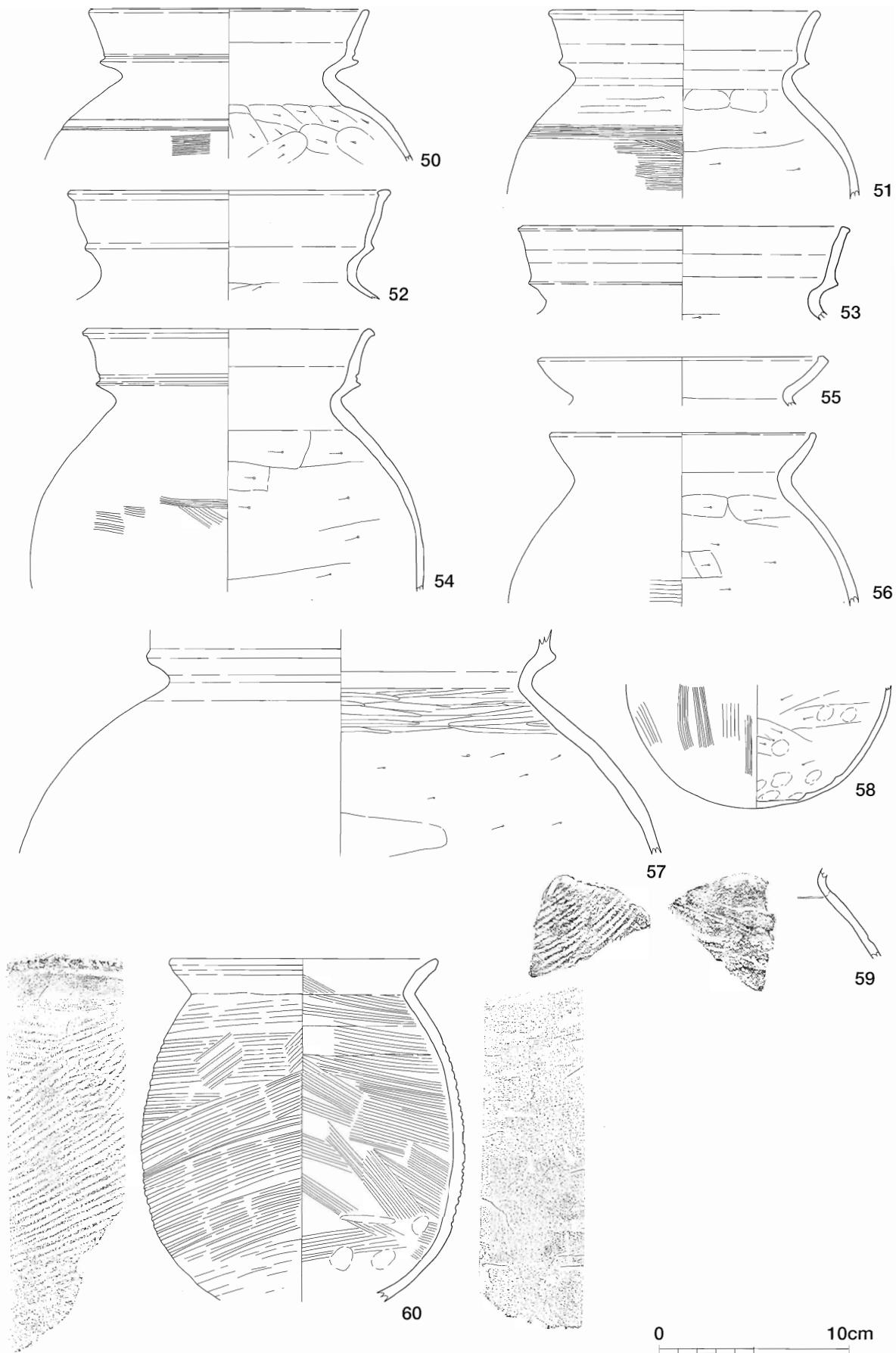
7～16は弥生前期の土器である。7は頸部で屈曲して短く口縁部に至る。8、9は多条化したヘラ描直線文を有すが、1条1条は太く明瞭である。10は文様帶を3つ持つが、それぞれの直線文は数cmごとに上下しており、貝殻による施文ではないかと推測される。11はヘラ描の羽状文を施す前に2本の直線によって縦横に区画を行う。12は削り出し突帶の下に2条のヘラ描直線文と貝殻羽状文を施す。13は無文である。14のヘラ描直線文は書き継ぎがあり、土器を上から見て反時計回りに施す。13～16は前期後葉、その他は前期末と考えられる。

17～36は中期の土器である。17は完形で出土した壺である。頸部には3単位で構成される複帶の櫛描直線文を2列施し、その下には櫛描原体による三角形刺突文を施す。口縁部内面にも刺突文を施す。櫛描文は上から見て時計周りに施されており、回転台の使用が示唆される。胴部にはほぼ向かい合う位置に長楕円形の孔が開いているが、故意によるものかは不明である。18はヘラによる綾杉文を施すが、上下が揃っておらずやや稚拙な印象を受ける。19は細頸の壺である。口縁端部を拡張し、口縁部の下には3条の突帶を有する。20は頸部に3条の突帶を有するが、突帶の間を強くヨコナデし凹線文風である。21は刻み目を持つ突帶の下に櫛描直線文と、それを切る櫛描波状文を施す。波状文は波長が大きい。器形としては19に似ると想像される。22は加飾広口壺の口縁部である。口縁部内面にも、櫛描波状文や指で刻んだ突帶を有す。櫛描文は幅が狭い。24は複帶構成の櫛描直線文と波状文を施す。25の胴部の刺突文は爪で施したと想定される。26は口縁部が外彎気味に短く伸び端部は肥厚して丸くおさめる。29は底部の周囲を作てから円盤充填法風に底部を製作する。30～32は胴部が膨らむ鉢である。30は胴部に3条の突帶を有すが、32ではそれが6条以上のB種凹線文へと変化し、端部も拡張される。33は坏部と脚部の接合部付近にヘラケズリの痕をとどめる。坏部は内外共ヘラケズリ後にヨコヘラミガキを行う。34は脚部の下から坏部底へ向けて粘土を押し込み、放射状にナデを行う。35は脚部全面に凹線文を施す。36は高坏の坏部片と考えたが、後期初頭の壺の口縁部の可能性もある。凹線文の上から3列の竹管文を3単位施す。17、24は中期前葉、25、26、31は中期中葉古相、19、21、22、30は同新相、20、32、33、35は中期後葉新相と考えられる。

37～43は後期の土器である。図示したものはいずれも口縁部が上下に大きく拡張され、数条の凹線文が施される段階のものである。37は頸部にハケ原体状の痕が見られる。39は口縁端部が若干丸みを帯びており、文様は凹凸が不明瞭なので小口による擬凹線文の可能性を持つ。43は加飾された



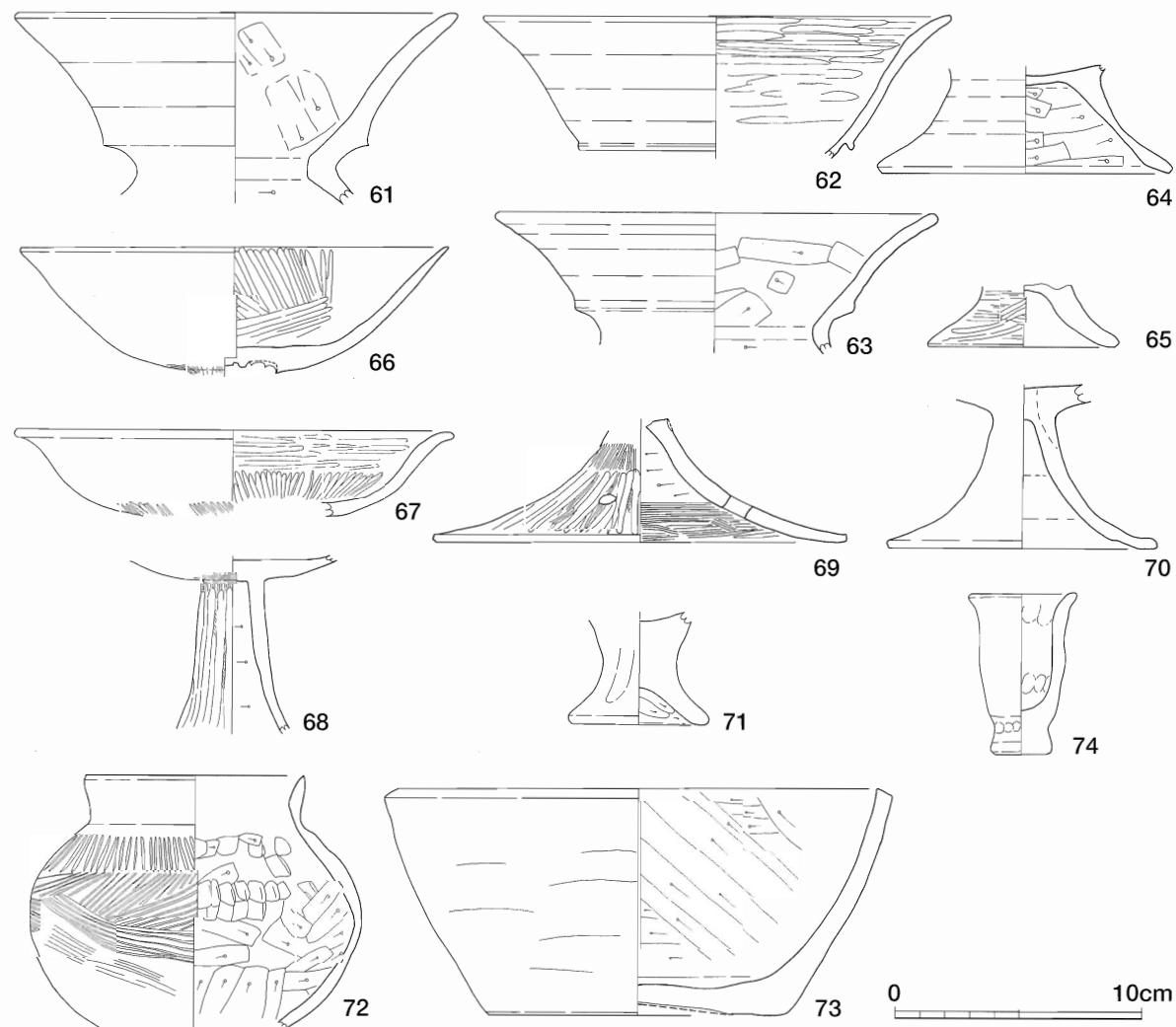
第123図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層3出土土器実測図(3) (S=1/3) (トーンは赤色物塗布を示す)



第124図 Ⅲ区右岸青灰色砂砾層 3 出土土器実測図(4) (S=1/3)

精製の鉢で、外面には擬凹線文と爪形文を施す。これらはいずれも後期Ⅱ～Ⅲ期を中心とすると考えられる。

44は口縁部下の稜の上が洗線状に凹み、口縁端部は面を持ち外方へ肥厚する。46は口縁部が直線的に伸びる。47は壺の口縁部と考えられるが、口縁部はわずかに外彎気味で端部は内側に肥厚する。50は肩部にヘラ状工具による直線文を有する。口縁部下の稜の上側が凹線文風に凹み、端部は丸くおさめる。51は口縁端部を丸くおさめ、若干外側へ肥厚させる。52は口縁端部はわずかに面を持ち、内側に肥厚する。53は端部にわずかに面を持つ。54は口縁端部に明瞭な面を持ち、外側へ肥厚する。55、56は単純口縁の甕である。55は口縁部は外彎気味に伸び、端部は面は持たないが肥厚する。56は頸部の屈曲はやや弱く、端部は肥厚しない。57は大型の甕の肩部である。口縁部下の稜は鈍い。58は丸底である。内面のケズリは平坦で、金属器でケズリを行ったと推測される。59、60は畿内系のタタキ甕である。共にタタキはやや粗い。59は頸部内面に稜は持たず、ヘラケズリを行う。60は胴部下半に最大径を有し、口縁端部には若干の稜が入る。胴部下半にタタキの変換点は見られないでの、「連続ラセンタタキ」を行っていると考えられる。50は後期Ⅶ期中相、51～53は同新相、54はそれより新しい要素を持ち、松山Ⅰ期に属すると考えられる。59、60の畿内系甕はⅦ期新相を中心とする時期と考えられる。



第125図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層3出土土器実測図(5) (S=1/3)

61～63は鼓型器台であるが、61、63のように受部のヘラケズリがナデによって消し切れていないものも見られる。64は脚部の大きい低脚壺、65は小型の低脚壺である。66～71は高壺である。66に比べ67は壺部がやや浅い。69は大きく広がる脚部を有するので、椀状の壺部を持つ小型の高壺の可能性がある。71は脚部がほとんど広がらず、脚柱部は中実である。72は短頸の鉢である。肩部はタテハケではなく、刺突文の可能性を持つ。73は無頸の鉢と考えられる。端部は明瞭な面を持ち、平底である。74は手づくね土器と思われるが、一端に稜を持つので、高壺の脚部未製品とも考えられる。

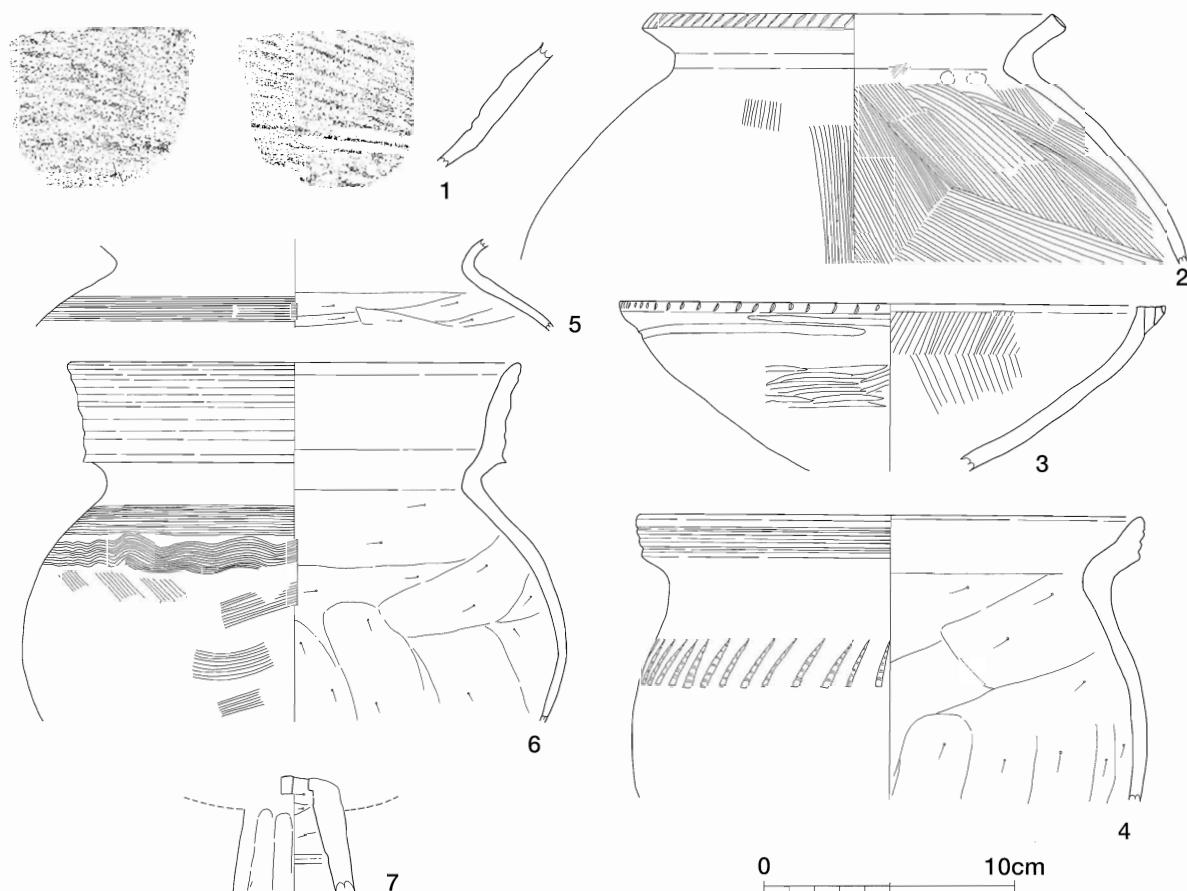
砂礫層3の堆積した時期の下限は、72から古墳時代前期末（4世紀末）と考えられる。

(14) 青灰色砂礫層4、同出土土器（第126図）

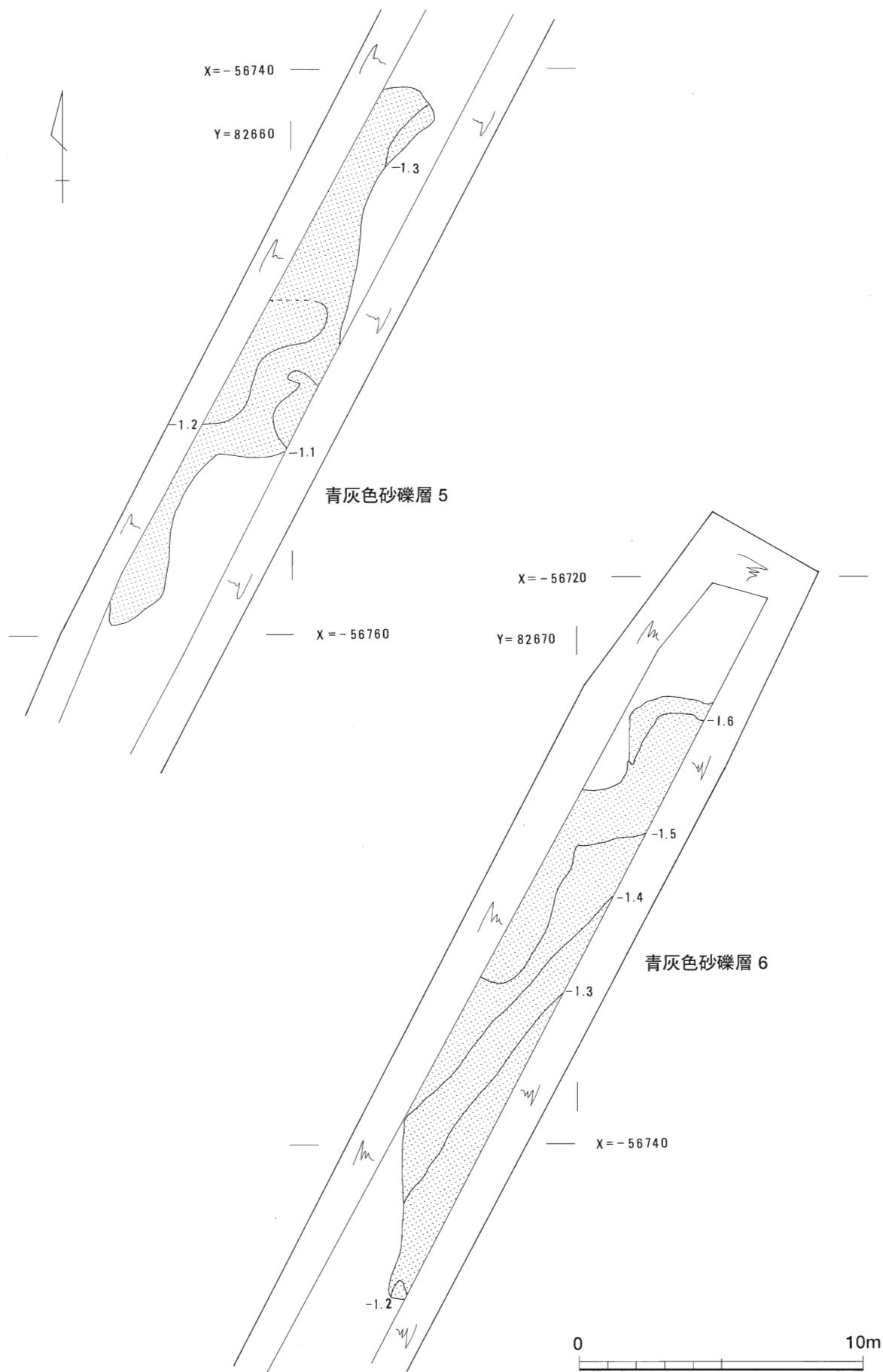
青灰色砂礫層4は、西壁では褐灰色泥層と茶褐色泥層の間に部分的に薄く堆積していた砂礫層である。平面的に確認することは出来なかったが、縄紋土器から土師器が少量出土し、縄紋土器（1）、弥生土器（2～4）、土師器（5～7）を図示した。

1は椀状に大きく広がる体部を持つ深鉢で、内外面は条痕調整である。器形は西川津式B類に類似するので、前期と考えられる。

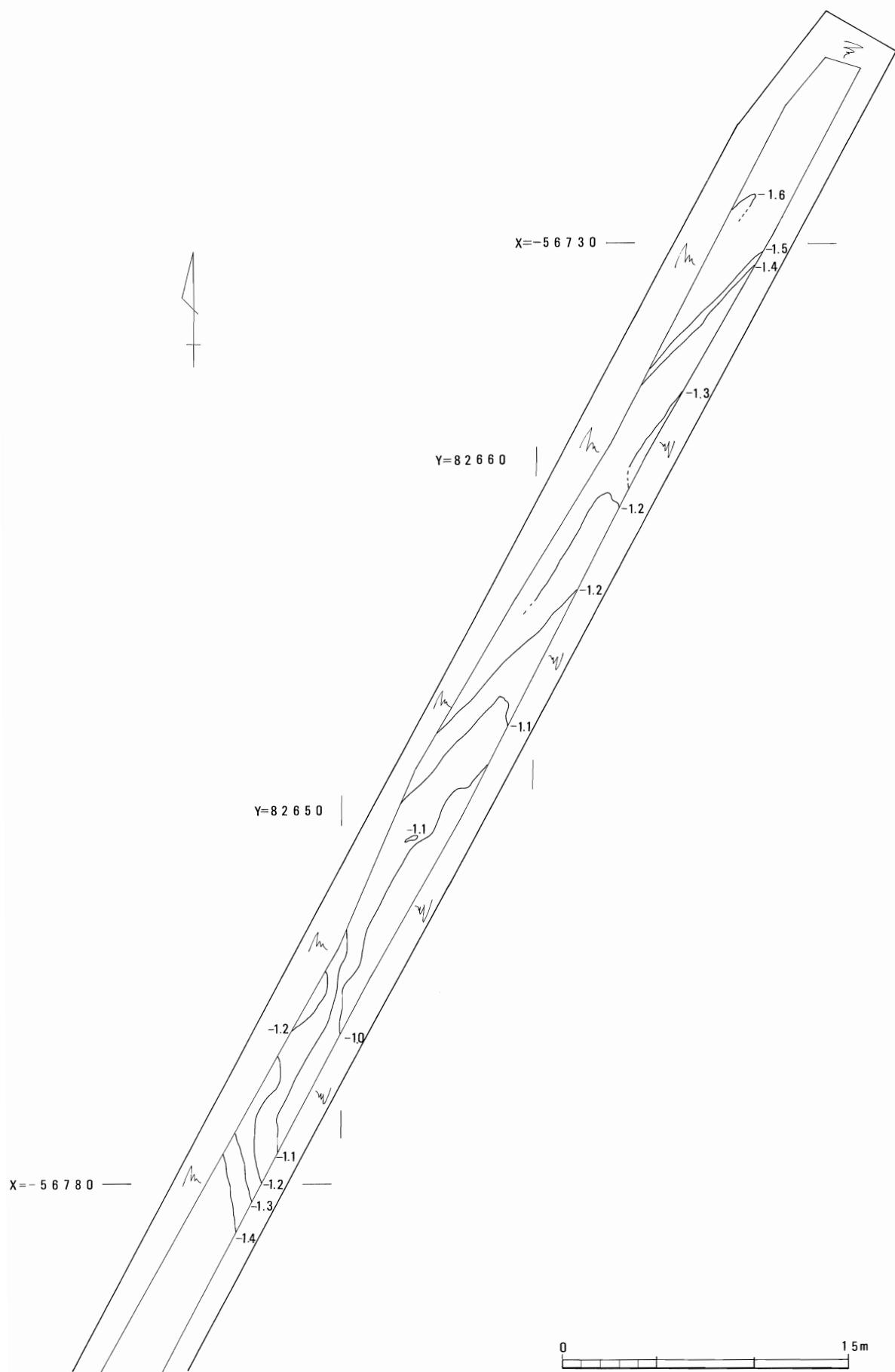
2は大きく張った胴部から頸部で屈曲し、短い口縁部へ至る壺である。口縁端部は鋭利な刻み目を有す。3は椀状の壺部を持つ高壺で、口縁端部は水平方向に拡張されて面を持つ。端部には垂直方向に蓋受け用の孔が開けられている。共に中期中葉と考えられる。4は口縁部を上下にやや短く



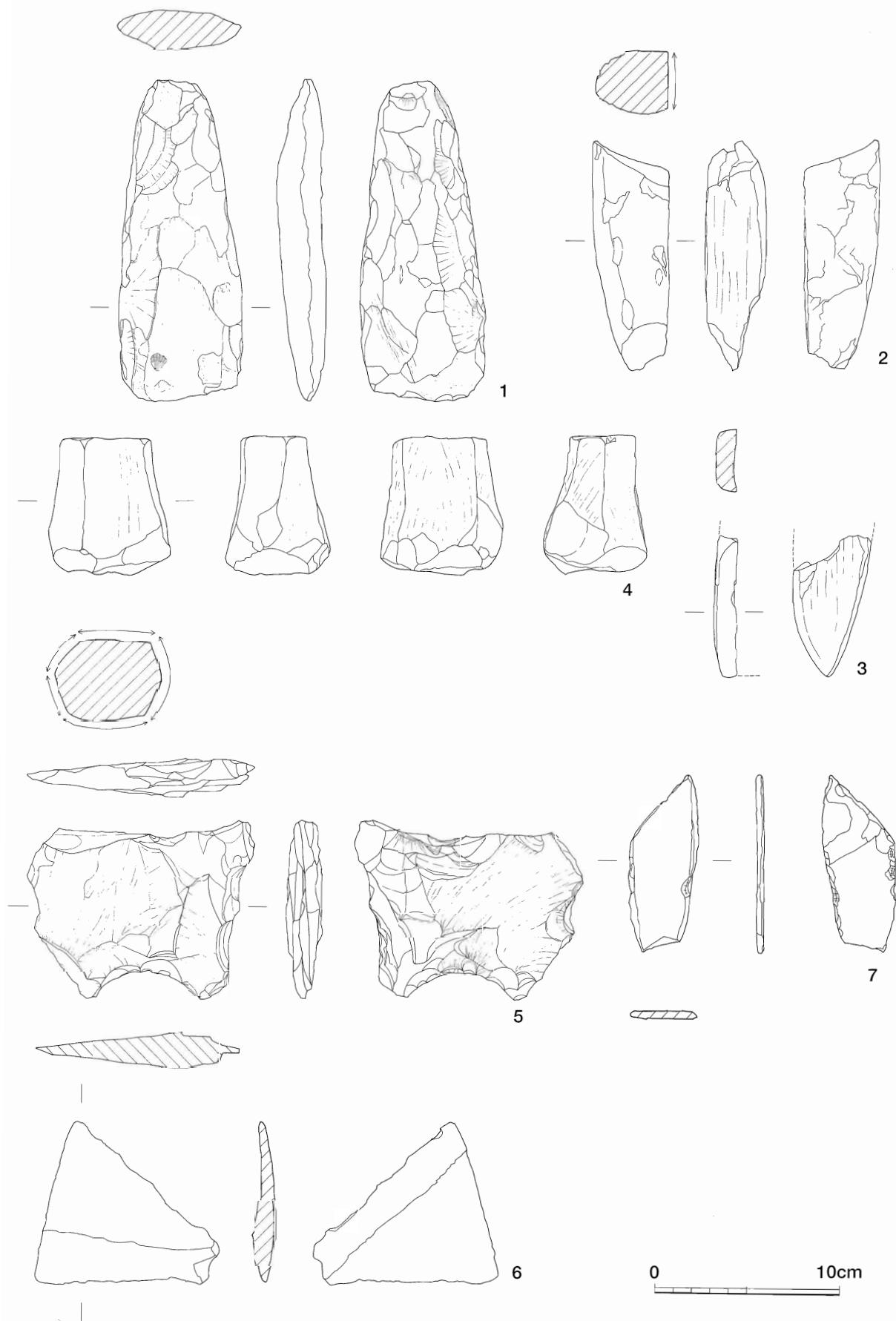
第126図 Ⅲ区右岸青灰色砂礫層4出土土器実測図 (S=1/3)



第127図 III区右岸青灰色砂礫層 5(上)、青灰色砂礫層 6(下)測量図 ($S=1/200$)



第128図 III区右岸青灰色泥層（古宍道湾の泥層）測量図 ($S=1/300$)



第129図 Ⅲ区右岸出土石器実測図(1) (S=1/3)

拡張し、肩部には貝殻による刺突文を施す。後期Ⅱ～Ⅲ期と考えられる。6は口縁部はやや厚く、ヨコナデにより凹凸が生じている。口縁部下の稜は鋭く、端部は尖り気味におさめる。肩部にはハケによる直線文と波状文が施されるが、波状文の波長は緩い。胴部最大径はやや胴部の上方にあり、口縁部の特徴から後期Ⅴ～Ⅵ期古相と考えられる。

砂礫層4の堆積した下限の時期は、6から弥生時代終末～古墳時代初頭と考えられる。

なお、砂礫層4の下の茶褐色泥層の¹⁴C年代は4890±60BP (Beta-114626、第8章) であった。

(15) 青灰色砂礫層5（第127図上）

青灰色砂礫層5は、調査区の北側の標高-1.1～-1.3mの狭い範囲に分布していた。砂礫層4により削られている。土器は出土しなかったが、大型の剥片（第129図5）が出土した。砂礫層5の年代は不明であるが、縄紋時代の可能性を持つ。

(16) 青灰色砂礫層6（第127図下）

青灰色砂礫層6は、調査区の北側の標高-1.2～-1.6mに分布していたが、砂礫層3により南側が削られている。この層の下には、古宍道湾に堆積した青灰色泥層が堆積しており、東壁ではアカホヤ火山灰層も確認された。この砂礫層のやや北側では、下の青灰色泥層を大きく段状に削っている箇所が確認された。遺物は黒曜石の剥片が数点出土した。

砂礫層6の年代は不明であるが、縄紋時代の可能性を持つ。

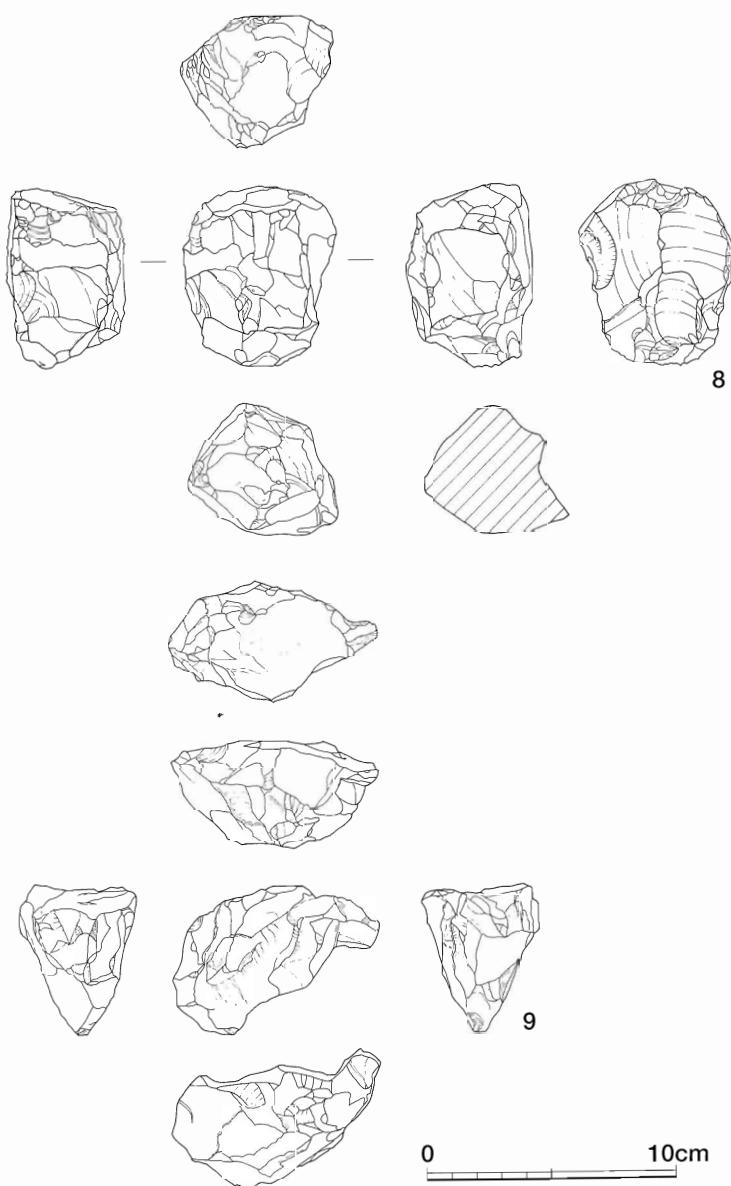
砂礫層6に削られた青灰色泥層は、標高-1.0～-1.6mから確認された（第128図）。標高-1.5～-1.6mにアカホヤ火山灰層を挟む。

〈2〉 石 器

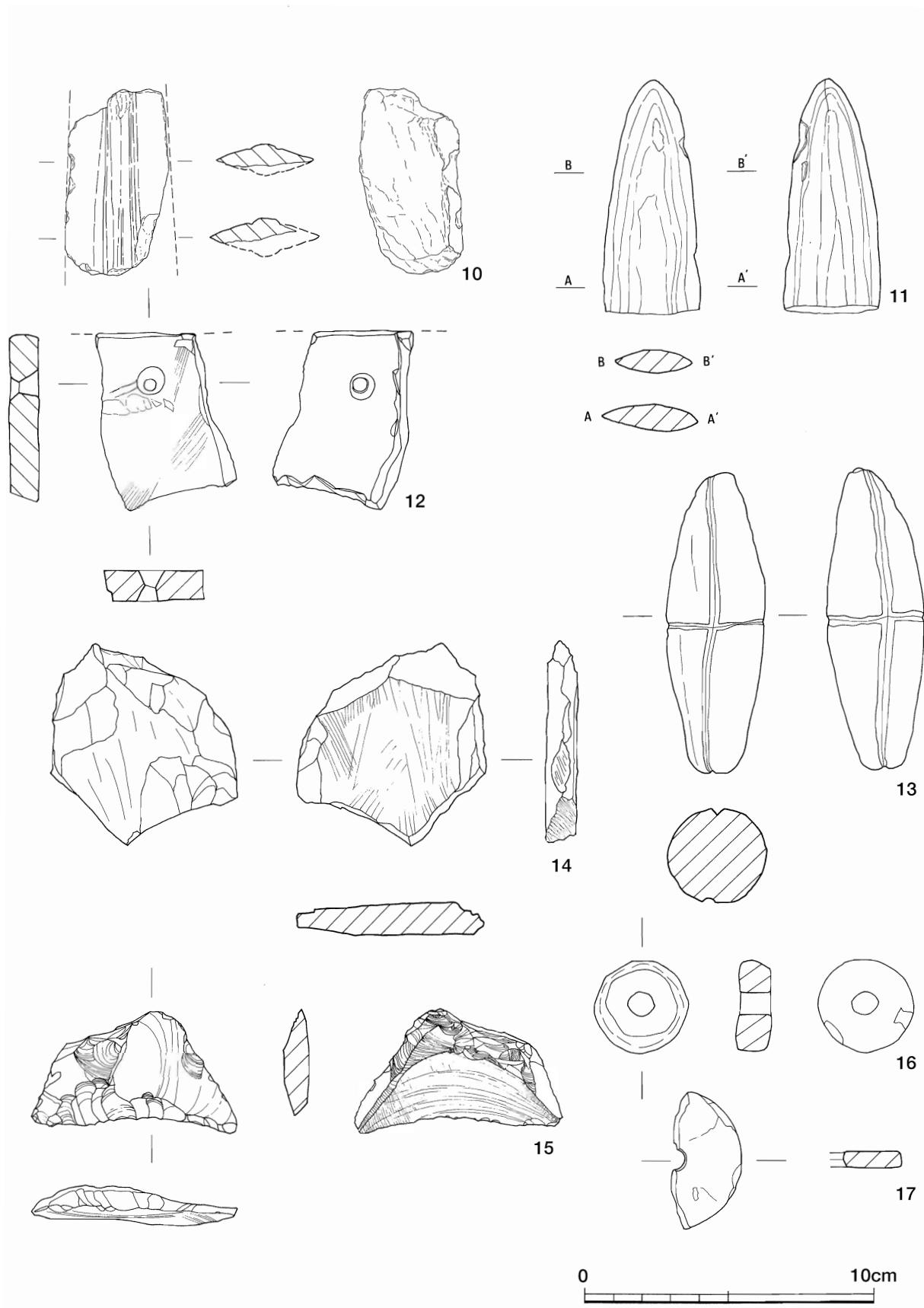
（第129～133図）

Ⅲ区右岸から出土した石器の内、35点を図示した。

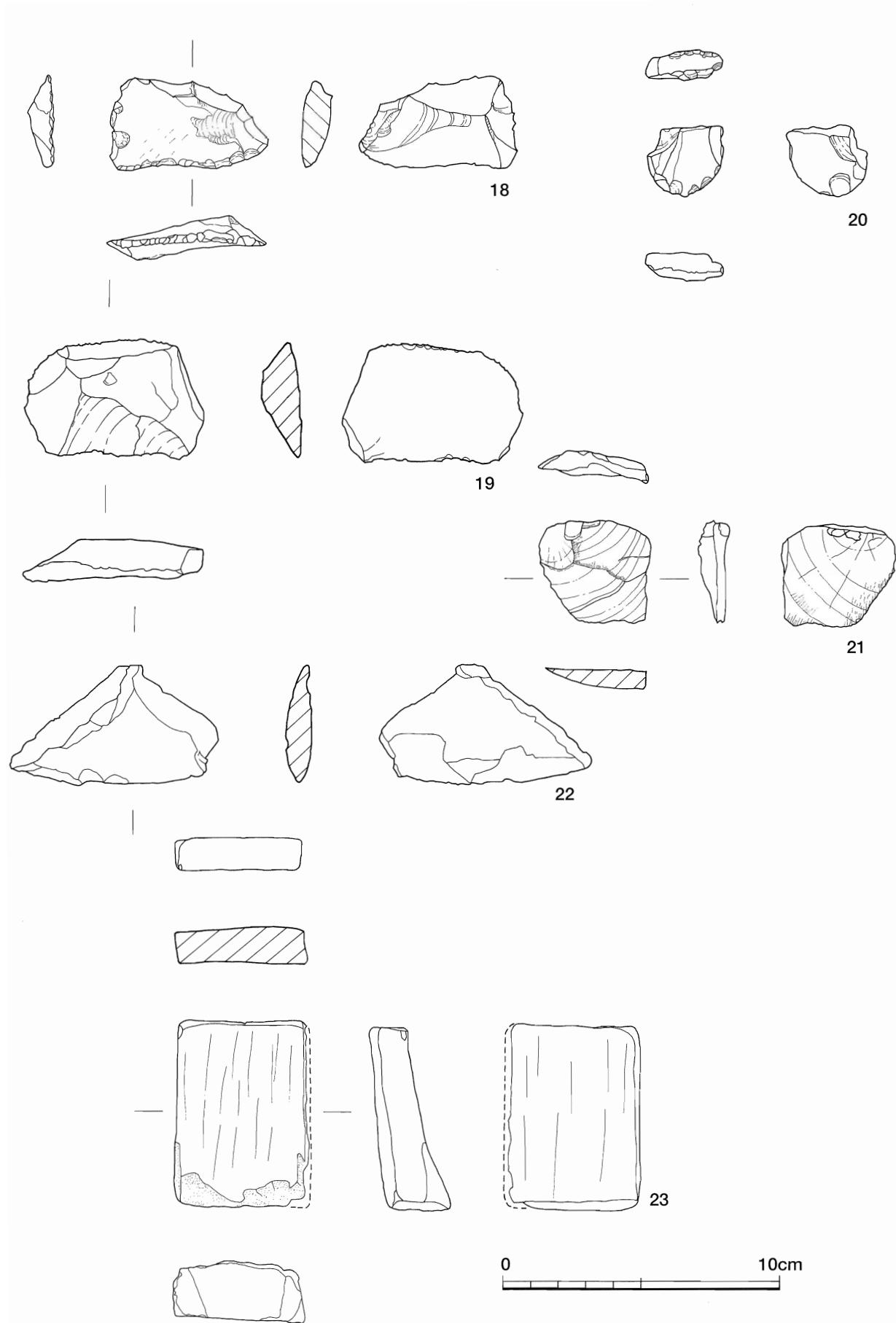
第129図1は局部磨製石斧である。出土したのは砂礫層2～5



第129図 Ⅲ区右岸出土石器実測図(2) (S=1/3)

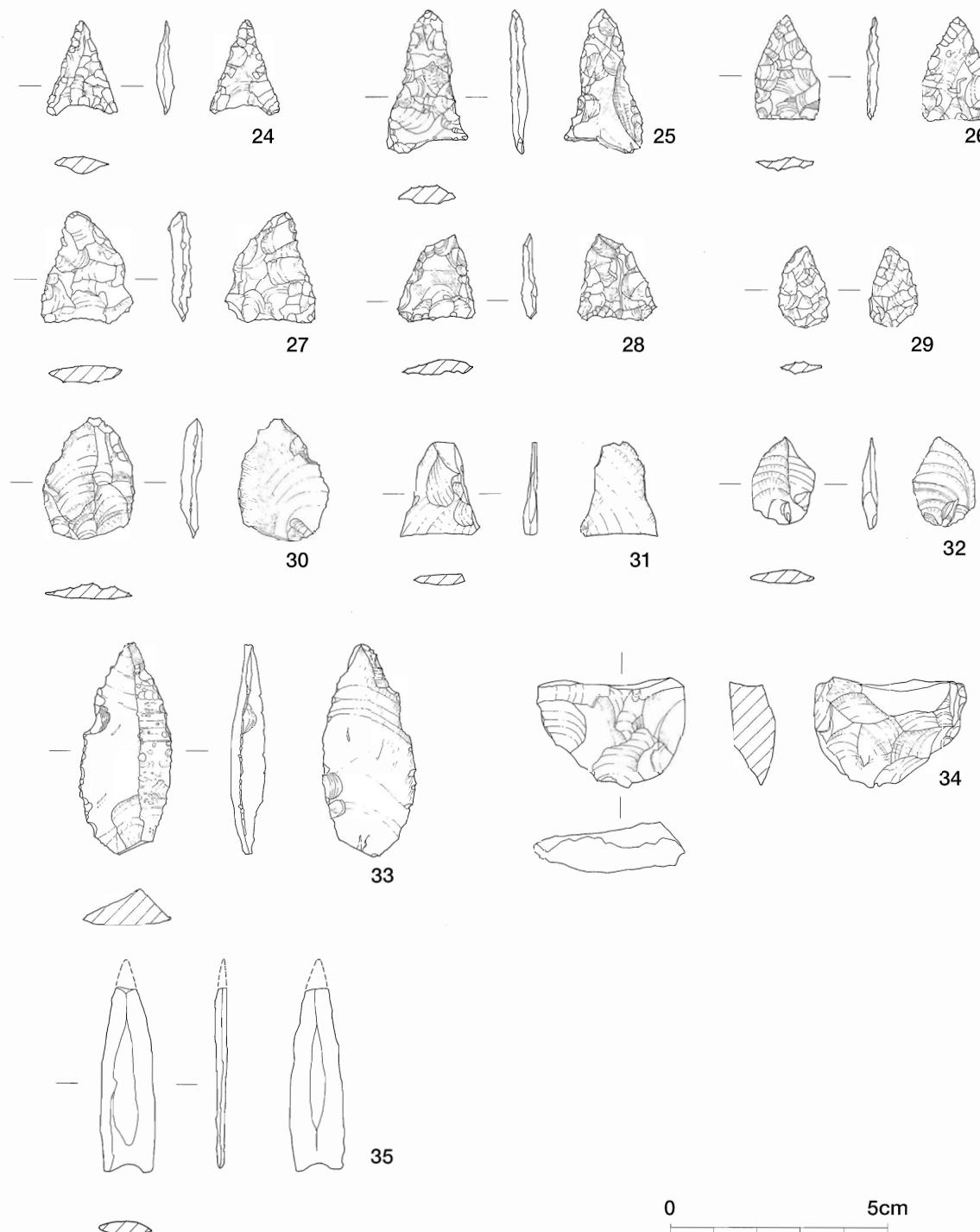


第131図 Ⅲ区右岸出土石器実測図(3) (S=1/2)



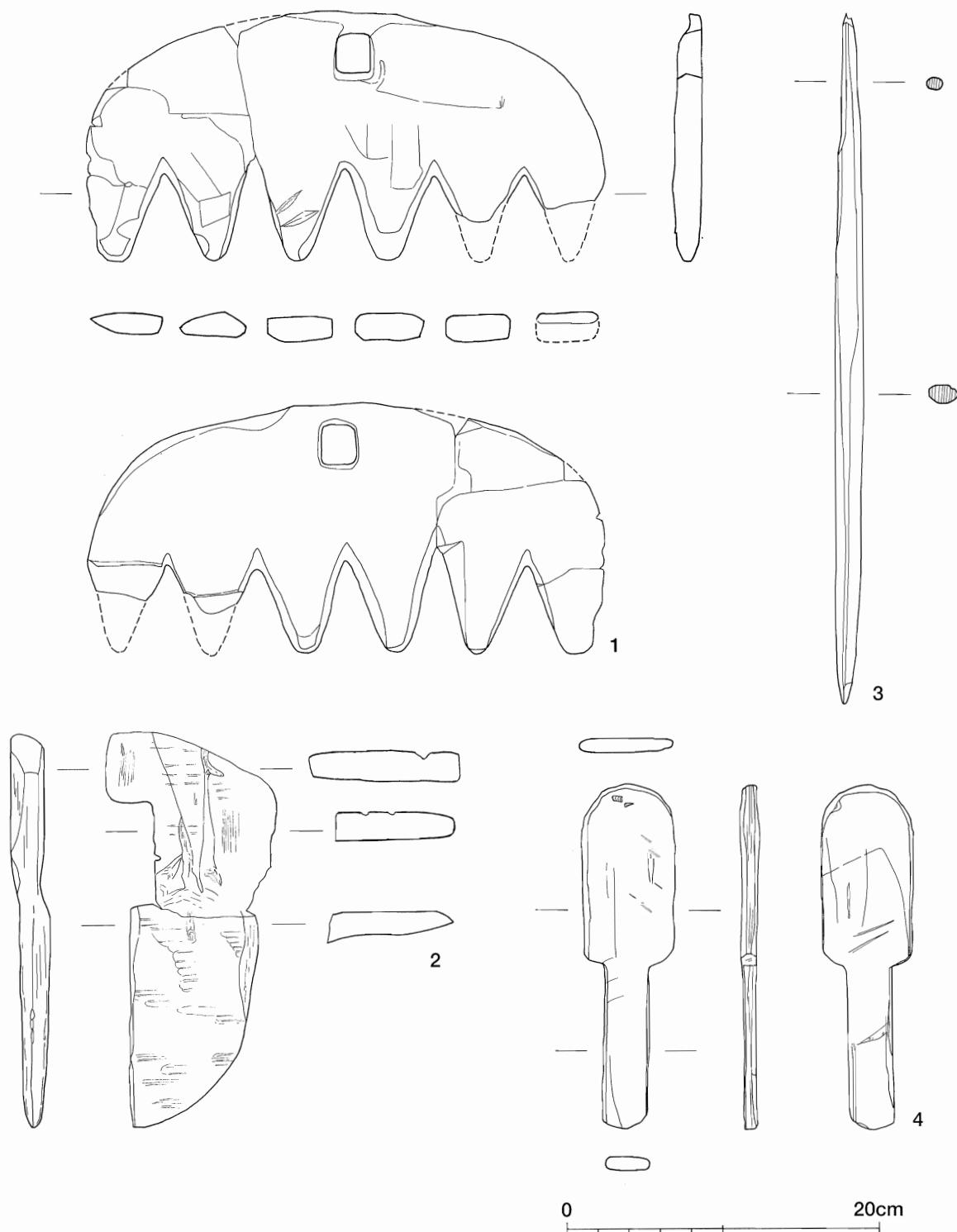
第132図 Ⅲ区右岸出土石器実測図(4) (S=1/2)

であるが、縄紋時代に属するのではないかと思われる。やや扁平で、刃部付近を中心に研磨を行う。先端付近には貝化石が見られる。2は石斧を転用した砥石である。破損面と思われる面を砥石として使用している。3は加工用の斧であるが両刃である。4は砥石で、六角形の面全てを砥石として使用している。5は大型の剥片である。表裏に剥離面を残す。6は「大型石包丁」とされてきたものと形態が類似するが、刃部に相当する部分には使用痕が見られない。7は先端の尖る剥片で、調整の痕が見られる。第130図8、9は石核である。8は頂部に敲打痕が多数見られる。共に石材は珪乳石である。第131図10は銅劍形石劍である。片面のみの残存であるが、現存の長さは6.5cm、幅



第133図 Ⅲ区右岸出土石器実測図(5) (S=2/3)

は3.5cmで、鋒と身の半分以上を欠く。脊が細いので切っ先に近い部分であると考えられる。樋は見られない。脊の厚さは復元すると約1.2~1.4cmに収まると考えられるが、脊の稜はやや銳さを欠く。研ぎは左右の翼で若干異なり、左の翼では右の翼のように段をつけた後、更に研磨を行いそれぞれに面を持つ。銅剣形石剣の分類の「I式」に属すると思われる⁽⁸⁾。11は磨製石剣の先端と考えられる。切っ先は銳さにやや欠け、稜もわずかに片面にのみ見られる。12は磨製穂摘具である。穿孔は両面から行われているが、研磨は片面のみ行っている。13は紡錘形の大型の石錐である。短辺



第134図 Ⅲ区右岸出土木製品実測図(1) (S=1/4)

に平行して溝を彫ってから長辺に平行した溝を彫る。溝の断面は「V」字形である。14は板状未製品である。表裏と側面の一部を研磨している。厚さは約0.9cmである。15はスクレーパーである。縁辺には背面から調整を行う。16、17は紡錘車である。16は厚さが1.1cmで、片面には稜を持つ。17は16に比べ薄いが径は大きい。

第132図18はスクレーパーである。側面には微細な剥離を行う。19もスクレーパーであるが、側面の一辺を除いて微細な剥離を行う。20はポイントの基部の可能性を持つ。全体に風化が進んでいる。21は打点を持つ。22は石匙の未製品の可能性を持つ剥片である。23はやや基部が厚い直方体を呈し、六面を砥石として使用している。

第133図24～32は石鎌およびその未製品である。24、25は凹基式である。26～28、30は平基式、29、32は凸基式である。31は平基式の石鎌未製品の可能性を持つ。33は縦長剥片である。34はポイントの茎部の可能性を持つ。35は磨製石鎌である。先端を欠く。

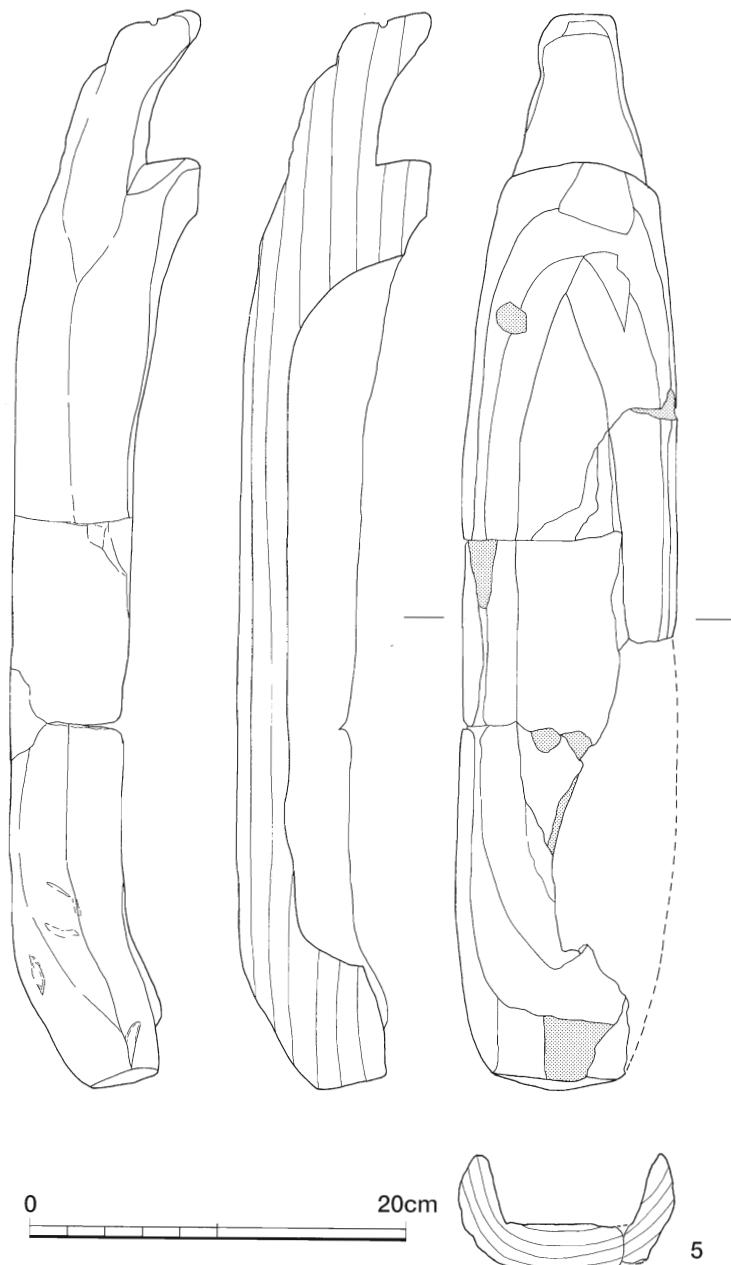
〈3〉 木 製 品

(第134～145図)

Ⅲ区右岸では木製品や流木が多く出土し、木製品を8点、杭を29点図示した。

第134図1は直柄横鋤である。歯は六本で、鋸歯状を呈する。柄の孔は方形である。身の周囲から柄孔へ向け徐々に厚みを増していく。横鋤ⅢB式と考えられる。全体にやや腐食している。砂層2より出土。2は鋤ではないかと思われる。組合せ鋤かどうかは腐食が著しく不明である。砂層2より出土。3は棒状の木製品である。両端がやや尖る。砂礫層3より出土。4はしゃもじ状の木製品である。両面には研磨痕が見られる。南端の砂礫層より出土。

第135図5は一部に欠損があるが、芯持材を削り貫いて舟状に仕上げて、一端を舳先状に加工している。反対側は加工を行ったが、やや面を持って平面形を構

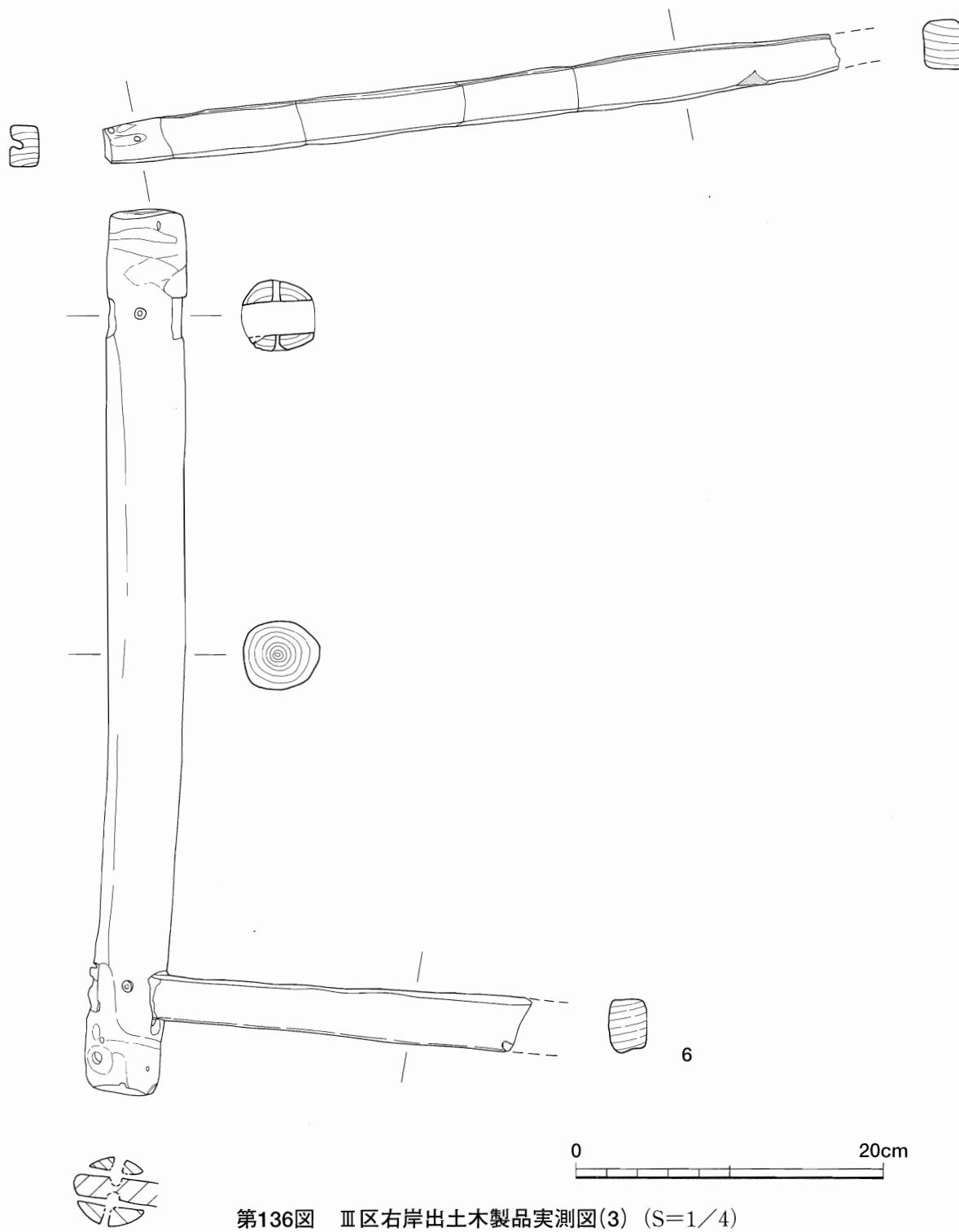


第135図 Ⅲ区右岸出土木製品実測図(2) (S=1/4)

円形に仕上げる。舷はややカーブを描いており、舷から底までは約4cmである。断面は半円形を呈す。樹種はチシャノキである。タテチョウ遺跡から類似する木製品が出土している⁽⁹⁾。砂層2より出土。

第136図6は最大径約5cmの楕円形の丸太材の両端付近に長方形の孔を開け、そこに角材を組み合わせる。丸太材と角材は直径約7mmの木釘で結合させる。丸太材は僅かに湾曲しており、両端は加工している。馬鍬の把手ではないかと考えられる。砂層2より出土。

第137図7、8は共に腐食が著しいが、丸太材の一端に抉りを入れて加工し、先端は丸く仕上げ

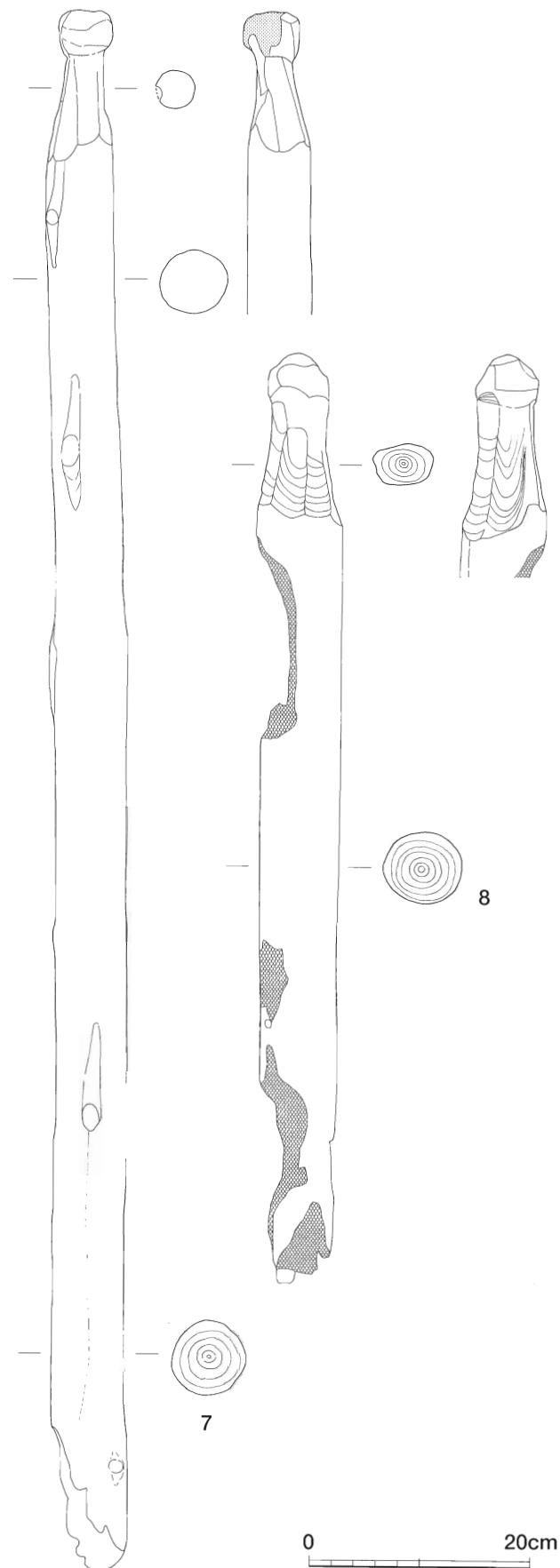


第136図 III区右岸出土木製品実測図(3) (S=1/4)

ている。抉りの部分は面を持って加工するようである。共に一方のみ遺存しているが、7は現存で約140cmを測る。7は砂礫層2-4、8は砂層2より出土。

第138図2は長さが3.25m、直径は24cmを測る。先端を尖らせており、約3~5cmの幅で先端付近を断面多角形に加工する。頂部には加工の痕は見られない。その太さから、当時の朝酌川に掛けられた橋脚と考えられる。

第139図に示した杭は調査区の中央や南側の杭群（第80図）の杭である。いずれも芯持材である。6は全体に湾曲しており、両端は抉り状に加工される。両端の加工は杭の端側と中央側の両方から加工されているが、杭の頂部における端側の加工は杭に対して深く、中央側は浅く加工を行う。加工部分はいくつかの面を持っているので、鉈状の工具の使用を示唆する。先端は二方向から加工されており、先は尖る。頂部が加工されているので、転用杭と考えられるが、元々の用途は不明である。7は全体に小さく屈曲している。先端を欠損するが、二~三方から加工している。節の多い枝を加工したと考えられる。樹種はヤブツバキである。8は二方向から長く削るが、その裏側は加工部分の長さが短い。先端を欠損するが、II区の杭の西川津1'類に似る。9はやや先端を尖らせて三方から加工を行う。樹種はモッコクである。10は大きく屈曲しているが、これは検出時より屈曲していた。一方向から剥ぐように加工を行う。加工痕の断面は平坦で、鉄器の使用を示唆する。11は先端を尖らせ、二~三方より加工を行うが、加



第137図 III区右岸出土木製品実測図(4) (S=1/6)

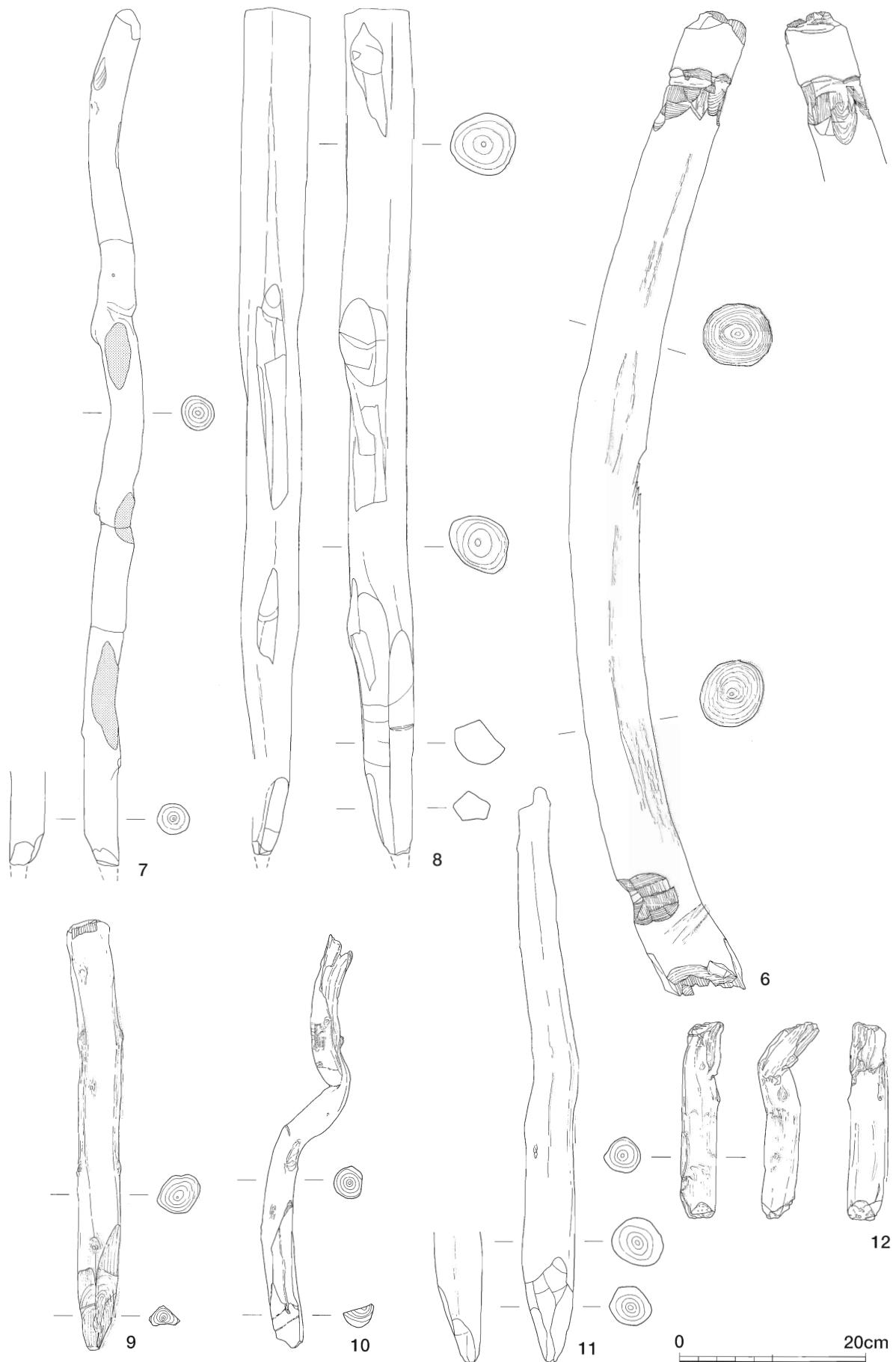
工の及ばない部分もある。頂部ほど細くなる。12は切断面を残して、二方向より加工を行う。加工の回数は少ないので、加工痕も不明瞭である。形態は西川津5類に似る。杭は中程と頂部付近の二ヶ所で互いに逆方向に折れ曲がっている。

第140図13は長さが160cmを越える。三方より長く剥ぐような加工を行い、その後先端を尖らせる加工を行う。先端より約35cmの、加工部分の端付近で変色する。13のように鋭く先端を尖らせる杭は、Ⅱ区やⅢ区左岸ではあまり見られなかった特徴である。

第141図14は先端を尖らせ、六方向から先端へ向けて連続的に加工を行う。加工痕は明瞭である。最大径が約12cmと太い。材質はスギの板目材であり、転用杭の可能性を持つ。15も先端を尖らせ、相対する四方向から加工を行う。3回程度の加工で先端へ及んでいる。材質はスギの芯持材である。16は四方向から加工を行い、先端はその内の二方向から加工する。加工痕は軟質のため、全体に不明瞭である。材質はクリの板目材である。17は角材を長く加工している。杭としての加工は、相対



第138図 Ⅲ区右岸杭実測図(1) (杭2) (S=1/20) ※番号は第84図に一致

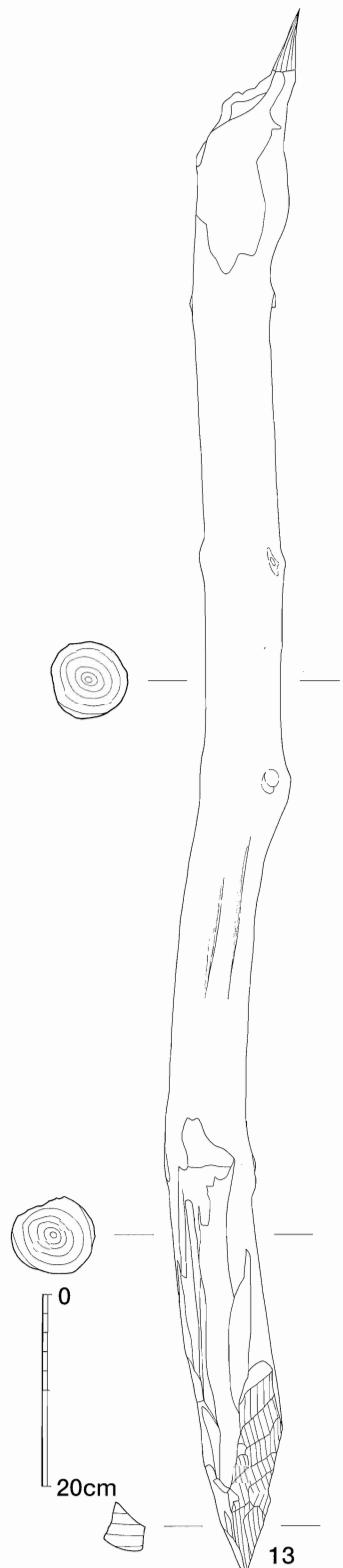


第139図 III区右岸杭実測図(2) (杭群) (S=1/6) ※番号は第80図に一致

する二方向に長く加工を行い、その他の部分には平らな面を作つて加工を行う。先端には一方向から傾斜を付けるように斜めに加工を行う。杭の中程よりやや上の部分で変色する。材質はスギの板目材である。18は先端を尖らせ、三方向より加工を行う。材質はスギの柾目材である。

第142図19～24には最大径が約3～5cmのもの（19、21～23）と約8cm前後のもの（20、24）がある。19は先端にのみ切断面を残して、三方向から1～2回の加工を行う。加工の及ばない部分もある。加工痕の断面は平坦である。頂部付近では、力が加わったのかねじれるように屈曲している。樹種はハイノキ属ハイノキ節である。20は先端を尖らせ杭の中程から加工を三方向から行うが、加工の及ばない部分もある。加工部分は先端へ向けて連続して加工痕が見られる。軟質である。21は先端を尖らせ四方向から剥ぐように加工を行う。先端と頂部付近には、力が加わったのか屈曲する。樹種はスダジイである。22は断面がほぼ円形になるように細かく加工を施した後、三方向より一度のみ加工を行う。材質はスギの板目材である。23は斜めに段を付けて、一方向からのみ加工を行う。一方向から加工を行う点で、西川津4類に似る。樹種はコナラ属コナラ亜属クヌギ節である。24は先端を尖らせ氣味に三方向より加工を行うが、加工の及ばない部分もある。各方向は3～5回の加工で先端に及ぶ。枝を落とした痕がある。頂部付近で変色する。樹種はマツ属複維管束亜属である。

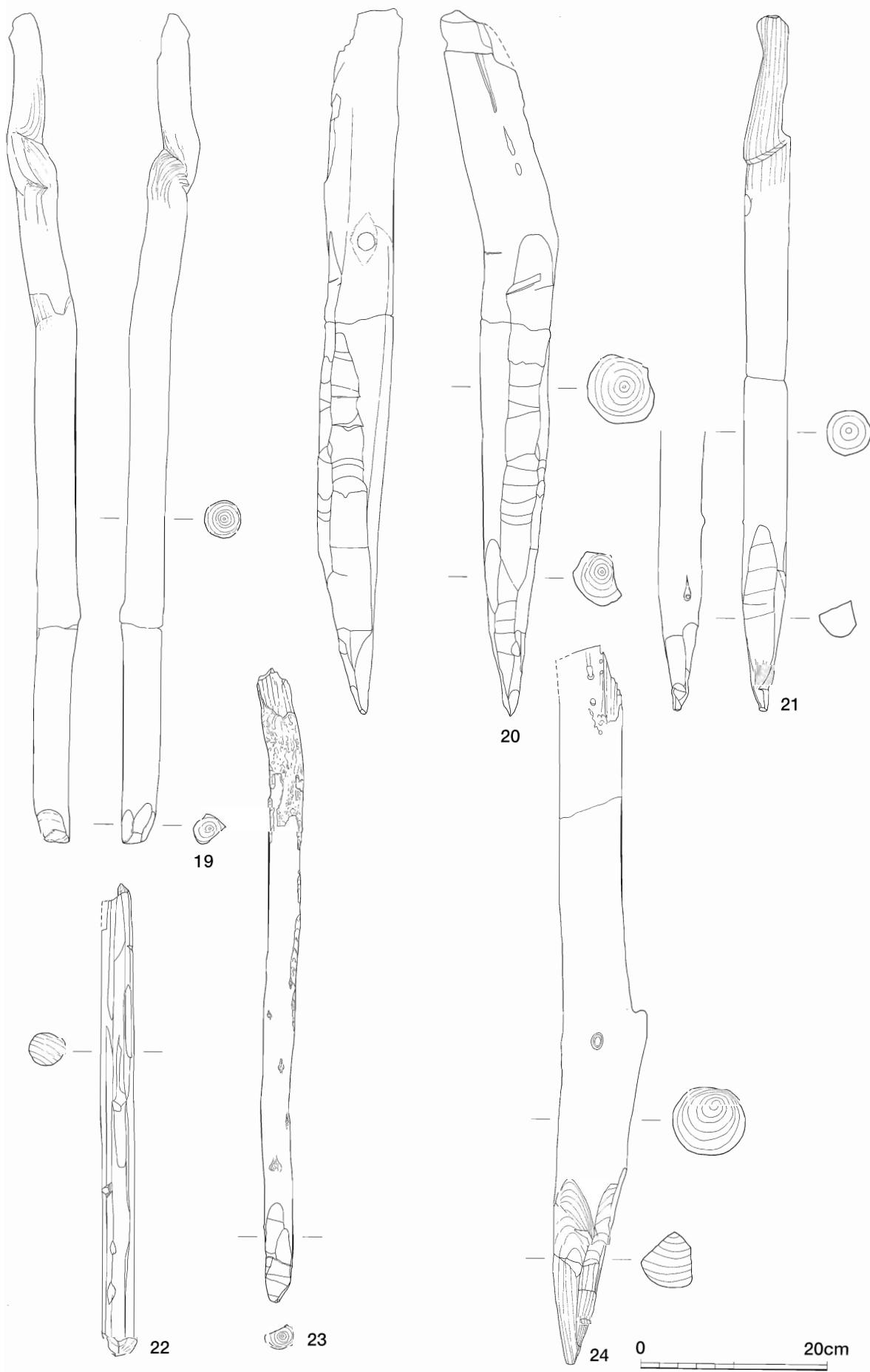
第143図25～第144図30は転用材を用いた杭である。いずれも元々は何の部材であるのか、同定は出来なかった。25は中程に抉りのように細くなる部分がある。先端をやや尖らせ氣味に、四方向から加工を行うが、木の部分が残っている部分がある。鉈状の工具で剥ぐように加工されている。頂部付近には一部火を受けた部分がある。樹種は環孔材の柾目材である。26は先端から中程にかけて幅約2cmの溝を約1.5cmの深さで直線的に開け、中程やや頂部寄りの部分に縦4cm、横2cm、深さ3cmのほぞ穴を有する。角材の四隅を更に加工し、断面は八角形に近い。先端を平たく尖らせている。腐食が進んでいるので加工痕は不明瞭であるが、加工痕の断面は平坦である。27は頂部に近い部分に抉りを有し、その部分は加工痕が先端の加工痕とは異なり、鉈状の工具によるものと思われる。断面は長方形を呈す。先端はやや尖らせ氣味に、短辺側を連続的に加工する。加工痕は全体に不明瞭である。樹種はスダジイの板目材である。28は頂部付近に一辺約1cmの方形の孔を有す。長辺側の一方が段状に突出する。平坦に仕上げるための加工が全体に見られ、特に短辺側では2～3cm単位で加工痕が見られる。先端を尖らせ、短辺側を中心



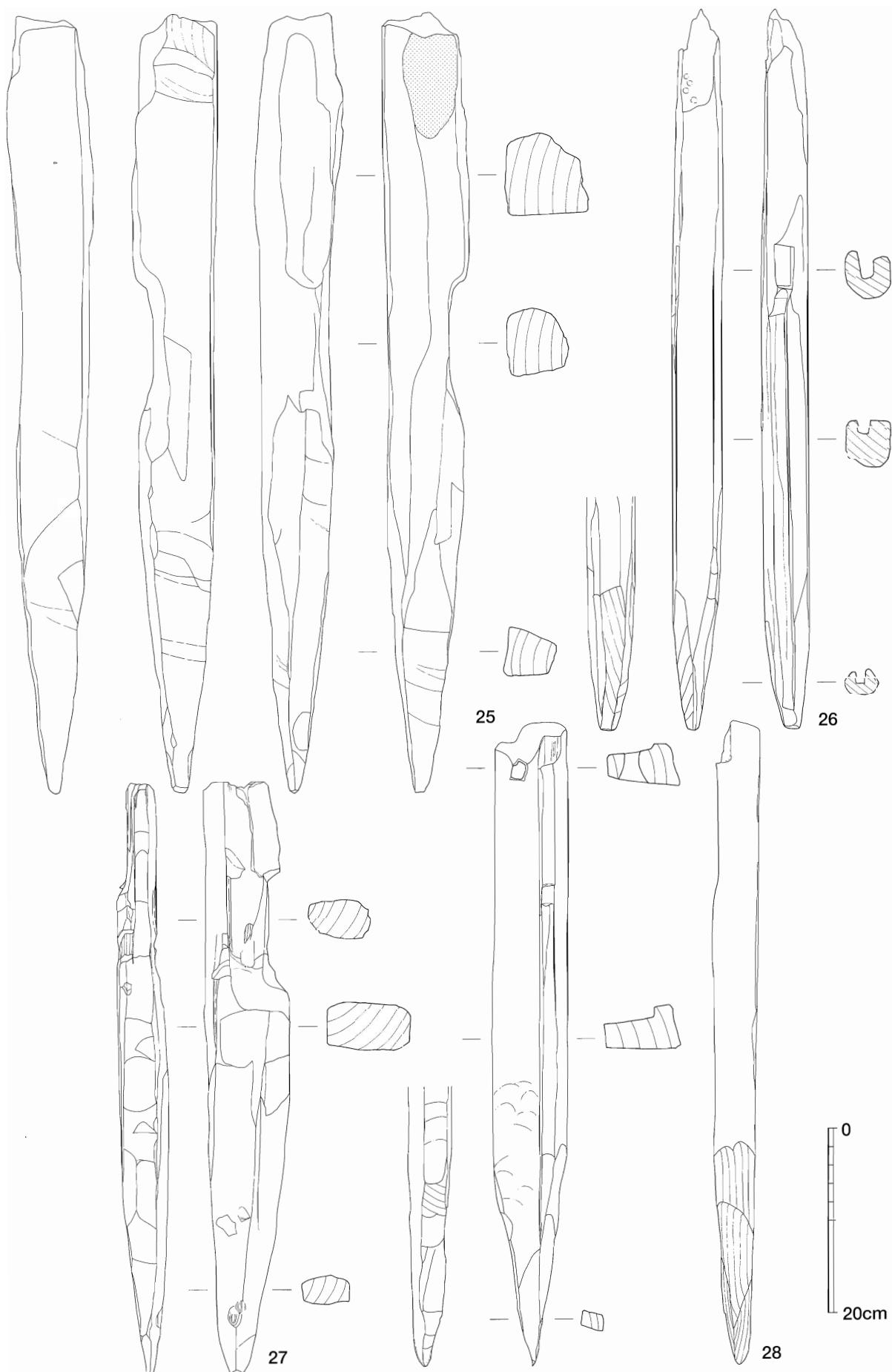
第140図 III区右岸杭実測図
(3) (S=1/8)
※番号は第80図に一致



第141図 III区右岸杭実測図(4) (S=1/6) ※番号は第83図に一致



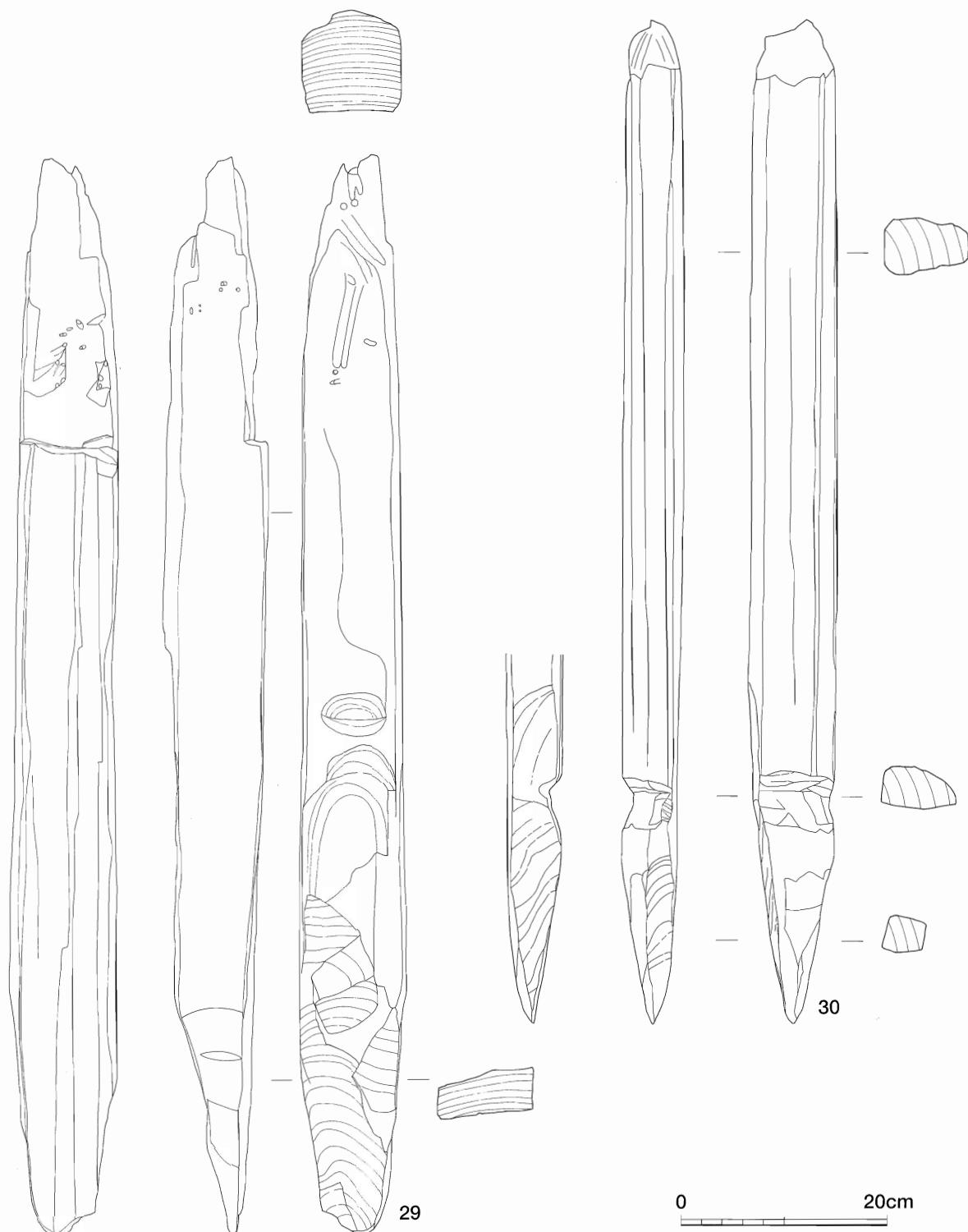
第142図 Ⅲ区右岸杭実測図(5) (S=1/6) ※番号は第83図に一致



第143図 III区右岸杭実測図(6) (S=1/6) ※番号は第83図に一致

加工する。材質はスギの柾目材である。

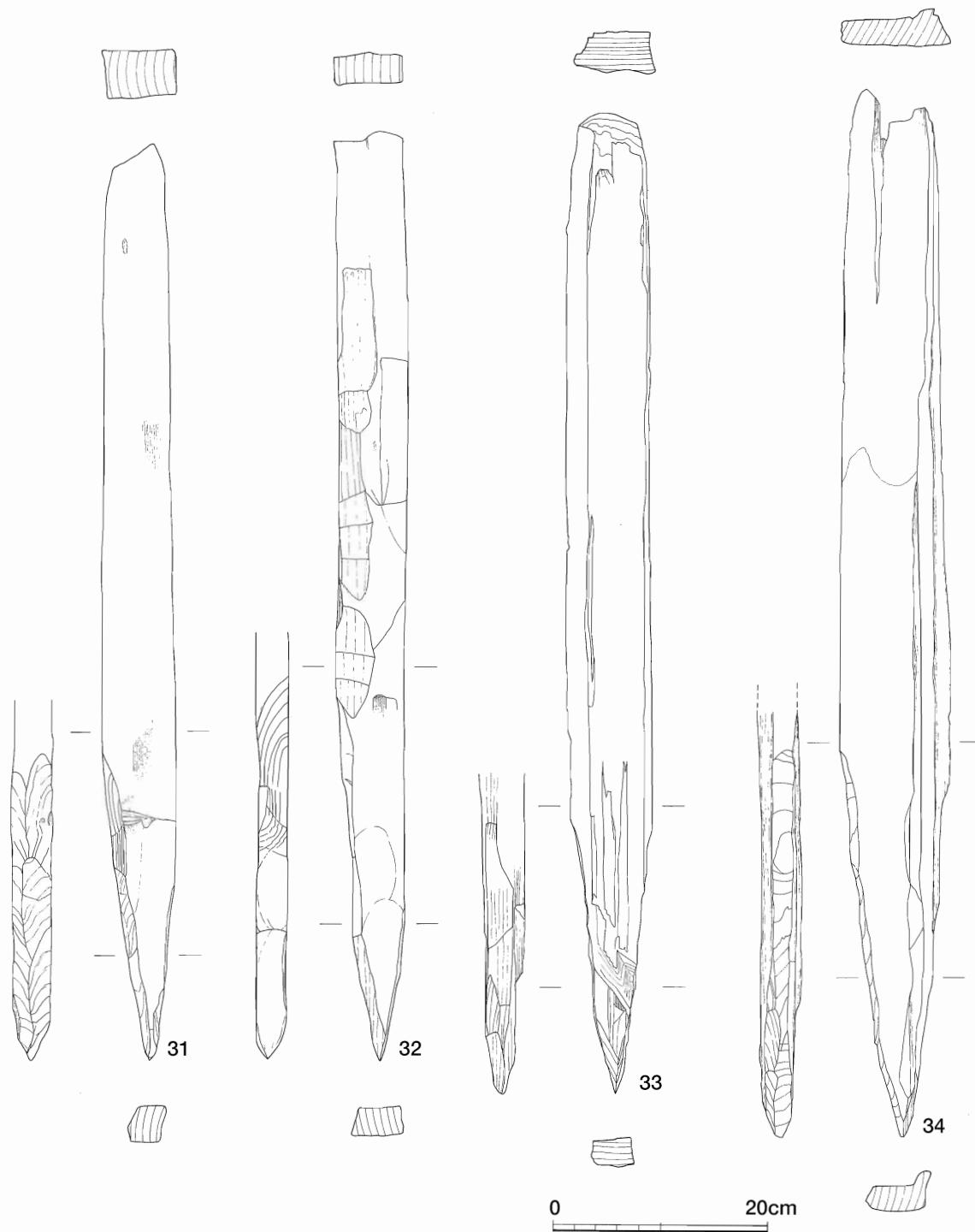
第144図29は頂部付近に段状の削り込みを有す。幅や厚さは約10cmと他に比べやや大きい。先端を斜めに尖らせ、長辺側の一方を連続して加工し、短辺側は先端のみ加工する。長辺側の段を有する側は杭としての加工は行わない。材質はスギの板目材である。30は先端付近に抉りのように凹んだ部分を有す。この部分の加工は先端側がやや角度が浅いのに対して、頂部側は角度をつけて加工を行う。頂部から約15cmの所で変色する。断面は長方形である。先端を尖らせ、四方向から加工を行



第144図 III区右岸杭実測図(7) (S=1/6) ※番号は第83図に一致

行う。それぞれの加工の幅が広く、削るように加工している。樹種はスギの柾目材である。

第145図31～34は角材である。いずれも樹種はスギである。31は先端を尖らせ主に短辺側を加工し、先端は更に別の二方向から加工を行う。長辺側には仕上げの際の痕がわずかに残る。柾目材である。32は先端を尖らせ短辺側を中心に加工を行う。長辺側には仕上げ時の加工痕が残る。中程で変色する。柾目材である。33も先端を尖らせる。短辺側だけではなく長辺側も先端には加工を行う。短辺側は先端へ向けて連続した加工を行う。34は端の部分に突出した部分を持つので、転用材の可能性を持つ。先端を尖らせ短辺側のみ加工を行う。中程やや頂部寄りの所で変色する。



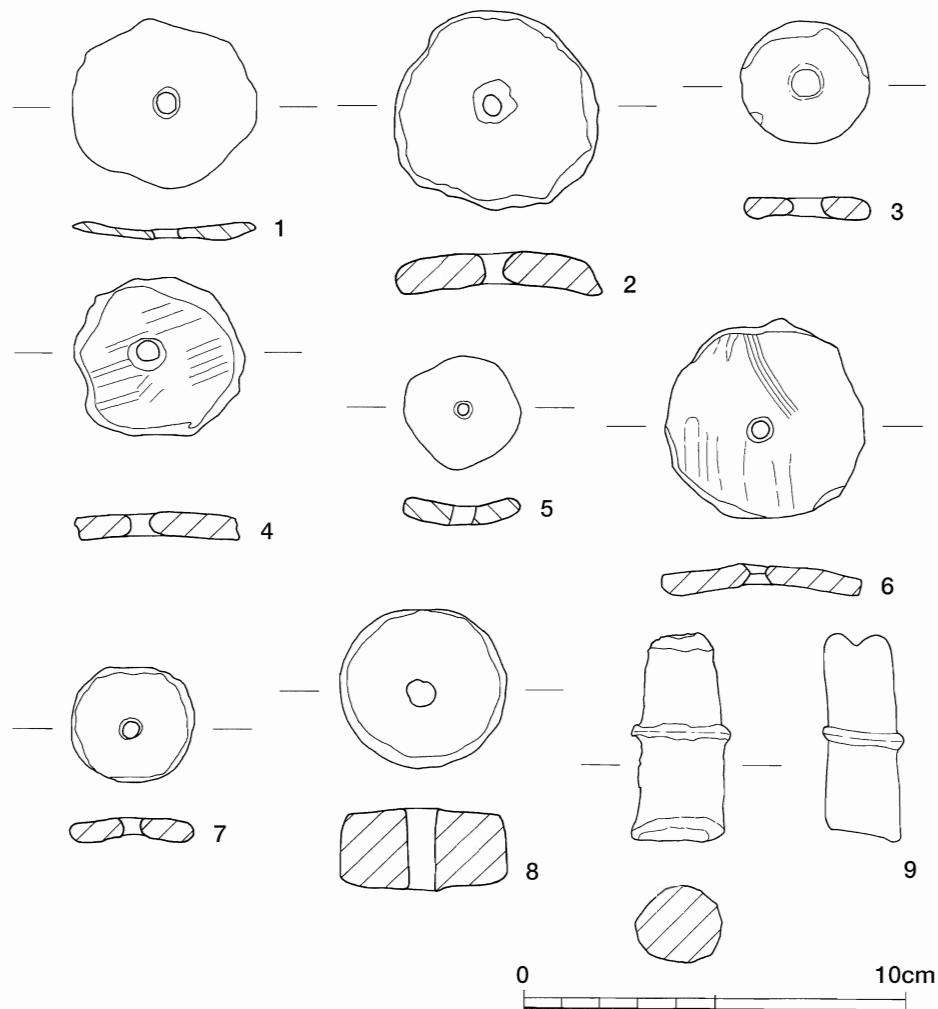
第145図 III区右岸杭実測図(7) (S=1/6) ※番号は第83図に一致

Ⅲ区右岸の杭には角材や転用材が多く、芯持材でも先端を尖らせるものが見られるなど、Ⅱ区やⅢ区左岸とは異なる特徴を持つものが多い。また、加工痕の断面は平坦で、刃部最大幅もⅡ区やⅢ区左岸と比べてやや広いものが目立つ。

〈4〉 土 製 品 (第146図)

Ⅲ区右岸から出土した土製品のうち、土製円板8点、不明土製品1点を図示した。

土製円板は、いずれも中央に孔があけられている。土器片を転用したもの（1～7）と粘土を整形したもの（8）がある。土器片転用のものは、径が3cm前後のもの（3、5、7）と4～5cmのもの（1、2、4、6）に分かれる。2、6は両面から穿孔している。古墳時代の砂礫層から出土しているが、いずれも弥生前期～中期に属すると考えられる。8は粘土を整形したもので、直径7～8mmの芯に粘土を巻き付けてつくられたと考えられる。9は中程に突帯を持ち、下端には面を持つ。上端には指で押さえた痕がある。なお、図示しなかったが、砂層3から73-2のような土錘が出土している。



第146図 Ⅲ区右岸土製品実測図 (S=1/2)

第 5 節 小 結

Ⅲ区右岸の調査では、大きく分けると縄紋時代（？）、古墳時代前期、古墳時代後期末、平安時代の河川堆積層と、それに伴う大量の土器や石器、木製品、100本余りの杭を検出した。

- ① 流れに直交して築かれた杭や橋脚と考えられる杭など、古墳時代を中心とする時期の朝酌川に伴う杭を多数検出し、当時の川への人の関わりを考えることが出来た。これらの杭は流れを一時的に調節したり、舟を繋いでおくなどといった簡単な施設ではないかと考えられる。また、50mを越す土層堆積図を作成し、古墳時代以降はほぼ旧河道に平行するように当時の朝酌川が流れていたことが分かるなどの朝酌川の堆積状況を把握することが出来た。なお、調査区の北東側に隣接していた西川津遺跡第2次調査の砂礫層から出土した遺物は、古墳時代の遺物は報告されておらず、「（弥生時代）後期のものは少ない」との記述がある（註(1)文献、p.12）。Ⅲ区左岸では弥生中期前葉を上限とする砂礫層が確認されていることから、Ⅲ区では朝酌川の河道は次第に西側を流れるようになり、下流ほど後の時代の砂礫層が厚い、ということがいえよう。
- ② 縄紋時代前期から青磁・白磁という、5000年にわたる土器が出土したが、特に5～6世紀（松山Ⅱ～Ⅳ期）の土師器が多数出土した。これまでの調査では資料の少なかった、古墳時代中～後期の西川津遺跡を考える上で貴重な資料となった。古墳時代中～後期の集落の規模や位置などが今後の検討課題である。
- ③ 銅剣形石剣や磨製石剣、磨製石鎌など、弥生時代に特徴的な石器が出土した。これらは古墳時代の堆積層から出土したので、再堆積したものであるが、弥生時代の拠点集落である朝酌川遺跡群の位置付けを改めて確認することが出来た。
- ④ 木製品は量は少なかったが、直柄横鍬や舟状木製品、馬鍬の把手などが出土した。Ⅲ区左岸で出土した、弥生時代の木製品とは様相が異なるが、これは古墳時代の堆積層から出土したことによるもので、時代差が現れていると考えられる。西川津遺跡における古墳時代の木製品の様相について、更なる検討が必要である。
- ⑤ 堆積層から若干の円筒埴輪が出土した。朝酌川遺跡群の周辺では、埴輪を伴う古墳が必ずしも多いとは言えないが、これらの埴輪が堆積層により古墳が削られてもたらされたのか、それとも朝酌川遺跡群において埴輪の製作が行われていたのか、今後の検討課題である。
- ⑥ 杭には検出時から屈曲しているものがあった（139-7、12、142-19、21）。原の前遺跡の調査では地震により屈曲した杭が報告されており⁽¹⁰⁾、今回報告した杭も地震によって屈曲した可能性を持つ。

註

- (1) 石井 悠・村尾秀信 1982 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅱ』 島根県教育委員会 第7図 p.9
 - (2) 弥生時代前期～中期前葉の編年は第3章に準ずるが、中期中葉～中期後葉は第3章註(1)文献、pp.436～459を参照した。
 - (3) 弥生時代後期については、拙稿にもとづいて時期を決定した。
- 中川 寧 1996 「山陰の後期弥生土器における編年と地域間関係」『島根考古学会誌』第13集 pp.1～25

なお、VI期は便宜的に「古式土師器」と表現した。

- (4) 古墳時代の土師器については、次の論文を参照した。

松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集 pp.1~29

- (5) 古墳時代の須恵器については、次の論文を参照した。

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 pp.39~82

- (6) 「短線文」という表現はタテチョウ遺跡の報告に従った。

三宅博士・柳浦俊一編 1989 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会 Y327~330 pp.51、76

なお、図示しなかったが、Y300（同p.75）のような土器も数点出土している。

- (7) 41は内面のヘラケズリの位置など、後期Ⅰ期の特徴を持つと言うことも可能であるが、肩があまり張らず、刺突文の位置もやや下方に位置している。また、42は内面はナデによりヘラケズリを消し切っている。更には、共に作りが比較的薄手で、後期Ⅰ期の土器の特徴である厚手の感じとは異なる。これらのことから、41、42は中期後葉（その中でもより中期末に近い段階）に属すのではないかと考えられる。

- (8) 種定淳介 1990 「銅劍形石劍試論（上）」「同（下）」『考古学研究』第36巻4号 pp.21~52 同第37巻1号 pp.29~56

- (9) 註6文献 第142図W135、pp.256、257

- (10) 西尾克己・間野大丞ほか編 1995 『原の前遺跡』 島根県教育委員会 p.48

表8 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土土器観察表

挿図番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
86-1	深鉢	砂礫層	32.0	9.0	端部に突帯を貼付	繩紋	明黒灰色	20	摩滅著しい
86-2	"	"				条痕	淡褐色		内面煤付着
86-3	壺	"	29.0	7.6	口縁端部に羽状文とヘラ描直線文1条	ヘラミガキ ナデ	明黄灰色	15	
86-4	"	"	(14.0)	7.6	ヘラ描直線文4条	ヘラミガキ ハケ	明黄灰色	25	頸部径
86-5	"	"			口縁端部に羽状文	ヘラミガキ ナデ	淡桃色		
86-6	"	"			ヘラ描直線文3条	ナデ ハケ	淡褐色		削出突帯
86-7	"	"			直線文4条 貝殻羽状文	ナデ	淡橙灰色		
86-8	"	"			直線文3条 羽状文	不明	淡灰褐色		
86-9	"	"			ヘラ描直線文11条以上	ナデ	明黒灰色		
86-10	甕	"	22.4	5.5		不明	淡褐色	10	摩滅著しい
86-11	"	"			直線文1条	ナデ	黒橙褐色		
86-12	"	"			直線文5条	ナデ	暗黄灰色		
86-13	"	"			刻目	ナデ?	明黒褐色		
86-14	壺底部	"	(7.4)	4.5		ナデ	明灰色		底部径
86-15	甕	"			櫛描直線文 刺突文 口縁端面刻目	ナデ	暗黄褐色		
86-16	甕底部	"	(2.8)	6.0		ナデ	橙褐色	10	底部径
86-17	"	"	(3.8)	6.7		ヘラミガキ ナデ	橙褐色	10	"
86-18	広口壺	"	24.6	2.0	櫛描斜格子文 列点文 円形浮文	不明	灰褐色	10	
86-19	"	"	19.6	3.6	刻目突帯3条以上 櫛描斜格子文 円形浮文	ナデ	黄褐色	15	口縁端部に刻目
87-20	器台	"	25.6	2.9	凹線文6条	ナデ	明黄褐色	10	
87-21	甕	"	15.8	4.9	複合口縁	ナデ ヘラケズリ	灰褐色	10	
87-22	"	"	16.8	4.3	単純口縁	ナデ ヘラケズリ	淡褐色	10	畿内系
87-23	"	"	18.2	4.4	"	不明	淡灰褐色	10	"
87-24	鼓形器台	"	21.9	6.8		ヨコナデ	淡灰褐色	15	
87-25	高環	"	19.3	4.5		不明	淡灰色	15	
87-26	环	"	(6.0)	2.1		ナデ	淡黄色	18	底部径
87-27	坏蓋	"	17.0	1.8		ナデ	暗青灰色	15	
87-28	坏身	"	11.0	5.0		ナデ ヘラケズリ	青灰色	30	
87-29	"	"	(6.8)	3.4		ナデ 回転糸切り	暗青色	30	底部径
87-30	"	"	(7.0)	3.5		ナデ 静止糸切り	淡灰色	70	"
87-31	"	"	(6.6)	3.5		ナデ 回転糸切り	青灰色	20	"
87-32	高台付椀	"	(8.8)	2.9		ナデ 静止糸切り	濃灰色	40	"
87-33	坏	"	(7.6)	1.9	高台	ナデ 回転糸切り	青灰色	20	"
87-34	"	"	(6.4)	3.0		ナデ 回転糸切り	橙灰褐色	45	"
87-35	"	"	13.0	3.1		回転糸切り	暗褐色	40	
87-36	"	"	14.8	2.4		ナデ	明青灰色	15	
87-37	甕	"				格子タタキ	灰色		
87-38	土師器坏	"	13.2	2.5		ナデ	淡黄褐色	20	
88-39	土鍋	"	25.0	10.3		ハケ ナデ	淡黄灰色	10	煤厚く付着
88-40	"	"	28.6	5.7		ハケ ナデ	明黄褐色	15	"
88-41	青磁壺	"	9.8	4.1	高台が付く		淡青灰色	15	
88-42	白磁	"	(5.6)	1.5			淡緑色	20	底部径
88-43	青磁椀	"					淡緑灰色		
90-1	高台付椀	砂層1	12.4	5.6	底部内面にX印	回転糸切り	青灰色	65	
90-2	壺	"			有輪木葉文 削出突帯 ヘラ描直線文1条	ヘラミガキ ナデ	淡灰褐色		
90-3	高坏	"	10.0	1.8		不明	青灰色	20	長脚の高坏?
92-1	深鉢	砂層2			押引文		橙褐色		
92-2	蓋	"	6.9	3.1		ナデ?	淡灰白色		
92-3	広口壺	"	10.4	12.6	胴部に刺突文	ナデ ハケ	暗褐色	60	
92-4	壺底部	"	(10.2)	10.8		ヘラミガキ ハケ	灰褐色		底部完存 底部径 煤付着
92-5	台部	"	4.4	2.7	台部にヘラ描直線文	ナデ	暗灰褐色	45	"
92-6	甕	"	12.6	7.0		ナデ ヘラケズリ	灰褐色	15	火を受け変質
92-7	壺	"	24.6	8.0	複合口縁	ヘラケズリ	淡黄灰色	10	
92-8	直口壺	"	16.3	8.8		ナデ ヘラケズリ	淡褐色		口縁完存
92-9	甕	"	15.6	5.3	複合口縁	ナデ ヘラケズリ	淡黄灰色	20	
92-10	高坏	"		7.4		不明	淡茶褐色	25	
92-11	小型丸底壺	"	6.2	7.3		ナデ ハケ ヘラケズリ	黄褐色		完形
92-12	甕	"	25.6	9.8	単純口縁	ナデ?	淡黄灰色	10	
92-13	"	"	16.9	5.6	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	20	
92-14	高坏	"	15.8	8.0		ナデ ヘラケズリ ヘラミガキ	黄褐色	40	赤色物塗布
92-15	無蓋高坏	"		3.0		回転ヘラケズリ	暗灰褐色	20	
92-16	手づくね 土器	"	3.0	4.6		ナデ	淡黄灰色		一部欠
92-17	円筒埴輪	"	25.4	5.9		ナナメハケ ナデ	赤茶色	10	
92-18	"	"	25.8	8.6		ヨコハケ ナデ	淡黄灰色	10	
92-19	土師質土器	"	8.0	1.3			淡赤褐色	10	

挿図番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	残存率	備 考
94-1	深鉢	砂礫1			列点文	条痕 ナデ	暗褐色		外面煤付着
94-2	"	"			沈線文	撲糸文 ナデ	暗黄褐色		
94-3	注口土器	"			不明		黄灰色		
94-4	深鉢	"			刻目突帯文	条痕 ナデ	暗褐色		
94-5	壺	"	(14.2)	11.9	貼付突帯に刻目	ヘラミガキ ナデ	暗黄灰色	80	胴部径
94-6	"	"			ヘラ描直線文3条と山形文?	ヘラミガキ ナデ	黄褐色		
94-7	"	"			貝殻重弧文 ヘラ描直線文6条以上	ヘラミガキ ナデ	淡灰黄色		削出突帶
94-8	"	"			ヘラ描直線文9条	ハケ ナデ	淡黄灰色		
94-9	甕	"	17.6	6.0	ヘラ描直線文1条	ハケ	明灰色	10	口縁端部刻目
94-10	"	"			ヘラ描直線文2条の間に列点文	ナデ	灰褐色		
94-11	"	"			櫛描直線文	ナデ	暗橙褐色		
94-12	広口壺	"	33.6	6.8	櫛描波状文 同斜格子文 刻目突帯4条	ハケ ナデ	淡黄褐色	10	口縁端部刻目
94-13	"	"			櫛描綾杉文	ナデ	淡黄褐色		
94-14	甕	"	5.0	5.0	底部やや突出	ヘラミガキ ナデ	橙灰色	30	
94-15	高坏	"	(24.0)	2.7	口縁端部に刻目	ナデ?	黒灰色	10	脚端部径
94-16	壺	"	13.6	7.6	擬凹線文3条 貝殻刺突文 同直線文	ヘラケズリ ナデ	淡灰色	20	
94-17	甕	"	17.6	5.3	四線文5条	ヘラケズリ ナデ	淡灰褐色	15	
94-18	高坏	"	16.8	6.6		ヘラケズリ ナデ	淡灰色	40	赤色物塗布
94-19	"	"	(12.2)	14.0	脚端部に四線文	ヘラケズリ ナデ	明黄褐色	40	脚端部径
94-20	"	"	(3.6)	6.9		ヘラケズリ ナデ	淡灰色	15	脚柱部径
94-21	低脚坏	"	(3.7)	2.6		ナデ?	淡赤褐色	10	脚端部径
95-22	直口壺	"	11.0	7.1		ナデ ヘラケズリ	黄灰色	20	
95-23	壺	"	(12.2)	10.7	底部やや突出	ハケ ヘラケズリ	暗黄褐色	55	胴部径
95-24	小型丸底壺	"	8.3	6.4		ハケ ヘラケズリ	淡灰色	25	胴部径9.6cm
95-25	ミニチュア土器	"	5.2	5.0		ナデ ハケ	明橙灰色	完形	
95-26	小型丸底壺?	"	(6.4)	5.0		ナデ	灰褐色	20	胴部溝
95-27	甕	"	16.4	6.3	単純口縁	ナデ ヘラケズリ	灰色	20	
95-28	"	"	15.4	10.0	"	ハケ ナデ ヘラケズリ	黒黄褐色 ~黄灰色	15	肩部のヨコハケは凹線文風
95-29	"	"	10.8	10.5	"	ハケ ヘラケズリ	暗黄褐色	25	外面煤付着
95-30	"	"	13.8	4.7	"	ナデ ヘラケズリ	暗褐色	15	"
95-31	"	"	23.0	5.5	"	ハケ ヘラケズリ	暗褐色	15	"
95-32	"	"	19.8	7.3	"	ハケ ヘラケズリ	淡黄灰色	25	"
95-33	高坏	"	18.4	10.1	円形透かし三方	ヘラミガキ ナデ	淡黄灰色	65	
95-34	"	"		3.4		ハケ ナデ	明黄褐色	20	
95-35	"	"	16.3	5.9		ナデ ヘラミガキ	淡橙褐色	60	赤色物塗布
95-36	"	"		1.3		ナデ?	橙灰色	20	
95-37	坏蓋	"	12.4	2.8		回転ナデ	青灰色	20	
95-38	"	"	12.2	4.6		ヘラ切り後ナデ	暗灰色	95	
95-39	坏身	"	11.2	4.0		回転ヘラケズリ	青灰色	95	
95-40	"	"	8.6	3.4		回転ナデ	青灰色	完形	
95-41	甕	"				タタキ カキメ	暗灰色		
96-42	円筒埴輪	"	22.0	13.6		ナナメハケ ナデ	暗橙褐色		無黒斑
96-43	"	"				ナナメハケ ナデ	青灰色		
96-44	"	"			円形透かし	ヨコハケ	赤黄褐色		焼成やや軟
96-45	"	"	(19.4)	7.8	円形透かし	ヨコハケ	橙褐色	10	タガ径
97-1	壺	砂礫2	(16.2)	9.0	ヘラ描直線文4条	ヘラミガキ ナデ	淡茶褐色	18	頸部径
97-2	"	"			内面に蓋受け	ヘラミガキ ナデ	淡褐色		
97-3	"	"			ヘラ描直線文計10条	ヘラミガキ ナデ	灰褐色		
97-4	"	"			直線文3条 羽状文	ナデ	明黄褐色		
97-5	蓋	"	4.4	2.3	紐孔を有す	ナデ?	黄褐色	28	ミニチュア?
97-6	壺	"	14.0	6.9	指による刻目	ハケ ナデ	黄灰色	18	
97-7	"	"	11.8	3.6	凹線文3条	ナデ	淡橙褐色	20	
97-8	直口壺	"	11.4	10.8		ヘラミガキ ナデ ヘラケズリ	淡黄灰色	25	
97-9	甕	"	15.9	7.3	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡茶褐色	22	摩滅著しい
97-10	"	"	20.0	6.8	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	20	
97-11	高坏	"		2.7		ハケ	淡灰褐色		
97-12	"	"	(8.7)	4.9	外面に赤色物塗布	ナデ ハケ	淡茶褐色	40	脚端部径
97-13	"	"	(12.6)	7.3		ヘラケズリ ハケ	淡灰色	60	"
97-14	坏身	"	13.2	2.0		ナデ	青灰色	12	
97-15	"	"	12.0	4.6		回転ヘラケズリ	青灰色	45	
97-16	竈	"				ハケ ヘラケズリ	濁黃灰色		
98-1	壺	砂礫層2-2	14.9	14.2	ヘラ描直線文7条 口縁端部斜格子文	ナデ ヘラミガキ	淡黄灰色	25	
98-2	"	"	(29.0)	8.7	貼付突帯1条	ヘラミガキ ハケ	淡茶灰色	10	胴部径
98-3	甕	"			櫛描直線文	ナデ	淡灰色		
98-4	手づくね土器	"	4.0	2.8		ナデ	灰色	95	
98-5	高坏?	"	13.2	5.2		ナデ	灰褐色	20	
98-6	高坏	"	(10.1)	5.1		ナデ ハケ	淡灰褐色	40	脚端部径
98-7	甕	"	17.4	6.1	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	20	
98-8	"	"				タタキ ナデ	青灰色		

捲回番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
98-9	壺蓋	"	11.0	4.0		回転ヨコナデ	明灰色	90	
99-1	深鉢	2-3			突帶が垂れ下がる	条痕	灰褐色		繊維を含む
99-2	壺	"			重弧文	不明	淡黄褐色		
99-3	"	"			ヘラ描直線文1条 羽状文	ナデ	淡黄褐色		
99-4	甕	"			ヘラ描直線文5条 列点文	ナデ	淡褐色		
99-5	"	"	23.8	4.6	ヘラ描直線文6条	ナデ ハケ	暗黄褐色	10	口縁端部刻目
99-6	"	"	(21.6)	12.9	ヘラ描直線文4条の間に竹管文	ナデ ハケ	明黄褐色	20	胴部径
99-7	広口壺	"	19.8	2.2	円形浮文列点文 口縁端部に羽状文	ナデ	暗黄褐色	10	
99-8	高壺	"			四線文4条	ナデ	淡桃褐色		
99-9	甕底部	"	(4.8)	2.9	内面煤付着	不明	明褐色	20	底部径
99-10	壺	"	26.6	4.7		ナデ	灰褐色	15	
99-11	壺?	"	15.7	7.9		ハケ ヘラケズリ	黒灰色	15	外面煤付着
99-12	甕	"	17.0	4.1	複合口縁	不明	黄褐色	10	
99-13	"	"	15.2	4.7	"	ナデ?	明黄灰色	20	摩滅著しい
99-14	"	"	17.8	6.7	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	灰茶褐色	15	
99-15	"	"	17.4	12.0	"	ハケ ヘラケズリ	明灰色	15	
99-16	"	"				ハケ ヘラケズリ	黄灰褐色		小動物の爪痕
99-17	高壺	"	15.2	4.7		ナデ	橙褐色	15	
99-18	"	"	16.2	4.5		ヘラミガキ	黄褐色	10	
99-19	"	"	(3.8)	8.9	円形透かし四方	ヘラミガキ ヘラケズリ	淡黄褐色	30	脚柱部径
101-1	深鉢	2-4			端部に粘土貼付	条痕	暗褐色		
101-2	"	"			斜行文	条痕	暗褐色		
101-3	"	"			爪形文	ナデ	暗茶褐色		口縁端部刻目
101-4	"	"				条痕	暗褐色		
101-5	"	"				条痕 ナデ	暗褐色		
101-6	"	"			沈線文	不明	黄褐色		
101-7	注口土器	"			四線文2条	不明	淡黄灰色		
101-8	壺	"	18.6	12.1	ヘラ描直線文6条	ハケ ヘラミガキ	茶褐色	10	
101-9	"	"	23.6	3.8	ヘラ描直線文3条以上	ナデ	黄褐色	10	端部に羽状文
101-10	"	"	(13.8)	8.3	削出突帶 直線文1条	ヘラミガキ ハケ	淡灰褐色	25	頸部径
101-11	"	"	(26.6)	8.7	貝殻直線文計6条 貝殻羽状文	ヘラミガキ ナデ	淡灰褐色	16	胴部径
101-12	壺用蓋	"	8.8	2.7		ナデ		40	
101-13	壺	"			直線文2条 削出突帶 有輪木葉文	ヘラミガキ ハケ	灰褐色～ 暗褐色		
101-14	"	"			直線文4条 重弧文	ヘラミガキ	淡黄褐色		
101-15	"	"			削出突帶 ヘラ描直線文3条 貝殻羽状文	ヘラミガキ	暗灰色		
101-16	"	"			貼付突帶4条	ナデ ハケ	淡灰褐色		突帶には刻目
101-17	"	"			ヘラ描直線文4条 ヘラ描綾杉文	ナデ?	淡黄灰色		
101-18	"	"			貝殻羽状文 直線文4条	ミガキ	淡黄灰色		短線文
101-19	甕底部	"	(9.6)	5.8		ハケ ナデ	淡黄褐色	底部完存	底部径
102-20	甕用蓋	"	(6.0)	9.5		ハケ 板ナデ	淡黄灰色	40	頂部径
102-21	甕	"	19.8	5.2	直線文5条	ハケ	淡黄褐色	10	
102-22	"	"	26.0	12.8	直線文1条	不明	淡橙灰色	20	
102-23	"	"	34.8	7.5	直線文11条 刺突文	ナデ ハケ	明灰色	15	口縁端面に羽状文
102-24	"	"			直線文7条の間に刺突文 口縁上面に直線文4条		黄褐色		逆L字口縁
102-25	甕底部	"	(8.7)	7.2	内面煤付着	ナデ ハケ	黄灰色	30	底部径
102-26	"	"	(8.4)	6.8	内外面煤付着	ナデ ハケ	黑褐色	底部完存	"
102-27	"	"	(6.4)	5.9		ナデ	黄褐色	底部完存	"
102-28	甕	"			櫛描直線文 三角形刺突文	ナデ ハケ	黑黄褐色		
102-29	広口壺	"	20.0	7.1	頸部に刻目突帶	ナデ ハケ	暗茶褐色	35	
102-30	"	"	20.8	1.7	櫛描絹格子文 同波状文 列点文	ナデ ハケ	黄褐色	10	
102-31	"	"	21.4	6.6	櫛描波状文 指頭圧痕突帶	ヘラミガキ ナデ?	濁灰色		口縁完存
102-32	"	"	(9.6)	8.8	" 刻目突帶3条 列点文	ナデ ハケ	黄灰褐色	15	頸部径
102-33	"	"	26.0	8.3	刻目突帶3条以上 斜直線文 列点文	ナデ?	淡黄褐色	10	
103-34	"	"	32.0	3.4	櫛描斜格子文 列点文 円形浮文 刻目突帶2条	ハケ	淡黃白色	15	蓋受孔有り
103-35	壺	"	23.6	10.4	指頭圧痕突帶	ナデ ハケ	黑褐色	20	
103-36	"	"	(8.8)	9.3	頸部突帶 列点文	ハケ ヘラミガキ	暗橙褐色	20	頸部径
103-37	"	"	(14.8)	7.9	四線文4条以上	ハケ ナデ	淡灰褐色	20	"
103-38	"	"		8.0	四線文5条以上	ナデ?	淡灰褐色	10	

捕団番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	残存率	備 考
103-39	壺底部	"	(8.0)	10.8		ヘラミガキ ハケ	黄褐色	底部完存	底部径
103-40	甕	"	14.8	6.3		ナデ ハケ	淡灰褐色	20	外面煤付着
103-41	"	"	16.2	11.1	擬圓線文？ 列点文	ハケ ナデ ヘラケズリ	明灰色	30	
103-42	"	"	13.4	5.2	凹線文3条	ナデ	明橙褐色	20	
103-43	"	"	(4.6)	6.0	内外面煤付着	ヘラミガキ ヘラケズリ	灰褐色	底部完存	底部径
103-44	壺か鉢	"	(7.2)	2.7	高台状底部	ナデ 指頭圧痕	黄灰色	底部完存	"
103-45	高坏	"	25.8	6.4	四線文1条摩滅	磨滅により不明	黄灰色	20	口縁端部刻目
103-46	台形土器	"	27.0	4.7		ナデ？	黄灰色	10	摩滅
103-47	"	"	11.2	2.9		ナデ？	黄褐色	10	"
104-48	鉢？	"	18.2	5.6	突帶1条	ナデ	淡灰褐色	16	
104-49	無頸鉢	"	17.4	5.8	口縁端部に刻目	ナデ ハケ	明灰色	20	突帶の間をヨコナデ
104-50	"	"	22.2	6.3	四線文5条	ハケ	淡黄灰色	10	
104-51	広口壺	"			刻目突帶2条	ナデ ハケ	明黄褐色		口縁端部刻目
104-52	壺	"	20.0	6.3	四線文2条	ナデ ヘラケズリ	淡褐色	25	
104-53	甕	"	15.9	4.3	四線文4条	ハケ ヘラケズリ	暗灰褐色	25	
104-54	"	"	15.8	4.9	四線文4条 刺突列点文	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	15	ハケ原体で刺突
104-55	高坏	"	(4.6)	7.7	櫛描直線文7条	シボリ痕	明黒褐色	15	脚柱部径
104-56	"	"	(12.2)	5.7	ヘラ描直線文11条以上 四線文3条	ヘラケズリ	淡黄灰色	14	脚端部径
104-57	"	"	(12.4)	10.5	四線文4条	ヘラミガキ ナデ ヘラケズリ	明灰褐色	35	"
104-58	甕	"	19.2	7.9	複合口縁	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	16	
104-59	"	"	12.8	6.5	"	ナデ ヘラケズリ	淡黄灰色	40	
104-60	短頸壺	"	12.0	5.6	頸部に突帶	ヘラミガキ ヘラケズリ	暗黒褐色	20	非在地系か？
104-61	甕	"	18.8	8.9	単純口縁	ナデ ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	10	甕内系
104-62	低脚环	"	(10.3)	5.5		ナデ ヘラケズリ	淡灰白色	30	脚端部径
104-63	小型丸底壺	"	11.0	6.2		ナデ ヘラケズリ	黄褐色	23	
104-64	"	"	6.8	8.2	複合口縁	ナデ ヘラケズリ	黄灰色	50	外面煤付着
104-65	"	"	9.2	4.4		ナデ	黄褐色	40	
104-66	壺	"			半截竹管を上下につないで刺突	ハケ ヘラケズリ	明黒褐色		
104-67	鼓形器台	"	23.8	8.1		ナデ ヘラケズリ	明橙灰色	10	受部径
105-68	直口壺	"	9.9	14.2	丸底	ハケ ヘラケズリ	褐色	85	煤付着
105-69	短頸壺	"	12.2	13.2		ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	40	"
105-70	鉢	"	11.0	8.3	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	淡茶褐色	40	鉢か？
105-71	短頸壺	"	15.4	7.1		ヘラミガキ ハケ ヘラケズリ	黄褐色	20	頸部に爪痕
105-72	甕	"	16.8	9.7	退化した複合口縁	ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色	30	外面煤付着
105-73	"	"	21.6	17.8	"	ハケ ヘラケズリ	淡黄灰色	20	接合真有り
105-74	"	"	14.8	11.3	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	灰褐色	25	熱で一部剥落
105-75	"	"	14.6	10.3	"	ハケ ヘラケズリ	淡褐色	50	
105-76	"	"	13.0	5.4	" 口縁付近赤変	ハケ ヘラケズリ	淡黄橙色	30	外面煤付着
105-77	"	"	18.8	10.7		ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	16	"
105-78	手づくね 土器	"	4.2	2.2		ナデ	黄灰褐色	90	
106-79	小型丸底壺	"	7.6	7.5		ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	ほぼ完形	
106-80	"	"	(6.3)	5.0		ハケ ナデ	淡黄褐色	80	胴部径
106-81	鉢	"	9.0	10.9	口縁部に接合痕	ハケ ヘラケズリ	黄褐色	90	赤色物塗布
106-82	台付鉢？	"	8.8	8.7		ハケ ヘラケズリ	淡黄灰色	20	
106-83	高坏	"	15.8	6.2	稜の下に刺突	ハケ ナデ	淡橙褐色	95	
106-84	"	"	(3.4)	7.8	円形透かし四方	ハケ	淡黄灰色	50	脚柱部径
106-85	"	"	20.6	6.4		ハケ ヘラミガキ	淡灰褐色	28	
106-86	"	"	16.4	7.5		ハケ ヘラミガキ	淡黄褐色	45	
106-87	"	"	16.7	11.9	脚内面シボリ痕	ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色	完形	脚端部径9.4cm
106-88	"	"	17.6	7.0	环裏側に刺突痕	ハケ ナデ	淡灰褐色	40	
106-89	"	"	14.4	5.1		ハケ ナデ	淡灰褐色	环部完存	
106-90	"	"	15.6	8.3		ハケ ヘラミガキ	茶褐色	80	一部赤変
106-91	高坏脚部	"	(2.8)	8.1		ハケ ヘラミガキ ヘラケズリ	明黄褐色	25	脚柱部径
106-92	"	"	(4.0)	8.1	脚裏側に刺突痕	ヘラミガキ ヘラケズリ	明橙褐色	40	"
106-93	"	"	(11.0)	6.4	全体に磨滅	ヘラケズリ？	淡黄褐色	30	脚端部径
106-94	坏	"	13.8	5.7	胴部に沈線1条	ヘラミガキ ヘラケズリ	赤褐色	完形	赤色物塗布
106-95	"	"	13.0	5.4		ハケ ナデ	淡茶褐色	33	
106-96	"	"	13.6	5.5		ヘラケズリ ナデ	淡赤褐色	55	
107-97	坏身	"	12.0	4.6		丁寧なナデ	暗灰褐色	20	
107-98	"	"	11.0	3.0		回転ナデ	青灰色	15	
107-99	龜	"	9.0	2.1	波状文 四線文		暗灰色	20	内面に自然釉
107-100	"	"	(16.8)	9.9		ナデ	淡黄褐色	胴部完存	胴部径 磨滅
107-101	"	"	(13.1)	5.4	波状文	ヘラケズリ ナデ	灰褐色	16	"
107-102	高坏	"	(11.4)	2.0	三角形透かし？	不明	青灰褐色	25	脚端部径
107-103	底部	"	(3.6)	1.8		ナデ？	明黄褐色	50	底部径
107-104	土製支脚	"	(8.5)	5.3	高坏の脚の可能性	ナデ？	淡褐色	脚部完存	脚端部径

挿図番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
107-105	竈	〃				ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色		
107-106	〃	〃				ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色		
107-107	甌の把手	〃				ヘラケズリ	灰褐色		
107-108	円筒埴輪	〃			円形透かし	ハケ	淡黄褐色		
107-109	〃	〃	34.2	8.0		ハケ	暗橙灰色	15	無黒斑
109-1	深鉢	2-5			刺突文	条痕	淡橙褐色		
109-2	壺	〃			ヘラ描直線文2条 羽状文	ナデ	明黄褐色		削出突帯か?
109-3	甌用蓋	〃	(4.8)	5.4		ナデ	淡黄褐色	頂部完存	頂部径
109-4	甌?底部	〃	(7.0)	4.9	高台状の底部	ハケ ナデ	淡黄褐色	30	底部径
109-5	壺	〃		4.2	ヘラ描直線文6条以上	ハケ ナデ	淡灰褐色	11	
109-6	〃	〃	(25.1)	15.9	櫛描直線文	ハケ ヘラミガキ	淡灰色	20	胴部径
109-7	〃	〃	(22.4)	4.2	指頭圧痕文2列	ハケ	淡灰褐色	16	頸部径
109-8	壺胴部	〃	(19.5)	17.9		ハケ ヘラミガキ	灰褐色	底部完存	胴部径
109-9	壺底部	〃	(7.3)	5.5	高台状の底部	ヘラミガキ ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	45	底部径
109-10	甌	〃	24.4	7.2	櫛描直線文 刺突文	ヘラミガキ	淡黄灰色	15	口縁端へラ描 斜格子文
109-11	〃	〃	22.6	9.1	櫛描直線文 同波状 文刺突文 口縁端部に刻目	ハケ ヘラミガキ	淡灰褐色	16	逆L字口縁
109-12	〃	〃	22.4	19.7	櫛描直線文 口縁端部に刻目	ハケ 板ナデ	淡灰褐色	15	外面煤付着 磨滅
109-13	〃	〃	15.8	8.5	胴部に刺突文	ナデ ハケ	暗灰色	15	内面磨滅
109-14	〃	〃	13.0	9.1	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	青灰色	28	
109-15	低脚环	〃	16.0	4.1		ナデ ヘラミガキ	淡黄褐色	60	
109-16	〃	〃	14.2	3.9		ハケ ヘラミガキ	淡黄灰色	50	
109-17	〃	〃	(7.6)	2.8		ヘラミガキ ヘラケズリ	淡灰褐色	脚部完存	脚端部径
110-18	鼓形器台	〃	23.0	9.3	擬凹線文24条	ヘラミガキ ナデ	灰色	25	
110-19	壺?	〃	(7.8)	5.5	二重口縁	ヘラミガキ	淡黄褐色	頸部完存	頸部径
110-20	壺	〃	(14.0)	11.0	丸底	ハケ ヘラケズリ	淡灰黄色	40	胴部径煤付着
110-21	甌底部	〃		8.3	〃 内外煤付着	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	25	底部熱で剥落
110-22	壺底部	〃	(13.0)	5.9		ハケ ヘラケズリ	淡黄灰色	50	底部径
110-23	甌	〃	17.2	15.1	口縁に擬凹線文?	ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色	45	工具痕?
110-24	〃	〃	19.0	14.8	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	30	外面煤付着
110-25	〃	〃	26.6	9.8		ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色	50	
110-26	小型丸底壺	〃	5.8	5.6		ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	30	
110-27	鉢	〃	12.0	5.4		ナデ 放射状ハケ	淡灰色	30	
110-28	蓋環	〃	12.6	6.3		ヘラケズリ	青灰色	完形	
110-29	坏身	〃	10.8	5.2		回転ヘラケズリ	灰褐色	ほぼ完形	
110-30	礪	〃	(2.6)	6.3	わずかに平底		淡灰褐色	70	底部径
110-31	大甌	〃				タタキ カキメ	青灰色		
111-32	甌	〃	18.2	16.4	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色	25	外面煤付着
111-33	〃	〃	16.6	11.8	〃	ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色	90	〃
111-34	〃	〃	16.0	9.0	〃	ハケ ヘラケズリ	青灰褐色	22	〃
111-35	高坏	〃	18.0	9.9	円形透かし三方	放射状や斜格子 ヘラミガキ	淡黄褐色	40	
111-36	〃	〃	15.8	6.0		ハケ ヘラミガキ	淡橙褐色	35	
111-37	〃	〃	15.7	5.8	稜を突帯風に貼り付け	ナデ ハケ 放射状ヘラミガキ	淡黄灰色	坏部ほぼ 完形	
111-38	〃	〃	16.8	6.3		ナデ ハケ ヘラミガキ	淡灰色	25	内外面赤色物 塗布
111-39	〃	〃	17.4	6.2		ナデ ハケ	明黄褐色	50	磨滅著しい
111-40	〃	〃	15.9	5.7		ナデ ハケ	淡灰褐色	60	
111-41	〃	〃	13.9	6.1		ヘラケズリ ハケ	淡灰褐色	ほぼ完形	
111-42	高坏脚部	〃	(4.0)	6.6		ハケ ヘラミガキ シボリ痕	淡黄褐色	15	脚柱部径
111-43	〃	〃	(14.2)	7.1		ヘラミガキ ヘラケズリ	淡黄褐色	脚部ほぼ 完形	
111-44	〃	〃	(13.4)	7.3	円形透かし四方	ヘラミガキ ヘラケズリ	淡茶灰褐色	50	〃
112-1	深鉢	砂3 より上			口縁端部に刻目	条痕ナデ?	暗灰色		
112-2	〃	〃	(7.0)	1.8		不明	暗灰色	底部完存	底部径
112-3	甌	〃			口縁下端に刻目	ナデ ハケ	暗褐色		
112-4	小型甌	〃	11.4	9.7		ハケ ナデ	淡灰色	底部完存	底部径4.4cm
112-5	甌	〃	17.1	5.5	複合口縁	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	10	
112-6	〃	〃	17.0	10.9	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	25	外面煤付着
112-7	〃	〃	19.7	10.2	〃	ハケ ヘラケズリ	淡茶色	15	〃
112-8	高坏	〃	15.2	5.2		ヘラケズリハケ	肌灰色	25	
112-9	高坏脚部	〃	(9.6)	7.0		ヘラミガキナデ ヘラケズリ	淡灰色	85	脚端部径
112-10	坏蓋	〃	14.8	5.1		ヘラケズリ ナデ	青灰色	完形	内面煤付着
112-11	礪	〃	10.2	4.4		ナデ ハケ	暗青灰色	20	胴部径 自然釉
112-12	円筒埴輪	〃				ナデ ハケ	淡橙灰色		
112-13	〃	〃				ハケ ナデ	黄褐色		
112-14	〃	〃				ハケ	青灰色		
114-1	深鉢	砂層3			刻目突帶	条痕	暗褐色		
114-2	〃	〃			口縁端部に刻目	条痕	暗灰褐色		補修孔

挿図番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
114-3	"	"			押引文	ナデ	暗褐色		
114-4	"	"			爪形文3列	条痕？ ナデ	青灰褐色		口縁端部刻目
114-5	"	"				繩紋？ ナデ	暗褐色		
114-6	"	"			刻目持つ波状突帯	繩紋 ナデ？	赤褐色		内面煤付着
114-7	壺	"	15.4	10.0	口頸部境に段	ヘラミガキ ナデ	淡黄灰色	10	
114-8	"	"			削出突帯 ヘラ描直線文2条 重弧文	ナデ？	淡灰褐色		
114-9	"	"			貝殻直線文3条 貝殻羽状文 同重弧文	ナデ？	淡黄灰色		
114-10	"	"			ヘラ描直線文3条以上 貝殻羽状文 同縦区画 同山形文	ナデ？	淡灰色		
114-11	"	"			ヘラ描直線文1条 斜行文	ナデ？	淡灰褐色		
114-12	壺底部	"	(6.7)	7.1		ヘラミガキ ナデ	淡灰黄色	底部完存	底部径
114-13	甕底部	"	(9.0)	7.1	内面煤付着	ハケ ナデ	橙灰色	40	"
114-14	甕	"	23.0	8.4	ヘラ描直線文6条の間に列点文	ナデ ハケ	灰褐色	13	
114-15	広口壺	"	31.0	3.0	櫛描斜格子文 刺突文	ナデ？	明黄褐色	20	
114-16	"	"	33.0	8.2	櫛描斜格子文 円形浮文	ナデ？	淡黄灰色	10	
114-17	壺底部	"	(6.0)	3.1	平底	ヘラミガキ ハケ	淡灰色	50	底部径
115-18	甕	"	19.8	12.7		ハケ	淡茶褐色	20	煤厚く付着
115-19	"	"	31.6	12.6		ハケ ヘラミガキ	明黄灰色	10	一部煤付着
115-20	高坏	"	26.8	4.7	凹線文坏部外面3条 口縁端部4条	磨滅により不明	淡黄灰色	10	
115-21	高坏脚部	"	(11.2)	6.0		ヘラミガキ ナデ	明黄灰色	26	脚端部径
115-22	甕	"	28.4	6.7	凹線文3条 指頭圧痕突帯 円形浮文	ハケ？	明黄灰色	15	
115-23	壺	"			竹管文	ハケ ヘラケズリ	淡黄褐色		
115-24	甕	"	19.8	9.9	単純口縁	タタキ後ハケ	淡茶褐色	15	畿内系 煤付着
115-25	壺	"	14.2	7.4	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	青灰色	口縁完存	
115-26	鼓形器台	"	21.6	6.7		ナデ	淡茶褐色	18	
115-27	小型丸底壺	"	(7.5)	4.3		ナデ ハケ	淡灰褐色	脣部完存	脣部径
115-28	"	"	7.6	7.0		ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	ほぼ完存	
115-29	"	"	(7.4)	4.9	平底	ナデ	灰色	脣部完存	脣部径
116-30	甕	"	16.4	10.7	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	黄色	32	口縁煤付着
116-31	"	"	17.6	10.3	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	20	
116-32	"	"	13.6	12.6	"	ハケ ヘラケズリ	暗灰色	20	
116-33	"	"	15.4	7.7	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	口縁完存	
116-34	"	"	15.6	7.6	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	20	外面煤付着
116-35	"	"	18.0	4.9	"	ナデ ヘラケズリ	灰褐色	87	
116-36	"	"	16.6	5.2	"	ヘラケズリ ハケ ヘラミガキ	淡黄褐色	10	外面煤付着
116-37	"	"	15.6	5.0	"	ハケ？	明黄褐色	25	全体に磨滅
116-38	高坏	"	24.6	14.3		ヘラケズリ ハケ	淡黄灰色	20	脚端径14.0cm
116-39	"	"	18.0	7.3		ヘラミガキ	淡灰色	50	
116-40	"	"	14.3	5.5		ナデ	淡褐灰色	65	外面磨滅
116-41	"	"	13.5	5.0		ハケ ヘラミガキ	灰褐色	20	
116-42	"	"	(3.0)	7.2		ヘラミガキ ナデ	明黄灰色	25	脚柱部径
116-43	"	"	(10.8)	6.3	円形透かし三方	ヘラミガキ？ ヘラケズリ	淡橙褐色	95	脚端部径
116-44	"	"	(13.1)	7.9	脚内面シボリ痕	ナデ ハケ	淡灰褐色	ほぼ完存	"
116-45	"	"	(10.6)	8.6	脚内面黒色	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	20	"
117-46	"	"	14.8	10.0		ナデ ヘラケズリ	灰褐色	70	脚端部径8.8cm
117-47	椀	"	12.1	5.5		ナデ ヘラケズリ	淡橙褐色	ほぼ完形	赤色物塗布
117-48	甕	"	(12.4)	6.9	波状文	回転ヘラケズリ	青灰褐色	33	脣部径 自然釉
117-49	"	"	(12.4)	7.4	接合痕有り	ナデ	暗灰褐色	20	" "
117-50	有蓋高坏	"	10.6	6.7	長方形透かし三方	回転ヘラケズリ	灰褐色	ほぼ完存	内面黒色物付着
117-51	坏蓋	"	12.4	5.1		回転ヘラケズリ	青灰褐色	12	
117-52	"	"	13.2	4.2	天井部にタタキ	平行タタキ	灰色	80	
117-53	坏身	"	13.0	3.9		回転ヘラケズリ	青灰褐色	12	
117-54	"	"	13.4	3.2		回転ヘラケズリ	暗灰色	14	
117-55	甕	"	21.6	11.8		カキメ タタキ	青灰色	10	
117-56	竈？	"				ハケ ヘラケズリ	黄灰色		内面煤付着
118-57	円筒埴輪	"	24.0	14.2	円形透かし	ハケ	赤茶色	15	無黒斑
118-58	"	"				ナデ ハケ	赤茶褐色		
118-59	"	"				ナデ	赤茶褐色		
118-60	"	"				ハケ	明茶褐色		
119-1	甕	砂3と 礫3間	18.0	11.4	複合口縁 刺突による羽状文	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	50	外面煤付着
119-2	"	"	19.0	12.5	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	灰褐色	10	磨滅著しい
119-3	"	"	16.0	6.8	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	30	
119-4	"	"	17.0	11.0	"	ハケ ヘラケズリ	明黄褐色	20	
119-5	高坏	"	17.6	6.5		ヘラケズリ ハケ	明黄灰色	45	外面乾燥時の ヒビワレ有り
121-1	深鉢	砂礫3			口縁肥厚帯に列点文	ナデ	暗褐色		
121-2	"	"			沈線文2条 渦文	不明	暗灰色		

捲回番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
121-3	"	"			刺突文	条痕?	灰褐色		竹管状工具?
121-4	"	"			口縁端部に刻目	条痕 ナデ	茶褐色		
121-5	"	"			刻目突帯文	条痕 ナデ	暗灰褐色		
121-6	"	"				条痕 ナデ	暗褐色		
121-7	壺	"	12.6	5.4	ヘラ描直線文5条	不明	灰褐色	13	
121-8	"	"	(17.4)	10.6	ヘラ描直線文7条以上	ナデ ヘラミガキ	淡白灰色	15	頸部径
121-9	"	"		9.6	ヘラ描直線文8条以上 刺突文	ナデ?	淡黄褐色	15	全体に磨滅
121-10	"	"		10.4	直線文6条が2單位 ヘラ描直線文2条 刺突文	ヘラミガキ ナデ	暗黄灰色	20	直線文は貝殻の可能性
121-11	"	"			ヘラ描羽状文 区画 ヘラ描直線文4条	丁寧なナデ	淡灰褐色		
121-12	"	"			貝殻羽状文計4条 ヘラ描直線文	ナデ	淡灰色		削出突帶
121-13	甕	"	16.8	9.2		板ナデ ハケ	淡黄褐色	15	
121-14	"	"	18.8	9.3	ヘラ描直線文4条	ハケ ナデ	灰褐色	22	磨滅著しい
121-15	"	"	28.0	12.4	口縁端部に刻目	ハケ ナデ	灰褐色	13	
121-16	"	"			ヘラ描直線文2条の間に刺突文	ナデ ハケ	黒褐色		
122-17	壺	"	9.9 21.5 6.8	32.1 (胴部径) (底部径)	櫛描直線文 三角形 刺突文 ヘラ描斜格子文 刺突文	ヘラミガキ	淡灰褐色	完形	胴部黒斑有り
122-18	"	"			ヘラ描綾衫文	ヘラケズリ	淡灰褐色		
122-19	"	"	15.0	6.3	口縁下に突帯3条	ナデ?	黄灰褐色	15	磨滅著しい
122-20	広口壺	"	(14.0)	9.8	頸部に突帯3条	ハケ ナデ	淡灰褐色	24	頸部径
122-21	壺	"			刻目突帯1条 櫛描直線文 同波状文	ナデ	淡灰色		
122-22	広口壺	"	29.0	2.5	斜格子文 円形浮文 櫛描波状文 指頭圧痕文2条	ナデ	灰色	10	
122-23	壺底部	"	(12.0)	7.7		ヘラミガキ ナデ	灰褐色	20	底部径
122-24	甕	"			口縁端刻目 櫛描波状文 同直線文	ハケ ナデ	淡褐色		
122-25	"	"	19.8	10.1	爪による刺突文	ナデ ヘラケズリ	灰褐色	10	
122-26	"	"	19.5	8.4		ナデ ハケ	灰黄褐色	10	内外面煤付着
122-27	甕底部	"	(5.2)	6.4	底径	ヘラミガキ ナデ	暗灰色	底部完存	内面煤付着
122-28	"	"	(6.7)	4.3	内面から穿孔	ヘラミガキ ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	底部完存	" 底部径
122-29	"	"	5.8	2.7		ヘラミガキ ナデ	灰褐色	50	底部径上げ底
123-30	無頸鉢	"	19.6	8.6	刻目突帯3条	ハケ	暗褐色	10	全体に磨滅
123-31	"	"	21.8	9.0	刺突文	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	20	"
123-32	"	"	23.8	4.9	凹線文口縁端4条 胴部6条以上	ナデ	黄灰色	10	口縁端部刻目
123-33	高坏	"			凹線文脚部に3条 2条の凹線文の間に刺突文	ヘラミガキ ヘラケズリ	明黄褐色	20	
123-34	高坏脚部	"	(5.0)	7.1		ヘラミガキ ナデ	淡灰色	15	脚柱部径
123-35	高坏脚部	"	(10.2)	4.6	凹線文計6条	ヘラケズリ ナデ	暗灰褐色	27	脚端部径
123-36	高坏	"			凹線文3条以上 竹管文	ヘラミガキ ナデ ハケ	暗褐色		外面煤付着 壺の可能性
123-37	甕	"	25.6	5.2	凹線文5条	ヘラケズリ ヘラミガキ	明黄灰色	28	刷毛目圧痕
123-38	"	"	28.8	5.5	凹線文5条	ナデ ヘラケズリ	淡灰白色	20	
123-39	"	"	18.8	4.7	擬凹線文6条	ナデ ヘラケズリ	濁灰褐色	20	原体は木口?
123-40	"	"	16.0	6.3	凹線文3条 刺突文	ナデ ハケ ヘラケズリ	明黒灰色	20	外面煤付着
123-41	"	"	16.1	3.8	凹線文5条	ハケ ヘラケズリ	暗茶褐色	20	"
123-42	"	"	15.8	8.9	凹線文3条 刺突文	ナデ ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	20	刺突はハケ原体
123-43	精製鉢	"	(17.2)	2.7	爪形文 擬凹線文4条	ヘラケズリ	淡黄褐色	10	外面赤色物塗布 脊部径
123-44	壺	"	18.8	9.3	複合口縁	ナデ	褐色	15	
123-45	"	"	(13.2)	5.0	頸部に刺突文	ナデ	青灰褐色	20	頸部径
123-46	直口壺	"	13.2	6.1		ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	42	
123-47	壺	"	11.2	3.3			淡黃灰色	20	
123-48	鉢	"	8.3	5.8	丸底	ナデ	灰色	70	
123-49	小型丸底壺	"	9.5	5.9		ナデ ヘラケズリ	灰白色	20	
124-50	甕	"	14.4	8.0	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	白灰色	15	肩部に直線文
124-51	"	"	13.8	10.0	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	15	内外面煤付着
124-52	"	"	15.8	5.8	"	ナデ ヘラケズリ	淡黄褐色	23	
124-53	"	"	16.8	6.0	"	ナデ ヘラケズリ	淡茶灰色	25	外面煤付着
124-54	"	"	14.9	13.9	"	ハケ ヘラケズリ	濁灰褐色	25	"
124-55	"	"	14.5	2.5	単純口縁	ナデ	灰褐色	33	"
124-56	"	"	13.8	9.2	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	15	磨滅著しい
124-57	"	"	(20.2)	11.9	複合口縁	ヘラケズリ ヘラミガキ	淡灰色	25	頸部径 磨滅
124-58	甕底部	"		6.5	丸底	ハケ ヘラケズリ	暗褐色	底部完存	内外面煤付着
124-59	甕	"				タタキ ヘラケズリ	淡灰色		やや焼き甘い 畿内系甕

挿図番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調整	色調	残存率	備考
124-60	"	"	14.0	18.1		タタキ ハケ	淡灰色	15	"
125-61	鼓形器台	"	18.0	7.7		ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	25	
125-62	"	"	18.8	5.8		ナデ ヘラミガキ	淡褐色	15	
125-63	"	"	17.6	5.7	やや摩滅	ナデ ヘラケズリ	漏灰褐色	25	筒部径9.4cm
125-64	低脚环	"	(11.7)	4.4		ナデ ヘラケズリ	淡黃灰色	脚部完存	脚端部径
125-65	"	"	(7.5)	2.6		ナデ ヘラミガキ	淡灰褐色	ほぼ完存	"
125-66	高环	"	17.4	5.2		ナデ ヘラミガキ	明黃褐色	35	
125-67	"	"	17.5	3.5	环底放射状ミガキ	ナデ ヘラミガキ	淡灰色	15	
125-68	高环脚部	"	(2.6)	7.2		ヘラミガキ ハケ ヘラケズリ	淡灰色	ほぼ完存	脚柱部径
125-69	"	"	(16.8)	5.0	円形透かし三方	ハケ ヘラミガキ ヘラケズリ	淡黃灰色	64	脚端部径 長脚の高环
125-70	"	"	(10.8)	6.7		ナデ ヘラケズリ	淡灰色	30	脚端部径
125-71	"	"	(5.4)	4.6		ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	75	"
125-72	短頸壺	"	9.0	10.3	肩部文様は刺突?	ハケ ヘラケズリ	茶褐色	45	煤付着
125-73	無頸鉢	"	19.4	9.2		ナデ ヘラケズリ	明黃褐色	30	底部径12.2cm
125-74	手づくね土器	"	4.0	6.5	高环脚部の可能性	ナデ	青灰色	90	
126-1	鉢	砂礫4				条痕	黄灰色		全体に磨滅
126-2	短頸壺	"	16.0	10.0	口縁端部に刻目	ナデ ハケ	明黃灰色	33	ヘラ状工具
126-3	高环	"	19.8	6.7	口縁端部に刻目	ヘラケズリ ハケ	暗緑灰色	14	磨滅 紐孔有り
126-4	甕	"	20.2	11.4	凹線文3条 貝殻刺突文	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	25	外面煤付着
126-5	"	"	(14.4)	3.2		ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	18	頸部径
126-6	"	"	18.0	14.4	複合口縁肩部に直線文と波状文	ナデ ハケ ヘラケズリ	灰褐色	25	外面煤付着
126-7	高环脚部	"	(4.0)	4.7		ヘラケズリ	淡灰褐色	50	脚柱部径 磨滅

*口径は復元、器高は現存高を含む。口径欄の()の数字は、備考欄等に示した「胴部径」「底部径」等を口径欄に記したことを示す。

表9 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土石器観察表

捕団番号	種別	層位	長さ(cm)	厚さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	備考
129-1	局部磨製石斧	礫2-5	17.3	2.2	6.6	348.2	珪質泥岩か同 頁岩	貝化石あり
129-2	石斧転用砥石	礫2-3	13.4	3.4	4.1	247.3	泥岩	転用か?
129-3	柱状石斧	礫2	7.7	1.1	4.2	48.5	頁岩	
129-4	砥石	礫2-5	7.5	5.6	6.6	287.7	凝灰岩	六面
129-5	大型剥片	礫5	9.6	1.9	11.4	222.4	砂質片岩	
129-6	大型穂摘具?	礫2-4	8.8	1.3	9.9	85.4	石英安山岩	
129-7	剥片	礫2-4	9.6	0.4	3.8	22.1	頁岩	
130-8	石核	礫2-4	7.2	5.1	6.0	247.1	珪乳石	
130-9	〃	礫3	5.9	4.8	8.2	161.7	珪乳石	
131-10	銅劍形石劍	礫3	6.5	0.7	3.5	23.7	泥質片岩	三郡變成岩
131-11	磨製石劍片	砂層3	8.2	0.9	3.3	33.2	砂岩	
131-12	磨製穂摘具	礫3~4	6.2	1.1	4.3	46.7	頁岩	両面から穿孔
131-13	石錘	礫3	10.5		径3.4	123.9	砂岩か?	九州形
131-14	板状未製品	礫2-4	7.1	0.9	6.5	60.0	凝灰質泥岩	
131-15	スクレーパー	礫2-4	4.3	1.2	7.1	30.1	黒曜石	
131-16	紡錘車	砂層3	径3.3	1.1		17.7	凝灰岩	
131-17	〃	礫3		0.6		9.3	珪質泥岩か同 砂岩	
132-18	スクレーパー	礫3	3.4	1.6	5.7	22.4	玉髓	
132-19	スクレーパー	礫2-5	2.6	1.1	2.8	8.5	黒曜石	
132-20	剥片	礫3	4.3	2.0	6.5	43.8	玉髓	ポイント茎部?
132-21	剥片	礫3	3.7	0.7	4.0	14.0	玉髓	
132-22	石匙未製品?	礫2-4	4.4	0.9	7.5	29.0	珪質泥岩か同 頁岩	
132-23	砥石	砂層3より上の礫	6.8	1.9	4.8	97.0	凝灰質泥岩	六面
133-24	石鏃	南端砂礫	2.2	0.4	1.7	0.7	黒曜石	
133-25	〃	礫1	3.3	0.4	1.9	1.7	〃	
133-26	〃	礫2-4	2.4	0.3	1.5	0.9	〃	
133-27	〃	礫2-4	2.6	0.4	2.1	2.1	〃	
133-28	石鏃未製品	礫1	2.0	0.4	1.8	1.1	〃	
133-29	石鏃	礫2-4	1.9	0.3	1.1	0.5	〃	
133-30	石鏃未製品	礫2-4	2.8	0.4	2.1	2.3	〃	
133-31	〃	砂層3より上の礫	2.2	0.3	1.8	1.3	〃	
133-32	〃	礫3	2.0	0.3	1.5	0.9	玉髓	
133-33	縦長剥片	礫3	4.9	0.8	2.1	6.3	黒曜石	自然面有り
133-34	剥片	砂層3	2.5	1.1	3.5	9.7	〃	ポイント茎部?
133-35	磨製石鏃	礫2-5	4.2	0.3	1.3	2.4	珪質泥岩か同 頁岩	

表10 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土木製品観察表

捕団番号	種別	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ/太さ(cm)	形態・手法の特徴	木取	備考
134-1	直柄横鋏	砂層2	15.8	33.0	1.9	六本箒	不明	柄孔は方形
134-2	鋏?	砂層2	25.3	10.5	2.2		不明	組合鋏か?
134-3	棒状木製品	砂礫3	44.3	1.8	1.2	先端尖る	柾目	硬質
134-4	しゃもじ状木製品	南端砂礫層	22.0	5.9	1.3		不明	
135-5	舟形木製品	砂層2	56.8	11.2	6.2		芯持	チシャノキ
136-6	馬鍬の取手	砂層2	57.4		径5.0		芯持	腐食激しい
		(角材部)		3.5	2.5		柾目	
137-7	抉入り棒	砂礫2-4	139.3		径6.6		芯持	フナクイムシ痕?
137-8	〃	砂層2	83.3		径7.1		芯持	フナクイムシ痕?

表11 西川津遺跡Ⅲ区右岸出土杭観察表

杭番号	長さ(cm)	幅/径(cm)	形態の特徴	刃部最大幅(cm)	木取	備考
138-2	325.0	24.0	先端を尖らせ3~5cm幅で加工。一部に長い加工を行う。一部黒変	3~5?	芯持	やや軟質。橋脚として使用?
139-6	105.8	7.5	両端に抉り。先端を尖らせ二方より加工。抉りは鉈で加工?	3.0	芯持	硬質。転用か?
139-7	91.5	3.7	三方より1~2回の加工。一部屈曲。	1.9	芯持	先端欠損。ヤブツバキ
139-8	90.6	7.0	二方から削るように加工し、反対側は短く加工。	3.6	芯持	先端欠損。軟質。1'類に似る。
139-9	46.1	4.5	先端を尖らせ三方より加工。	3.2	芯持	モッコク。
139-10	14.4	3.5	一方より削るように数回加工。	3.2	芯持	軟質。屈曲大。グミ属
139-11	61.5	5.4	切断面をわずかに残し先端を尖らせ三方より加工。加工の及ばない部分有り。	2.8	芯持	硬質。腐食著しい。
139-12	21.1	3.8	切断面を残し二方より加工。屈曲有り。	2.7	芯持	軟質。5類に似る。
140-13	161.3	8.7	先端を尖らせ三方より連続して加工。	3.5	芯持	硬質。フナクイムシ痕?
141-14	68.8	12.5	先端を尖らせ六方より連続して加工。	3.1	板目	スギ。転用か?
141-15	100.3	5.9	先端を尖らせ四方より加工。	3.9	芯持	スギ。フナクイムシ痕?
141-16	46.5	6.7	四方より加工。先端は二方より加工。	2.7	板目	クリ。加工痕不明瞭
141-17	120.3	5.2	相対する二方に長く加工。先端は一方のみ加工。	不明	板目	スギ。フナクイムシ痕?
141-18	35.6	4.4	先端を尖らせ三方より加工。	不明	柾目	スギ。
142-19	84.5	4.0	切断面を残し、三方から加工。加工の及ばない部分有り。	2.4	芯持	ハイノキ属ハイノキ節。二カ所で屈曲。
142-20	76.1	7.4	先端を尖らせ、三方から加工。三分の一程は未加工。	3.7	芯持	軟質。樹皮残す。
142-21	74.8	4.9	先端を尖らせ、四方から剥ぐように加工。二カ所で屈曲。	3.4	芯持	スダジイ。先端付近は屈曲し原形を留めない。
142-22	51.2	3.6	三方から先端付近にのみ加工。	2.9	板目	スギ。面取りして加工。
142-23	68.9	3.1	一方から段をつけて加工。軟質。	2.5	芯持	コナラ属コナラ亜属クヌギ節。
142-24	77.8	7.8	先端を尖らせ、三方から加工。加工の及ばない部分有り。節を落とす。	3.1	芯持	マツ属複維管束亜属。フナクイムシ痕?
143-25	83.5	9.0	先端を尖らせ、四方から加工。抉りを持つ。	5.4	柾目	環孔材。一部火を受ける。厚さ8.7cm
143-26	77.0	5.1	ほど孔と溝を有す。先端は鈍く尖る。四隅を加工し、断面は八角形。	不明	板目	硬質。腐食進む。フナクイムシ痕?
143-27	64.0	9.1	短辺を連続的に加工。先端は鈍く尖る。抉りを有す。抉り付近は異なる工具?	3.1	板目	スダジイ。厚さ5.1cm フナクイムシ痕?
143-28	69.0	8.1	頂部に方形の孔。先端を尖らせ、短辺側を加工。	3.8	柾目	スギ。加工痕は明瞭。
144-29	104.7	9.8	一方から長く連続して、短辺側は先端にのみ加工を行う。	6.0	板目	スギ。直角に加工した段有り。厚さ9.5cm
144-30	97.6	8.1	先端付近に抉り。先端を尖らせ、四方から加工。	4.5	柾目	スギ。フナクイムシ痕? 厚さ5.5cm
145-31	85.7	7.3	先端を尖らせ短辺を加工し、先端は別の二方から加工を行う。	2.7	柾目	スギ。厚さ4.5cm
145-32	86.7	7.8	先端を尖らせ、短辺側を加工。長辺側に角材の加工痕。	2.2	柾目	スギ。厚さ3.0cm 角材の刃部幅3.5cm
145-33	91.9	7.8	先端を尖らせ、短辺側と長辺側の一部を加工。	3.4	板目	スギ。厚さ3.7cm
145-34	98.2	10.2	壇上に盛り上がる部分有り。先端を尖らせ、短辺側に加工を行う。	2.5	柾目	スギ。厚さ2.5cm フナクイムシ痕?

※長さ・幅・厚さ・太さ・最大径はいずれも現状での数字である。

表12 西川津遺跡Ⅲ区右岸土製品観察表

捕団番号	種別	層位	長さ／径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
146-1	土製円板	礫 2 — 4	4.3~4.8	0.4	9.9	
146-2	"	礫 2 — 5	5.2~5.4	0.8	30.8	両面から穿孔
146-3	"	礫 2 — 5	3.2~3.4	0.6	7.8	
146-4	"	礫 2 — 4	4.2~4.4	0.6	15.7	ハケ
146-5	"	礫 2 — 5	2.9~3.1	0.5	5.7	
146-6	"	砂 層 3	5.2~5.3	0.5	17.2	両面から穿孔
146-7	"	礫 3	2.7~2.9	0.5	7.2	裏にハケ
146-8	"	礫 3	4.2~4.4	2.1	52.2	
146-9	不明土製品	礫 3	5.5	2.2	30.2	突帯有り



西川津遺跡第2次調査作業風景（東から：1981年撮影）

第5章 西川津遺跡V区-Aの調査

第1節 調査の経過

西川津遺跡V区は、嵩見橋～海崎橋の間の河川敷である。このうち、左岸を下流側（V区-A）と上流側（V区-B）の二つに分けて調査を行った。この章では下流側から述べる。

V区-Aは、上流側に長辺を持つ長台形をしており、長さ39m、長辺15m、短辺4mを測る（第147図）。調査は平成9年6月上旬から開始し、7月上旬に終了した。平成8年度の試掘調査（第7章付編1）によって無遺物層と考えられた標高約0m付近まで重機により掘削し、それ以降は人力で泥層を掘削した。調査区は、任意に二分して上流側から掘り始めた。標高-0.8mより青灰色砂礫層1が、さらに-0.9m付近からは砂礫層2が分布しているのが確認された。砂礫層は共に現在の川側である西側ほど厚く堆積しており、土手側である東側では砂礫層が認められない部分もあった。砂礫層からは縄紋時代前期の土器が僅かに出土した。

第2節 土層の堆積（第148～152図）

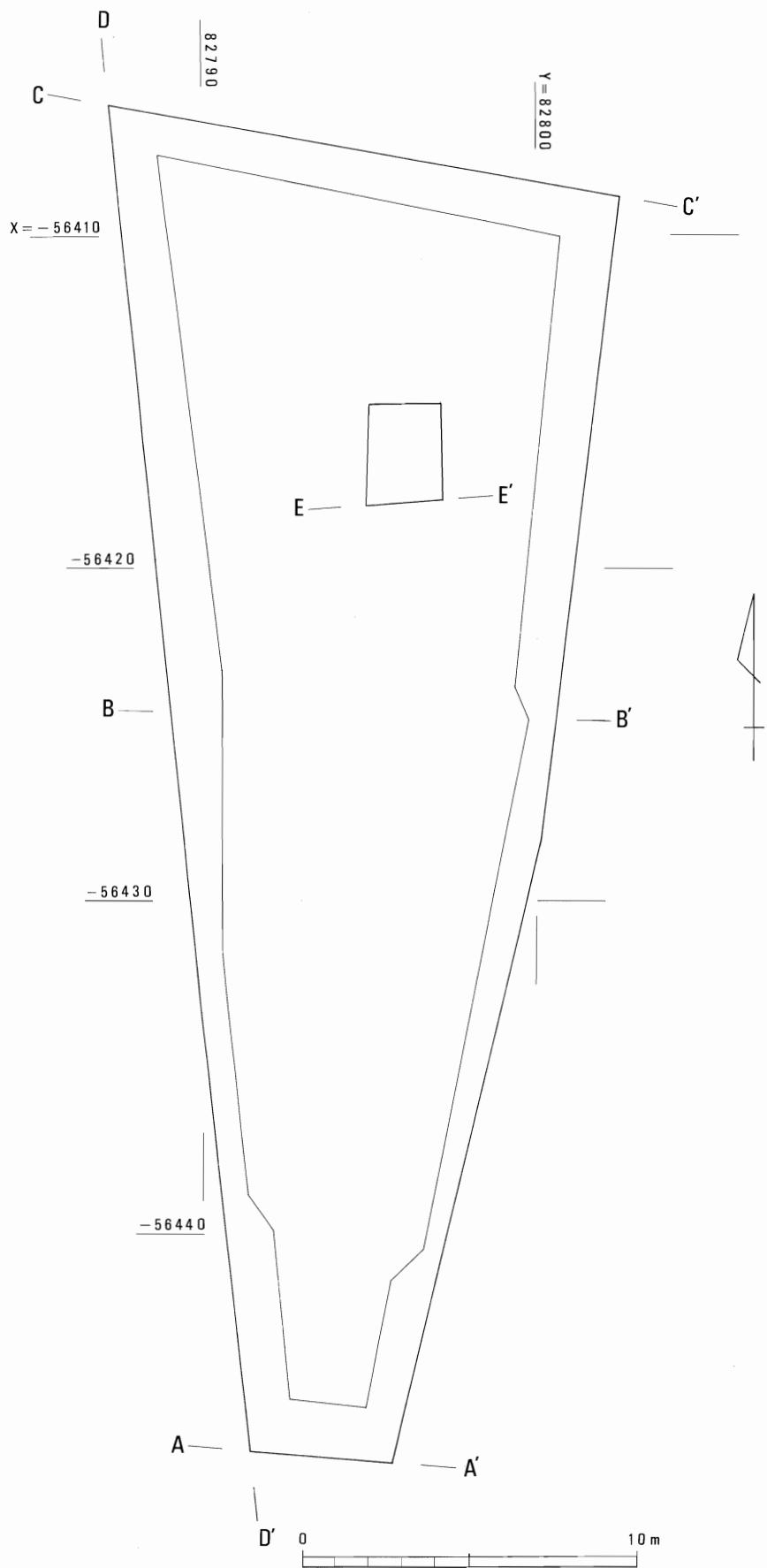
現在の朝酌川が流れている側である西壁（第152図、D-D'）では、現在の地表面は標高1.1m～1.2mであるが、これは平成4年及び7年に重機により河原を掘削した結果である。この地表面の下位約2m、標高-0.8m付近に青灰色砂礫層1（sg1）が堆積していた（第153図①）。

砂礫層1は全体にやや東落ちの傾斜を示す。砂礫層1から出土した遺物は、僅かに黒曜石の剥片が数点であった。砂礫層1の下位の標高-0.9m～-1.2mには青灰色砂礫層2（sg2）が堆積していた（第153図②）。

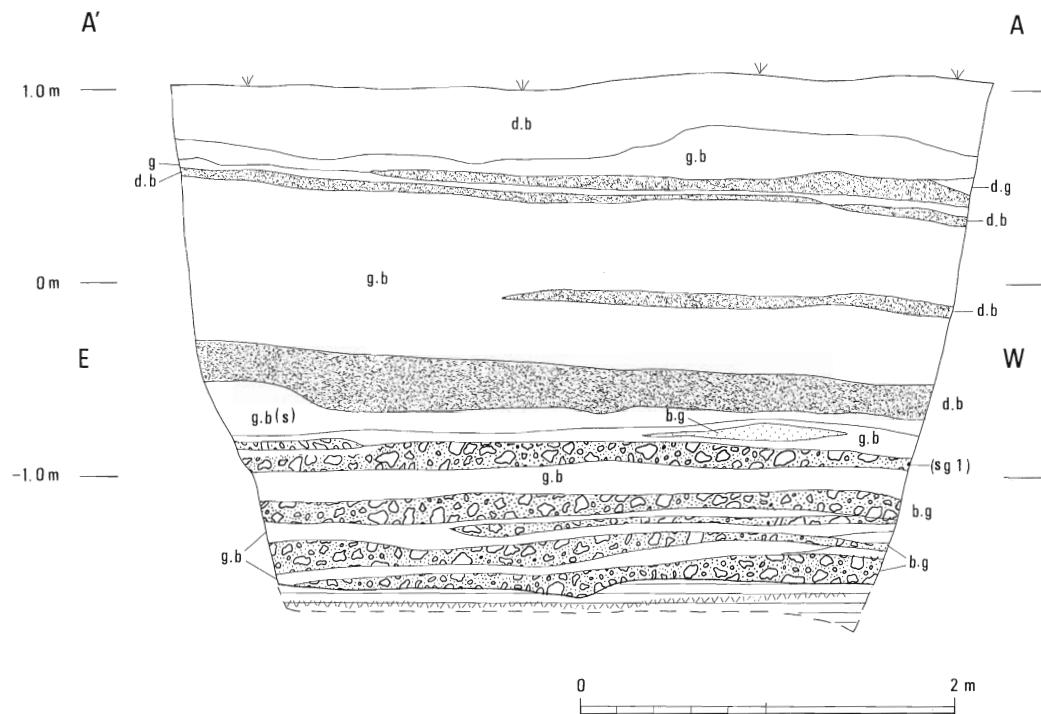
砂礫層2もやや東落ちの傾斜を示し、細礫や中礫までを含んでいた。砂礫層2は調査区の南隅で褐色泥層を間に薄く挟んで堆積していた（第152図、D'付近）。砂礫層2の下位には泥層や暗褐色有機質層がそれぞれ約0.1mほどの厚さで堆積しており、その下には明暗縞状の平行葉理が発達した青灰色泥層が分布する（第153図③）。この泥層にアカホヤ火山灰層が挟まれる。これはV区-Bでも同様である。アカホヤ火山灰層は層厚約1cmのほぼ水平な地層として、標高-1.6mに分布する（第148～152図）。

青灰色泥層を一部掘り下げると（第149図、E-E'）、2枚の暗褐色有機質層の下には暗灰色泥層が標高-1.8m付近から堆積しており、さらにその下には非常に粘質の強い灰色泥層が堆積している。暗灰色泥層は下位ほど色が明るくなる。

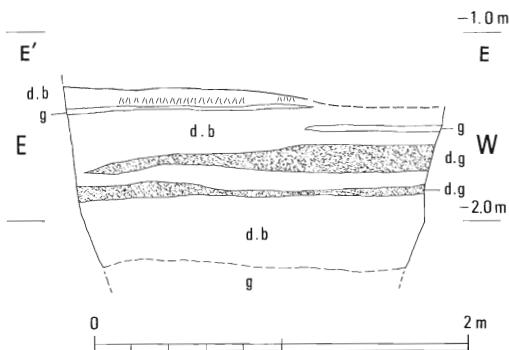
なお、¹⁴C分析を行ったが、その結果は表土直下の暗褐色泥層が4650±50BP（Beta-109335）、標高0.4～0.6mの暗灰色砂質泥層が5970±100BP（Beta-109412）、青灰色泥層の下の灰色泥層が6870±80BP（Beta-109413）という結果を得た（第8章）。しかし、4650±50BPの値には花粉分析の結果から疑問が生じた（第10章）。



第147図 西川津遺跡V区-A調査区位置図 (S=1/200)



第148図 V区-A南壁 (A-A') 土層堆積図 ($S=1/40$)

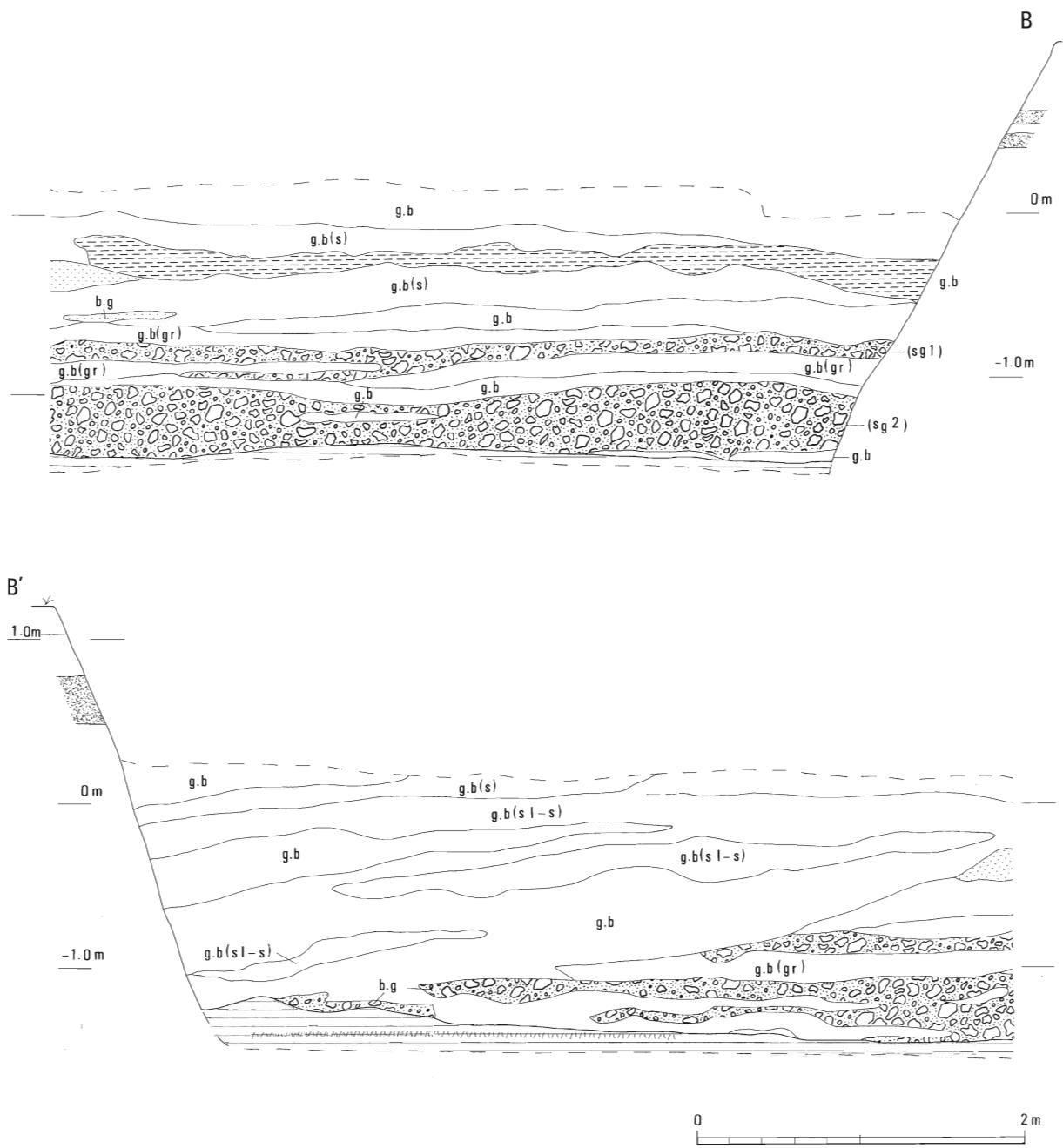


第149図 V区-A南壁 (E-E') 土層堆積図 ($S=1/40$)

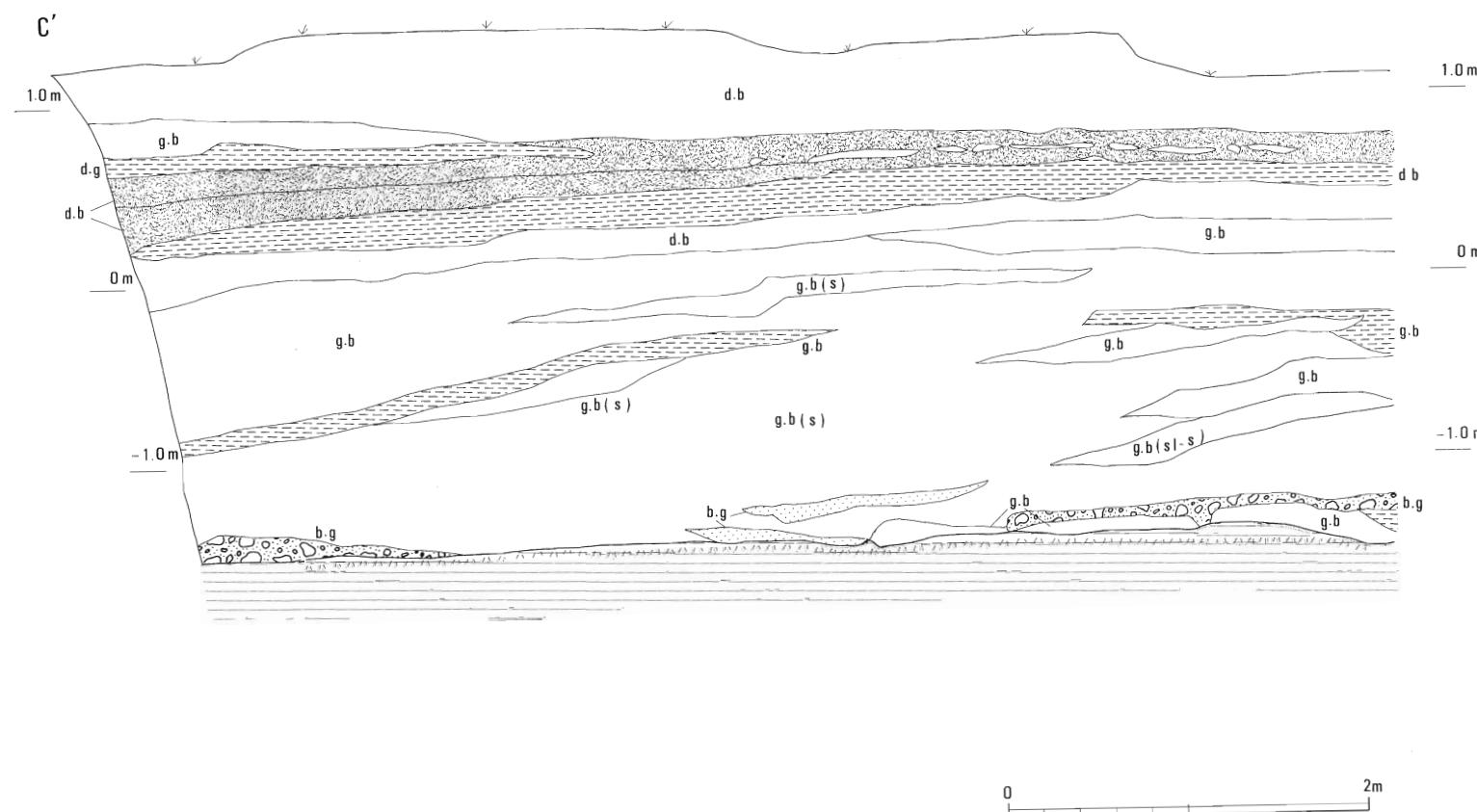
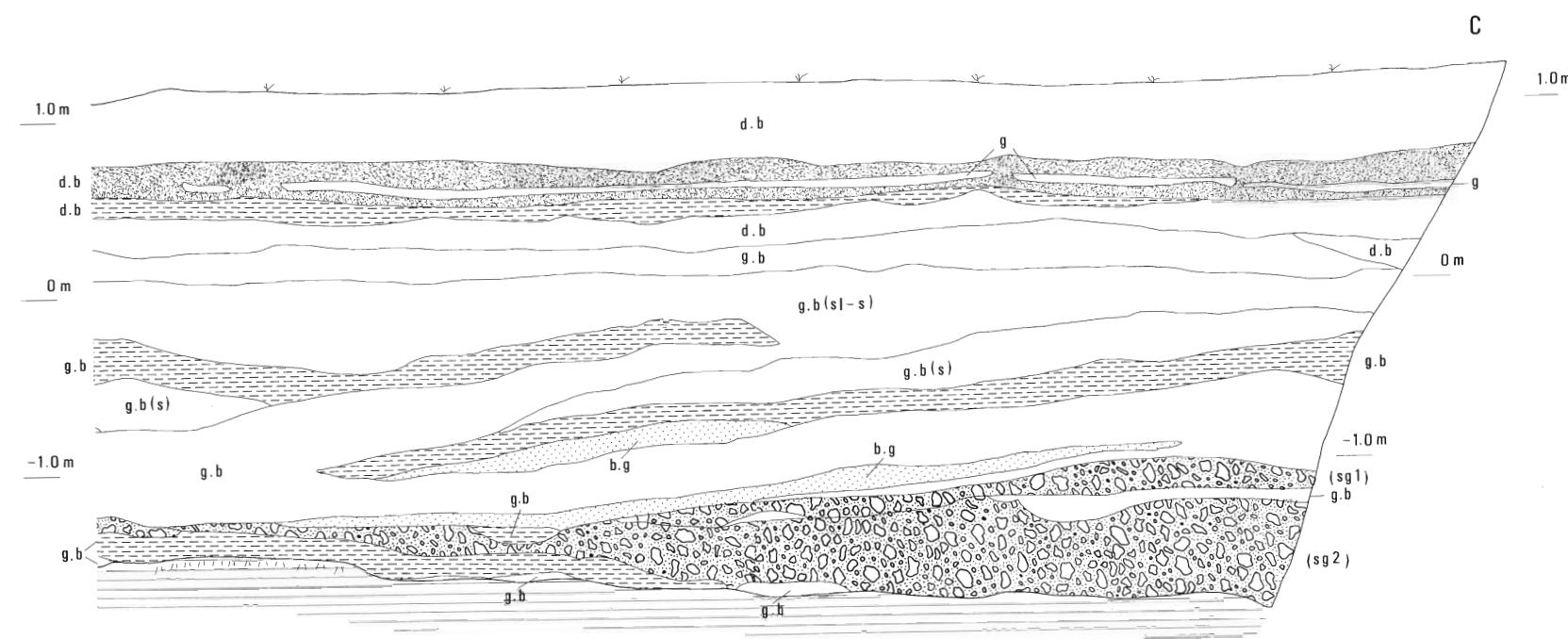
第3節 出土遺物 (第154~156図)

〈1〉 繩紋土器 (第154図)

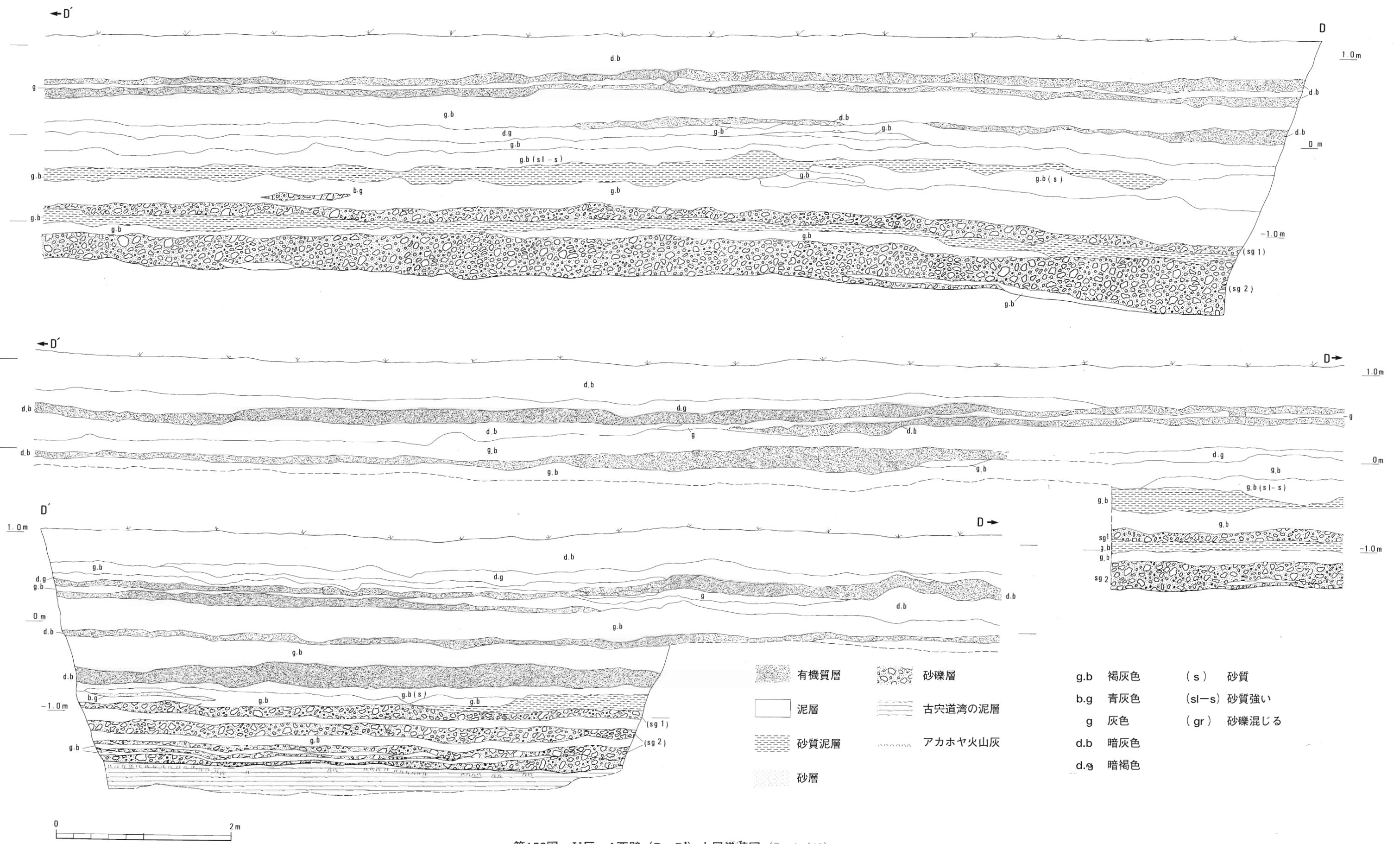
出土した繩紋土器は、いずれも深鉢で、小片である。文様には、押引文 (1・2)、刺突文 (3)、突帶文 (5) が見られる。1は口縁部付近で、口縁部に粘土を貼り付けた文様帶を持ち、そこ上方は斜めの、下方は横方向に押引を行う。口縁部の文様帶には縦方向の隆帶を持つ。3は半截竹管により口縁部付近に刺突文を5列以上施す。4は口縁部に接して粘土を貼り付けていたことがうかがわれる。5は内外に粗い条痕調整を施し、刻み目を持つ隆帶が2条施される。下の方の隆帶付近から屈曲が変化する。6は外面にLRの繩紋を施す。7以降は、いずれも内外面に条痕調整を施す。7は口縁部が大きく開き、口縁部を薄く肥厚させる。その上には文様は施されない。9は条痕調整が施されるが、横方向の文様の下に鋸歯状の文様が施されている。



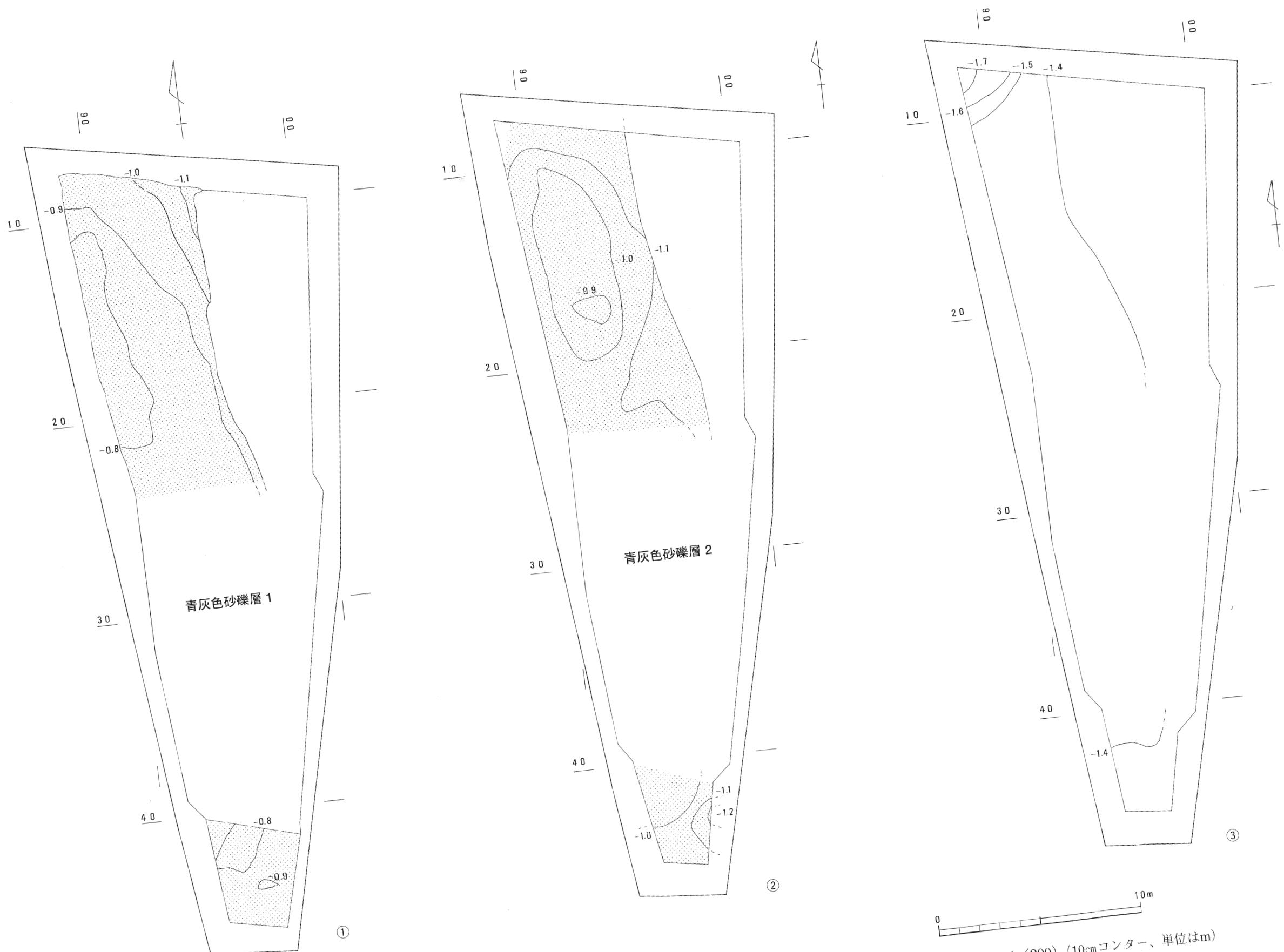
第150図 V区-A中央壁 (B-B') 土層堆積図 (S=1/40)



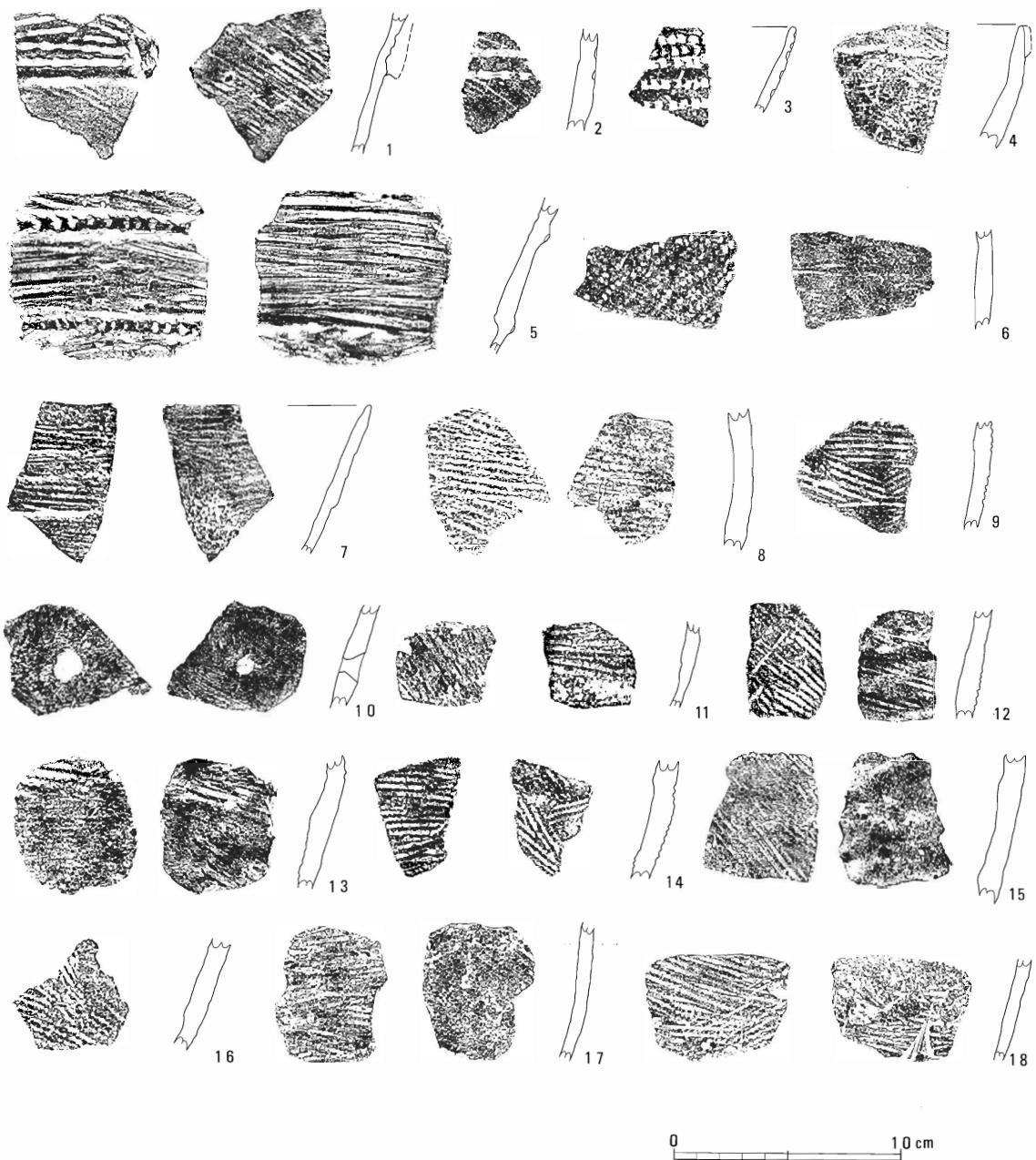
第151図 V区-A北壁 (C-C') 土層堆積図 (S=1/40)



第152図 V区-A西壁 (D-D') 土層堆積図 (S=1/40)



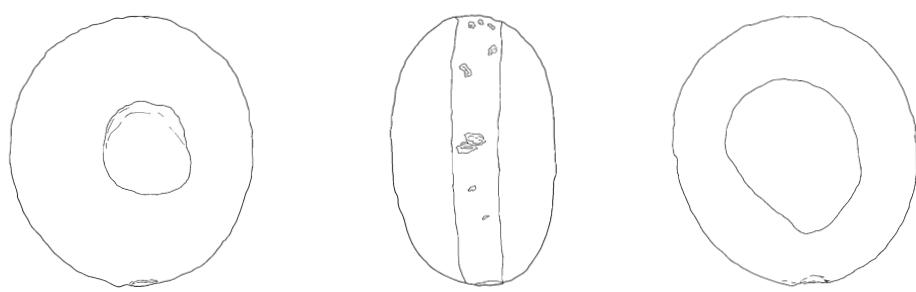
第153図 V区-A青灰色砂礫層 1 (①)、同 2 (②)、青灰色泥層 (古宍道湾の泥層) (③) 測量図 ($S=1/200$) (10cmコンター、単位はm)



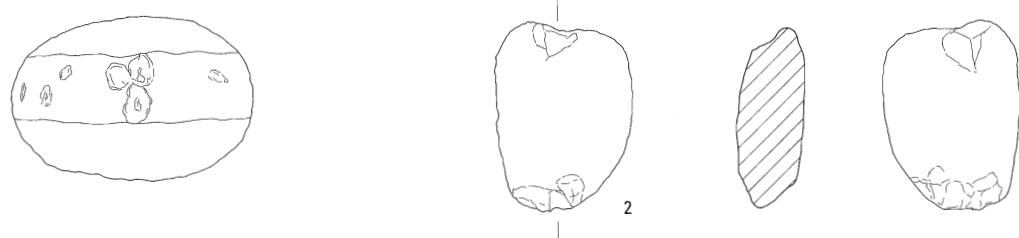
第154図 V区-A出土土器実測図 (S=1/3)

〈2〉 石 器 (第155・156図)

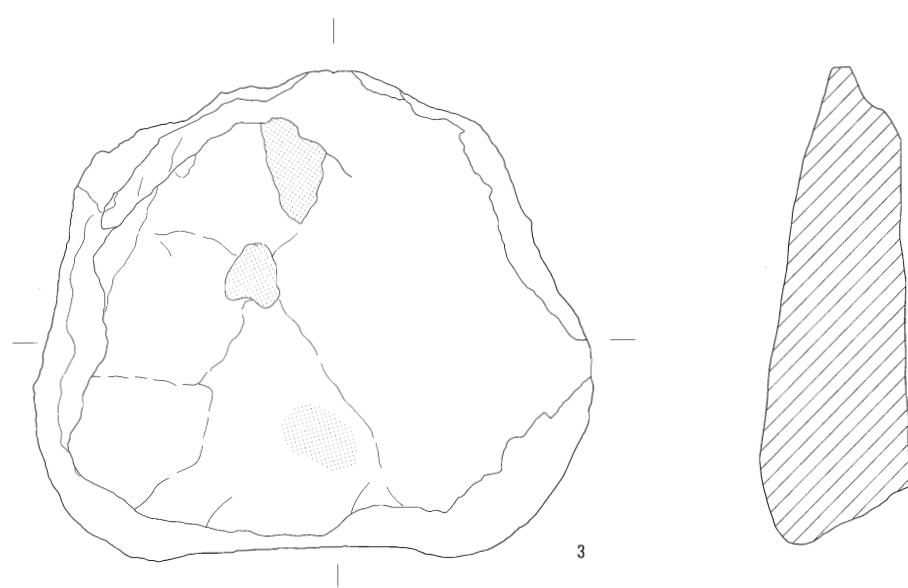
出土した石器には、石鎌・敲石・磨石・石錐がある。石鎌（第156図4）は、黒曜石製の凹基式で長さ2.3cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.7gを測る。敲石（第155図1）は、側面に敲打痕が所々見られる。磨石（第155図3）は、使用痕が三ヶ所に見られるが、その範囲は小さい。石錐（第155図2）は長軸方向の両端をわずかに打ち欠いただけである。第156図5、6は黒曜石の剥片である。6は断面台形を呈し、裏側にはネガティブな打痕を持つ。



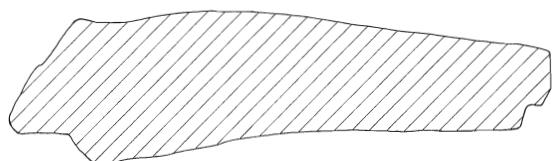
1



2



3



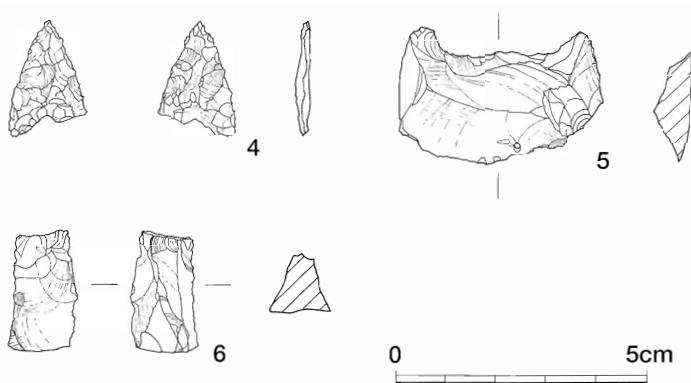
0 15cm

第155図 V区-A出土石器実測図(1) (S=1/3)

第4節 小 結

V区-Aの調査では、縄紋時代前期の砂礫層を確認したが、出土した遺物はわずかな量の縄紋土器と石器であった。

- ① 調査区から出土した縄紋土器のうち、4は長山式、1、5は西川津式、3は羽島下層II式に比定される。そのうち1は西川津式A3類、5は西川津式B2類である。7は西川津式B類のヴァリエーションと考えられる。他の条痕調整の土器は、前期初頭のアカホヤ火山灰降下直後の前期の土器に伴うものであると考えられる。
- ② V区-Aでは、確認した砂礫層より上位では泥層や砂質泥層などがほぼ水平に約2m余り堆積しており、削り込みを持つような河道の跡は確認できなかった。また、調査区からは縄紋時代より後の時代の遺物は出土しなかった。この調査結果と後述する花粉分析の結果（第10章）から、V区-Aは縄紋時代前期の古宇道湾の一部であったと考えられる。



第156図 V区-A出土石器実測図(2) (S=2/3)

表13 西川津遺跡V区-A出土土器観察表

挿図番号	器種	層位	形態・文様の特徴	調整	色調	備考
154-1	深鉢	砂礫層2	押引文・縦の区画	条痕	暗褐色	
154-2	"	"	竹管状工具による押引文	条痕／ナデ	灰茶褐色	
154-3	"	"	5列以上の刺突文	ナデ	暗褐色	
154-4	"	"	口縁部に肥厚帯の剥離痕	条痕？／ナデ？	灰褐色	
154-5	"	褐色砂質泥層	2条の刻目を持つ隆帯	条痕	暗褐色	
154-6	"	砂礫層2		縄紋／条痕後ナデ	暗茶褐色	煤付着
154-7	"	"		条痕	暗褐色	
154-8	"	褐色泥層		条痕	暗灰褐色	煤付着
154-9	"	砂礫層2	条痕による文様	ナデ？	暗灰色	
154-10	"	"		条痕	暗褐色	補修孔 煤付着
154-11	"	"		条痕	灰茶褐色	煤付着
154-12	"	"		条痕／条痕・ナデ	暗褐色	
154-13	"	褐色泥層		条痕・ナデ／条痕	灰黄褐色	土器片錐 煤付着
154-14	"	砂礫層2		条痕	暗茶褐色	
154-15	"	"		条痕／ナデ	暗灰褐色	
154-16	"	"		条痕／ナデ	暗褐色	
154-17	"	褐色砂質泥層		条痕	茶褐色	
154-18	"	褐色泥層		条痕	暗茶褐色	土器片錐？

表14 西川津遺跡V区-A出土石器観察表

挿図番号	種別	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
155-1	敲石	砂礫層2	10.9	9.8	6.5	1033.7	側面に敲打痕
155-2	石錘	褐色泥層	8.6	5.7	2.7	114.5	
155-3	石皿	砂礫層2	19.7	22.5	6.0	3200.0	使用痕
156-4	石鏃	砂礫層2	2.3	1.5	0.3	0.7	黒曜石
156-5	剥片	砂礫層1	2.8	4.1	0.7	7.1	黒曜石
156-6	剥片	砂礫層1	2.4	1.2	1.1	4.4	黒曜石

第6章 西川津遺跡V区-Bの調査

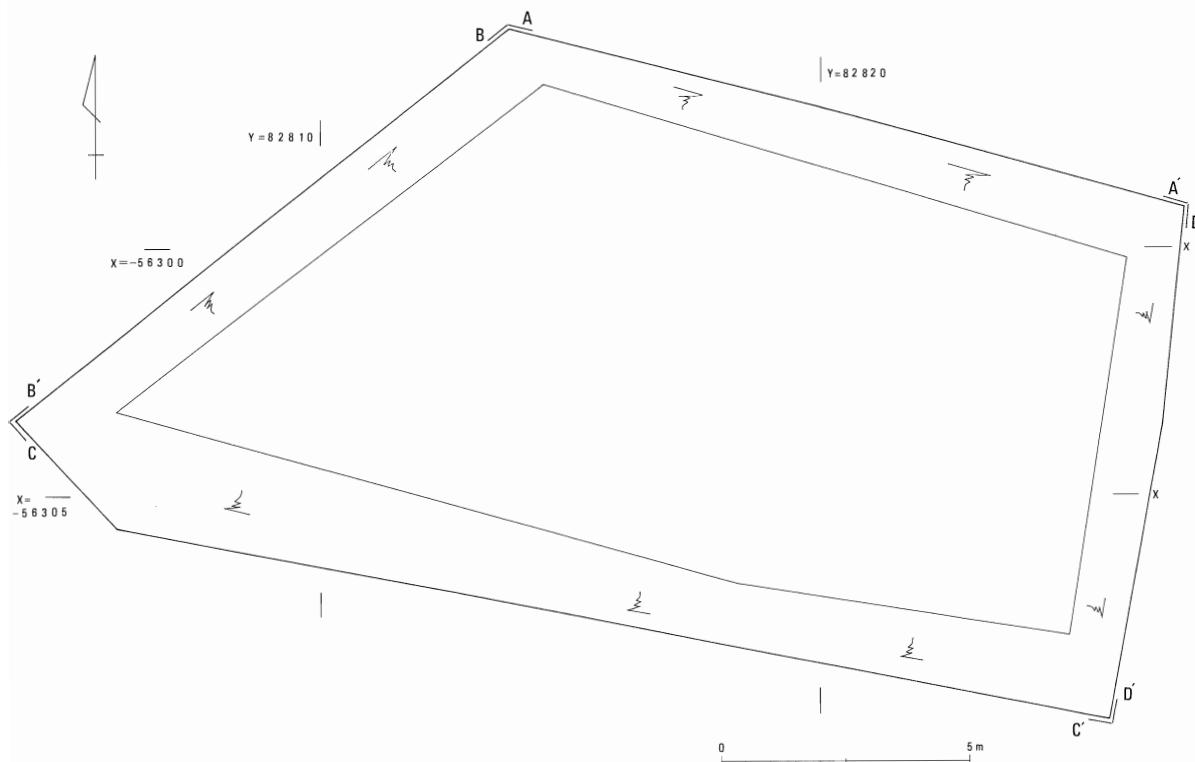
第1節 調査の経過

V区-Bは西川津遺跡V区の上流側、海崎橋の下流約100mに位置する。調査区は下流側に長辺を持つ台形を呈し、長さ11m、長辺23m、短辺14mを測る(第157図)。この調査区のすぐ北側は、1983~85年の調査で大量の遺物が出土した海崎地区である。調査は平成9年11月初めから開始した。標高約0m付近まで機械により掘削した後、人力で掘削を行った。砂礫層からは大量の土器や石器、木製品が出土し、その中には銅鐸もあった。また、拳大から人頭大の石が、砂礫層中や砂礫層の上面から多数検出された。また、一抱えもあるような石を組み合わせ、その間に杭を打ち込んだ石組みの遺構も検出された。標高-1.3~1.4mまで砂礫層を掘削し、12月下旬に調査を終了した。

第2節 土層の堆積(第158~160図)

V区-Bの遺物包含層は、大きく分けると東へ傾斜する層(砂礫層5~7)と、南へ傾斜する層(砂層1、2、砂礫層1~3)、そしてそれよりも下層にある層(砂礫層8、9)の3つに分けることが出来る。なお、砂層2の標高0mより上位では有機質層と砂層や泥層が確認されたが、土層の記録ができなかった。

青灰色砂礫層4(sg4)は北壁ではその下位の青灰色砂礫層5(sg5)と分けて記載したが、東壁



第157図 西川津遺跡V区-B調査区位置図 (S=1/150)

(D-D'、第160図)では両者の分層は不明瞭であった。砂礫層5は青灰色泥層を削り込んでおり、そのため青灰色泥層は西に傾斜している。

V区-Bの遺物包含層は、次のようにまとめることができた。

古墳後期の堆積層	古墳中期後葉の堆積層	古墳前～中期の堆積層	弥生後期の堆積層	弥生中期の堆積層
青灰色砂層1	青灰色砂礫層2	青灰色砂礫層4	青灰色砂礫層5	青灰色砂礫層9
砂層2	3	5 上位	6	
青灰色砂礫層1			7	
			8	

なお、青灰色泥層中の標高-1.2～-1.3mからはアカホヤ火山灰層が挟まれているのが確認された。アカホヤ火山灰層の標高は、Ⅲ区右岸に比べて約0.3m上位にあり、古宍道湾の湾底が緩やかな傾斜を持つことを示している。なお、海崎地区の調査では、V区-Bの東壁の延長上である調査区の壁面の端において標高-1.4m付近からアカホヤ火山灰層が確認されている。

第3節 検出された遺構(第161～170図)

V区-Bでは、調査区の東側を中心に拳大から人頭大の円礫や亜角礫が多数検出された。これらの石は調査区の西側でも検出されたが、西側の石が青灰色泥層の上面にあるなど、砂礫層によって動いたものであるのに対して、東側の石は砂礫層の上や泥層の上にあるものが殆どであり、人が持ち込んだものと考えた。後述するように伴う層を確認できた石がある。

また、調査区の中央やや北寄りのところでは、一抱えもあるような石を数個段状に置き、その間に杭を打ち込んだ遺構(以下「石組遺構」と呼称する)が検出された。

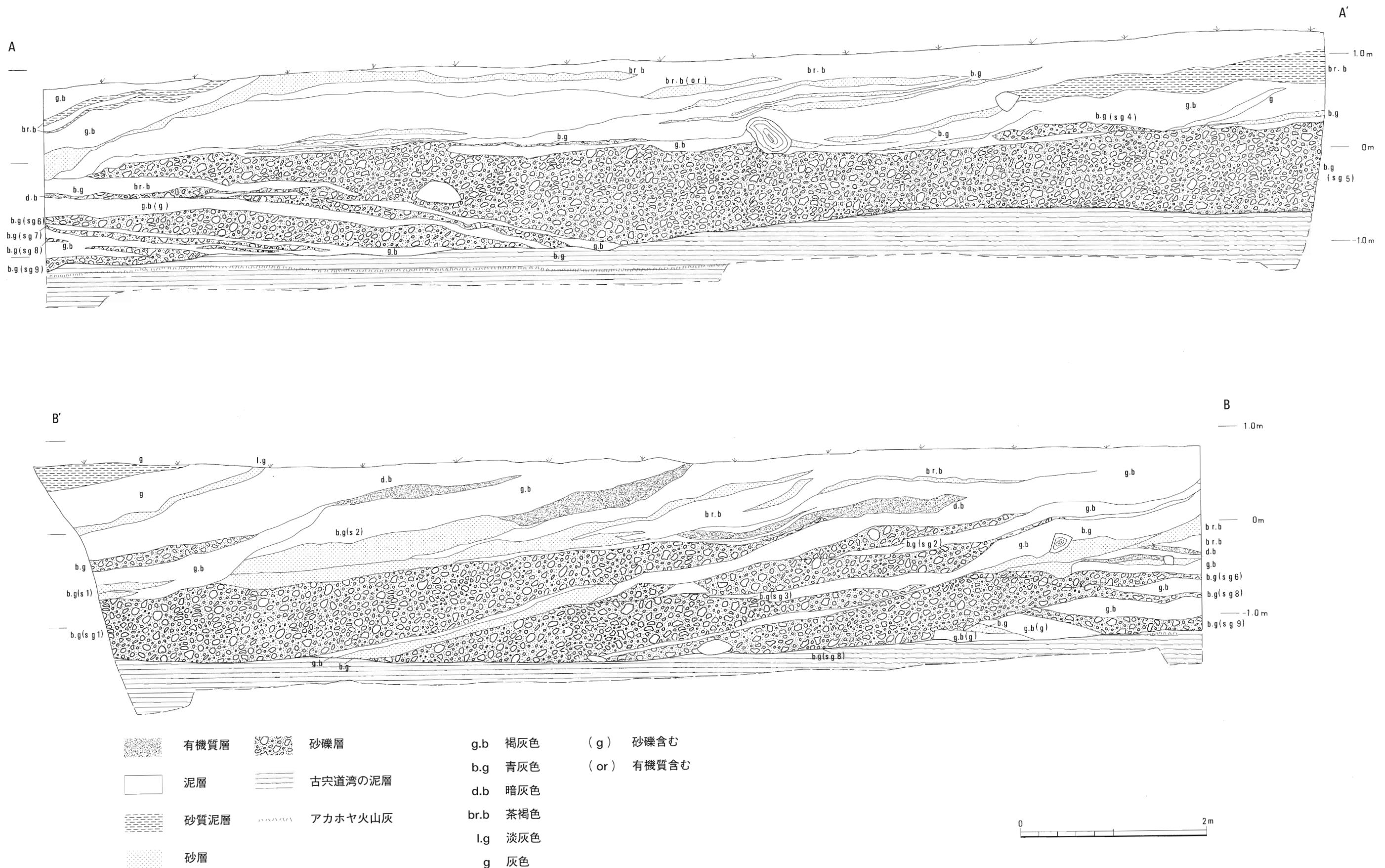
〈1〉 石組遺構(第163～165図)

石組遺構は一抱えもあるやや横長の円礫や亜角礫を横方向には3～4個、縦には3～4段置いて2m弱の範囲で組まれている。石組遺構は最も高いところでは砂礫層5中の標高0m付近から検出された。石の配置から、少なくとも二つの段階を経て構築されていることがわかったので、上層・下層に分けて述べる。

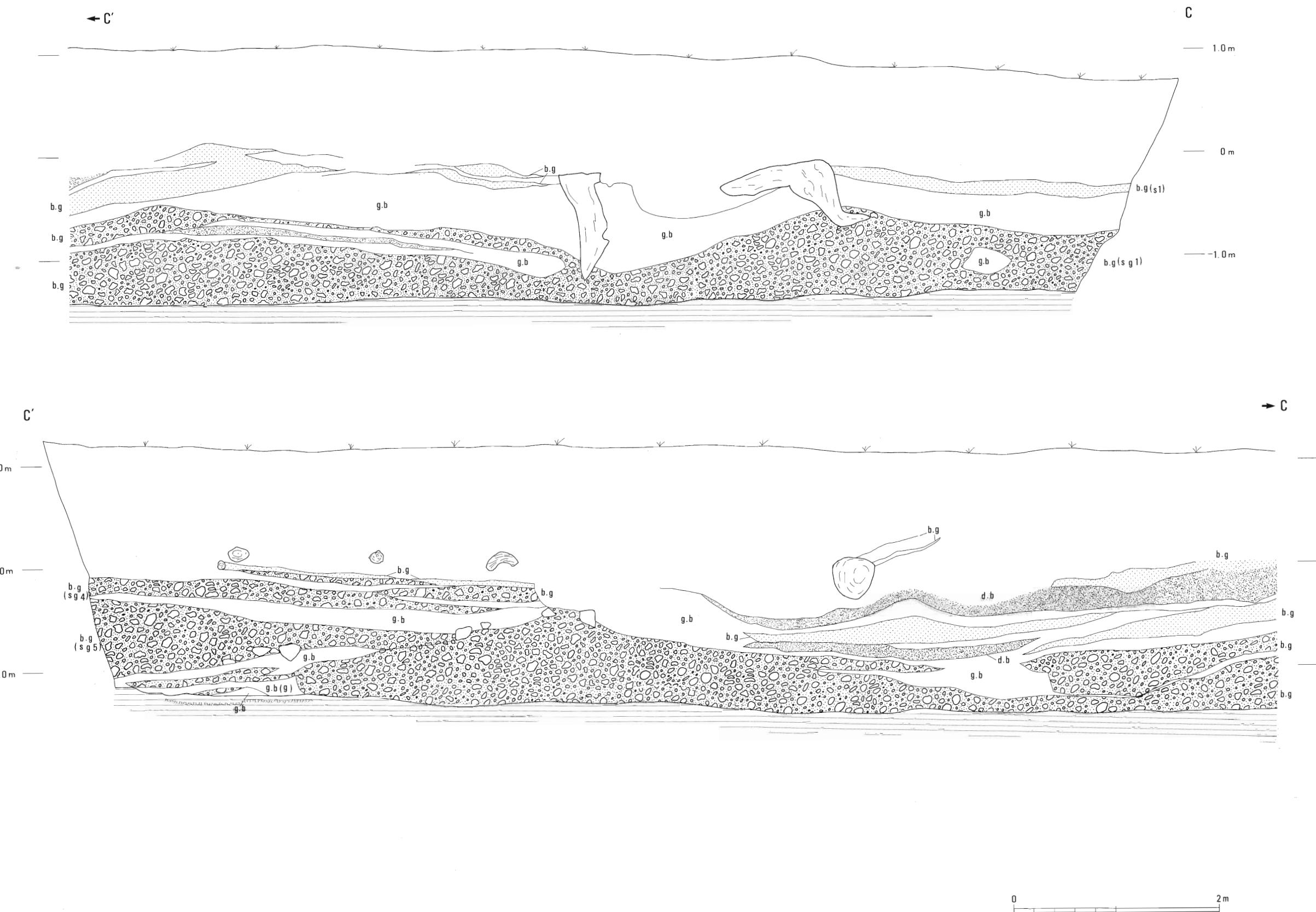
上層(第163図)では、下層にある2段の石に加えて横には2～4個、縦には2～3段に石を組み最上段の石の横には数個の拳大の石を置く。また、南側には5本の杭があり、石組の周辺にも数本の杭がある。これらの杭は元の状態を示していたが、石の間にあった流木は砂礫層の流れのためか、殆どが傾いたり横になって検出された。これらの流木の殆どが先端を加工して尖らせていて、流木ではなく石組に伴う杭と考えた。上層から掘り下げると、杭は石組に直交して傾いているものが多くなる。

下層(第165図)は最も高いところで標高-0.2m付近で、上層と同様に砂礫層5の西側の傾きに平行するように、横に3個、縦に2段に石を組み、周辺に数個の拳大の石を不規則に置く。上層の最上段の石の付近の杭の一部は下層に伴う可能性がある。

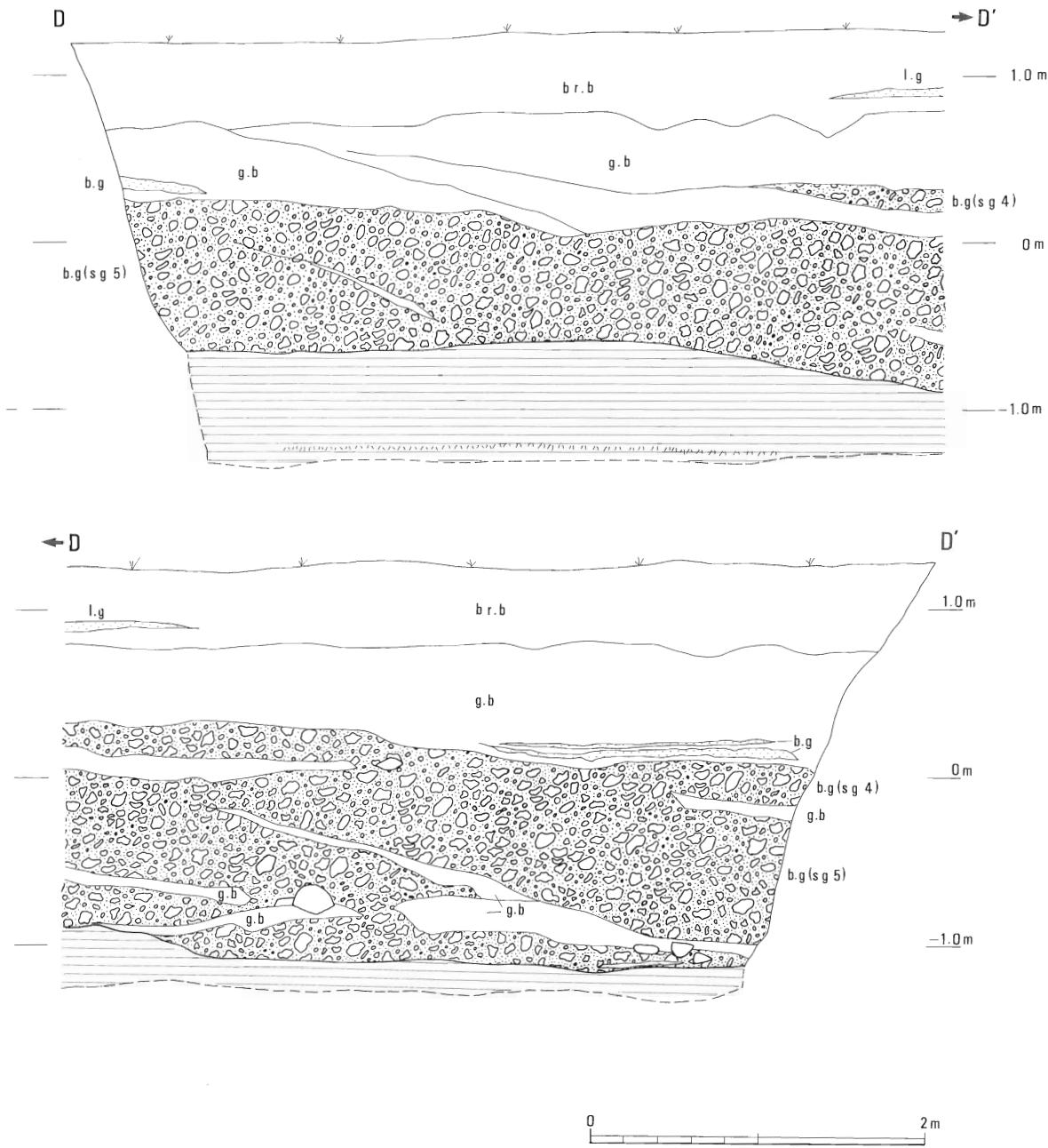
石組遺構の上層では、石組遺構に直交して杭が打たれていた可能性を指摘したが、後述するよう



第158図 V区-B北壁 (A-A')、西壁 (B-B') 土層堆積図 (S=1/40)



第159図 V区-B南壁 (C-C') 土層堆積図 (S=1/40)

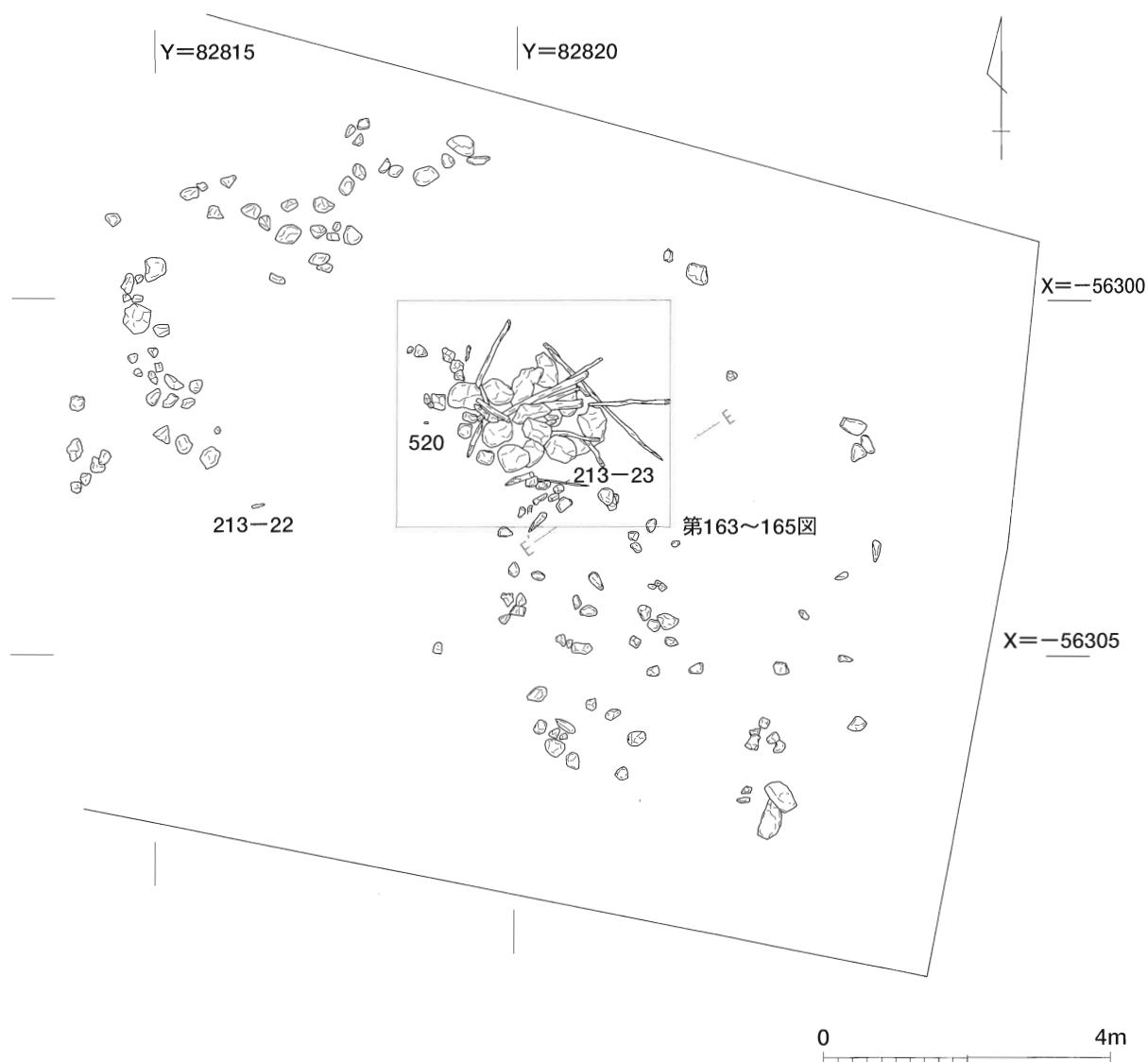


第160図 V区-B東壁 (D-D') 土層堆積図 (S=1/40)

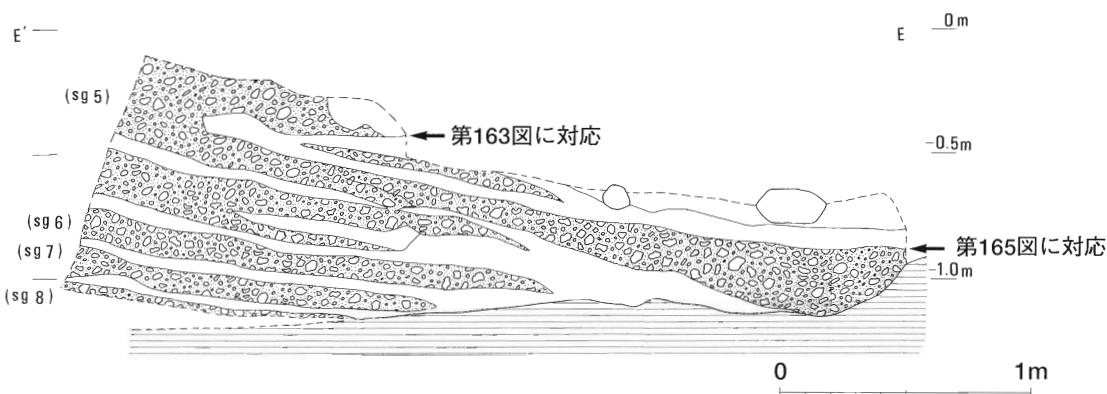
に石組遺構は砂礫層5の縁に位置するので、砂礫層5に直交するように杭が打たれていたことになる。石組遺構の時期は後述する砂礫層5から、弥生時代後葉を下限とすると考えられるが、上層に関しては古墳時代前期を下限とする可能性を持つ。また、性格として、水辺に人が下りていくための施設や一時的な船着場の可能性を考えたい。なお、朝酌川遺跡群では、原の前遺跡において古墳時代初頭の船着場の石組護岸遺構が検出されている⁽¹⁾。

〈2〉 水 辺 の 石 (第166~169図)

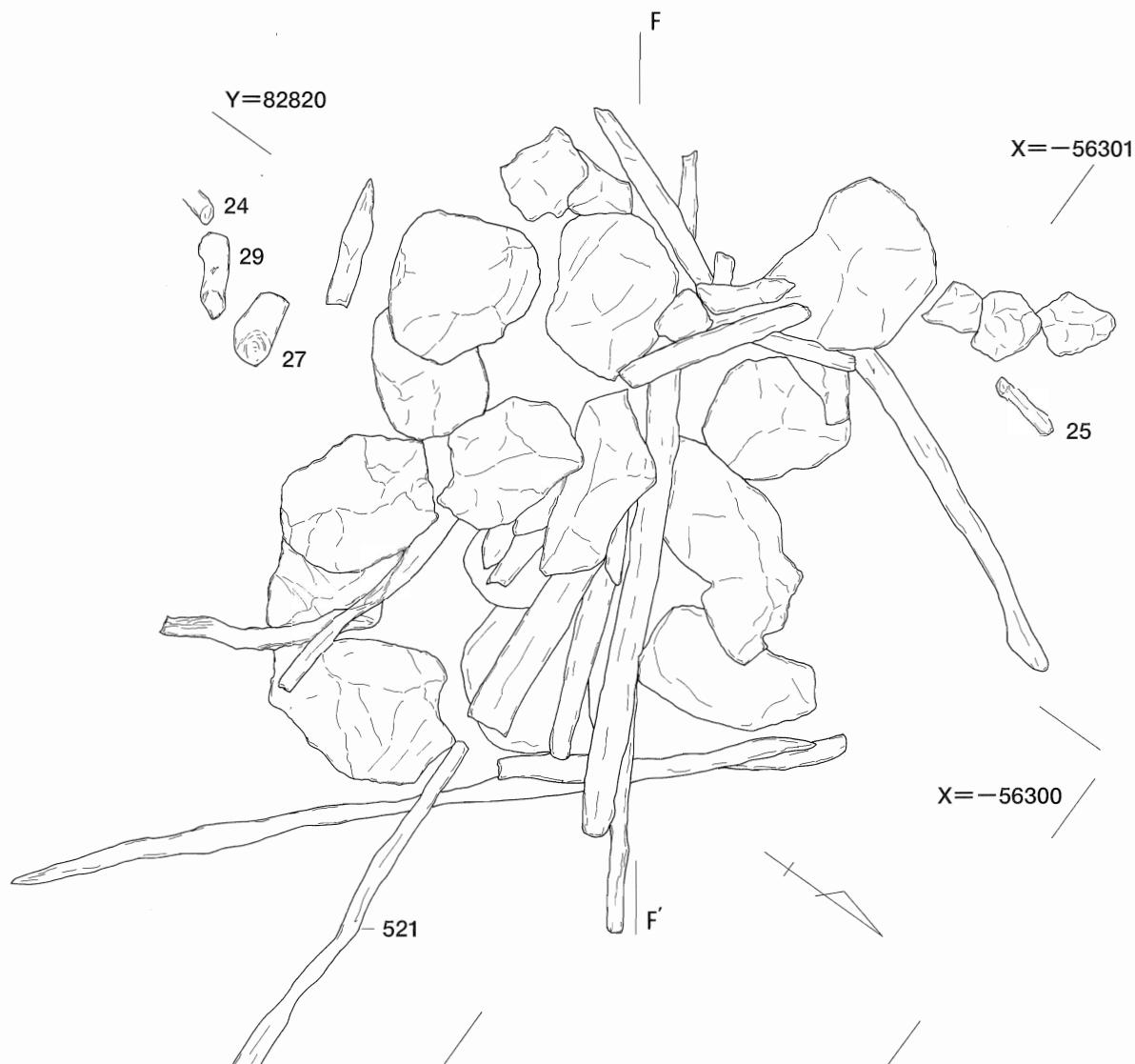
調査区の東側を中心に、拳大から人頭大の石が標高0m~-0.8mから多数検出されたので、これらを「水辺の石」として石の置かれた砂礫層や泥層の把握に努めた。その結果、第170図のA~Gという、7つの段階に分かれて石が置かれたことがわかった。



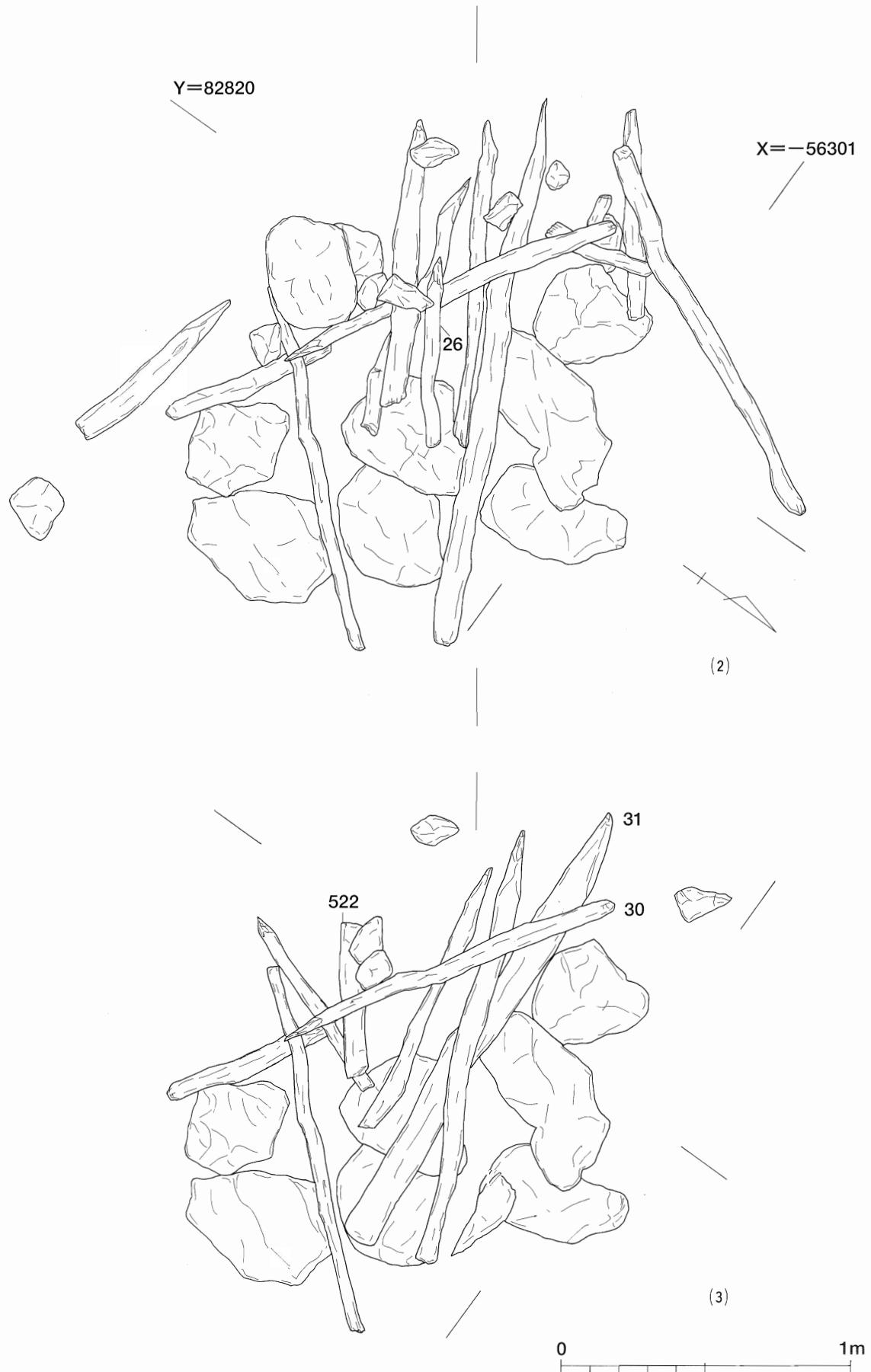
第161図 V区-B石組遺構及び水辺の石検出状況図 (S=1/100)



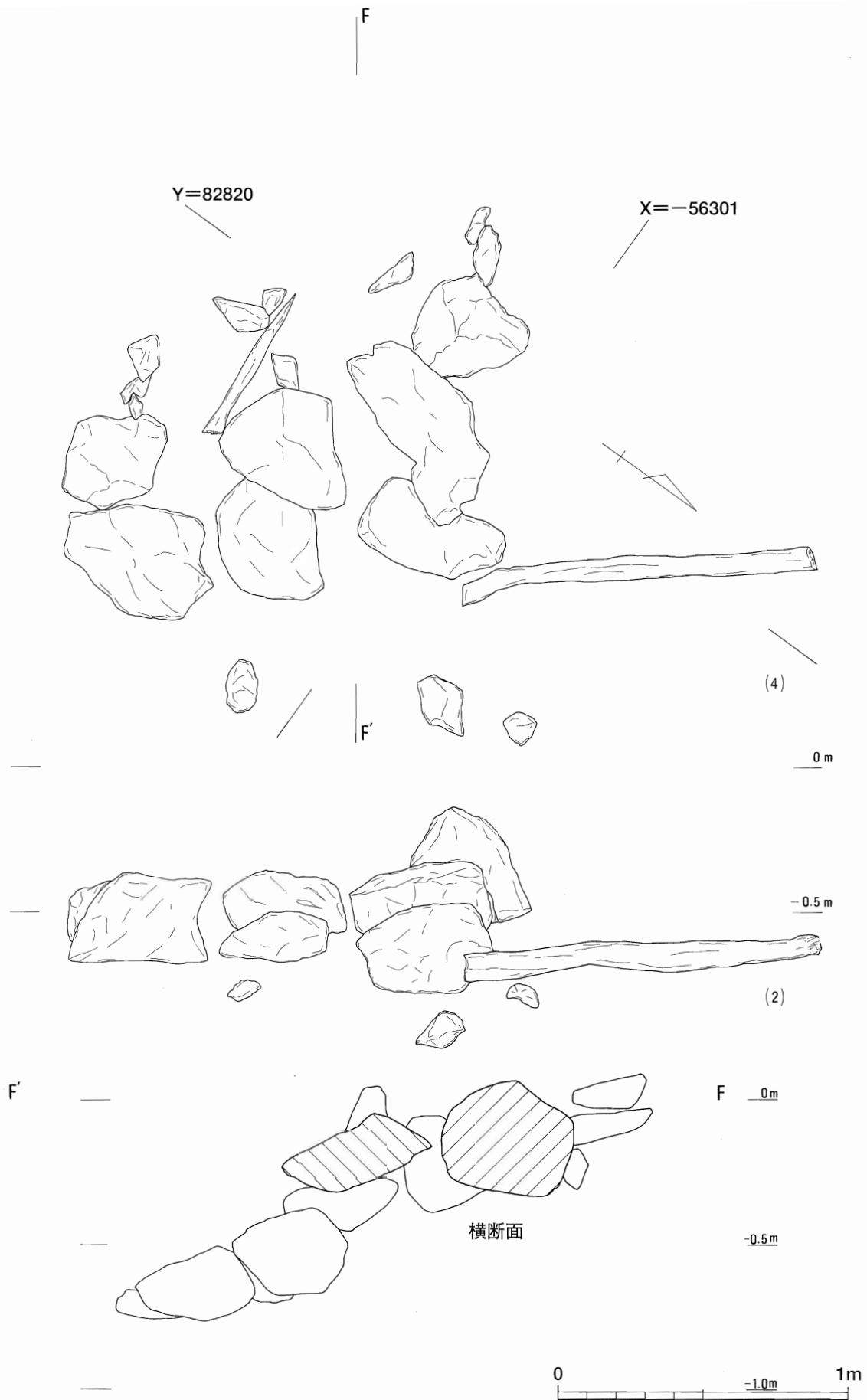
第162図 V区-B石組遺構 (E-E') 土層堆積図 (S=1/30) ※トーンは第158図に一致



第163図 V区-B石組遺構平面図・立面図(1) (上層) (S=1/20) ※番号は実測図に一致

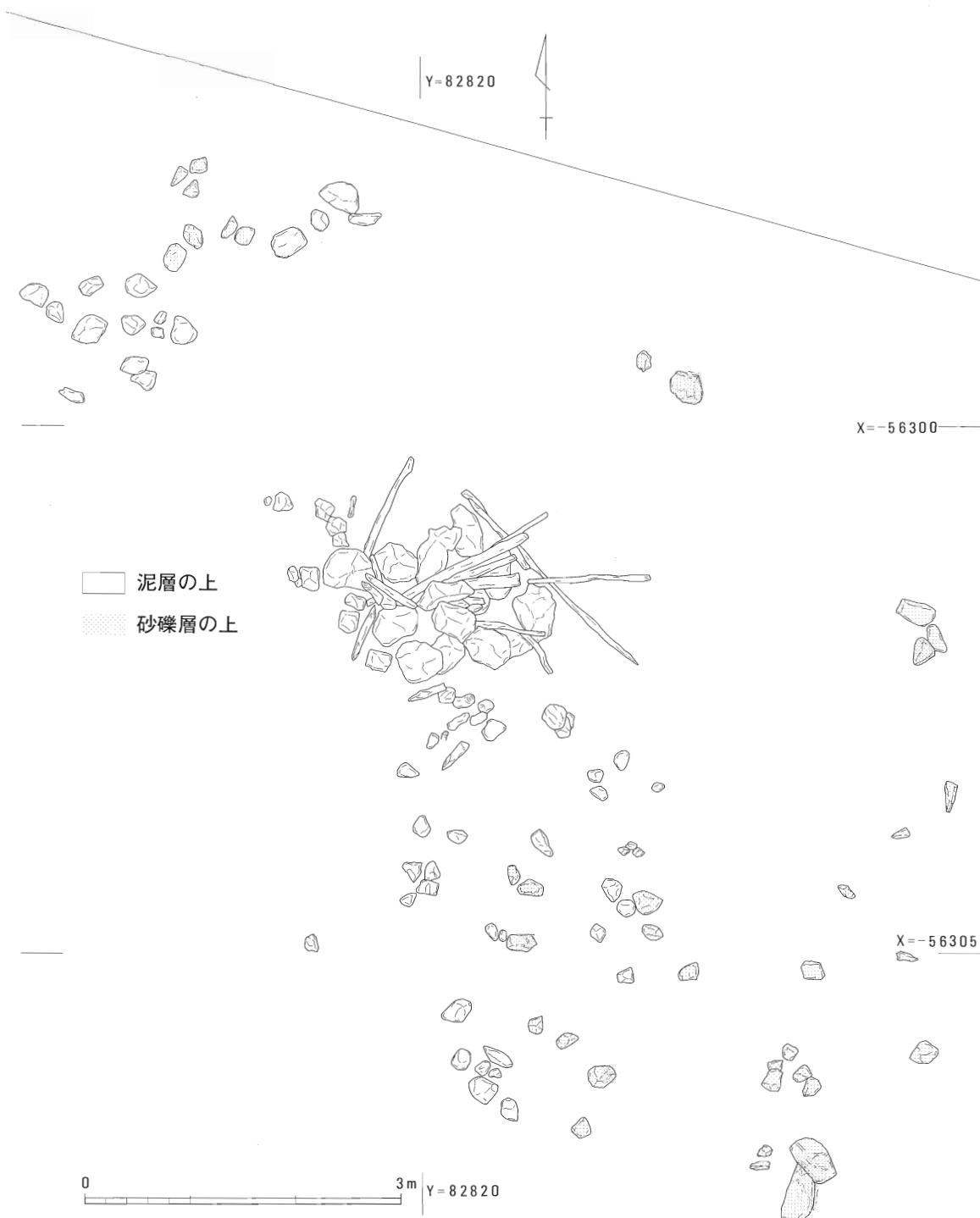


第164図 V区-B石組遺構平面図(2)・(3) (S=1/20) ※番号は実測図に一致

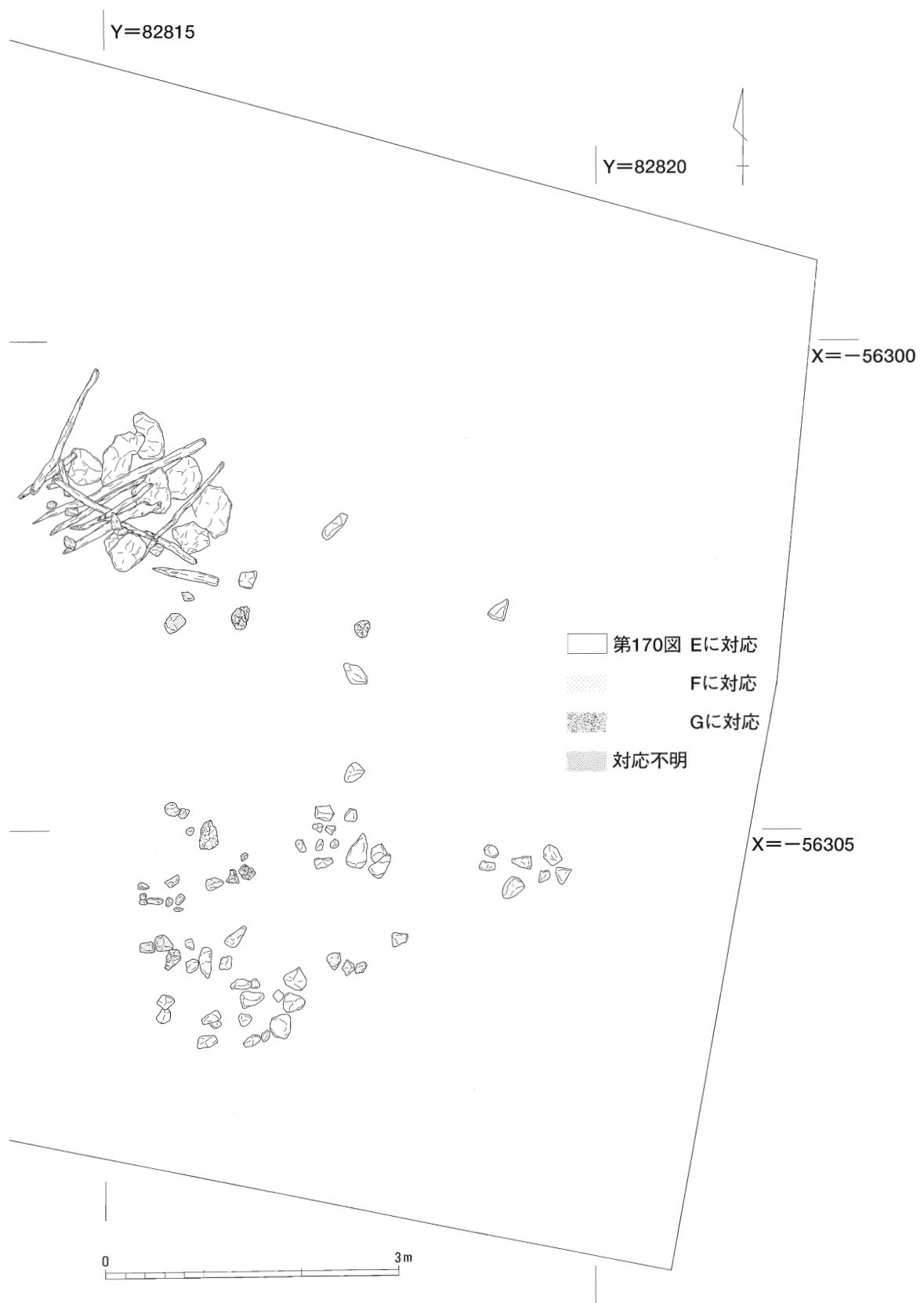


第165図 V区-B石組遺構平面図(4)・立面図(5)・横断面図(6) (S=1/20)

まず、砂礫層4や同5上位の掘削中に検出された石がある（第166図）。褐灰色泥層上の石よりも砂礫層上の石の方が東側へ分布しているが、これは砂礫層が西側では薄く、東側で厚いことによると思われる。次に砂礫層4に伴う石を検出した（第167図）。石は、砂礫層4上（G）、砂礫層4中（F）、砂礫層4の下位の泥層上（H）の3つの段階があるが、Gと第166図の砂礫層上の石の区別は出来なかった。これらの石の配置には特に規則性は見られなかつたが、Eの段階の石が多く検出された。次に検出されたのは、砂礫層5に伴う石である（第168図）。石は、砂礫層5上（D）、砂礫層5中（C）、砂礫層5下位の泥層上（B）の3つの段階がある。これらも特に規則性は見られない



第166図 V区-B水辺の石検出状況図(1) (砂礫層4、5上面) (S=1/60)



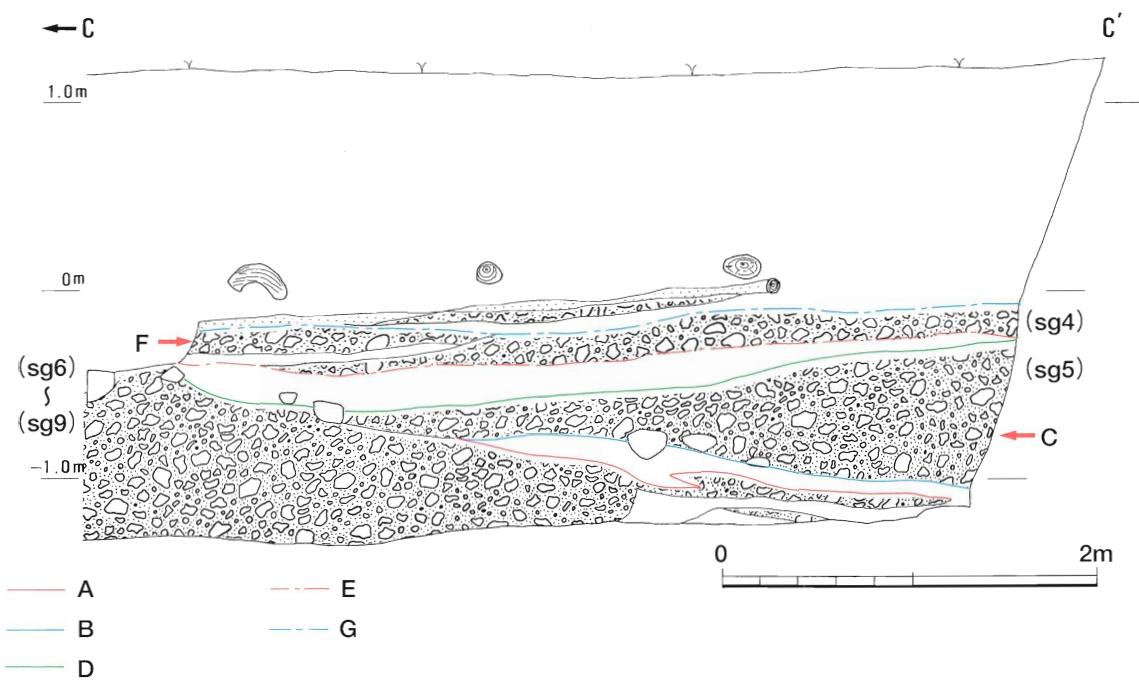
第167図 V区-B水辺の石検出状況図(2) (第170図E・F・Gに対応) (S=1/60)



第168図 V区—B水辺の石検出状況図(3) (第170図B・C・Dに対応) (S=1/60)



第169図 V区-B水辺の石検出状況図(4) (第170図A・Bに対応) (S=1/60)



第170図 V区-B水辺の石と層位の対応図 (S=1/40)

が、Cの段階の石がやや南東隅に片寄って検出された。また、BやCにはやや大きな石が見られる。最も下位で検出されたのは南東隅の石である（第169図）。B及び砂礫層5下位の砂礫層上（A）の段階がある。やや小さい石が多く、北西—南東に列上に置かれているように見える⁽²⁾。

これら水辺の石は主に砂礫層5の縁辺に置かれており、石の大きさから、流れに近付いて魚を捕ったり水を汲んだりするような、日常生活における水場と思われる。石が泥や砂礫に埋まつたり動いたりするなどして使いにくくなると石を次々と置いていったのではないかと想像される。これらの時期は、後述するように砂礫層4、5上位、5に伴うものであることから、A～Cが弥生時代後期後葉、D～Gが古墳時代前期を下限とすると考えられる。

第4節 遺物包含層と出土遺物

ここでは各土層の範囲や特徴と、そこから出土した遺物について述べる。土層の順序は、堆積した順序の逆、つまり新しい層から時代を遡って古い層へと記述する。なお、遺物は土器のみは各層毎で記述し、木製品、石器、土製品については一括して記述することにする。

〈1〉 遺物包含層と土器

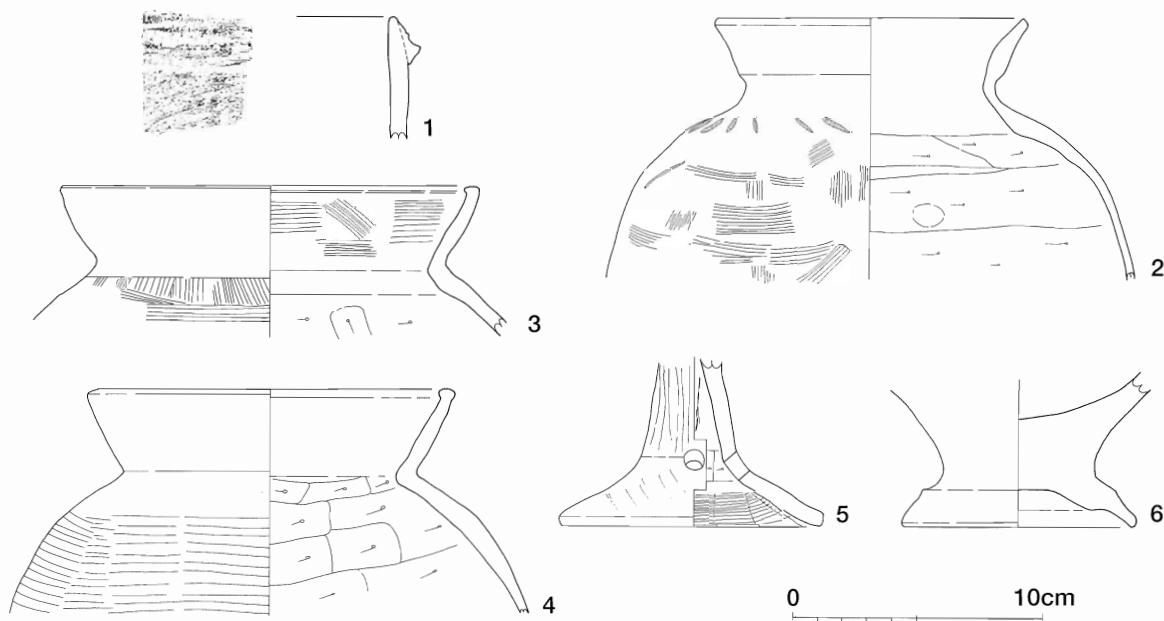
(1) 青灰色砂層1、同出土遺物（第171図）

青灰色砂層1は調査区の南西隅に分布していたが、平面的に砂層の範囲を確認することは出来なかった。中粒砂～細粒砂で構成されていた。

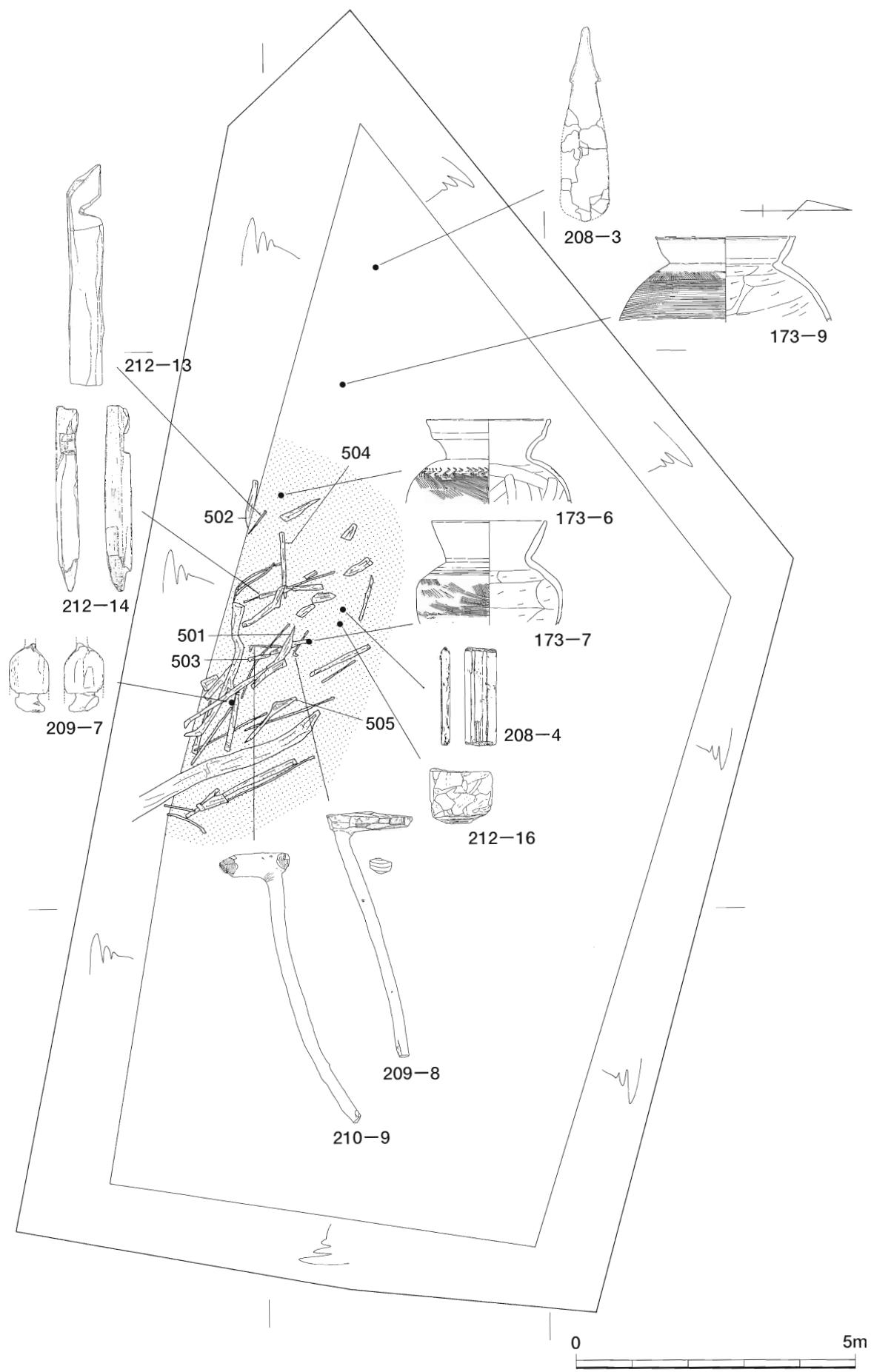
砂層1からは、縄紋土器から土師器までが出土し、縄紋土器（1）と土師器（2～6）を図示した。

1は口縁端部に接して突帯が貼り付けられている。調整は粗い条痕をナデ消す。刻み目の無い突帯を持つので、弥生前期の縄紋系土器と考えられる。

2は痕跡的に複合口縁を残す。肩部にはハケ原体による刺突列点文が施される。3と4は単純口



第171図 V区-B青灰色砂層1出土土器実測図 (S=1/3)



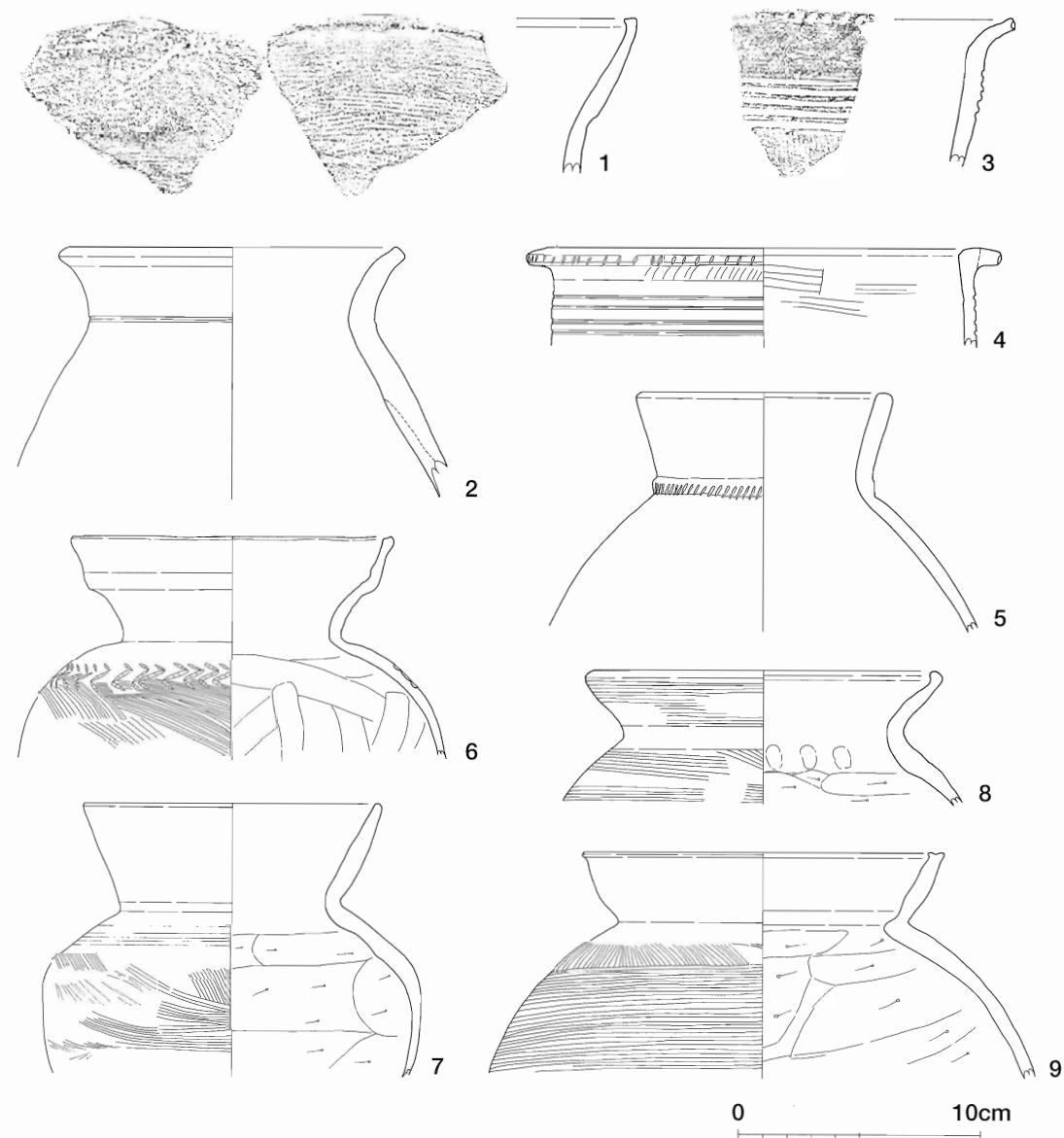
第172図 V区-B青灰色砂層 2 遺物分布図 (S=1/100)

縁の甕で、いずれも口縁端部を内側に肥厚させる。3の口縁部内面にはヨコハケが施される。6は脚部が段を持って開き、内面にも段を持つ。台付きの鉢になるのかもしれない。2～4は松山Ⅱ期、6は同Ⅳ期に属すると思われる。

砂層1の堆積した時期は、後述する砂礫層1の時期や6から、古墳時代後期初頭（6世紀初頭）以降と考えられる。

(2) 青灰色砂層2、同出土遺物（第172、173図）

青灰色砂層2は調査区の南西隅から南端付近を中心に分布していたが、後述する青灰色砂礫層1や3との明瞭な境を確認することは出来なかったので、これらの層の一部であった可能性があるが、調査時には便宜的に分けて遺物を取り上げていたので、ここでも分けて記述することにする。西壁では砂層2に相当する層が確認されている。中粒砂～細粒砂で構成されており、部分的には有機質層を挟んでいた。また、流木が非常に多く検出された。



第173図 V区-B青灰色砂層2出土土器実測図 (S=1/3)

砂層2からは縄紋土器から土師器、および木製品（第209図8、第210図9ほか）が出土し、縄紋土器（1）、弥生土器（2～5）、土師器（6～9）を図示した。

1は口縁部が大きく開き、端部には面を持つ。縄紋前期と考えられる。

2～4は弥生前期の土器である。2は口縁部があまり開かず、頸部に1条のヘラ描直線文を持つ。3は口縁端部に刻み目を持ち、5条のヘラ描直線文を持つ。4は口縁部に粘土を貼り付け、逆「L」字状の口縁部を持つ甕である。4条（以上）のヘラ描直線文を持つ。3は前期後葉（I-3）、2、4は前期末（I-4）と考えられる。5は頸部に低い突帯を持ち、その上に刺突を施す。弥生中期と思われる。

6は複合口縁を呈し、肩部にはハケ原体による3列の刺突文を綾杉文状に施す。7は直口の壺で、肩部にはヨコハケを施す。8と9は単純口縁の甕であるが、8が口縁端部を内側に肥厚させるのに対して、9は口縁部をやや厚めに作り、口縁端部を少し窪めている。8の口縁部外面にはヨコハケが施され、ナデ消し切れていない。6は松山Ⅰ期、7、8は同Ⅱ期、9は同Ⅲ期に属すると思われる。

砂層2の時期は、直接その時期の遺物が出土していないが、後述する砂礫層1に含まれる可能性があることから、古墳時代後期初頭（6世紀初頭）を下限とするのではないかと思われる。

(3) 青灰色砂礫層1、同出土土器（第174～177図）

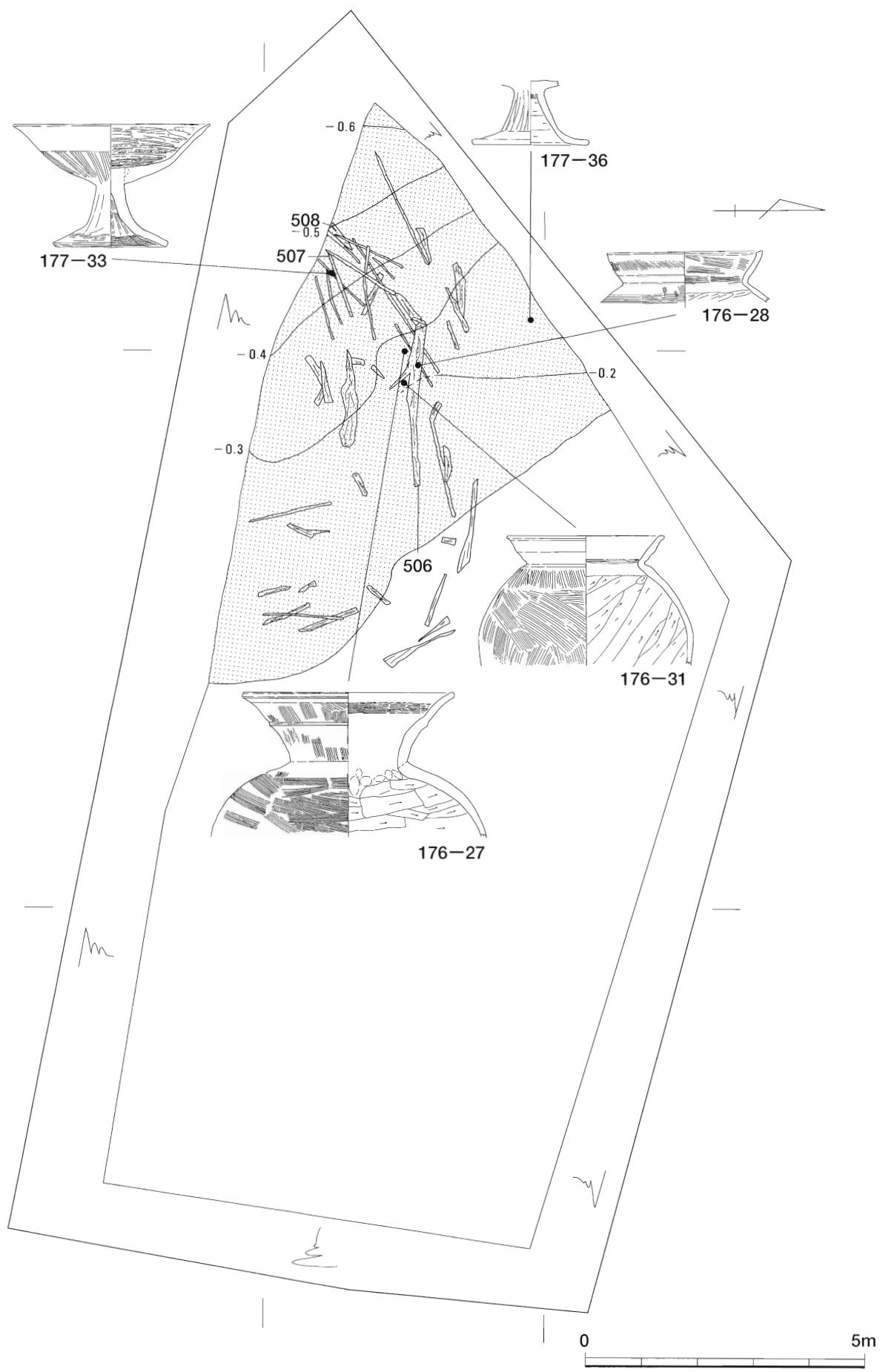
青灰色砂礫層1は、調査区の西側の標高-0.2～-0.6mに分布していた。

砂礫層1からは縄紋土器から須恵器までが出土し、縄紋土器（1～3）、弥生土器（4～18）、土師器（19～38）、須恵器（39）を図示した。

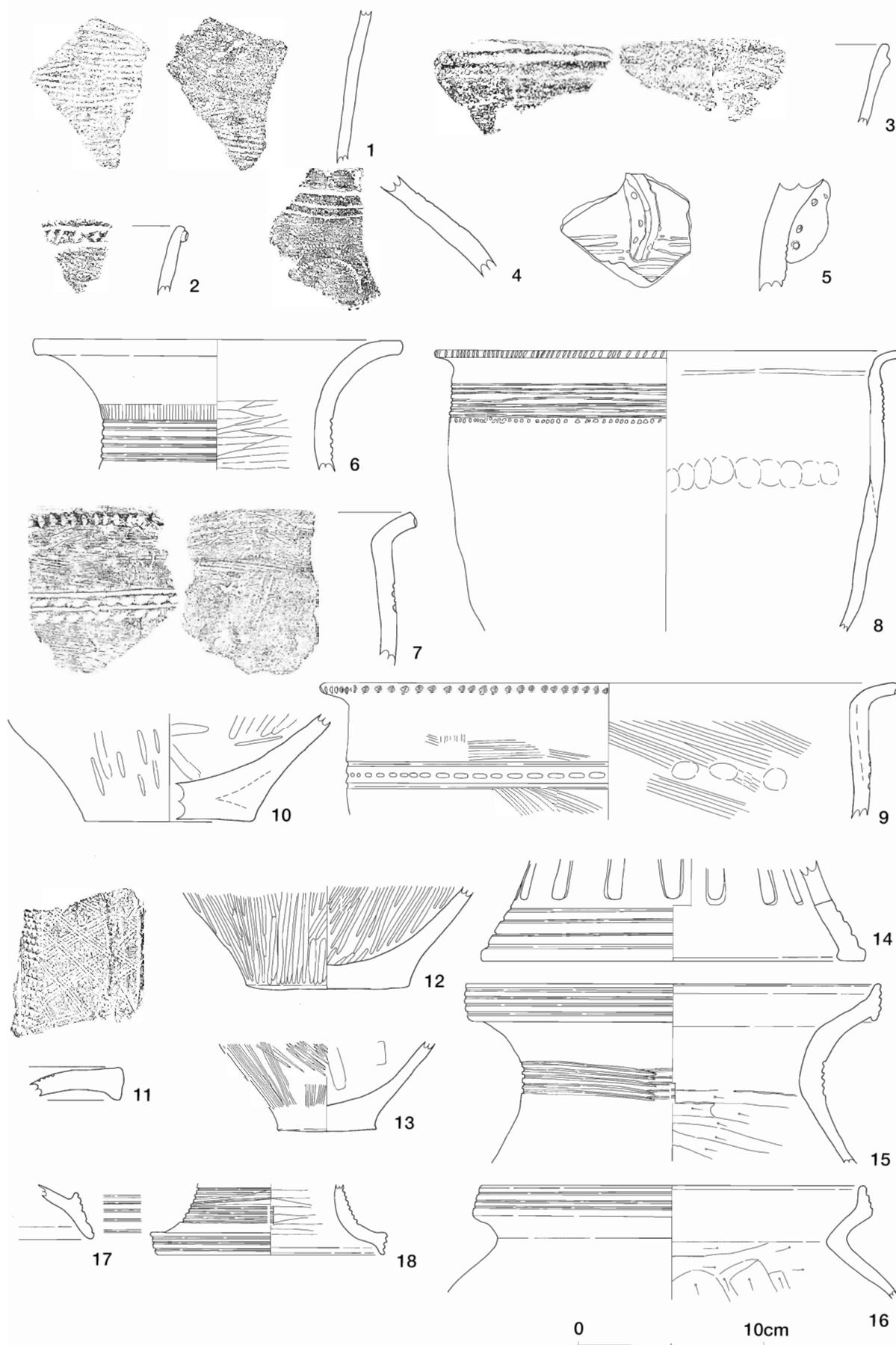
1、2は前期の土器である。2は突帯が口縁部に接し、突帯の上には貝殻による刺突を施す。突帯の断面はやや丸みを帶びてるので、長山式1類と思われる。3は突帯の断面が丸く、高さも低いので、弥生前期の縄紋系土器と考えられる。

4～10は弥生前期の土器である。4は頸胴部界に削り出し突帯と2条のヘラ描直線文を持ち、胴部には貝殻重弧文を施す。5は壺の頸部だが、5条（以上）のヘラ描直線文を施した後、粘土を「C」を逆にした形で貼り付ける。粘土には小孔が3つ開いている。7～9はいずれも口縁端部に刻み目を持つ。7は2条のヘラ描直線文を施した後、ヘラ状工具の先のような道具で刺突を行う。9も同様に、2条の直線文の間に刺突を行う。これらの土器は4、7、9は前期後葉、その他は前期末を中心とする時期と考えられる。

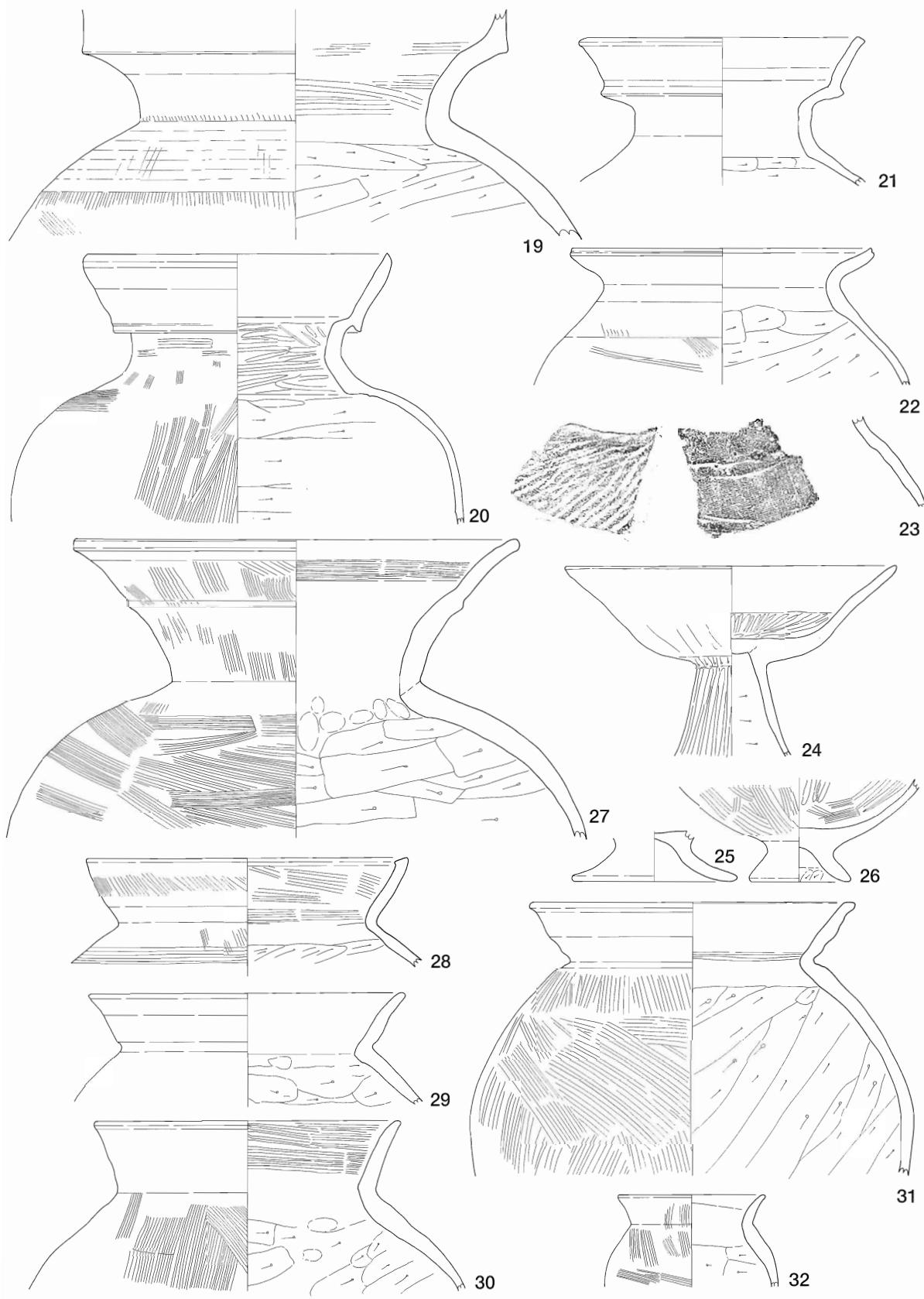
11～14は弥生中期の土器である。11は広口壺の口縁部で、口縁端部と口縁部内面に櫛描斜格子文を施し、口縁部内面には刺突列点文を施す。14は長楕円形の透かしを八方向以上開けており、脚端部付近には4条のB種凹線文を施す。11は中期中葉古相（III-1）、14は中期後葉新相（IV-2）であると考えられる。15～18は弥生後期の土器である。15は頸部にヘラ描ではない、5条を1単位とした原体を、上から見て反時計周りに施している。この原体はヘラ状工具のように先端が鋭く尖っており、中期に特徴的な櫛描文とは異なる。17は鼓型器台の脚台部である。18は高坏の脚部であると思われる。脚部には8条（以上）の凹線文を施しているが、一部切り合っている。15の頸部の文様は、中期後葉の広口壺の頸部に施されたB種凹線文が退化して、櫛描文状の文様に変化したと解釈すると、後期Ⅱ期を下限とするのではないかと考えられる。16は後期Ⅱ期、17は後期Ⅲ期、18は



第174図 V区-B青灰色砂礫層1測量図 ($S=1/100$) (10cmコンター: 単位はm)



第175図 V区-B青灰色砂礫層1 出土土器実測図(1) (S=1/3)



0 10cm

第176図 V区-B青灰色砂礫層1出土土器実測図(2) (S=1/3)

後期前半代と考えられる。

19～26は古式土師器である。19～21は二重口縁の壺である。19は口縁部が直立し、肩部には強くヨコハケを施す。21は肩が張り、口縁部下端が下方に伸びる。22と23は畿内系の甕である。22は頸部が緩く屈曲し、口縁端部が僅かに凹むが肥厚はしない。23は外面は粗いタタキ、内面は強い板ナデを施す。26は台の付く鉢の可能性がある。

27は口縁部が大きく開く大型の壺で複合口縁を呈すが、口縁部の稜は甘い。28～31は単純口縁の甕で、28のみ口縁端部を内側に肥厚させる。29、30は口縁部がやや直線的に伸び、31は口縁端部は外方に肥厚する。29以外は口縁内面にヨコハケを施し、ナデで消し切らない。また、28は肩部にヨコハケを施すが、30、31はヨコハケは退化してタテハケのみを施す。33～38は高坏である。坏部外面上に稜を持たないもの（33）と持つもの（34）の二者がある。33は僅かに屈曲して口縁部へ至り、端部は先細りに対して、34は稜を持って屈曲し、口縁部は外方へ開く。脚部の形態も水平に開くもの（36）とゆるやかに開くもの（38）の二者が見られる。これらの土師器のうち、28、32、33は松山Ⅱ期、29、31、36は同Ⅲ期、30、33、38は同Ⅳ期に属すると思われる。

39は須恵器の短脚高坏で、方形の透かしを四方に持つ。脚端部は下に突出し、外面に付けられた稜ははっきりしないので、透かしは四方ではあるがA2型であると思われる。

砂礫層1の堆積した時期の下限は、39から古墳時代後期初頭（6世紀初頭）と考えられる。

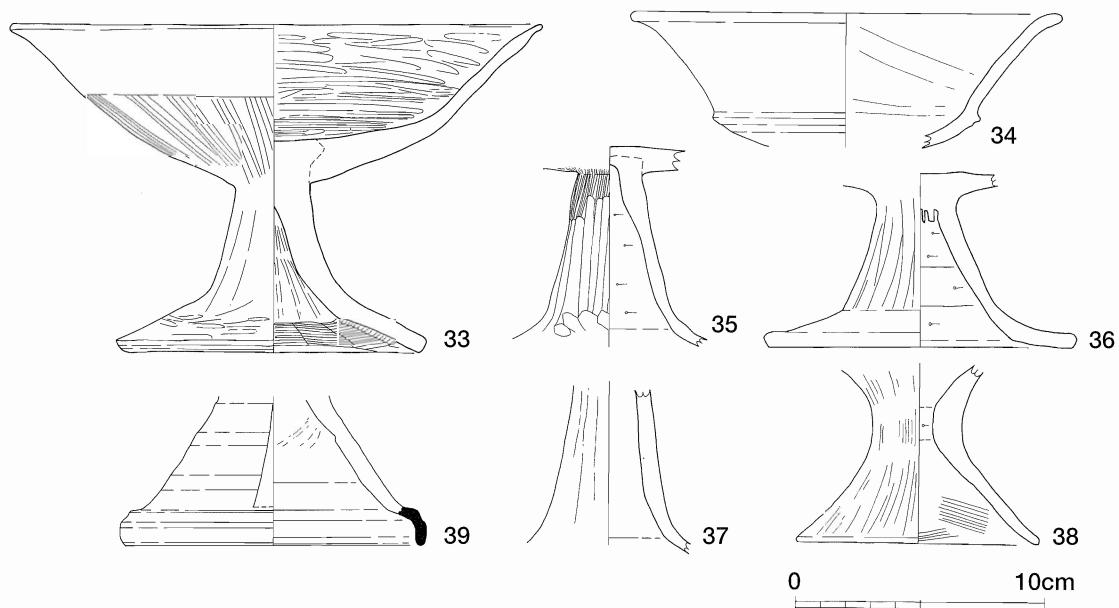
(4) 青灰色砂礫層2、同出土土器（第178、179図）

青灰色砂礫層2は、調査区の西側中央の標高-0.3～-0.7mに分布していた。

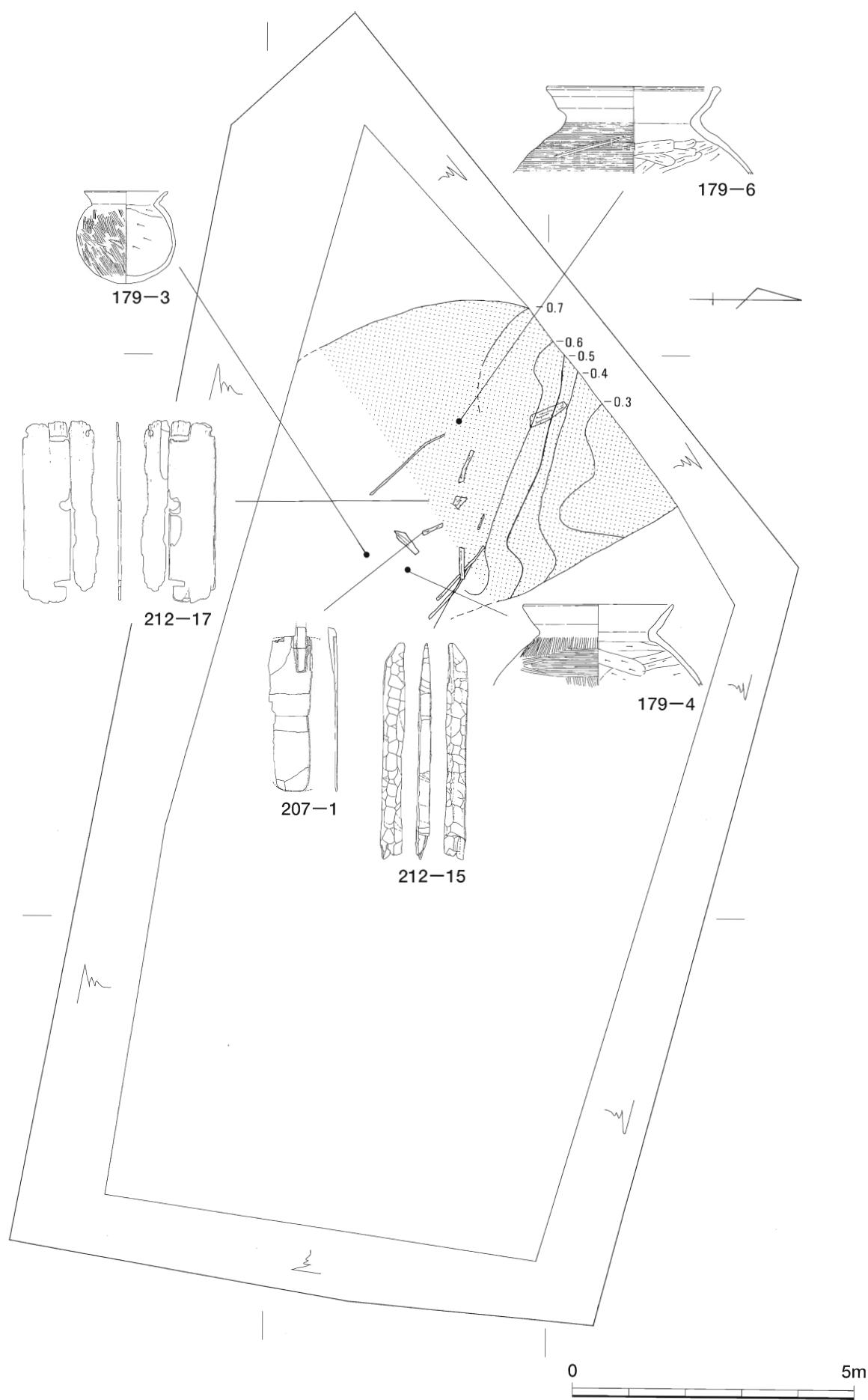
砂礫層2からは、縄紋土器から土師器、木製品（第207図1、第212図15、17）が出土し、弥生土器（1、2）、土師器（3～8）を図示した。

1は丁寧なヘラミガキを内外面に行い、頸部に蓋受け用の小孔を2つ一組で持つ。2は頸部内面の稜が明瞭である。1は中期中葉、2は中期後葉と考えられる。

3は小型の鉢であるが、器形は通常の甕をそのまま小さくした形である。4～6は単純口縁の甕



第177図 V区-B青灰色砂礫層1出土土器実測図(3) (S=1/3)



第178図 V区-B青灰色砂礫層 2 測量図 ($S=1/100$)

で、口縁が直線的に伸びて端部は肥厚しないもの（4、5）と口縁端部を内側に肥厚させるもの（6）がある。いずれも肩部に強くヨコハケを施す。7は大型の甕の底部である。これらの土師器のうち、4、5は松山Ⅱ期、6は同Ⅲ期に属すると考えられる。

砂礫層2の堆積した時期の下限は、古墳時代中期後葉（5世紀後葉）と考えられる。

(5) 青灰色砂礫層3、同出土土器（第180～182図）

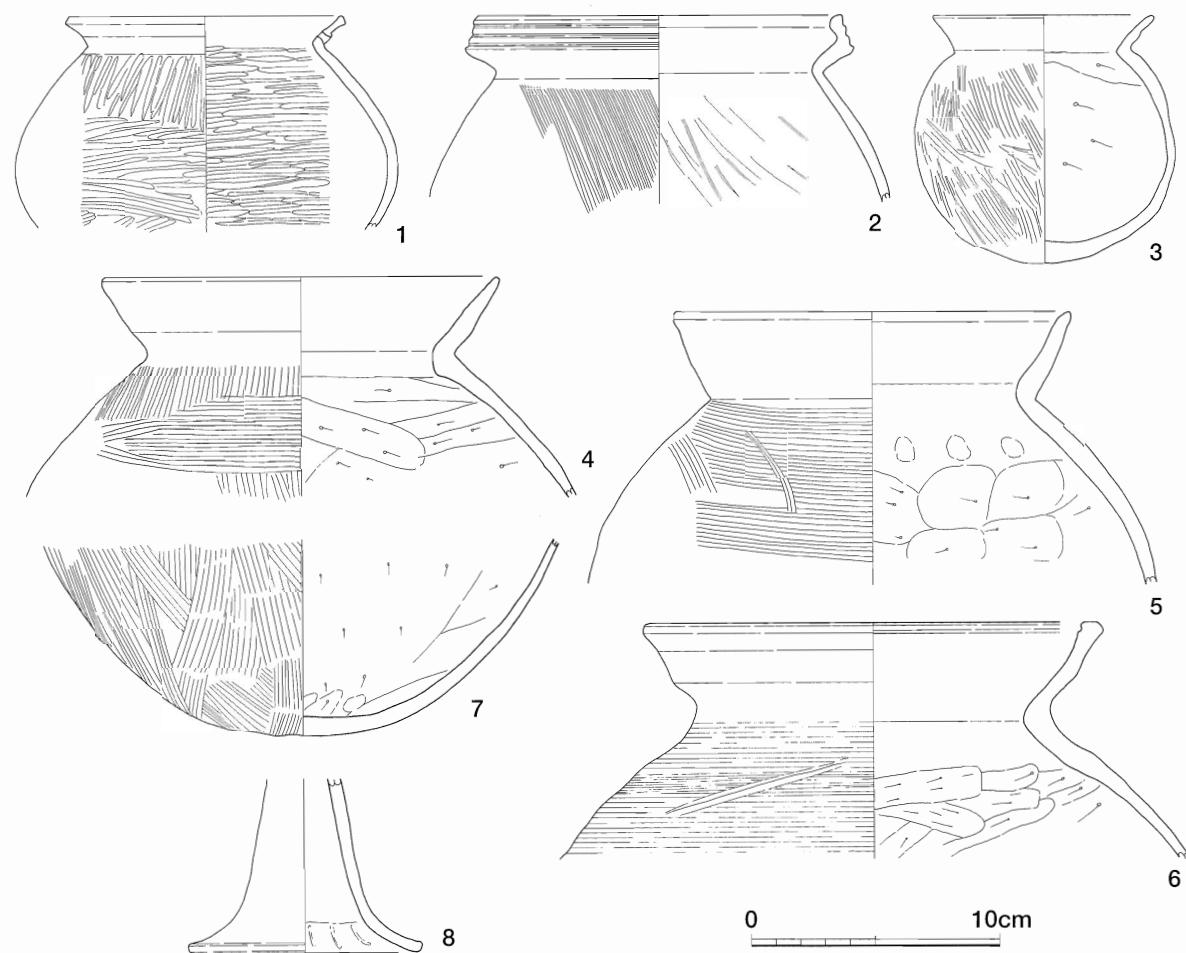
青灰色砂礫層3は、調査区の西側の標高-0.5～-1.0mに分布していた。

砂礫層3からは繩紋土器から土師器まで出土し、繩紋土器（1）、弥生土器（2～7）、土師器（8～24）を図示した。

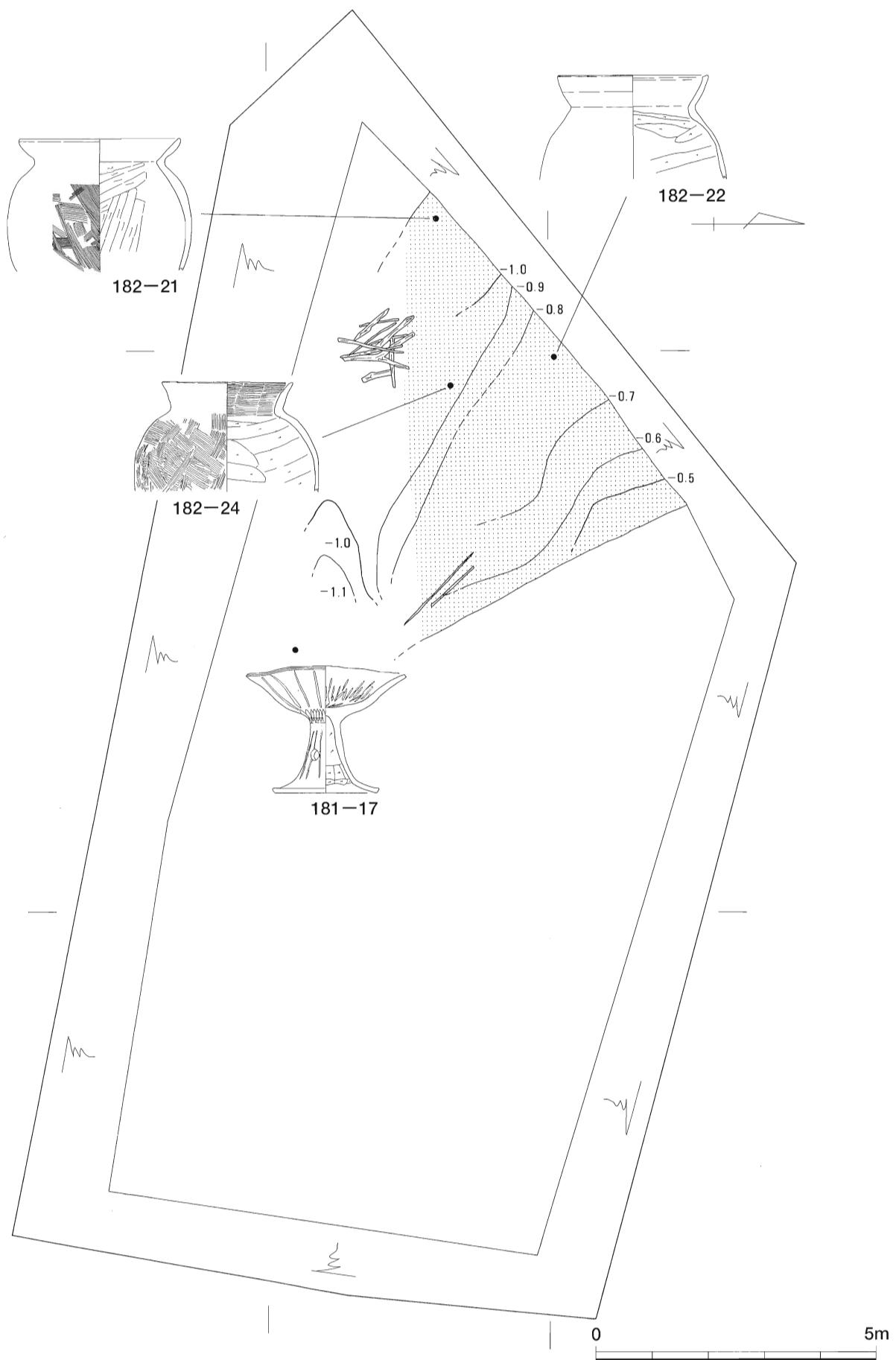
1は口縁部のやや下方に1条の刻み目のある突帯を持つ。前期初頭の長山式1類と考えられる。

2～4は弥生前期の土器である。2は口縁部下に段を持つ。3は蓋形土器だが頂部が剥離している。2は前期後葉と考えられる。5～7は弥生中期の土器である。5は広口壺で、口縁部に2個1単位で粘土を貼り付け、上から刻み目を付けている。口縁部内面には櫛描波状文と2条の凹線文を施す。6は端部にタテヘラミガキを施す。蓋なのか台部になるのかは不明である。胎土は精製である。7は口縁端面は平坦である。5は中期後葉古相（IV-1）、7は中期中葉古相と考えられる。

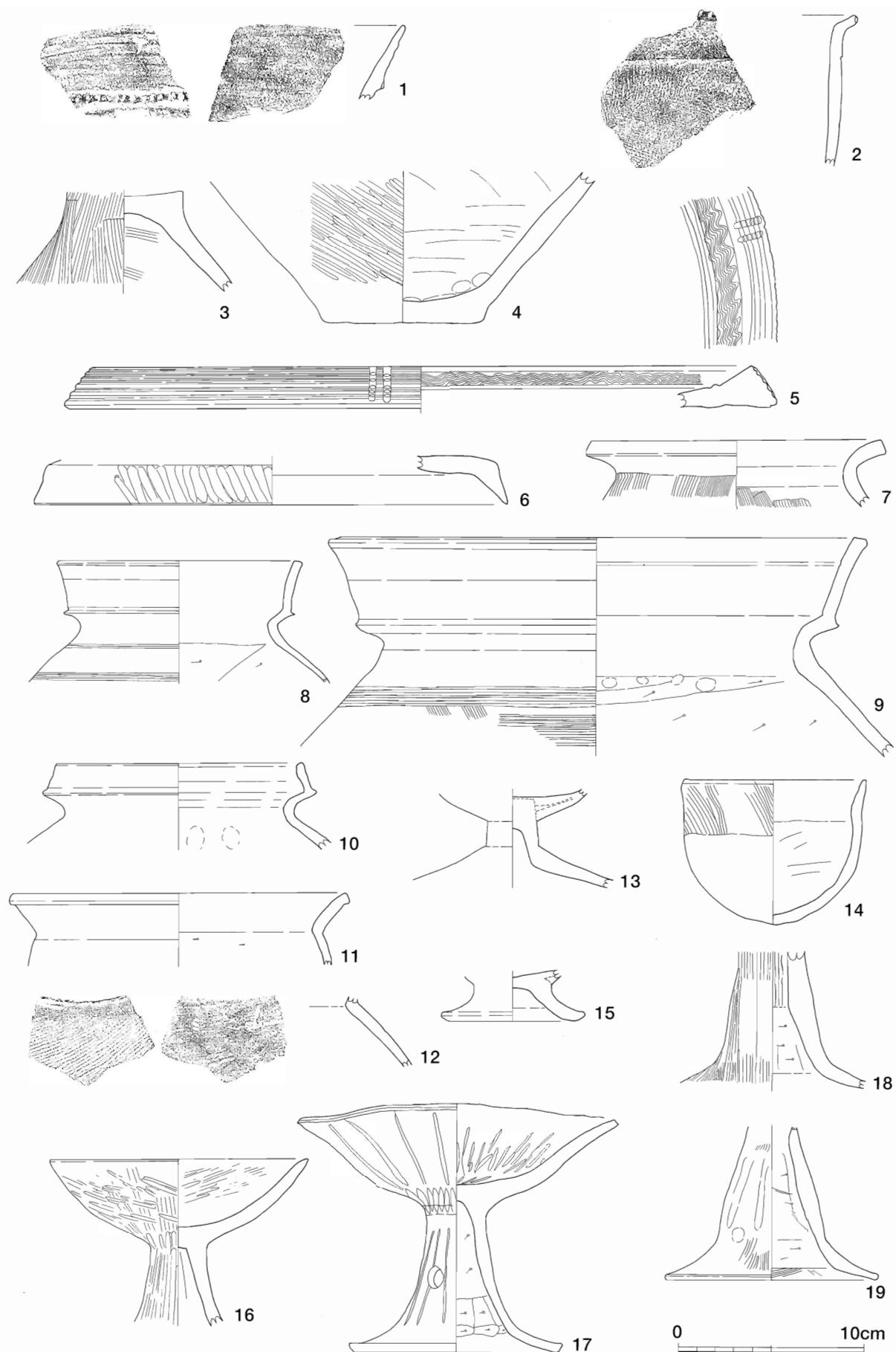
8～16は古式土師器である。8と9の口縁端部は面を持ち、外側へ拡張する。共に肩部はヨコハ



第179図 V区-B青灰色砂礫層2出土土器実測図 (S=1/3)



第180図 V区-B青灰色砂礫層3測量図 ($S=1/100$)



第181図 V区-B青灰色砂礫層3出土土器実測図(1) (S=1/3)

ケである。10は口縁部が内側を向いて立ち上がる。11、12は畿内系土器である。11は口縁端部をやや下方へ肥厚させる。12は頸部内面に稜を持ち外面は細かなタタキ、内面はヘラケズリを行う。共に胎土は西川津遺跡で見られる古式土師器と違いは認められない。13は脚部に稜を持つ短脚の高壺である。椀状の壺部になると思われる。16はやや浅めの椀状の壺部を持つ高壺である。8、9は後期VI期新相、12は細かい右上がりのタタキ、内面ヘラケズリという特徴から、庄内河内甕を模倣したものと考えられる。

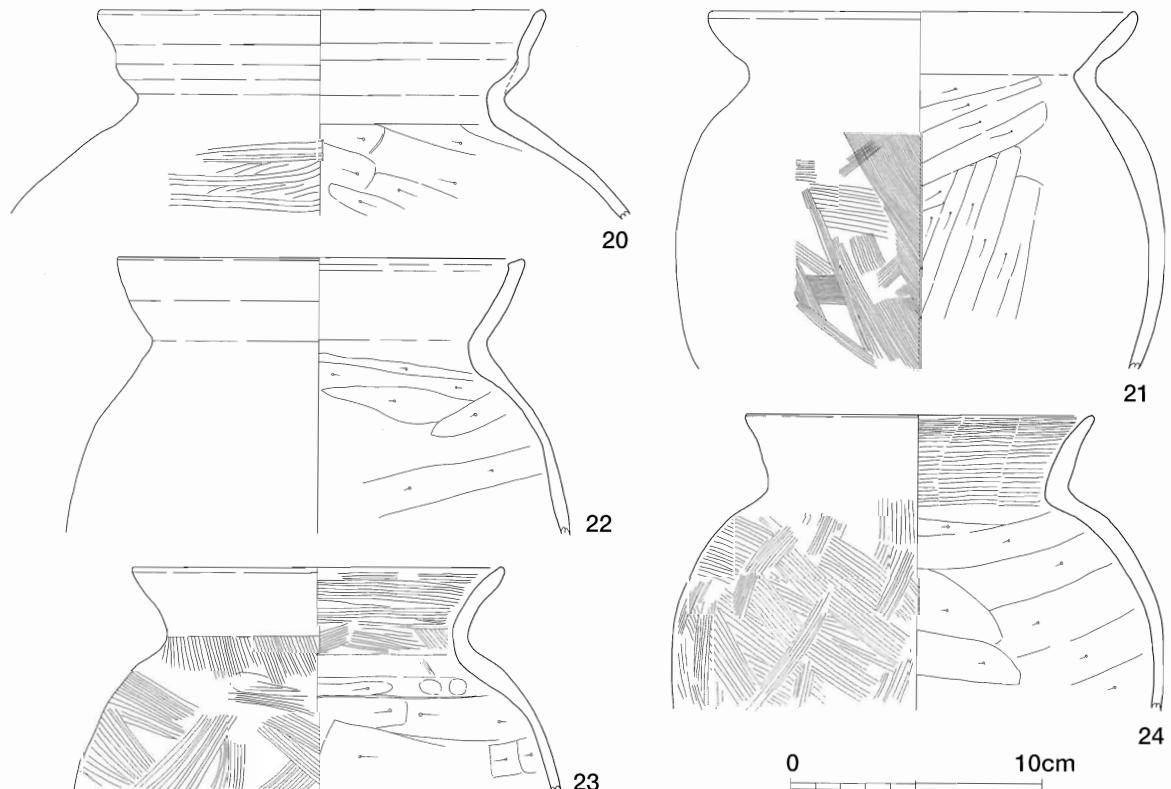
17は椀状の壺部を持ち、壺部外面にはタテヘラミガキを暗文風に間隔を置いて施す。18、19は脚柱部がやや膨らむ。20は退化した複合口縁を持つ。21～24は単純口縁の甕だが、口縁部が直線的に伸びるもの(21)、外彎気味で端部を肥厚させるもの(22)、内彎気味で内面にヨコハケを施すもの(23、24)と多様である。いずれも肩部のヨコハケは退化している。これらの土師器のうち、20～22は松山II期、17～19、23、24は同III期に属すると思われる。

砂礫層3の堆積した時期の下限は、古墳時代中期後葉(5世紀後葉)と考えられる。

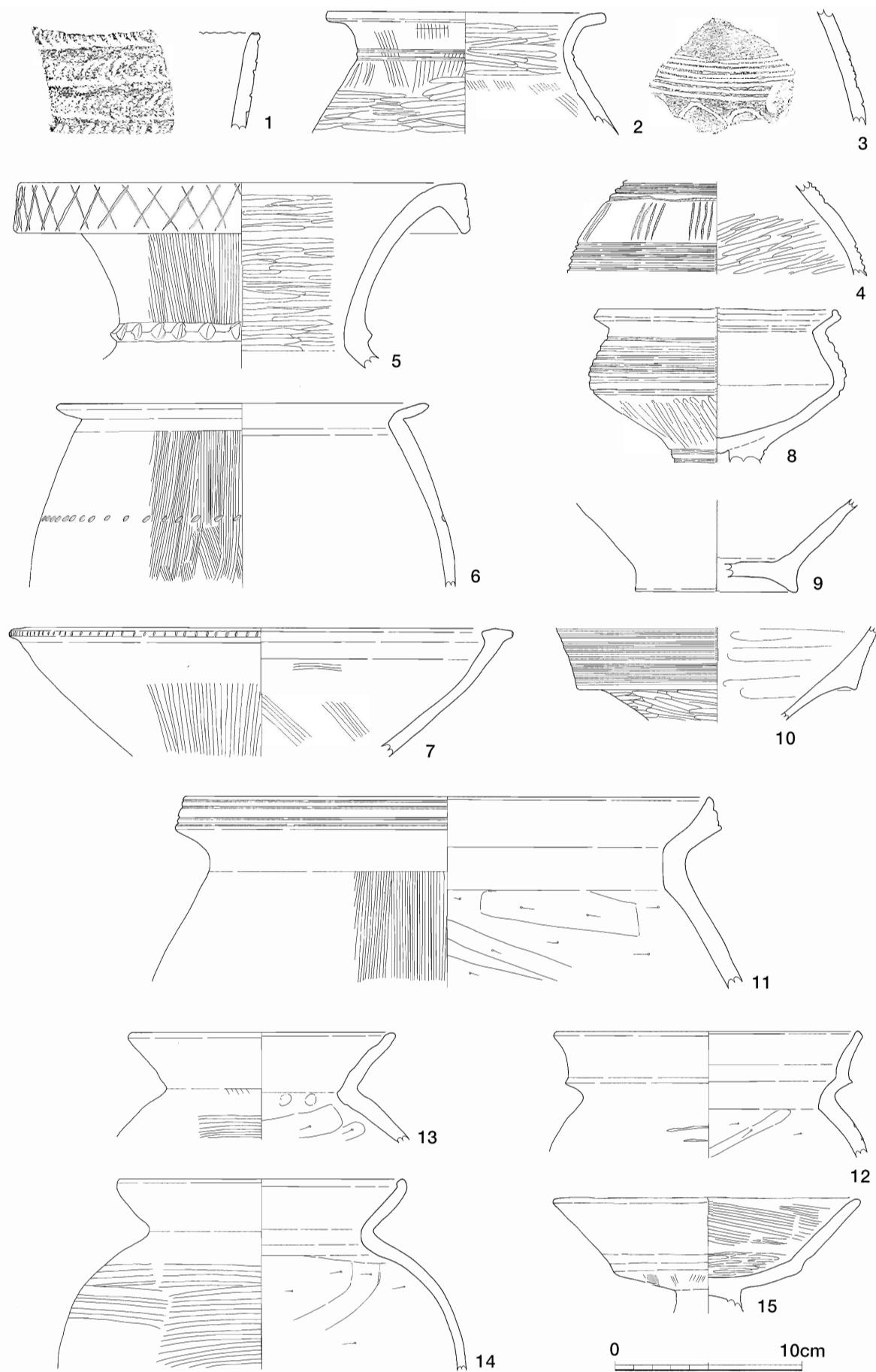
(6) 青灰色砂礫層4、同出土土器(第183図)

青灰色砂礫層4は、調査区の東側に分布していた。後述する青灰色砂礫層5との境が不明瞭で、平面的に確認することが出来なかった。標高は高いところで0.1～0.2m、分布の範囲は調査区の東側半分ほどであった。

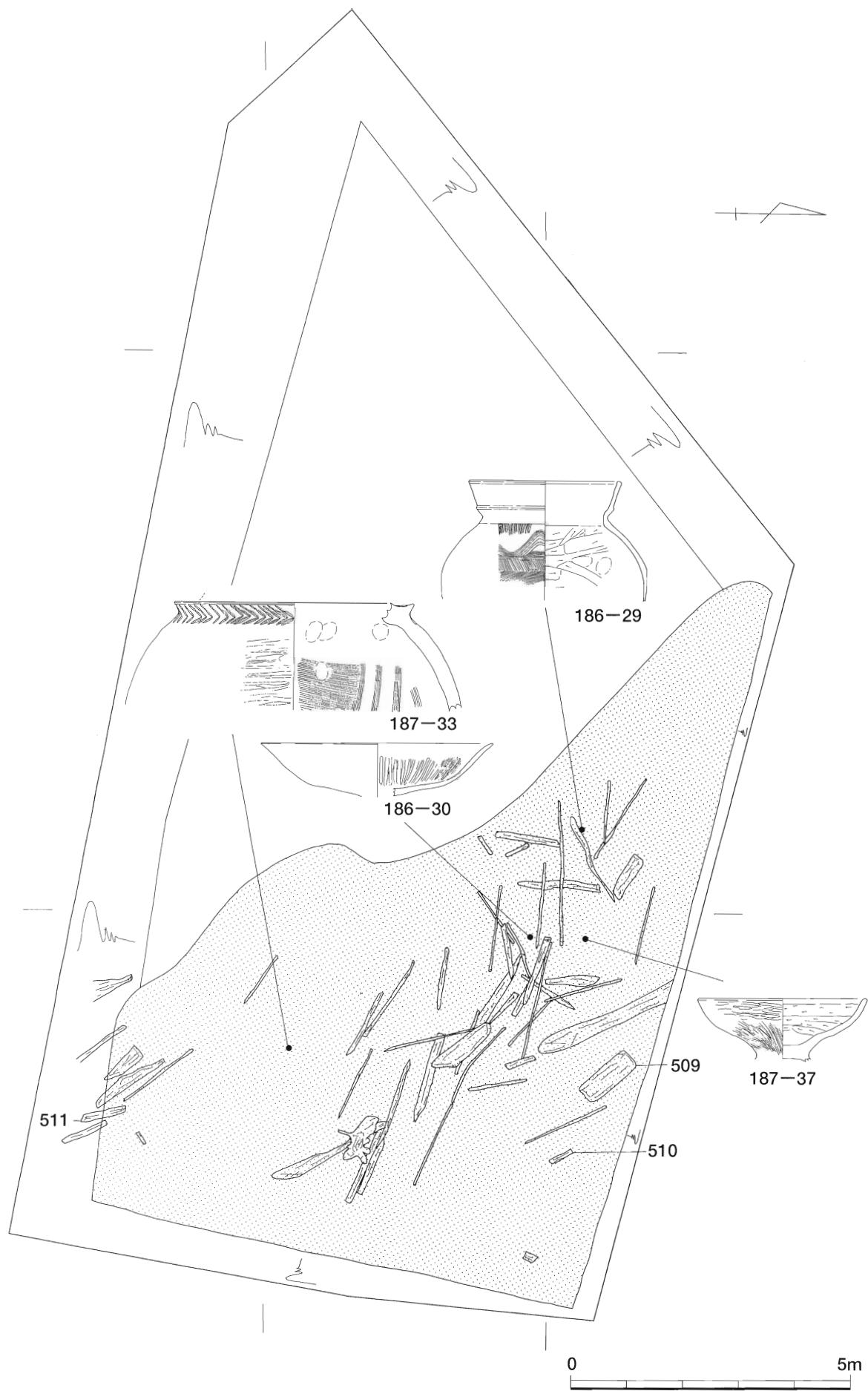
砂礫層4からは繩紋土器から土師器までが出土し、繩紋土器(1)、弥生土器(2～11)、土師器(12～15)を図示した。



第182図 V区-B青灰色砂礫層3出土土器実測図(2) (S=1/3)



第183図 V区-B青灰色砂礫層4出土土器実測図 (S=1/3)



第184図 V区-B青灰色砂礫層5上位遺物分布図 (S=1/100)

1は口縁端部に刻み目を持ち、外面には「C」字状の爪形文を3列以上施す。摩滅が著しいので、爪形文の端の方がより深く施されているのかどうか、といった検討は出来なかったが、口縁端部の刻み目が全面に施されていることから、前期の北白川下層Ib式と考えられる。

2～4は弥生前期の土器である。3は8条のヘラ描直線文の下に、ヘラによる重弧文を描く。4は頸部と胴部のヘラ描直線文の間に、4列1単位の貝殻による縦の文様を施す。この文様は八方向に施されていると考えられる。また、頸部の直線文の下には、貝殻で1条直線文を施している。2は前期中葉～後葉、3、4は前期末と考えられる。5～9は弥生中期の土器である。5は口縁端部を下方に大きく垂下させて、端部にはヘラ状の鋭い工具による斜格子文を施す。頸部には突帯を持ち、指による刻み目を施す。6は口縁部が短く屈曲し、端部は丸くおさめる。7は大きな椀状の坏部を持つ高坏で、口縁部は拡張されて、外面には小さな刻み目を持つ。8は脚の付く鉢である。複合口縁を呈し、胴部には7条のB種凹線文を施す。脚部にも凹線文が施される。5～7は中期中葉古相、8は中期後葉新相と考えられる。10、11は弥生後期の土器である。10は鼓型器台の受部である。11は大型の甕である。頸部で緩やかに屈曲し、内面には明瞭な稜を持たない。10は後期IV期、11は後期I～II期と考えられる。

土師器の甕には、複合口縁（12）と単純口縁（13、14）がある。12は口縁部がやや厚手で、複合口縁の稜は水平方向に伸びる。13の口縁部は直線的に伸びるが、14はやや外彎気味で端部を肥厚させる。共に肩部にヨコハケを施す。15は坏部に稜を持つ高坏である。これらの土師器は、松山I～II期に属すると思われる。

砂礫層4の堆積した時期の下限は、古墳時代中期前葉（5世紀前半）と考えられる。

(7) 青灰色砂礫層5（第184～191図）

青灰色砂礫層5は、調査区の北側から東側にかけて分布していた。砂礫層4との境が不明瞭であったので、分布範囲しか確認することが出来なかった。標高は高いところでは0.3mであった。流木が多く検出された。

砂礫層5からは、繩紋土器から土師器までの土器や木製品、銅鐸（第217、218図）が出土した。砂礫層5を更に分層することは不可能であったが、砂礫層の上位では中～下位よりも新しい時期の土器が出土したため、砂礫層5上位と砂礫層5中～下位に二分して記述することにする。

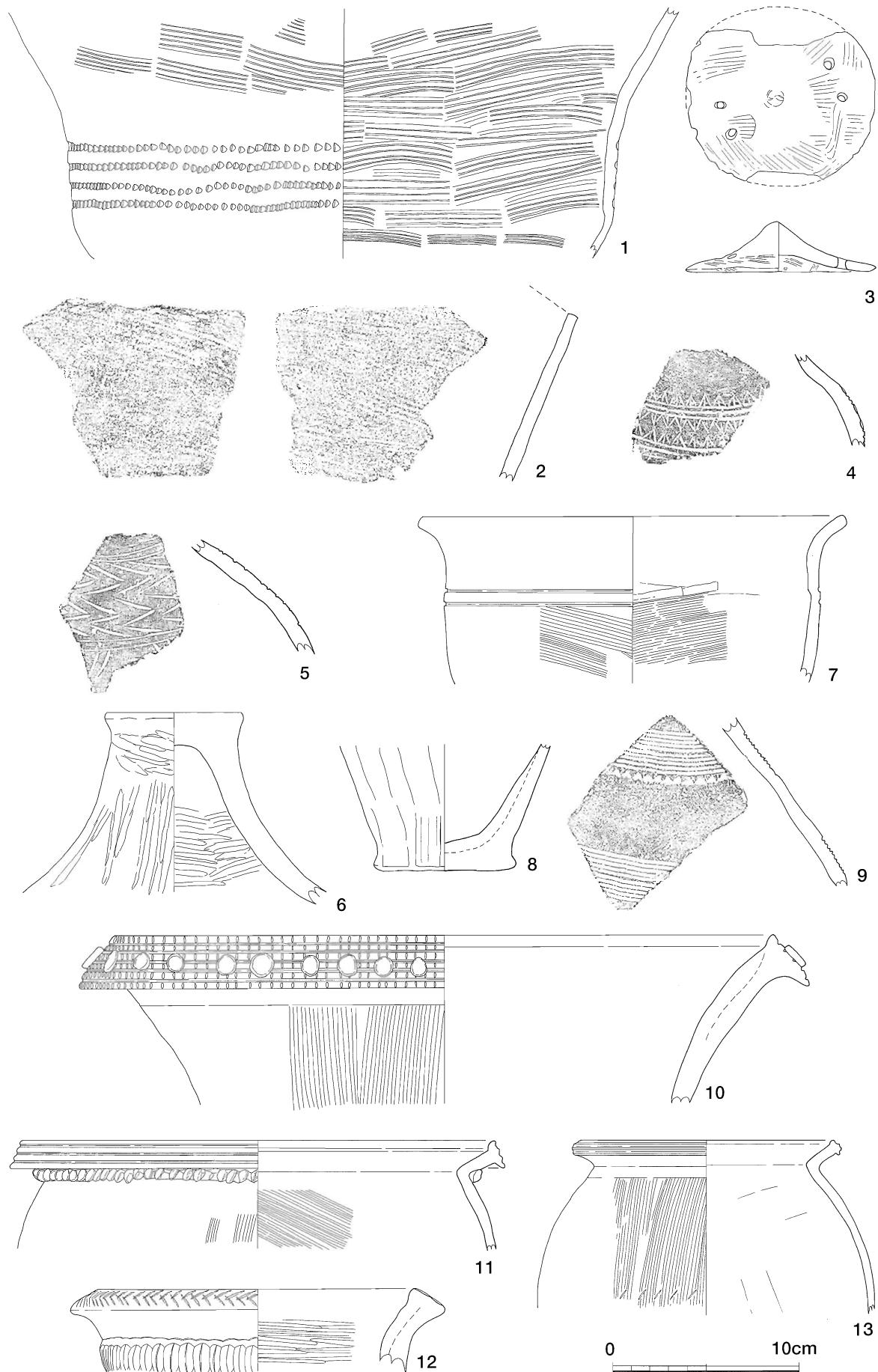
(7)-1 青灰色砂礫層5上位、同出土土器（第184～187図）

繩紋土器（1、2）、弥生土器（3～26）、土師器（27～38）、埴輪（39）を図示した。

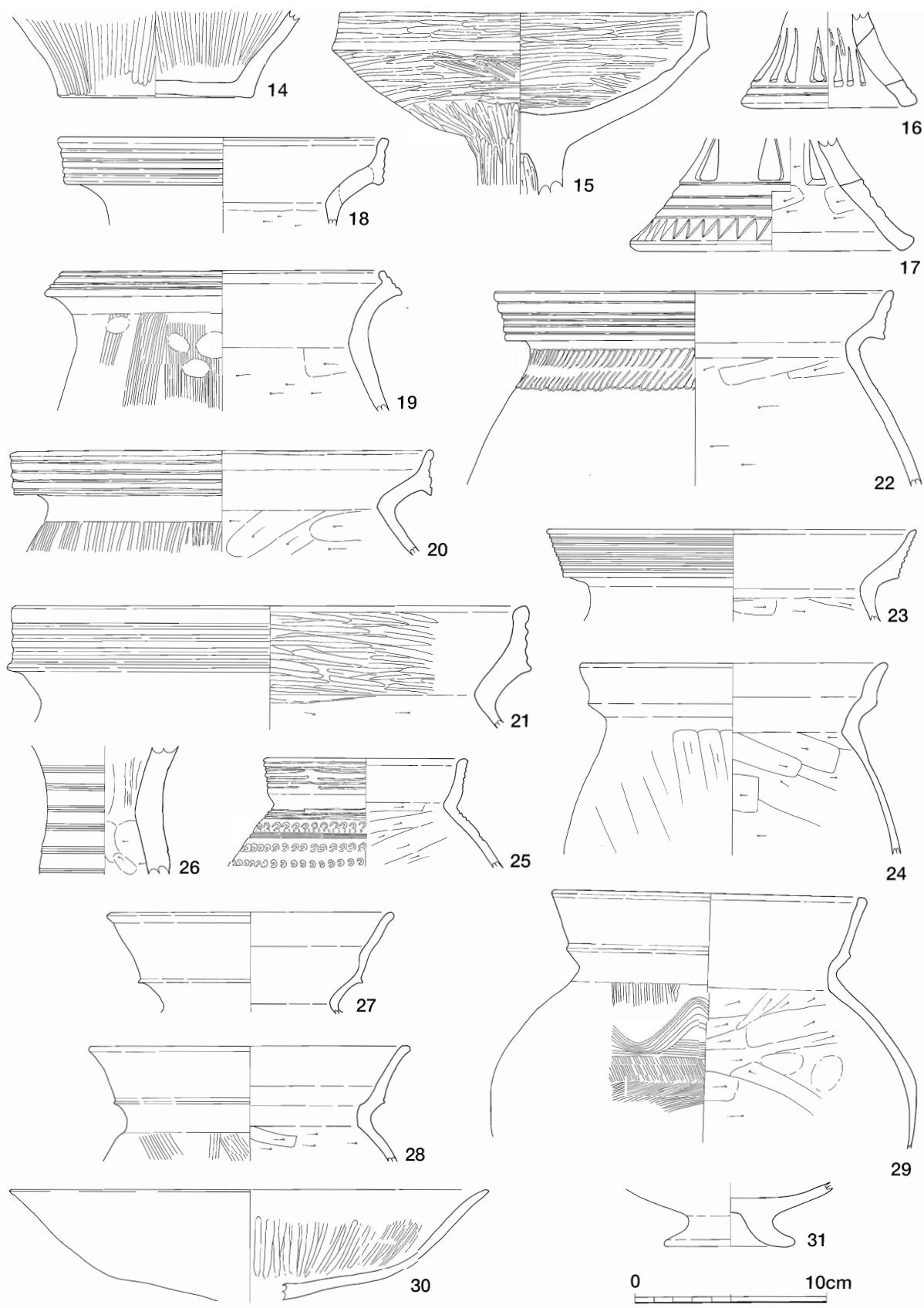
1は胴部から緩やかに屈曲して開く口縁部を持ち、胴部外面には4列の「D」字状の爪形文を施す。調整は内外とも条痕である。前期の羽島下層II式と考えられる。

3～8は弥生前期の土器である。3は壺用の蓋形土器である。2つ一対の小孔を持つ。4は直線文の上下に貝殻による鋸歯文を施す。5はヘラによる直線文の間に羽状文と文様（詳細は不明）を施す。6は甕用の蓋形土器である。8は甕の底部で、外面は板ナデ状の調整を行う。7は前期中葉、それ以外は前期後葉～末と考えられる。

9～17は弥生中期の土器である。9は櫛描直線文の下に三角形の刺突列点文を施す。10は大型の広口壺で、口縁部を拡張して端面には5条の凹線文を施した後、ヘラ状工具で縦方向に刻みを行い、



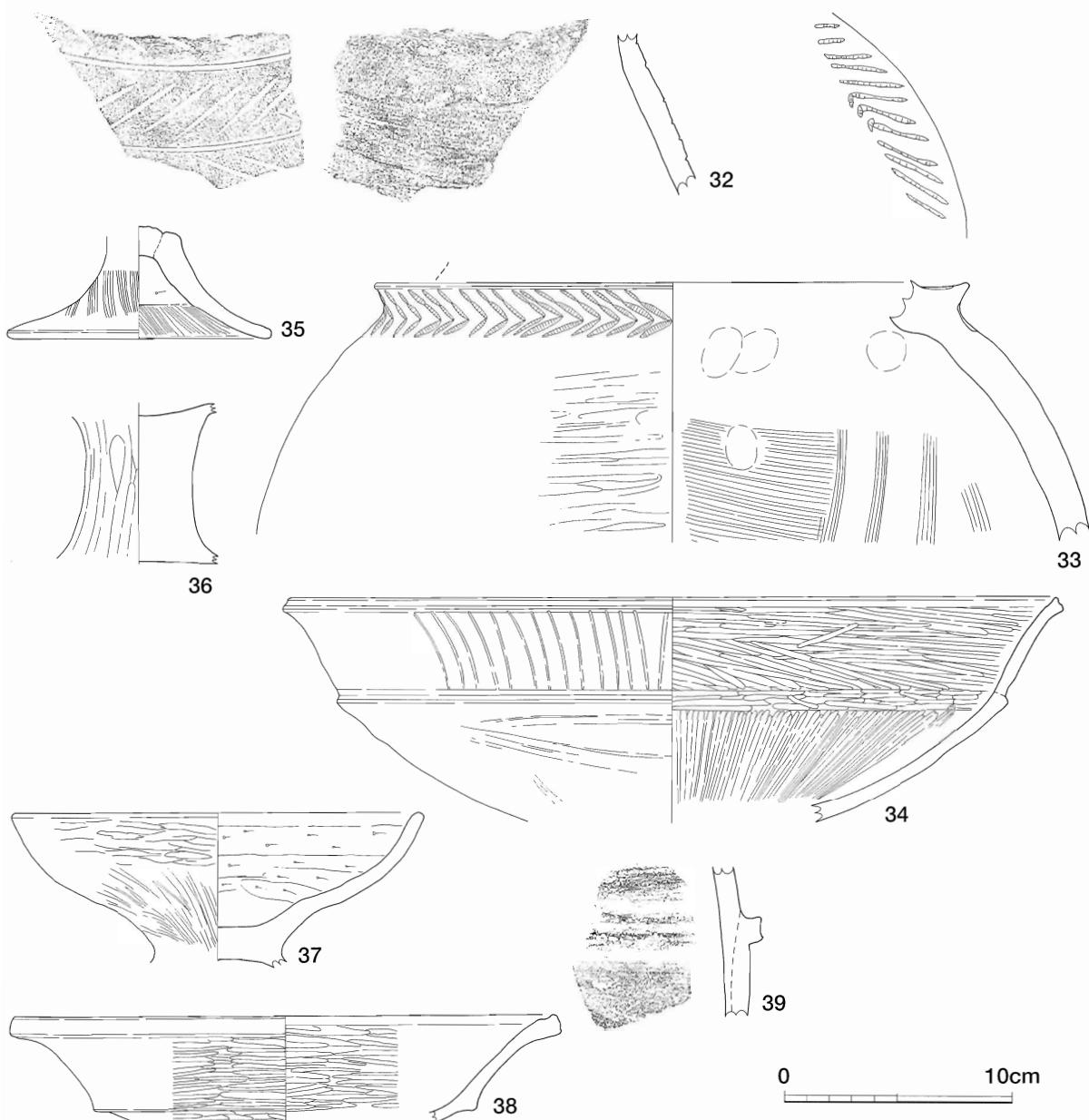
第185図 V区-B青灰色砂礫層5上位出土土器実測図(1) (S=1/3)



第186図 V区-B青灰色砂礫層 5 上位出土土器実測図(2) (S=1/3)

その上から円形浮文を貼り付ける。11、12は頸部に突帶を施す。11は突帶を施した後、中実の工具で上から見て時計周りに圧痕をつける。12は指で圧痕をつける。親指を内側にして二本の指で行ったと推測される。13は口縁端部がやや凸状を示す。15は坏部に僅かな稜を持って立ち上がる高坏である。16、17は高坏の脚部で、いずれも三角形の透かしを持ち、その下には数条のB種凹線文を施す。16は十方向以上、17は八方向の透かしを持つ。17の脚部には、凹線文の下に三角形の文様を持つ。9は中期前葉(Ⅱ)、10、13、16、17は中期後葉古相、11、12、15は中期後葉新相と考えられる。

18～26は弥生後期の土器である。18は口縁部が直立する壺である。19は頸部から緩やかに口縁部へ移行する甕である。22の頸部はヘラ状の工具で上から見て反時計周りに施した文様を持つ。18～22は口縁部外面に凹線文を施すが、23は擬凹線文を施す。24は口縁部外面はヨコナデで、頸部内面にはヘラケズリによる稜を明瞭に持つ。25は小型の鉢である。口縁部外面や肩部にヘラ描直線文を



第187図 V区-B青灰色砂礫層5上位出土土器実測図(3) (S=1/3)

持ち、その間には竹管状の工具による刺突文を施す。胎土や調整は他の土器と特に変わらない。26は6単位以上の櫛描直線文を持つ。19は後期Ⅰ期、18、20～22、25、26は後期Ⅱ～Ⅲ期、23は後期Ⅳ期、24は後期Ⅴ期と考えられる。

27～32は古式土師器である。28、29は口縁部下端の稜が水平方向へ突出し、29の口縁端部は若干内側へ肥厚する。いずれも後期Ⅵ期新相と考えられる。32は壺の頸部で、綾杉文を施す。

33は大型の壺であるが、肩部に突帯状の稜を持ち、稜の下と上面にハケ原体による刺突文を施す。この刺突文は、稜の下では羽状文風、上面では列点文であるが、書き継ぎを行っている。34は大型の高坏で、坏部に稜を持つ。口縁部外面には暗文風にタテヘラミガキを行う。35は短脚の高坏だが脚部に稜は持たない。36は脚柱部が中実である。37は椀状の坏部を持つ高坏であるが、坏部内面はヘラケズリを消し切っていない。38は坏部に稜を持つ高坏であるが、非在地系と思われる高坏である。これらの土師器は、37の時期が下る可能性を持つが松山Ⅰ期に属すると思われる。

39は円筒埴輪である。タガの断面は方形である。

砂礫層5上位の時期は、古墳時代前期（4世紀代）を下限とすると考えられる。

(7)ー2 青灰色砂礫層5、同出土土器（第188～191図）

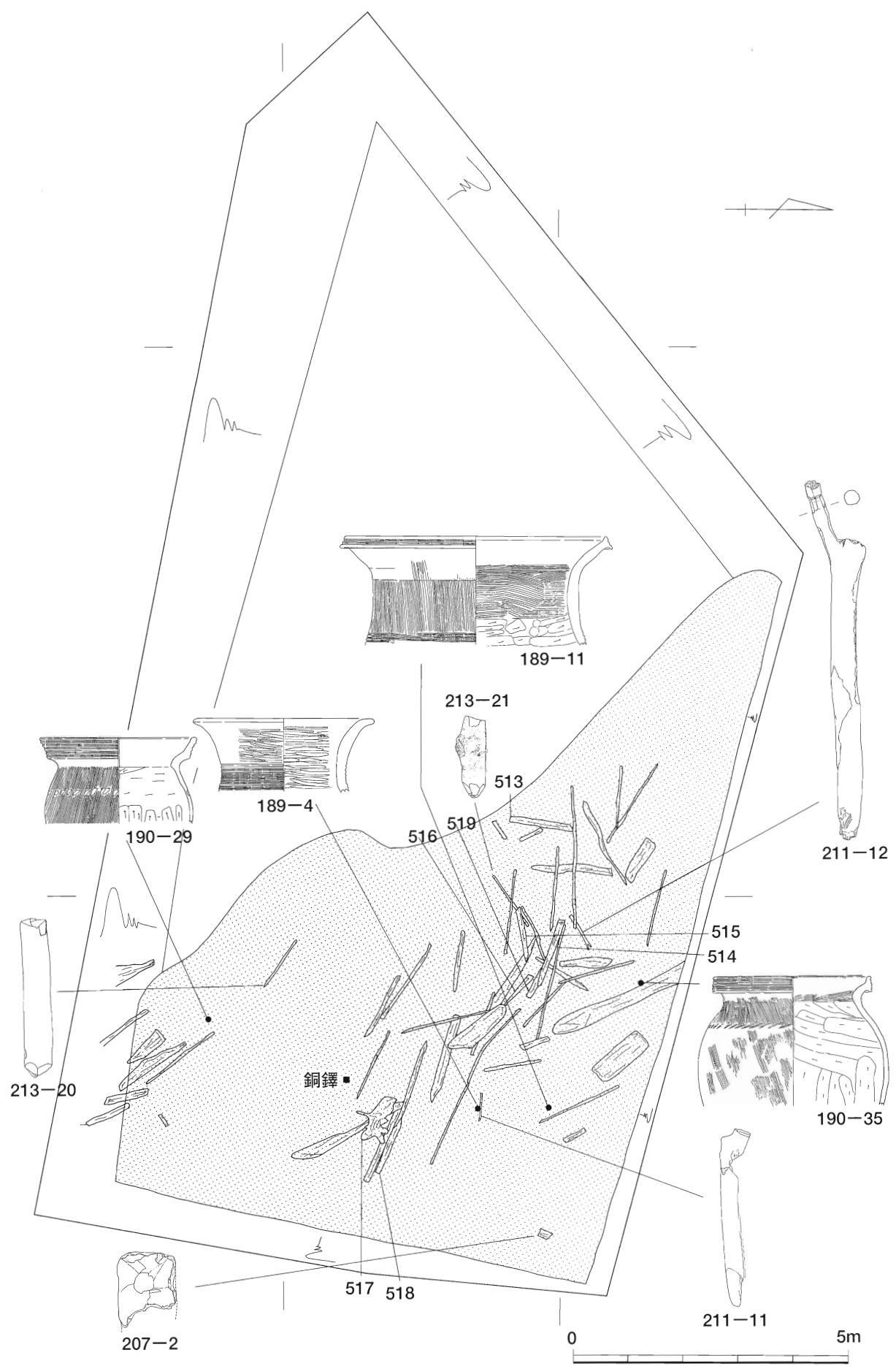
縄紋土器（1～3）、弥生土器（4～50）を図示した。

1は口縁部の下に1条の突帯を持ち、地文には縄紋を施し、突帯の上にも縄紋を施すので突帯は平たく潰れている。胎土には纖維を含む。2は「D」字状の爪形文を3列以上施す。3は外面はケズリのような粗い条痕、内面はケズリ後ヨコナデを施す。1は長山式1類、2は北白川下層Ⅰa式または宮尾式、3は晩期と考えられる。

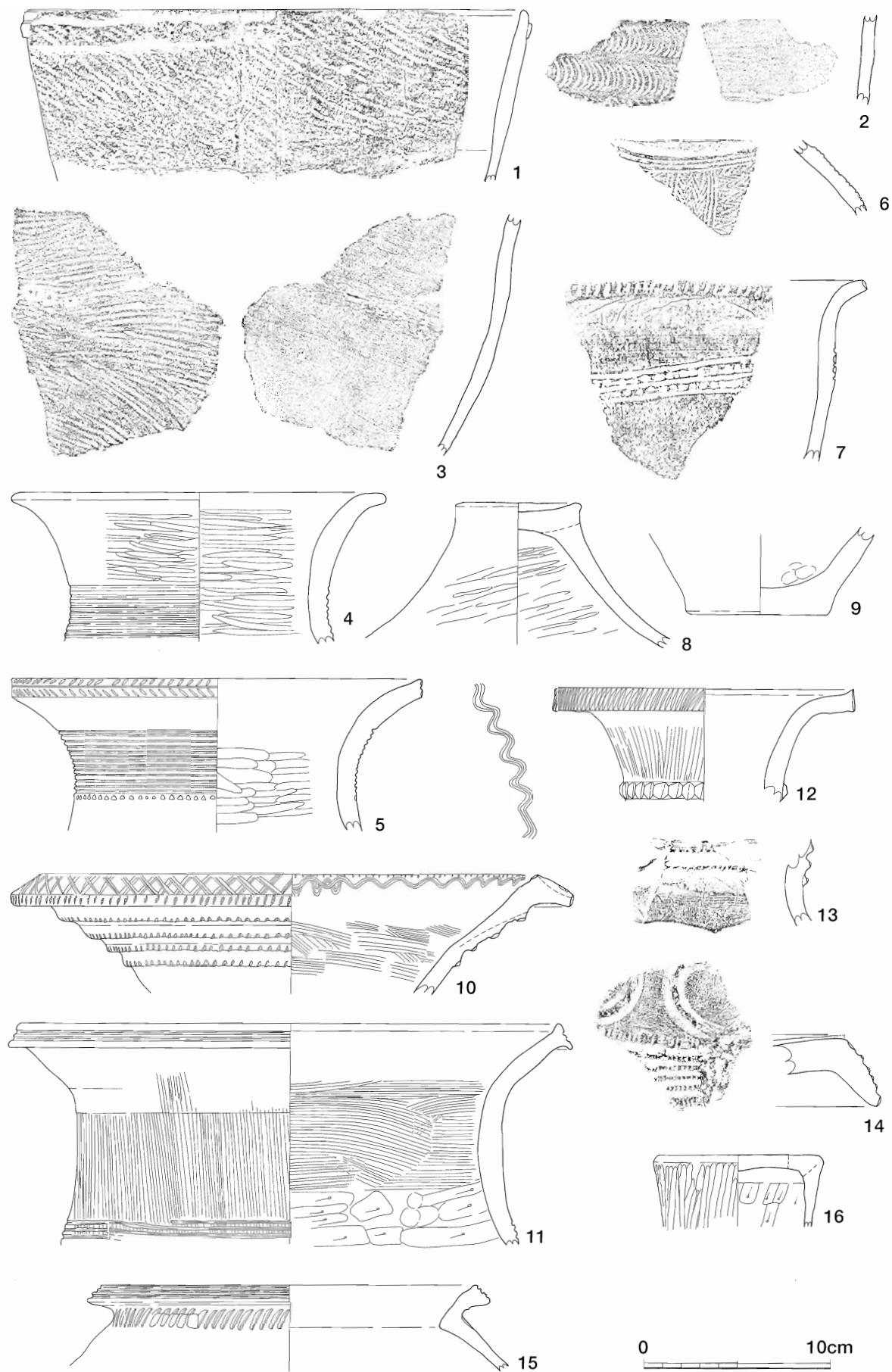
4～9は弥生前期の土器である。4、5は共に頸部に十条近くのヘラ描直線文を施す。6は頸胴部境に削り出し突帯と3条の直線文を持ち、その下に縦の直線文で区画された縦や横方向の羽状文を施す。7は胴部の3条のヘラ描直線文の間に刺突を施す。これらの土器は全て前期末と考えられる。

10～22は中期の土器である。10、13、14は加飾広口壺で、10は口縁端部に櫛描斜格子文と刻み目を持ち、その下に4条の刻み目を持つ突帯を持つ。口縁部内面も櫛描波状文で加飾する。13は刻み目を持つ突帯の下に櫛描直線文と櫛描斜格子文を施す。14は口縁端部を垂下させ、口縁部内面にも突帯を持つ。12は緩やかに頸部から口縁部へ移行し、頸部には突帯を親指と人差し指で摘み、圧痕突帯としている。11は大型の広口壺であるが加飾はしなくなり、頸部に退化した凹線文を持つ。15の頸部には工具による刺突文が施され、一部は上からナデが行われている。16は台形土器と思われる。外面はタテヘラミガキ、内面はヘラケズリで、頂部と思われる部分は平坦である。17は高坏である。形態や特徴は第183図7に似る。18は台付鉢と思われ、台部に四方向の円形の透かしを持つ。台部との界の突帯は、摘み出したような形態である。19は小型の壺か鉢の蓋と考えられる。外面には黒色物が塗布されている。20は無頸鉢のような形をしており、12条以上のB種凹線文の後、口縁部近くに竹管文を一列巡らす。12、13は中期中葉古相に遡る可能性を持つが、10、17は同新相、14は中期後葉古相、11、15は同新相と考えられる。20は弥生中期よりも時期が下る可能性を持つ。

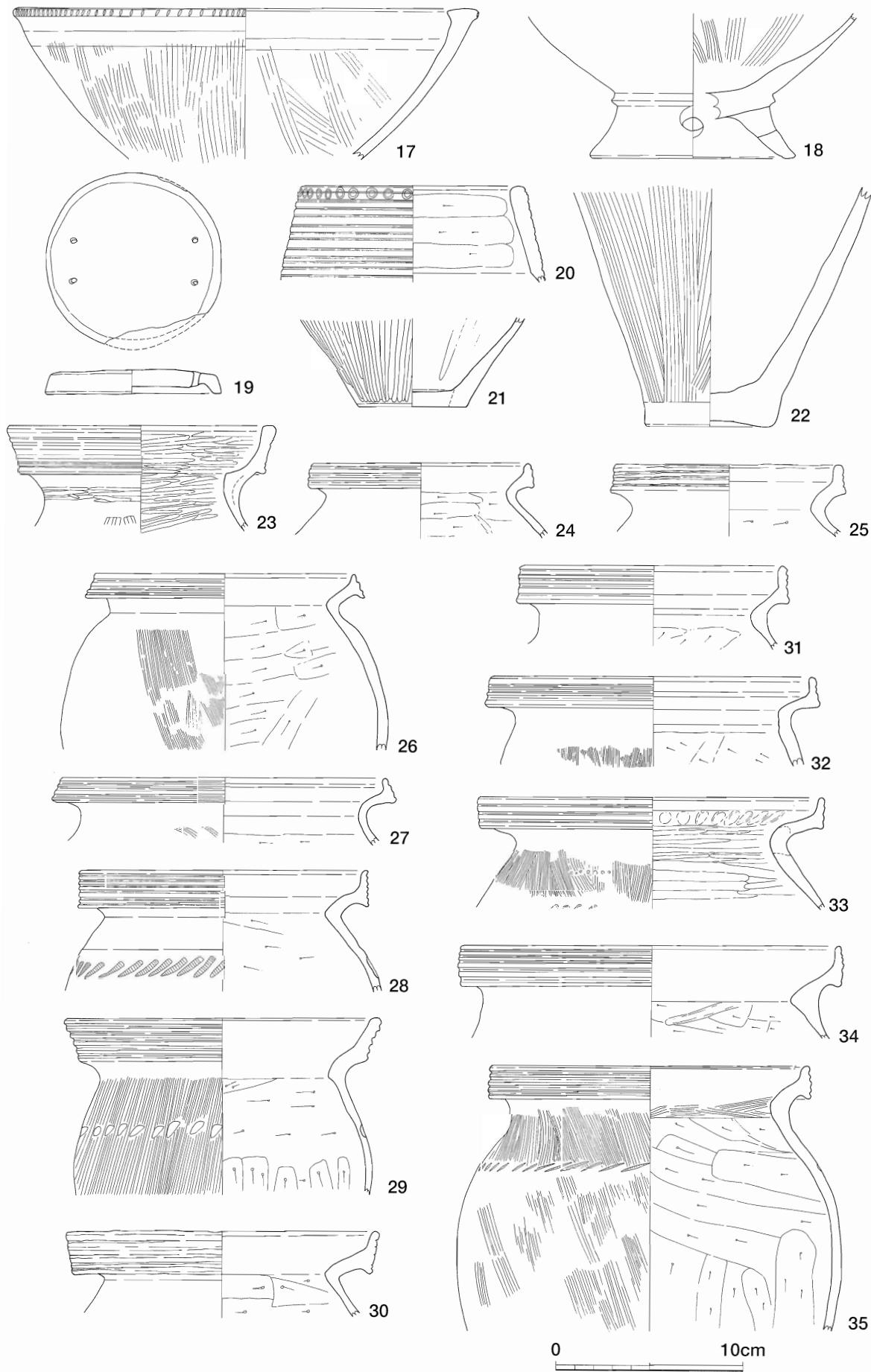
23～50は後期の土器である。23は壺であるが、口縁部外面に8条の擬凹線文を施し、上三分の二ほどは更にヨコナデを施す。甕は凹線文を持つもの（24～35）と擬凹線文を持つもの（36、37）、ヨコナデのもの（38～40）とに分けられるが、凹線文のものと擬凹線文のものとはほぼ同程度認め



第188図 V区-B青灰色砂礫層 5 遺物分布図 (S=1/100)

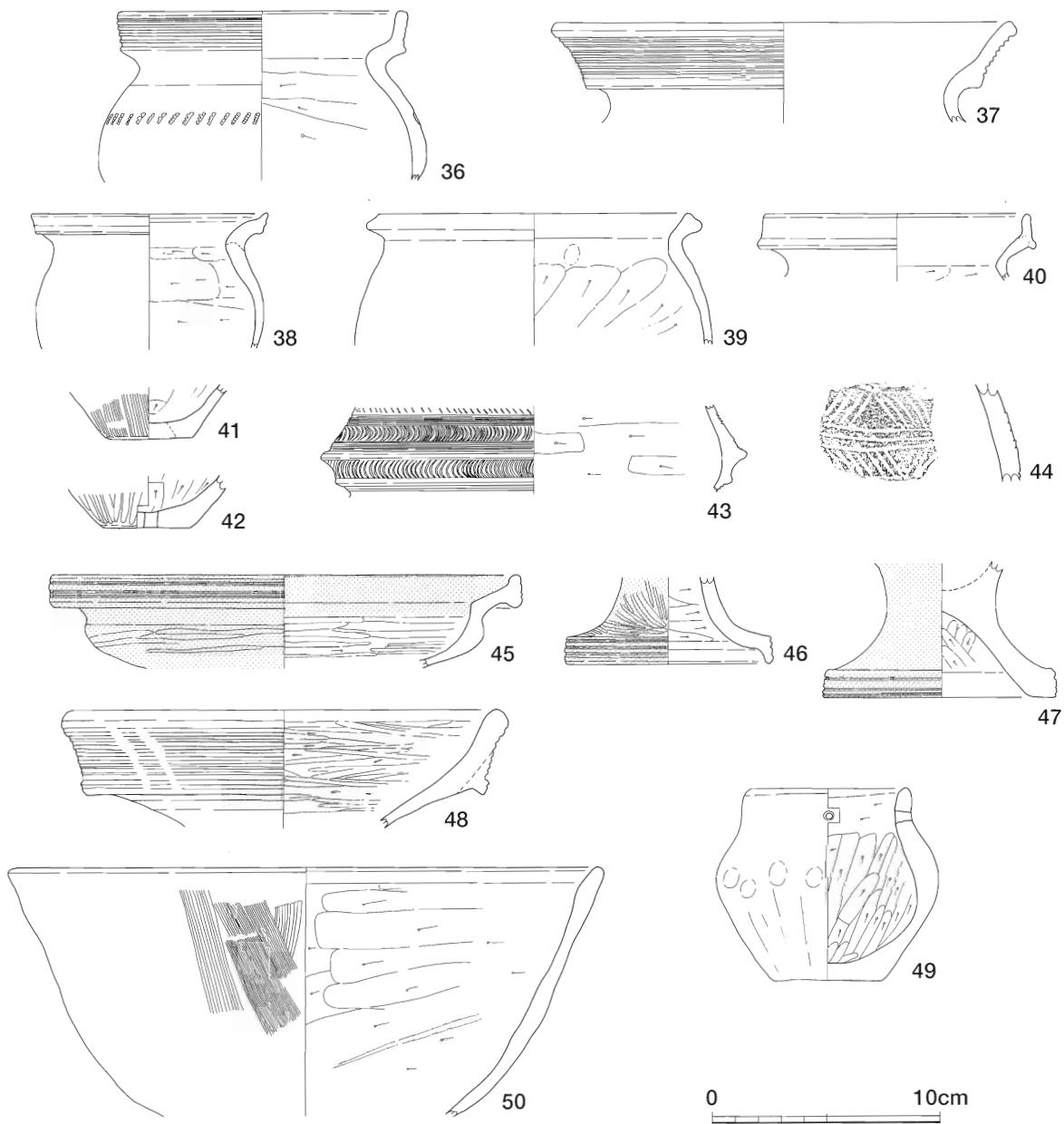


第189図 V区-B青灰色砂礫層5出土土器実測図(1) (S=1/3)

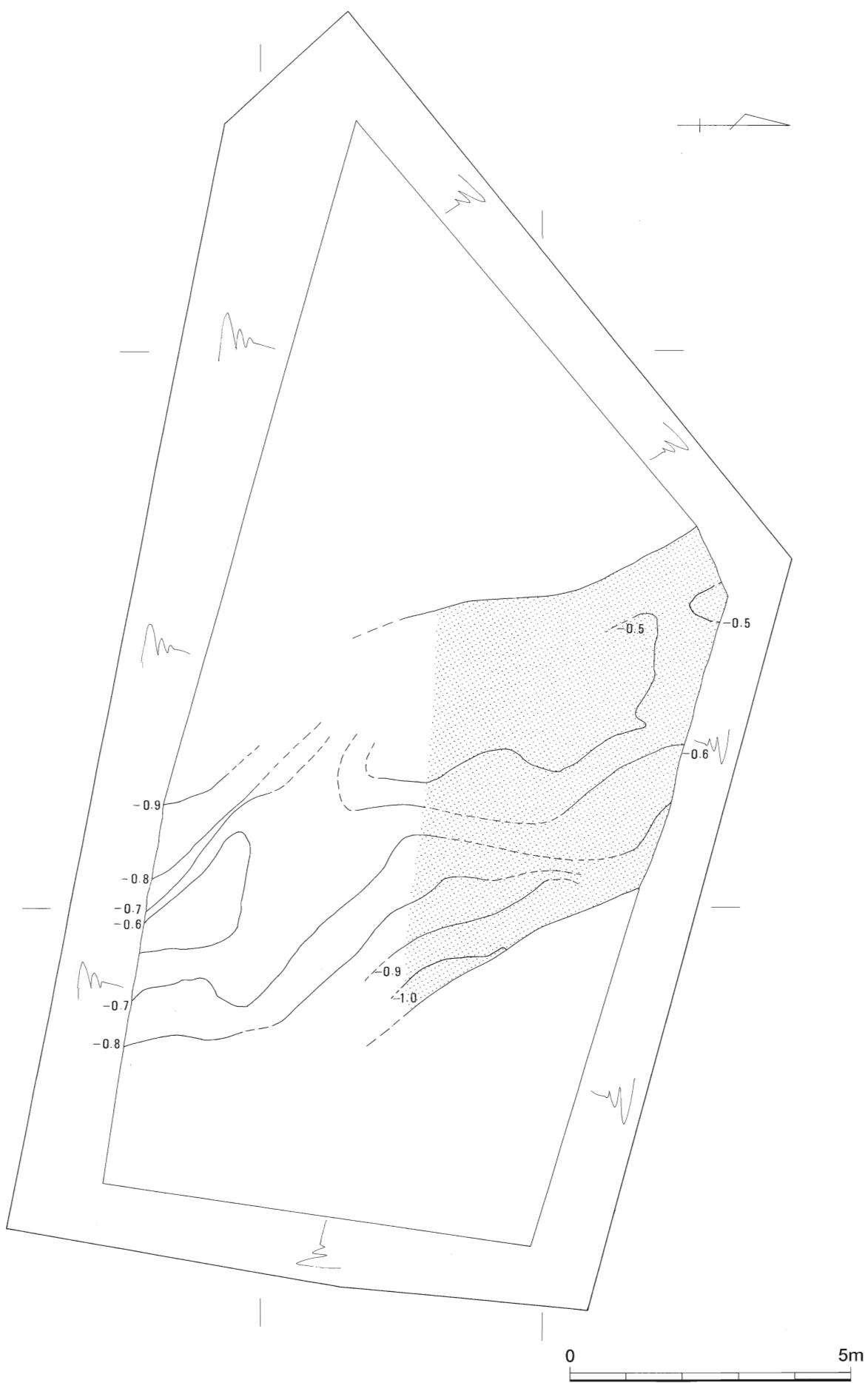


第190図 V区-B青灰色砂礫層5出土土器実測図(2) (S=1/3)

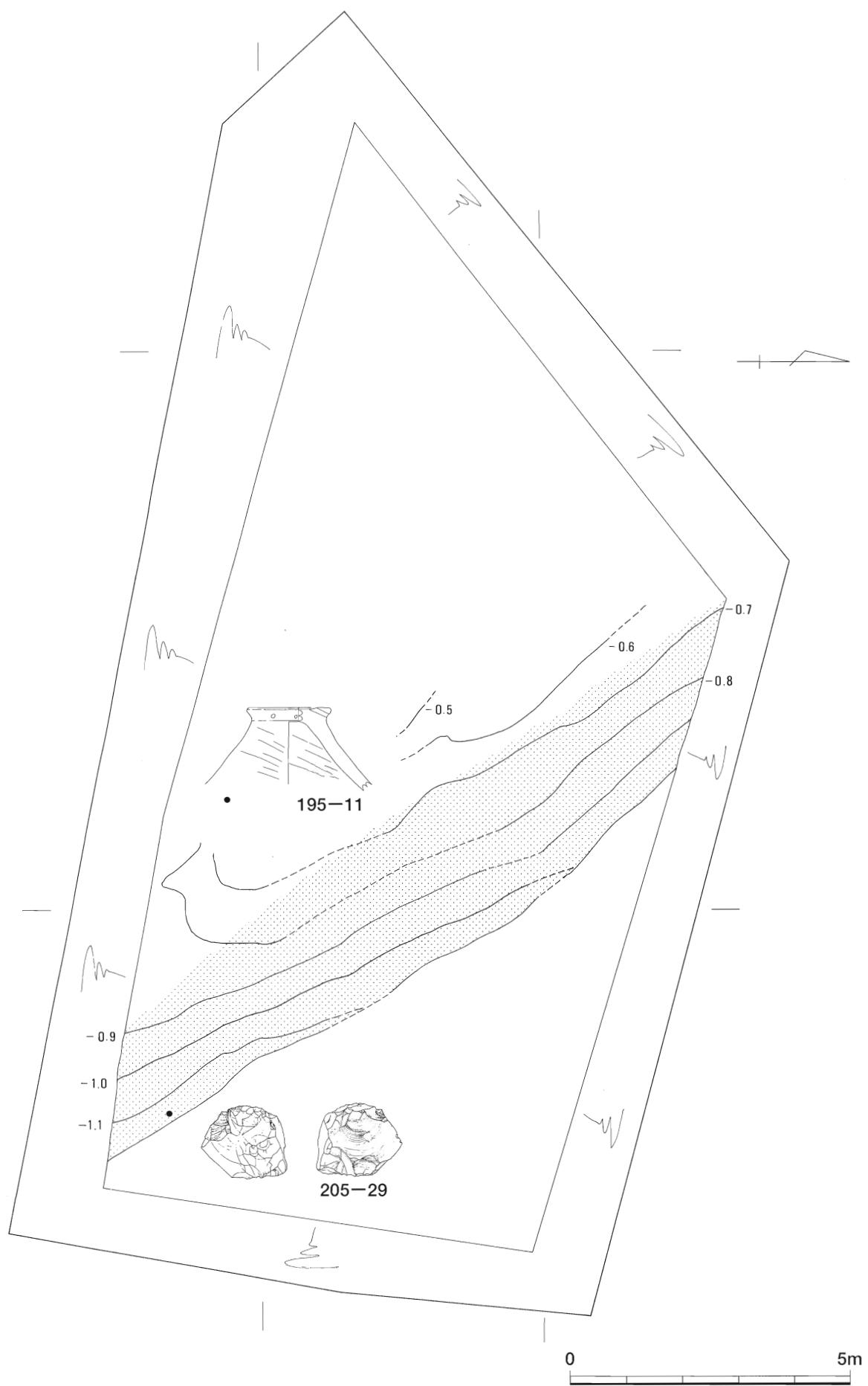
られた。四線文の条数は3条から5条が多く、当然のことであるが口縁部の長いものほど条数が多い。30はヨコナデが強く施されている。36は貝以外の原体を用いて施された5条の擬凹線文（擬凹線文I類⁽³⁾）で、37は8条の擬凹線文（貝と考えられる。擬凹線文IV類）が施される。これら口縁部に文様を持つ甕には、口縁部の下で強く屈曲するもの（28、31～33、36）の他に、口縁部を下方に拡張するもの（35）や口縁部下の屈曲が弱いもの（29、37）がある。このような特徴は後期Ⅲ期からⅤ期にかけて見られる。38、39は共に口縁端部が短い。43、44は鉢である。43は貝による直線文の間に貝による刺突文を施し、44は直線文の間に貝による山形文を施す。45は壺部から口縁付近で段を持って屈曲する高壺である。45の脚部が46や47と考えられ、いずれも赤色物を塗布する。高壺は1点しか図示しなかったが、壺部の破片は赤色物を塗布されたものが4点（以上）、塗布されないものが5点（以上）認められた。48は鼓型器台である。直線文は四線文ではなく擬凹線文の可能性がある。内面はヘラケズリの痕を残す。器台は図示したもの以外に8点（以上）認められ、そ



第191図 V区-B青灰色砂礫層5出土土器実測図(3) (S=1/3) (トーンは赤色物塗布を示す)



第192図 V区—B青灰色砂礫層6測量図 ($S=1/100$)



第193図 V区-B青灰色砂礫層 7 測量図 ($S=1/100$)

の内鼓形器台は5点（以上）であった。49は小型の鉢で、作りは厚手である。50は大きく開いて口縁部へ移行し、外面はタテハケ、内面はヨコヘラケズリを行う。内外の一部に煤が付着している。甌形土器ではなく鉢の一種として復元したが、朝酌川遺跡群ではほとんど見かけない土器である。39が後期Ⅰ期、24～27、38が後期Ⅱ期に遡る可能性を持つ他は、ほとんどが後期Ⅲ期と考えられる。また、37、40は後期Ⅳ期と考えられる。

砂礫層5の堆積した時期の下限は、弥生時代後葉と考えられる。

なお、砂礫層5から出土した炭化木の¹⁴C年代の測定を行ったが、2580±50BP（Beta-114627）の値を得た（第8章）。弥生前期の木の再堆積の可能性を持つ。

(8) 青灰色砂礫層6、同出土土器（第192、194図）

青灰色砂礫層6は、調査区の北から中央付近にかけて、標高-0.5～-1.0mに分布していた。

砂礫層6からは、量は少ないが縄紋土器と弥生土器が出土し、縄紋土器（1、2）、弥生土器（3）を図示した。

1は緩やかに口縁部へ移行する深鉢で、端部はわずかに面を持つ。内外面共に条痕調整である。

2は口縁端部に刻み目を持ち、口縁部外面には2つ一単位の爪形文を4列以上施す。

3は直立する頸部から屈曲して口縁部に至る。口縁部外面には3条のA種凹線文、頸部には2条のB種凹線文を施し、その下には2列のハケ原体による刺突列点文を持つ。また、口縁部内面には3つ一単位の竹管文を施す。2は縄紋前期の羽島下層Ⅱ式、1は晩期の粗製深鉢、3は弥生後期Ⅰ～Ⅱ期の壺である。

砂礫層6の堆積した時期の下限は、前述した砂礫層5の時期から弥生時代後葉と考えられる。

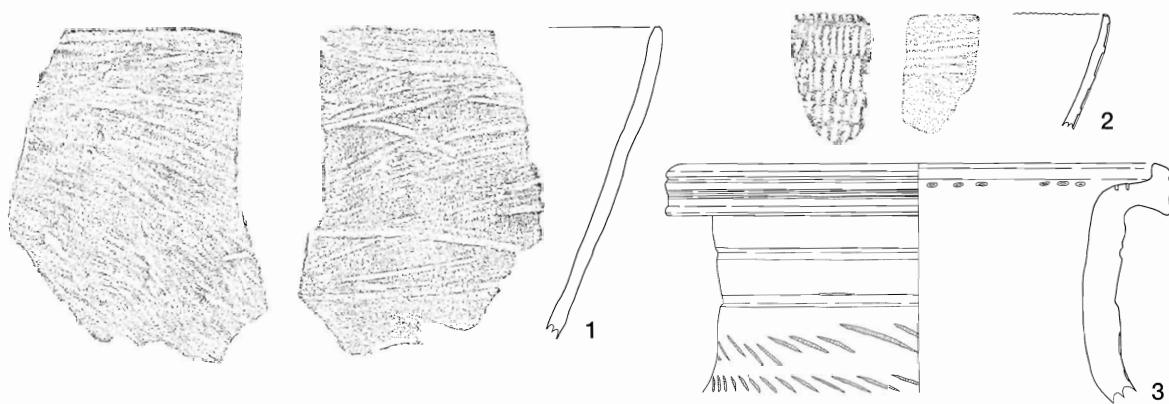
(9) 青灰色砂礫層7、同出土土器（第193、195図）

青灰色砂礫層7は、砂礫層6と同様に調査区の北から中央付近にかけて、標高-0.5～-1.1mに分布していた。

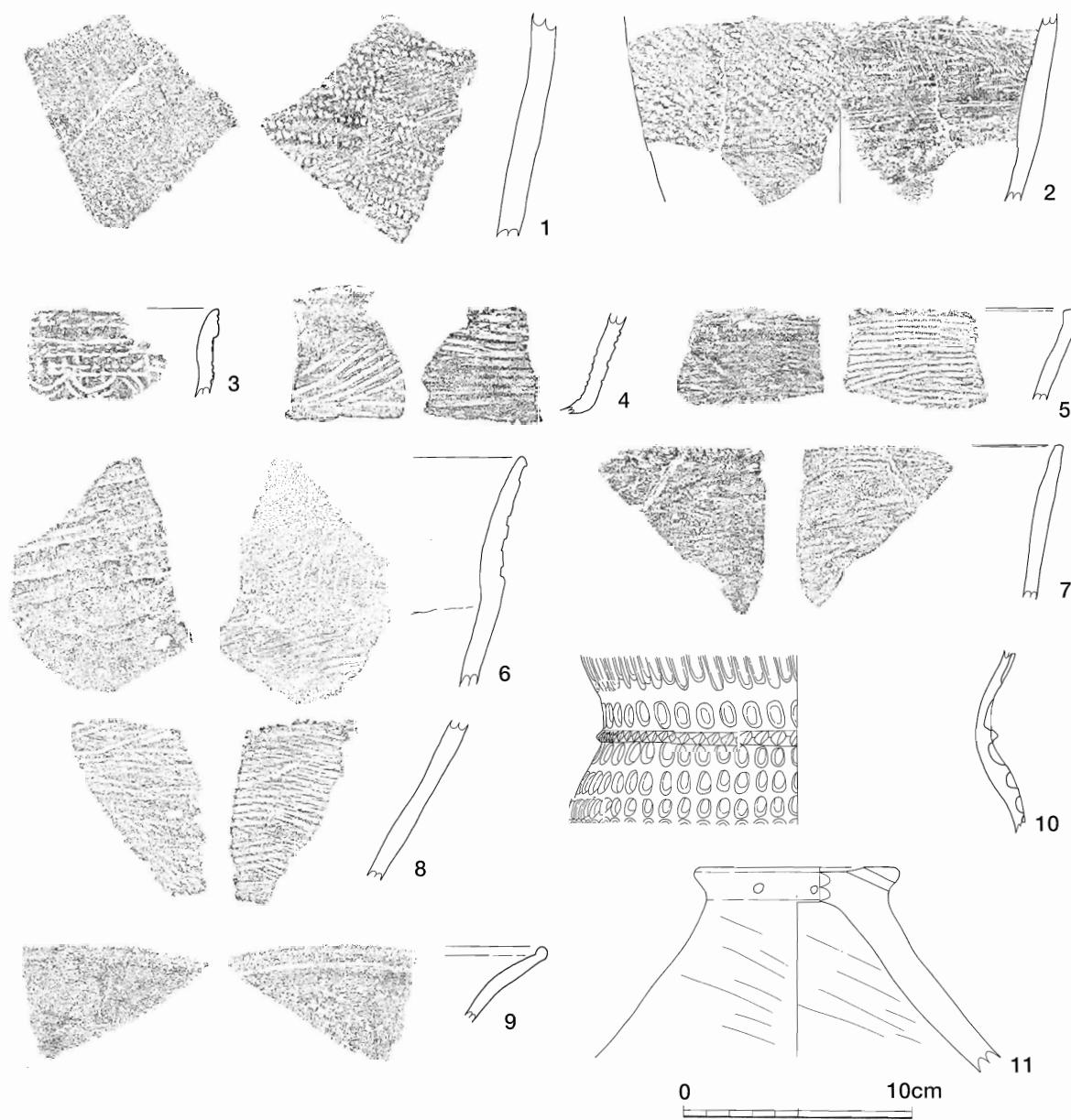
砂礫層7からは、量は少ないが縄紋土器と弥生土器が出土し、特に縄紋土器が多く出土した。縄紋土器（1～10）、弥生土器（11）を図示した。

1、2は纖維を含む土器で、1は内面に、2は外面に縄紋を施す。3は口縁部を外方に肥厚させて、竹管状工具による押引文を施し、胴部にも押引文を直線文及び波状文風に施す。4は外面に右上がりの沈線文を施す。5は口縁部付近で屈曲する。6は胴部でわずかに屈曲して口縁部に至り、4列の押引文を施す。9は大きく開いて口縁部へ至り、上方に肥厚する。10は頸部が縮まり、刻み目突帯を施す。また、その上下には楕円形の刺突を突帯の上には1列、突帯の下には4列以上施し、更にその上には短い沈線を縦に施す。外面の調整は不明で、内面の調整は条痕後ナデと推測されるが焼成がやや悪いので詳細は不明である。色調は暗褐色である。1、2は早期末から前期初頭、3～6は前期の土器で、特に3は西川津式A3類、6は口縁部を肥厚させないのでA3'類と考えられる。7、8は後期から晩期と推測される。9は晩期の浅鉢である。10はこれまで朝酌川遺跡群ではほとんど見られない土器である。中期末に見られる、列文を区画内に持つ土器の一群と関連を持つのかもしれない⁽⁴⁾。

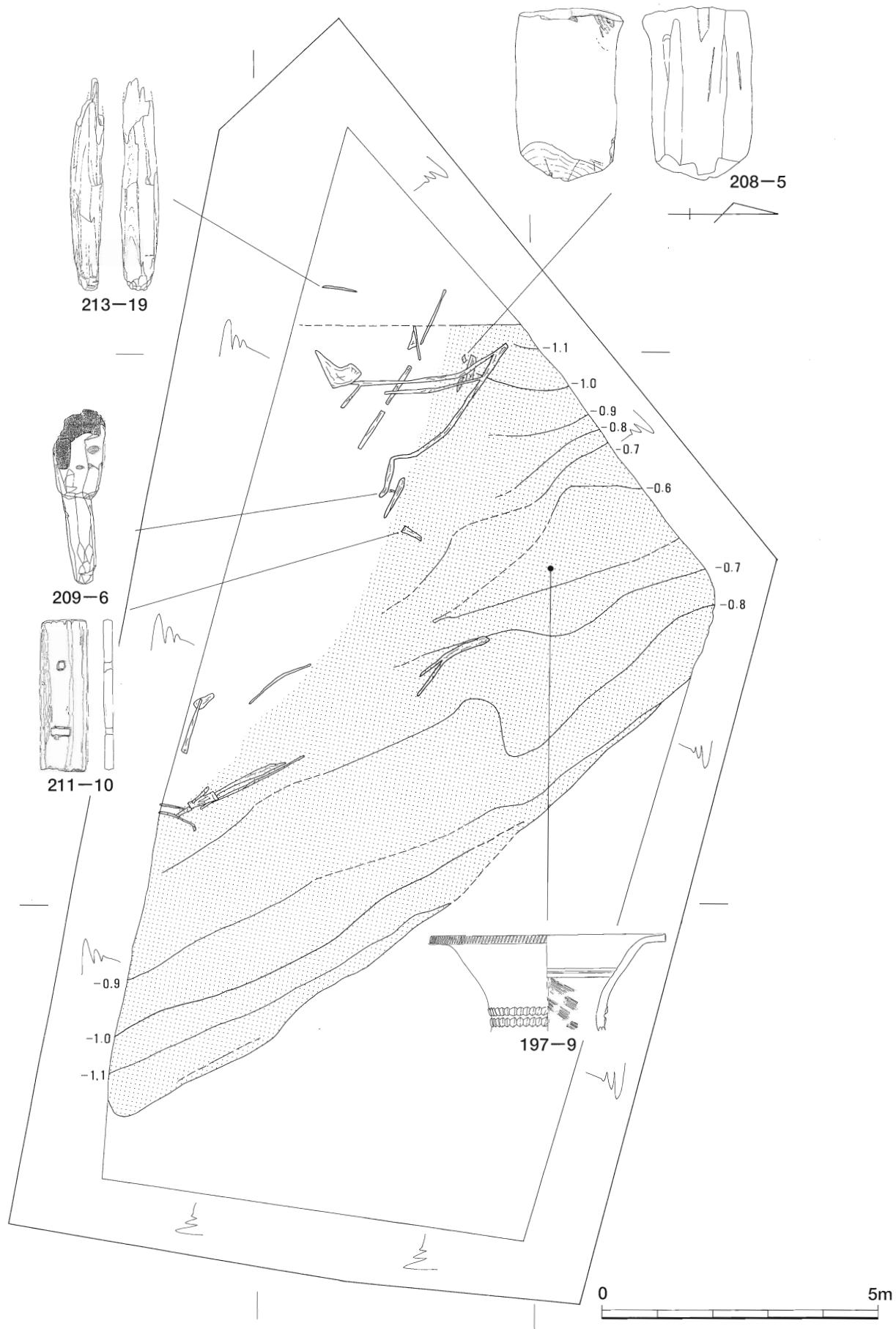
11は前期の蓋形土器である。頂部に紐用と思われる小孔を2つ開ける。



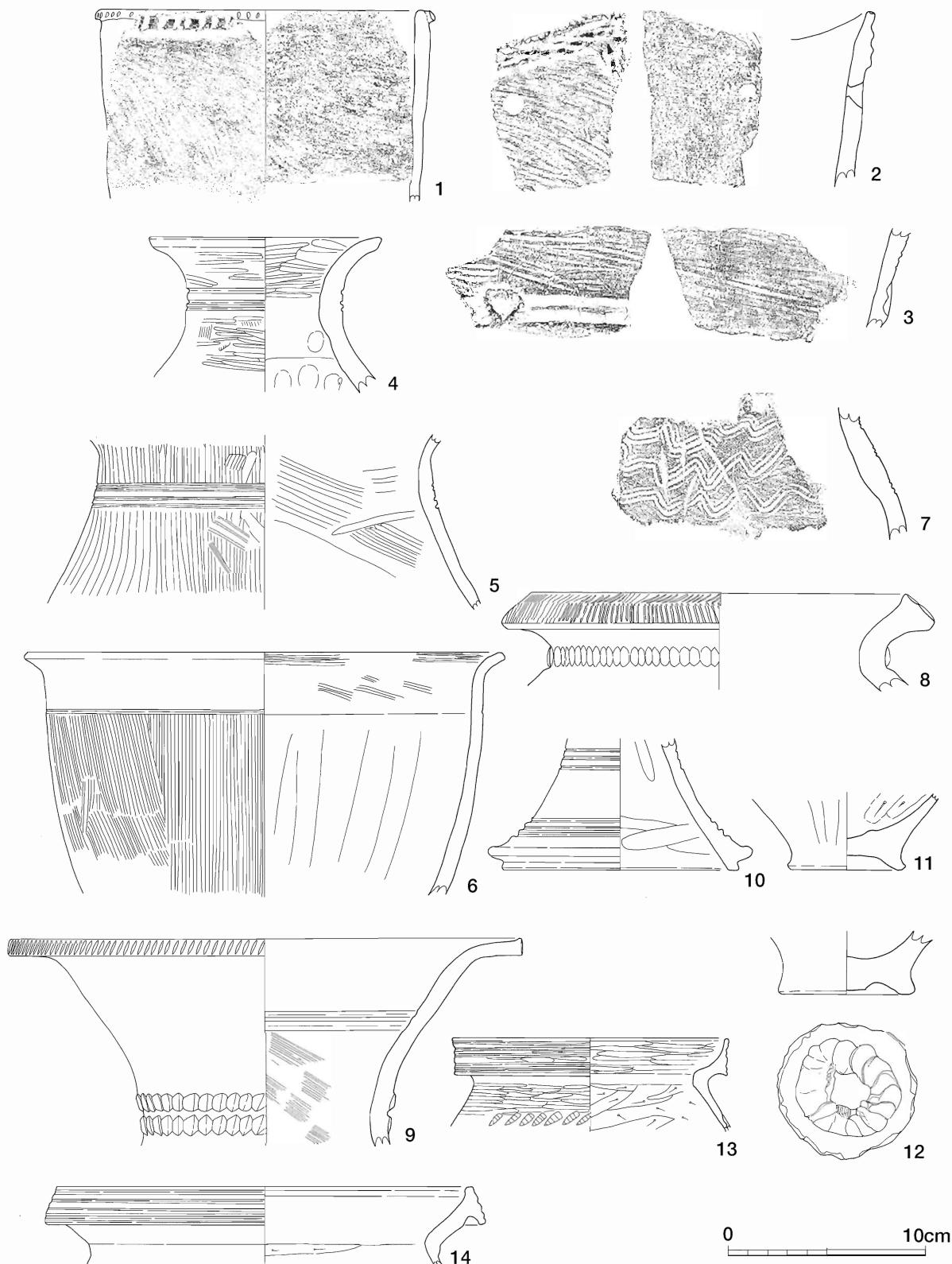
第194図 V区-B青灰色砂礫層 6 出土土器実測図 (S=1/3)



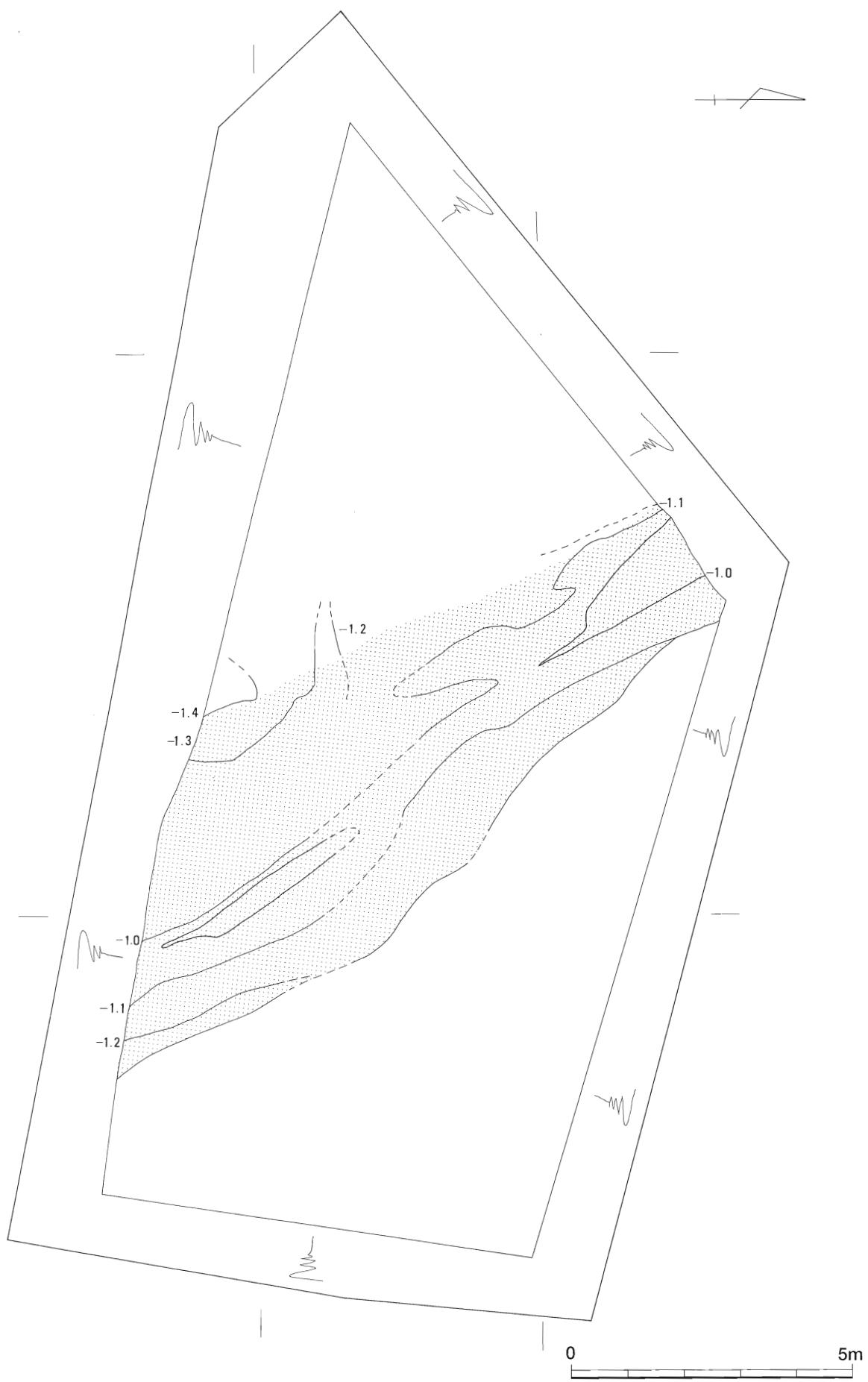
第195図 V区-B青灰色砂礫層 7 出土土器実測図 (S=1/3)



砂礫層 7 の時期は、直接土器を伴ってはいないが、前述した砂礫層 5 の時期から弥生時代後期後葉を下限とすると考えられる。



第197図 V区-B青灰色砂礫層 8 出土土器実測図 (S=1/3)



第198図 V区-B青灰色砂礫層9測量図 ($S=1/100$)

(10) 青灰色砂礫層 8、同出土土器 (第196、197図)

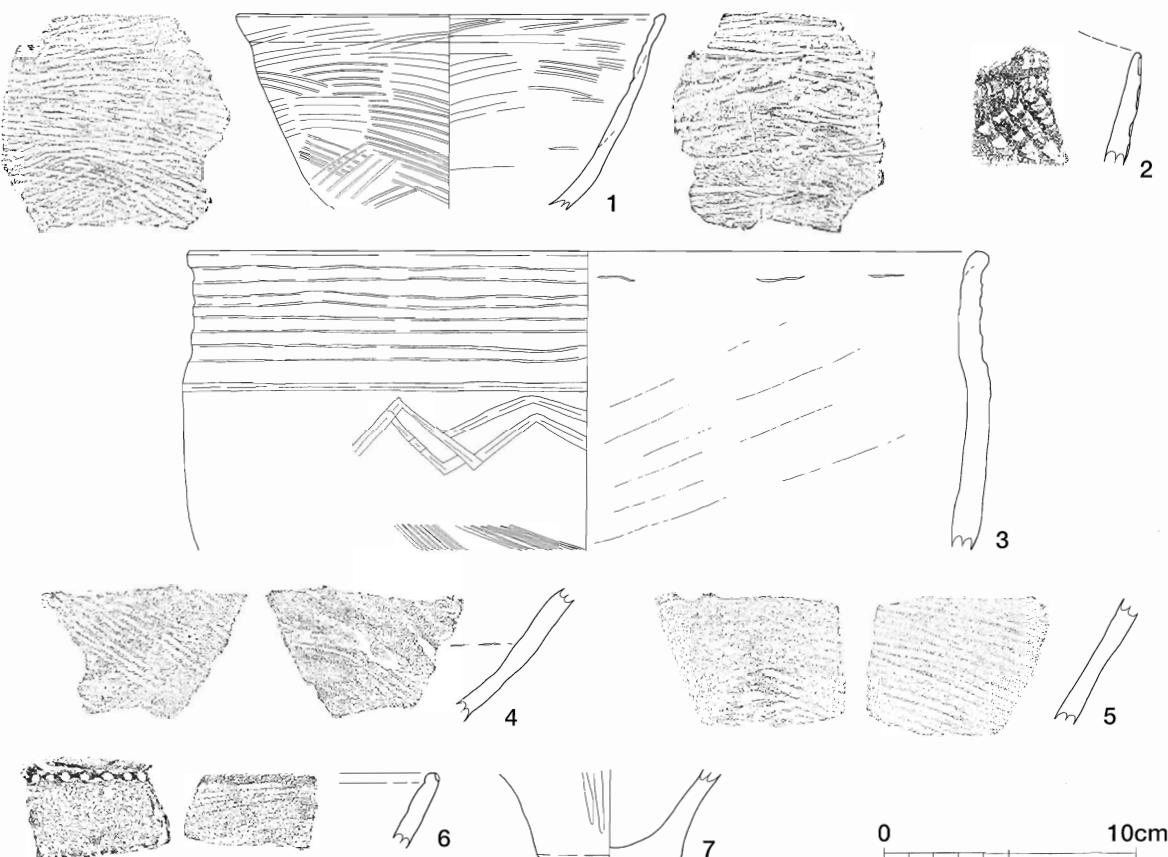
青灰色砂礫層 8 は、調査区の北西から南東にかけて、標高—0.6～—1.1mに分布していた。

砂礫層 8 からは、縄紋土器や弥生土器が出土した。縄紋土器 (1～3)、弥生土器 (4～14) を図示した。

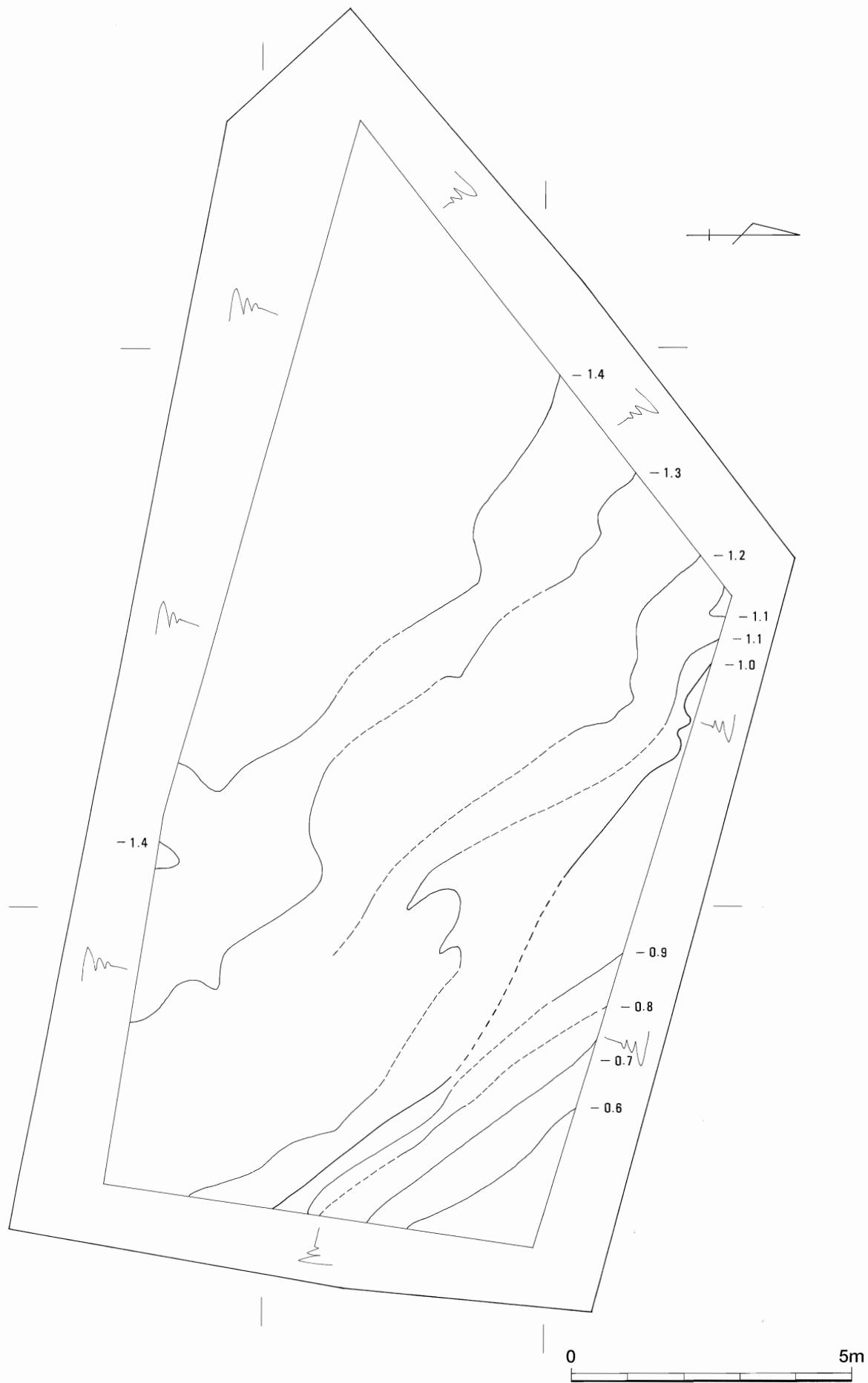
1 はほぼ直立する口縁部に接して、刻み目を持つ肥厚帯を持つ。2 は波状口縁と考えられる。口縁部に接して肥厚帯が付き、その上から竹管状工具で刻み目を入れる。3 は胴部に 2 条の凹線文を持ち、その上に貝の圧痕を施す。1 は長山式 1 類、2 は西川津式 A3 類、3 は後期後葉の宮滝式と考えられる。

4～6 は弥生前期の土器である。4 は頸部がやや細く、3 条のヘラ描直線文を施す。6 は胴部に 1 条のヘラ描直線文を施す。6 は前期中葉、4、5 は前期後葉と考えられる。7～12 は中期の土器である。7 は壺の胴部で、3 列以上の櫛描波状文を持つ。8 は口縁部を上下に拡張し、口縁部外面にはハケ原体による 2 列の羽状文、頸部にはやや浅い指頭圧痕文を持つ。9 は頸部に 2 列の指頭圧痕文を持つが、粘土をつまむのではなく指で押して圧痕を付けている。口縁部内面のやや下がったところに、凹線文風の凹みを 2 条持つ。11、12 は底部であるが、12 は底部の外周を下から指で押して一周している。7 は中期中葉古相、9 は中期後葉古相、8、10 は同新相と考えられる。13、14 は後期の土器である。13 は口縁部の 5 条の A 種凹線文の間をヘラミガキし、頸部外面や口縁部内面もヨコヘラミガキを行う。胴部の刺突文は貝殻をあてたと考えられる。14 は頸部内面に稜を持つので後期 II 期、13 は後期 III 期と考えられる。

砂礫層 8 の堆積した時期の下限は、13 から弥生時代後期中葉と考えられる。



第199図 V区-B青灰色砂礫層 9 出土土器実測図 (S=1/3)



第200図 V区-B青灰色泥層（古宍道湾の泥層）測量図 (S=1/100)

なお、砂礫層8から出土した種子の¹⁴C年代の測定を行ったが、5030±50BP (Beta-114628) の値を得た（第8章）。縄紋時代の再堆積の可能性を持つ。

(11) 青灰色砂礫層9、同出土土器（第198、199図）

青灰色砂礫層9は、調査区の北西から中央付近にかけて、標高-1.0~-1.4mに分布していた。砂礫の締まりが他の砂礫層に比べて強く、また、一部に泥層を含んでいた。

砂礫層9からは、量は少ないが縄紋土器と弥生土器が出土した。縄紋土器（1~6）、弥生土器（7）を図示した。

1は楕状に緩やかに口縁部へ移行し、端部は丸くおさめる。内外とも条痕調整である。2は波状口縁になると推測され、竹管状工具による斜行する押引文を施す。3はわずかに口縁部へ向けて屈曲し、口縁部外面には5条の押引文を施す。胴部外面には不明瞭であるが山形文を施す。6は口縁が若干肥厚し、外方へ向けて「O」字に近い刻み目を持つ。1~5はいずれも縄紋前期と考えられる。この内2は西川津式A2類かA2'類、3は同A3'類である。7は弥生中期の甕の底部である。

砂礫層9の堆積した時期の下限は、7から弥生時代中期と考えられる。

砂礫層9に削られた青灰色泥層の上面の標高は-0.6~-1.4mであった（第200図）。調査区の北東側は等高線の幅が狭いが、調査区の南西側ではほぼ標高-1.4mで勾配が緩い。このことから、V区-Bでは調査区の南西側に流れの中心があったことがうかがわれる。

なお、調査区の西側、泥層の上面からも多数の人頭大の石が検出されたが、これらは泥層の上面にあることから、当初の位置から動いたと考えた。護岸の石と同様の用途が考えられる。

(2) 石 器（第201~206図）

V区-Bから出土した石器のうち、図示したものは37点である。木製品と同様に、所属する正確な時期を特定することは難しい。

第201図1~8は石斧である。1は太形蛤刃石斧であるが、中程で折れている。一部に自然面を残す。2も自然面を残す。共に未製品と思われる。3は刃部が鋭く、やや斜めの擦痕を持つ。5は形態から磨製石斧と考えた。頂部と胴部に調整が見られる。6は全体に研磨が行われている。7は敲打痕が中程に見られるので、破損後敲石に転用したと考えられる。

第202図9、10は石斧を転用して砥石にしたものである。9は破損した面を砥面として使用している。10は元々は加工用の石斧と考えられるが、三面を砥石として使用している。11は破損面に調整が見られ、石材から石斧の未製品の可能性を持つ。

第203図12~14は敲石や磨石である。12は片面には敲打痕はあまり見られず、調整が見られるが、その裏側の面には敲打痕が多く見られる。13は側面に敲痕（点のスクリーントーンの部分）が見られ、表面や裏面には磨痕が見られる。敲痕は片面の中央付近にも見られる。全体に凸レンズ状の形態である。14も同様に、側面には敲痕が、表や裏面には磨痕が見られる。両面とも中程が凹み、その部分には敲痕が見られる。一方の面の凹みは稜を持ち、二段になっている。

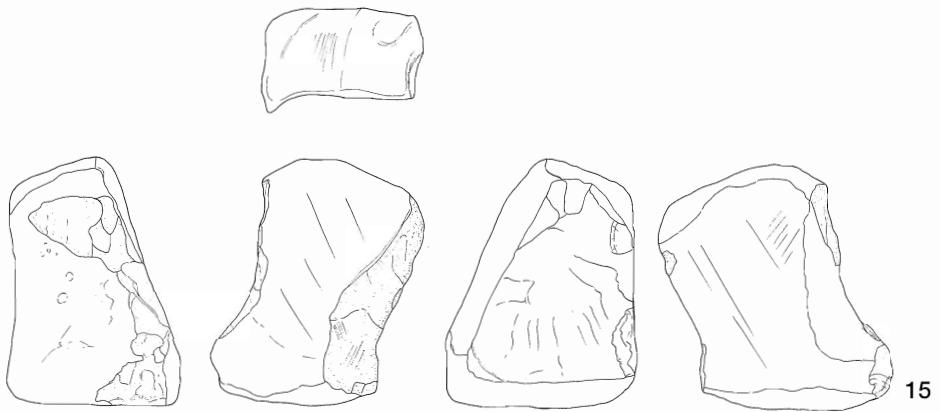
第203図15は台形状の形態の砥石である。五面を砥石として使用している。16、17は従来「大型石包丁」とされてきた石器である。断面は菱形を呈し、上下から調整を行う。17は片側に刃部を有し、その部分は表裏とも研磨が行われている。18は碧玉の石核である。側面の一部には自然面を残



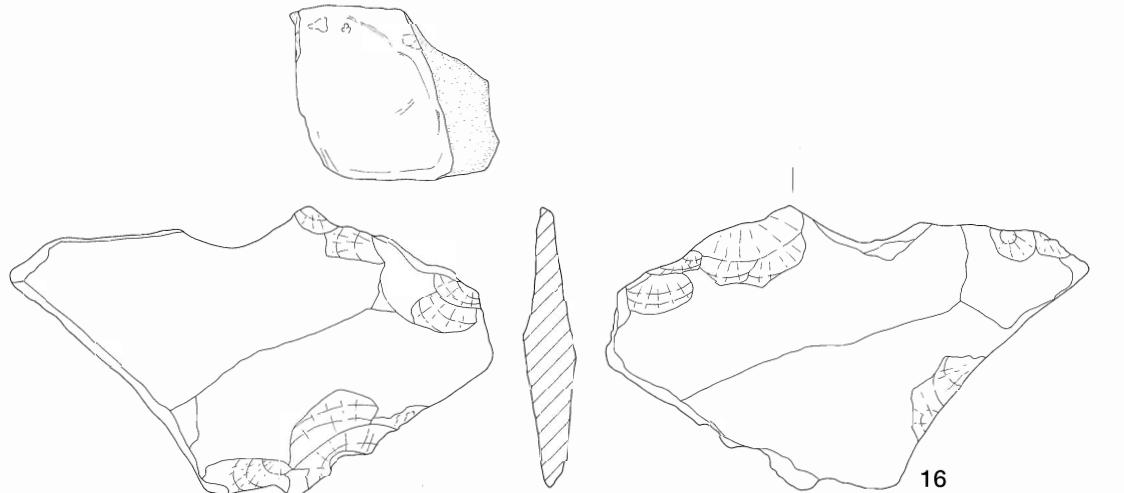
第201図 V区-B出土石器実測図(1) (S=1/3)



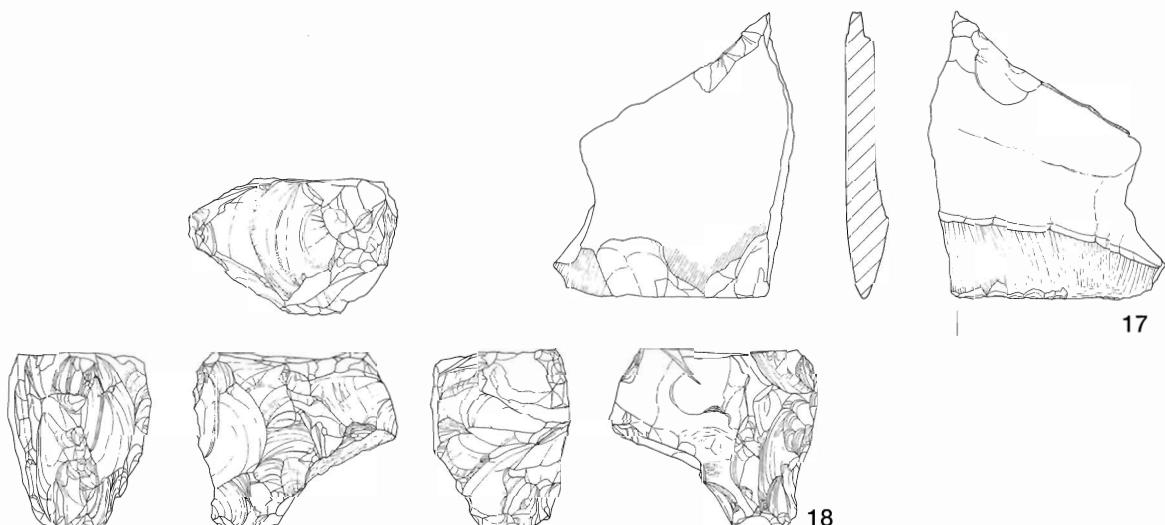
第202図 V区-B出土石器実測図(2) (S=1/3)



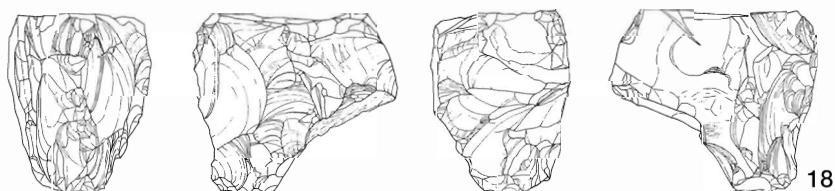
15



16



17

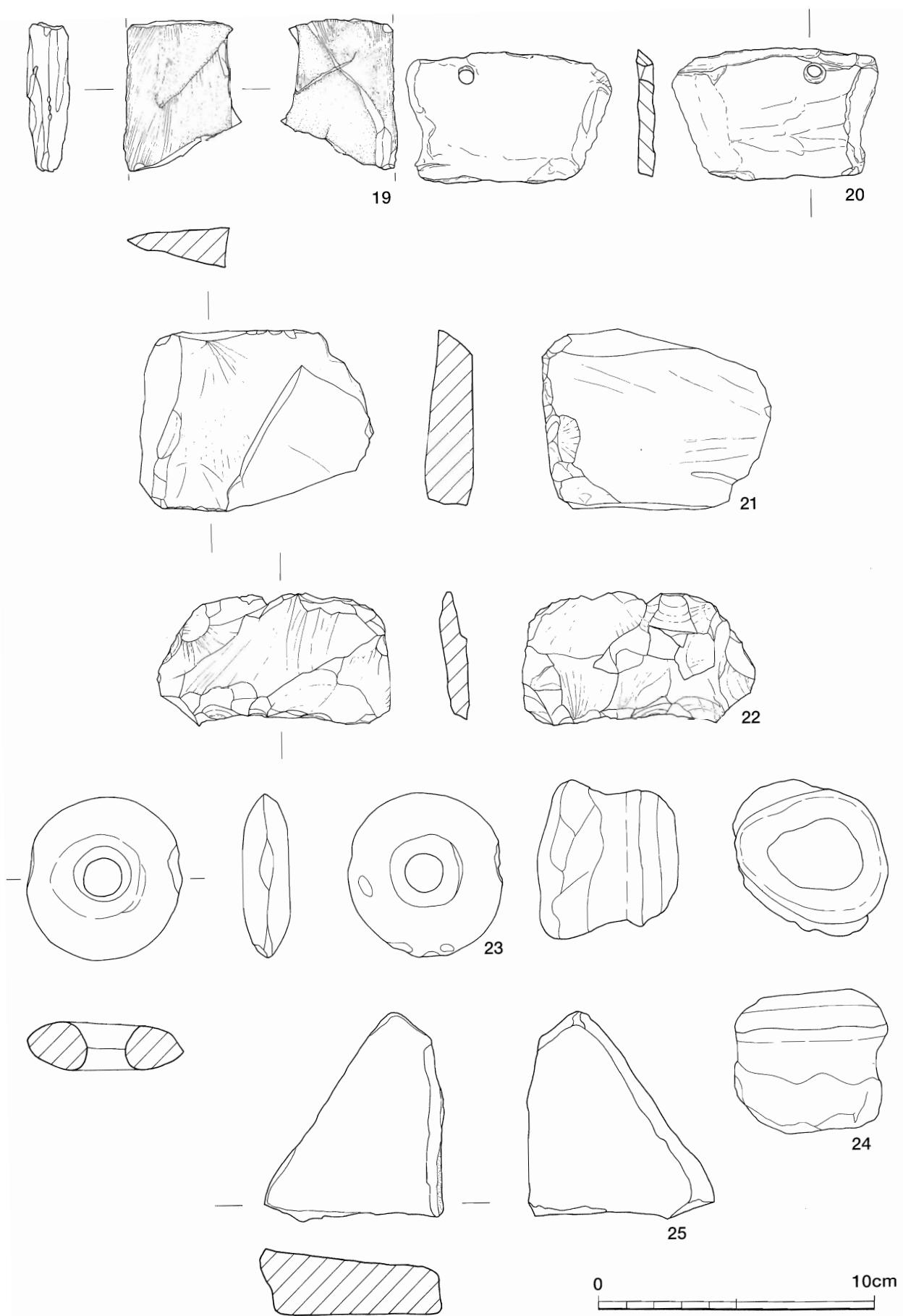


18

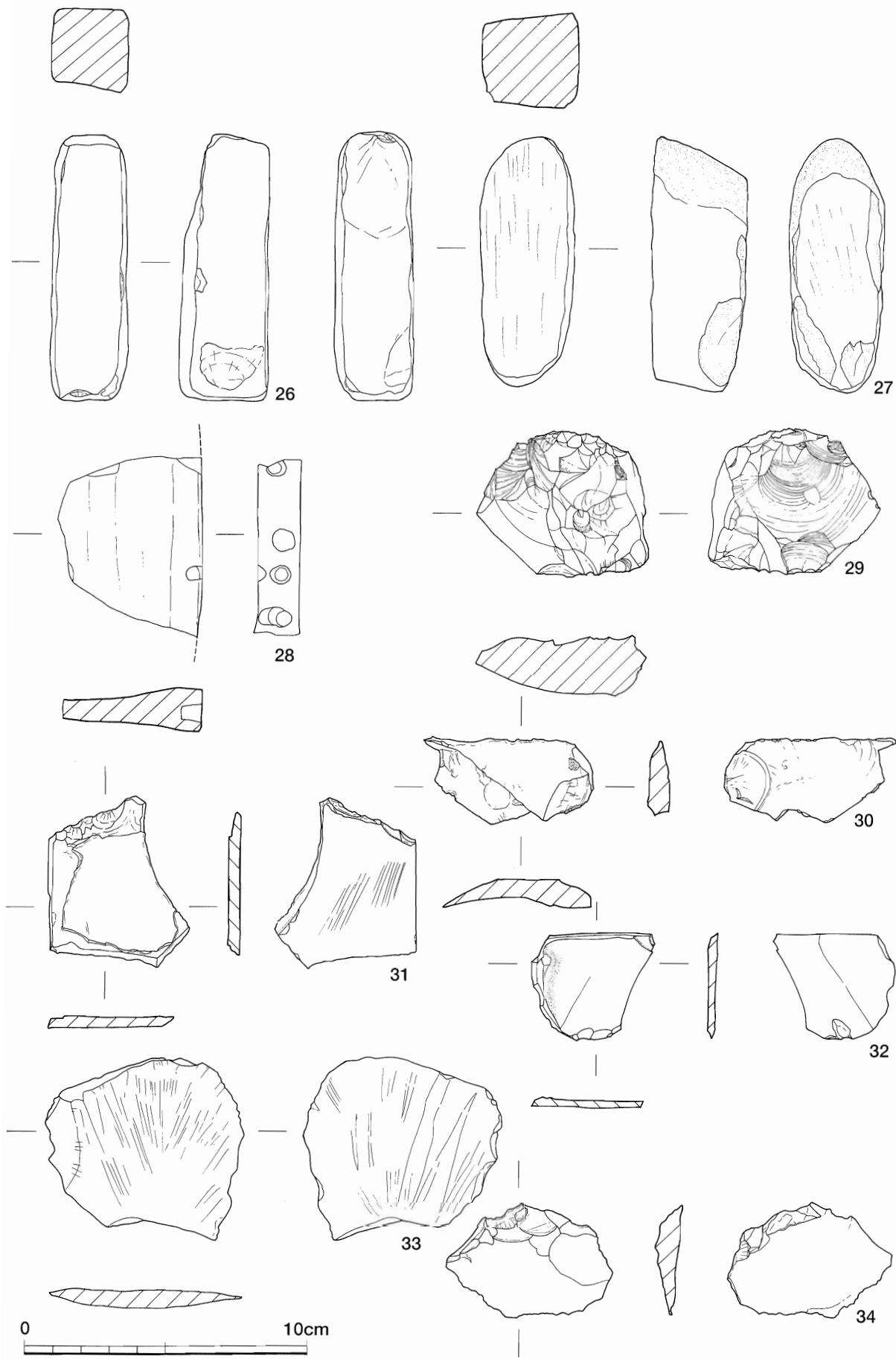


0 10cm

第203図 V区-B出土石器実測図(3) ($S=1/3$)



第204図 V区-B出土石器実測図(4) (S=1/3)



第205図 V区-B出土石器実測図(5) (S=1/2)

し、また、側面の一方は両側から剥離を行っている。この石核は第12章で述べるように花仙山の碧玉であることがわかっている。これは砂礫層5上位から出土したので、遅くとも古墳時代前期には西川津遺跡でも花仙山の碧玉を用いて玉作りが行われていたことがわかった。

第204図19は半分程しか残っていないが、断面の形態や表裏とも研磨が行われていることから、磨製石剣ではないかと思われる。

20~22は穂摘具と考えられる。20は穿孔が行われたが研磨は行われていない段階のものである。21は未製品と考えられる。側面には多数の調整の痕が見られる。22は表裏とも調整の痕が見られることから、打製の穂摘具ではないかと考えられる。

23は環状石斧である。最大径が約6cmと小型である。環状部の中には稜が見られるが不明瞭である。刃はつけられているが鋭さに欠ける。24は全体に風化が著しいが、頂部に平坦面を持ち、その下にはややくびれる部分があることから、石冠ではないかと思われる。25は石皿片と考えられる。第205図26は四面とも研磨されているが、その形態から加工用の斧の可能性がある。27は砥石であるが、石皿か磨石の胴部を横に利用して使用したと考えられる。28は扁平な砥石で表裏と側面が使用されている。側面には径約6mmの穿孔が見られる。砥石に穿孔したと考えられるが、その目的は不明である。

29は石核、30~34は剥片である。いずれも一部に調整を行う。

第206図35は石鎌である。凹基式で逆刺の一片を欠く。比較的長さのある形態を呈す。36は石鎌の未製品と考えられる。主要な調整が終了した段階と考えられる。37は石核である。

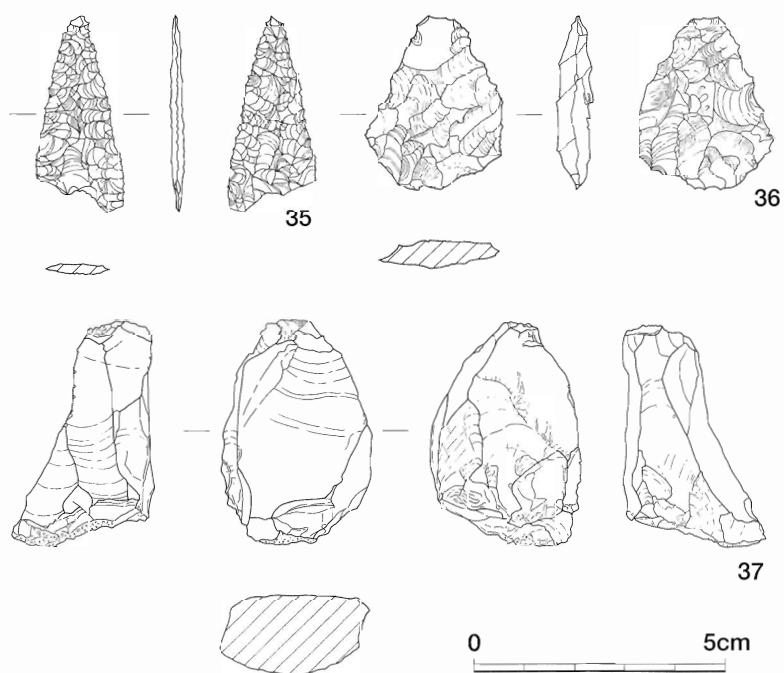
なお、図示しなかったが、護岸の石には石皿を転用したものが存在した。

〈3〉 木 製 品

(第207~216図)

V区-B出土の木製品の内、木製品を21点、石組遺構周辺の杭を10点図示した。

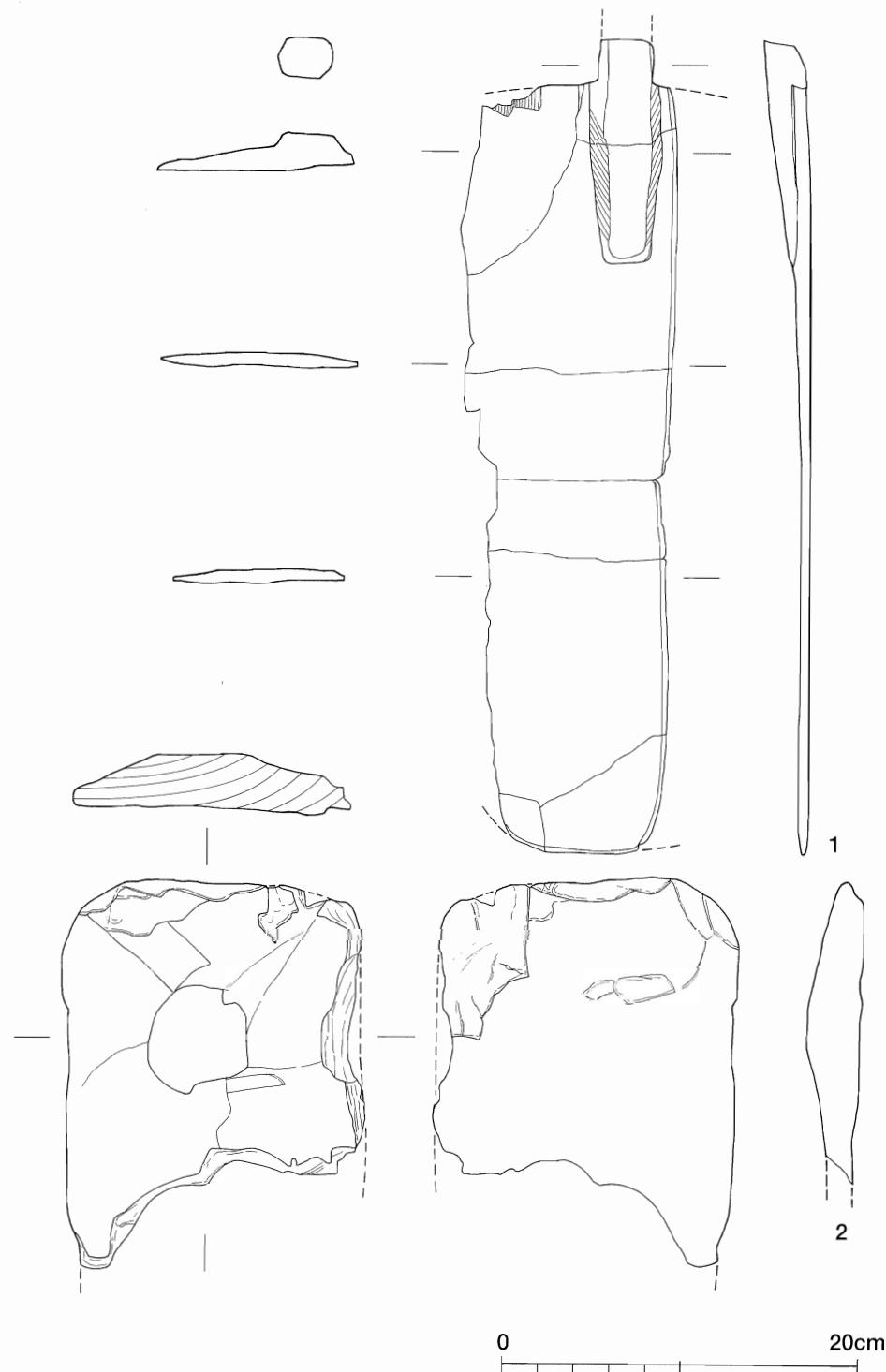
第207図1は樋があることから組合せ式の平鋤と考えられる。刃部の1/3程を欠損する。肩の部分を欠くので細分は出来ないが、全体にやや身が長めである。また、着柄軸から左右に肩が直線的に伸びるようである。刃部の断面形は現状では平坦である。砂礫層2から出土。2は破損が著しいが広鋤の未製品である。幅



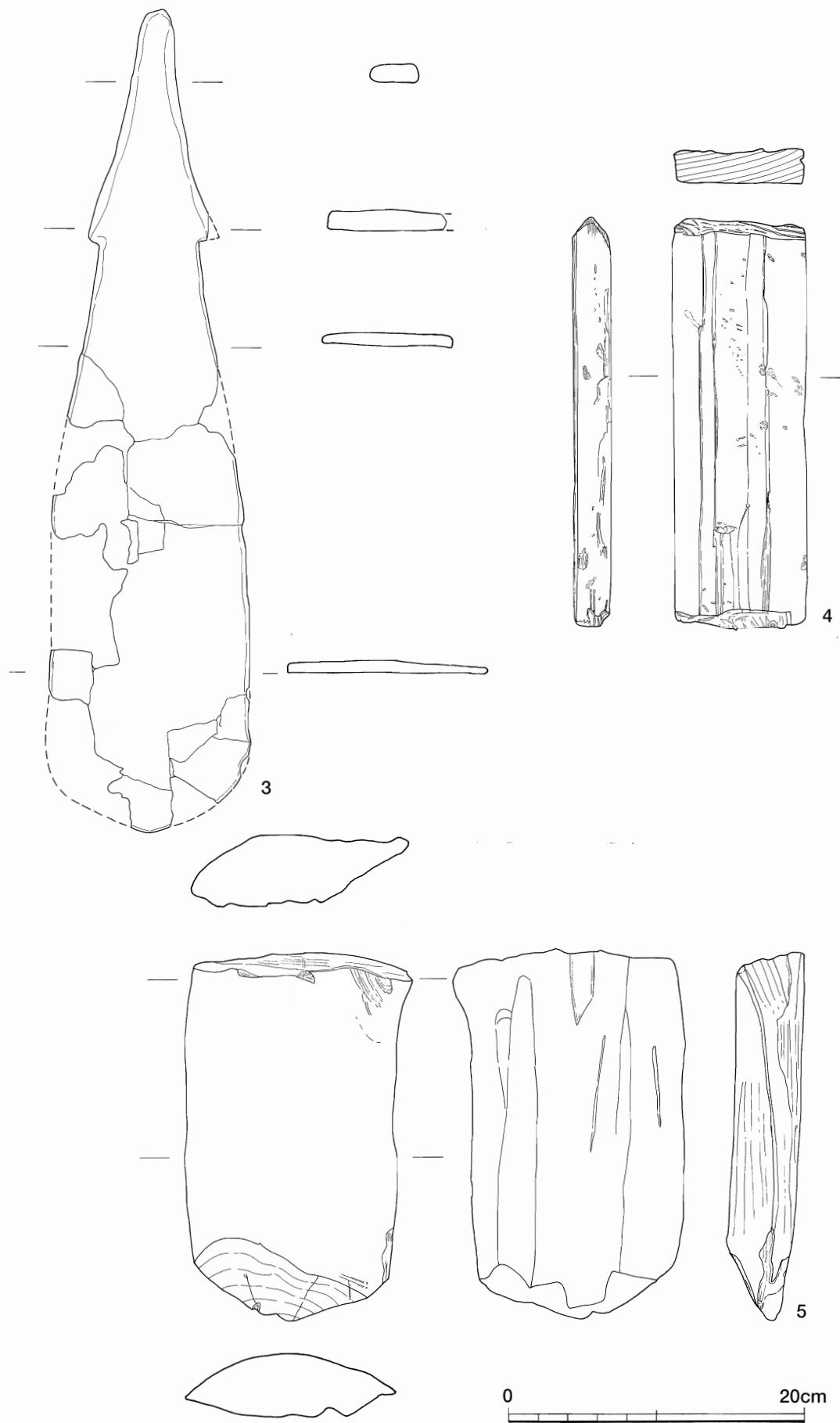
第206図 V区-B出土石器実測図(6) (S=2/3)

が約16cmなので広鍬とした。舟型隆起を欠き、背面には泥よけの部分を作り出していない。広鍬ⅡB式になる可能性を持つ。砂礫層5から出土。

第208図3は曲柄平鍬である。破損しているが、笠部を有し、笠の下のくびれから刃に向かって徐々に幅を増し、刃部の中程からやや直線的に刃縁へ至る。笠部を持ち、刃部の最大幅が中央よりも下にあるので、曲柄平鍬D I式に属する可能性を持つ。砂層2から出土。4は板材である。砂層2から出土。5は一方を大きく加工し、先端を尖らせるが、他方は先端部分にのみ加工を行う。幅が約15cmで、鍬の未製品の可能性を持つ。砂礫層8から出土。



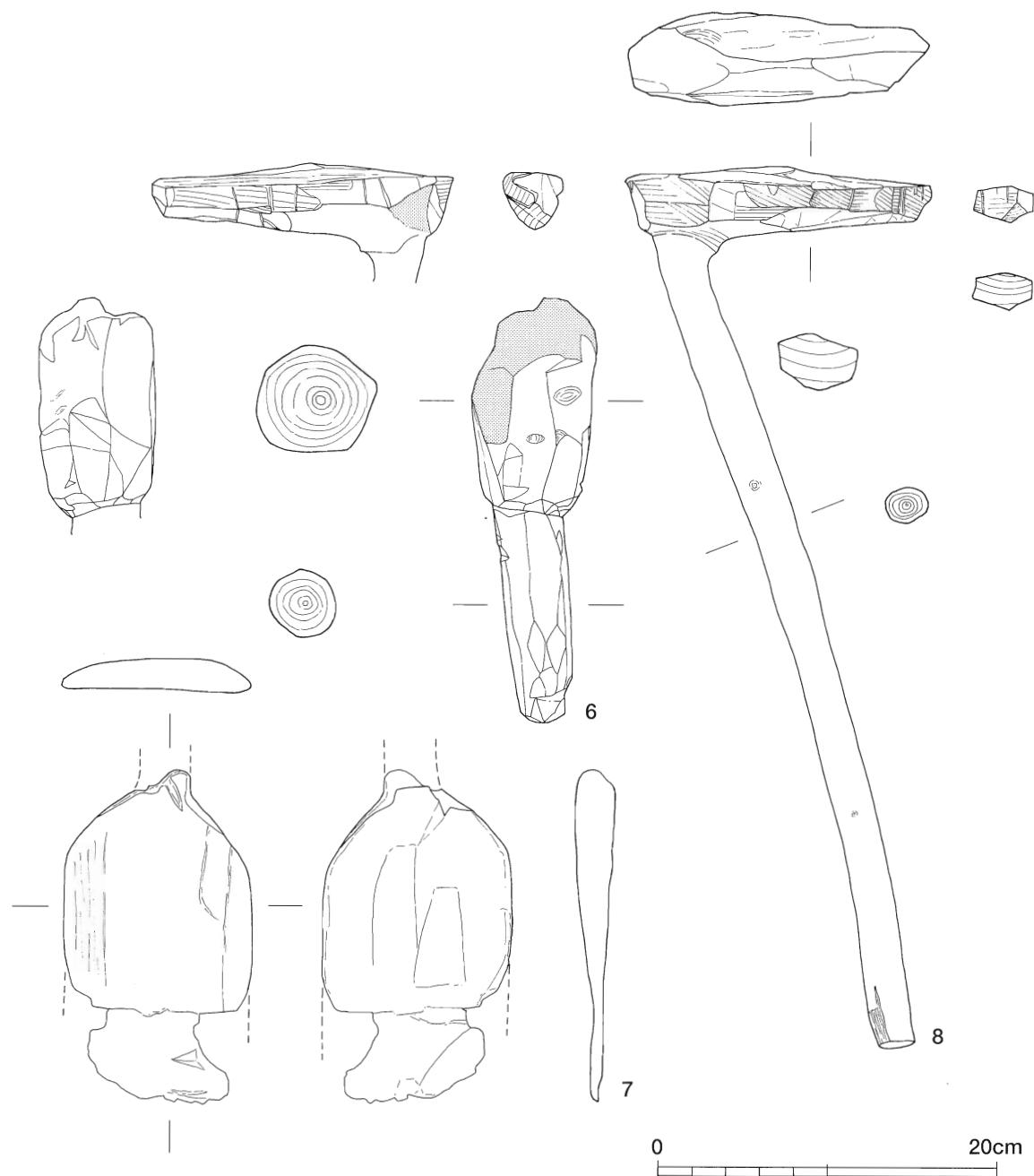
第207図 V区-B出土木製品実測図(1) (S=1/4)



第208図 V区-B出土木製品実測図(2) (S=1/4)

第209図6は横柾である。先端を一部欠損し腐食が著しいが、全体に面取りをして加工を行う。砂礫層6から出土。7は腐食が著しいが、肩部で緩やかに広がり、先端へ向かうほど身が薄くなるようである。掘り棒か櫂のような道具の一部の可能性を持つが、西川津遺跡は縄紋時代は海であったことから「櫂状木製品」としておく。砂層2から出土。8は斧の未製品である。斧台は四方向から加工され、基部にも加工を行う。後面は短辺側から大きく削るように加工される。装着部は先を尖らせるのみで、それ以外の加工は行われていない。握りの径はほぼ基部から斧台付近までほぼ同じ太さで、約2.6cmを測る。着柄角度は約70度である。斧台部の幅が厚さよりも大きいことから、横斧の未製品と考えられる。

第210図9も斧の未製品であると考えられる。斧台部の加工が前面と後面の二方向から加工されており、更にその中で小さく周囲から加工を行う。握りはやや湾曲気味に基部側へ屈曲しており、

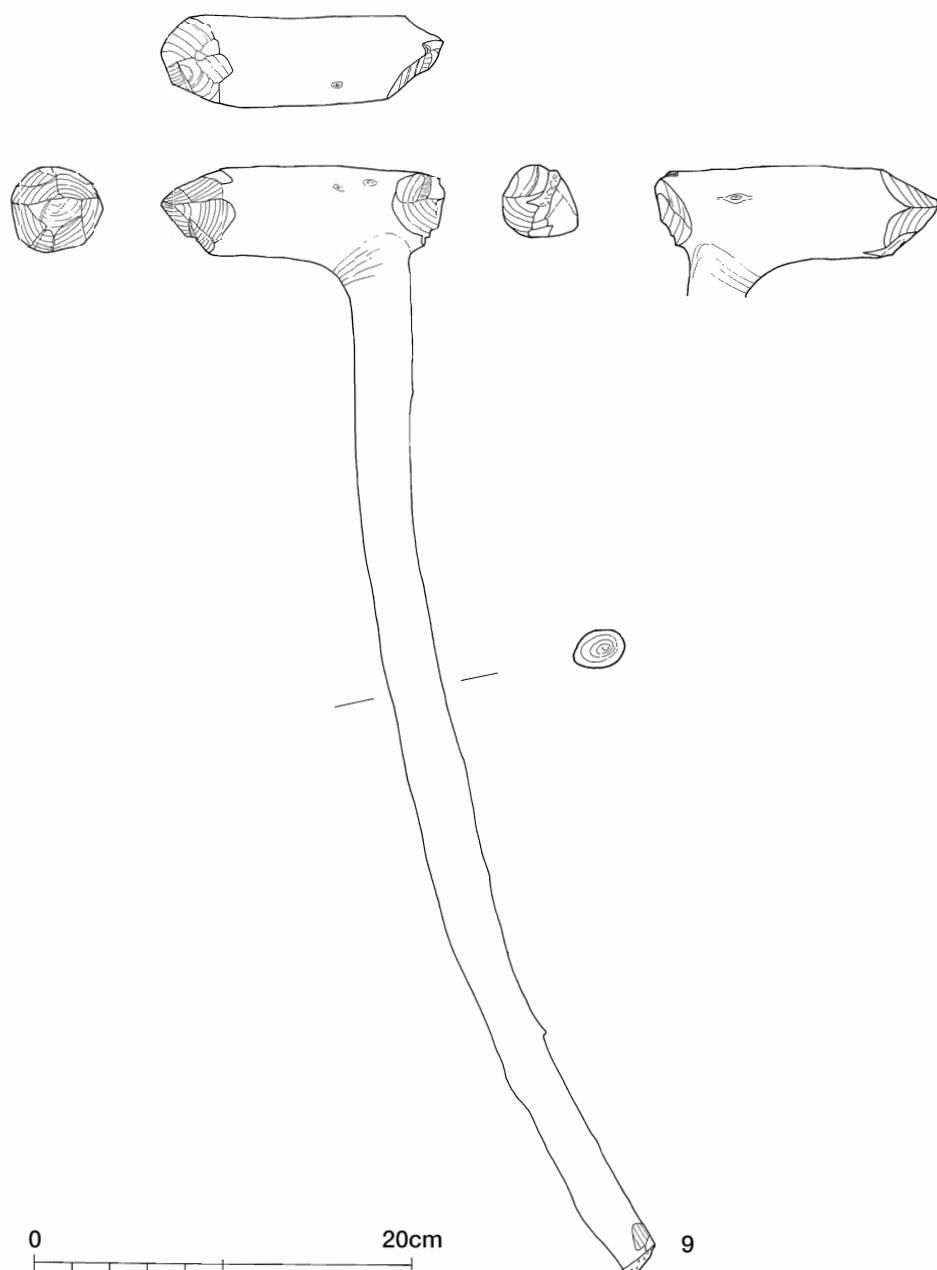


第209図 V区-B出土木製品実測図(3) (S=1/4)

着柄角度が92~93度と鈍角である。斧台部の断面は円形を呈す。基部は両側面側から加工を行う。

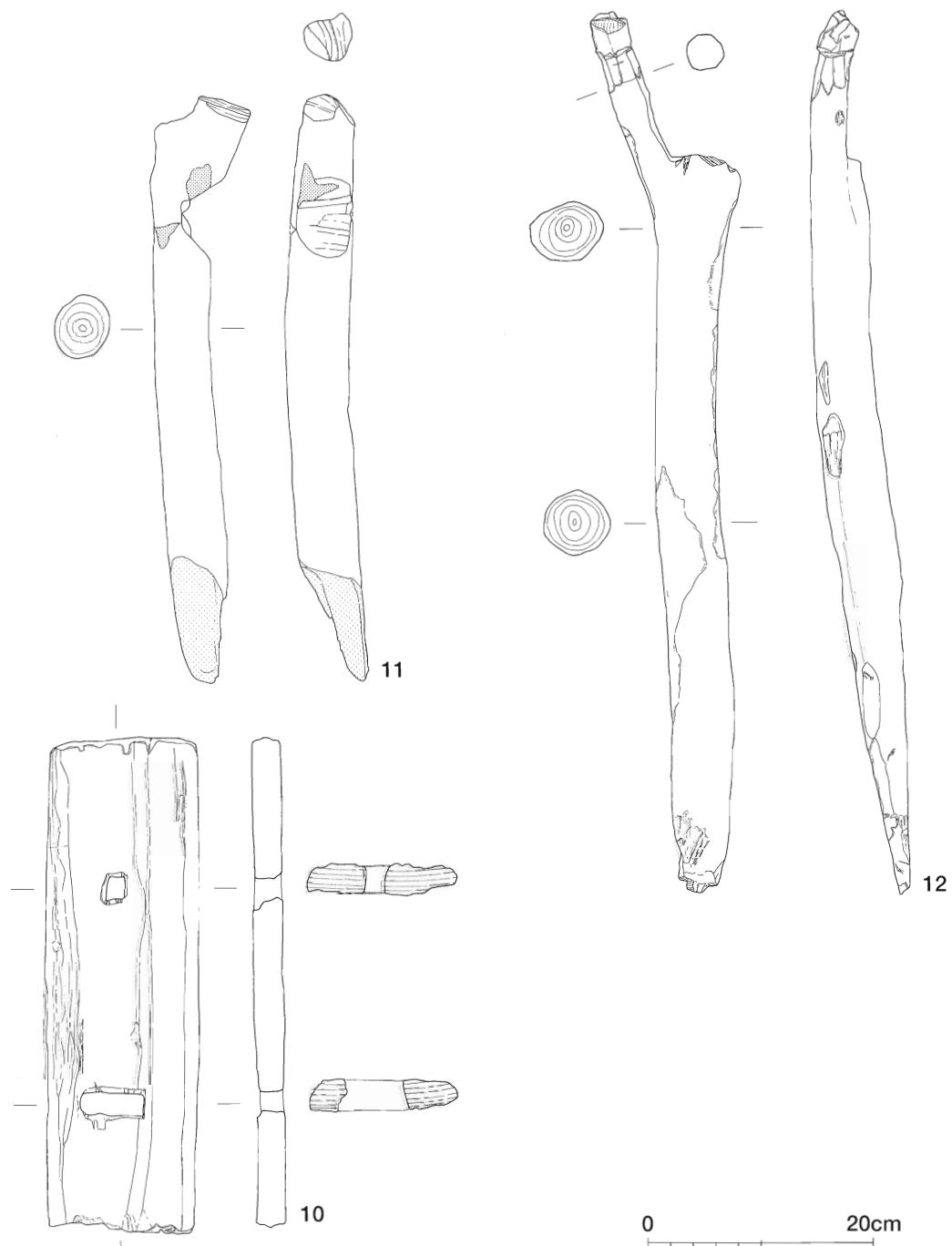
8、9共に砂層2から出土。

第211図10は部材であり、二つの孔を有す。一方の孔はほぼ一辺が約2cmの方形で、他方は縦約5.5cm、横約2cmの長方形である。図示した面がやや湾曲するのに対して、反対側はほぼ平坦である。加工痕は見られない。砂礫層8から出土。11は頂部附近に抉りを持つ。抉りの部分は両端側から斜めに深く削り、その間を加工するので、側面形は台形を呈する。先端は炭化している。頂部は若干屈曲しており、二方向より尖らすように数回の加工を行う。樹種はヤブツバキである。12は頂部は段を持って先の部分を斜めから作り出しており、稜を持っている。一方を欠損しているが、「V」字に分かれるとと思われる。先端は先へ向かって尖り気味におさめるようである。樹種はヤブツバキである。11、12共に砂礫層5から出土。

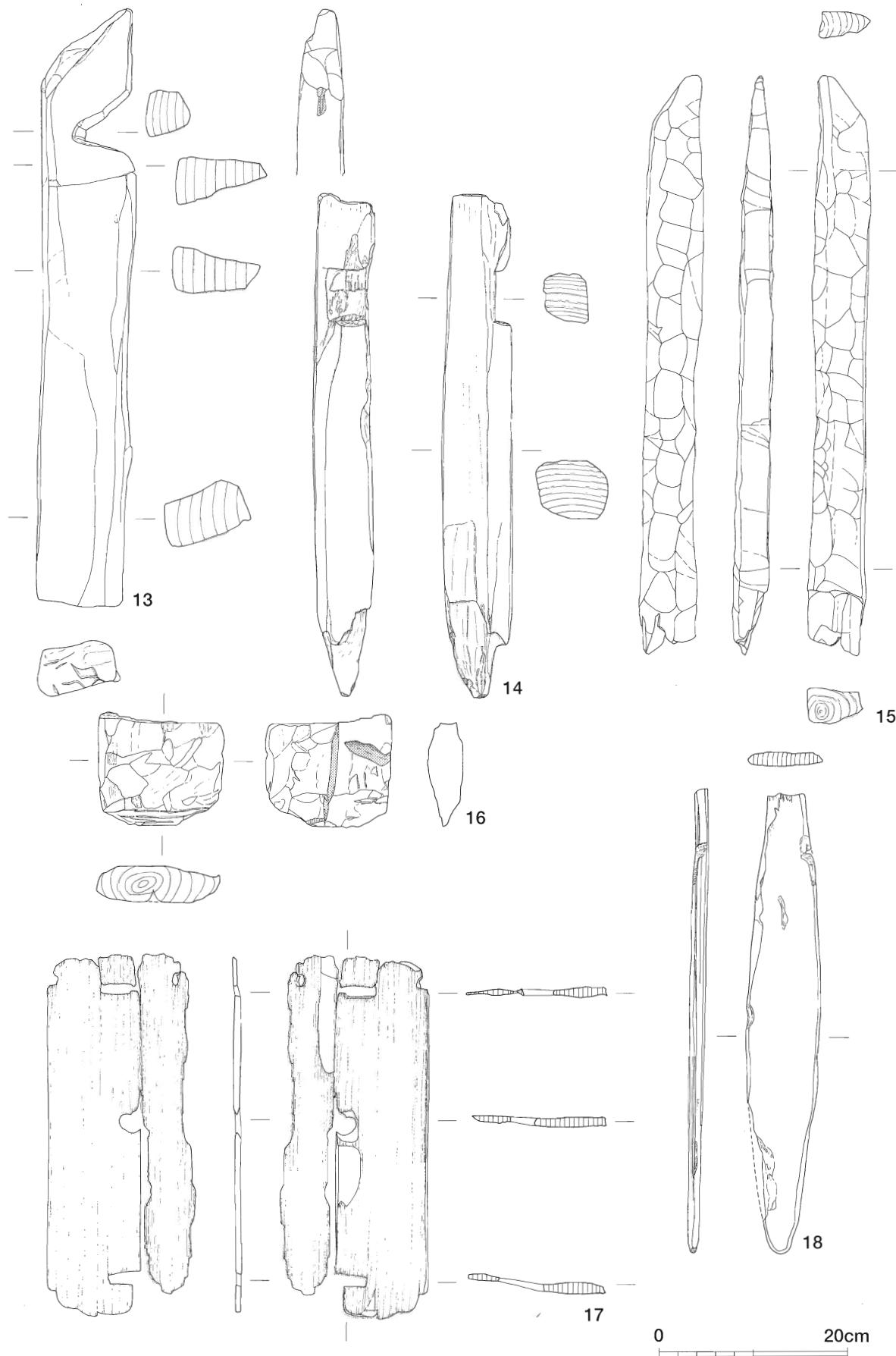


第210図 V区-B出土木製品実測図(4) (S=1/4)

第212図13は頂部を斜めに加工し、頂部付近に抉りが入る。抉りの形状は11に似るが、11よりも大きい。抉りの部分は鉈状の工具で加工しており、側面形は台形である。断面は丸みを帯びた長方形であり、長辺側を中心に長く加工する。先端は切斷されてその面には加工痕が見られる。14も頂部付近に抉りを有すが、形状は11、13とは異なる。抉りの部分は5.4cmの長さで丁寧に加工され、側面形は長方形を呈す。建築部材ではないかと思われる。樹種はスタジイである。13、14は砂層2から出土。15は一方を斜めに加工し、断面は長方形である。四面とも加工するが、長辺側に明瞭な加工痕が残る。加工痕は平面形が菱形である。剣形木製品と考えたが、緯打具の未製品の可能性もある。砂礫層2から出土。16は両端に加工痕が明瞭に残る。加工材の破片と考えられる。砂層2から出土。17は長方形の薄い板材で、両端に長さ約3cm、幅約1.5cmの方形の孔を、中程には径約3



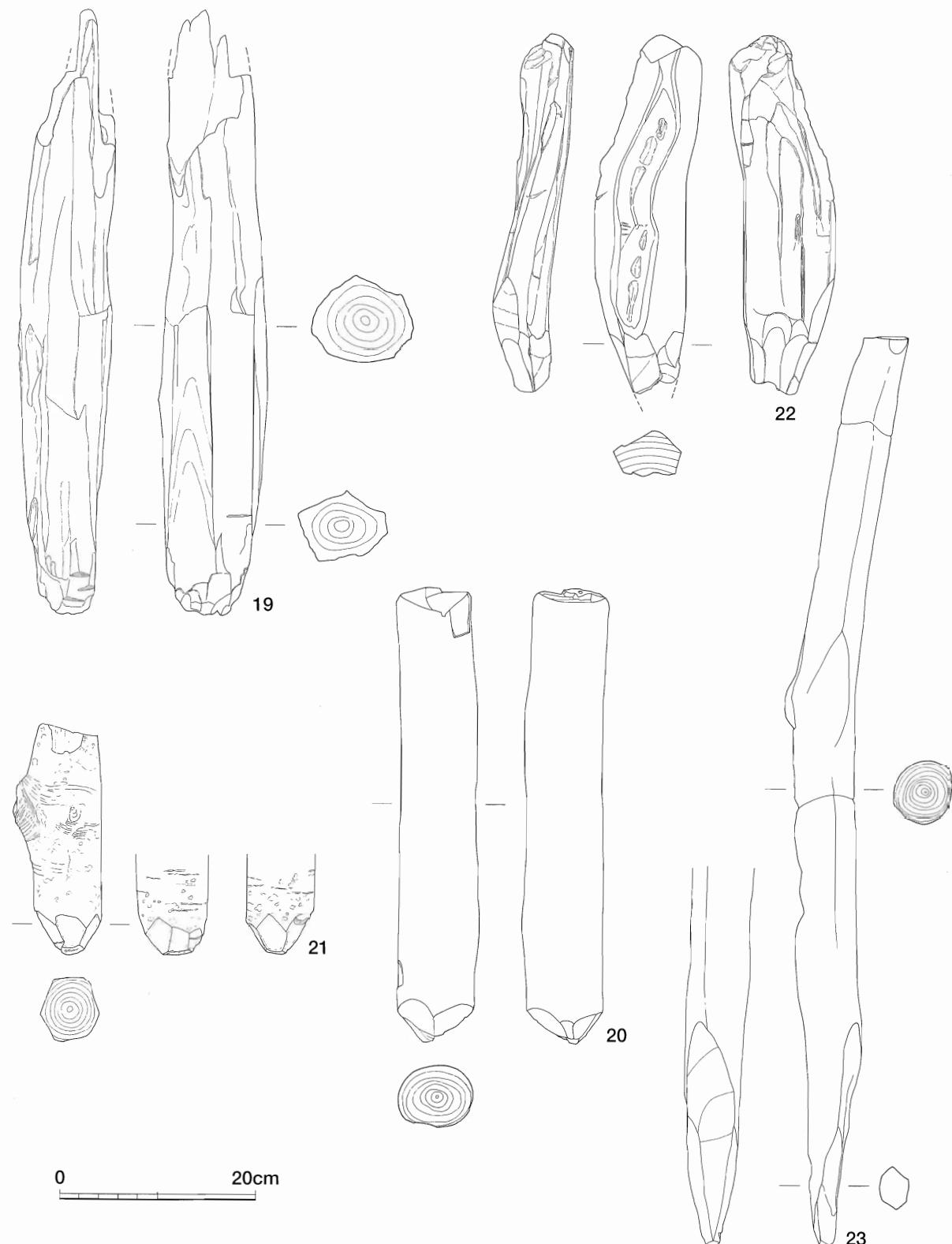
第211図 V区-B出土木製品実測図(5) (S=1/6)



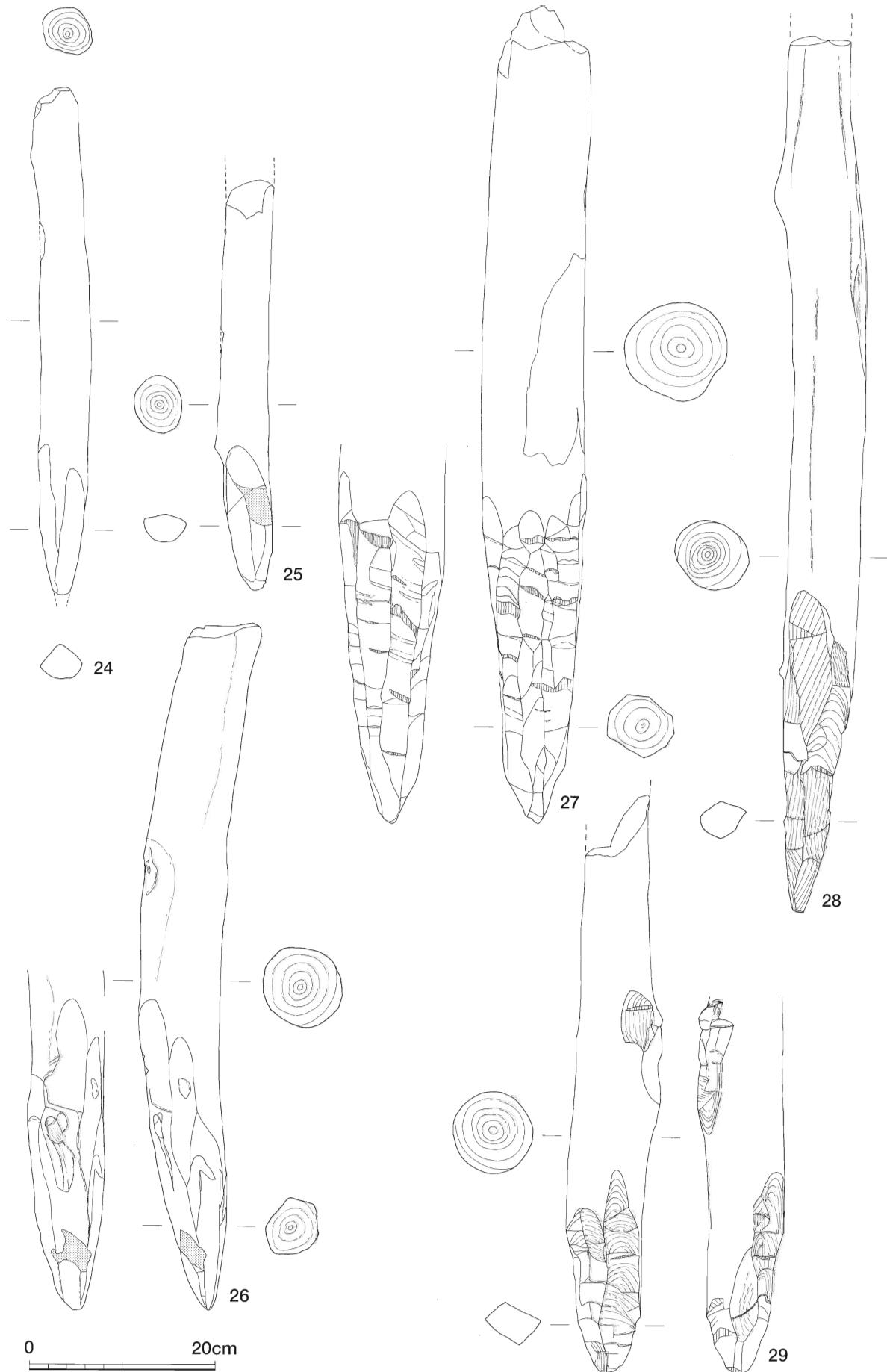
第212図 V区-B出土木製品実測図(6) (S=1/6)

cmの円形の孔を有す。一端の短辺側には径約1cm弱の円形の孔を一对有す。砂礫層2から出土。18は中程がやや膨らみ、両端ほど細くなる。一端を欠損する。砂礫層2から出土。

第213図19～21は砂礫層により流された杭であると思われる。19は六方向から削るように長く加工してから、更に先端を加工する。先端には幅約2.5cmの加工痕が見られる。加工の様相はⅡ区の



第213図 V区-B出土木製品実測図(7) (S=1/6)



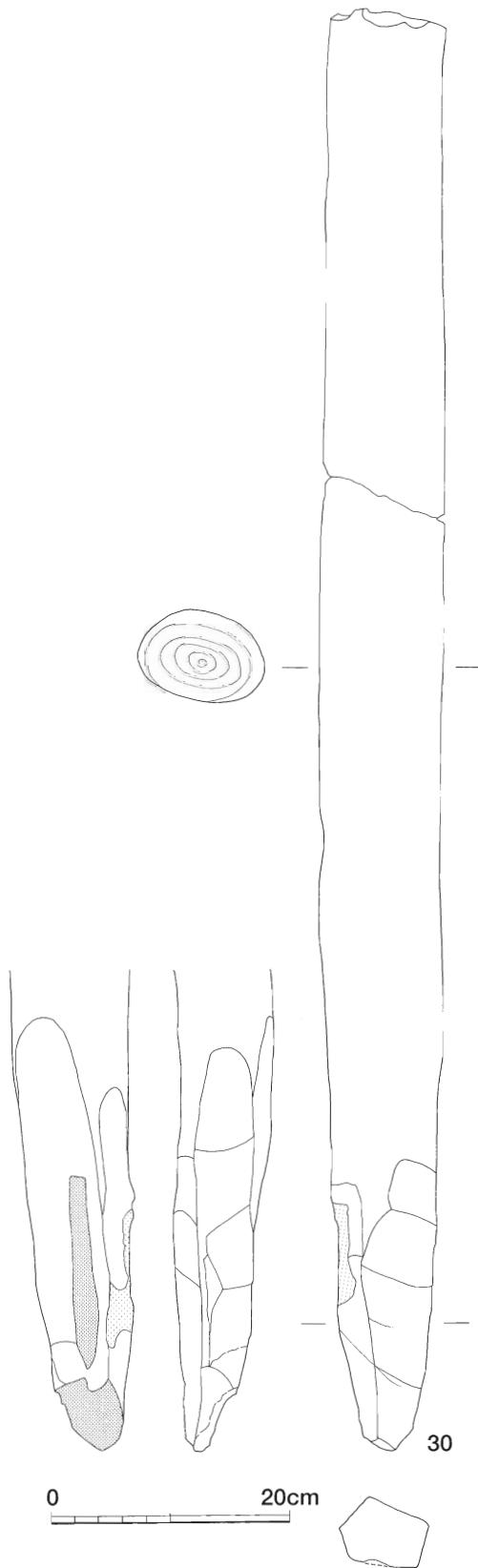
第214図 V区-B出土木製品実測図(8) (石組内) (S=1/6)

西川津1類に似る。樹種はマキ属である。砂礫層1から出土。20は切断面を残さず三方向から加工を行う。全体に腐食しているが、加工は数回しか行わないようである。樹種はエノキ属である。砂礫層5から出土。21は切断面を残して五方向から加工を行う。節を削り、樹皮を残す。形態は西川津3類に似る。樹種はコナラ属アカガシ亜種である。砂礫層5から出土。

22、23は石組遺構付近で検出された杭である。22は節を取り込んで杭にしている。節の裏面を長く剥ぐように加工を行い、先端は欠損しているが先端にのみ加工を行うようである。樹種はヤブツバキである。23は先端は鈍く尖らせて、片側のみ長く剥ぐような加工を行う。先端は更に三方向から加工を行う。

24～31は石組遺構から検出された杭である。いずれも芯持材である。24、25のように径約5～6cmのものと8cmを越える太いものがある。第214図24、25は共に二方向から加工を行うが、その反対側の部分には加工が及ばない。先端は尖っていたと推測される。26は全体にやや湾曲している。先端を尖らせ四方向から長く剥ぐような加工を行う。加工痕から、それぞれの加工の回数は1～2度ではないかと思われる。樹種はヤブツバキである。27は径が約10cmと太い。先端を鈍く尖らせ八方向から加工を行う。それぞれの加工の方向には加工痕が明瞭であるので、杭の長軸に平行して連続して加工していくことがうかがえる。樹種はイヌガヤである。28は先端を尖らせ三方向から加工を行う。内一方向は先端のみ加工を行う。杭の中程よりやや下の部分、断面を表示している部分のあたりで変色する。29は先端を鈍く尖らせ三方向から長く、一方向から短く加工を行う。中程にも加工痕が見られる。節を削ったと考えられる。樹種はヤブツバキである。28、29は、原理が異なるが、加工の方法として、長く削るのみで先端への加工をあまり行わないという点では、1'類に類似する。

30、31は現存長が1.2mを越え、径も10cmを越える大きな杭である。第215図30は先端を欠損するが、



第215図 V区-B出土木製品実測図(9)
(石組内) (S=1/6)

五方向から剥ぐような加工を行う。先端付近には炭化した部分がある。

第216図31は現存長が167.8cmで、もっとも長い杭である。断面は楕円形である。先端を欠損するが、六方向から加工を行う。加工を始めてから3～4回の加工で先端付近まで達している。加工痕が明瞭に残っており、刃を打ち込んで剥ぎ取るような加工であることがうかがえる。

〈4〉 銅 鐸

(第217、218図)

銅鐸は、調査区の中央東寄り、砂礫層5中から出土した(第188図)。

舞の型持孔の長径は1.1cm、身の厚さは平均して0.3cm、横帯の幅は約2.8cm、舞から身の型持孔までの長さは7.05cm、鰏から型持孔までの長さは1.75cm、横帯から型持孔までの長さは2.4cm、鰏の幅は肩部で2.2cmを測る。

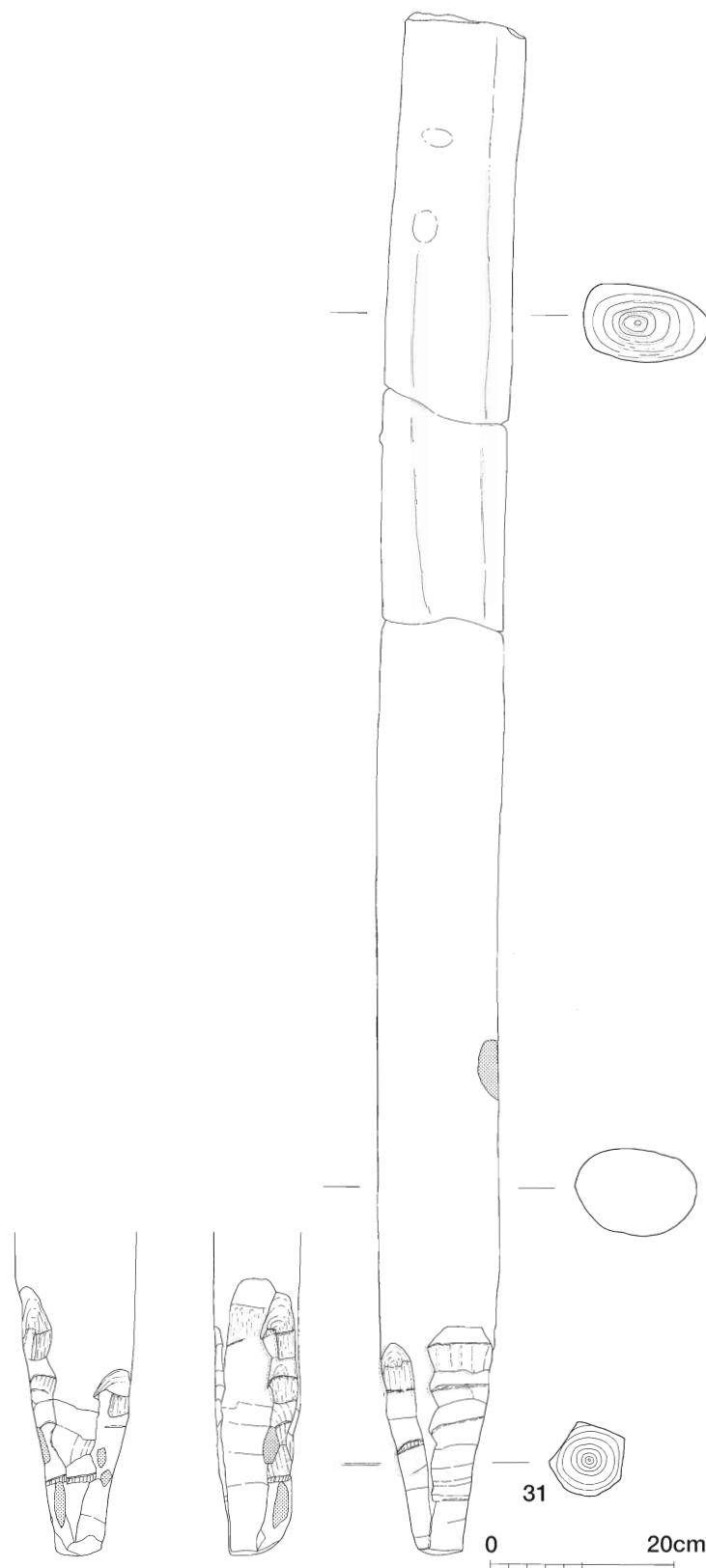
なお、銅鐸の名称や記述は神庭荒神谷遺跡の報告に準じた⁽⁵⁾。

色調と器面の状態 保存処理後の現状では茶褐色であるが、出土時には明茶褐色を呈していた。内面には緑色の部分があり、藻や苔が付着していた時期があったことがうかがえる。鰏の部分には黒く変色している部分があった。

鉢 欠損しており、断面形などは不明である。

鐸身 片面の約1/4、身の上半を残している。鉢や飾耳は欠損する。身の上半に流水文、横帯には連続渦文が施されている。

流水文はX反転部が右側に2つあることから、8c7xの横型流水文である。連続渦文は中心部で単位文がつながっているのか、不連続なのか明確でない。流水文は、E反転部とC反転部を混用しており、基本的には



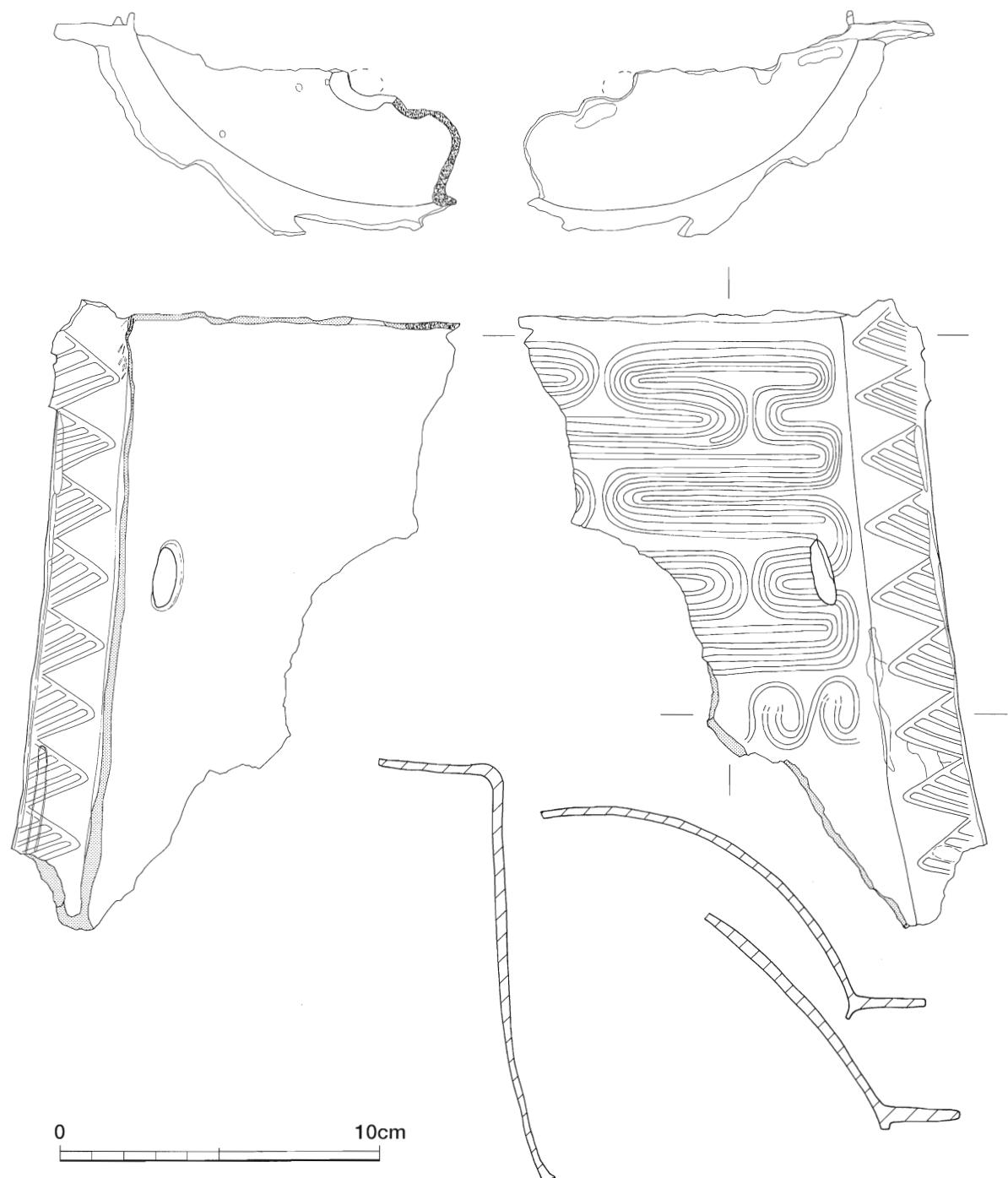
第216図 V区-B出土木製品実測図(10)
(石組内) (S=1/8)

3本線で流水文を描き、1本線を所々に入れており、文様の省略化が進んでいることがうかがえる。

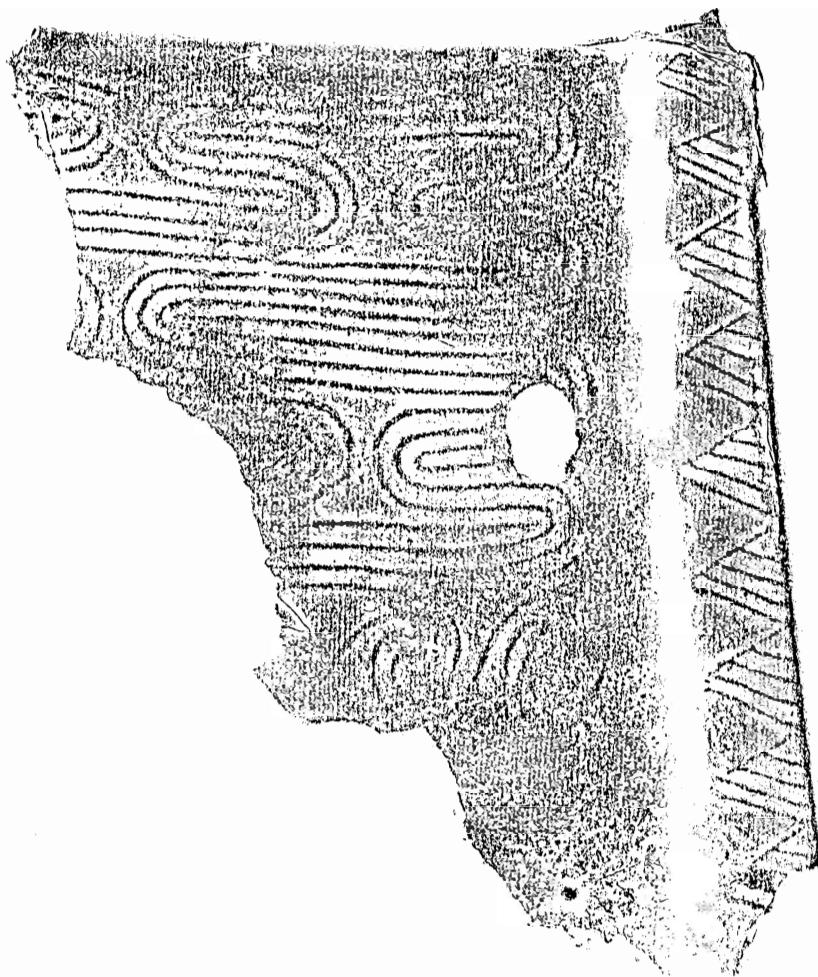
鰐 「R」の鋸歯文がA面に、「L」の鋸歯文がB面に見られる。鋸歯文の中は3本の線を充填している。

飾耳 飾耳は欠損していたが、その部分に鋳造後の加工痕は見られなかった。飾耳の幅は推定で3.4cmを測る。

舞 復元すると扁平なアーモンド形を呈するのではないかと思われる。鐸身との境は丸みを持っている。



第217図 V区-B出土銅鐸実測図 (S=1/2)



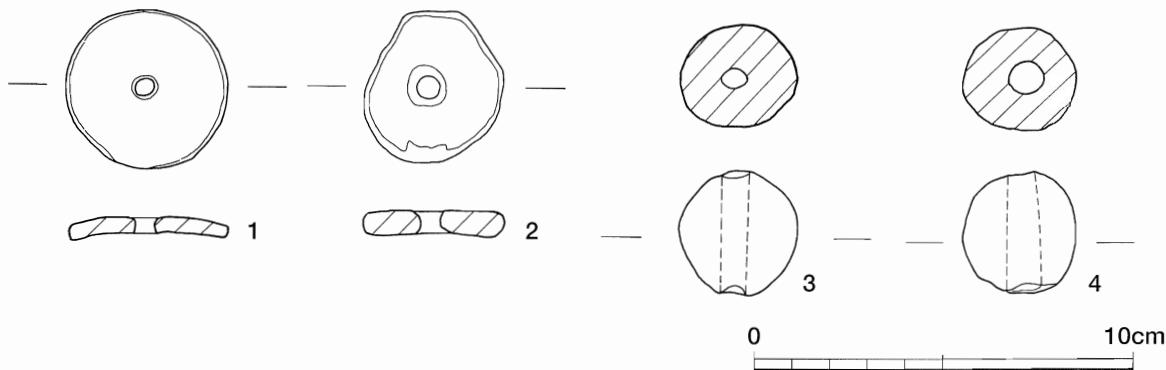
第218図 V区-B出土銅鐸拓本 (S=2/3)

型持孔 型持孔は、舞と身にある。舞の型持孔は約1/3が残っているだけであるが、楕円形を呈すと思われる。

身の型持孔は、長径1.95cm、短径1.35cmを測り、現状では縦に長い楕円形であるが、下半分を鋳造後に広げているので、当初は円形であったことがうかがえる。

鋳造 断面を観察すると、ごく小さな孔が多数見られ、「す」が入ったようになっている。また、A面の横帶と鰯の境や鰯の飾耳付近、B面の鰯の下端には浅いくぼみが見られる。これは鋳上がり後の「引き」であると思われ、もしこれがそうならば石型を使って鋳造が行われていたと推測される。また、B面の身の端と鰯との境の部分と舞の近くの破面は湯回りが悪かったため、断面が丸くなっている。このため、身と鰯の境の部分には鋳掛けを行い、タガネのような工具で整えた痕が見られる。

この銅鐸は、以上の特徴から外縁付鉢II式、または扁平鉢式古段階に相当すると考えられる。なお、銅鐸は、破損した身の部分の端が不自然に湾曲しており、二ないし三方から力が加わったと思われ、人の手が加わっている可能性を示唆する。銅鐸が破片で出土した例は約30例が知られており、日本海側では鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡⁽⁶⁾、兵庫県城崎郡日高町久田谷遺跡⁽⁷⁾で出土している。



第219図 V区-B出土土製品実測図 (S=1/2)

〈5〉 土 製 品 (第219図)

V区-Bからは、土製円板2点、土錘2点が出土し、図示した。

1、2は土製円板である。共に土器片の転用で、径は約4cmである。中央に穿孔されている。3、4は土錘である。共に円形で、径は約3cm前後である。棒に粘土を巻き付けて成形している。

第5節 小 結

V区-Bでは、大きく分けると弥生中期、弥生後期、古墳前期、古墳中期、古墳後期の河川堆積層を確認し、それに伴う多量の土器や木製品、石器、銅鐸が出土した。

① 西川津遺跡のある朝酌川遺跡群は、これまでの研究で山陰における拠点集落の一つであると考えられてきたが、V区-Bの調査で銅鐸が出土したこと、そのことを更に強く証明することとなった⁽⁸⁾。また、銅鐸が破片として砂礫層から出土したことは、大量の青銅器を出土した斐川町神庭荒神谷遺跡や加茂町加茂岩倉遺跡とは異なる出土状況を示すものであり、銅鐸を用いる祭祀の終焉に際しての多様な廃棄の在り方を示すものなのかもしれない。なお、石組遺構は砂礫層5の南側に位置しているが、上流側（北）に面している。一方、海崎地区の居住域の一つは溝状遺構の北東側であると考えられるので、石組遺構は当時の中州に位置していたのか、それとも調査区の南西側にも集落が存在していたのか、今後の検討課題である。

② 今回の調査では、弥生時代後期、特に後期Ⅰ～Ⅲ期の土器や古式土師器が多く出土した。西川津遺跡の海崎地区にあった集落が、弥生時代前～中期だけではなく、弥生後期から古墳時代以降も継続していたことを示していると思われる⁽⁹⁾。

③ V区-Bで確認した河川堆積層は、海崎地区の調査で検出した「溝状遺構」に平行して北西から南東へ流れていたと考えられる。この「溝状遺構」の両岸には杭や人頭大の石が多数検出されているので⁽¹⁰⁾、「溝状遺構」の流れが弥生時代後期から古墳時代後期にかけて次第に南側へ移っていく様子が今回の調査によって明らかになった。

なお、今回確認した土層と海崎地区の土層を対比すると、「古墳時代前期層」が砂礫層4、「弥生時代後期層」が砂礫層5～8、「弥生時代中期層」が砂礫層9に相当するのではないかと思われる。

④ 砂礫層中の炭化木や種子の¹⁴C年代測定を行った。結果は土器の年代と整合しなかったが、海

崎地区では「弥生時代後期層」が「縄文時代後・晚期層」や「縄文時代中期以前の層」を削っており、そこからの再堆積の可能性を持つ。

註

- (1) 西尾克己・間野大丞ほか編 1995 『原の前遺跡』 島根県教育委員会 pp.55~57
- (2) 海崎地区では弥生時代後期の遺構として「列石遺構」が報告されている。長さが2.3m、幅が0.6mを測り、本来はもっと長かった可能性がある。標高は約0.2mである。
内田律雄編 1988 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）』 島根県教育委員会 p.13、15、図版18
- (3) 池淵俊一・丹羽野裕編 1998 『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14 門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』 島根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所 pp.269、270
- (4) 兵庫県竹野町見藏岡遺跡、京都府丹後町平遺跡、島根県斐川町上ヶ谷遺跡から出土した土器に似ているようと思われる。
松井敬代編 1997 「見藏岡遺跡」『竹野町文化財調査報告』第11集 竹野町教育委員会 pp.15~18
河野一隆 1997 「平遺跡」『京都府遺跡調査概報』第79冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.26~28
松本堅吾 1998 「上ヶ谷遺跡発掘調査報告書」『斐川町文化財調査報告』第21集 斐川町教育委員会 p.6
- (5) 柳浦俊一 「第5章第2節 銅鐸」 松本岩雄・足立克己編 1996 『出雲神庭荒神谷遺跡 第1冊 本文編』 島根県教育委員会 pp.129~140
- (6) 山陰中央新報 1998年8月27日付 1面
- (7) 池田正男 1978 「但馬国日高町久田谷出土の銅鐸」『月刊文化財』11月号 pp.38~43
加賀見省一 1982 「兵庫県久田谷遺跡出土の銅鐸」『考古学雑誌』第68巻第1号 pp.113~128 日本考古学会
- (8) なお、タテチョウ遺跡では舌状石製品が出土している。
前島己基・平野芳英・松本岩雄編 1997 『朝酌川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書I』 島根県教育委員会 第77図 p.176
- (9) 田中義昭氏は、論文の中で弥生後期の遺跡の動向がいまひとつ不明で、遺物も少ないのでないのではないか、という印象を述べられているが、海崎地区の調査では弥生時代後期の層は主に調査区の南側にあったので、遺物量がそれまでの時期に比べて少ないという印象を持たれたのではないかと思われる。
田中義昭 1996 「弥生時代拠点集落としての西川津遺跡」『山陰地域研究（伝統文化）』第12号 島根大学汽水域研究センター pp.1~11
- (10) 海崎地区の調査では、「溝状遺構」の両岸を中心に杭や人頭大の石が多数検出されていることが写真からうかがえる。

註(2)文献 図版7

内田律雄編 1989 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』 島根県教育委員会 図版1

表15 西川津遺跡V区-B出土土器観察表

査団番号	器種	層位	口径(cm)	器高(cm)	形態・文様の特徴	調 整	色 調	残存率	備 考
171-1	深鉢	砂層1			突帯1条	条痕	淡褐色		
171-2	壺	"	12.2	10.5	刺突文(ハケ原体)	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	30	
171-3	甕	"	15.6	6.1	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	25	口縁内外煤
171-4	"	"	14.8	9.1	"	ハケ ヘラケズリ	明黄灰色	15	
171-5	高坏	"	(10.4)	6.9	円形透かし一方	ヘラミガキ ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	脚部完存	脚端部径
171-6	"	"	9.0	5.9	脚端部に段	ナデ	淡灰色	60	
173-1	深鉢	砂層2				二枚貝条痕	暗褐色		
173-2	壺	"	13.6	9.1	ヘラ描直線文1条	不明	灰褐色	30	
173-3	甕	"			ヘラ描直線文5条	ナデ ハケ	淡灰色		口縁端部刻目
173-4	"	"	18.0	4.1	ヘラ描直線文4条以上 口縁端部に刻目	ナデ ハケ	暗茶褐色	10	外面煤付着 逆L字口縁
173-5	短頸壺	"	10.0	9.9	頸部刻目突帯1条	不明	淡褐色	20	磨滅著しい
173-6	壺	"	13.2	9.2	肩部に刺突文	ハケ ヘラケズリ	暗褐色	口縁完存	口縁煤付着
173-7	直口壺	"	12.2	11.2		ハケ ヘラケズリ	茶褐色	口縁完存	
173-8	甕	"	14.0	5.5	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	暗灰色	30	煤付着 磨滅
173-9	"	"	13.8	9.4	"	ハケ ヘラケズリ	暗灰褐色	25	
175-1	深鉢	砂礫1				条痕 ナデ	茶褐色		
175-2	"	"			端部に肥厚帶	条痕 ナデ	黒褐色		
175-3	"	"			無刻目突帯文	条痕	淡橙褐色		
175-4	壺	"			貝殻直線文2条 貝殻重弧文	ヘラミガキ ナデ	淡灰褐色		削出突帶
175-5	"	"			ヘラ描直線文5条以上	ナデ ヘラミガキ	淡橙灰色		突帶貼り付け
175-6	"	"	19.6	7.0	ヘラ描直線文6条	ハケ ヘラミガキ	暗黃灰色	15	
175-7	甕	"			ヘラ描直線文2条の 下に列点文	ハケ ナデ	褐灰色		
175-8	"	"	25.2	15.1	ヘラ描直線文7条 口縁端刻目 刺突文	板ナデ?	暗茶褐色	20	煤付着
175-9	"	"	30.4	7.3	ヘラ描直線文2条の 下に刺突文	ハケ ナデ	茶褐色	10	外面煤付着
175-10	壺底部	"	(8.6)	5.8		ナデ ヘラミガキ	淡灰色	45	底部径
175-11	広口壺	"			口縁内外に櫛描斜格 子文 列点文		淡橙灰色		
175-12	壺底部	"	(8.8)	5.5	内面煤付着	ハケ ヘラミガキ	黄灰褐色	底部完存	底部径
175-13	甕底部	"	(5.2)	4.8	外面煤付着	ハケ ヘラミガキ	暗褐色	底部完存	"
175-14	器台	"	(20.4)	5.4	長方形透かし八方以 上 回線文4条	ナデ	暗灰色	10	脚台部径
175-15	壺	"	22.0	9.5	端部に回線文4条 頸部に直線文5条	ナデ ハケ ヘラケズリ	淡黒橙褐色	20	頸部は櫛状工 具で施文
175-16	甕	"	20.4	5.7	回線文3条	ナデ ヘラケズリ	黑灰色	20	煤付着
175-17	器台	"			回線文5条	ヘラミガキ ヘラケズリ	淡灰色		外面赤色物塗 布
175-18	高坏脚部	"	(12.2)	3.8	回線文3条と8条	ヘラミガキ ナデ	黒黄褐色	10	脚端部径
176-19	壺	"	(16.0)	12.0	複合口縁 頸部径	ナデ ハケ	淡灰色	20	口頸内煤付着
176-20	壺	"	15.4	14.0	"	ヘラミガキ ハケ ヘラケズリ	淡褐色	20	内外煤付着
176-21	"	"	14.0	7.7	"	ナデ ヘラケズリ	淡灰色	20	
176-22	甕	"	15.5	7.1	口縁端面に沈線	ハケ 板ナデ ヘラケズリ	灰褐色	30	布留傾向甕
176-23	"	"				タタキ ナデ 板ナデ	淡灰色		畿内系
176-24	高坏	"	17.0	9.9	坏部外面はヘラケズ リ後ヨコナデ	ヘラケズリ ナデ ヘラミガキ	淡灰色	40	
176-25	低脚坏	"	(8.1)	2.6		ナデ?	淡灰褐色	底部完存	脚端部径
176-26	"	"	(5.2)	5.2		ヘラケズリ ハケ ヘラミガキ	淡褐色	50	"
176-27	壺	"	22.8	15.5	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	灰褐色	20	内外面煤付着
176-28	甕	"	16.6	5.7	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡黃灰色	口縁完存	
176-29	"	"	16.4	5.9	"	ハケ ヘラケズリ	黒褐色	20	
176-30	"	"	15.6	8.8	"	ハケ ヘラケズリ	暗褐色	20	外面煤付着
176-31	"	"	15.8	14.2	"	ハケ ヘラケズリ	灰褐色	40	"
176-32	小型丸底壺	"	7.3	4.8		ハケ ヘラケズリ	暗褐色	35	
177-33	高坏	"	21.3	13.2		ナデ ヘラミガキ	灰褐色	90	脚部径12.5cm
177-34	"	"	17.0	5.4	坏部が突帯風	ナデ ヘラケズリ	淡灰白色	20	磨滅
177-35	高坏脚部	"	(2.6)	8.0		ハケ ヘラミガキ ヘラケズリ	淡灰白色	脚部完存	脚端部径
177-36	"	"	(12.2)	7.1	脚部底に竹管状工具 で刺した痕	ヘラミガキ ナデ ヘラケズリ	淡茶褐色	脚部完存	"
177-37	"	"		6.7		ヘラミガキ?	淡褐色		
177-38	"	"	(9.6)	7.2	磨滅著しい	ハケ ヘラケズリ	淡茶褐色	90	脚端部径
177-39	低脚高坏	"	(11.9)	6.0	三角形透かし四方	ナデ	明灰色	25	"
179-1	精製鉢	砂礫2	11.0	8.6	頸部に蓋受け孔	ヘラミガキ	淡褐色	30	
179-2	甕	"	14.6	7.5	凹線文3条	ナデ ハケ	淡褐色	20	
179-3	鉢	"	8.8	10.0	丸底 煤付着	ハケ ヘラケズリ	暗灰褐色	ほぼ完形	底部一部赤変
179-4	甕	"	15.8	8.8	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	30	
179-5	"	"	16.0	10.8	"	ハケ ヘラケズリ	淡褐色	20	煤付着
179-6	"	"	18.0	9.5	"	板ナデ ヘラケズリ	淡桃褐色	90	

179-7	甕底部	〃	7.8	丸底	ハケ ヘラケズリ ナデ	淡茶褐色 淡褐色	50 70	煤付着 脚端部径
179-8	高坏脚部	〃	(8.9)	7.0	刻目突帶	条痕		
181-1	深鉢	砂礫3			口縁端部に刻目	ハケ	淡黃褐色	外面煤付着
181-2	甕	〃		5.4		ハケ ナデ	淡灰白色	内面煤付着
181-3	蓋	〃		8.7	外面煤付着	ヘラミガキ ナデ	茶褐色	蓋完存
181-4	壺底部	〃		35.6	凹線文 棒状浮文	ヘラミガキ	明黃褐色	底部完存
181-5	広口壺	〃			櫛描波状文		10	底部径
181-6	壺用蓋？	〃	25.6	2.4		ヘラミガキ ナデ	橙褐色	口径
181-7	甕	〃	15.6	3.8	複合口縁	ナデ ハケ	暗黒灰色	口縁端部に面
181-8	〃	〃	12.4	6.6	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	18
181-9	〃	〃	29.0	11.8	"	ハケ ヘラケズリ	黄灰褐色	30
181-10	〃	〃	13.2	4.7	"	ナデ	淡黃灰色	15
181-11	〃	〃	17.9	3.9	単純口縁	ナデ ヘラケズリ	淡灰色	10 縦内系
181-12	〃	〃			頸部内面に稜を持つ	ハケ タタキ ヘラケズリ	淡灰褐色	庄内河内形甕の模倣
181-13	短脚高坏	〃	(2.6)	5.3		磨滅して不明	淡黃褐色	脚柱部径
181-14	小型丸底壺	〃	9.8	7.8	突出気味の丸底	ハケ ヘラケズリ	橙灰色	23
181-15	低脚坏	〃	(6.6)	2.8		ナデ	淡灰白色	脚端部径
181-16	高坏	〃	13.9	9.0		ハケ ヘラミガキ ヘラケズリ	淡黃褐色	脚柱部完存
181-17	〃	〃	17.0	13.5	円形透かし三方放射状ミガキ	ヘラミガキ ヘラケズリ	淡黃褐色	脚端部径 11.0cm
181-18	高坏脚部	〃		7.4		ハケ シボリ痕 ヘラケズリ	明橙褐色	35
181-19	〃	〃	(11.4)	8.3		ヘラミガキ？ ハケ ヘラケズリ	明黃灰色	磨滅著しい 脚端部径
182-20	甕	〃	17.6	8.4	複合口縁	ハケ ヘラケズリ	暗茶褐色	内外面煤付着
182-21	〃	〃	19.0	14.4	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	黒橙褐色	20 外面煤付着
182-22	〃	〃	16.4	11.1	"	ナデ ヘラケズリ	暗黃褐色	口縁完存 "
182-23	〃	〃	14.8	9.2	"	ハケ ヘラケズリ	淡黃褐色	25 "
182-24	〃	〃	13.8	11.9	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	40 "
183-1	深鉢	砂礫4			半截竹管による爪形文3列以上	ナデ	黒褐色	
183-2	壺	〃	14.6	6.5	ヘラ描直線文2条	ハケ ヘラミガキ	淡黃褐色	15
183-3	〃	〃			ヘラ描直線文8条 ヘラ描重弧文	ナデ	灰褐色	
183-4	〃	〃	(16.0)	5.0	ヘラ描直線文計8条 貝殻縦区画	ナデ ヘラミガキ	淡灰色	20 脊部径 内面黒変
183-5	広口壺	〃	24.0	9.9	ヘラ状工具による斜格子文 指圧痕突帶	ハケ ヘラミガキ	淡黃褐色	20
183-6	甕	〃	20.0	9.8	刺突文（ハケ原体）	ハケ ナデ	淡褐色	20
183-7	高坏	〃	23.8	6.9	口縁端部に刻目	ナデ ハケ	暗灰色	10
183-8	脚付鉢	〃	12.8	8.2	胴部と脚部に凹線文 計9条以上	ナデ ヘラミガキ	暗褐色	70 内外煤付着 胴部径13.8cm
183-9	底部	〃	(8.6)	4.9	上げ底	ナデ	灰色	20 底部径
183-10	鼓形器台	〃		5.0	擬回線文16条以上	ヘラミガキ ヘラケズリ	灰褐色	15
183-11	壺	〃	28.0	10.2	凹線文4条	ハケ ヘラケズリ	淡黃褐色	20
183-12	甕	〃	15.8	6.8	複合口縁	ナデ ヘラケズリ	黒褐色	15 肩部工具痕
183-13	〃	〃	14.2	5.9	単純口縁	ハケ ヘラケズリ	淡褐色	20
183-14	〃	〃	15.2	10.2	"	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	30 外面煤付着
183-15	高坏	〃	16.3	6.2	坏部強いヨコナデ	ハケ ヘラミガキ	淡灰色	80
185-1	深鉢	砂礫5 上位	(29.0)	13.2	爪形刺突文4列	条痕	暗褐色	10 脊部径 煤付着
185-2	〃	〃			波状口縁	条痕	暗褐色	
185-3	壺用蓋	〃	10.2	2.7	二つ一組の蓋受孔	ナデ ハケ	淡茶褐色	90
185-4	壺	〃			貝殻描鋸齒文 ヘラ描直線文計6条	ハケ ナデ	淡赤褐色	やや軟質
185-5	〃	〃			ヘラ描直線文2条 羽状文 木葉文？	ヘラミガキ ナデ	淡灰白色	
185-6	甕用蓋	〃	(7.1)	9.7	煤付着	ヘラミガキ	淡灰褐色	頂部径
185-7	甕	〃	22.6	9.0	ヘラ描直線文2条	ナデ ハケ	黒灰色	15 外面煤付着
185-8	〃	〃	(7.5)	6.8	内面煤付着	ハケ ナデ	灰褐色	50 底部径
185-9	壺	〃			櫛描直線文 三角形刺突文	ナデ	橙灰色	
185-10	〃	〃	35.2	9.0	凹線文5条 口縁端部に刻目 円形浮文	ナデ ハケ	明黒灰褐色	20
185-11	〃	〃	25.4	5.9	凹線文3条 中実の工具による刺突文	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	10
185-12	短頸壺	〃	16.8	4.4	口縁端部に刺突羽状文 指頭圧痕突帶	ナデ ヘラミガキ	淡灰色	20 刺突はハケ原体？
185-13	甕	〃	13.5	9.3	凹線文3条 刺突文（ハケ原体）	ハケ ヘラケズリ	暗灰褐色	20 外面煤付着
186-14	壺底部	〃	(10.0)	4.5		ハケ ヘラミガキ	灰褐色	20 底部径
186-15	高坏	〃	18.5	9.5		ハケ ヘラミガキ ヘラケズリ	橙灰褐色	75
186-16	〃	〃	(9.0)	5.0	透かし十方以上 凹線文2条	ナデ ヘラケズリ	褐色	10 脚端部径
186-17	〃	〃	(13.6)	6.0	三角形透かし八方 凹線文4条 鋸齒文	ナデ ヘラケズリ	桃灰色	15 "
186-18	壺	〃	16.8	4.6	凹線文4条	ナデ ヘラケズリ	黑褐色	25 外面煤付着

186-19	〃	〃	16.6	7.3	凹線文3条	ハケ ヘラケズリ	淡褐色	10	
186-20	甕	〃	21.6	5.4	凹線文4条	ハケ ヘラケズリ	黒褐色	20	外面煤付着
186-21	〃	〃	26.6	6.4	凹線文4条	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ	明黃灰色 ヘラケズリ	10	内面煤付着
186-22	〃	〃	20.4	10.2	凹線文5条 ヘラ状工具による連続刺突文	ナデ ヘラケズリ	黒褐色	20	外面煤付着
186-23	〃	〃	19.2	4.8	擬凹線文9条	ナデ ヘラケズリ	黒黃褐色	10	
186-24	〃	〃	15.8	10.0	外面へラナデ状の痕	ナデ ヘラケズリ	暗茶褐色	20	外面煤付着
186-25	鉢	〃	10.2	5.6	ヘラ(貝?) 描直線文の間に刺突文	ナデ ヘラケズリ	黒褐色	25	〃
186-26	高坏脚柱部	〃	(6.0)	6.7	櫛描直線文6単位以上	ナデ シボリ痕 ヘラケズリ	青灰色	10	脚柱部径
186-27	甕	〃	14.4	5.3	複合口縁	ナデ	黒色	10	外面煤付着
186-28	〃	〃	16.0	6.0	〃	ハケ ヘラケズリ	黄灰色	15	
186-29	〃	〃	16.2	13.0	肩部に波状文	ハケ ヘラケズリ	黄橙褐色	15	胴外面煤付着
186-30	高坏环部	〃	24.6	5.8	〃	ナデ ヘラミガキ	淡灰褐色	25	
186-31	低脚环	〃	6.4	3.3	〃	ナデ	淡灰色	50	
187-32	壺	〃	〃	〃	ヘラ描綾杉文	ハケ ヘラケズリ	淡灰色	〃	
187-33	〃	〃	(25.2)	11.4	刺突列点文 羽状文	ヘラミガキ ハケ	暗茶褐色	13	頸部径
187-34	高坏	〃	33.7	9.9	外面に稜を持つ	ナデ ヘラミガキ	淡褐色	20	
187-35	高坏脚部	〃	(11.2)	4.9	〃	ハケ ヘラケズリ	淡黃灰色	30	脚端部径
187-36	〃	〃	〃	7.1	〃	ヘラミガキ ナデ	淡灰色	30	
187-37	低脚の坏	〃	17.8	6.6	〃	ハケ ヘラケズリ	淡灰褐色	30	
187-38	高坏?	〃	23.8	4.8	〃	ナデ ヘラミガキ	淡灰色	15	壺の可能性
187-39	円筒埴輪	〃	〃	〃	〃	ナデ	青灰色	〃	
189-1	深鉢	砂礫5	26.2	9.2	口縁に肥厚帯	繩紋	黒褐色	10	内面煤付着
189-2	〃	〃	〃	〃	連続爪形文	二枚貝条痕	暗褐色	〃	全体に磨滅
189-3	粗製深鉢	〃	〃	〃	〃	二枚貝条痕 ケズリ ナデ	茶褐色	〃	外面煤付着
189-4	壺	〃	17.9	8.1	ヘラ描直線文8条以上	ヘラミガキ	淡茶褐色	30	
189-5	〃	〃	22.0	8.1	綾杉文 刺突文 ヘラ描直線文12条	ナデ ヘラミガキ	明黃褐色	20	
189-6	〃	〃	〃	〃	削出突帯 羽状文 貝殻描直線文3条	ヘラミガキ ハケ ナデ	淡灰色	〃	
189-7	甕	〃	〃	〃	ヘラ描直線文3条の間に刺突文	ナデ ハケ	暗茶色	〃	口縁端部に刻目
189-8	蓋	〃	(6.0)	7.8	内面煤付着	ナデ ヘラミガキ	淡灰褐色	頂部完存	頂部径
189-9	甕底部	〃	(7.2)	4.3	〃	ナデ	暗灰褐色	底部完存	底部径
189-10	広口壺	〃	26.2	6.4	櫛描斜格子文 同波状文 刻目突帯4条	ハケ	淡灰色	20	
189-11	〃	〃	28.6	11.8	凹線文2条 頂部にヘラ描直線文3条	ハケ ヘラケズリ	明黃褐色	35	
189-12	壺	〃	16.0	6.0	刺突文 頂部に指頭压痕突帯	ハケ ナデ	灰褐色	40	
189-13	細頸壺	〃	〃	〃	頸部に刻目突帯3条以上 櫛描直線文 同斜格子文	〃	淡灰褐色	〃	
189-14	壺	〃	〃	〃	口縁内に突帯 凹線文5条 刺突文	ナデ	淡灰色	〃	
189-15	甕	〃	20.0	4.6	凹線文4条 工具による压痕文	ナデ	淡灰白色	15	
189-16	台形土器	〃	(8.6)	3.8	頂部は平坦	ナデ ヘラケズリ	暗灰色	35	頂部径
190-17	高坏	〃	13.2	8.1	口縁端部に刻目	ナデ ハケ	灰褐色	17	
190-18	台付鉢	〃	(10.6)	7.8	凹形透かし四方 摘み出し様の突帯	不明	暗褐色	35	漆状の物塗布 磨滅 脚部径
190-19	精製鉢蓋	〃	8.8	1.3	2つ一組の円孔	ナデ	暗灰色	90	黒色物塗布
190-20	無頸壺	〃	11.2	5.1	ヘラ描直線文12条以上の上に竹管文	ヘラケズリ ナデ	淡褐色	25	
190-21	甕底部	〃	(5.8)	4.8	内面煤付着	ヘラミガキ ヘラケズリ	淡灰色	50	底部径
190-22	〃	〃	(6.8)	12.9	〃	ハケ ナデ	灰褐色	70	〃
190-23	壺	〃	13.9	5.7	擬凹線文8条	ハケ ヘラミガキ	濁茶褐色	30	煤付着
190-24	甕	〃	11.5	4.1	凹線文3条	ナデ ヘラケズリ	淡褐色	20	
190-25	〃	〃	11.4	3.8	凹線文3条~4条	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	口縁完存	煤付着
190-26	〃	〃	13.8	9.6	凹線文3条	ハケ ヘラケズリ	明橙褐色	10	
190-27	〃	〃	17.3	3.6	凹線文3条	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	12	
190-28	〃	〃	15.0	6.5	凹線文6条 櫛状工具刺突文	ナデ ヘラケズリ	黒灰褐色	10	外面煤付着
190-29	〃	〃	16.0	9.5	凹線文5条 刺突文	ハケ ヘラケズリ	暗褐色	45	〃
190-30	〃	〃	16.4	4.6	凹線文5条	ナデ ヘラケズリ	黒褐色	20	〃
190-31	〃	〃	13.9	4.5	凹線文4条	ナデ ヘラケズリ	淡褐色	16	〃
190-32	〃	〃	17.1	4.9	凹線文3条	ハケ ヘラケズリ	暗茶褐色	25	〃
190-33	〃	〃	17.4	6.1	凹線文3条 列点文 米粒大の刺突	ヘラケズリ	黒褐色	20	〃
190-34	〃	〃	20.2	5.0	凹線文5条	ハケ ヘラミガキ	黑黃褐色	10	〃
190-35	〃	〃	17.1	14.3	凹線文4条 刺突列点文	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	30	煤付着
191-36	〃	〃	12.8	7.5	擬凹線文5条 櫛による刺突文	ナデ ヘラケズリ	明黃褐色	15	外面煤付着
191-37	〃	〃	20.0	4.5	擬凹線文8条	丁寧なナデ	暗茶褐色	15	〃
191-38	〃	〃	10.4	6.1	2条の浅い凹線	ナデ ヘラケズリ	黒褐色	50	〃

191-39	"	"	13.8	5.8	口縁端面ナデ	ナデ ヘラケズリ	淡灰色	10	
191-40	"	"	11.5	3.0	口縁端面ナデ	ナデ ヘラケズリ	黒褐色	16	外面煤付着
191-41	甕底部	"	(4.0)	2.3		ハケ ヘラケズリ	淡茶褐色	80	底部径
191-42	"	"	(3.8)	2.3	底部に焼成後穿孔	ヘラケズリ ヘラミガキ	淡茶褐色	底部完存	"
191-43	精製鉢	"	(18.8)	4.0	貝殻刺突文 摱凹線文計11条以上	ヘラケズリ	明灰褐色	20	胴部径 赤色物塗布
191-44	壺	"			ヘラ描山形文 貝殻直線文3条	ナデ	淡黃灰色		
191-45	高坏	"	20.8	4.1	凹線文3条	ヘラミガキ ヘラケズリ	淡灰色	30	内外面赤色物塗布
191-46	高坏脚部?	"	(9.0)	3.8	脚端部に凹線文3条 器台の可能性	ヘラミガキ ヘラケズリ	淡黃灰色	35	赤色物塗布 脚端部径
191-47	高坏脚部	"	(10.3)	6.0	脚端部に凹線文3条	ナデ ヘラケズリ	赤橙色	45	赤色物塗布 脚端部径
191-48	鼓形器台	"	18.3	5.2	櫛(ヘラ?) 描直線文9条	ヘラケズリ ヘラミガキ	黒褐色	20	
191-49	小型鉢	"	6.8	8.5	径4mmの円孔 平底 外面肩以下煤付着	ナデ ヘラミガキ ヘラケズリ	淡灰色	80	胴部径9.8cm 底部径4.6cm
191-50	鉢	"	25.6	11.0		ハケ ヘラケズリ	淡黃褐色	20	一部火を受け 全体煤付着
194-1	粗製深鉢	砂礫6				条痕	淡黃褐色		
194-2	深鉢	"			口縁端面刻目 2つ 一組の刺突文	条痕	暗褐色		
194-3	壺	"	19.0	9.2	凹線文計5条 口縁 内竹管文 列点文	ナデ	淡灰褐色	25	列点文はハケ原体
195-1	深鉢	砂礫7				繩紋 ナデ	淡茶褐色		繊維を含む
195-2	"	"			内面煤付着	繩紋	淡茶色	15	磨滅著しい
195-3	"	"			竹管状工具による押 引文 波状文	ナデ	暗茶褐色		外面煤付着
195-4	"	"			横、斜めの沈線文	条痕	茶褐色		内外面煤付着
195-5	"	"				条痕	暗茶褐色		全体に磨滅
195-6	"	"			押引文4条	条痕	暗褐色		内外面煤付着
195-7	"	"				条痕	淡灰色		磨滅著しい
195-8	"	"				条痕	茶褐色		
195-9	"	"			口縁内面肥厚	ナデ? ミガキ?	淡灰茶色		磨滅著しい
195-10	"	"			楕円形の刺突文 刻目突帯 縦の沈線	条痕 ナデ	暗褐色	10	
195-11	蓋?	"	(8.6)	8.3	径5mmの円孔	ヘラミガキ	淡褐色	40	頂部径
197-1	深鉢	砂礫8	15.4	9.7	口縁端部に肥厚帯	ヘラケズリ ナデ	暗橙褐色	10	外面煤付着
197-2	"	"			口縁にそって刻目突 帶 波状口縁	二枚貝条痕	暗褐色		補修孔有り
197-3	"	"			凹線文2条	二枚貝条痕	淡黃褐色		貝压痕
197-4	壺	"	11.8	7.8	ヘラ描直線文3条	ハケ ヘラミガキ	白灰色	20	
197-5	"	"		8.9	ヘラ描直線文4条	ハケ	淡黃褐色		
197-6	甕	"	24.0	12.2	ヘラ描直線文1条	ナデ ハケ	灰褐色	16	外面煤付着
197-7	壺	"			櫛 描波状文3列	ナデ ヘラケズリ	淡黃灰色		
197-8	"	"	19.0	4.9	口縁端部に羽状文 指頭圧痕文帯		淡黃褐色	20	羽状文はハケ原体
197-9	"	"	25.9	10.4	口縁端面刺突文 指頭圧痕文帯2列 頸部内面凹線文?	ハケ	黃褐色	30	
197-10	高坏脚部	"	(11.0)	6.6	凹線文計6条以上	ヘラケズリ?	橙茶色	25	脚端部径
197-11	甕底部	"	(5.8)	3.8	上げ底	ヘラミガキ	黒褐色	15	外面煤付着
197-12	"	"	(7.0)	3.2	底部内側に指圧痕	ヘラケズリ	黄灰色	底完存	底部径
197-13	甕	"	11.8	4.7	凹線文5条 貝殻に による連続刺突文	ナデ ヘラケズリ	暗褐色	20	
197-14	"	"	20.4	4.0	凹線文4条	ナデ ヘラケズリ	淡灰褐色	17	
199-1	深鉢	砂礫9	17.0	7.8		条痕 ナデ	淡茶褐色	10	
199-2	"	"			押引文(竹管?)	ナデ	暗茶褐色		波状口縁か?
199-3	"	"	31.6	12.0	押引文5条 山形文	ナデ 条痕	暗褐色	10	煤付着
199-4	"	"				条痕 ナデ	淡灰褐色		
199-5	"	"				条痕	暗茶褐色		外面煤付着
199-6	"	"			口縁端面に刻目	条痕	淡茶褐色		"
199-7	甕底部	"	(5.5)	3.6	底部赤変	ヘラミガキ ナデ	灰褐色	25	底部径

*口径は復元、器高は現存高を含む。口径欄の()の数字は、備考欄等に示した「胴部径」「底部径」等を口径欄に記したこと示す。

表16 西川津遺跡V区-B出土石器観察表

捕団番号	種別	層位	長さ(cm)	厚さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	備考
201-1	太形蛤刃石斧	礫5上位	12.6	4.8	6.4	624.4	砂岩	全体に風化
201-2	"	礫5上位	14.4	3.5	6.2	433.7	粗面玄武岩	
201-3	"	礫5	8.5	3.0	5.3	257.7	ヒン岩	
201-4	"	礫5	12.1	4.0	6.1	479.1	蛇紋岩	
201-5	磨製石斧	礫4	14.7	3.9	5.2	476.5	泥岩	
201-6	太形蛤刃石斧	排土中	13.7	4.3	5.4	510.5	蛇紋岩	
201-7	"	礫5	6.7	4.0	6.5	341.9	ヒン岩	敲打痕 転用?
201-8	"	礫4	6.9	4.0	5.5	191.2	ヒン岩	
202-9	石斧転用砥石	礫5	8.5	4.0	6.2	339.2	玄武岩質安山岩	破損面を使用
202-10	"	礫4	9.9	3.1	4.7	232.5	凝灰質泥岩	三面?
202-11	石斧未製品か	礫5	8.0	6.2	8.1	605.5	玄武岩	
202-12	敲石	礫2	9.8	5.0	8.5	794.2	ヒン岩~安山岩	
202-13	磨石	礫5	8.3	3.8	8.2	407.1	砂岩	
202-14	敲石	礫5上位	9.3	5.1	7.8	629.1	砂岩?	
203-15	砥石	礫5	9.8	6.9	8.5	630.4	ヒン岩	五面
203-16	大型穂摘具?	礫1	10.4	2.1	19.5	459.6	粗面玄武岩	
203-17	"	礫5	11.5	1.7	9.7	179.1	安山岩	
203-18	石核	礫5上位	7.4	5.5	8.4	366.9	碧玉	
204-19	磨製石剣か?	礫5か7	5.5	1.4	4.1	39.5	砂岩	
204-20	穂摘具	礫4	7.5	0.6	5.1	33.8	泥岩	穿孔有り
204-21	穂摘具未製品	礫5上位	6.6	1.8	8.5	127.4	珪質泥岩か 同頁岩	
204-22	打製穂摘具?	礫5上位	4.9	1.1	8.5	53.7	上同	
204-23	環状石斧	礫7	径6.0	1.7		78.0	ヒン岩	
204-24	石冠?	礫1	5.6	5.1	5.8	185.3	砂岩	風化著しい
204-25	石皿	礫5	7.5	2.4	6.7	127.5	砂岩	
205-26	石斧未製品?	礫4	9.4	3.0	2.6	166.3	泥岩	
205-27	転用砥石	礫5上位	9.0	3.4	2.4	160.4	凝灰質泥岩	
205-28	砥石	礫5	6.4	1.6	5.2	57.3	凝灰岩	側面に穿孔有り
205-29	石核	礫7	5.2	2.0	6.0	81.2	玉髓	
205-30	剥片	礫5	3.0	1.0	5.6	15.1	玉髓	
205-31	"	礫5	6.1	0.4	5.0	36.8	珪質泥岩か 同頁岩	
205-32	"	礫1	3.8	0.3	4.0	7.4	頁岩	
205-33	"	礫1	5.5	0.6	5.0	36.8	頁岩	
205-34	"	礫5	4.1	0.9	5.9	21.7	安山岩	
206-35	石鏃	礫5	3.9	0.3	1.7	1.6	黒曜石	
206-36	石鏃未製品	礫5	3.5	0.6	2.7	5.2	黒曜石	
206-37	石核	礫5上位	4.5	1.6	3.0	35.6	玉髓	

表17 西川津遺跡V区一B出土木製品観察表

挿図番号	種別	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ/太さ(cm)	形態・手法の特徴	木取	備考
207-1	組合式平鋸	砂礫 2	46.1	12.0	0.7	刃部長43.7cm	柾目?	腐食著しい
207-2	広鋸未製品	砂礫 5	21.9	15.6	2.9	舟形隆起無し	柾目	
208-3	曲柄平鋸	砂 2	55.7	13.5	1.4	軸部幅8.8cm	柾目?	腐食著しい
208-4	板 材	砂 2	27.4	8.7	2.4		板目	
208-5	板 材	砂 磨 8	24.7	15.1	4.5	一面のみ加工	柾目?	鋸未製品?
209-6	横 槌	砂 磨 6	25.0		6.9	柄部径4.0cm	芯持	
209-7	櫂状木製品	砂 2	19.6	11.2	1.9		柾目?	
209-8	膝柄横斧	砂 2	握り部長48.0cm、同径2.6cm、斧台長18.0cm、同径5.6cm				芯持	着柄角度70度
210-9	斧 未 製 品	砂 2	握り部長55.2cm、同径2.8cm、斧台長14.9cm、同径4.8cm				芯持	着柄角度92~3度
211-10	部 材	砂 磨 8	43.6	13.2	2.5	二カ所の方形の孔	板目	
211-11	抉入木製品	砂 磨 5	51.5		5.6	刃部最大幅3.4cm	芯持	一部炭化 ヤブツバキ
211-12	双頭木製品	砂 磨 5	77.6		6.5	末端は頭部作り出す	芯持	ヤブツバキ
212-13	抉入木製品	砂 2	60.3	9.7	5.5	刃部最大幅5.9cm	柾目	硬質
212-14	建築部材	砂 2	53.0	7.5	6.1		板目	スダジイ
212-15	剣形木製品	砂 磨 2	61.0	6.0	3.8	刃部最大幅3.2cm	芯持	硬質
212-16	加工材破片	砂 2	11.8	13.2	3.8	刃部最大幅3.4cm	芯持	加工痕明瞭
212-17	板 材	砂 磨 2	37.4	15.7	0.8	合計四カ所に孔	柾目	軟質
212-18	板 材	砂 磨 2	48.6	7.9	1.5		柾目	
213-19	流された杭	砂 磨 1	61.0		10.3	六方から加工を行い、先端にも加工 刃部最大幅5.0cm	芯持	マキ属
213-20	〃	砂 磨 5	46.1		7.5	切断面を残さず、三方から加工 刃部最大幅4.4cm	芯持	エノキ属
213-21	〃	砂 磨 5	23.4		7.3	切断面を残し、五方から加工 刃部最大幅3.3cm	芯持	コナラ属アカガシ亜属

表18 西川津遺跡V区一B出土杭観察表

挿図番号	長さ(cm)	最大径(cm)	形態の特徴	刃部最大幅(cm)	木取	備考
213-22	36.5	9.2	節のある側は先端のみ加工し、反対側は剥ぐように長く加工。	3.5	芯持	節を取り込んで杭に加工。ヤブツバキ
213-23	91.8	6.4	一方に剥ぐような加工を行い、先端は鈍く尖り三方から加工。	3.6	芯持	軟質
214-24	54.4	5.2	二方向から加工を行うが加工の及ばない部分有り。	3.1	芯持	先端欠損 軟質
214-25	44.0	6.1	一方向からのみ数回加工。	2.5	芯持	軟質
214-26	73.0	8.5	先端を尖らせ、四方から加工。	3.6	芯持	節を加工。 ヤブツバキ
214-27	87.0	11.0	先端を鈍く尖らせ、八方から鉛状工具で加工。	4.7	芯持	イヌガヤ
214-28	94.5	7.7	先端を鈍く尖らせ、三方から剥ぐように、一方は先端にのみ加工。	2.6	芯持	軟質
214-29	61.4	8.7	わずかに切断面を残し、三方から剥ぐように、一方は先端にのみ加工。	3.9	芯持	節を加工。 ヤブツバキ
215-30	120.0	10.4	五方から剥ぐように加工。	6.8	芯持	一部炭化。先端欠損
216-31	167.8	13.6	六方から連続して加工。4~5回の加工で先端へ達する。	7.2	芯持	先端欠損

※長さ・幅・厚さ・太さは全て現状での数字である。

表19 西川津遺跡V区-B出土土製品観察表

挿図番号	種別	層位	長さ／径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
219-1	土製円板	砂礫 3	4.2	0.4	11.2	
219-2	〃	砂礫 2	3.6~4.0	0.7	12.4	
219-3	土錘	砂礫 1	2.7~3.3		26.1	ナデ
219-4	〃	砂礫 1	2.7~3.1		22.7	



西川津遺跡海崎地区作業風景（南東から：1985年撮影）

第7章 西川津遺跡における人間の諸活動

2ヶ年にわたる西川津遺跡の調査では、縄紋時代から古墳時代にかけての多数の杭、弥生時代後期の石組遺構を検出し、砂層や砂礫層からは大量の土器や木製品、石器が出土した。

遺物については各章でそれぞれ若干の言及を行ったが、まず土器を中心に縄紋時代から述べる。縄紋土器は、特に縄紋時代前期と晩期の土器が多いことが注目される。前期の土器は、早期末の纖維を含む土器から前期中葉まで、調査地点にあまり関係なくほぼ継続して出土している。中期、後期の土器は多くの量の出土を見なかったが、Ⅱ区からは杭に伴うと考えられる土器が出土した。また、晩期の土器は特に刻目突帶文土器が多く出土し、突帶文の出現段階から刻目の無い突帶文土器の段階まで出土した。刻目の無い突帶文土器は、朝酌川遺跡群に限らず、山陰地方における縄紋時代から弥生時代への移行過程を考えるうえで今後重要な資料になると思われる。

弥生時代の前期の土器には貝殻による施文や文様を施したものが見られた。特に、これまでの調査と同様に縁にギザギザのある貝（タマキガイなど）で施された羽状文や綾杉文が目を引く。また、口縁内に蓋受けを有する壺（54-29、97-2）や複条貼り付け突帶（54-35）などの存在から、これまで指摘されているように、西部瀬戸内地域との日本海による交流を考えることが出来るが、口縁の内面を肥厚させたり突帶を有するものは壺全体から見ると少数であることや耳状突起を持つ壺（55-61、175-5）の存在から、かならずしも西部瀬戸内だけではなく、口縁部が逆「L」字の甕の存在と合わせて、中部瀬戸内地域との交流を指摘することができる⁽¹⁾。今後は、日本海側だけではなく、山間部を介した中部瀬戸内地域との交流についても、器形や文様の分析から進めていくことが課題である。

今回の調査ではⅢ区左岸から前期と中期前葉の土器が混在して出土したが、これらの資料から前期の土器を引いた分を、中期前葉の資料として考えてみたい。中期前葉の土器は、Ⅲ区右岸やV区-Bからも出土しており、以下の特徴を有す。（43-14、15、51-51～53、109-10～12）

- ① 櫛描文を施し、複帶構成で施すものもある。
- ② 櫛描文は直線文の他に波状文が用いられる。甕には直線文と波状文が交互に施されるものや、文様の最下端に波状文を施すものが見られる。また、文様の下に刺突文が施されるものが多い。
- ③ 櫛描文は中期中葉のものと比べて1条1条が太く、器面に対して強く施されており、櫛描文が施された部分の器面はやや凹む。

中期前葉の土器は、壺だけではなく甕にも櫛描文が施される点が特徴的である⁽²⁾。

また、中期中葉の土器では加飾広口壺が出土し、いくつかのヴァリエーションを有するものの、以下の特徴をまとめることが出来た。

- ① 加飾広口壺は大きく開く口縁部を有すが、口縁部の下に刻み目を持つ突帶を数条巡らせるものと突帶を持たず口縁端部を大きく垂下させたり拡張するものに分けられる。
- ② 前者はやや細い頸部から直線的に大きく開く口縁部を持ち、口縁部端面には斜格子文や円形浮文、口縁内面には波状文を施すものが一般的である。（94-12）

③ 後者は、やや短い筒状の口縁部から大きく屈曲して口縁端部へ至る。頸部には突帯文が施され、凹線文へと変化する。口縁部端面には波状文や斜格子文、垂下させた口縁部内面には波状文や突帯文、斜格子文や刺突文などが施される。(102-31、114-15)

胴部は出土しなかったが、胴部にも直線文や斜格子文、波状文や刺突文などが施され、最大径付近にはハケ原体による刺突文が施されるようである。また、加飾されるのはこの2つの壺に限られるようで、その他の壺、例えば短頸壺には刺突文が施される程度である。この時期は無頸壺に一部加飾されるものが見られるが、その他の器種には胴部に刺突文が施される程度である。中期中葉は基本的には櫛描文で加飾される時期と考えられるが、その中で特に加飾されるものが顕著になる時期なのではないかと思われる。

後期にはV区-Bにおいて石組遺構が検出された。流れに対して直交する岸辺の位置に存在し、先を尖らせた杭を打ち込んでいることから、その性格を人が水辺に近付いていくための簡単な施設や船着場ではないかと想定した。また、この遺構の近くから銅鐸が出土しているが、海崎地区の集団が朝酌川遺跡群における農耕祭祀の際の指導的な位置にあった可能性を考えたい。

古墳時代では、特にⅢ区右岸から5～6世紀の土師器が出土し、この時期の資料を充実させた。また、古墳時代の杭が多数検出され、密集して検出されたところもあった。用途としては、一時的な護岸の施設の一部、または舟を繋ぎおくためではないかと考えられる。更に、平安時代を下限とする砂礫層からは青磁や白磁が出土し、橋脚と考えられる太い杭も検出された。

石器では、Ⅲ区左岸から中期前葉を下限とする時期の砂礫層から板状未製品が出土し、西川津遺跡における玉作の資料をさらに充実させた。また、Ⅲ区右岸やV区-Bからも、所属する時期は特定できないが多くの石器が出土した。その中で、Ⅲ区右岸の銅剣形石剣は注目される。銅剣形石剣は島根県内では他に2例出土しているが⁽³⁾、それぞれ出土した遺構の性格が異なる。また、Ⅲ区右岸で出土した石錘（131-13）は九州形であり⁽⁴⁾、日本海を介した交流の存在を示唆すると共に、朝酌川遺跡群が当時の交流の中で要所を占めていたことがうかがわせた。

更に、出土した黒曜石と碧玉の産地分析を行った（第12章）。その結果、黒曜石は隠岐の久見産が8割を越えたが、同じ隠岐の津井産や加茂産と判定された資料も存在した。また、碧玉は花仙山産と判定され、西川津遺跡では遅くとも古墳時代前期には花仙山の碧玉による玉作が行われていたことがわかった。今回の調査では、この碧玉からどのような玉を製作していたかはわからなかったが、古墳時代の朝酌川遺跡群における玉作の規模や消長については、今後の検討課題である。

木製品は、農耕具・工具・紡績具・容器・祭祀具等が出土した。農耕具では、Ⅲ区左岸の直柄平鍬（64-1）やⅢ区右岸の直柄横鍬（134-1）や馬鍬の把手（136-6）、V区-Bの曲柄平鍬（208-3）が特筆される。特に、直柄平鍬は柄の一部が付いたまま出土しており、装着角度など使用時の様相を考えることのできる資料である。また、調整具として横槌（209-6）が出土した。工具ではV区-Bの膝柄横斧（209-8）や斧未製品（210-9）が挙げられる。紡績具は機織具（67-11）が出土した。容器は木製高杯（67-10）が1点出土したのみで、他に出土を見なかった。祭祀具と考えられるものにはⅢ区右岸の舟状木製品（135-5）がある。ただ、全体的に木製品は少なかった。これは、一つは弥生時代の砂礫層が多くなったことによるが、当時の集落とは若干離れた地点を調査したことと考えられる。

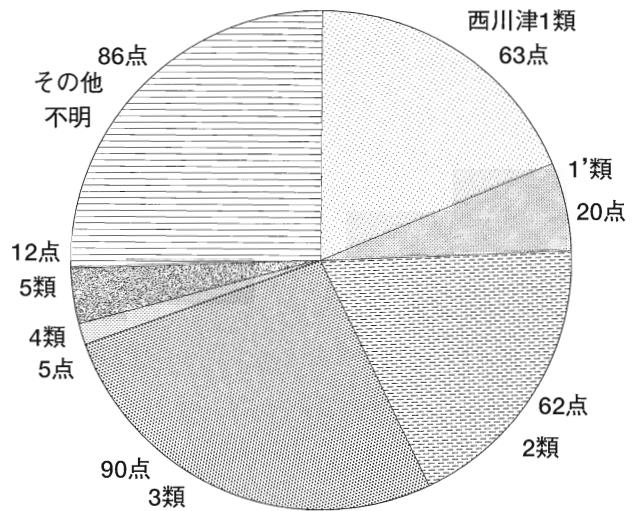
出土した木材の樹種について、第11章に結果を示した。縄紋時代の杭には樹種の選択が働いてい

た可能性があること、弥生時代後期以降の試料では、遺跡周辺の植生を反映しているという結果を得た。また、Ⅲ区右岸に見られる杭のスギ材は、遺跡周辺の植生よりも余材の利用など、利用の際の選択がはたらいていた可能性があることがわかった。

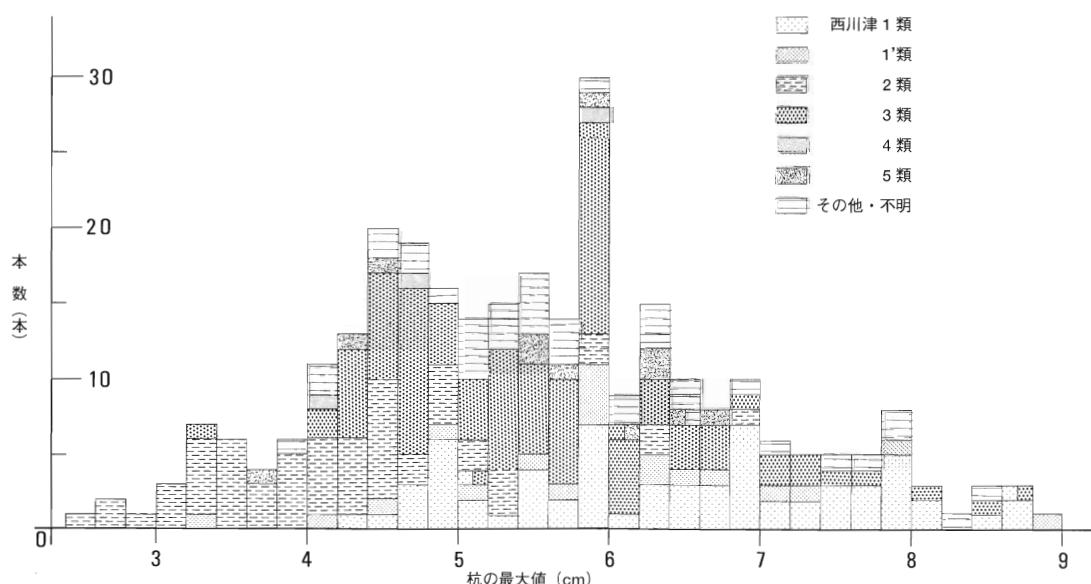
第1節 西川津遺跡の杭について

今回の調査では、Ⅱ区、Ⅲ区右岸、Ⅲ区左岸、V区-Bから計500本余りの杭が検出された。これらの杭のほとんどが当時の朝酌川に伴う簡易的な施設と考えられ、それぞれの章で若干の考察を行ったが、ここでは時代毎に見ていくことにしたい。

Ⅱ区の縄紋時代の杭を1類から5類へ分類したが、総数と各分類の比率を示したのが第220図⁽⁵⁾、その分類と杭の最大径の相関を示したのが第221図である。この図によれば、1類、2類、3類がそれぞれ20~25%を示すので、これらの杭が縄紋時代の杭の中心であったことがうかがえる。また、第221図からは1類と1'類が約4~9cm、2類が約3~6cm、3類が約4~8cm、4類が約4~6cm、5類が約4~7cmに主として分布することがうかがえた。この内、1類は直径が4~5cmのものにも見られるが、6cm以上では4割、7cm以上では5割を占め、相対的に太い杭に多いことがうかがえる。1'類は1類ほどの傾向を示さないようである。これに対して2類は5cm以下に多く、5cm以下では約47%、4cm以下では9割を占め、1類とは反対に細い杭に多いことがうかがえる。3類は、1類と2類の間、径が4~6cmでは4割を占め、3類全体の3/4がここに集中する。4類と5類は数が少ないので傾向を考えることは困難であったが、5類は分布域が3類とほぼ同じなので、杭の製作の上では3類と近いことが考えられる。



第220図 Ⅱ区 杭の分類とその比率



第221図 Ⅱ区 縄紋時代の杭の最大径の頻度

のことから、Ⅱ区の縄紋時代の杭は原材（枝）の太さに応じて先端の形状を違えていたことが明らかになった。更に踏み込んで言えば、細い原材はわずかな加工で杭としている（2類）のに対し、ある程度の太さを持つ原材では採取時の加工に加えて、先端を周囲から加工したり（3、5類）、剥ぐような加工を行って先端へ向けて太さを減じた（1'類）後、更に先端に加工を加えていた（1類）ことから、原材の太さに応じた加工を行っていたことが考えられる。この背景として、合計で300本を越える杭を遺跡の周辺から得ようとした際に、出来るだけ労力をかけないように考えた結果ではないかと推測される。樹種同定の結果からは（第11章）、試料の約4割がヒノキであるが、樹種と分類は相関を示さなかった。このことからも樹種ではなく原材の太さを基準にしていたと考えられる。また、樹種同定の結果ではヒノキやクスノキ科が多く、採取に際して選択が働いていた可能性を持つ⁽⁶⁾。なお、加工痕や刃部最大幅を検討したが、加工痕の断面はゆるいカーブを描いており、3類や5類に比べて1類は相対的に刃部最大幅が広い傾向があるようである。

Ⅲ区左岸では弥生時代中期前葉以前の杭を検出したが、Ⅱ区と比べて本数が少なく、傾向を示すことは出来なかったが、一定の間隔を置いて打たれた可能性を有す。また、Ⅱ区の分類の1類や3類に似た杭が見られた一方、先端が尖る杭や、加工痕の断面が平坦なものもあり、Ⅱ区の杭とは異なる要素も見られた。刃部最大幅はほぼ2～3cmであった。

V区-Bでは、弥生時代後期以前の杭が検出されたが、形状はⅢ区左岸と似ているものが多く、特に石組遺構に伴う杭は三～八方から加工を行い、先端を尖らせるものがほとんどであった。樹種は全体にヤブツバキがやや多いようであるが、それ以外の種も多く見られる。Ⅲ区左岸やV区-Bでは芯持材が角材よりも多いようである。加工痕の断面は平坦なものが多く、刃部最大幅は特に径が10cmを越える杭では、刃部最大幅も約7cmと幅が広いものが見られたので、鉄器の使用を示唆する。

Ⅲ区右岸の杭には、角材や転用材が存在し、芯持材の丸杭でも先端を尖らせるものがほとんどであった。また、断面長方形の角材の短辺側を中心に加工し、先端を尖らせるものも多く見られた。加工痕から、鉈状の工具を使用したと考えられるものや加工痕の断面が平坦なものがあり、時代を考えると当然ではあるが、鉄器の広範な利用がうかがえた。刃部最大幅は、2～6cmとややばらつきがある。なお、樹種同定の結果からは、角材を中心にスギの使用が見られ、縄紋時代とは異なる選択が働いていた可能性を持つ。花粉分析の結果からは、Ⅲ区右岸付近ではスギの花粉が多く検出されている（第10章）。

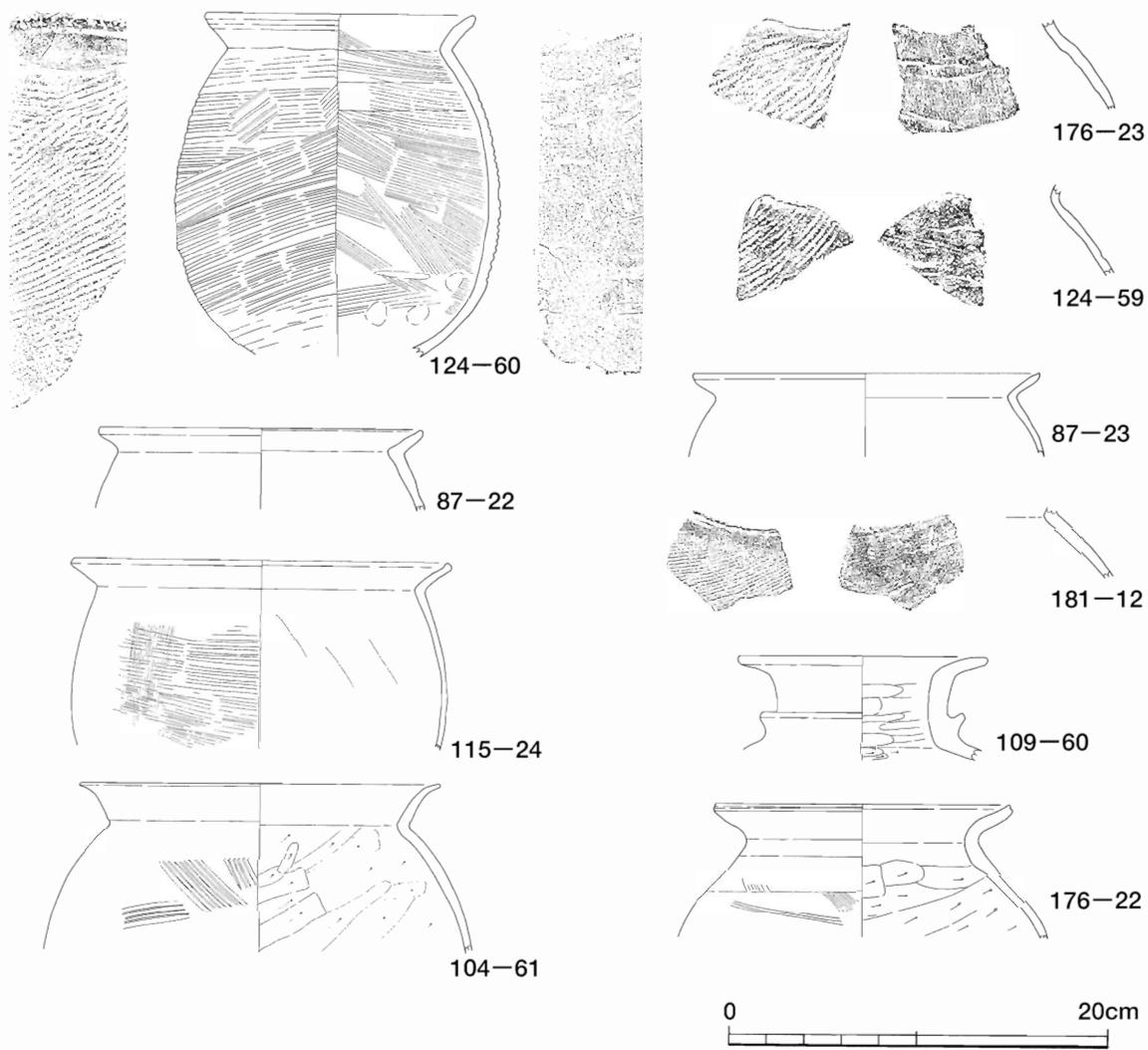
朝酌川遺跡群の調査では、これまでにも杭の出土を見ている。Ⅲ区右岸と左岸の間の部分を調査した西川津遺跡第1次・2次調査では、直径5～10cmの杭が特に当時の調査区の西側、つまりⅢ区右岸側に多く検出されており、多くの杭が標高0m付近から打たれている⁽⁷⁾。タテチョウ遺跡では芯持材の他に板材や角材が検出されたが、Ⅲ区右岸で見られたように先端を尖らせているもの他に、一方から加工を行い側面観が斜めになるものが多いようである⁽⁸⁾。原の前遺跡でも先端が尖るものや側面観が斜めのものがあり、カシ、ナラ、ツバキが用いられている⁽⁹⁾。朝酌川に伴う杭は、時代によって用途が異なることを考えなくてはならないが、太さが10cm以下の、上部に施設を伴わない杭がどのように用いられていたのか、川と人の関わり合いを考えながら今後も検討を加えたい。

第2節 西川津遺跡における畿内系土器について

今回の西川津遺跡の調査では、計10点の「畿内系」⁽¹⁰⁾と考えられる土器が出土した（第222図）。この量は概期の土器の中で1%をはるかに下回る量であるが、山陰地方屈指の拠点集落における交流を考える上で、今回出土した畿内系土器について述べ、これまでの朝酌川遺跡群の調査で出土した「畿内系土器」と合わせて若干の考察を加えたい。

今回出土した土器では、10点中9点が甕である。甕には、伝統的第V様式甕、庄内甕、布留傾向甕があり、それらと山陰の「折衷土器」も存在する。

伝統的第V様式甕は、2点出土している。124-60はほぼ全体がわかるもので、外面には粗いタタキ（2～3条/cm）、内面にはヨコハケやナナメハケを施す。また、口縁部外面には接合痕を明瞭に残す。胴部最大径は器高の下約1/3にあり、前述したように「連続ラセンタタキ」を施している。底部を欠損するが、平底ではないかと思われる。176-23は破片であるが、外面には粗いタタキ、内面には横方向の板ナデを施す。また、124-59は外面はタタキであるが、内面はヘラケズリを施す。タタキがやや粗いことから、後述する庄内甕とは異なり、畿内の伝統的第V様式甕と山陰

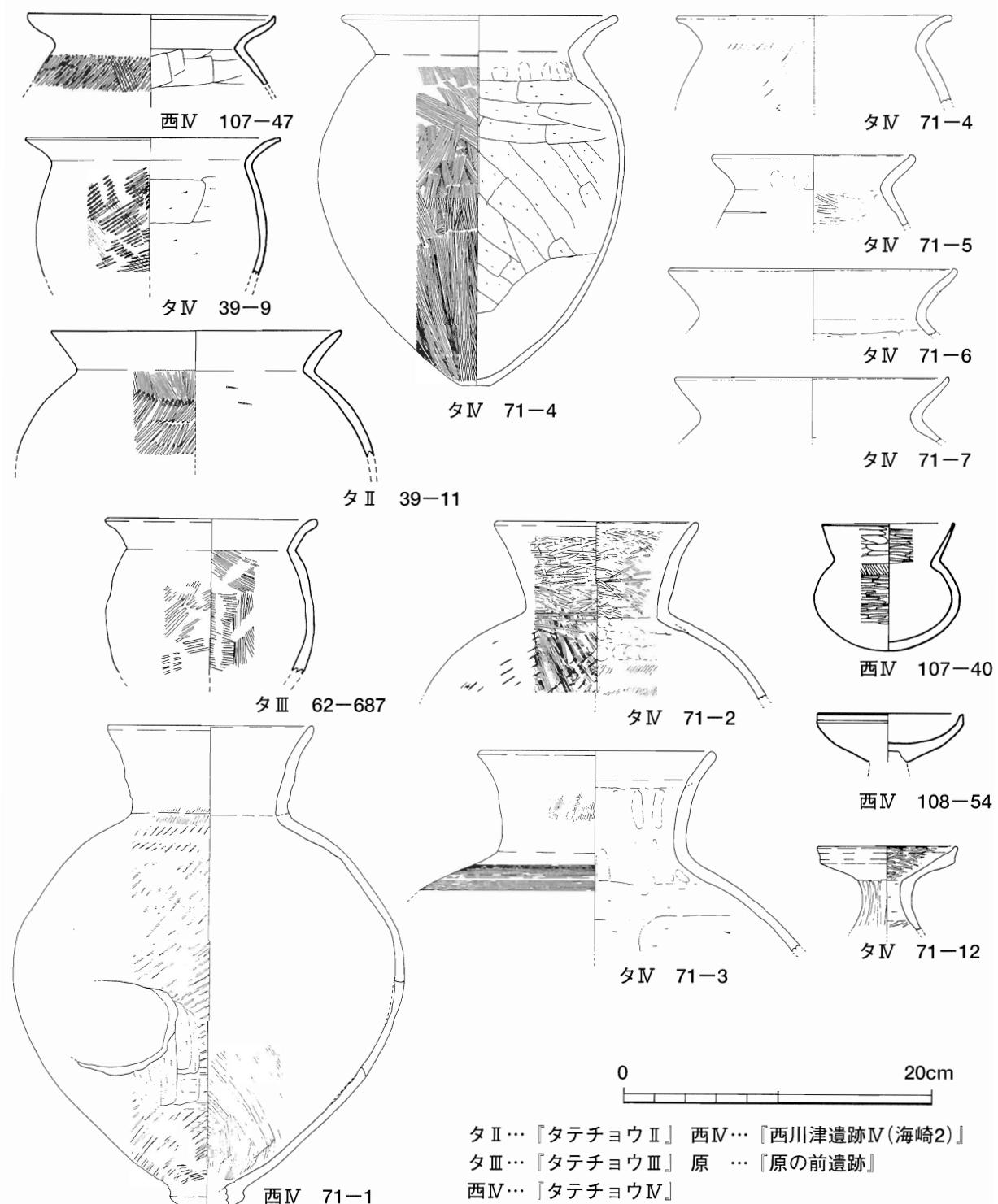


第222図 西川津遺跡Ⅲ区右岸・V区-B出土畿内系土器 (S=1/4)

の内面をヘラケズリする甕の「折衷」ではないか、と思われる。

庄内式甕の系譜を引く土器は1点出土している。181-12は破片ではあるが、外面に細い（6条/cm）タタキ、内面は図上で左から右へのヘラケズリを施す。また、頸部内面には明瞭な稜を有す。これらの特徴から、この土器は庄内河内甕を模倣したものであると考えられる。

176-22は、頸部で緩やかに屈曲して口縁部へ至り、口縁端部には若干の面を持つ。肩部には板ナデを施し、内面は頸部の下からケズリを行うので頸部はやや厚みを持つ。この土器は中国・四国



第223図 朝酌川遺跡群出土畿内系土器 (S=1/4) ※図は各報告書より転載

地方で見られる布留傾向甕と考えられる⁽¹¹⁾。

なお、系譜を具体的に示すことは出来ないが、「畿内系」と考えられる土器も出土している。115-24は、口径と胴径がほぼ同程度で、口縁端部は面を持ちわずかに上方へ立ち上げる。胴部の調整は外面がやや右下がりのタタキの後、タテハケやナデによりタタキを消す。内面は丁寧なナデである。104-61も外面はハケ、内面はヘラケズリであるが、口縁部が内湾氣味に屈曲する。87-22、23は頸部で稜を持って屈曲する。また、壺104-60は、頸部から大きく短く屈曲し、頸部には一条の突帶を巡らす。

これらの土器を、これまで朝酌川遺跡群において出土した土器と比較してみたい。

第223図の土器は、第222図と同様に、伝統的第V様式、庄内式、布留式に系譜をたどることの出来るものが存在する。

伝統的第V様式の甕の系譜を引くものには、タⅢ62-687がある。やや小型であるが、外面をタタキの後ハケで調整し、内面はハケである。また、タⅡ39-9、11は、外面がタタキ、内面がヘラケズリである。

西Ⅳ107-47は頸部内面に明瞭な稜を持ち、口縁端部を上方に立ち上げる特徴から、庄内河内甕の系譜を引くと考えられる。タⅣ71-1、2は、ほぼ球形の胴部に緩やかに外反するやや短めの口縁部を有す。胴部外面の調整は1がタタキ、2はタタキ後ハケで、2は口縁部の内外にミガキを施す。布留式土器の系譜を引くものは、上記の土器よりも時間的に下るが、タⅣ71-3がある。これは直口壺で、島根県内では加茂町神原神社古墳埋納壙⁽¹²⁾より出土している。西Ⅳ107-40は、小型丸底壺であり、横方向のヘラミガキが確認できる。

タⅣ71-4~7は、系譜は不明であるが「畿内系」と考えられる甕である。また、タⅣ71-12は端部にわずかに面を持つ、中空の小型器台である。

なお、これらの土器の胎土は、他の土器と比べて特に違いは見られない。

これらの土器は、従来「畿内系」と呼ばれてきた土器であるが、その中には系譜を考えることのできるものとそうでないものが見られた。この内前者は直接的な情報の伝播を考えることが可能であり、鹿島町南講武草田遺跡⁽¹³⁾のような集団の関与を考えることが出来る。また、後者は間接的な情報の伝播、または「畿内」の周辺部⁽¹⁴⁾との交流を示唆すると考えられる。

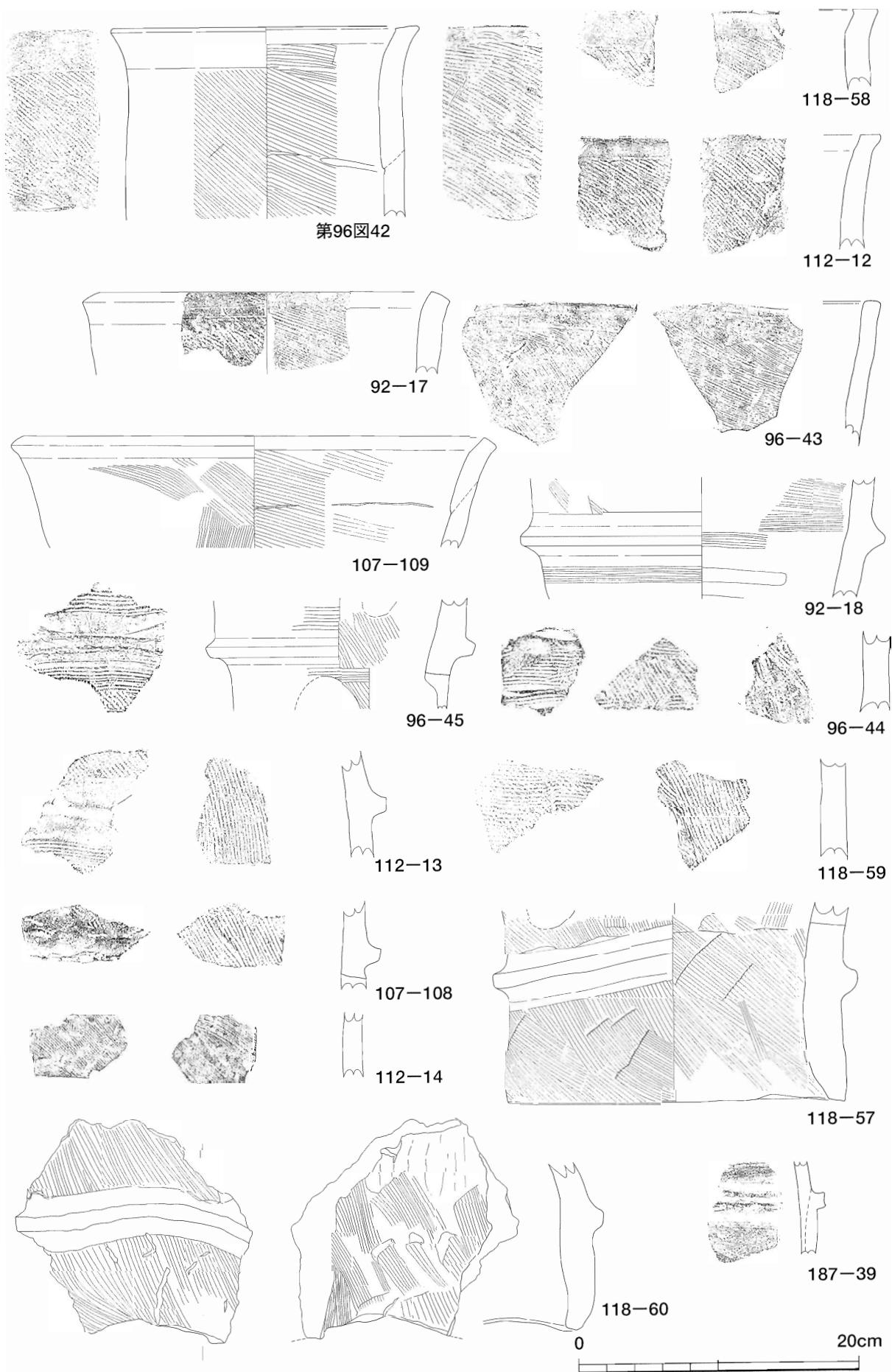
今回の調査では直接遺構に伴う資料を扱ったわけではなく、遺構に伴う資料から今後明らかにしなければならない点が多いが、朝酌川遺跡群の「畿内系土器」についての考察はここまでとし、今後出雲東部での資料の増加を待ちながら更に検討を加えたい。

第3節 西川津遺跡出土の円筒埴輪について

今回の調査では、特にⅢ区右岸を中心に約20点の円筒埴輪が出土した。この量は最近の朝酌川遺跡群の調査では多いほうであり、その中にいくつかの特徴を有するものがあるので、それについて述べ、あわせて若干の考察を加えたい。

今回の調査で出土した円筒埴輪（第224図）は、完形に復元できるものは無いが、口縁部、胴部、底部が出土している。

口縁部は合計で6点を図示した。口縁端部付近でやや開き、端部には面を持ち、更に内側へ肥厚



第224図 西川津遺跡III区右岸・V区-B出土埴輪 (S=1/4)



タ I …『タテチョウ遺跡』Ⅱ
タ III …『タテチョウ遺跡』Ⅲ
原 …『原の前遺跡』

第225図 朝酌川遺跡群出土埴輪 (S=1/4) ※図は各報告書より転載、一部改変

させるもの（96-42、112-12、118-58）、やや開き気味におさめるもの（93-17、96-43）、口縁部が大きく開くもの（107-109）に大別することが出来る。胴部は部位によるのか、直径が約20cmのもの（96-45）と約25cmのもの（92-18）がある。タガは断面が台形を呈し、タガの突出度は約1cm前後で、比較的高さを持つ。底部は端部より約6～7cmのところに最下段のタガを有する。

胴部の調整は、内外にナナメハケを施すものが多いが、一部は胴部にのみB種ヨコハケを施すものが見られる。口縁部直下はハケ調整のち、ヨコナデを施す。透かし孔は円形である。底部調整を行い、底部端面は明瞭な面を有する。

焼成は無黒斑で、色調は土師質の黄褐色を呈するものが中心であるが、青灰色の須恵質のものも見られる（112-12、14）。

これらの特徴を、これまでの朝酌川遺跡群で出土した円筒埴輪と比較してみたい（第225図）。

朝酌川遺跡群の調査では、タテチョウ遺跡と原の前遺跡の調査において円筒埴輪が、タテチョウ遺跡の調査では形象埴輪片も出土している。

口縁部は、開き気味で、端部に面を持つものが出土しているが、肥厚させるものはないようである。胴部は約20cmのものと約25cmのものがあるが、部位によるためと思われる。底部には底部調整を行い、やや尖り気味におさめるもの（タⅢ93-15）と、底部調整を行わないものがある。また、最下段のタガが底部から約12cm離れているものがある（タⅢ93-15）。

胴部の調整は、これまで確認できるものの殆どがタテハケ及びナナメハケである。透かし孔は円形である。タガは断面が台形で、やや高さを持つものの他に、断面が三角形を呈するもの（原25、105-2、3、5、タⅠ48-3）や低いタガを有するもの（タⅠ48-4）も見られる。

焼成は、無黒斑のものがほとんどで、須恵質のものもある（原25図）。

これらの埴輪は、3段構成・タガ2条であると思われ、2段目に円形の透かし孔を持つと考えられるが、原116は3段目と4段目に透かしがあるので、5段構成以上と考えられる。この埴輪は人為的な投棄を想定されている⁽¹⁵⁾が、その当否は別として、朝酌川遺跡群の円筒埴輪は3段構成だけではないことを指摘しておきたい⁽¹⁶⁾。

山陰における円筒埴輪の研究は、川西宏幸氏の全国的な編年を受けて、1980年代から行われ始め、最近では藤永照隆氏の研究⁽¹⁷⁾があるが、藤永氏の編年に当てはめれば、B種ヨコハケと底部調整Aが存在する「5類」、時期は「3期新相」及び「4期」に属すると考えられる。

朝酌川遺跡群の埴輪が、もともとは古墳に樹立されていたものなのか、それとも遺跡群の中で埴輪の製作も行われていたのかは不明である。また、口縁部を内側へ肥厚させる円筒埴輪がどの程度の普遍性を持つのか、更に118-57、60は大きく歪んでおり、特に60は歪みが大きい。このような埴輪は実際に古墳に樹立することは不可能と思われるが、これらの埴輪が単なる「失敗作」なのか、別の意味があるのかを含めて、今後の検討課題としたい。

註

(1) 秋山浩三「前期弥生土器」近藤義郎編 1992『吉備の考古学的研究（上）』山陽新聞社 pp.75～110
なお、今回は逆「L」字口縁の彫の比率を示すことができなかったが、印象としては1割未満ではないかと考えている。

(2) 黒沢浩氏は土器における櫛描文と凹線文の施文時期について言及し、櫛描文では土器の乾燥がある程度進

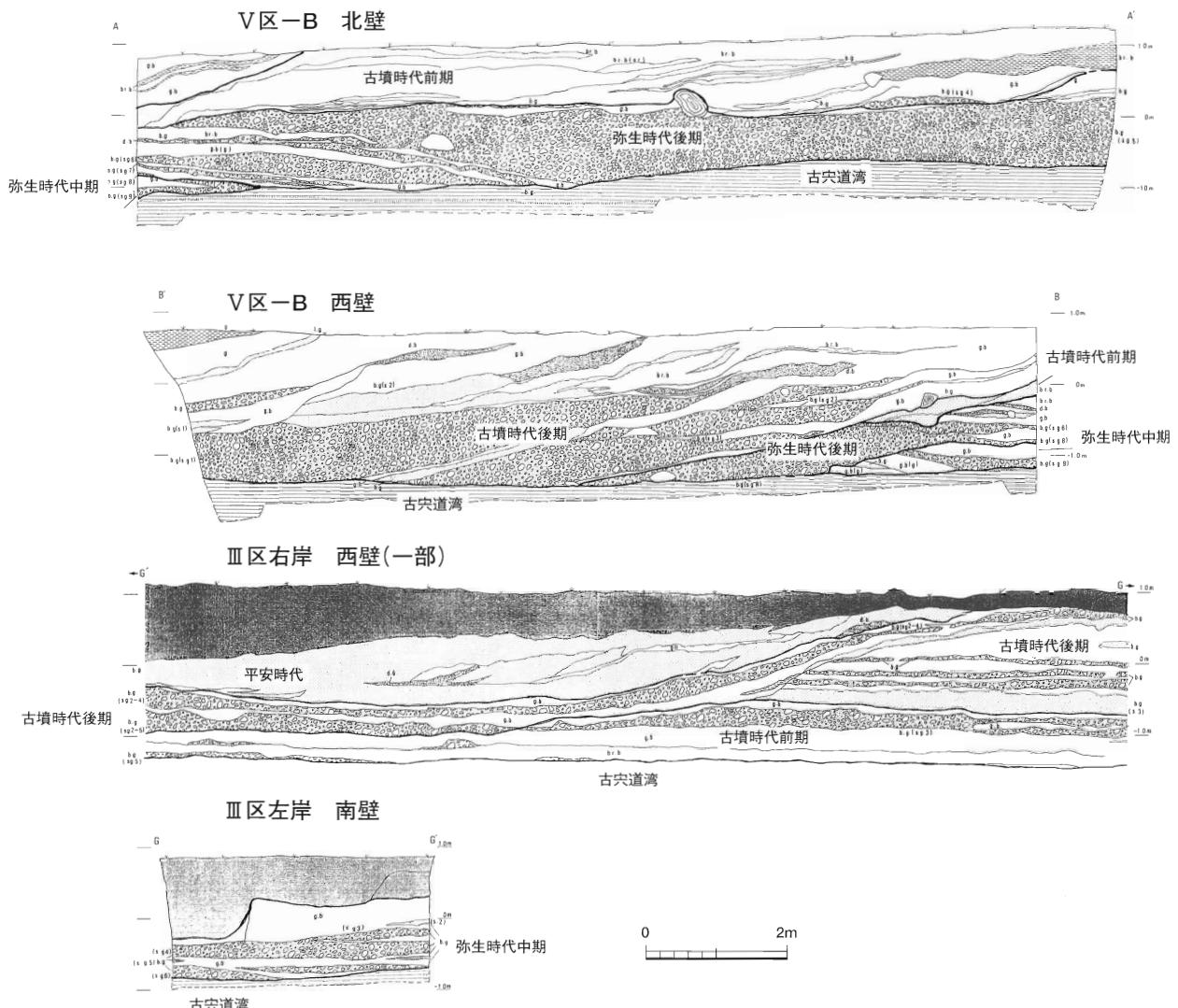
んだ段階になされるのに対し、凹線文では成形・器面調整後すぐに、または器面調整の中で行われることを述べている。中期前葉と中葉の櫛描文の差には原体だけではなく櫛描文の施文時期の差もあるのではないかと考えられる。

黒沢 浩 「凹線文土器群の技術的基盤」『YAY！ 弥生土器を語る会20回到達記念論文集』1996 pp.91～95

- (3) 松江市田和山遺跡、浜田市鰐石遺跡
- (4) 下條信行 「島根県西川津遺跡から見た弥生時代の山陰地方と北部九州」 内田律雄編 1989 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書V（海崎地区3）』 島根県教育委員会 pp.325～340
- (5) Ⅱ区から検出された杭は、合計で338本であり、その数を第220図で示したが、その内破損したり一部しかないものを除いた291本を第221図に記した。
- (6) なお、福井県三方町鳥浜貝塚の杭は、スギ・クリ・スダジイ・ヒノキ・トネリコ属・ヤブツバキなどが用いられており、埼玉県大宮市寿能遺跡の杭列では、クリが多く、他にはヤマグワなどが用いられていた。これらの杭はⅡ区の杭とは地域・時期・用途が異なるので、単純に比較は出来ないが、縄紋時代の木材の利用における多様性を示す資料となると思われる。
- (7) 西川津遺跡第1次・2次の調査では、他に拳大から人頭大の川原石が集中して検出されている。標高が0m以下で検出されていることから、V区-Bのような護岸の石が砂礫層により動かされた結果ではないかと思われる。
石井 悠・村尾秀信 1982 『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書II』 島根県教育委員会 pp.6、8、9、PL3、4
- (8) 柳浦俊一編 1987 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書II』 pp.178～181 第78、79図
林 健亮・佐伯徳哉ほか編 1992 『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書IV』 島根県教育委員会 pp.212～218 第98～102図
- (9) 西尾克己・間野大丞ほか編 1995 『原の前遺跡』 島根県教育委員会 pp.99、156、157 第77、132、133図
- (10) ここで用いる「畿内」とは、今の大阪府（河内、摂津、和泉）・京都府（山城）・兵庫県（摂津、播磨）・奈良県（大和）を指すこととする。
- (11) 次山 淳 1997 「初期布留式土器群の西方展開 一中四国地方の事例から一」『古代』103 早稲田大学考古学会 pp.135～156
- (12) 前島己基・松本岩雄 1977 「島根県神原神社古墳出土の土器」『考古学雑誌』第62巻3号 日本考古学会 p.28 第5図2
- (13) 赤澤秀則 1992 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会
- (14) 津山市など旧国の「美作」地域では、後期末（太田十二社4～5式）には山陰系土器の出土が増えると共に、タタキ甕などの畿内系土器の出土例も増加する。山陰で出土する「畿内系土器」や畿内及びその周辺で出土する「山陰系土器」には、この地域や播磨北部などを介して行われた交流の結果が反映されているのかかもしれない。このことについては拙稿で若干言及している。
中川 寧 1997 「いわゆる「山陰系土器」についての若干の考察 一古墳時代初期に見られる小型の鼓形器台を中心にして一」『立命館大学考古学論集I』 同論集刊行会 pp.159～166



第226図 各調査区と土層堆積図の位置 (S=1/3,000)



第227図 西川津遺跡各堆積層の形成時期 (S=1/100)

(15) 註(9)文献 p.140

なお、円筒埴輪の「転用」には、転用方法や転用までの時間間隔において幾つかの分類が可能であり、6世紀末～7世紀初には円筒埴輪としての意味が失われ、単なる部材としての利用が始まる可能性の高いことが奈良市山陵遺跡の調査において報告されている。本例はその中で「転用Ⅲb（転用までの時間間隔が100年以上で、火・水の利用と関連する）」に属するのではないかと思われる。

角南聰一郎・藤村俊「転用された円筒埴輪」『秋篠・山陵遺跡』 奈良大学文学部考古学研究室発掘調査報告書第17集 秋篠・山陵遺跡調査会・奈良大学文学部考古学研究室・学校法人正強学園 1998 pp.158～162

(16) 後述する藤永氏の考えでは、タガの条数は時期差よりも古墳の優劣に関連するのではないか、という「印象」を述べておられるが、原116の埴輪の存在から朝酌川遺跡群の周辺には金崎1号墳と同じような規模の古墳の存在を想定することも可能である。

註(17)文献 p.41

(17) 藤永照隆 1997 「出雲の円筒埴輪編年と地域性」『島根考古学会誌』第14集 島根考古学会 pp.35～59